博　多　170

― 博多遺跡群 第 203 次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1405 集
〈第 3 分冊〉

2021

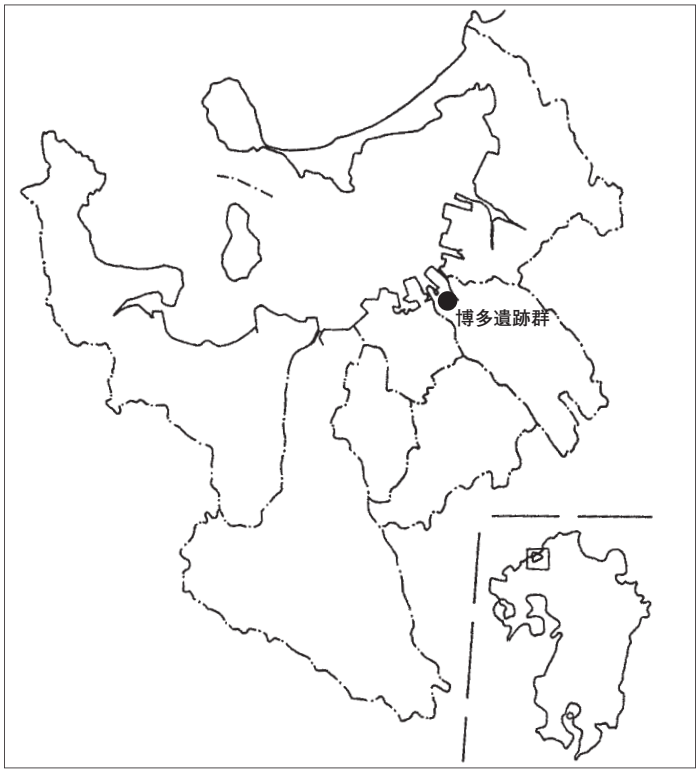
福 岡 市 教 育 委 員 会

博　多　170

－博多遺跡群 第 203 次調査報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1405 集

〈第 3 分冊〉



調査番号　1427
遺跡略号　HKT-203

2 0 2 1

福 岡 市 教 育 委 員 会

本文目次

第Ⅰ章　はじめに …… 第1分冊・1
　1.　調査に至る経緯 …… 1
　2.　調査の組織 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 4
第Ⅲ章　調査の記録 …… 9
　1.　調査の概要 …… 9
　2.　1区の調査 …… 11
　3.　2区の調査 …… 13
　4.　3区の調査 …… 35
　5.　4区の調査 …… 197
　6.　5区の調査 …… 227
　7.　6区の調査 …… 249
　8.　7区の調査 …… 295
　9.　8区の調査 …… 第2分冊・1
　10.　9区の調査 …… 121
　11.　10区の調査 …… 第3分冊・1
　12.　11区の調査 …… 39
　13.　12区の調査 …… 51
　14.　13区の調査 …… 131
　15.　14区の調査 …… 141
　16.　15区の調査 …… 169
　17.　16区の調査 …… 209
　18.　17区の調査 …… 229
　19.　18区の調査 …… 235
　20.　19区の調査 …… 271
　21.　20区の調査 …… 275
　22.　21区の調査 …… 287
　23.　22区の調査 …… 301
　24.　23区の調査 …… 311
　25.　24区の調査 …… 第4分冊・1
　26.　25区の調査 …… 44
　27.　26区の調査 …… 57
　28.　27区の調査 …… 65
　29.　28区の調査 …… 88
　30.　29区の調査 …… 96
　31.　30区の調査 …… 117
　32.　31区の調査 …… 120

33.　その他の調査 …… 124
34.　金属製品・生産関連資料等について …… 128
35.　動物遺存体について …… 243
第Ⅳ章　まとめ …… 253
1.　弥生時代中期 …… 253
2.　弥生時代後期～古墳時代 …… 254
3.　古代 …… 257
4.　中世 …… 258
5.　近世 …… 260

〈付　編〉

1.　博多遺跡群第 203 次調査出土資料の鉛同位体比分析について …… 263
（国立歴史民俗博物館　齋藤 努）
2.　博多遺跡群第 203 次調査出土遺物の金属学的調査について …… 266
（大澤 正己・パリノ・サーヴェイ株式会社）
3.　博多遺跡群第 203 次調査出土の炭化種実について …… 292
（佐々木 由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ））
4.　博多遺跡群第 203 次調査出土試料の年代測定について …… 297
（山形大学高感度加速器質量分析センター）
5.　博多遺跡群第 203 次調査出土の人骨について …… 301
（九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）
6.　博多遺跡群第 203 次調査出土弥生中期人骨の年代学的調査について …… 316
（国立歴史民俗博物館　藤尾 慎一郎）
7.　博多遺跡群第 203 次調査出土弥生中期人骨のＤＮＡ分析について …… 323
（国立科学博物館　篠田 謙一）

11．10 区の調査

1）調査の概要

本調査区は事業地の東部に位置し、現況は道路で、4 車線道路の中央部分に位置する。現有の道路を切り替えて使用しつつの調査実施であったため、13 × 7m 程の変形した狭小な調査区となっている。配水管を挟んで東に調査第 11 区、南に調査第 2 区が位置し、周囲は立会 18 区に囲まれている（Fig.1）。

Ph.1　10 区調査前状況（西から）

最高所の第 9 区西端から 58m 南東に位置し、地表標高は北西で 4.65 m、南東で 4.4m を測り、南東に緩く下がる。調査区外周の鋼矢板土留め工事の埋設管確認掘削に立会い GL － 0.8 ～ 1.2m まで 3 面で遺構を確認後、土留め工事を実施した。終了後 85㎝程の表土・撹乱層の除去を重機で行った後、この面を調査第 1 面とし、さらに約 65㎝下方の砂層上面まで 3 面にわたる調査を実施している。各面までの掘削は人力で実施している。

基本層序は、85㎝程の表土直下、20㎝程の暗灰褐色土（1 層）、さらに 20㎝程の茶褐色砂質土が堆積し（2 層）、黄灰～淡黄白色砂の地山層上面となる。

調査第 1 面は 1 層上面の EL3.8m 程（Fig.2）、第

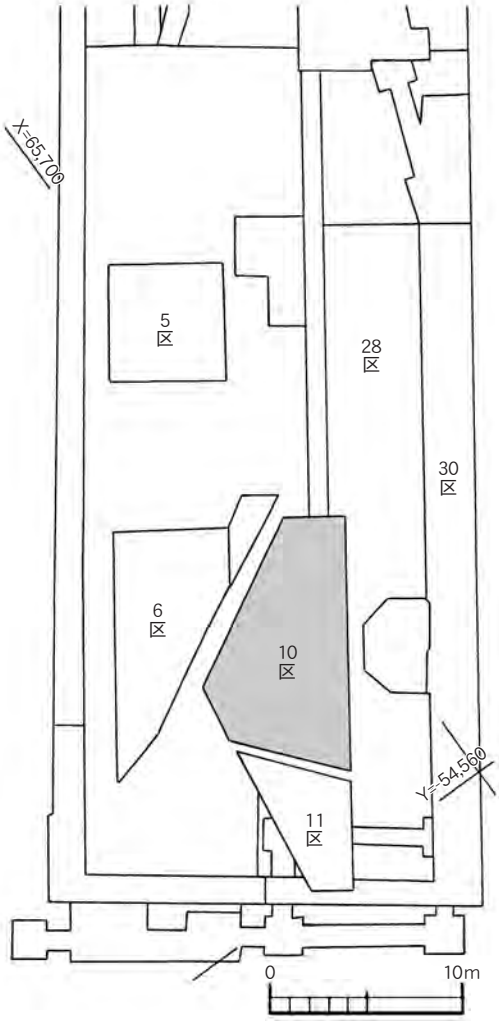


Fig.1　調査区位置図（1/400）

Ph.2　10 区調査風景（西から）

Ph.3　調査区横断土層（西から）

Ph.4　東部１面全景（西から）

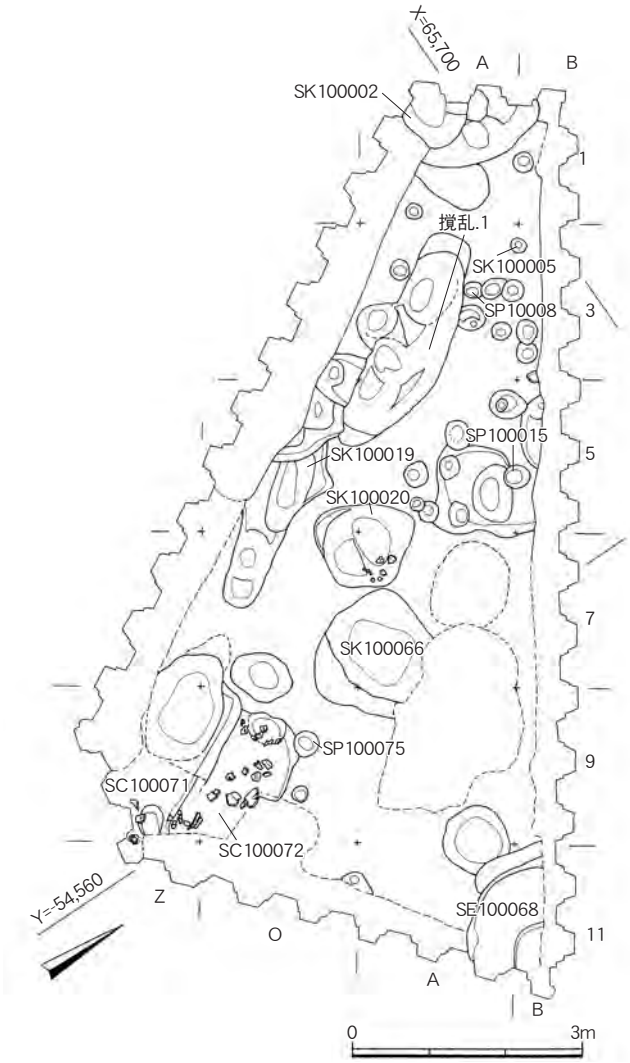


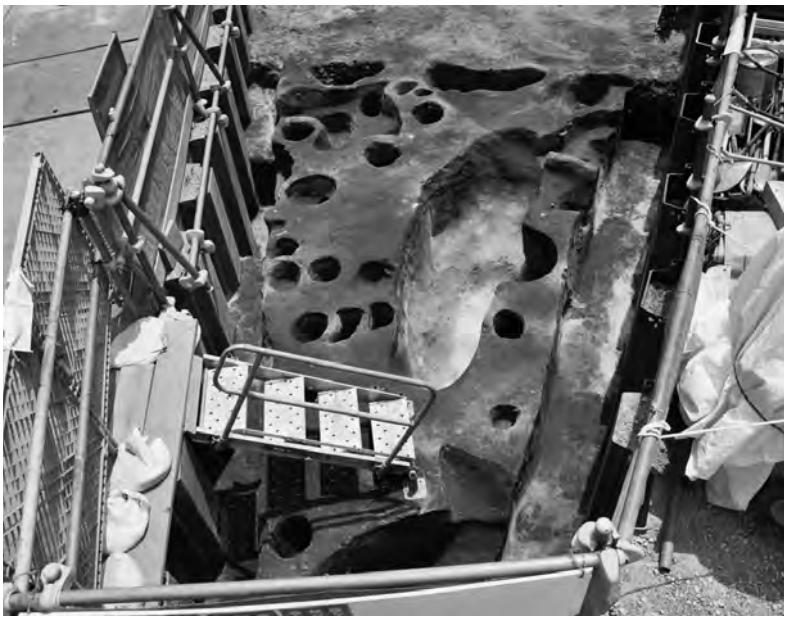
Fig.2　10 区１面全体図（1/100）

２面は２層上面のEL3.6～3.3m（Fig.3）、第３面は砂層上面のEL3.2 ～ 3.15m（Fig.4）程で、地形は南東に下がり、傾斜は上面ほどきつくなる。

調査は工事基準線に合わせ、任意で 2m グリッドを設定した。排土は場内処理であったため、調査は西半部から開始した。西部終了後東半部の残土を搬出して反転し調査を実施する段取りであったが、残土の搬出時、遺構面を 10 ～ 20㎝下げ過ぎており第１面の多くを欠失したため、東半部は２面の調査となり、西部の第１面目に東部の１・２面に該当する第１面目を集約している。

2015 年８月３日より西半部の調査に着手し、８月 10 日に第１面の全景を、８月 21 日に第２面を、８月 28 日に第３面の全景を撮影した。実測を完了後反転し東半部に着手、９月 10 日に第１面の全景を、９月 21 日に第３面の全景を撮影した。実測を完了後、調査機材を撤収し９月 24 日調査を完了した。調査面積は 51.51㎡で、遺物はコンテナ 20 箱分出土している。

検出したおもな遺構は、第１面で 11 世紀後半～ 12 世紀前半の（中世 1）土坑５基・井戸１基を、調査区の全面で検出した。主な遺構の 15% を占める。土坑は 1m を越える大型のものが目立ち、井戸は全時期を通じて東隅の桶井側の SE100068 の１基のみ検出されている。



Ph.5　西部 1 面全景（西から）

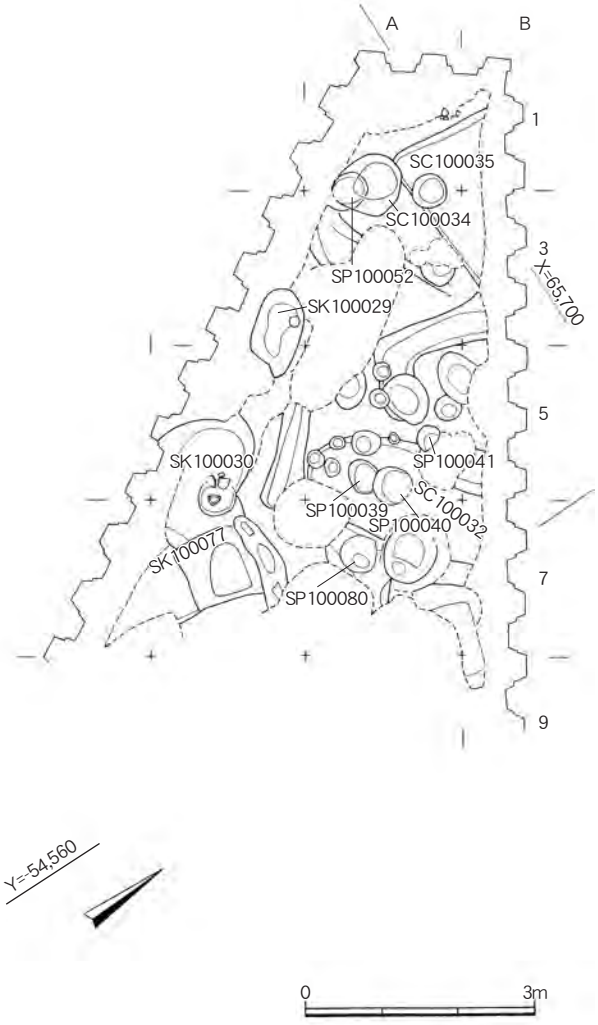


Fig.3　10 区 2 面全体図（1/100）

遺物は中国陶磁器を中心に、高麗無釉陶器･土師器･瓦器･石錘･鉛製品等が出土している。ガラス製造関係の遺物は 1 点も検出されず、工房からは外れている様である。

12 世紀中頃～ 13 世紀前半の（中世 2）の遺構は SP-75 の柱穴 1 基のみで、集落の外れに位置する。遺構面の傾斜の強さからも推察できる。

古代の遺構は第 2 面の柱穴 SP-50 の 1 基のみで、集落の中心から外れている。遺物は須恵器・土師器・新羅焼等が少量検出され、墨書土師器が 1 点出土している。

古墳時代後期も少なく、第 1 ～ 3 面で土坑 1 基と柱穴を 2 基のみ検出している。遺物は少量の須恵器・土師器・新羅焼等が検出され、底部に線刻がある土師器が検出されている。

古墳時代前期は第 2 面を中心に、1 ～ 3 面にかけて竪穴住居 3 軒・土坑 10 基・溝 2 条を検出しており、主な遺構の 38% を占め第 2 の盛期となり、集落の中心部を成している。柱穴も 1m 近い大型のものが多く､掘立柱建物の可能性もある。遺物は近畿・山陰系の外来土器や鉄器・注口土器・玉磨き砥石等が出土し、活発な活動の証左となっている。

弥生時代終末期は第 3 面を中心に、竪穴住居 6 軒 + α・土坑 10 基・溝 1 条を検出しており、主な遺構の 45% を占め最大の盛期となっており、古墳

Ph.6　東部２面全景（西から）

時代前期と同じく、集落の中心域を成している。柱穴も同様に1m近い大型のものが多い。遺物は６点の鉄器鉄片・注口土器・水銀朱焼成の土器片など先進性を示す遺物を目立って出土している。

13世紀後半以降の遺構は、近世以外は検出されない。

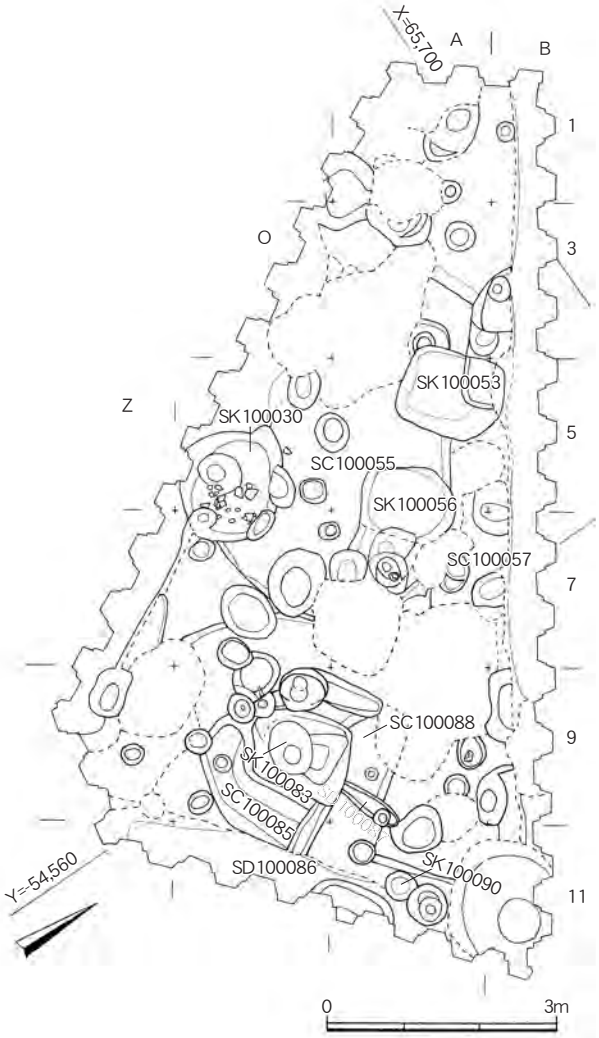
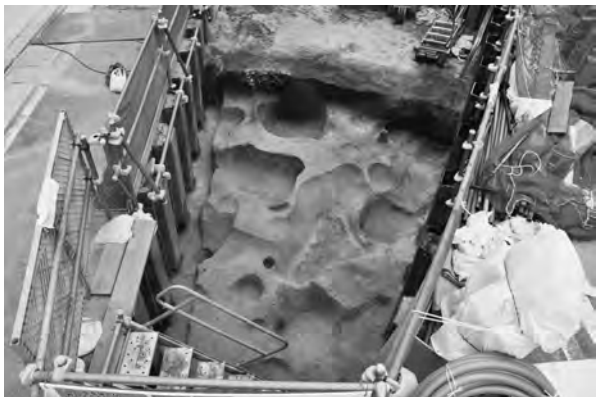


Fig.4　10区３面全体図（1/100）

Ph.7　東部３面全景（西から）

Ph.8　西部２面全景（西から）



Ph.9　西部３面全景（西から）

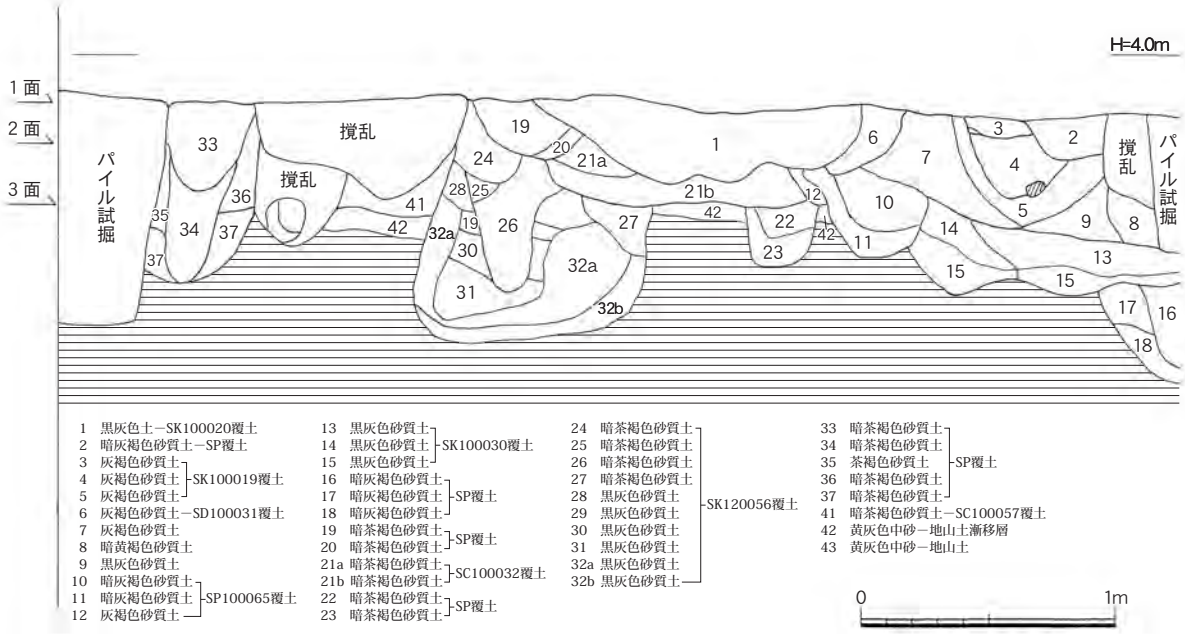


Fig.5　調査区土層断面図（1/60）

2）中世の調査（１）

（１）井戸

SE100068（Fig.6　Ph.10）　　A 11 グリッドで検出された。調査区外に遺構が広がるため、深さ 1.0 m程掘り下げたが、安全面を考慮し、それ以上の掘削は行っていない。規模は不明である。

出土遺物（Fig.7）　　１は玉縁の白磁碗である。釉色は乳白色を呈する。口径 17.0cm を測る。２は白磁皿である。高台付近は露胎。釉色は乳白色を呈する。器高 3.2㎝、口径 17.0cm を測る。３は白磁皿で、平底部分は露胎である。釉色は乳白色を呈する。器高 2.5㎝、口径 10.5cm を測る。４は青白磁の合子の蓋である。天井部に型押しの花卉文を施す。釉色は明青灰色を呈する。口径 5.4㎝を測る。５は高麗無釉陶器の甕胴部片である。色調は暗青色を呈する。６は土師器丸底坏である。内面はヘラミガキ。口径 14.2㎝を測る。７は黒色土器 B 類の碗の口縁である。

Ph.10　SE100068（南から）

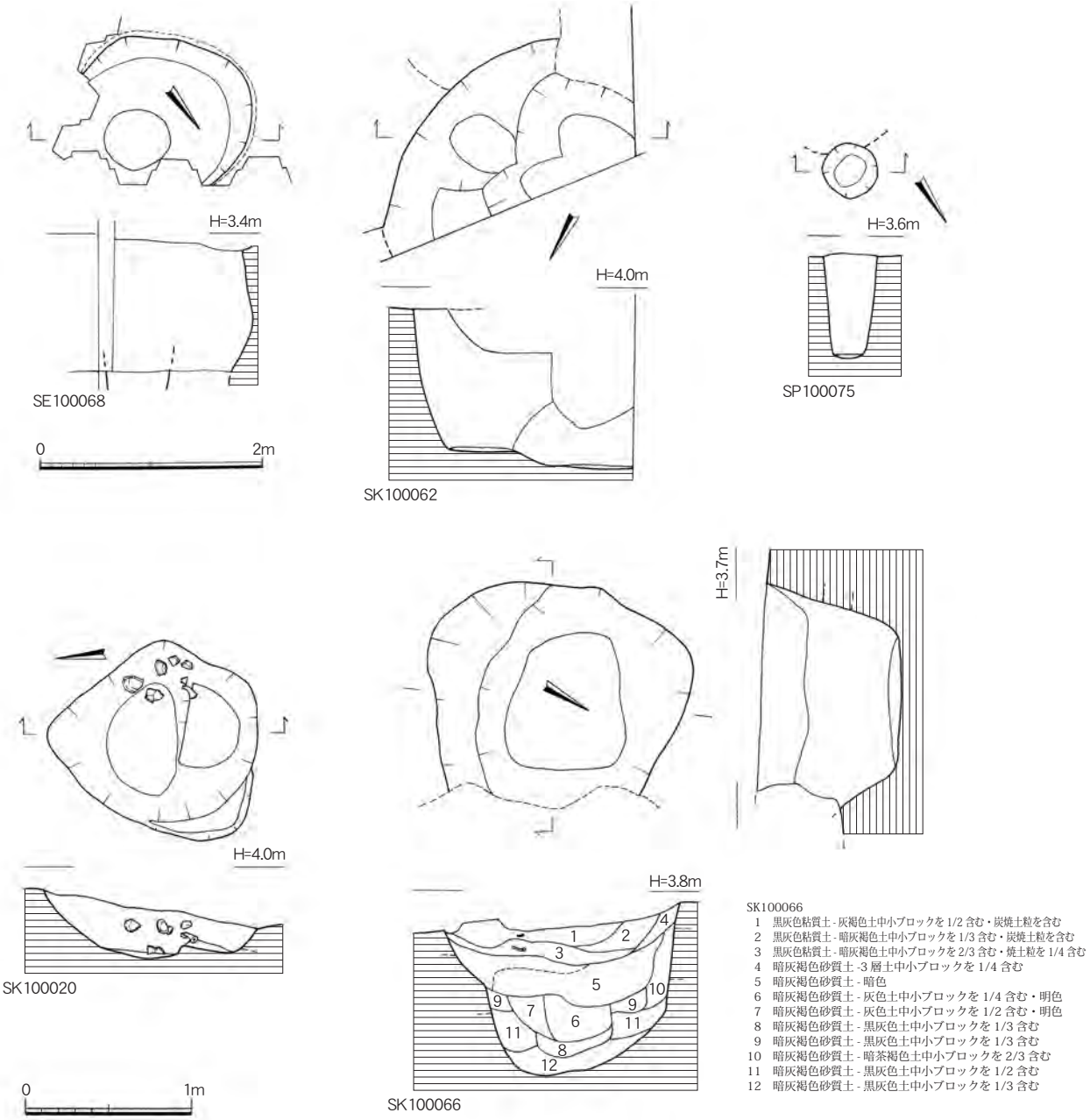


Fig.6　SE100068、SK100002・100020・100066、SP100075 実測図（1/40・1/60）

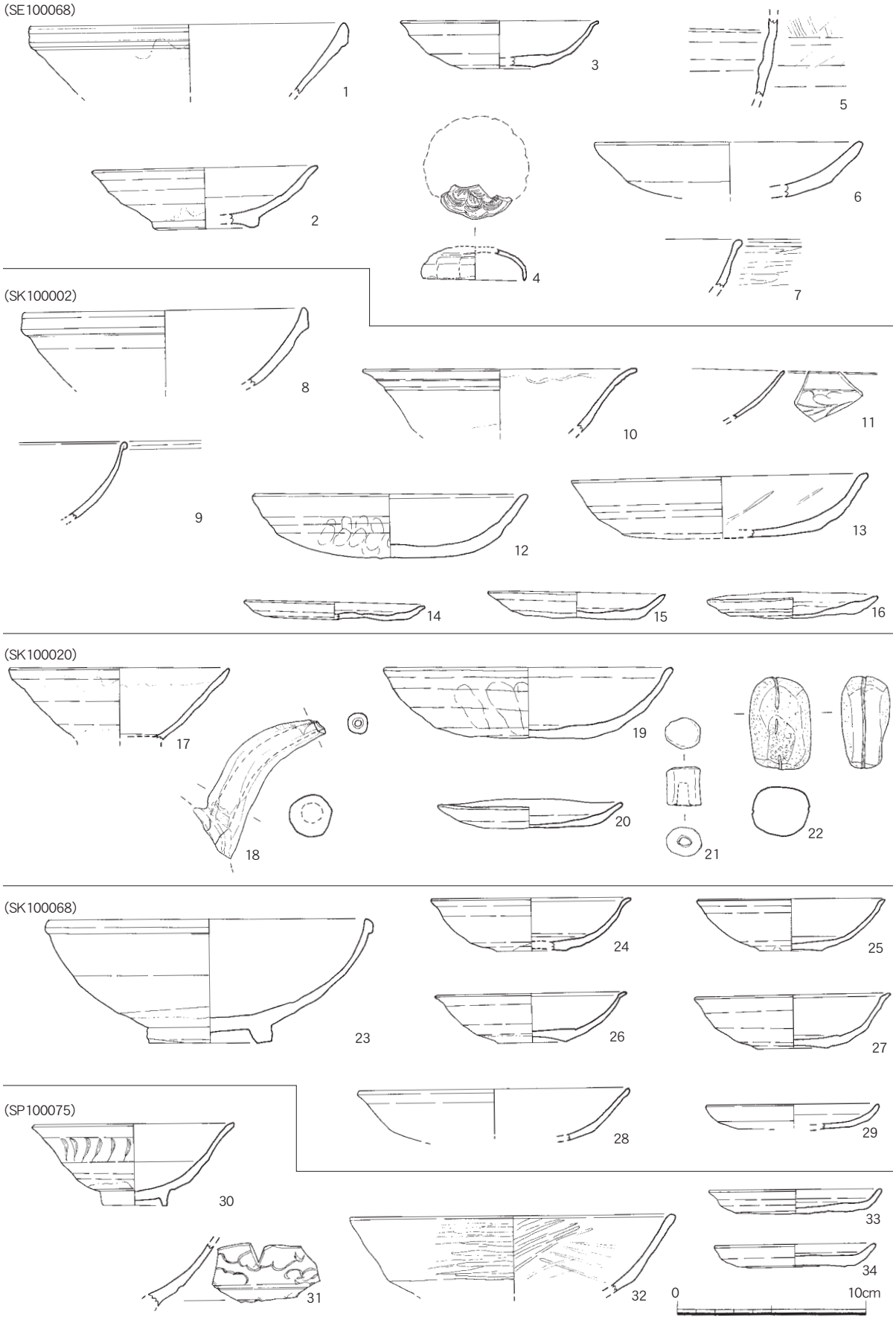


Fig.7　SE100068、SK100002・100020・100066、SP100075 出土遺物実測図（1/3）

（2）土坑

SK100002（Fig.6　Ph.110）　A1 グリッドで検出された。遺構は調査区外に広がるため、平面形は不明である。深さ 1.0 mを測る。

出土遺物（Fig.7）　8 ～ 11 は白磁碗である。8 は玉縁の口縁。釉色は灰白色を呈する。口径 15.2cm を測る。9 は小さな玉縁状の口縁。釉色は灰白色を呈する。10 は端反の口縁。釉色は灰白色を呈する。11 は内面に毛彫の雲文を施す。釉色は黄灰色を呈する。12 ～ 16 は土師器で、12・13 は丸底坏である。底部の切り離しはヘラ切りである。内面に押し出しの工具痕、外面に指頭圧痕が残る。それぞれ器高 3.3、3.3㎝、口径 14.6、15.8㎝を測る。14 ～ 16 は小皿で、底部の切り離しはヘラ切りで、板目圧痕がつく。器高 0.9 ～ 1.4㎝、口径 9.0 ～ 9.6㎝を測る。

SK100020（Fig.6　Ph.12、13）　A7 グリッドで検出された。径約 1.2 mの不整円形を呈し、深さ 0.3 mを測る。土坑の下層で土器が出土した。

出土遺物（Fig. 7　Ph.24）　17 は白磁小碗で、釉色は灰白色を呈する。口径 11.6㎝を測る。18 は白磁水注の注口である。色調は灰白色を呈する。19 は土師器丸底坏で、底部の切り離しはヘラ切りである。外面には指頭圧痕が残る。器高 3.8㎝、口径 15.3㎝を測る。20 は土師器小皿で、底部の切り離しはヘラ切りである。器高 1.6㎝、口径 9.8㎝を測る。21 はキャップ状の鉛製品。断面楕円形を呈する。長さ 2.0㎝、径 1.9㎝、重さ 29.5g を測る。22 は有溝石錘。長軸方向に溝が彫られる。長さ 4.8㎝、幅 3.2㎝を測る。石材は砂岩。

SK100066（Fig.6　Ph.14、15）　A7 グリッドで検出された。遺構は撹乱を受けるが、径約 1.6 mの不整円形を呈し、深さ 0.9 mを測る。

出土遺物（Fig.8　Ph.26）　23 は小ぶりの玉縁の白磁碗で、体部は丸みを帯びる。高台付近は露胎。釉色は灰オリーブ色を呈する。器高 6.6㎝、口径 17.2㎝を測る。24 ～ 27 は平底の白磁皿で、底面は露胎。釉色は灰オリーブ色～灰白色を呈する。器高 2.6 ～ 2.9㎝、口径 10.0 ～ 10.4㎝を測る。28 は土師器丸底坏である。口径 14.6㎝を測る。29 は土師器小皿で、底部の切り離しはヘラ切りで、板目圧痕がつく。口径 9.2㎝を測る。

Ph.11　SK100002（南から）

（3）柱穴とその他の遺物

SP100075（Fig.6）　O9 グリッドで検出された。径 0.3 m、深さ 0.6 mを測る。

出土遺物（Fig.7　Ph.26）　30 は白磁小碗で、外面に片掘りの斜線文を施す。体部下半は露胎。釉色は浅黄色を呈する。器高 4.3㎝、口径 10.6㎝を測る。31 は外面に毛掘りの文様を施す碗。釉色は灰白色を呈する。32 は筑前型瓦器碗で、底部は欠損している。器面には横方向のヘラミガキを施す。33・34 は土師器小皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 1.3、1.2㎝、口径 9.1、8.6㎝を測る。

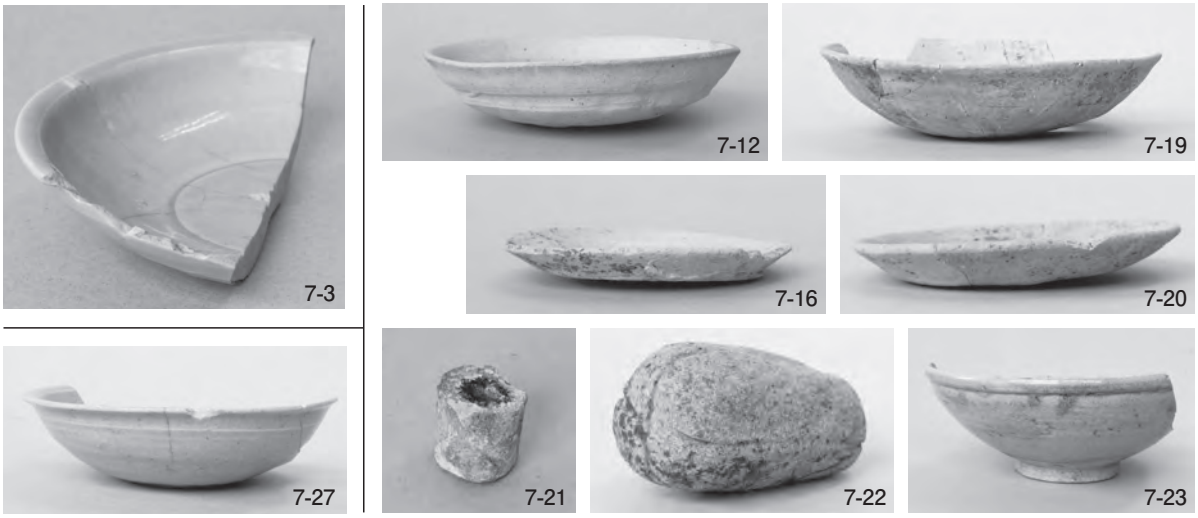
そのほかの遺物（Fig. 8　Ph.17）　35 は越州窯系青磁水注である。注口、把手は欠損している。釉色は灰オリーブ色を呈する。36 は白磁碗で、内面に櫛目文を施す。釉色は灰オリーブ色を呈する。37 は小ぶりの玉縁の白磁碗で、体部は丸みを帯びる。釉色は灰オリーブ色を呈する。口径 15.6㎝を測る。38 は玉縁の白磁碗で、高台付近は露胎となる。釉色は灰オリーブ色を呈する。器高 6.1㎝、口径 15.4㎝を測る。39 は白磁碗で、外面に片彫りの文様を施す。釉色は灰オリーブ色を呈する。口径 17.6㎝を測る。40 は白磁皿で、内面に片彫りの文様を施す。釉色は灰オリーブ色を呈する。口径 13.0㎝を測る。41 は高麗無釉陶器の壷である。口縁は欠く。頸部の付け根に断面三角形の突帯がつく。肩部には沈線が巡る。器壁は薄く、色調は黒色を呈する。42 は高麗無釉陶器の甕片。外面に叩き、内面に当て具痕が残る。色調は黒色を呈する。43 は土師質土器の蓋で、内外面に同心円状にカキメを施す。厚さ 2.0㎝を測る。44 は土師器小皿で、底部の切り離しはヘラ切りである。板目圧痕がつく。器高 1.6㎝、口径 9.6㎝を測る。

Ph.12　SK100020 土層断面（西から）

Ph.13　SK100020 遺物出土状況（西から）

Ph.14　SK100066 土層断面（東から）

Ph.15　SK100066（北から）



Ph.16　SE100068、SK100002・100020・100066 出土遺物

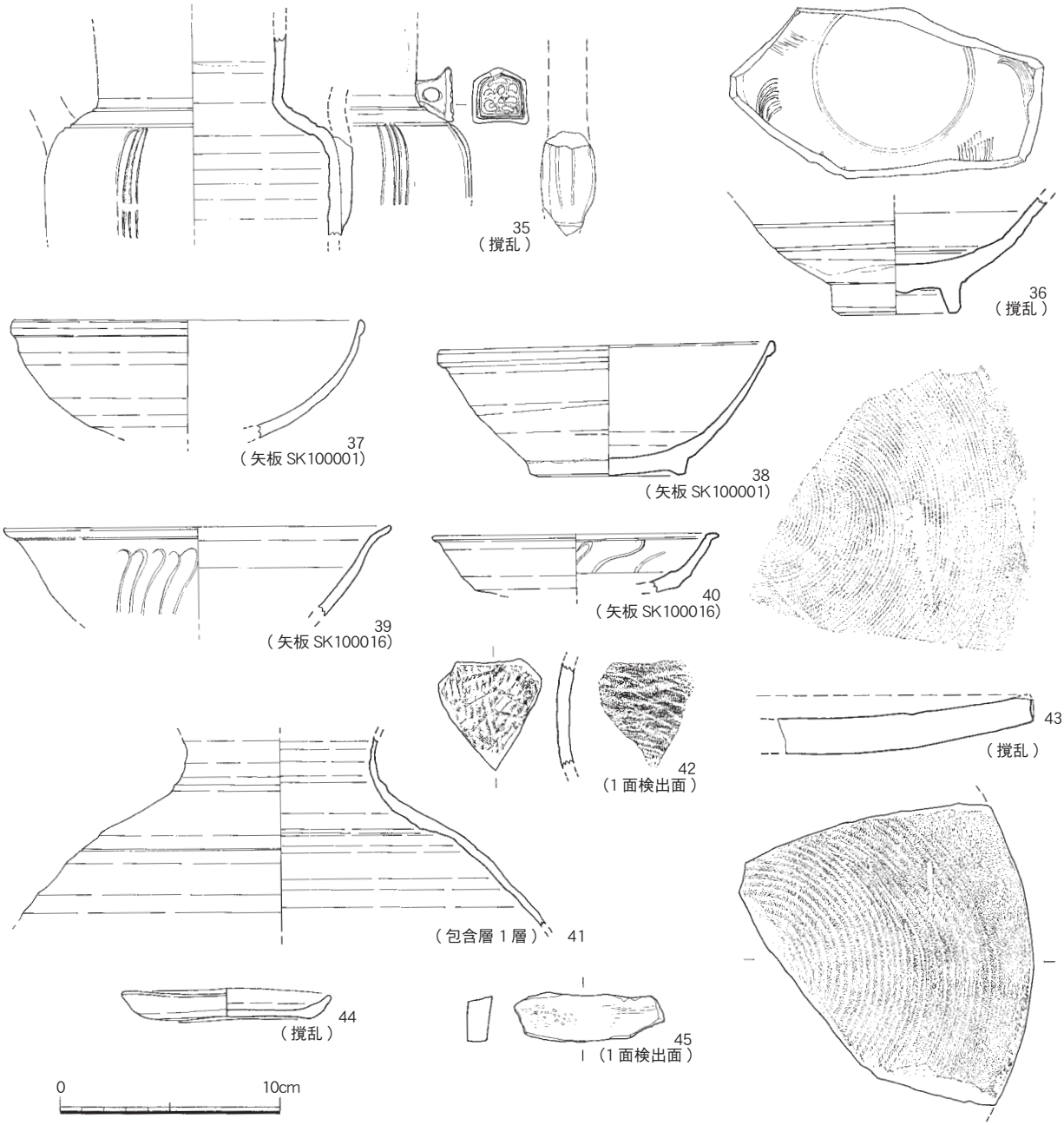
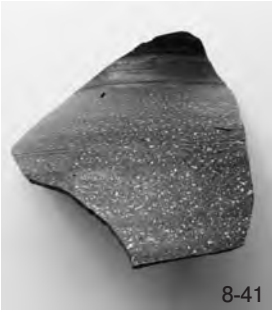


Fig.8　その他の中世出土遺物実測図（1/3）



Ph.17　その他の中世出土遺物

Ph.18　SK100083 土層断面（南から）

Ph.19　SK100083（南から）

3）古代の調査

出土遺物（Fig.9）　46 は高麗無釉陶器の甕胴部片。外面は格子叩き後、沈線文が巡る。内面は当て具痕が残る。色調は青黒色を呈する。47 は須恵器坏身である。底部のやや内側に低い高台がつく。器高 3.9㎝、口径 14.2㎝を測る。色調は灰色を呈する。48 は土師器坏で、底部はヘラ切り後ナデ。底面に墨書があるが、判読できない。

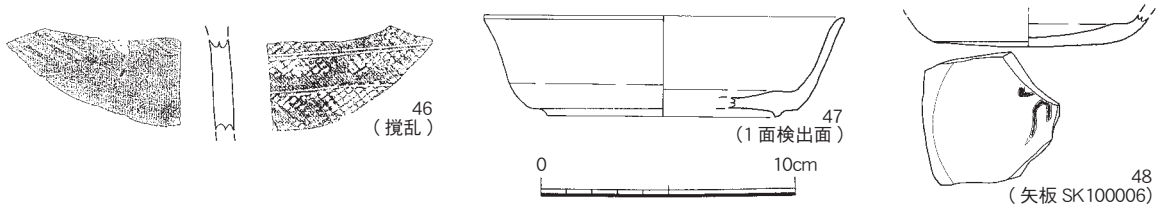


Fig.9　その他の古代出土遺物実測図（1/3）

4）古墳時代後期の調査

（1）土坑

SK100083（Fig.10　Ph.18・19）　O9 グリッドで検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ 1.2 m、幅 1.0 m、深さ 0.7 mを測る。

出土遺物（Fig.11　Ph.20）　49 は須恵器坏蓋である。口径 11.8㎝を測る。50 は須恵器坏身で、内面に低い受け部がつく。口径 10.2㎝を測る。51 は匙形の土製品の把手。器面はヘラミガキが施される。色調は暗褐色を呈する。52 は土師器甕底部で、底面に線刻が見られる。何を表現したかは不明。53 は移動式竈の庇。色調はにぶい橙色を呈する。

54・55 は遺構に伴わない遺物である。54 は須恵器坏身である。口径 11.2㎝を測る。55 は軟質土器の胴部片。外面には擬格子叩き、内面は細かい当て具が残る。色調は橙色を呈する。

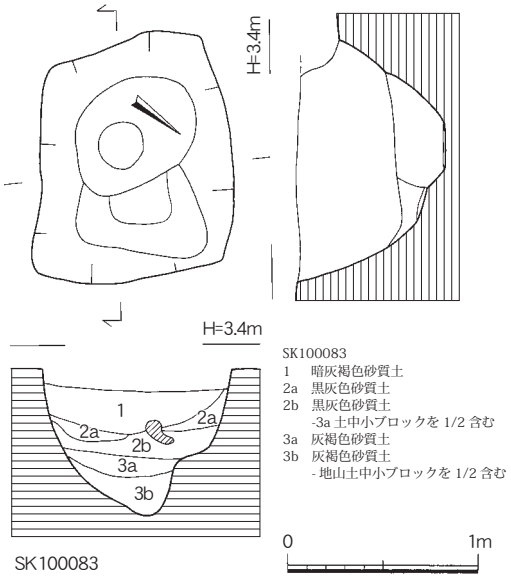


Fig.10　SK100083 実測図（1/40）

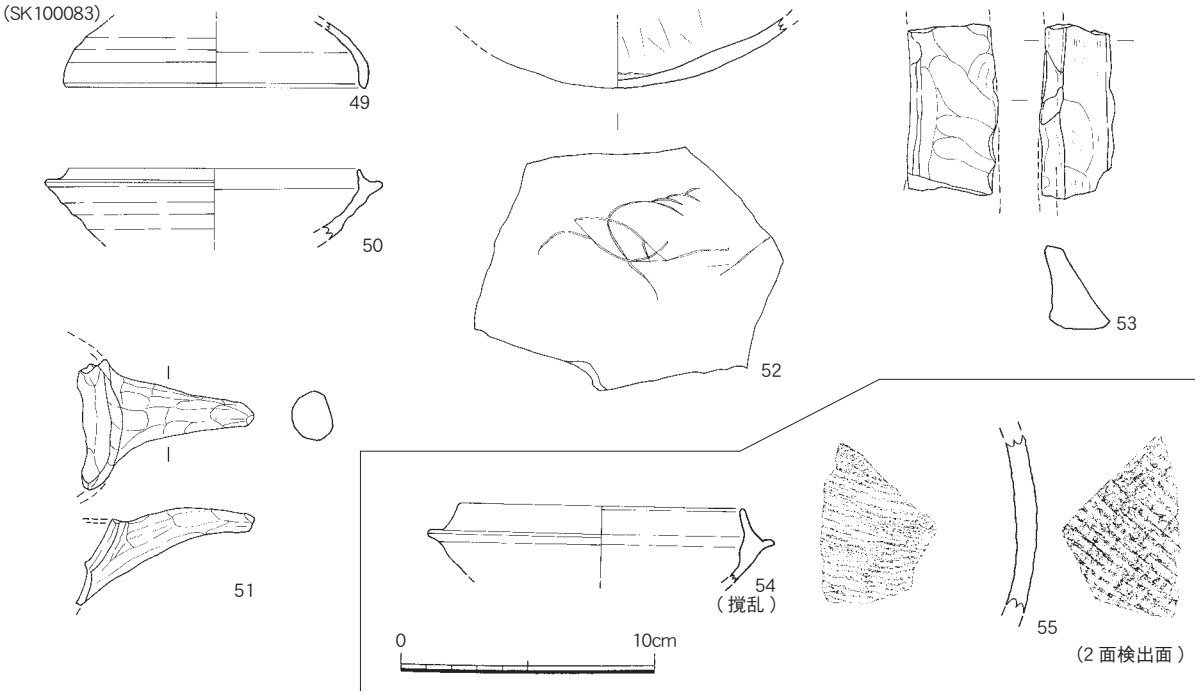


Fig.11　SK100083 その他の出土遺物実測図（1/3）

Ph.20　SK100083 他の出土遺物

5）古墳時代前期の調査

（1）竪穴住居

SC100032（Fig.12　Ph.21）　A9 グリッドで検出された。撹乱のため、平面形は不明確であるが、隅丸長方形を呈するものか。主柱穴は不明。深さ 0.2 mを測る。

出土遺物（Fig.13）　56 は土師器鉢で、口縁は短くくの字に伸びる。口径 7.6㎝を測る。57 は支脚の裾部。

SC100034（Fig.12　Ph.22）　A3 ～ A5 グリッドで検出された。SC035 に切られる。撹乱のため、平面形は不明確であるが、長方形を呈するものか。主柱穴は不明。深さ 0.3 mを測る。

出土遺物（Fig.13）　58 は土師器広口壷の口頸部。59 は甕口縁で、内外面ともハケメを施す。

SC100035（Fig.12　Ph.22）　A3 ～ A5 グリッドで検出された。SC034 を切る。撹乱のため、平面形は不明確であるが、長方形を呈するものか。規模は不明。主柱穴は不明。深さ 0.3 mを測る。

出土遺物（Fig.13　Ph.55）　60 は直口壷である。内外面ともハケメを施す。口径 14.4㎝を測る。

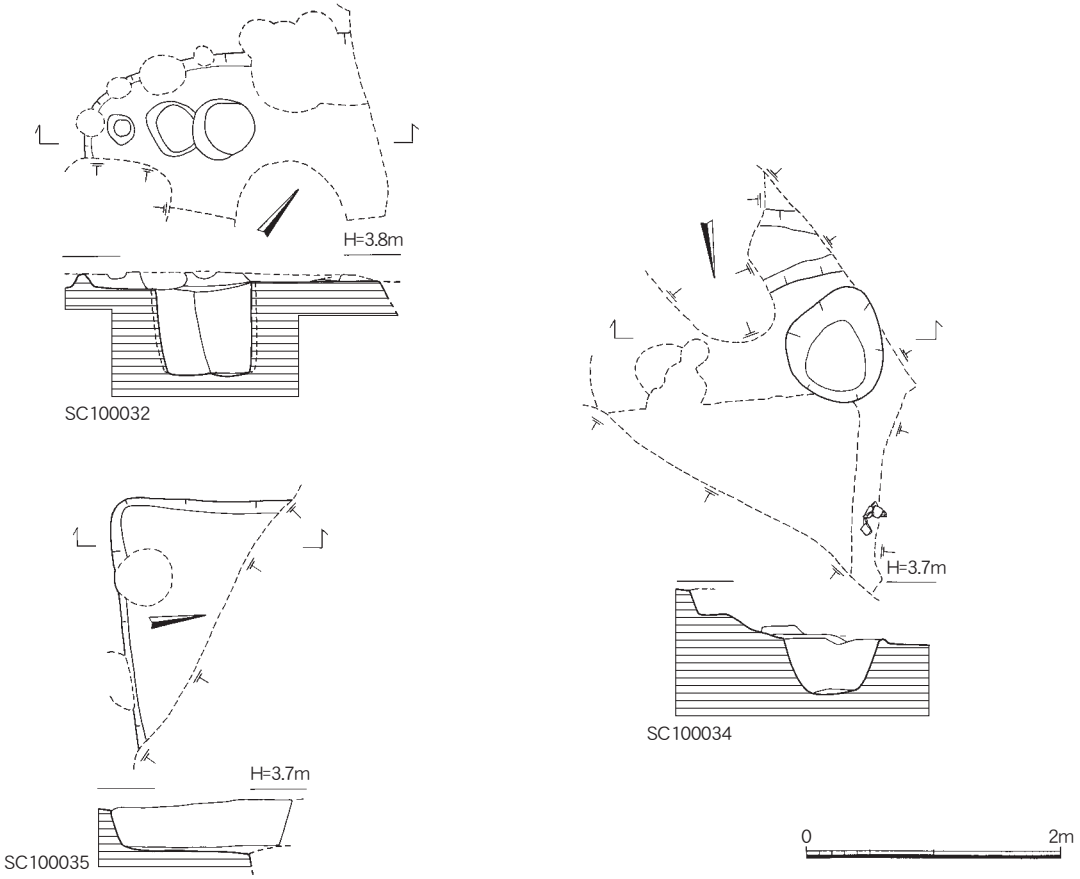


Fig.12　SE100032・100034・100035 実測図（1/60）

SK100019（Fig.14　Ph.23）　O5 グリッドで検出された。狭長な隅丸長方形を呈し、長さ 2.3 m、幅 0.6 m、深さ 0.2 mを測る。

出土遺物（Fig.15）　61 は大型の広口壷の口縁。端部にハケメ原体で刺突文を施す。62 は高坏の接合部。器面調整はヘラミガキ。外面には縦方向の暗文を施す。63 は坏で、器面には細かいヘラミガキを施す。色調は明褐色。口径 12.6㎝を測る。64 は甕口縁。

SK100029（Fig.14　Ph.24・25）　O5 グリッドで検出された。撹乱を受けるが、平面形は隅丸長方形を呈し、長さ 1.2 m、幅 0.6 m、深さ 0.7 mを測る。

出土遺物（Fig.15　Ph.30）　65 は丸底鉢で、外面はヘラケズリ後ナデ。器高 4.6㎝、口径 10.4㎝を測る。66 は器台の口縁で、端部にハケメ原体の刺突が巡る。器面には叩きが残る。67 は山陰系の二重口縁甕である。色調は赤灰色を呈する。68 は「く」の字形の甕口縁である。

Ph.21　SC100032（北から）

Ph.22　SC100034・100035（西から）

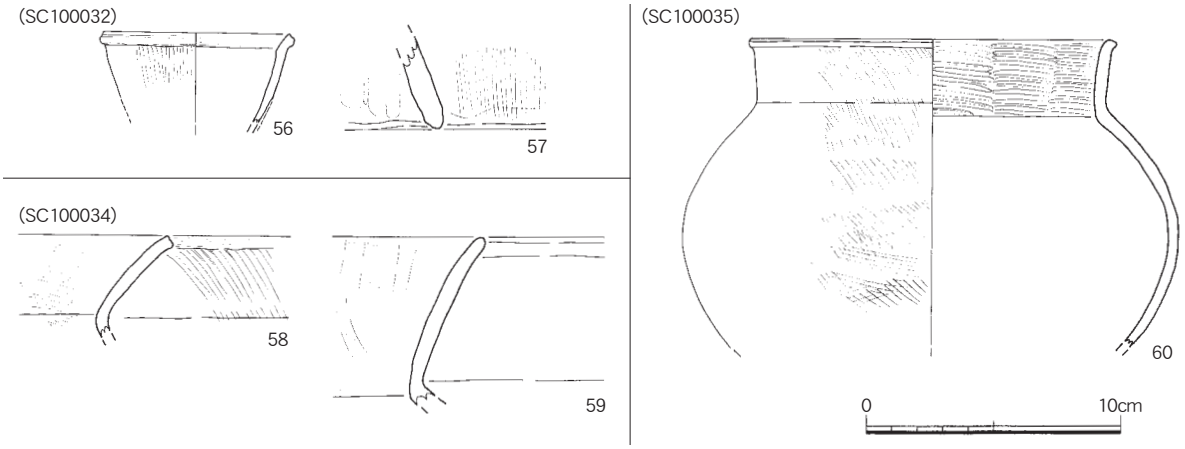


Fig.13　SC100032・100034・100035 出土遺物実測図（1/3）

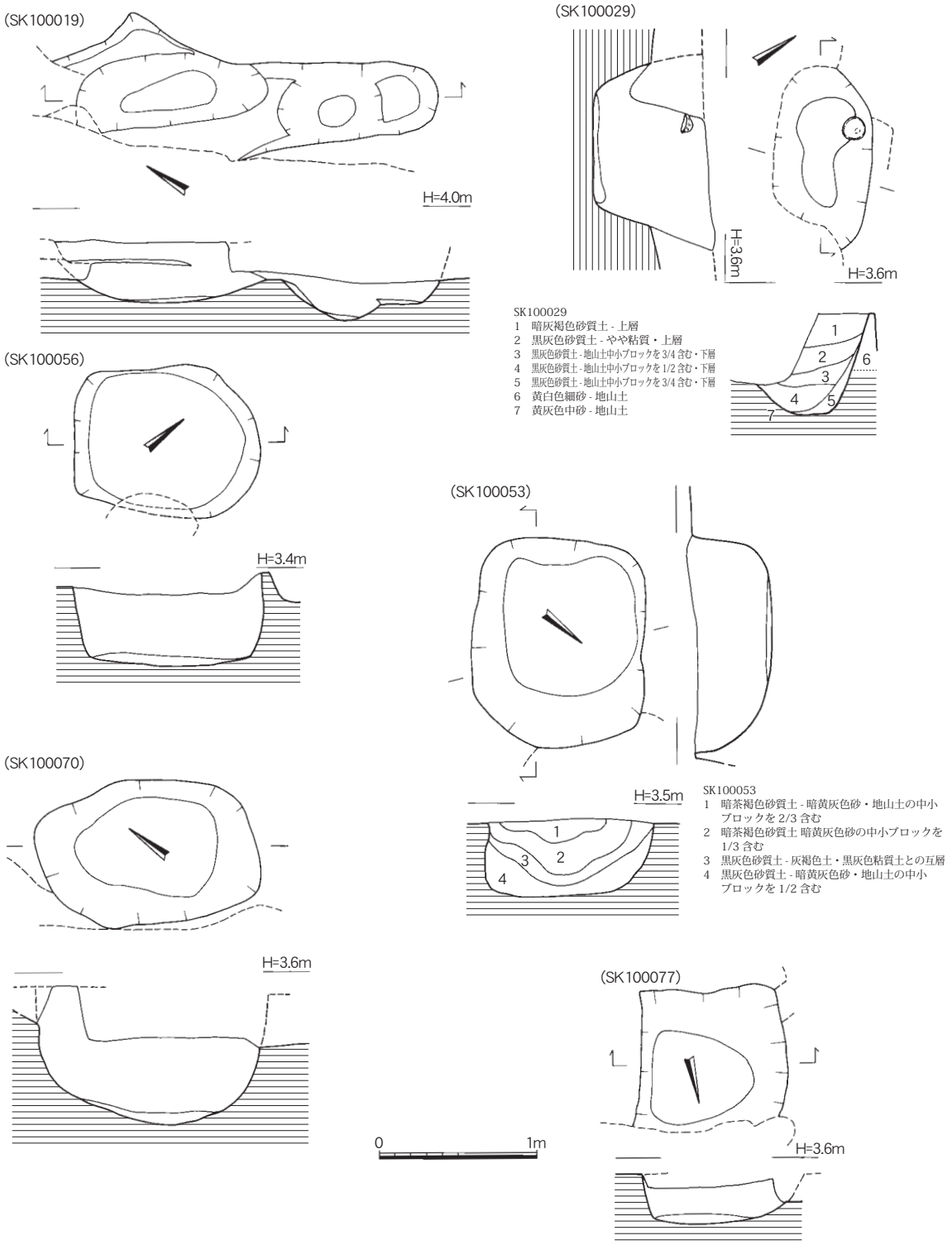


Fig.14　SK100019・100029・100053・100056・100070・100077 実測図（1/40）

SK100053（Fig.14　Ph.26・27）　A5 グリッドで検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ 1.4 m、幅 1.1 m、深さ 0.5 mを測る。

出土遺物（Fig.15　Ph.30）　69 は手捏ねの鉢で、レンズ状の底部。色調は褐灰色を呈する。70 は鉢で、口縁内外面はヨコナデ。71 は錐状の鉄製品。現存長 2.0㎝、径 0.2㎝を測る。

SK100056（Fig.14　Ph.28）　A5 グリッドで検出された。撹乱を受けるが、平面形は隅丸長方形を呈し、長さ 1.2 m、深さ 0.5 mを測る。

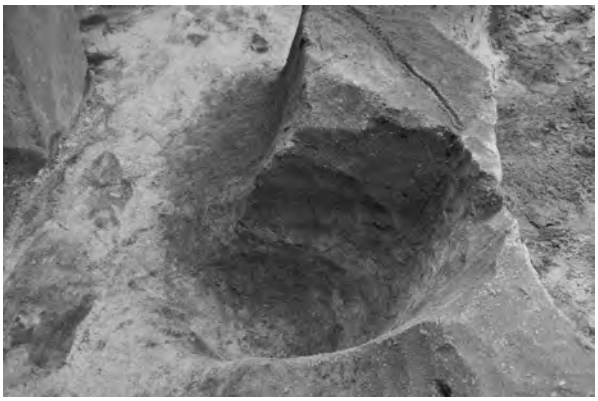
出土遺物（Fig.15　Ph.30）　72 は山陰系の二重口縁甕である。色調はにぶい橙色を呈する。口径 14.8㎝を測る。73 は玉砥石。表面に溝状に研いだ痕跡が残る。石材は砂岩。

SK100070（Fig.14）　Z9 グリッドで検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長さ 1.4 m、幅 0.9 m、深さ 0.8 mを測る。

SK100077（Fig.14　Ph.29）　O7 グリッドで検出された。撹乱を受けて全長は不明であるが、隅丸長方形を呈し、現存長 0.9 m、深さ 0.3 mを測る。

出土遺物（Fig.15）　75 は甕口縁で、口縁は緩やかに外反する。調整はヨコナデ。76 は短頸壺で、内外面に細かいヘラミガキを施す。

Ph.23　SK100019（東から）



Ph.24　SK100029 土層断面（南から）

Ph.25　SK100029（東から）

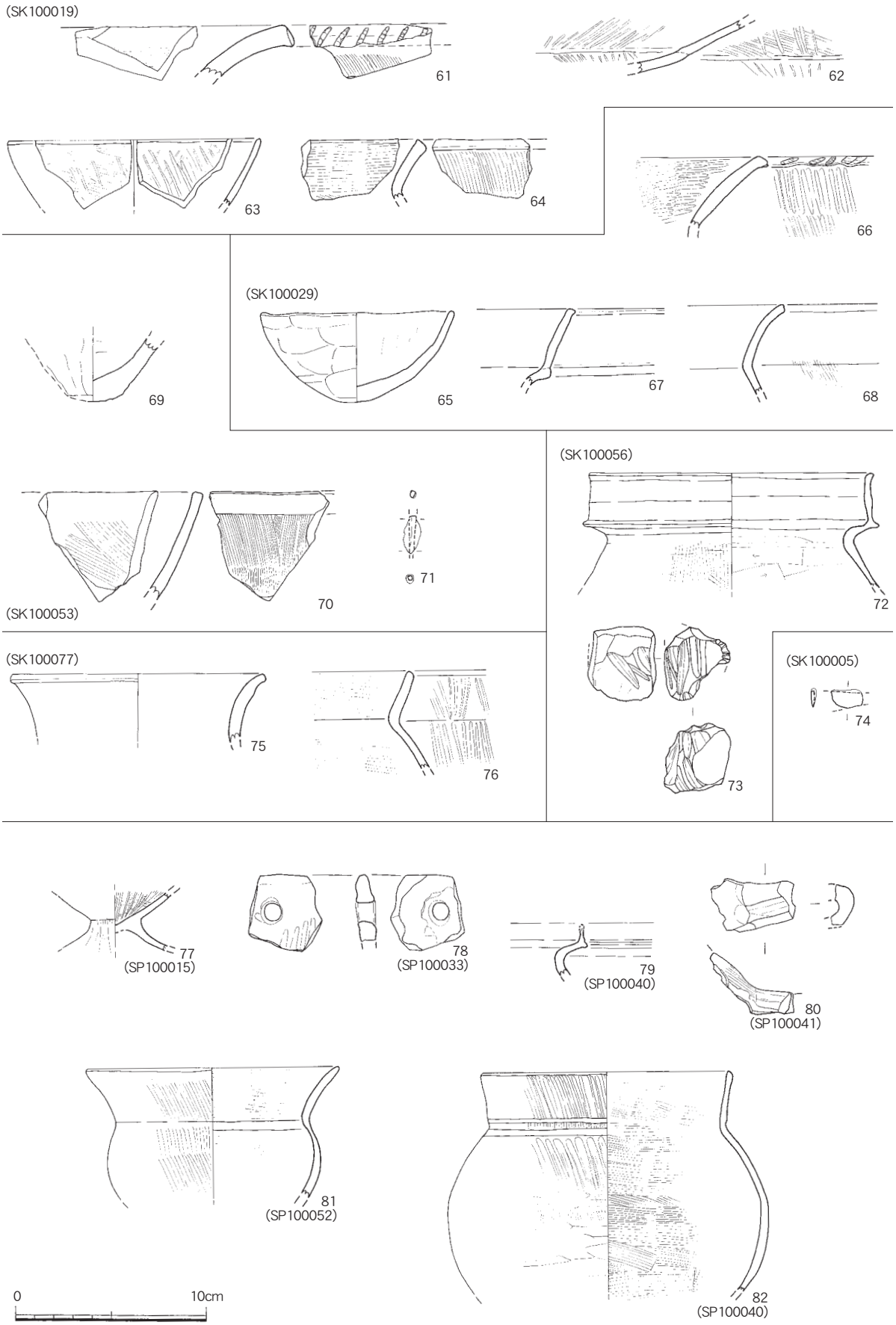


Fig.15　SK100019・100029・100053・100056・100077・100005、
SP100015・100033・100040・100041・100052 出土遺物実測図（1/3）

Ph.26　SK100053 土層断面（南から）

Ph.27　SK100053（北から）

Ph.28　SK100056（北から）

Ph.29　SK100077（西から）

Ph.30　SK100029・100053・100056 他出土遺物

（2）柱穴その他の出土遺物

出土遺物（Fig.15・16　Ph.58 ～ 61）　74 は SP100015 出土の鉄製品。刀子か。77 は SP100015 出土の脚付き鉢。78 は SP100039 出土の蛸壺。口縁は内傾する。口縁端部のやや下に円形の孔があく。外面には叩き目が残る。80 は SP100041 出土の注口土器の注口。調整はハケメで、色調はにぶい赤褐色を呈する。81 は SP52 出土の小型丸底壷。内外面ともヘラミガキを施す。口径 13.2㎝を測る。82 は SP100040 出土の直口壷で、外面はヘラミガキを施す。口径 13.2㎝を測る。

83 は複合口縁壷で、屈曲部の外面に刻目を施す。口縁の内外面とも暗文を施す。色調は橙色を呈する。84 は複合口縁壷で外面に波状文を施す。85・86 は山陰系の二重口縁甕で、色調は灰黄褐色を呈する。87 は山陰系の鼓形器台の受け部である。内面はヨコナデ後、ヘラミガキ。色調はにぶい橙色を呈する。口径 23.0㎝を測る。88 は脚付き土器の脚部である。外面には縦方向のヘラミガキを施す。89 は器台で、裾部は欠損する。器面調整はハケメ。口径 10.8㎝を測る。90・91 は砥石。91 は現存長 14.4㎝、幅 4.5㎝を測る。92 は有溝石錘で、横方向に 3 条溝が見られる。長さ 6.3㎝、径 3.1㎝を測る。石材は砂岩。

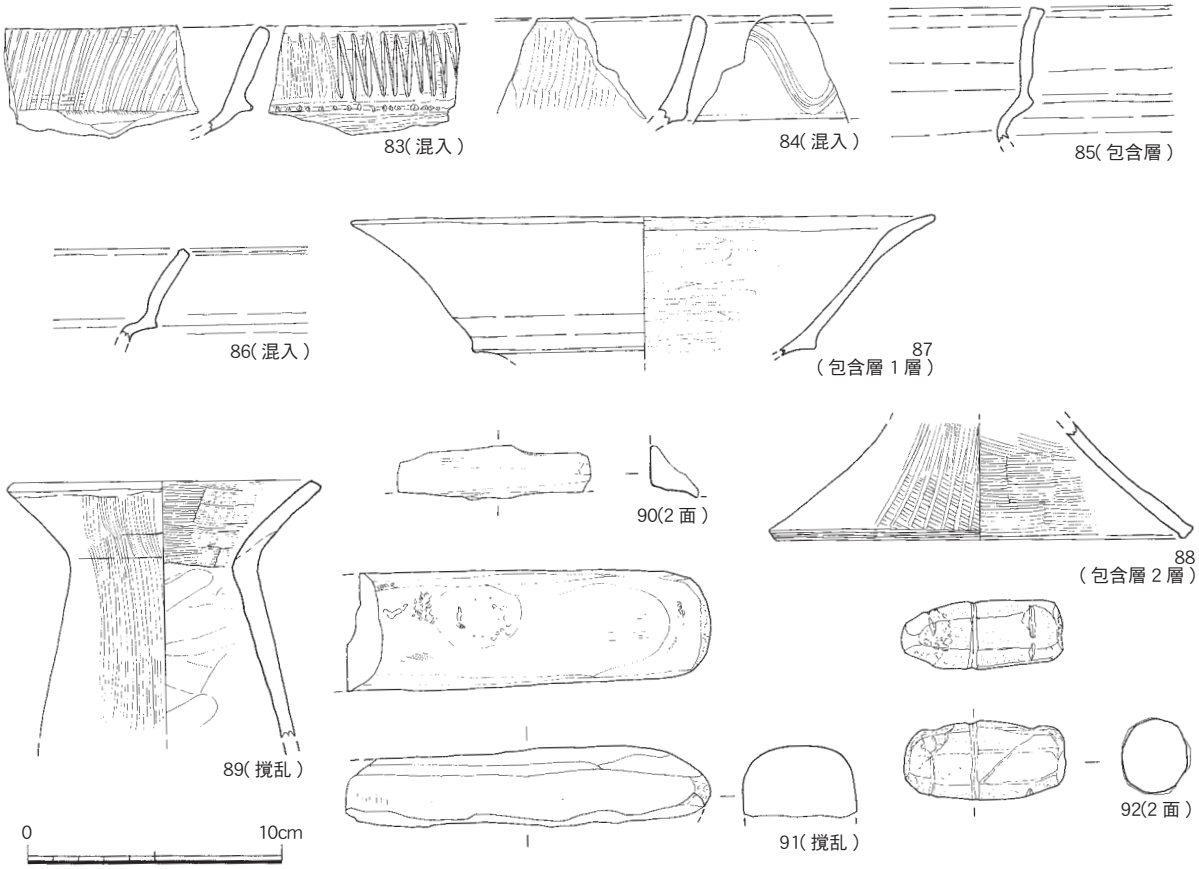


Fig.16　その他の古墳時代前期出土遺物実測図（1/3）

6）弥生時代終末期の調査

（1）竪穴住居

SC100055（Fig.17　Ph.31・32）　A5 グリッドで検出された。撹乱のため、平面形は不明確であるが、長方形を呈するものか。現存長 2.7 m、深さ 0.1 mを測る。主柱穴は不明。内部から赤色顔料が残存した土器が出土した。

出土遺物（Fig.18）　93 は甕底部で内部に赤色顔料が残存する。保存容器か。94 は鉢で、口縁は「く」の字に折れて大きく開く。95 は砥石である。

SC100057（Fig.17）　A5 ～ A7 グリッドで検出された。撹乱のため、平面形は不明確であるが、長方形を呈するものか。深さ 0.1 mを測る。主柱穴は不明。

出土遺物（Fig.18）　100 は丸底の鉢で、器高 3.9㎝、口径 8.6㎝を測る。

SC100071・100072（Fig.17　Ph.33 ～ 36）　O9 ～ Z9 グリッドで検出された。SC100071 が SC100072 を切る。平面形は不明確であるが､長方形を呈するものか。床面から土器が多数出土した。深さ 0.3 mを測る。主柱穴は不明。

出土遺物(Fig.19　Ph.39)　96 は脚付き土器の脚部である。外面には縦方向のヘラミガキを施す。底径 14.8㎝を測る。97 は器台で、裾部は欠損する。器面調整はハケメ。口径 12.2㎝を測る。98 は大型の甕で、口縁は「く」の字形に大きく開く。屈曲部に突帯がつき、表面には刻目を施す。調整はナデである。99 は鉄鏃で、無頸の三角鏃である。

109 は複合口縁壷で、口縁は欠損している。頸部には断面台形の突帯がつく。表面にハケメ原体による鋸歯状の刺突を施す。底部は痕跡的な平底。110 は丸底の鉢。内外面ともハケメ。外底部はヘラケズリを施す。底面に径２～３㎜の穿孔あり。口径 19.0㎝を測る。111 は尖底の甕底部。内外面ともハケメ。112 は甕で、口縁は緩やかに外反する。外面はハケメ、内面の屈曲部以下はナデ。口径 19.0㎝。113 は大型の甕である。屈曲部に突帯がつく。表面にハケメ原体による刺突を施す。口径 28.2㎝を測る。114 は甕で、外面は斜め方向の叩き。内面はハケメ。口径 17.0㎝を測る。115 は土製支脚。116 は不明鉄製品。117 は粒状の鉄塊。

SC100085（Fig.33　Ph.37）　A9 ～ O9 グリッドで検出された。SK100083 に切られる。撹乱を受けているが、平面形は隅丸方形を呈する。長さ 2.0 m、幅 1.9 m、深さ 0.2 mを測る。主柱穴は不明。

出土遺物（Fig.18　Ph.38）　101 は短頸壺で、内外面にハケメを施す。口径 16.8㎝を測る。102 は高坏の坏部で、内面に縦方向の暗文を施す。103 は「く」の字口縁の甕で、内外面にハケメを施す。口径 17.0㎝を測る。104 は丸みを帯びた平底の底部。底面にハケメを施す。105 は脚付き土器の脚部。内外面にヘラミガキを施す。底径 11.0㎝を測る。色調は橙色である。106 は土器転用の円盤。径 3.7 ～ 4.1㎝を測る。107 はレンズ状の底部片。108 は甕胴部片で、外面は横方向の叩き後、ハケメ。色調は褐灰色を呈する。152 は不明鉄製品。

Ph.31　SC100055（南から）

Ph.32　SC100055 朱入土器片（東から）

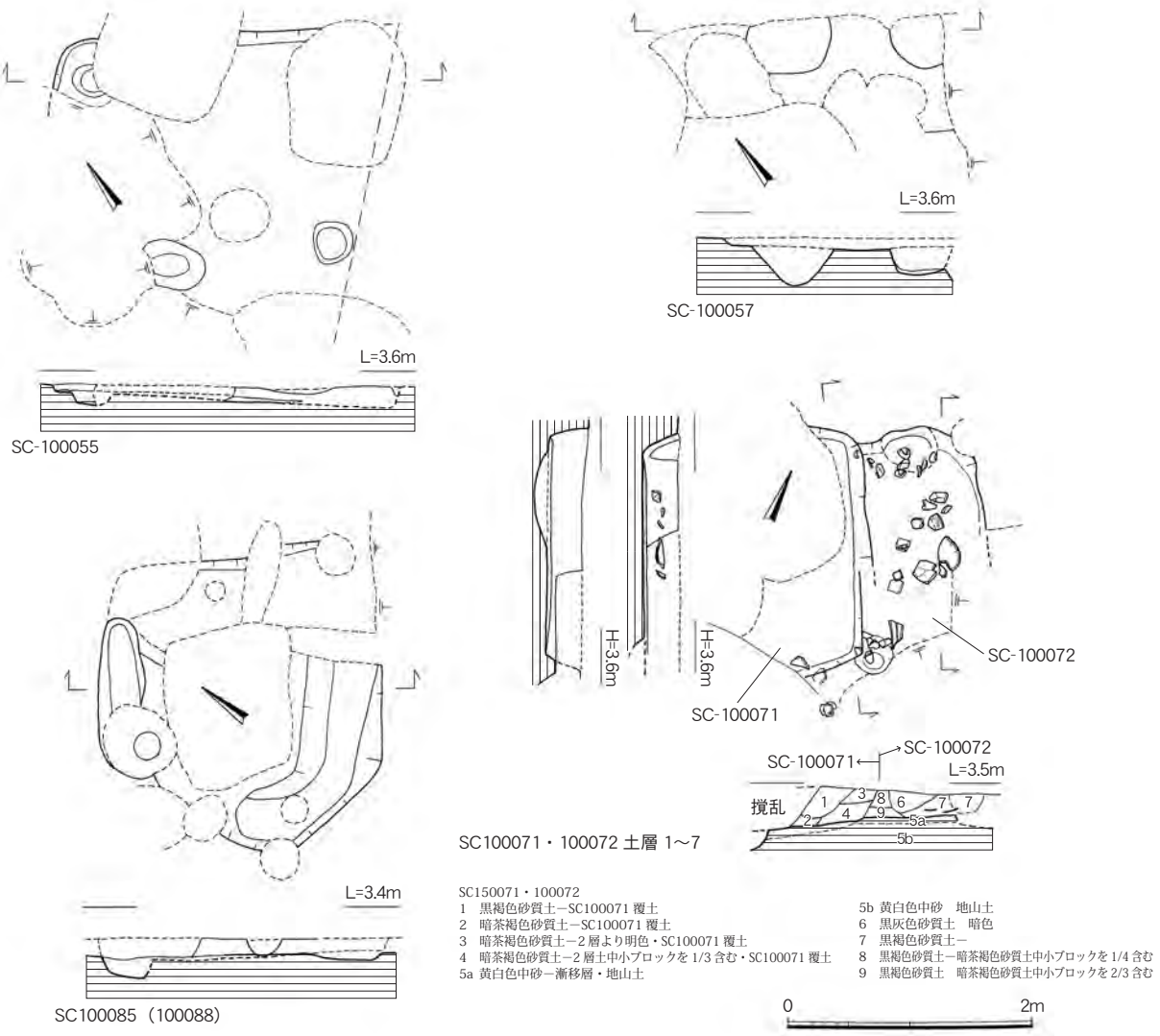


Fig.17　SC100055・100057・100071・100085 実測図（1/60）

（2）土坑

SK100030（Fig.20　Ph.40・41）　O5 グリッドで検出された。平面形は不整円形を呈し、径 1.3 ～ 1.6 m、深さ 0.6 mを測る。床面から土器が多数出土した。

出土遺物（Fig.21）　118 は長頸壷の体部上半片。119 は体部下半片。凸レンズ状の底部か。外面には横方向のハケメを施す。118 と同一個体の可能性がある。120 は高坏の坏部で、口縁は接合部で大きく外反する。内外面に縦方向の暗文を施す。口径 30.2㎝を測る。121 は脚付き土器の脚部。裾部に円形の孔が 3 カ所あく。122・123 は長胴の甕で、口縁は緩やかに外反する。内外面ともハケメを施す。口径 21.2㎝、20.6㎝を測る。

SK100090（Fig.20）　A11 グリッドで検出された。SK100135 に切られる。撹乱を受けて全長は不明である。深さ 0.1 mを測る。

出土遺物（Fig.22　Ph.42）　124 は山陰系の注口土器である。口縁は二重口縁。外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。色調は橙色を呈する。125 は高坏の坏部。内外面に縦方向の暗文を施す。

Ph.33　SC100071・100072（右・東から）

Ph.34　SC100071・100072 土器出土状況（北から）

Ph.35　SC100071・100072 土層断面（東から）

Ph.36　SC100071・100072（右・東から）

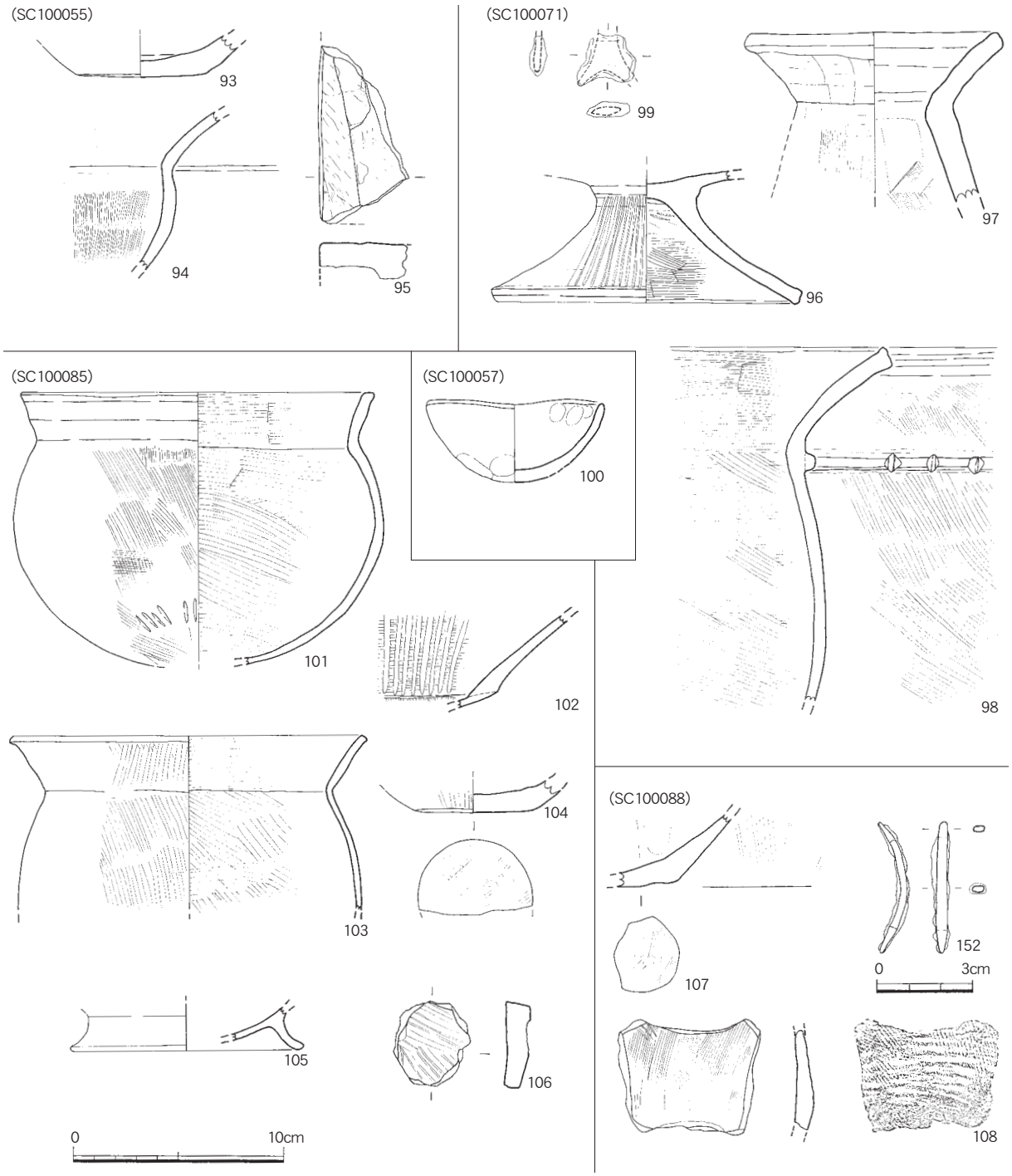


Fig.18　SC100055・100057・100071・100085・100088 出土遺物実測図（1/3・1/2）

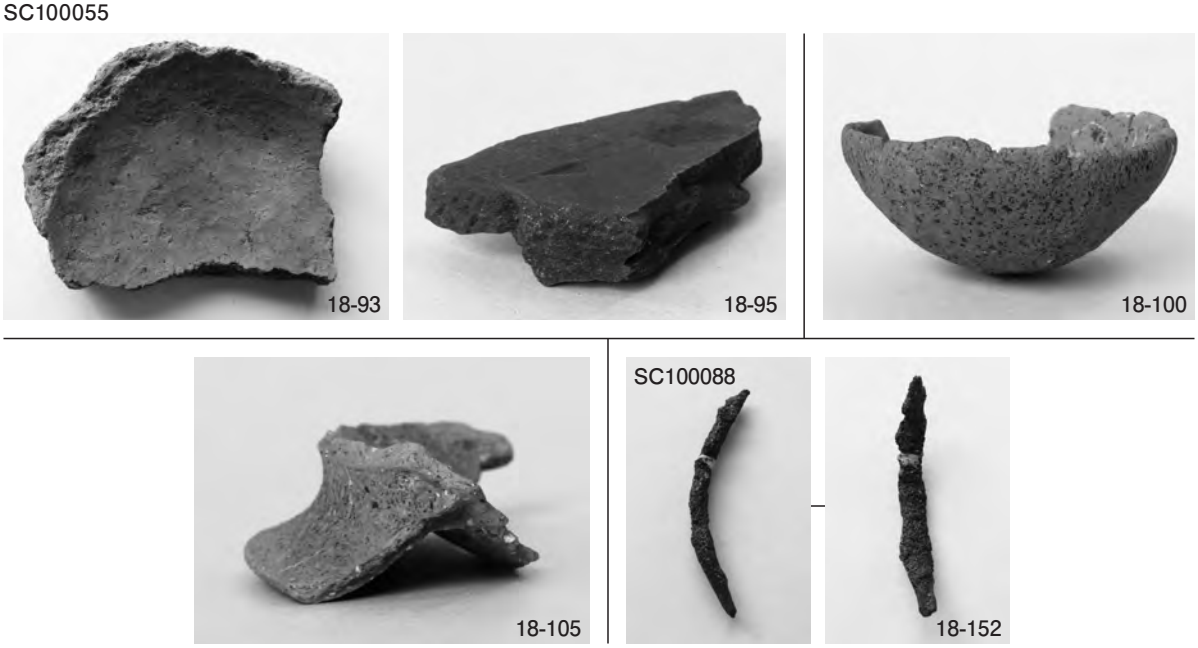
126 は丸底坏で、器面には指頭圧痕が残る。器高 4.4㎝、口径 9.0㎝を測る。127 は土器転用の円盤。

（3）溝

SD100086（100087）（Fig.20）　A9 ～ 011 グリッドで検出された。L 字に屈曲する溝。現存長 0.8、0.8 m、幅約 0.2 m、深さ 0.2 mを測る。

出土遺物（Fig.22）　128 は砥石である。

Ph.37　SC100085・100088（奥・東から）



Ph.38　SC100055・100057・100071・100085・100088 出土遺物

（4）柱穴その他の出土遺物

SP100080（Fig.20）　A7 グリッドで検出された。径 0.4 ～ 0.6 m、深さ 0.4 mを測る。

出土遺物(Fig.22　Ph.42)　130 は小型丸底壷で、口頸部は欠損している。内外面とも調整はナデ。131 は石製品で、鋳型の中子。現存長 6.6㎝、幅 2.9㎝、厚さ 1.6㎝を測る。

その他の遺物（Fig.22・23　Ph.44）　129 は矢板試掘で出土した大型の甕で、底部は丸みを帯びた平底である。肩部と胴部下位に断面三角形の突帯がつき、表面にはハケメ原体による刺突を施す。132 は SK100053 から出土した小鉄塊。長さ 2.4㎝、4.3g を測る。133 は SD100086 から出土した小鉄塊。1.6g を測る。134 は 2 ～ 3 面間の包含層から出土した直口壷で、内外面ともハケメを施す。

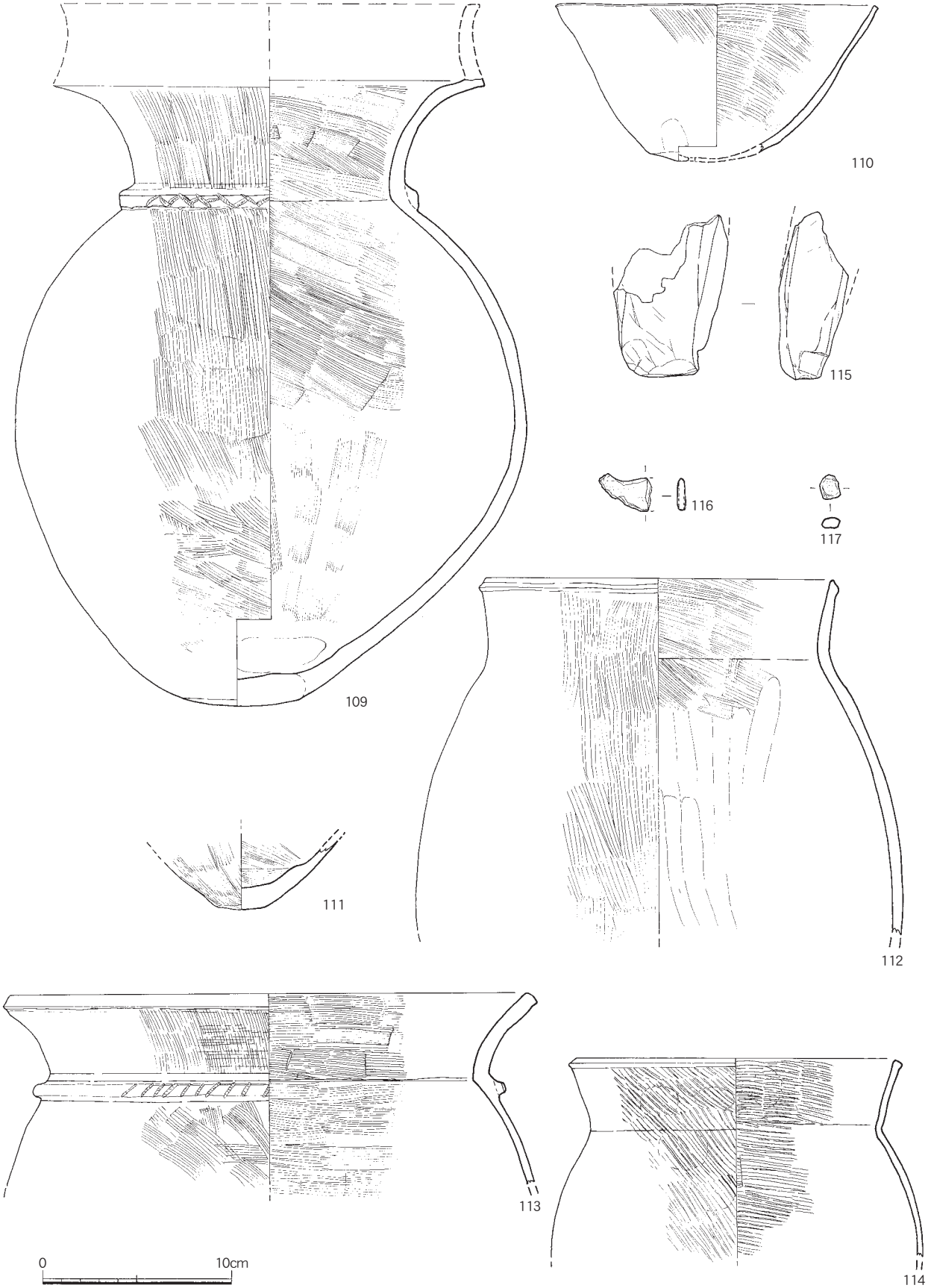


Fig.19　SC100072 出土遺物実測図（1/3）

Ph.39　SC100072 出土遺物

Ph.40　SK100030 遺物出土状況（西から）

Ph.41　SK100030（北から）

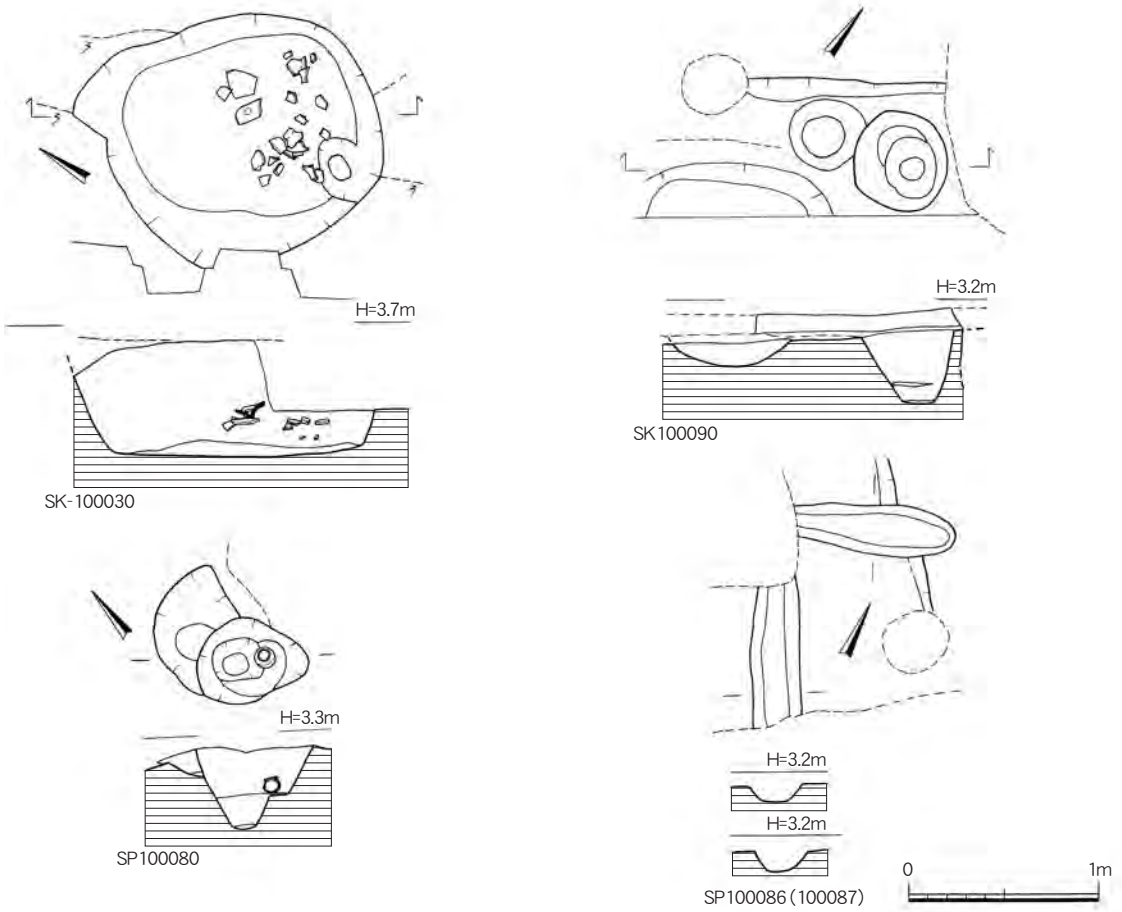


Fig.20　SK100030・100090、SD100086、SP100080 実測図（1/40）

口径 11.6㎝を測る。135 は 2 ～ 3 面間の包含層から出土した長頸壷で、体部は欠損する。外面は縦方向のヘラミガキを施す。色調は暗赤褐色を呈する。口径 8.4㎝を測る。136 は 2 ～ 3 面間の包含層から出土した鉢で、体部は口縁にかけて窄まる。外面には縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを施す。口径 18.0㎝を測る。137 は 2 ～ 3 面間の包含層から出土した短頸壺で、内外面ともハケメを施す。138 は鉢で、外面下半はヘラミガキを施す。口径 15.2㎝を測る。139 は高坏で、口縁端部は水平につまみ出す。内外面ともヘラミガキを施す。140 は 2 ～ 3 面間の包含層から出土した丸底坏で、内外面とも板状工具によるナデ。器高 5.9㎝、口径 15.6㎝を測る。141 ～ 143 は 2 ～ 3 面間の包含層出土の器台で、外面にはハケメを施す。141 は底径 12.6㎝を測る。142 は口径 13.6㎝を測る。143 は底径 14.6㎝を測る。144 は SC100072 から出土した大甕で、口縁は屈曲部で大きく外反する口縁端部にはハケメ原体による刺突を施す。頸部に突帯の剥離痕が残る。内外面ともハケメを施す。口径 45.6㎝を測る。145 は大甕の頸部片で、屈曲部に斜め方向の斜線文を施す。内外面ともハケメを施す。146 は SK100066 下層から出土した鉢の胴部片で、内面に赤色顔料が付着する。147 は SP100008 から出土した甕底部片で、内面に赤色顔料が付着する。148 は 2 ～ 3 面間の包含層から出土した甕底部で、痕跡的な平底。149 は 2 ～ 3 面間の包含層から出土した壷底部で外面にヘラミガキを施す。150 は SK100002 出土した畿内第Ⅴ様式系の甕底部である。突出した底部の外面に叩き目が残る。色調は明褐灰色を呈する。151 は SK100066 下層で出土した脚付きの鉢である。調整はハケメを施す。

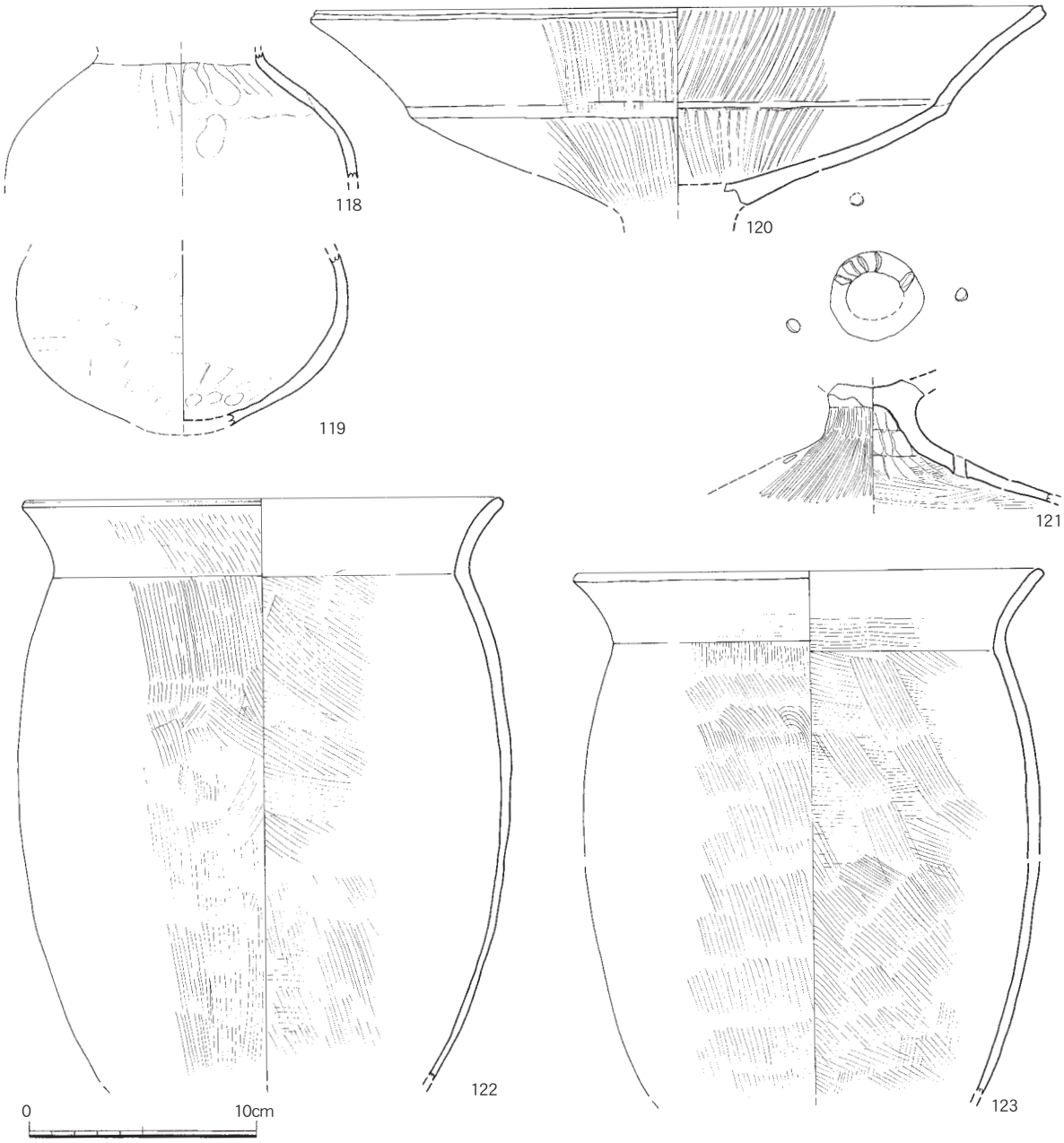
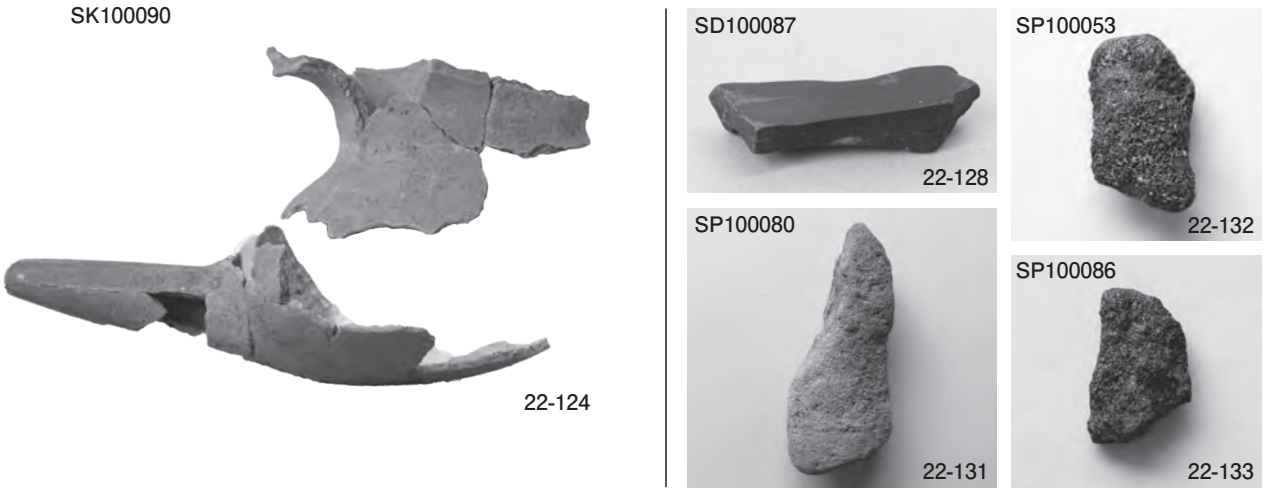


Fig.21　SK100030 出土遺物実測図（1/3）



Ph.42　SK100090、SD100087、SP100053・100080・100086 出土遺物

Ph.43　SD100080 土器出土状況（南から）

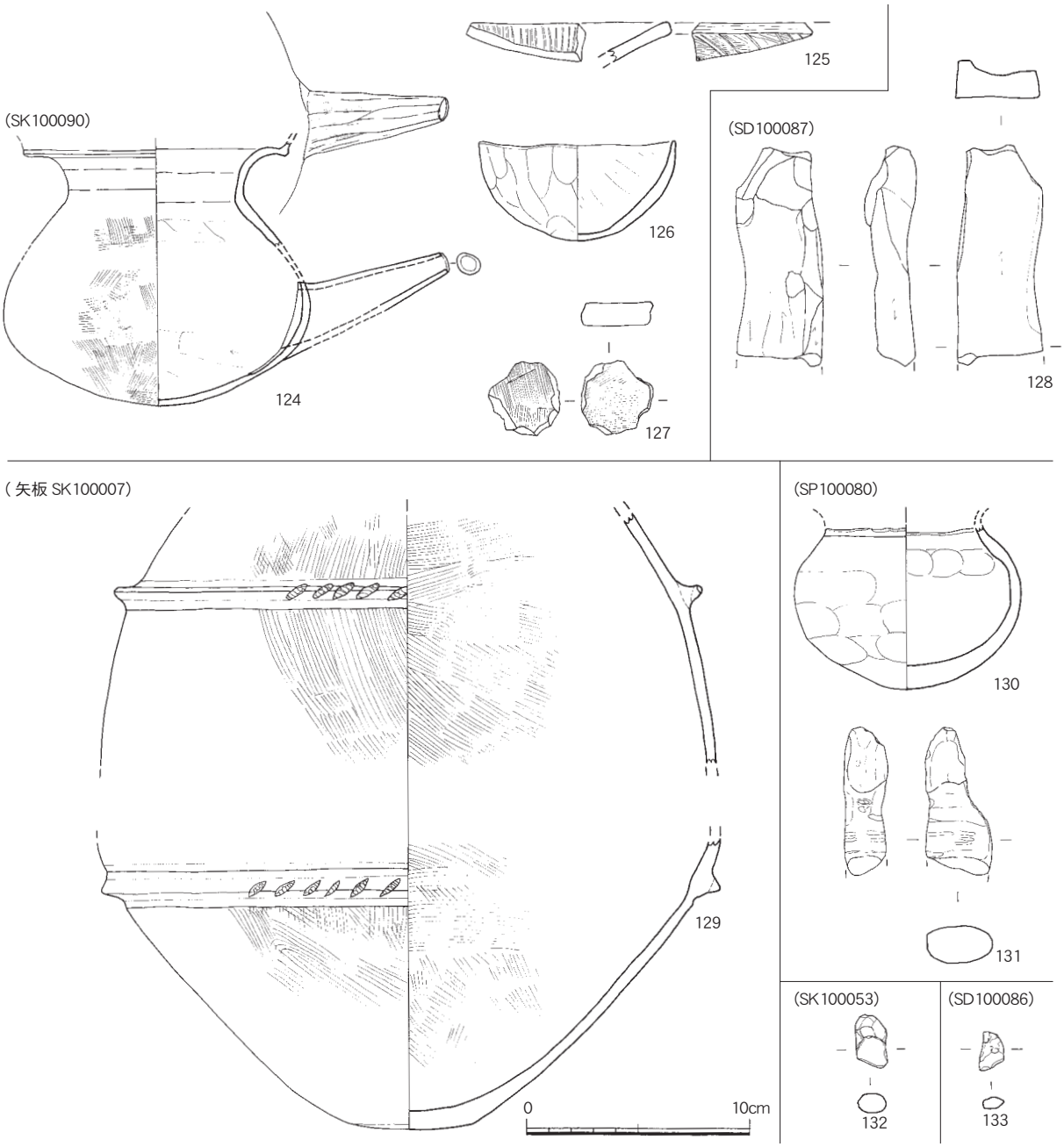


Fig.22　SK100007・100053・100090、SD100086・100087、SP100080 他出土遺物実測図（1/3）

Ph.44　その他の弥生終末期遺物

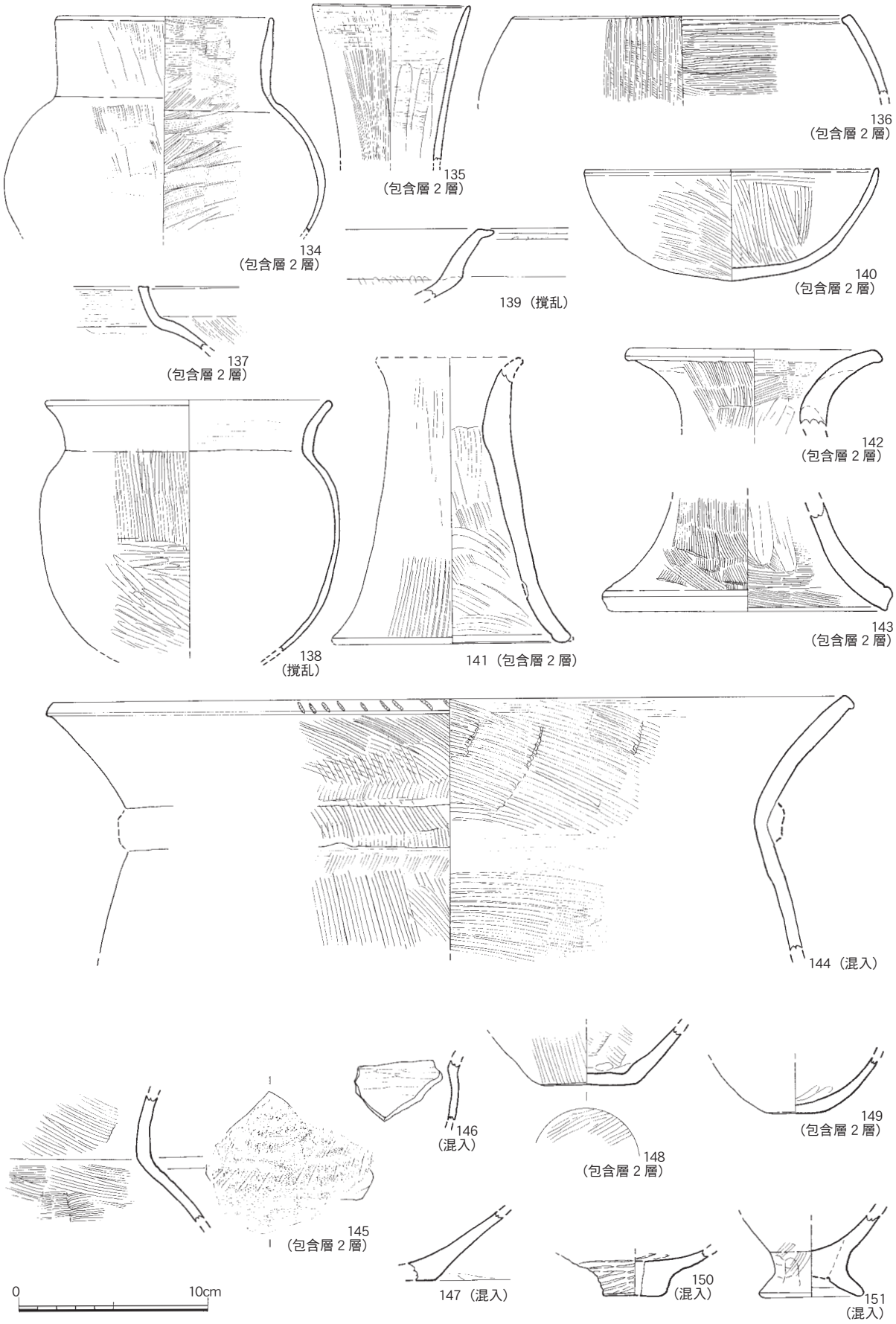


Fig.23　その他の弥生終末期出土遺物実測図（1/3）

7）小結

今回の調査では、51.51㎡の面積で３面にわたって弥生時代終末期～ 12 世紀前半を中心とした遺構を検出した。12 世紀後半以降の遺構は、近世以外、柱穴が 1 基有るのみで、遺物はコンテナ 20 箱分出土している。

検出したおもな遺構は、第 1 面で 11 世紀後半～ 12 世紀前半の土坑 5 基・井戸 1 基を、調査区の全面で検出した。土坑は 1m を越える大型のものが目立つが、第 8 や第 9 調査区の様に内部から炭粒や灰が大量に出土する状況は無い。ガラス小玉や坩堝・炉壁などガラス製造に関連する遺物は 1 点も検出されず、これらの工房からは外れた位置にある。井戸は桶井側の SE100068 の 1 基のみ検出されている。遺物は中国陶磁器を中心に、高麗無釉陶器・土師器・瓦器・石錘・鉛製品等が出土している。SK100021 出土の円筒形のキャップ状の鉛製品は珍しい遺物である。

12 世紀中頃～ 13 世紀前半の（中世 2）の遺構は SP100075 の柱穴 1 基のみで、集落の外れに位置する。遺構面も 11m 弱で 30㎝以上下がる傾斜となっている。弥生終末期での 10㎝の傾斜が時代が降る毎に強くなり、中世では 3 倍の傾斜となっており、砂丘上での土壌の堆積の盛んさを示している。

古代の遺構は第 2 面の柱穴 SP100050 の 1 基のみで、集落から外れている。遺物は須恵器・土師器・新羅焼等が少量検出される。墨書土師器 48 は坏の外底部に梵字状の墨書がなされる。

古墳時代後期も少なく、土坑 1 基と柱穴を 2 基のみ検出している。遺物は少量の須恵器・土師器・新羅焼等が検出される。SK100083 出土の線刻土師器 52 は魚と水波か、何か形象的である。

古墳時代前期は第２面を中心に、1 ～３面にかけて竪穴住居３軒・土坑 10 基・溝２条を検出しており、主な遺構の 38% を占め第 2 の盛期となっており、集落の中心部を成している。柱穴も 1m 近い大型のものが多く、掘立柱建物の可能性もある。竪穴住居は方形プランであるが、後代の遺構に切られ全容がわかるものは一つもない。遺物は近畿・山陰・吉備系の外来土器や SK100071 出土の錐状鉄器 71、SP100005 出土の鉄刀子断片 99・他に SC100034 で 1、SC100035 で 2、SK100019 で 2、SK100053 で 2、SK100077 で 1、SD100003 で 2、SP100015 で 1、SP100041 で 1、SP100047 で 1 片の鉄片計 16 点の鉄器が出土しており、SP100041 出土注口土器 80・SK100056 出土玉磨き砥石 73 等、活発な活動を示している。遺跡群内の築港線調査区等では碧玉の玉素材・未成品等も出土しており、73 の玉砥石は遺跡群内での玉製作の証左の一つとなる。鉄器の出土に合わせ砥石の出土も目立つ。

弥生時代終末期は第 3 面を中心に、竪穴住居 6 軒と可能性のある土坑 SK100090 と 100107 の 2 基・土坑 10 基・溝 1 条を検出しており、主な遺構の 45% を占め最大の盛期となっており、古墳時代前期と同じく、集落の中心域を成している。柱穴も同様に 1m 近い大型のものが多い。遺物は、SC100071 出土の鉄鏃 99、SC100088 出土の弓状金具 152、SC100072 出土の鉄片 116・117 他 3 片、SD100086 出土の鉄片 133、他に SC100055 で 2、SC100057 で 1、SK100030 で 1、SK100078 で 3、SK100092 で 1、SD100086 で 1、SP100023 で 1、SP100064 で 1、SP100073 で 2、SP100076 で 1、SP100095 で 1、SP100097 で 1、SP100099 で 1 片の鉄片と計 24 点出土、SP100023 からは鉄滓も 1 点検出されており、鉄器の保有率が高い。SP100080 出土の凝灰質砂岩製の鋳型中子 131 も技術の先端部分を示している。SK100090 出土の注口土器 147 はほぼ完形に復原される。山陰系と思われる。SC100055 出土の水銀朱を焼いた土器片 93 と 146・147 の出土も、比恵・那珂遺跡群と並ぶ先進性を示している。

12 世紀後半以降の遺構は、近世以外無く、近世の撹乱 1 は廃滓土坑で多量の鉄滓を出土している。

12. 11 区の調査

1）概要

11 区は東工区の北東端、東側へ緩やかに傾斜する緩斜面に位置する。西側 10 区との間に下水道管および水道管が埋設され、南側は車道確保のため、歪で狭小な調査区となった。調査面積は 16.60 ㎡である。先行して調査を行った 6 区の層序を参考に、遺構面を 3 面設定した。11 区の層序は、道路面から 60cm 下まではコンクリート・クラッシャーラン、海砂、その下層に、炭化物を多量に含む黒色粘質土、炭化物を少量含み、やや粘質を帯びた灰白色シルトが堆積する。その下が第 1 面となり、道路面から約 0.8m 下の黄褐色土の上面である。第 2 面は約 1.0m 下のやや白色を帯びた黄褐色シルト上面、第 3 面は約 1.5m 下の砂丘上で設定した。

検出した遺構は 11 世紀後半 ~12 世紀の井戸 2 基、土坑 1 基、柱穴、弥生時代後期前半 ~ 古墳時代初頭の土坑、柱穴である。包含層からは弥生時代終末から中世にかけての遺物が出土する。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、土製品、滑石製品、瓦、鉄製品がコンテナケース 11 箱分出土する。

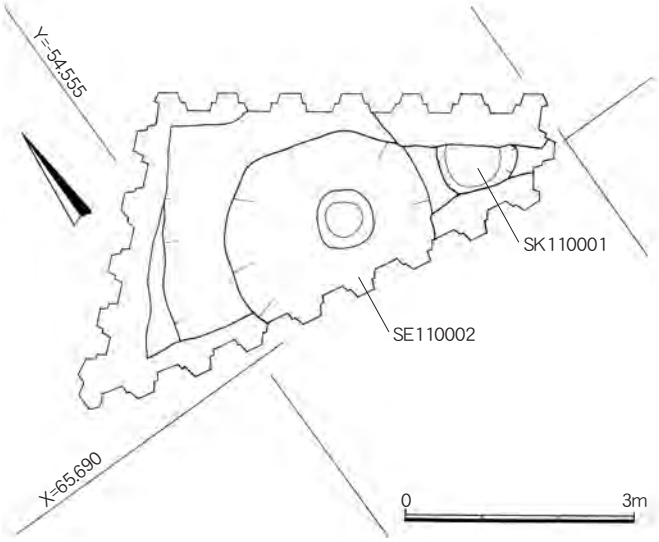


Fig.1　第 1 面全体図（1/100）

2）第 1 面の調査（Fig.1　Ph.1）

第 1 面はにぶい黄褐色土の上面、標高 3.5m で検出した。検出した主な遺構は井戸 1 基、土坑 1 基、柱穴である。調査区の大半は井戸が占める。

Ph.1　1 面全景（北東から）

（1）井戸（SE）

SE110002（Fig.2　Ph.2~5）　調査区中央に位置し、南側は調査区外へ延びる。掘方の直径は東西方向で 2.8m を測り、検出面より約 1.8m 下にテラスを有する。井側は検出段階で確認でき、やや南側よりに設けられる。直径約 1m を測り、上層では一辺約 40cm 程度の花崗岩の自然石が投げ込まれていた。テラス検出面（標高約 1.4m）で、井側は直径約 75cm、標高 0.9m では約 50cm を測る。また、標高 0.9~1.2m 付近では、部分的に幅約 10cm、高さ 36cm の縦方向の板目を確認した。井側には桶を使用したと考えられる。なお、標高約 1.2m 付近でほぼ全身のイヌの骨が出土した（Ⅲ -35 参照）。標高 0.9m 付近より湧水し、それ以上掘削することはできなかったが、下層で粗砂を確認したため、底面は近いと考えられる。

Ph.2　SE110002 井側内石材出土状況（北東から）

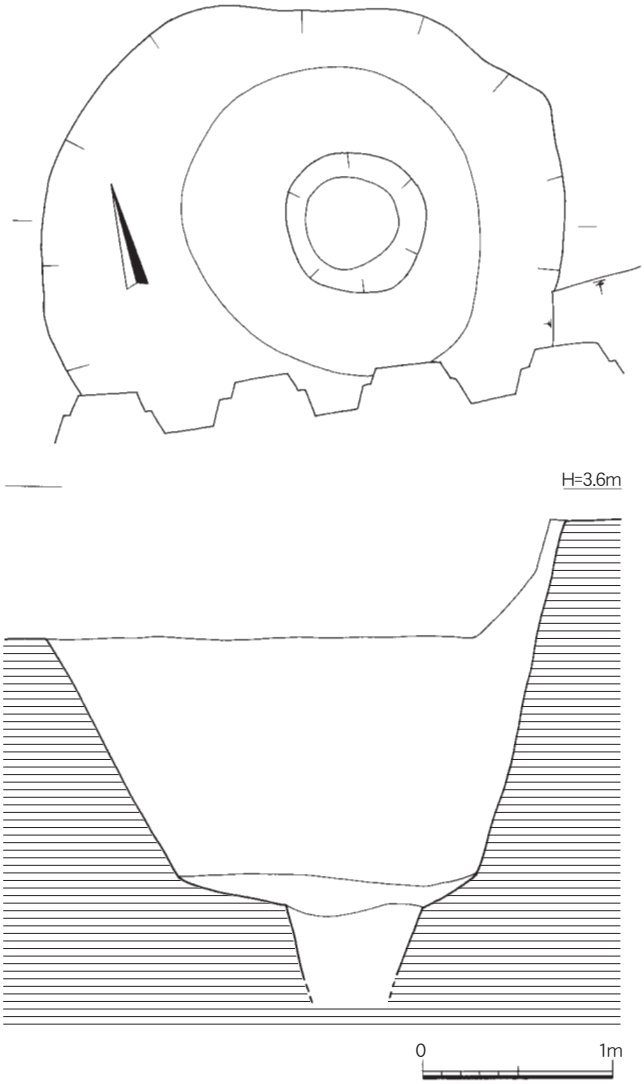
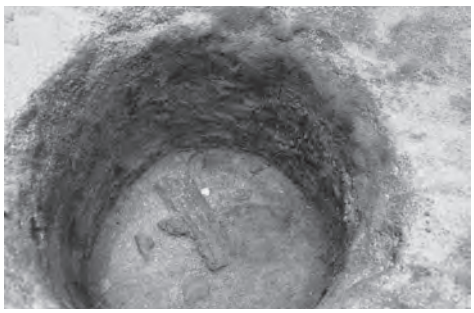


Fig.2　SE110002 実測図（1/40）

Ph.3　SE110002 井側内イヌ骨出土状況（北東から）



Ph.4　SE110002 井側内下層（北から）

Ph.5　SE110002 井側内桶検出状況（北から）

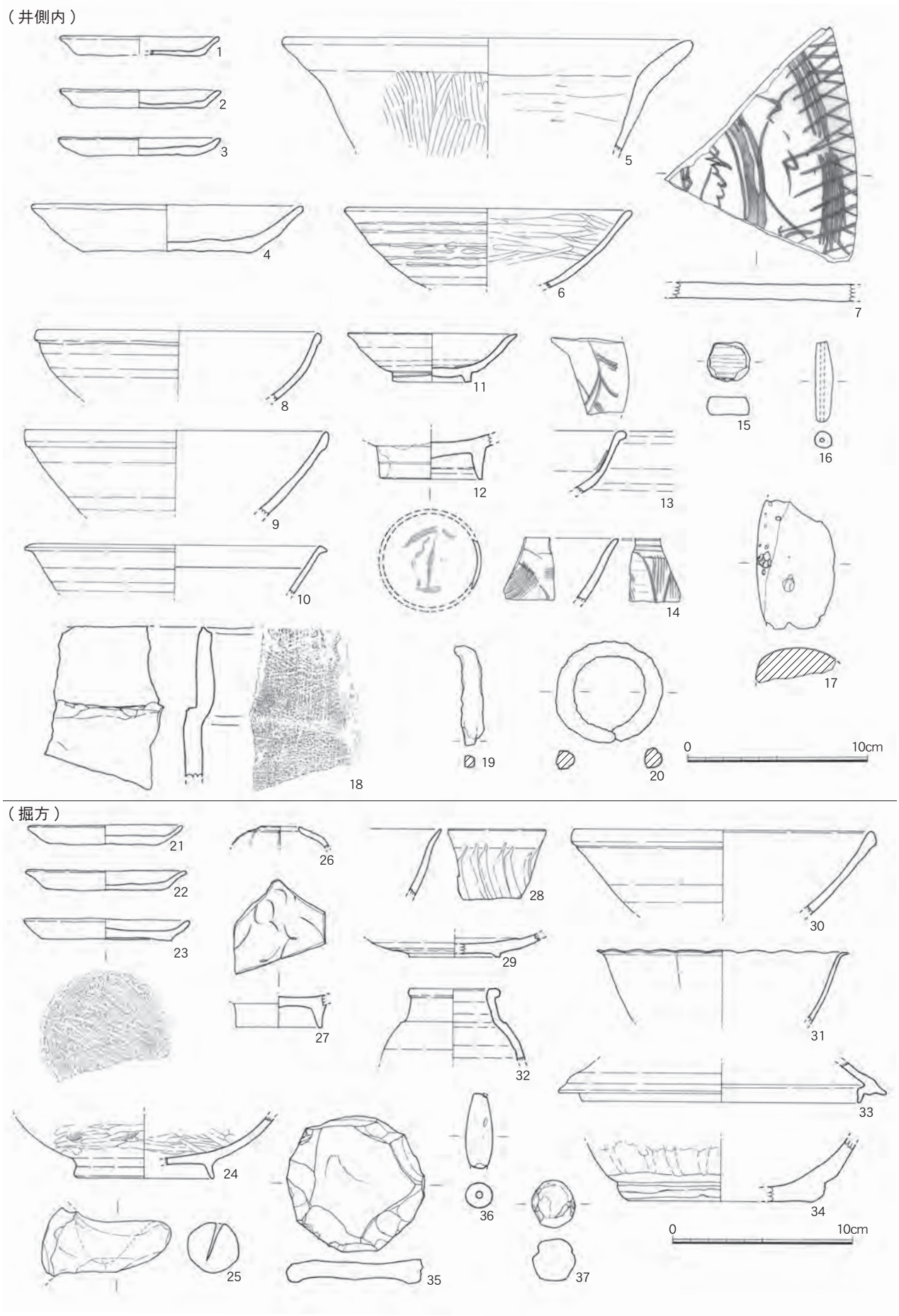


Fig.3　SE110002 出土遺物実測図①（1/3）

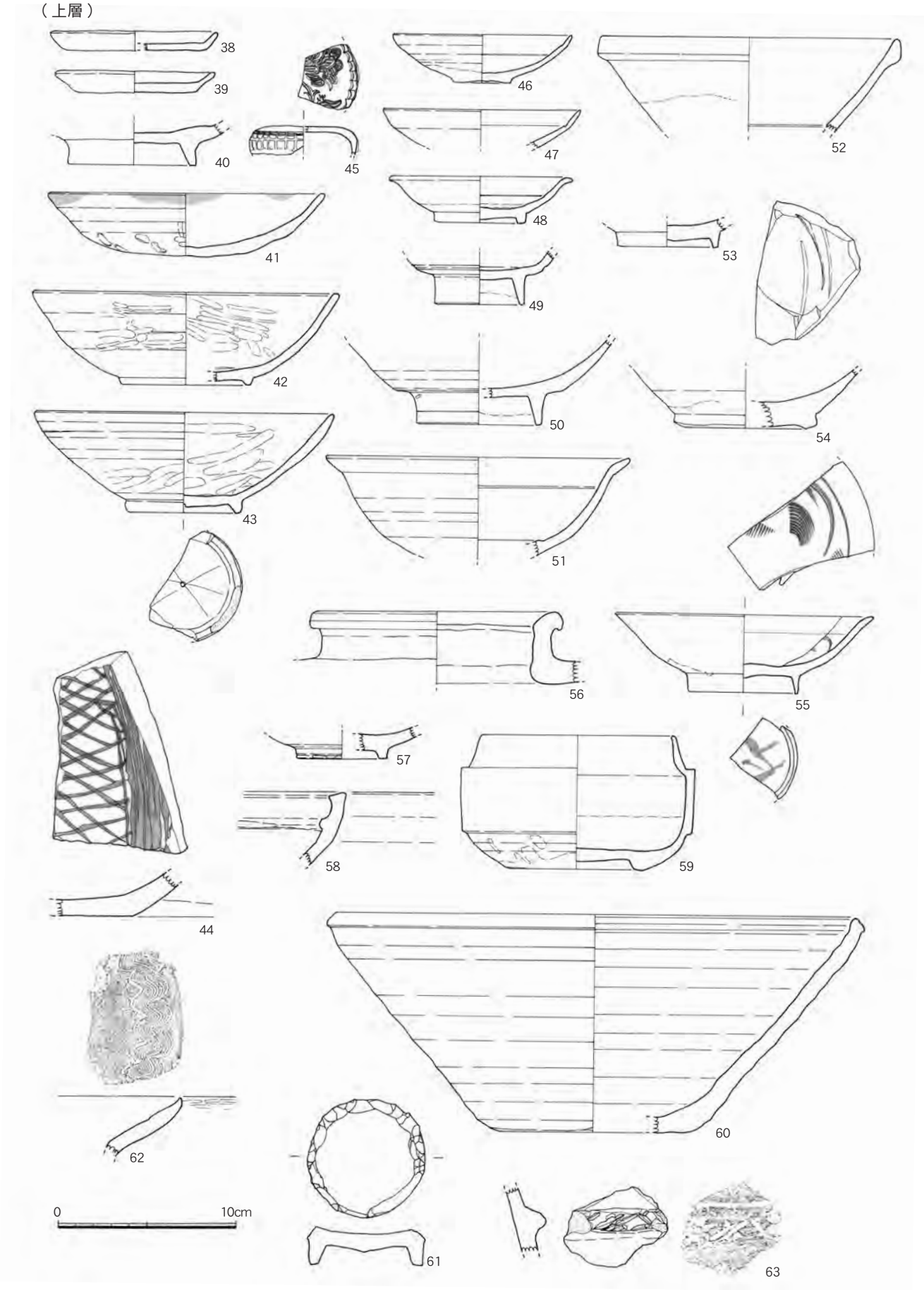


Fig.4　SE110002 出土遺物実測図②（1/3）

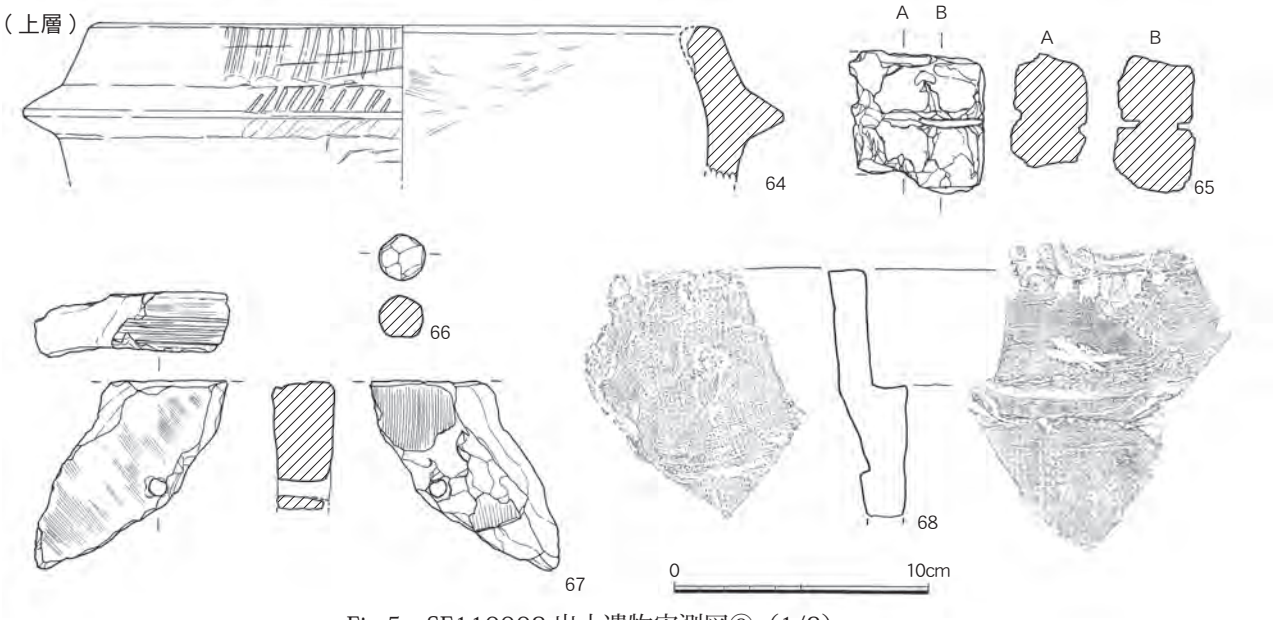
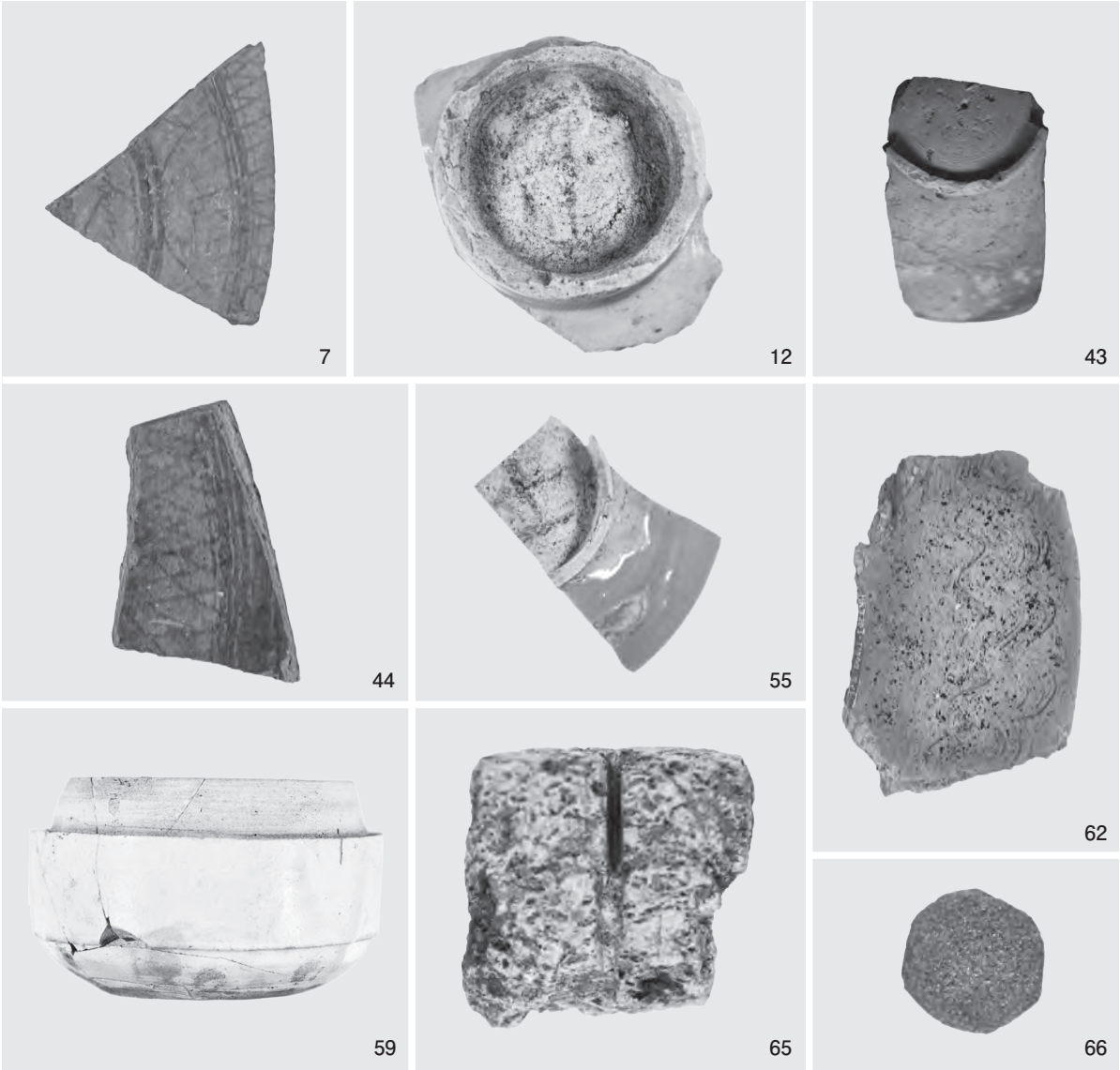
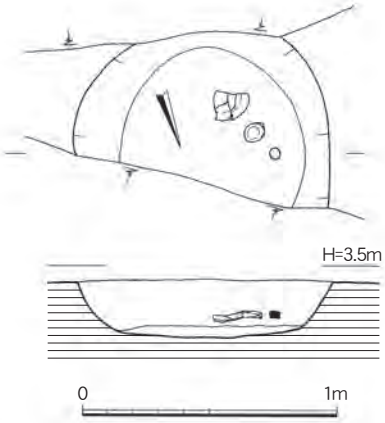


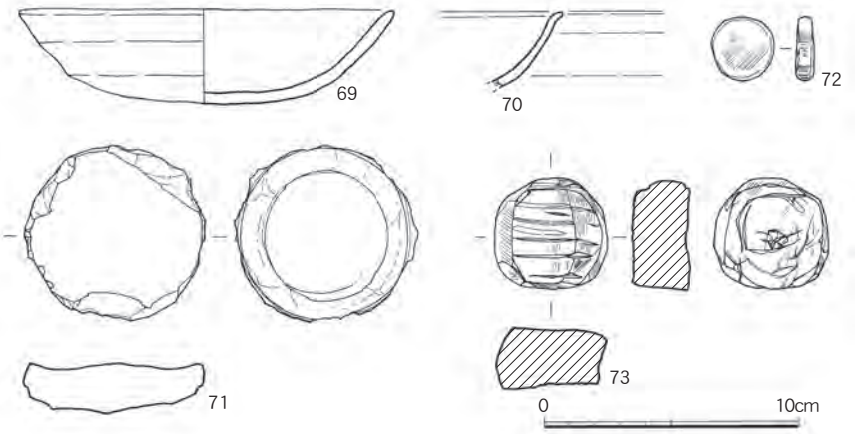
Fig.5　SE110002 出土遺物実測図③（1/3）



Ph.6　SE110002 出土遺物



Ph.7　SK110001（北東から）



Ph.8　SK110001 出土遺物

Fig.6　SK110001 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.3~5　Ph.6）　1~20 は井側内から出土した遺物である。1~5 は土師器である。1~3 は回転糸切り底の小皿で、復元口径は 9.0cm を測る。4 は回転糸切り底の坏で復元口径は 15.1cm、1 と 4 は外底部に板状圧痕を有する。5 は鍋で、口縁部は短く外反する。外面は縦方向の粗い刷毛目、内面は横方向の削り、口縁部は横方向のナデで調整する。胎土に白色砂粒を多く含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。6 は瓦器椀で、内外面ともに横方向の粗い磨きで調整する。7 は瓦器の盤で、底部内面に暗文を施す。胎土は金雲母、白色砂粒を少量含むが、緻密で、色調は灰色を呈する。上層より出土した 44 と類似し、同一個体と考えられる。8~13 は白磁である。8 は碗Ⅱ類、9 は碗Ⅳ類、10 は碗Ⅴ -4 類、11 は皿Ⅲ類で内面見込み部分の釉を環状に掻き取る。12 は碗Ⅴ類の高台部片で周縁部を部分的に打ち欠いた痕跡が残り、瓦玉の製作途中と考えられる。高台内に墨書が残る。13 は碗XⅢ類で、内面に箆描き文を施す。14 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ -6a 類の口縁部片である。15 は瓦玉で、平瓦片の周縁部を打ち欠いて整形したものである。色調は浅黄橙色を呈し、6.0g を量る。16 は管状土錘で、3.88g を量る。17 は安山岩製の敲き石で大部分が欠損する。側面に敲打痕が残る。18 は陶質の丸瓦で、にぶい褐色、部分的に暗灰色を呈する。玉縁部の凸面はナデを施し、凹面には細かい布目が残る。19 は鉄釘で、断面は方形、頭部は「L」字状に短く折れる。20 は直径約 6.0cm を測る環状の鉄製品である。断面は直径約 1.0cm の円形である。

21~37 は掘方から出土した遺物である。21~25 は土師器である。21・23 は回転糸切り底の小皿で復元口径は 8.6cm、9.2cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。22 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 9.0cm、外底部に板状圧痕を有する。24 は椀の底部片で、外面は刷毛目調整ののち横方

向に、内面はナデ調整の後、斜め方向に粗い磨きを施す。25 は甑の把手で、上部に貫通しない切れ目が入る。白色砂粒、雲母を含み、色調は浅黄橙色を呈する。26 は青白磁の小壺である。口縁端部は丸く仕上げる。肩部は横方向の凸線が 1 条、そこから底部にかけて縦方向の沈線が入る。27~30 は白磁で、27 は碗Ⅴ類、28 は碗Ⅴ -2b 類、29 は皿Ⅶ-2a 類、30 は碗Ⅳ類である。31 は輪花を有する青白磁碗で、やや青緑がかった灰白色の釉がかかる。32~34 は陶器である。32 は小壺の口縁部片で、灰色 ~ 橙色の胎土に透明釉が薄くかかる。33 は無釉陶器の蓋で、返りを有する。胎土は白色砂粒、金雲母を含み、内外面ともに橙色である。34 は底部片で、底径 11.6cm を測る。胎土は粗く、白色砂粒、黒色粒、石褐色粒を多く含む。胎土の色調は灰褐色、釉薬は茶褐色、露胎は暗赤褐色を呈する。35 は白磁の瓦玉で、碗Ⅳ類の高台を丁寧に打ち欠いて円盤状に整形する。重さは 91.60 をである。36 は管状土錘で、7.94g を量る。37 は土玉である。直径は約 2.5cm、重量は 13.32g を量る。白色砂粒を含み、にぶい橙色を呈する。

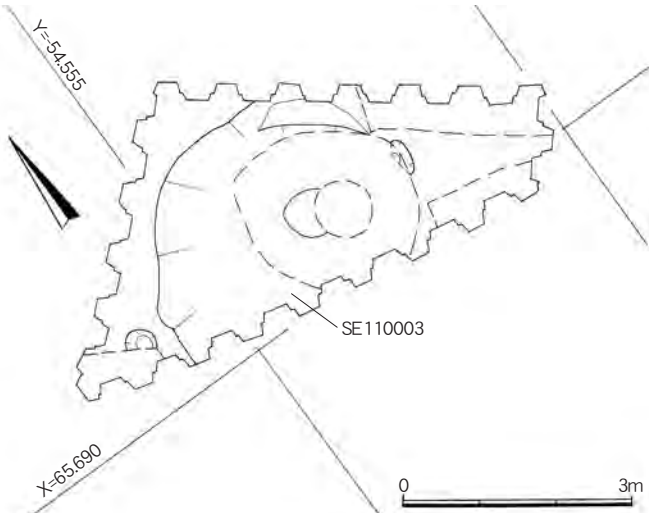


Fig.7　第 2 面全体図（1/100）

38~68 は上層の廃棄後の埋土から出土した遺物である。38~41 は土師器である。38・39 は回転糸切り底の小皿で復元口径は 9.0cm、9.4cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。40 は高台付椀の底部片である。41 は丸底坏で、口径は 15.5cm を測り、内外面ともにナデで調整し、外底部には指オサエが残る。口縁部には煤が付着しており、灯明皿として利用している。42・43 は瓦器椀で、断面三角形の低い高台を貼付する。口縁は直線的に開き、端部は丸くおさめる。体部内外面に横方向の粗い研磨を施す。

Ph.9　2 面全景（北東から）

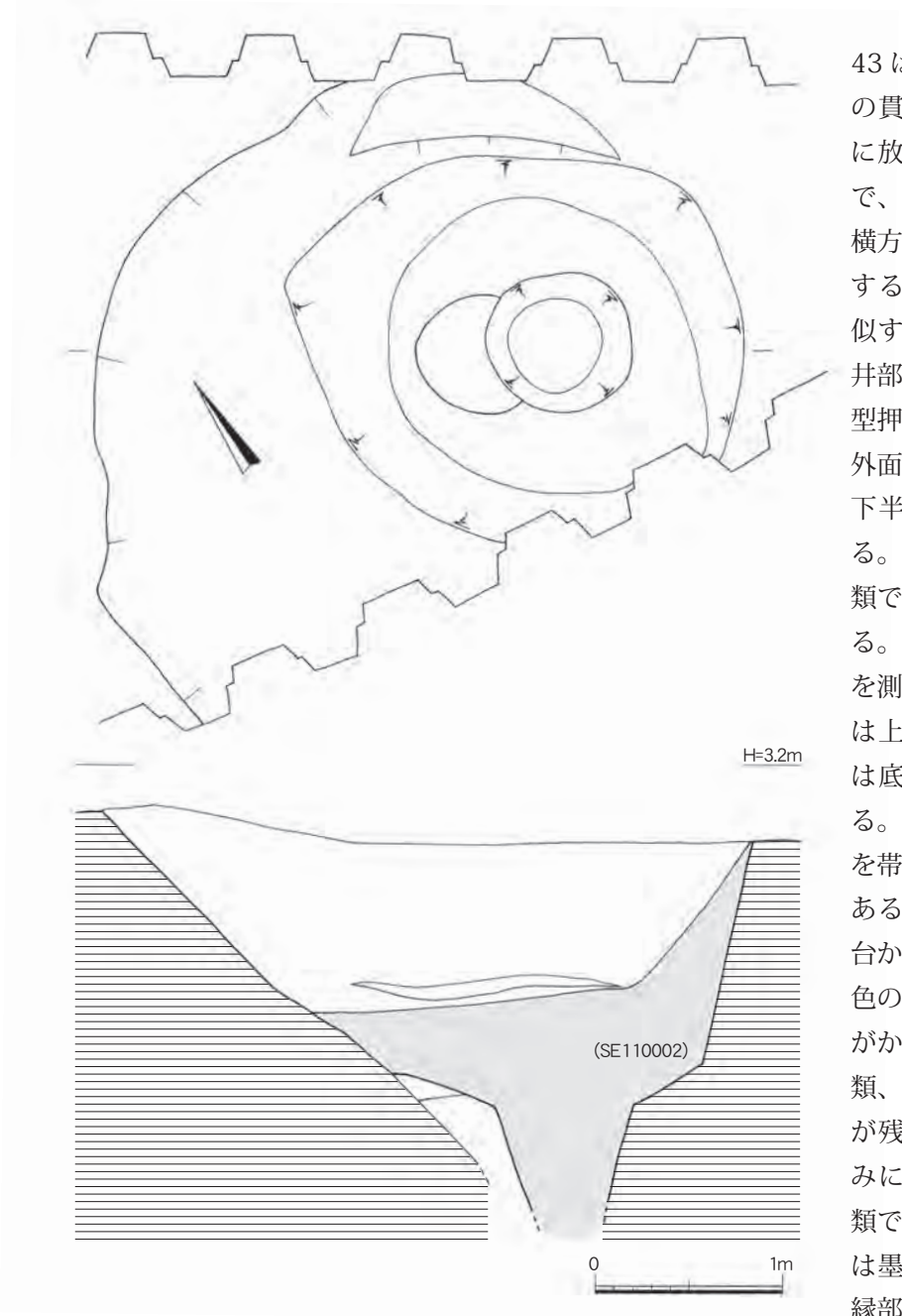
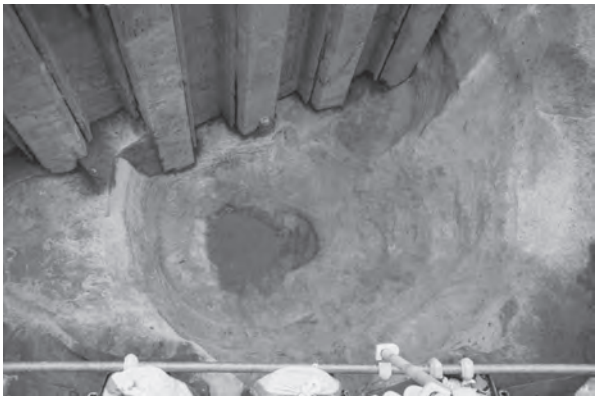


Fig.8　SE110003 実測図（1/40）



Ph.10　SE110003（北東から）

43 は高台内中央部に直径 3.0mm 程度の貫通しない穿孔を有し、それを中心に放射状の沈線を刻む。44 は瓦器の盤で、底部内面に暗文を施す。体部外面は横方向の削りののち斜方向のナデで調整する。胎土・色調ともに前述の 7 に類似する。45 は青白磁の合子の蓋で、天井部には陽刻による花文、体部外面には型押しにより文様を施す。体部内面から外面の体部下半以下は露胎であり、体部下半に目跡が残る。46~55 は白磁である。46・47 は皿Ⅵ-1a 類、48 は皿Ⅲ類で内面見込み部分の釉を環状に掻き取る。49 は広東系の白磁碗で、直径 5.0cm を測る小振りで高さを持つ高台から体部は上方に直線的に立ち上がる。外面には底部と体部の境に沈線を 1 条巡らせる。乳白色の胎土に化粧土を施し、青味を帯びた釉薬がかかる。高台内は露胎である。50 は碗の底部片で、高く細い高台から体部は内湾気味に立ち上がる。白色の緻密な胎土にやや青味を帯びた釉薬がかかる。51 は碗Ⅴ-2a 類、52 は碗Ⅳ類、53 は碗の底部片で見込みには目跡が残る。54 は碗Ⅳ類の底部片で、見込みにヘラの痕跡が残る。55 は碗Ⅵ-1b 類で内面に短い櫛目文を施す。高台内には墨書が残る。56 は無釉陶器の壺の口縁部片で、色調は茶褐色を呈する。胎土は赤褐色、黒色、白色砂粒を多く含む。57 は越州窯系青磁の底部片で、見込みと高台に目跡が残る。58 は無釉陶器の鉢で、口縁部内面には 2 条の突起を有する。胎土は大粒の白色砂粒を多く含み、色調は暗紫灰色、小豆色を呈する。59 は白磁の合子の身で、体部内面上半から口縁部外面にかけてと高台内は露胎である。淡黄色の胎土に淡白色の釉がかかる。60 は東播系須恵器の鉢で、復元口径は 30cm を測る。内底部には使用痕

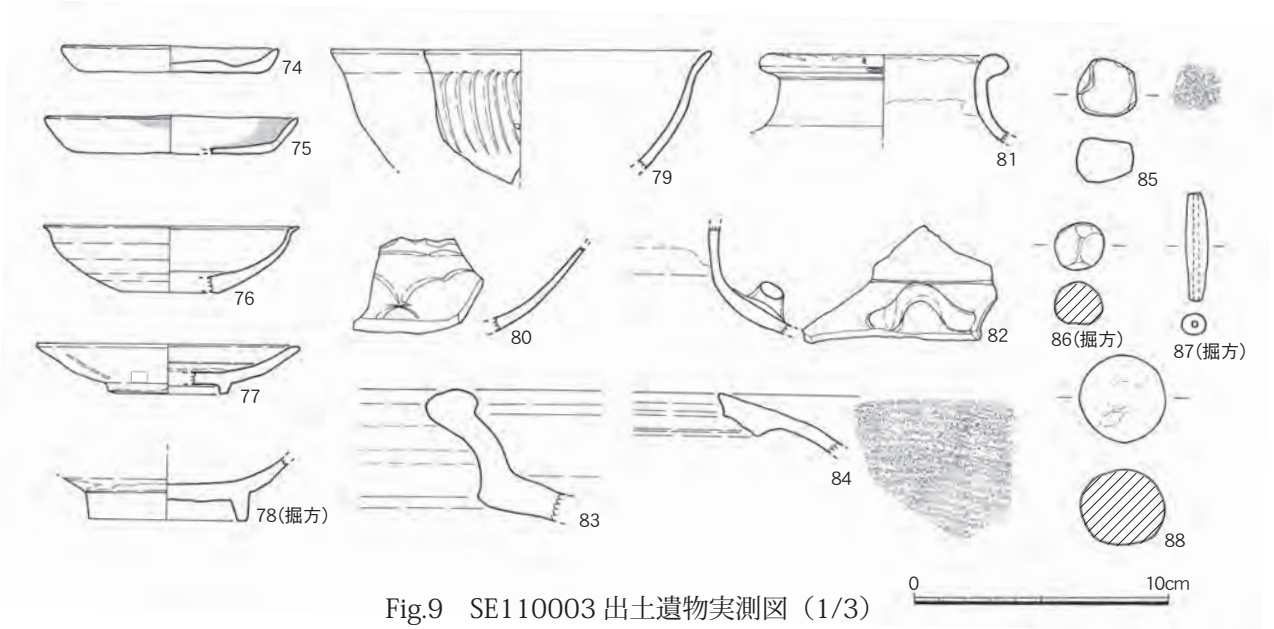


Fig.9　SE110003 出土遺物実測図（1/3）

が残る。61 は瓦玉で、白磁碗Ⅴ類の高台を丁寧に打ち欠いて円盤状に整形する。重さは 85.46g を量る。62・63 は弥生土器である。62 は畿内系の二重口縁壺の口縁部片で、内外面ともに磨きで調整したのち、口縁部内面に櫛描波状文を施す。胎土に金雲母、白色砂粒を含み、色調は明橙色を呈する。63 は大甕の胴部片である。突帯に刻目を施し、内外面はナデで調整する。64~67 は石製品である。64 は滑石製の石鍋の口縁部片で、外面には多量の煤が付着する。65 は滑石製の錘で、約 1/3 を欠損する。深さ 3~8mm の溝が中央を一周するよう刻まれる。また、A では上下にも僅かな抉りが入れられており、十字に緊迫して使用されたと推測できる。重さは現存で 100.90g である。66 は石球である。砂岩製で、赤褐色を呈する。丁寧に整形され、直径は 1.8cm 前後を測り、重さは 6.01g である。67 は滑石製の石鍋の再利用品で、中央に直径 0.7cm の穿孔を有する。137.77g を量る。68 は瓦質の丸瓦である。凸面の玉縁部は横方向の強いナデを施す。凸面胴部は縄目叩きの後、部分的にナデ消す。凹面には細かい布目が残る。他に白磁碗Ⅷ類や弥生土器・土師器の細片、鉄器、鉄滓、炉壁が出土し、井戸の時期は 12 世紀中頃から後半と考えられる。

（2）土坑（SK）

SK110001（Fig.6　Ph.7）　調査区東端に位置し、北側・南側は調査区外へ延びる。円形の平面プランを呈し、直径約 1.0m を測る。断面形は逆台形をなす。深さは 25cm を測り、覆土は炭化物を含むにぶい茶褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.6　Ph.8）　69 は土師器の丸底坏で、口径は 14.7cm を測り、内外面ともにナデで調整し、外底部に板状圧痕を有する。70 は白磁碗Ⅴ -2a 類の口縁部片、71 は白磁碗Ⅳ類の瓦玉で、高台とその周辺を丁寧に打ち欠いて円盤状に整形する。重さは 96.92g を量る。72 は滑石製の円盤状製品、直径約 2.5cm、厚さ 1.7cm を測り、重さは 7.6g である。上下面と側面を丁寧に磨いており、擦痕が残る。73 は滑石製の石鍋の再利用品であり、石鍋表面のノミ痕を残す。直径約 4.4cm、厚さ 2.2cm を測り、重さは 86.23g である。内面中央部には径 0.8cm の窪みがあり、不定方向の刻みが入る。全面丁寧に磨かれ、擦痕が残る。土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

3）第 2 面の調査（Fig.7　Ph.9）

第 2 面は黄褐色シルト層の上面、標高 3.3m で検出した。検出した主な遺構は井戸 1 基、柱穴である。

（1）井戸（SE）

SE110003（Fig.8　Ph.10）　調査区中央に位置し、東側はSE110002に削平され、南側は調査区外へ延びる。西側掘方と井側のみを検出した。掘方の復元直径は約3.5mを測り、掘方は緩やかな傾斜で掘削され、井側へ至る。標高1.4m付近で復元直径60cmを測る井側を確認した。木質等は遺存していない。SE110002同様、標高0.9m付近より湧水し、それ以上掘削することはできなかった。

出土遺物（Fig.9）　74・75は回転ヘラ切り底の土師器小皿で、復元口径は8.6cm、10.0cmを測る。74は外底部に板状圧痕を有する。75は燈明皿として使用されており、内面底部と口縁の一部に煤が付着する。76~79は白磁である。76は皿Ⅳ-2a類、77は皿Ⅲ類で内面見込み部分の釉を環状に掻き取る。78は碗Ⅴ類の底部片、79は碗Ⅴ-2b類で外面に縦箆花弁文を施す。80は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の胴部片で、内面には劃花文が描かれる。81~84は陶器である。81は施釉陶器の壺で、口縁端部は無釉で、目跡が残る。黄灰色の緻密な胎土に茶褐色の釉がかかる。82は耳壺Ⅲ類で、横耳を貼付した肩部の破片である。灰黄褐色の胎土に黄褐色の釉がかかる。83は短頸甕の口縁部片である。白色砂粒を多く含む灰褐色からにぶい褐色を呈する胎土に緑灰色から黄白色の釉がかかる。84は無釉陶器の頸無壺の口縁部片である。胎土は白色砂粒を多く含み、にぶい赤褐色から黒褐色を呈する。85は瓦玉で、瓦質の平瓦片の周縁部を打ち欠いて整形したものである。布目の痕跡が残る。色調は灰色を呈し、重量は9.11gである。86は石球である。滑石製で、丁寧に整形される。直径は1.9cm前後を測り、重さは9.32gである。87

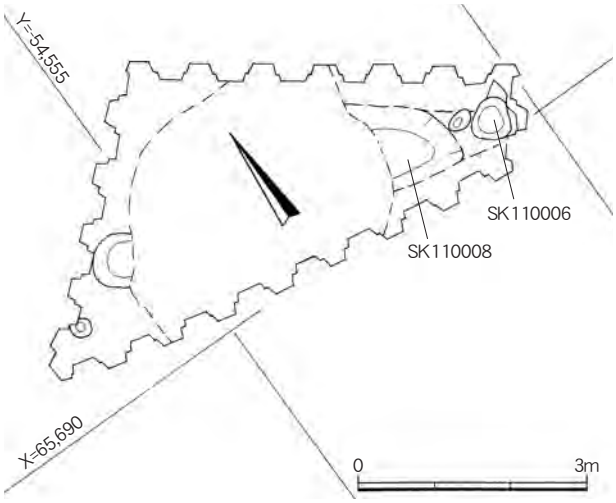


Fig.10　第3面全体図（1/100）

Ph.11　3面全景（北東から）

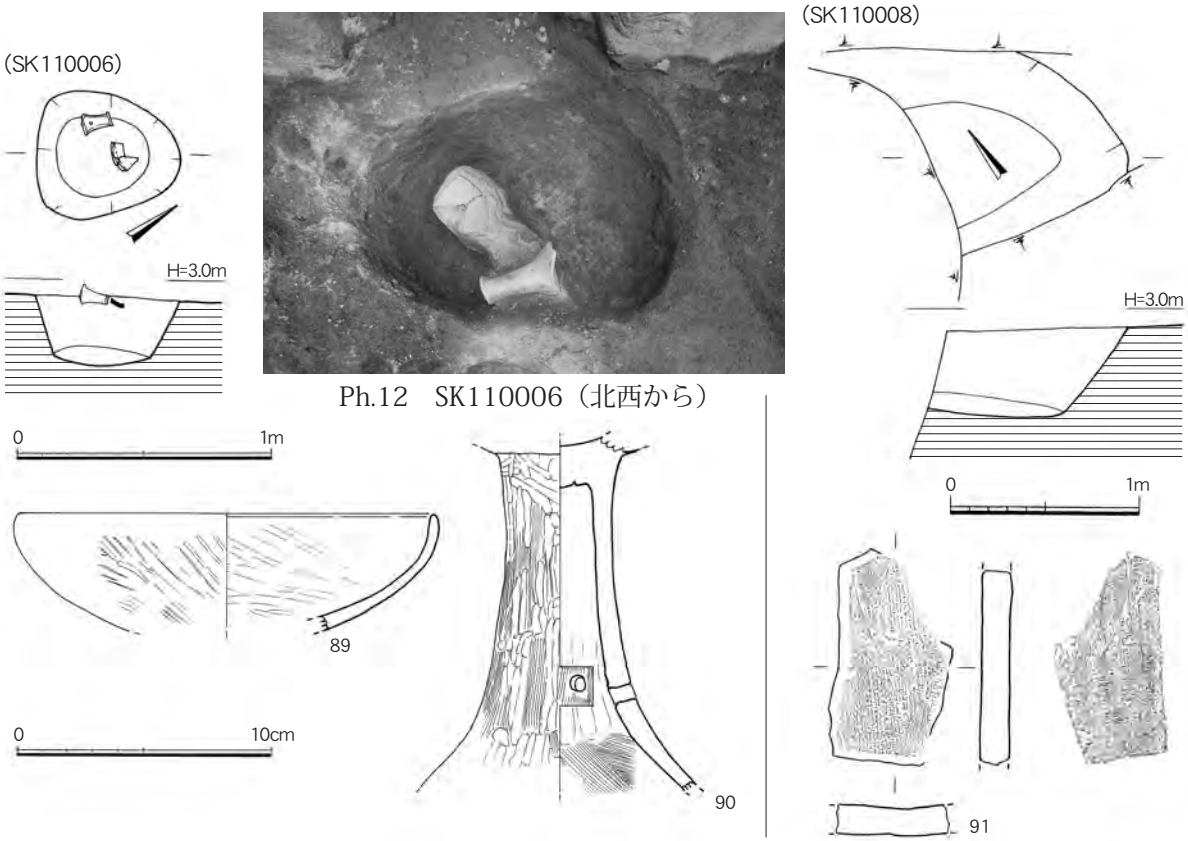


Fig.11　SK110006・110008 実測図（1/30・1/40）および出土遺物実測図（1/3）

は管状土錘で、3.14g を量る。88 は砂岩製の石球で、直径は約 3.4cm、重量は 44.1g である。丁寧に磨かれる。他に越州窯系青磁、鉄釘、鉄滓、炉壁が出土し、井戸の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

4）第 3 面の調査（Fig.10　Ph.11）

第 3 面は黄褐色砂の砂丘上面、標高 3.0m の平坦面で検出した。検出した主な遺構は土坑 2 基、柱穴である。

（1）土坑（SK）

SK110006（Fig.11　Ph.12）　調査区東端に位置する。楕円形の平面プランを呈し、長径約 0.6m、短径 0.5m を測る。断面形は逆台形をなす。深さは 25cm を測り、覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.11）　89・90 は弥生土器である。89 は畿内系の鉢で、口縁部は上方に立ち上がり、丸くおさめる。口縁部は横方向の強いナデで調整される。内面には横方向のナデが施され、工具の当て具痕が残る。90 は高坏の脚部片で、裾部は大きく開く。穿孔は脚下位に 3 カ所あるが、等間隔ではない。外面は縦方向の刷毛目調整ののち、部分的に研磨を施す。内面の脚上半部はナデ、下半部は刷毛目調整である。これらの出土遺物から土坑の時期は弥生時代終末と考えられる。

SK110008（Fig.11）　調査区東側に位置する。西側は SE110002 に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径約 0.9m 以上、短径 1.1m を測る。断面形は逆台形をなす。深さは 45cm で、覆土は灰褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.11）　91 は土師質の平瓦である。凹面には布目が認められ、凸面には縄目叩きを施す。他に白磁碗、施釉陶器の破片、弥生土器、土師器が出土する。遺構の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

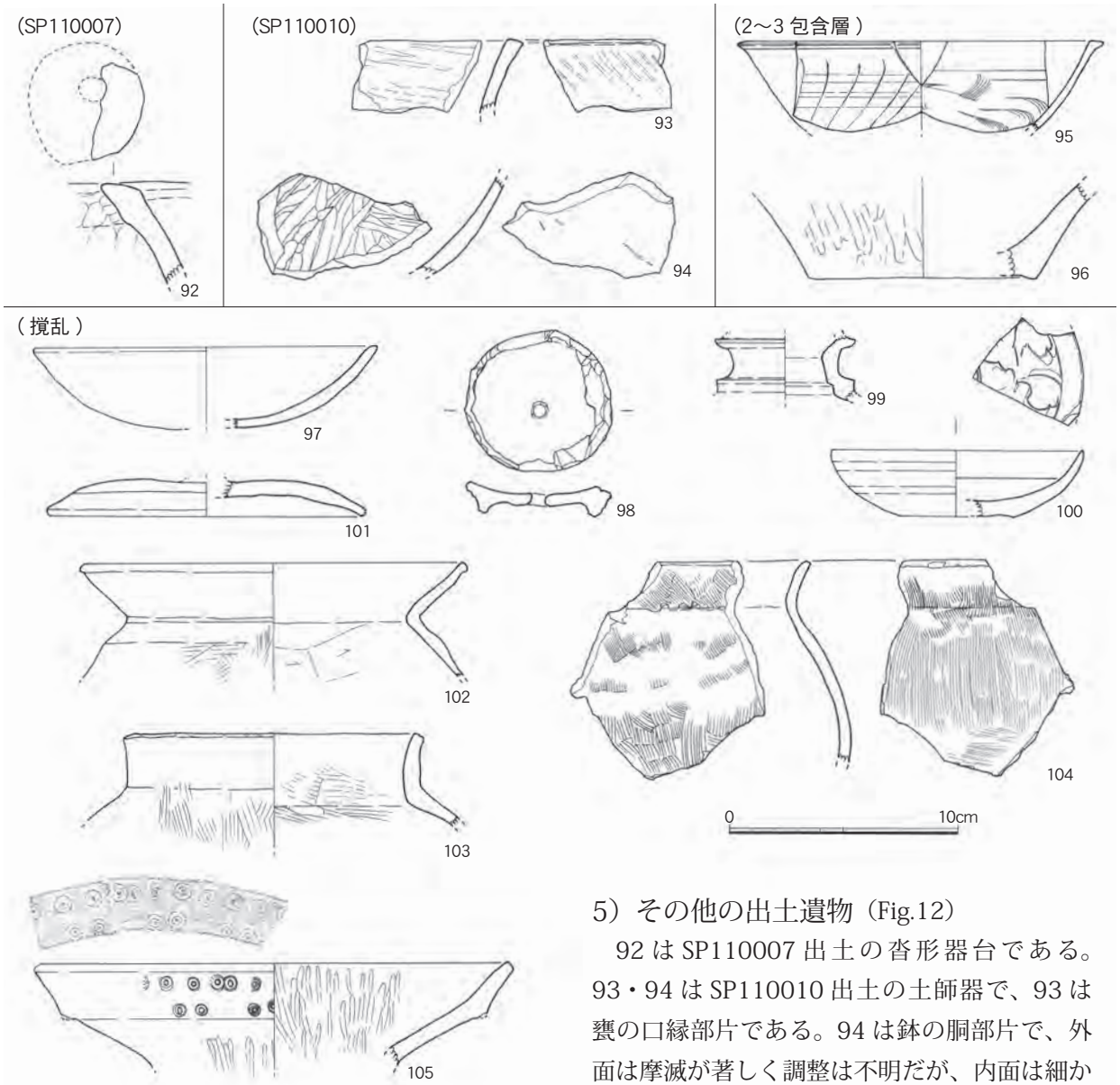


Fig.12　撹乱・その他出土遺物実測図（1/3）

5）その他の出土遺物（Fig.12）

92 は SP110007 出土の沓形器台である。93・94 は SP110010 出土の土師器で、93 は甕の口縁部片である。94 は鉢の胴部片で、外面は摩滅が著しく調整は不明だが、内面は細かい磨きが施される。95・96 は 2~3 面の包含層から出土した。95 は白磁碗Ⅴ -4c 類、96 は弥生土器の壺の底部片で、金雲母と白色砂粒を含み、外面は明橙色を呈する。97~105 は撹乱から出土した。97 は丸底坏で、外底部に板状圧痕を有する。98 は土師器椀の高台部周縁を打ち欠いて整形した瓦玉である。底部中央には径 0.6cm の穿孔を有する。40.13g を量る。99 は白磁小壺の頸部片である。白色の胎土に明緑色の釉がかかり、細かい貫入がみられる。100 は白磁皿Ⅵ -2a 類である。101 は須恵器の坏蓋で、天井部は回転削りののちナデで調整する。102 は布留系の甕の口縁部片、103・104 は弥生土器の短頸壺、105 は畿内系の二重口縁壺の口縁部片である。内外面ともに縦方向の細かい磨きを行い、口縁外面には 2 段の竹管刺突文を施す。胎土に金雲母を多く含み、色調は淡橙色を呈する。

6）小結

11 区は砂丘頂部から東側へ徐々に傾斜する緩斜面に位置する。調査区中央に 2 基の井戸が掘削され、調査区の大半を占める。井戸は 12 世紀中頃から後半にかけてのもので、特筆すべきとことして、井戸 SE110002 の井側内からほぼ全身のイヌの骨が出土した。祭祀に関わるものと考えられる。他は、弥生時代終末、中世の土坑、ピットを検出したに留まる。なお、瓦質の盤（7・44）は内面に規則的な暗文を施し、あまり例をみない。また、土錘、石球、瓦玉が比較的多く出土した。

13. 12 区の調査

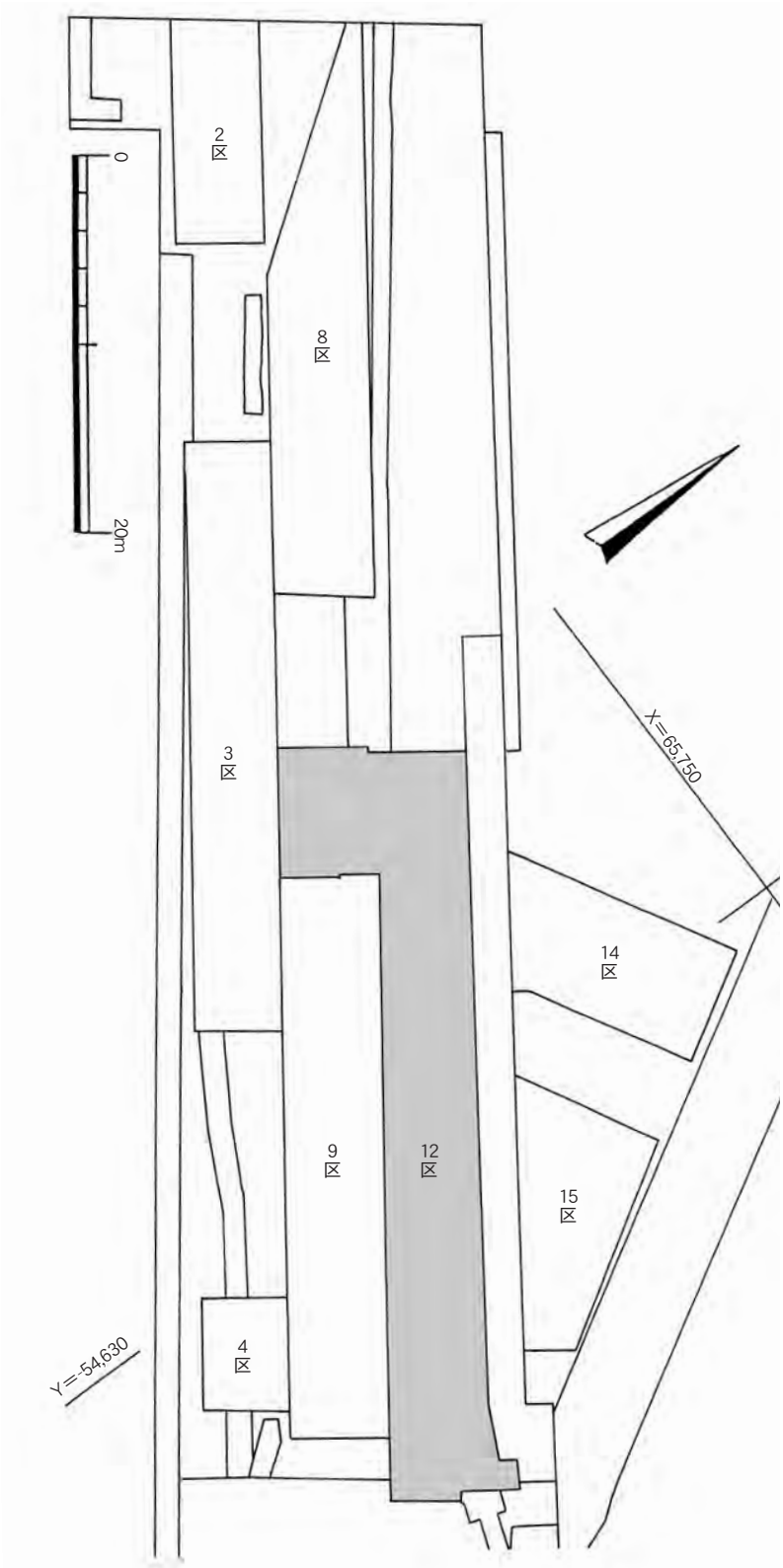


Fig.1　調査区位置図（1/400）

1）調査の概要

本調査区は事業地の西部に位置し、現況は道路で、4 車線道路の下り車線外側部分に位置する。駅舎本体工事の事前工程の山止め・覆工工事終了後、本工事、覆工板下 3.5m までの 1 次掘削開始中の調査となった。協議の結果、調査を終了している第 3 区・4 区・8 区・9 区の工事着手中の 1 ヶ月間のみ調査が可能とのことで、全長 40m、L 字の調査対象 240㎡の最下面のみの調査に絞り込んで実施することとなった。幅 3m 単位の覆工板施工後であったため、覆工板単位の幅 3m 長さ 5m の 16 ブロックに分割し、西から 1 ブロック毎順次に調査を実施し、終了した部分から工事に引き渡す段取りで実施したため、まとまった全景の撮影は不可能で、1 ブロック毎に実施したが、梁や電線が映り込み良好な写真とはなっていない。また、各ブロック間も GL-60㎝まで梁が入り横からも見通せない状態であった。

周辺は南に第 3・9 調査区が隣接する。(Fig.1)。地形的には事業地の最高所に位置し、地表高は北西で約 5.7m、40m 離れた南東で約 5.2m を測り、南東に緩く下がる。鋤取りは GL-2m あたりの地山層まで先行して全体を下げ、中央の 20m 程の範囲に茶褐色砂質土の包含層が 10~20m 程遺存したためこの部分のみ 2 面で調査を実施している(Fig.2・3)。調査は各ブロック毎に朝、覆工板を開け開始し、残土は重

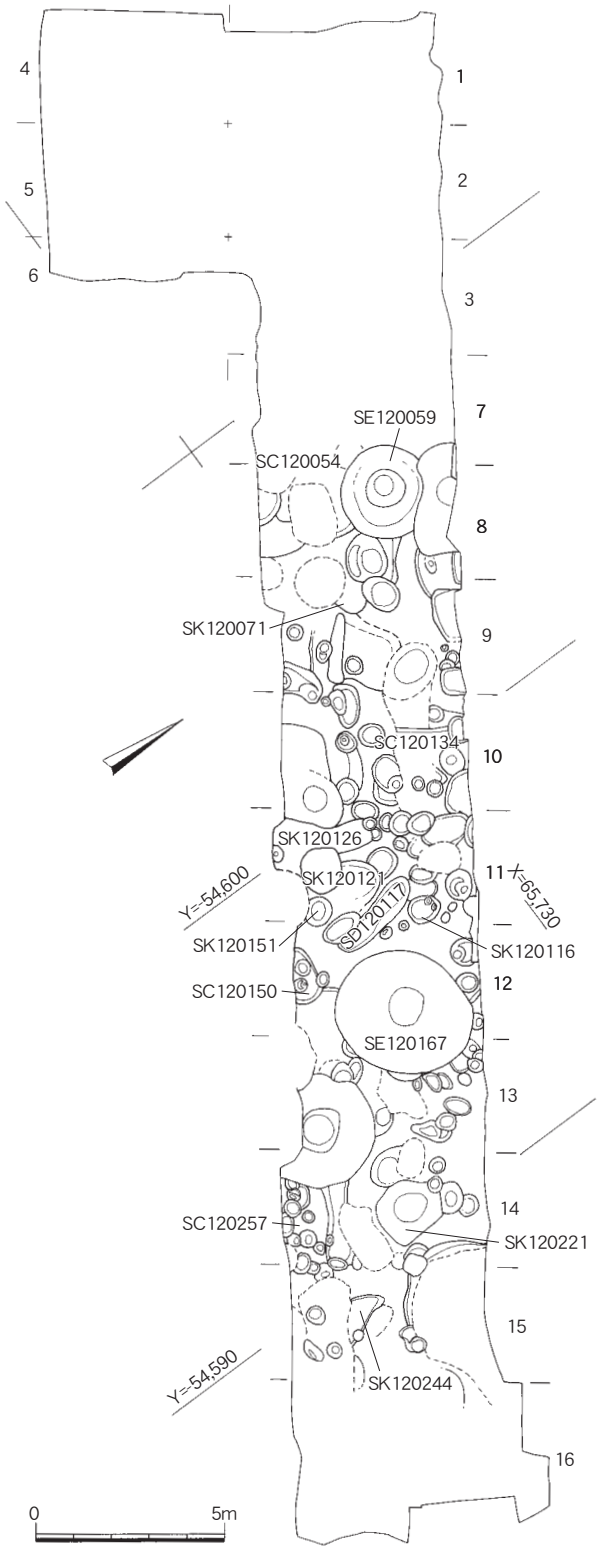


Fig.2　上面（4 面）全体図（1/200）

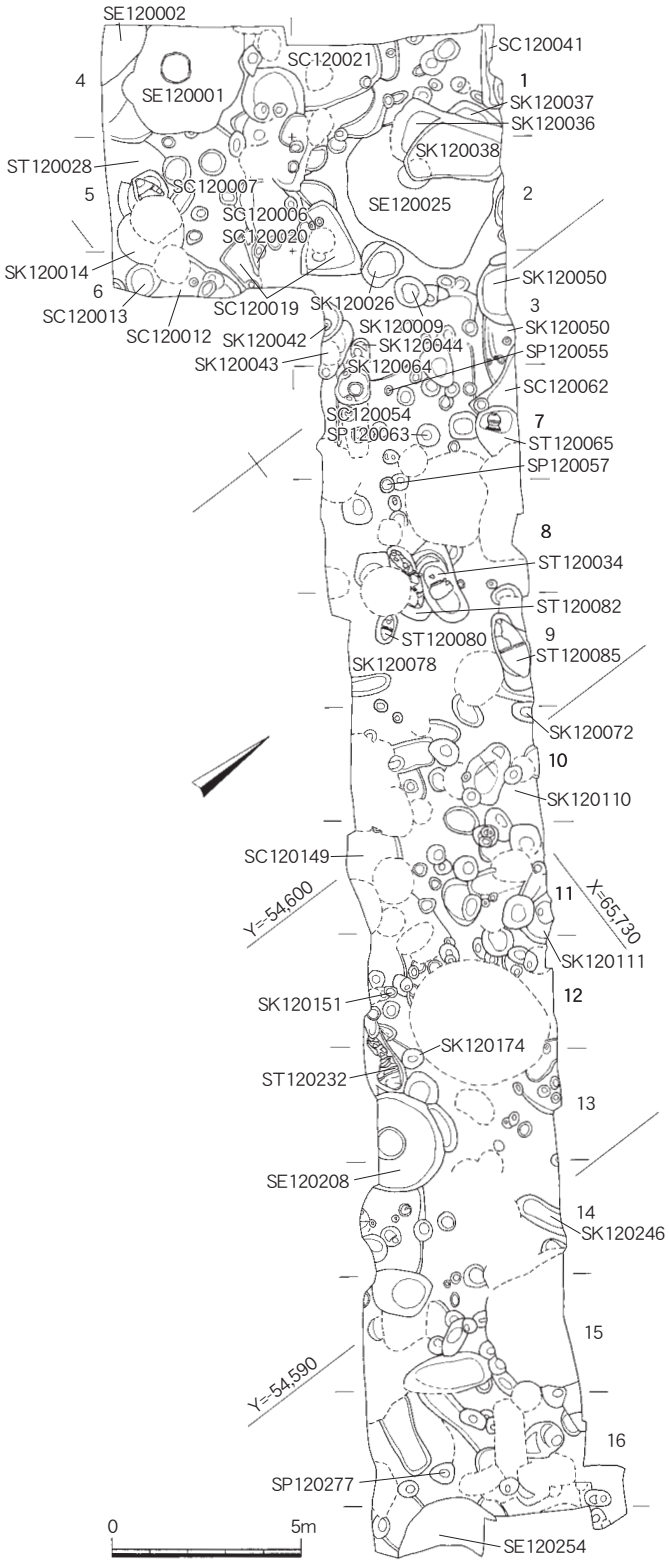


Fig.3　下面（5 面）全体図（1/200）

機のバケットに溜め、1 次掘削中の工区に流し込み、16 時過ぎには覆工板を戻す繰り返しであった。

2015 年 10 月 13 日より西端の 1 区からの調査に着手し、同 11 月 15 日に東端の 16 区の調査を完了した。調査面積は 245.38㎡で、遺物はコンテナ 82 箱分出土している。

Ph.1　調査区遠景（南から）

Ph.2　調査区位置（南から）

Ph.3　作業風景

Ph.4　作業風景

検出した主な遺構は、11 世紀後半 ~12 世紀前半の（中世 1）土坑 14 基・井戸 2 基を調査区の全面で検出した。主な遺構の約 19% を占める。土坑は 1m を越える大型のものが目立ち、ガラス製造に関係すると思われる土坑が 3 基ある。井戸は西部で 2 基検出されている。遺物は中国陶磁器を中心に、高麗無釉陶器・土師器・瓦器・石錘・土錘の他ガラス製造関係の遺物が 3 遺構から検出されている。

12 世紀中頃 ~13 世紀前半の（中世 2）の遺構は土坑 5 基・井戸 5 基で主な遺構の約 10% を占めるが、ともに、砂層上面での掘削であるため、浅い遺構は遺存していない。土坑は前代に比べ小型で深さも 50㎝未満で浅い。ガラス製造に関連する炭粒・灰を廃棄したものも無い。井戸は調査区内の全域に 7~13m 程の間隔をとって均等に分布する。遺物は中国陶磁器を中心に、高麗無釉陶器・十瓶山焼・土師器・石錘・土錘の他ガラス製造関係の遺物が 7 遺構から検出されている。内、4 基は井戸内からの出土で前代からの混入の可能性が高い。他に磁州窯白地鉄絵翡翠釉梅瓶蓋を検出している。

古代の遺構は第 2 面の土坑 SK120690 の 1 基のみで、集落の中心から外れている。遺物は須恵器・土師器・新羅焼の他、土馬、鴻臚館式丸瓦瓦当小片が出土している。

古墳時代後期も少なく、土坑 2 基のみ検出している。土坑 SK120078 からは滑石製勾玉と分銅形垂飾が出土しており、土壙墓の可能性がある。

古墳時代前期は、竪穴住居 8 軒・土坑 21 基・溝 2 条を検出しており、主な遺構の約 33% を占め目立ち、集落の中心部を成している。竪穴住居は西部を中心に中央部から分布しており、方形プランで東西方向に主軸をとるものが多い。柱穴は 1m 近い大型のものが多く、掘立柱建物の可能性もある。遺物は近畿・山陰・吉備系の外来土器や 12 点の鉄器が遺構内から出土し目立つ。他に碧玉製管玉・水銀朱

Ph.5　④・⑤ブロック全景（西から）

Ph.6　⑥ブロック全景（西から）

Ph.7　①・②ブロック全景（西から）

Ph.8　③ブロック全景（東から）

Ph.9　⑦ブロック全景（東から）

Ph.10　⑧ブロック全景（南から）

焼成甕が出土している。飯蛸壺・土錘の漁撈具の出土も目立つ。

弥生時代終末期は、竪穴住居 5 軒・土坑 18 基・溝 2 条を検出しており、主な遺構の約 28% を占め前期とともに多く、集落の中心域を成している。竪穴住居は前代の分布とほぼ重なり、西部を中心に中央部から分布しており、方形プランである。SC120054 からは完形に近いジョッキ形土師器が出土している。柱穴も同様に 1m 近い大型のものが多い。遺物は近畿・吉備・肥後系の外来土器と 10 点の鉄器鉄片の出土が目立つ。

弥生時代中期は前半期の成人甕棺 3 基、中頃の成人甕棺 2 基小形棺 2 基を検出した。幅 10m 程の範囲に東西方向に軸をそろえて分布している。

Ph.11　⑧・⑨ブロック全景（南から）

Ph.12　⑩ブロック全景（南から）

Ph.13　⑪ブロック下面全景（南から）

Ph.14　⑫ブロック全景（南から）

Ph.15　⑬ブロック全景（南から）

Ph.16　⑭ブロック全景（南から）

他に弥生後期の器台・支脚を数点と、縄文晩期夜臼式浅鉢と弥生前期木葉圧痕底部の甕小片を検出している。

13 世紀以降の遺構は、近世以外は検出されない。遺物は志野焼鉄絵皿の小片を検出している。

2）中世の調査（1）

（1）井戸

SE120002（Fig.4）　調査区北側で検出された。調査区外に遺構が広がるため、深さ 0.6m 程掘り下げたが、安全面を考慮し、それ以上の掘削は行っていない。規模は不明である。

出土遺物（Fig.5）　1 は白磁小碗である。底部付近は露胎となる。釉色は灰白色を呈する。器高 4.0cm、口径 13.4cm を測る。2 は筑前型瓦器碗の底部である。高台は断面四角形を呈する。3・4 は土師器小皿である。底部の切り離しはヘラ切りである。器高 1.0、1.1、口径 9.4、10.0cm を測る。

SE120059（Fig.4　Ph.17・18）　調査区中央北寄りで検出された。掘方は径 2.1~2.5m の円形を呈する。深さ 1.3m まで掘り下げたが底まで達していない。標高 2.3m を測る。基底部中央に径 0.5m、高さ 0.7m の桶側の痕跡がみられた。

出土遺物（Fig.5）　5~11 は井筒、12~14 は掘方から出土した。5 は高麗青磁碗で、高台畳付に目跡が残る。釉色は灰オリーブ色を呈する。器高 5.1㎝、口径 15.0㎝を測る。6 は白磁碗で、口縁は玉縁を呈する。体部下半は露胎。釉色は乳白色を呈する。器高 6.2㎝、口径 16.4㎝を測る。7 は白磁碗を転用した瓦玉である。8~11 は土師器。8 は丸底坏で、押し出しの指頭圧痕が残る。口径 15.6㎝。9~11 は小皿で、底部の切り離しは 9・10 がヘラ切り、11 が回転糸切りである。器高 1.0~1.1、口径 9.0~9.2cm を測る。12 は高麗青磁碗である。釉色は灰オリーブ色を呈する。13 は筑前型瓦器埦である。高台は断面四角形を呈する。器高 4.9㎝、口径 17.0㎝を測る。14 は小皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 1.1㎝、口径 7.4㎝を測る。

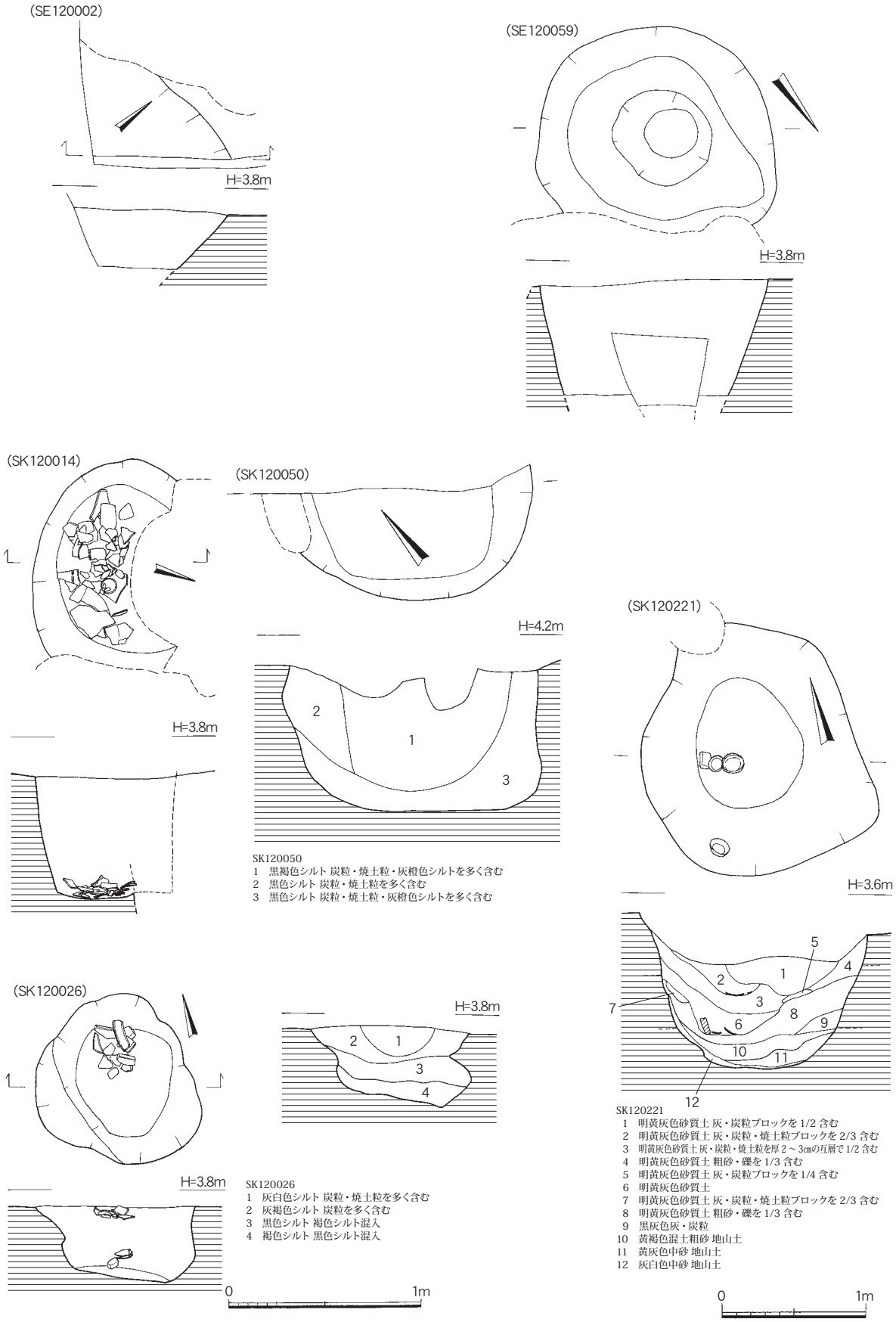


Fig.4　SE120002・120059、SK120014・120026・120050・120221 実測図（S=1/60・1/40）

Ph.17　SE120059（西から）

Ph.18　SE120059（東から）

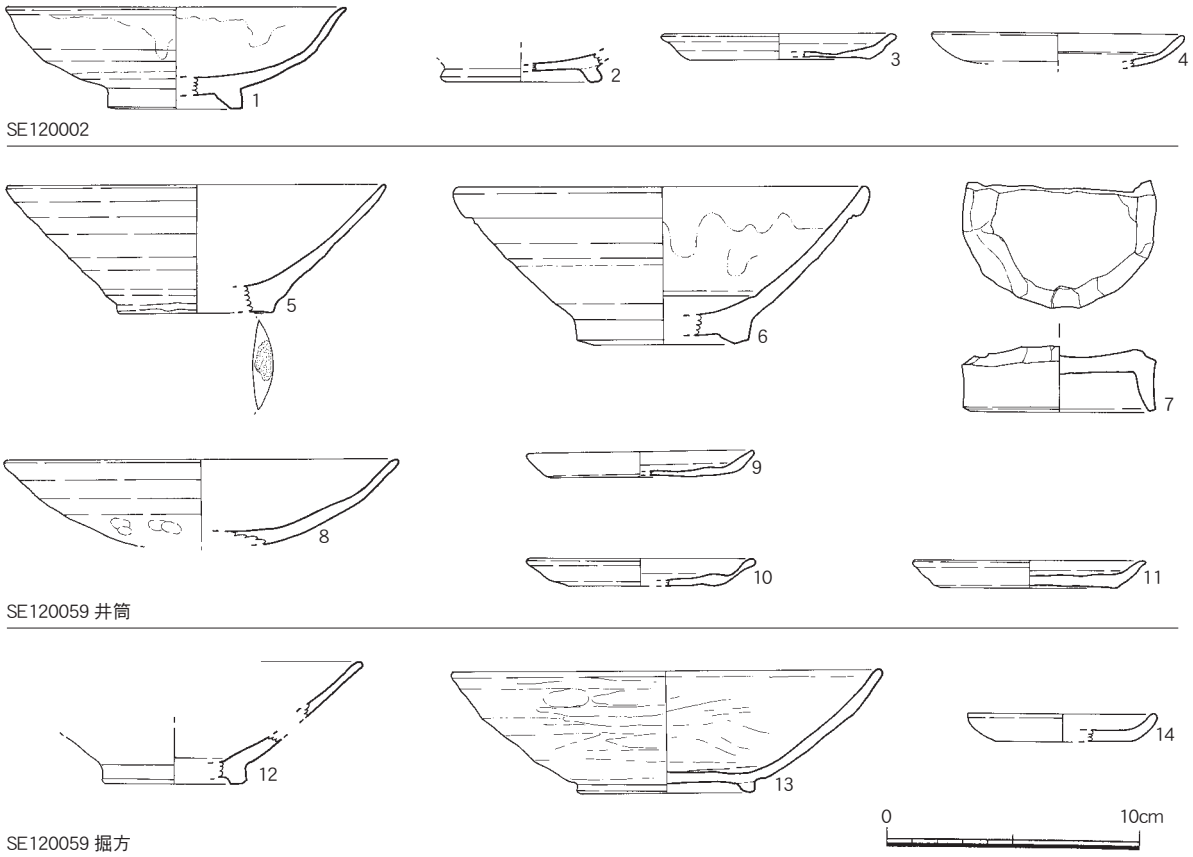


Fig.5　SE120002・120059 出土遺物実測図（1/3）

（2）土坑

SK120014（Fig.4　Ph.19~21）　調査区北側で検出された。近世井戸 SE17 に切られる。現存長約 1.5m の不整円形を呈し、深さ 0.9m を測る。土坑底面に破砕した甕棺 ST120028 の破片を敷く。

出土遺物（Fig.6　Ph.22）　15 は青磁碗で、見込みに印花文を施す。高台付近は露胎となる。釉色は灰オリーブ色を呈する。器高 7.4㎝、口径 14.9㎝を測る。16 は青白磁皿で、見込みに白胎線を施す。釉色は青みを帯びた灰白色を呈する。17 は玉縁の白磁碗で、釉色は灰白色を呈する。口径 16.0㎝を測る。18・19 は黒色土器 A 類。18 は高台付の丸底坏で、高台はハの字に開く。調整は内面に横方向のヘラミガキ、外面にナデを施す。器高 6.0㎝、口径 17.2㎝を測る。19 は埦で、高台はハの字に開く。調整は内外面に横方向のヘラミガキを施す。器高 5.8㎝、口径 14.8㎝を測る。20~32 は土師器で、20 は土師器埦。ハの字形の高台がつく。内外面に横方向のヘラミガキを施す。器高 5.6㎝、口径 15.0㎝を測る。21・22 は丸底坏で、底部の切り離しはヘラ切りである。器高 3.9、2.7㎝、口径 15.2、15.0㎝を測る。23~25 は坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 2.2~2.9、口径 12.0~12.6㎝を測る。26~32 は小皿で、26・29 の底部の切り離しはヘラ切り、27・28・30~32 は回転糸切りである。器高 1.1~1.6㎝、口径 7.8~9.2㎝を測る。33 は玉縁の丸瓦で、凸面はナデ、凹面には布目が残る。色調は灰褐色を呈する。34 は平瓦で、凸面はナデ、凹面には布目が残る。色調は浅黄色を呈する。35 は銅銭で、「祥符元寶」（初鋳年 1008 年）である。36 は土製円盤で、厚さ 0.9㎝を測る。37 は砥石で、四面が使用されている。38 は滑石製の石錘で、円形の孔が 2 カ所あけられる。447 は不明鉄器、448 は羽口である。

Ph.19　SK120014（西から）

Ph.20　SK120014 土器片敷き（西から）

Ph.21　SK120014 完堀状況（北から）

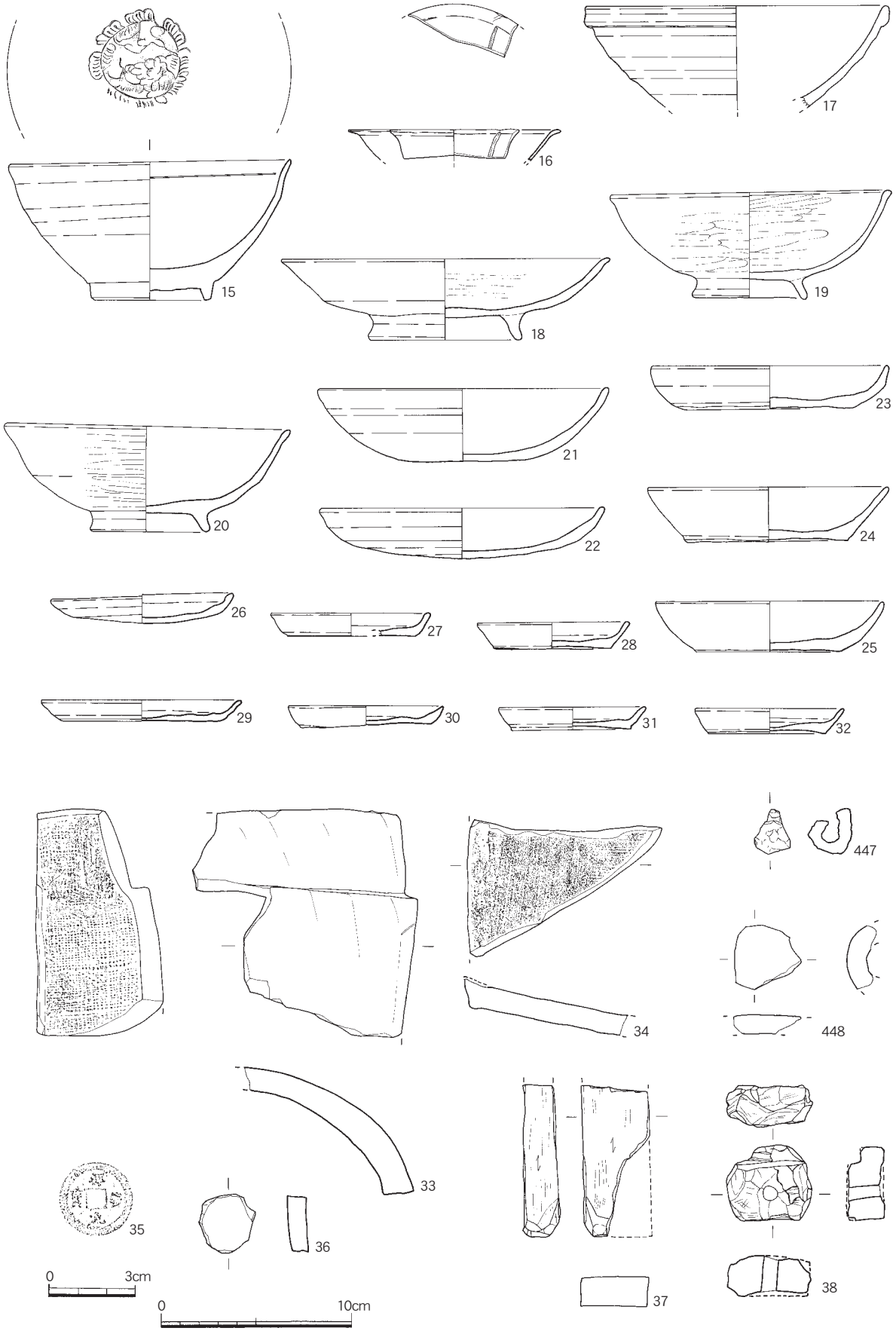


Fig.6　SK120014 出土遺物実測図（1/3・1/2）

Ph.22　SK120014 出土遺物

SK120026（Fig.4　Ph.23）　調査区北側で検出された。径約 1.2m の不整円形を呈し、深さ 0.5m を測る。土坑の上面と下層で土器が出土した。

出土遺物（Fig.7　Ph.24）　39~47 は 1 層、48・49 は 2 層、50 は 3 層、51 は 4 層で出土した。39 は玉縁の白磁碗である。40 は東播系の捏鉢である。41 は筑前型瓦器埦で、内外面に横方向のヘラミガキを施す。外面下半には指頭圧痕が残る。高台は低く、断面台形を呈する。器高 5.6㎝、口径 16.3㎝を測る。42~45 は土師器で、42 は丸底坏。底部の切り離しはヘラ切りである。器高 3.2㎝、口径 16.8㎝を測る。43・44 は坏で、底部の切り離しは 43 がヘラ切り、44 が回転糸切りである。器高 3.4、2.8㎝、口径 15.7、16.2㎝を測る。45 は小皿で、底部に板目圧痕が残る。器高 0.9㎝、口径 9.2㎝を測る。46 は丸瓦で、凸面は叩きをナデ消し、凹面は布目痕を残す。色調は橙色を呈する。47 は鏨で、長さ 6.9㎝、幅 1.7㎝、厚さ 1.0㎝を測る。49 は丸底坏で、底部の切り離しはヘラ切りである。器高 3.2㎝、口径 15.9㎝を測る。50 は丸底坏で、底部の切り離しはヘラ切りである。器高 2.8㎝、口径 16.0㎝を測る。51 は龍泉窯系青磁碗で、外面は鎬蓮弁。釉色は灰オリーブ色を呈する。

SK120050（Fig.4　Ph.25）　調査区北側で検出された。遺構は調査区外側に広がる。径約 1.7m の不整円形を呈し、深さ 0.9m を測る。

出土遺物（Fig.8　Ph.26）　52~52 は白磁碗で、52 はやや外反する端部。底部は欠損。釉色は灰白色を呈する。口径 16.2㎝を測る。53~55 は玉縁の白磁碗。体部下半は露胎。釉色は灰白色を呈する。器高 6.6~7.0㎝、口径 15.5~16.0㎝を測る。56 は白磁碗で、口縁は欠損する。釉色は灰白色を呈

Ph.23　SK120026 土層断面（北から）

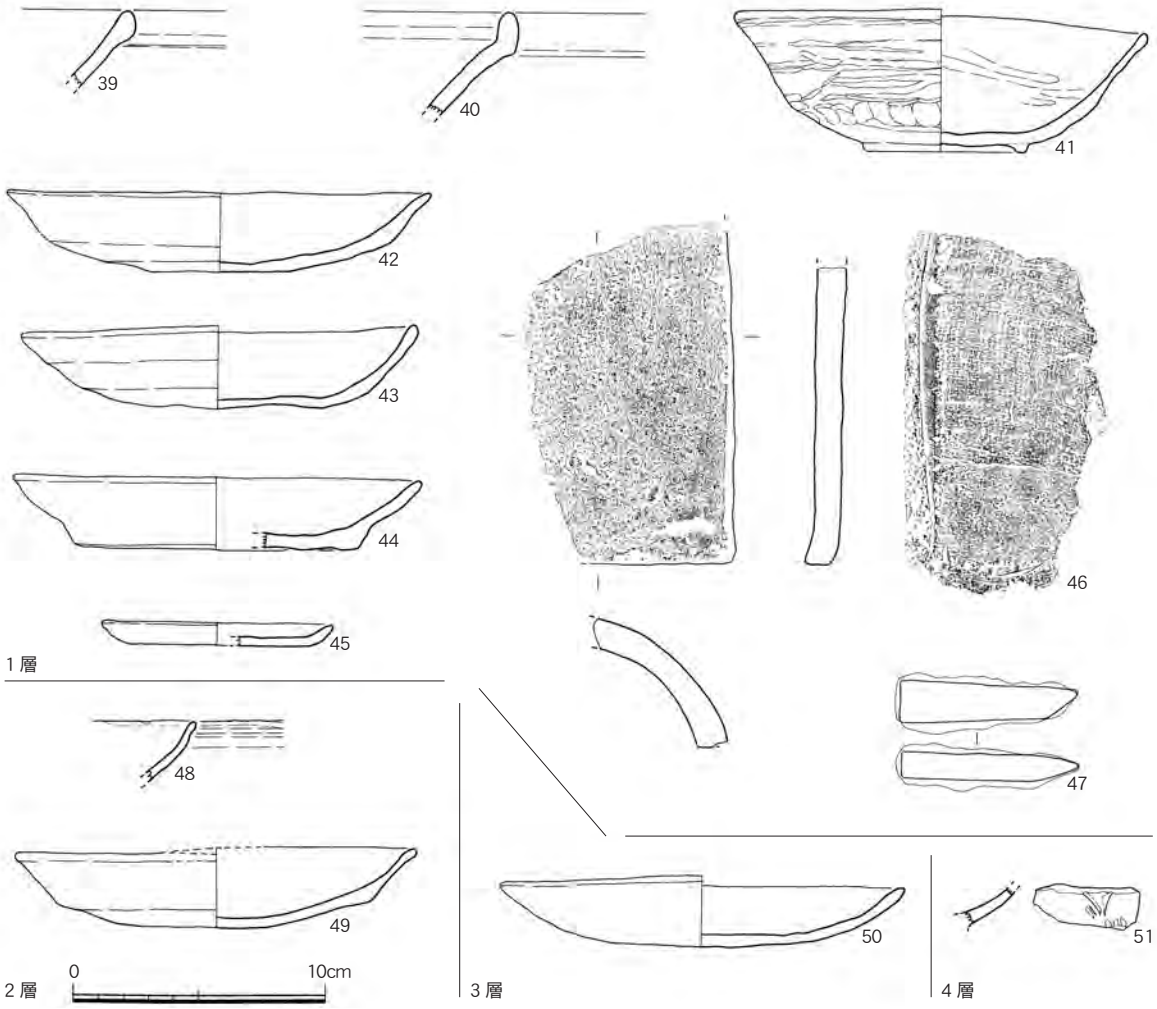


Fig.7　SK120026 出土遺物実測図（1/3）

Ph.24　SK120026 出土遺物

する。体部下半は露胎。57 は白磁小碗で、高台内側は露胎となる。釉色は灰白色を呈する。器高 3.6㎝、口径 10.2㎝を測る。58 は白磁小碗で、高台内側は釉を掻きとる。釉色は灰白色を呈する。59 は白磁皿で、見込みに櫛目文を施す。釉色は灰白色を呈する。60、61 は白磁の合子で、体部に圏線を施す。釉色は灰白色を呈する。62 は中国産の陶器捏鉢で、口縁内側に二条の突帯が巡る。外面はハケメが残る。色調は暗赤色を呈する。63~67 は土師器で、63、64 は丸底坏。底部の切り離しはヘラ切りである。器高 3.0、3.4㎝、口径 14.6、16.0㎝を測る。65~67 は小皿で、底部の切り離しはヘラ切りである。器高 0.9~1.4㎝、口径 8.4~10.2㎝を測る。68 は鉄釘で、断面方形を呈する。長さ 5.0㎝、厚さ 0.5㎝を測る。

SK120221（Fig.4　Ph.27・28）　調査区南側で検出された。径約 1.5~1.7m の不整楕円形を呈し、深さ 0.9m を測る。埋土には間層で焼土層が見られる。土坑中位で土器の廃棄が見られた。

出土遺物（Fig.9・10　Ph.29）　69~77 は白磁碗で、69、70 の口縁は直線的に伸びる。底部下半は露胎である。釉色は灰黄褐色、淡黄色を呈する。器高 5.3、5.0㎝、口径 12.4、12.5㎝を測る。69 は高台の内側に「綱」の墨書。71 の口縁は折り返して小さな玉縁状を呈する。高台畳付きから内側は露胎である。釉色は浅黄色を呈する。器高 6.0㎝、口径 12.6㎝を測る。72~76 は玉縁の白磁碗。体部下半は露胎。釉色は灰白色 ~ 浅黄色を呈する。器高 5.2~5.8㎝、口径 14.6~15.0㎝を測る。77 は底部片で、高台の内側に「綱」と花押の墨書。78、79 は白磁小碗で、口縁は輪花となる。高台内側は露胎となる。釉色は灰白色、浅黄色を呈する。器高 3.7、4.4㎝、口径 13.6、13.9㎝を測る。80

Ph.25　SK120050（南から）

Fig.8　SK120050 出土遺物実測図（1/3）

Ph.26　SK120050 出土遺物

Ph.27　SK120221 土層断面（南から）

Ph.28　SK120221（南から）

は白磁皿で、高台内側は露胎。釉色は灰白色を呈する。81 は青磁の水注で、外面には 3 条単位の圏線を施す。釉色は灰オリーブを呈する。内面は露胎。82 は中国産陶器甕蓋で、天井部に瓜蔓の摘、口縁の内側には断面三角形の受け部がつく。釉色は赤褐色を呈する。器高 6.8㎝、口径 19.2㎝を測る。83 は瀬戸の灰釉の四耳壺で、底部は平底である。釉色は灰オリーブ色を呈する。84 は中国産の陶器壷で、口縁は断面三角形を呈する。上端部に目跡。釉色はオリーブ褐色を呈する。口径 9.0㎝を測る。85 は中国産の大型壷で、口縁が内側に張り出す。釉色は灰黄色を呈する。86・87 は高麗産の無釉陶器である。86 は甕の体部で円文を施す。色調は青黒色を呈する。87 の口縁は上部に拡張する。体部は内外面に細かな格子目文の叩きを施す。外面には低い突線が巡る。88 は黒色土器Ｂ類の埦である。内外面に横方向のヘラミガキを施す。89~116 は土師器である。89~99 は丸底坏で、底部の切り離しはヘラ切りである。器高 3.0~3.9㎝、口径 13.9~15.2㎝を測る。100~116 は小皿で、底部の切り離しはヘラ切りである。器高 0.9~1.8㎝、口径 9.0~9.8㎝を測る。100 には内外面に墨書があり、内面は「あん内申　謹言　言上」、外面は人面を描く。

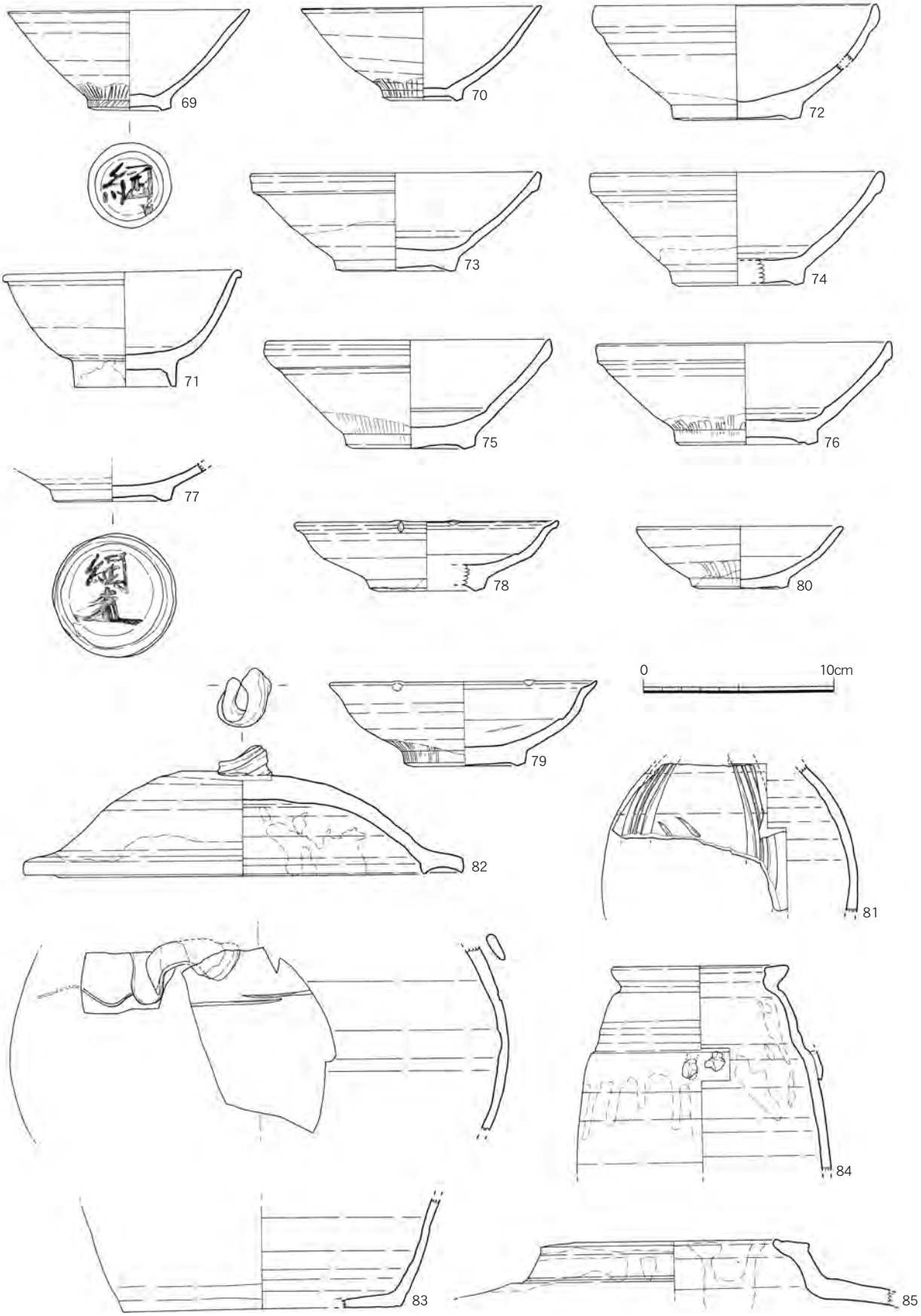


Fig.9　SK120221 出土遺物実測図 -1（1/3）

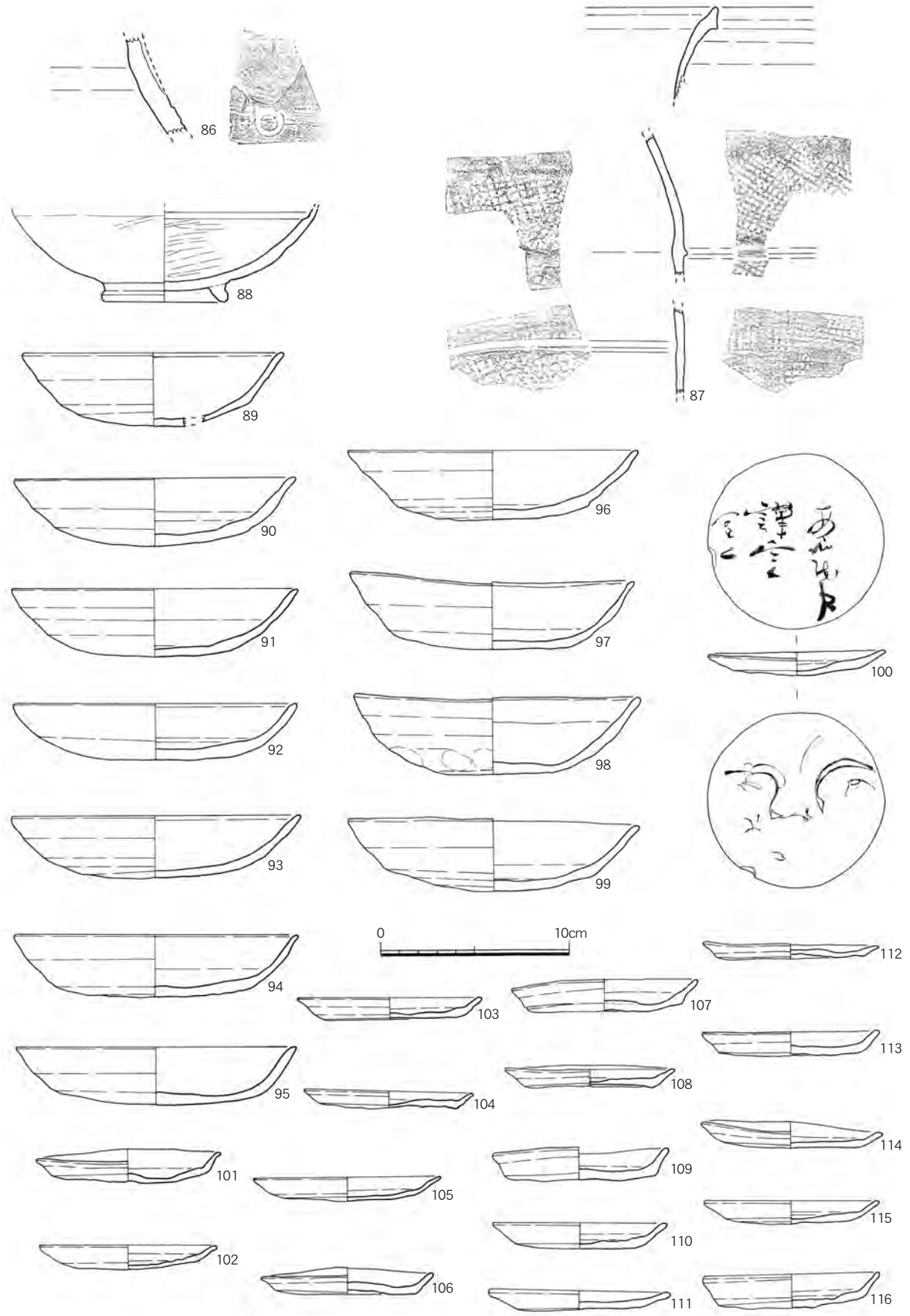


Fig.10　SK120221 出土遺物実測図 -2（1/3）

Ph.29　SK120221・120014 出土遺物

Ph.30　SK120071 坩堝出土状況

Ph.31　SK120071 坩堝

Ph.32　SK120071（東から）

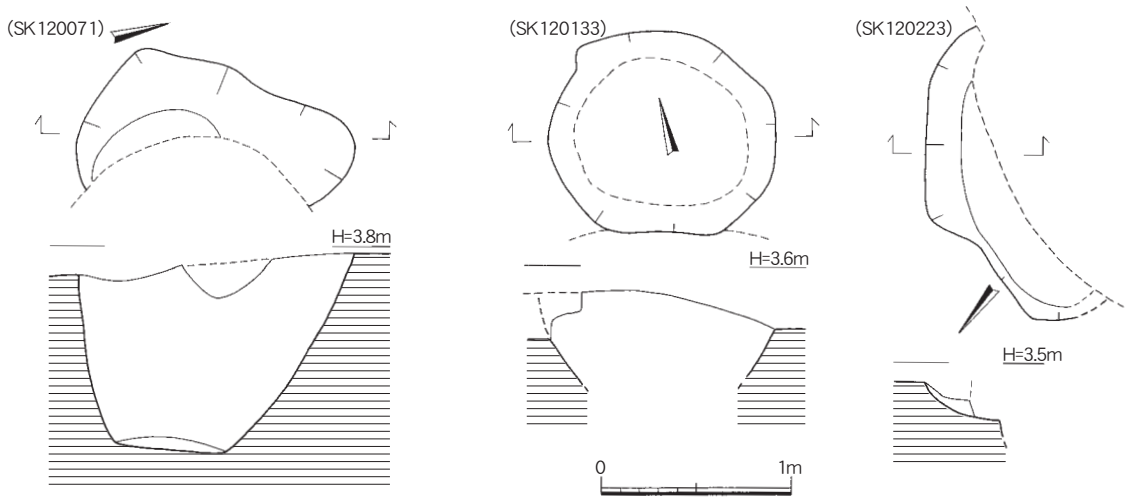


Fig.11　SK120071・120133・120223 実測図（1/40）

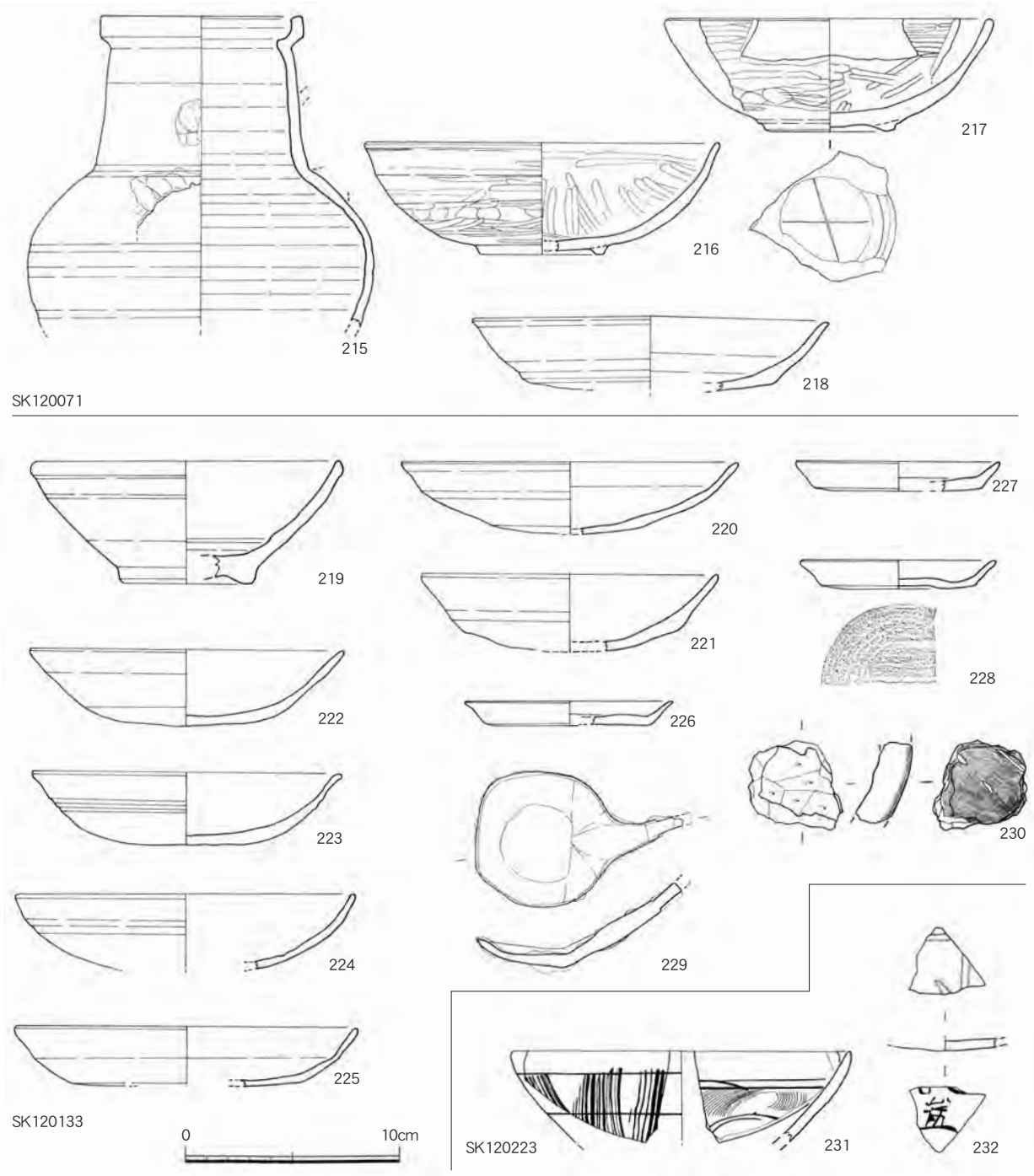
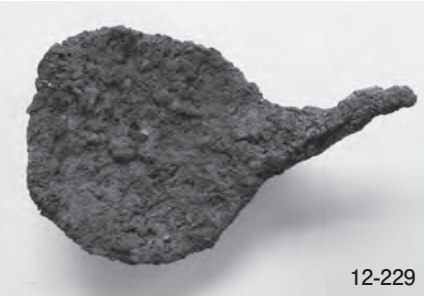


Fig.12　SK120071・120133・120223 出土遺物実測図（1/3）



Ph.33　SK120071・120133・120232 出土遺物

SK120071（Fig.11　Ph.30~32）　調査区中央で検出され、SE87 に切られる。現存長約 1.4m の不整方形を呈し、深さ 1.0m を測る。内部から坩堝が出土した。

出土遺物（Fig.12　Ph.33）　215 は中国産の陶器水注で、把手、底部は欠損する。釉色は灰褐色を呈する。口径 9.2㎝を測る。216、217 は筑前型瓦器埦である。内外面にヘラミガキを施す。高台は中央寄りに低くつく。217 は高台内側に「X」の線刻がある。器高 5.3、5.2㎝、口径 15.0、16.7㎝を測る。218 は丸底坏で、底部の切り離しはヘラ切りである。口径 16.6㎝を測る。

SK120133（Fig.11）　調査区中央南寄りで検出された。径約 1.1~1.2m の不整円形を呈し、深さ 0.5m を測る。

出土遺物（Fig.12　Ph.33）　219 は玉縁の白磁碗。体部下半は露胎。釉色は灰白色を呈する。器高 5.7㎝、口径 14.0㎝を測る。220~225 は丸底坏で、底部の切り離しはヘラ切りである。器高 2.8~3.6㎝、口径 14.0~16.2㎝を測る。226~228 は小皿で、底部の切り離しは 226 が回転糸切り、227、228 がヘラ切りである。器高 1.2~1.4㎝、口径 9.2~9.8㎝を測る。229 は鉄製の杓子である。柄の部分は欠損するが、柄は鍛接。230 は鍋鋳型の内型である。

SK120223（Fig.11）　調査区南側で検出された。撹乱のため、平面形は不明。深さ 0.2m を測る。

出土遺物（Fig.12　Ph.33）　231 は同安窯系青磁碗。釉色はオリーブ黄色を呈する。232 は白磁皿で、底部に墨書。花押か。

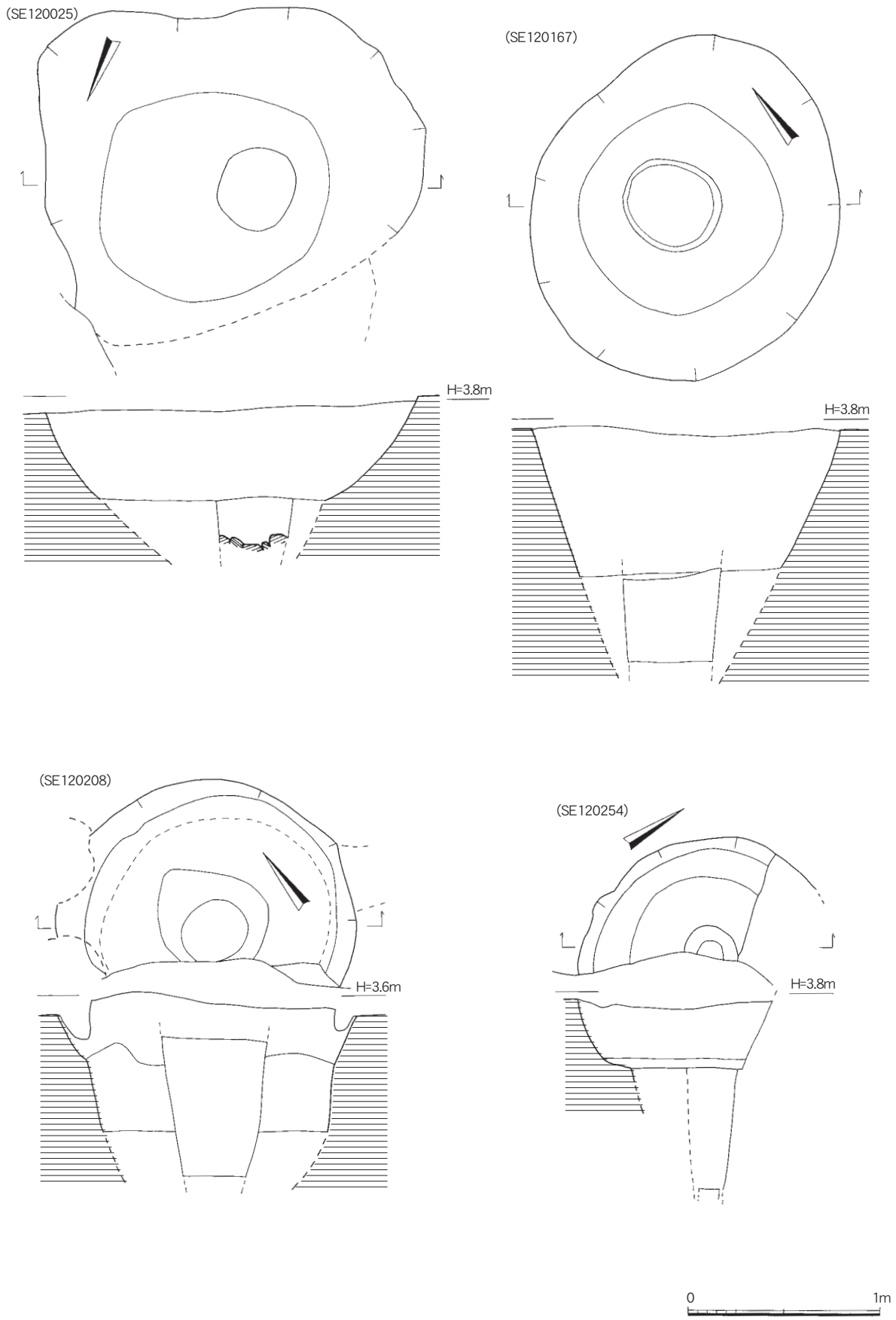


Fig.13　SE120025・120167・120208・120254 実測図（1/60）

3）中世の調査（2）

（1）井戸

SE120025（Fig.13　Ph.34,35）　調査区北側で検出された。掘方は径 3.3~4.0m の不整楕円形を呈する。深さ 1.5m まで掘り下げたが底まで達していない。標高 2.2m を測る。基底部中央に径 0.9m、高さ 0.5m の桶側の痕跡がみられた。井筒内には礫が投棄されていた。

出土遺物（Fig.14）　117~146 は井筒の上層から出土した。117 は龍泉窯系青磁碗の底部片。見込みに草花文を施す。釉色は灰オリーブ色を呈する。高台畳付きは露胎。118 は同安窯系青磁の皿である。見込みに櫛目文を施す。釉色は暗オリーブ色を呈する。119 は龍泉窯系青磁の皿である。

Ph.34　SE120025（西から）

Ph.35　SE120025 井筒内（南から）

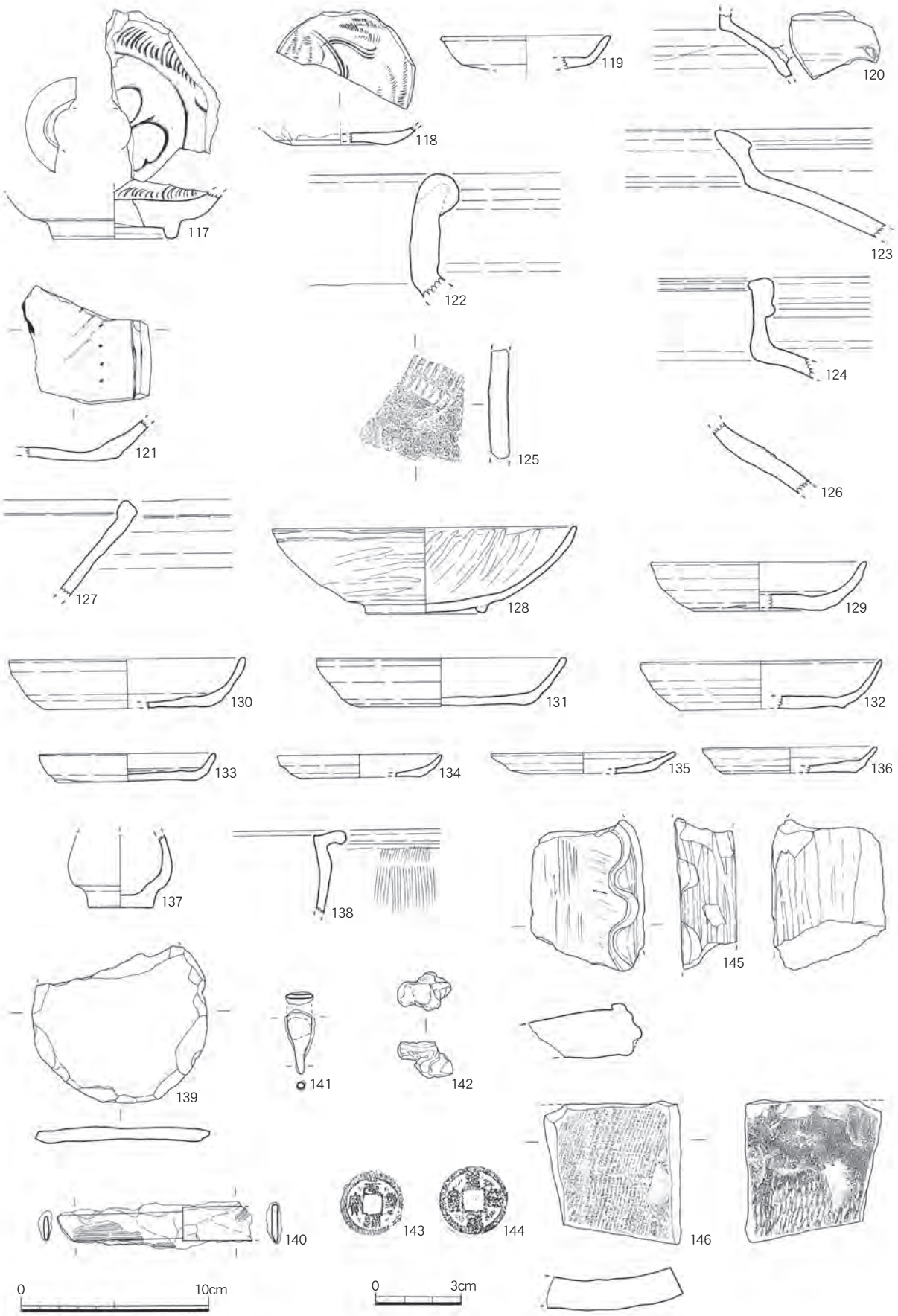


Fig.14　SE120025 出土遺物実測図 -1（1/3・1/2）

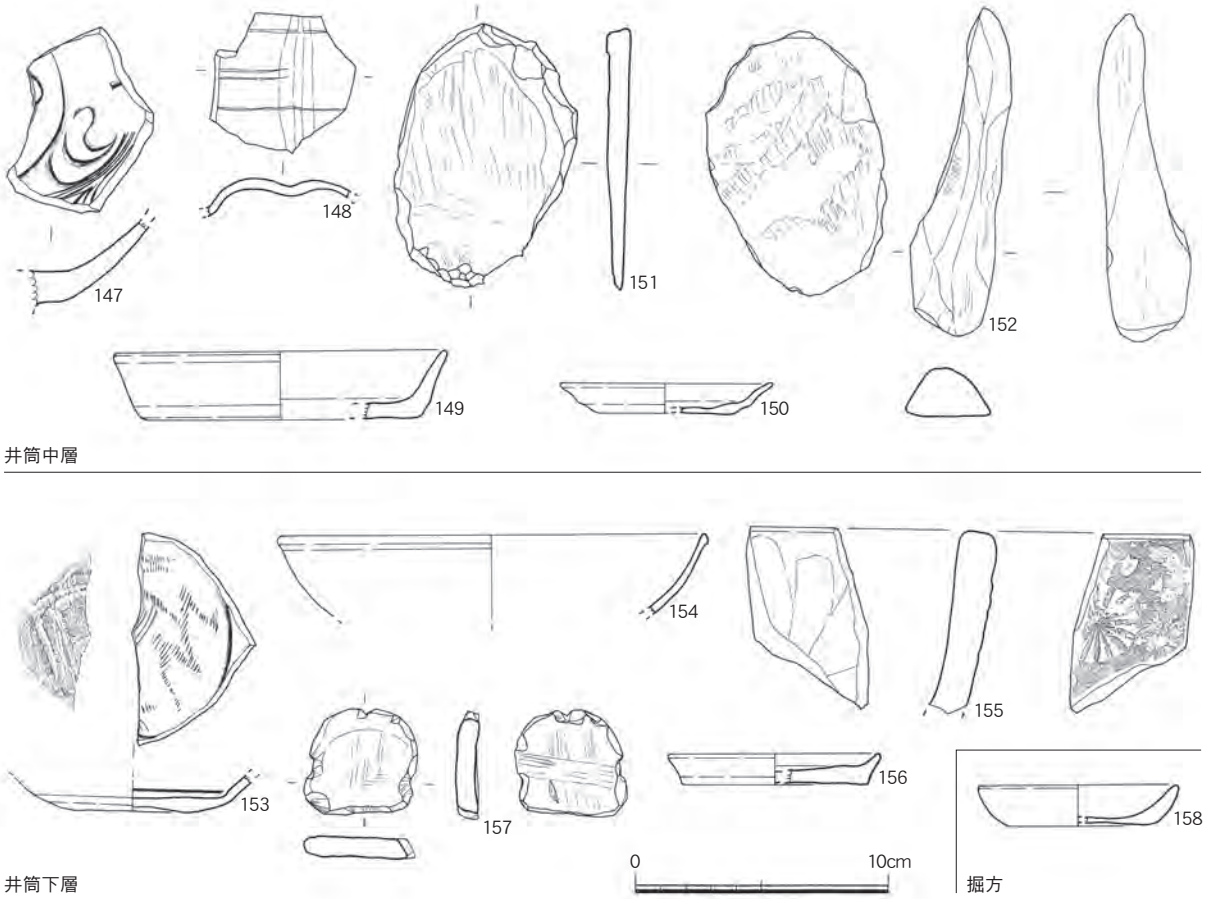


Fig.15　SE120025 出土遺物実測図 -2（1/3）

Ph.36　SE120025 出土遺物

釉色は緑灰色を呈する。口径 9.0㎝を測る。120 は白磁壷の肩部である。釉色は灰オリーブ色を呈する。121~124 は中国産陶器で、121 は鉄絵盤で、釉色は明黄色を呈する。122 は甕で、口縁は直立し、玉縁状を呈する。釉色は灰オリーブ色を呈する。123 は短頸の甕で、口縁は内側に拡張する。外面には暗茶褐色の釉がかかる。124 は甕で、口頸部は直立し、口縁外面は肥厚する。釉色は暗褐色を呈する。125 は甕の体部で、内面に短い平行叩きが残る。釉色は暗赤褐色である。備前焼か。126 は甕体部で、釉色は暗灰黄色を呈する。瀬戸焼か。127 は東播系捏鉢の口縁である。色調は灰色を呈する。128 は筑前型瓦器埦である。内外面にヘラミガキを施す。低い高台が中央寄りにつく。器高 4.6㎝、口径 16.2㎝を測る。129~136 は土師器で、129~132 は坏である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高 2.5~2.6㎝、口径 12.6~13.3㎝を測る。133~136 は小皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 1.1~1.3㎝、口径 8.6~9.4㎝を測る。137 は土師質の小壷で、色調は橙色を呈する。138 は土師器鍋で、口縁は逆 L 次形を呈する。外面に煤が付着する。139 は土師器転用の円盤で、周囲に打ち

欠き痕が残る。140 は刀子で、茎は欠損する。現存長 10.7㎝を測る。141 は鉄鏃の頸部。142 は鉄滓である。143、144 は銅銭で、「元豊通寶」（初鋳年 1057 年）、「□□通寶」。145 は鬼瓦の外縁部である。器面は丁寧なヘラミガキ。色調は黄褐色を呈する。146 は平瓦で、凸面に縄目叩き叩きが残る。、147~152 は中層から出土した。147 は龍泉窯系青磁碗で、見込みに劃花文を施す。釉色は灰オリーブ色を呈する。148 は白磁瓜割壷体部である。釉色は灰白色を呈する。151 は硯の転用素材。墨痕が残る。石材は赤間石か。152 は砥石である。149 は土師器坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 2.7㎝、口径 13.2㎝を測る。150 は土師器小皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 1.3㎝、口径 8.4㎝を測る。153~156 は井筒下層で出土した。153 は同安窯系青磁の皿で、見込みに櫛目文を施す。釉色は緑灰色である。154 は白磁碗で、口縁は小さな玉縁状を呈する。釉色は灰オリーブ色を呈する。155 は瓦質の火鉢で、外面に車輪文を施す。156 は土師器小皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 1.3㎝、口径 8.4㎝を測る。157 は土錘で、上端と両側に抉りが入る。158 は掘方から出土した土師器小皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 1.6㎝、口径 7.8㎝を測る。

SE120167（Fig.13　Ph.37・38・39）　調査区中央南寄りで検出された。掘方は径 3.3~3.7m の楕円形を呈する。深さ 2.5m まで掘り下げたが底まで達していない。標高 1.3m を測る。基底部中央に径 1.0m、高さ 1.0m の桶側の痕跡がみられた。

出土遺物（Fig.16　Ph.39・40）　159~166 は井筒上面で出土した。159 は龍泉窯系青磁碗である。釉色は灰オリーブ色を呈する。160 は中国産陶器の擂鉢。口縁は上方に拡張する。内面にすり目を施す。底面のすり目は密集している。釉色は暗褐色を呈する。161 は中国産陶器の壷で、磁灶窯か。釉色は灰オリーブ色を呈する。162 は高麗無釉陶器で、外面に波状文を施す。色調は暗青色を呈する。163 は土師器小皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 0.8㎝、口径 9.0㎝を測る。164 は白磁碗を転用した瓦玉である。165 は丸瓦で、凸面に縄目叩きが残る。内面はナデ。色調は青灰色を呈する。166 は金床石。167 は銅銭で、「政和通寶」（初鋳年 1111 年）。168 は井筒下層で出土した白磁碗で、高台内側に墨書が残る。169~174 は掘方上層で出土した。169 は龍泉窯系青磁碗で、見込みに劃花文を施す。釉色は灰オリーブ色を呈する。170 は龍泉窯系青磁碗で、内面に白堆線を施す。釉色は灰オリーブ色を呈する。171 は中国産陶器黄釉盤。釉色は灰オリーブ色である。172 は中国産陶器合子である。釉色は黒褐色である。173 は軽石の浮子。長さ 3.7㎝、厚さ 1.6㎝を測る。174 は小型の滑石製石鍋で、口縁外面の 2 カ所に縦方向の杷手がつく。175 は掘方下層で出土した龍泉窯系青磁皿で、見込みに草花文を施す。底面は露胎で、釉色は灰オリーブ色を呈する。器高 3.5㎝、口径 13.0㎝を測る。

SE120208（Fig.13　Ph.41~44）　調査区中央南寄りで検出され、調査区外に遺構は広がる。掘方は径 2.9m の円形を呈する。深さ 2.0m まで掘り下げたが底まで達していない。標高 1.8m を測る。基底部中央に径 0.7m、高さ 1.5m の桶側の痕跡がみられた。

出土遺物（Fig.17）　176~179 は井筒から出土した。176 は青白磁の香炉で、釉色は淡い灰オリーブ色を呈する。177 は同安窯系青磁碗で、外面に櫛目文を施す。釉色は灰オリーブ色を呈する。178 は陶器壷で、口縁は玉縁状を呈する。色調は黒褐色を呈する。179 は土師器小皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 0.9㎝、口径 9.6㎝を測る。180~183 は掘方から出土した。180・181 は白磁碗で、口縁は玉縁を呈する。釉色は灰オリーブ色を呈する。182 は高麗無釉陶器の短頸壷で

ある。色調は黒青灰色を呈する。183 は白磁皿である。平底の底部は露胎で、釉色は灰オリーブ色を呈する。器高 2.2㎝、口径 10.5㎝を測る。

SE120254（Fig.13　Ph.45・46）　調査区南端で検出され、調査区外に遺構は広がる。掘方は径約 2.6m の円形を呈する。深さ 2.0m まで掘り下げたが底まで達していない。標高 1.7m を測る。基底部中央に桶側の痕跡がみられた。

出土遺物（Fig.17）　184 は龍泉窯系青磁椀で、内面に片彫の草花文を施す。釉色は灰白色を呈する。185 は龍泉窯系青磁碗で、見込みに片彫の草花文を施す。釉色は灰白色を呈する。186 は同安窯系青磁皿で、見込みにジグザグの櫛描文を施す。釉色は灰白色を呈する。187 は土師器の足鍋

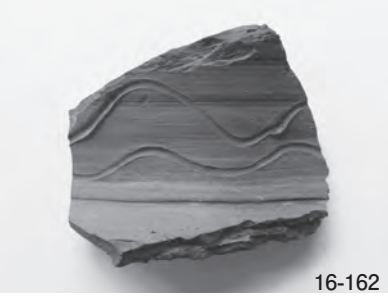
Ph.37　SE120167（北から）

Ph.38　SE120167 井筒桶残存状況（西から）

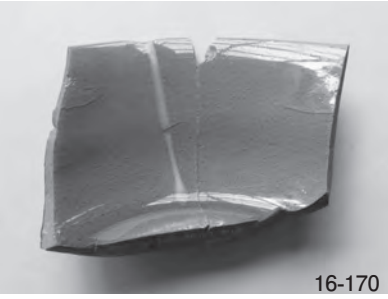
で、口縁からやや下ったところに鍔が巡る。調整は内外面ともハケメ。188・189 は土師器坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 3.3、3.0㎝、口径 13.6、14.7㎝を測る。190 は土師器小皿で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。板目圧痕。器高 1.1㎝、口径 8.4㎝を測る。191 は平瓦、192 は丸瓦で、凸面には細い縄目叩きを施す。色調は灰色を呈する。

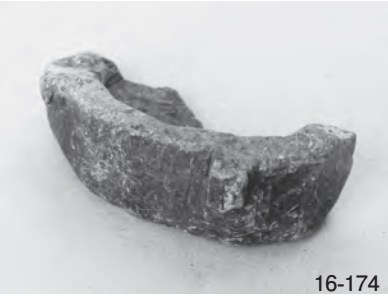
Ph.39　SE120167 湧水（東から）

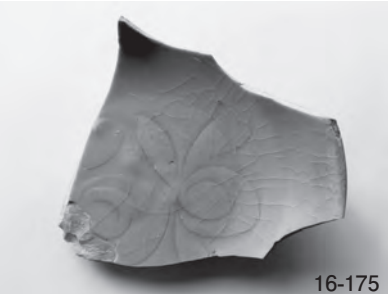
井筒



掘方







Ph.40　SE120167 出土遺物

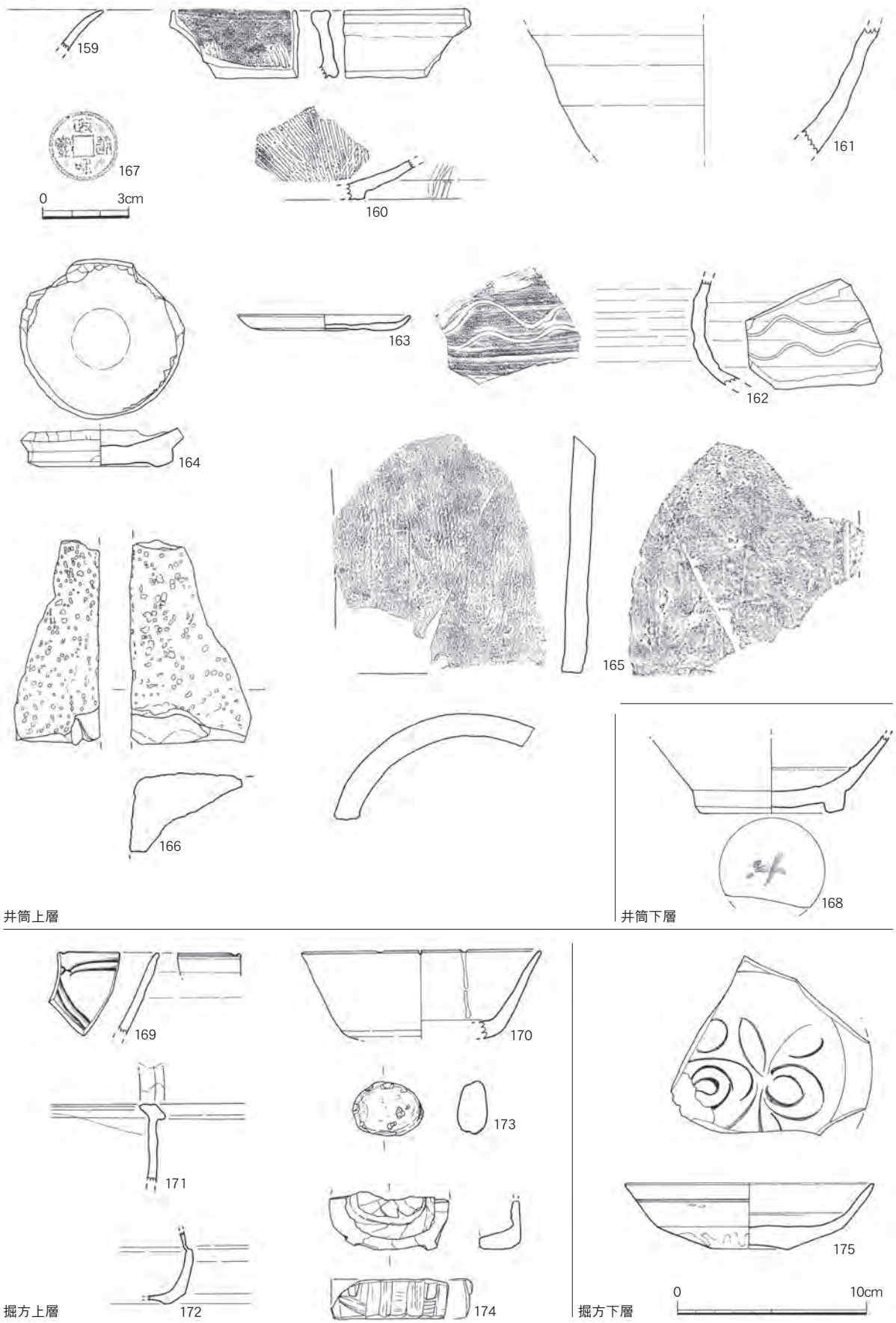


Fig.16　SE120167 出土遺物実測図（1/3・1/2）

Ph.41　SE120208（南から）

Ph.42　SE120208 掘方土層断面（北から）

Ph.43　SE120208 井筒内（南から）

Ph.44　SE120254（南から）

Ph.45　SE120254 土層断面（西から）

Ph.46　SE120254 井筒（西から）

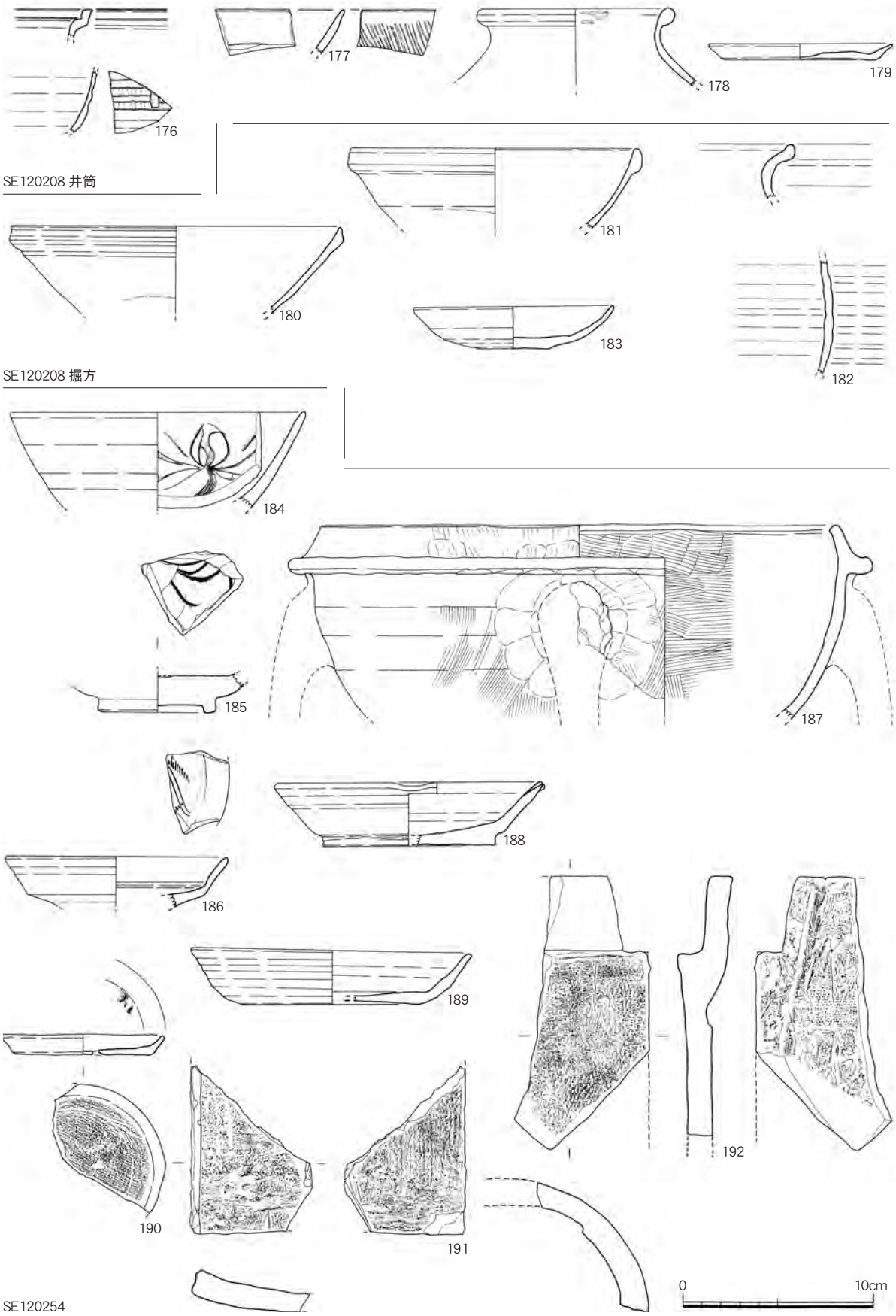


Fig.17　SE120208・120254 出土遺物実測図（1/3）

（2）土坑

SK120036・37・38（Fig.18）　調査区北端で検出された。SK38 → 37 → 36 の順で切りあう。SK38 は長さ 2.2m、幅 1.6m の隅丸長方形を呈し、深さ 0.5m を測る。

出土遺物（Fig.19　Ph.47）　193 は SK37 から出土した土師器小皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 1.3㎝、口径 8.8㎝を測る。194~205 は SK38 から出土した。194 は龍泉窯系青磁碗で、内面に内面に片彫の草花文を施す。釉色は灰オリーブ色を呈する。195 は同安窯系青磁碗で、外面に櫛目文を施す。釉色はにぶい黄色を呈する。196、197 は白磁皿で、197 は内面に白堆線を施す。釉色は灰オリーブ色を呈する。198・199 は土師器坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 2.5、2.4㎝、口径 14.0、12.4㎝を測る。200~202 は土師器小皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 1.1~1.3㎝、口径 8.0~8.4㎝を測る。203 は鉈である。現存長 6.7㎝を測る。204 は滑石製の石錘で、円形の孔が 2 カ所にあく。205 はトチン。

SK120244（Fig.18）　調査区南側で検出された。大半が撹乱を受けて、形状は不明。深さ 0.1m を測る。

出土遺物（Fig.19　Ph.47）　206 は越州窯系青磁碗で、蛇の目高台。釉色はオリーブ黄色である。207 は白磁碗で、口縁は薄い玉縁。釉色は灰白色を呈する。208、209 は白磁碗で、輪状高台。釉色は灰白色を呈する。209 は見込みに櫛目文を施す。210 は白磁碗の転用の瓦玉である。高台の内側に墨書が残る。211、212 は土師器坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 3.2、3.0㎝、口径 15.0、16.0㎝を測る。213 は滑石製品。器種は不明。214 は土製円盤。径 3.1㎝、厚さ 1.3㎝を測る。

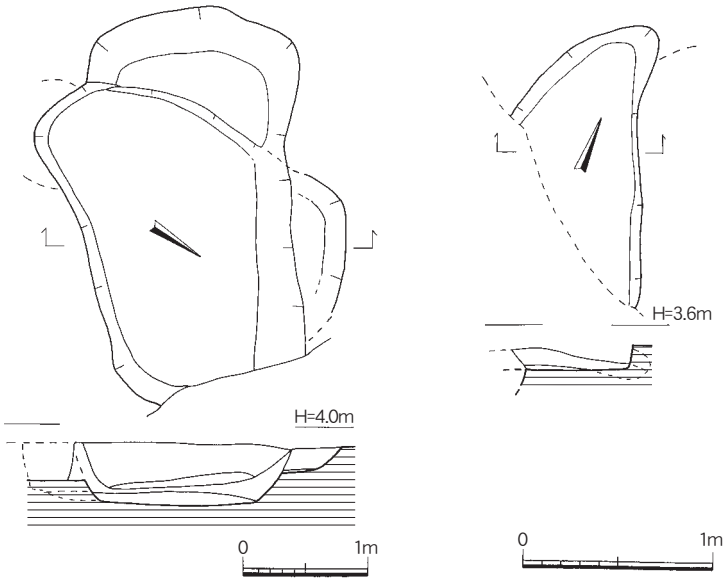
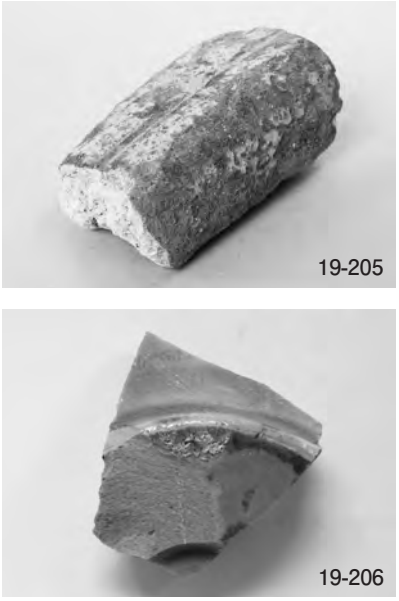


Fig.18　SK120036・120037・120038・120024
実測図（1/60・1/40）



Ph.47　SK120038・120244 出土遺物

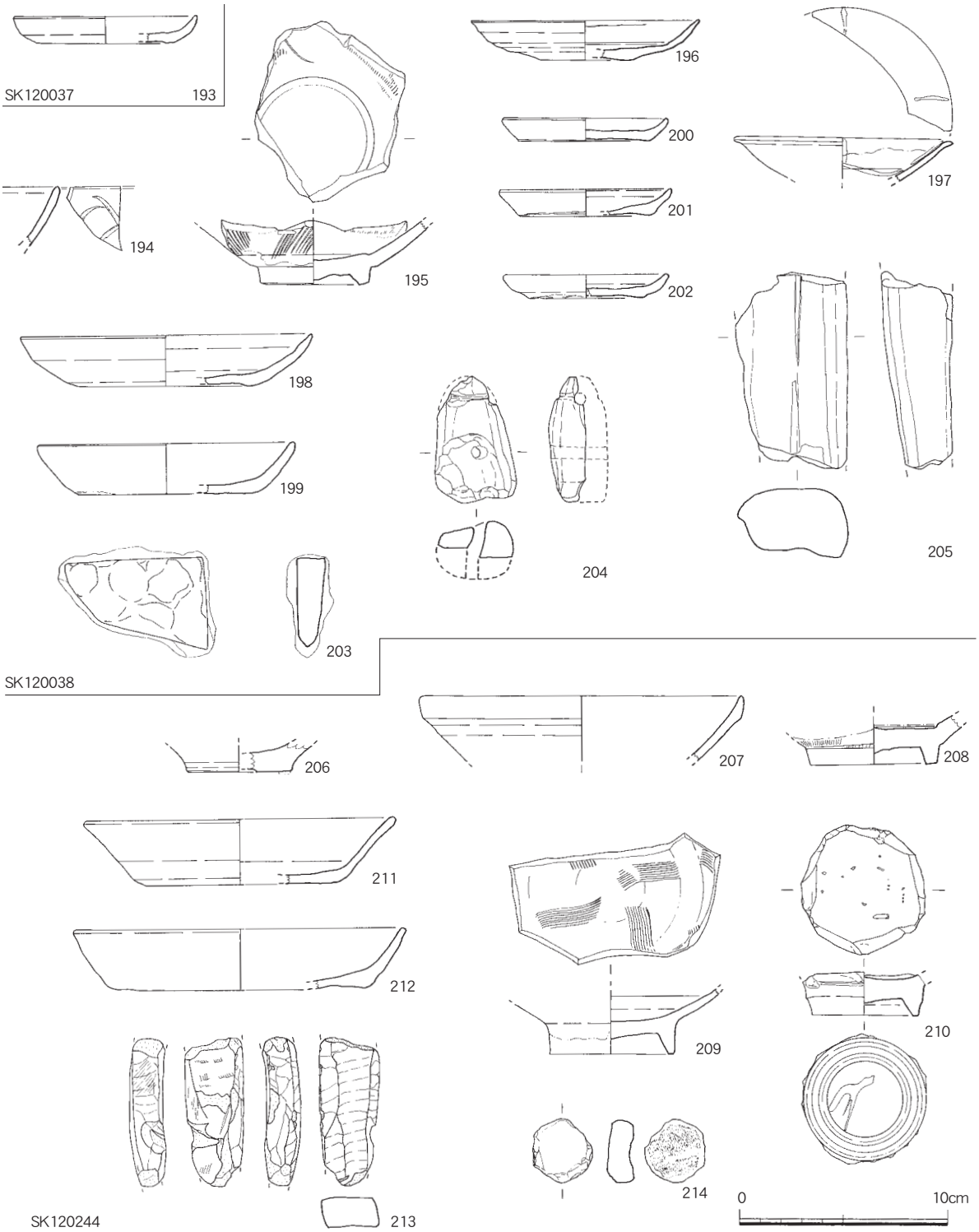


Fig.19　SK120037・120038・120244 出土遺物実測図（1/3）

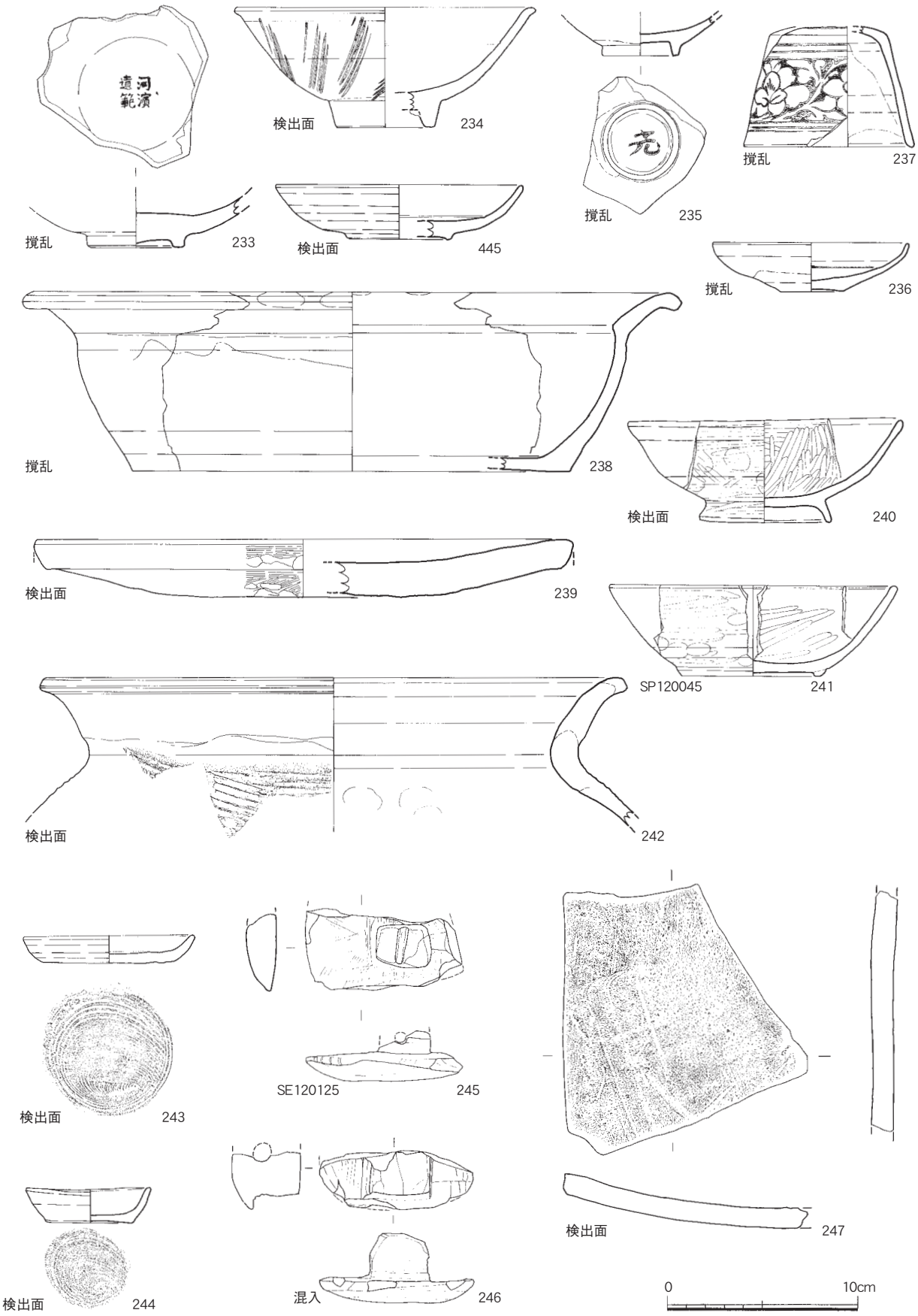


Fig.20　その他の中世出土遺物実測図（1/3）

Ph.48　その他の中世出土遺物

（3）柱穴その他の中世遺物

出土遺物（Fig.20　Ph.48）　223 は龍泉窯系青磁碗で、見込みに「河濱遺範」の印刻を施す。釉色は灰オリーブ色を呈する。234 は白磁碗で、外面に櫛目文を施す。釉色は灰白色を呈する。器高 6.3㎝、口径 15.5㎝を測る。235 は白磁碗で、高台の内側に墨書。「无」。236 は白磁皿で、底部は露胎となる。釉色は灰白色を呈する。器高 2.6㎝、口径 10.2㎝を測る。237 は磁州窯翡翠釉鉄絵花文梅瓶の蓋である。釉色はマラカイトグリーンを呈する。445 は白磁皿で、釉色は灰白色を呈する。器高 2.9㎝、口径 12.9㎝を測る。238 は中国産陶器盤で、内面にはオリーブ黄色の釉がかかる。器高 9.4㎝、口径 33.3㎝を測る。259 は土師器の火舎蓋で、器高 3.0㎝、口径 27.8㎝を測る。240 は黒色土器 B 類の埦で、内外面にヘラミガキを施す。器高 5.4㎝、口径 14.3㎝を測る。241 は筑前型瓦器埦である。高台は低く、中央付近につく。器高 4.8㎝、口径 14.8㎝を測る。242 は須恵質陶器の甕で、体部外面には平行叩きを施す。色調は黄灰色を呈する。243、244 は土師器小皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高 1.5、1.9㎝、口径 8.7、6.5㎝を測る。245、256 は滑石製のスタンプ。摘部分に円形の孔があく。247 は平瓦で、凹面は工具によるナデ。色調は橙色を呈する。

4）古代の調査

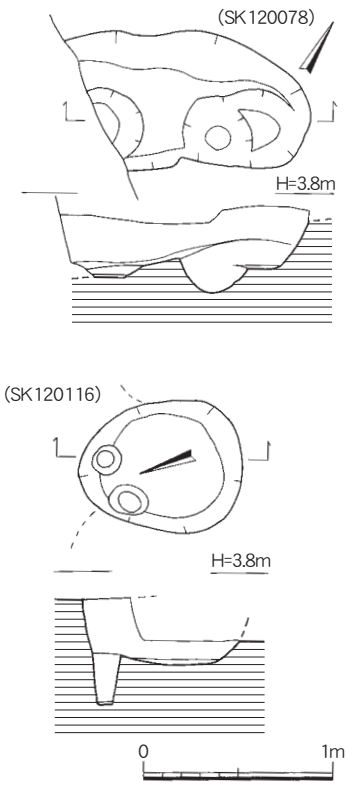


Fig.21　SK120078・120116 実測図（1/40）

（1）土坑

SK120116（Fig.21）　調査区中央で検出された。径 0.7~0.85m の不整円形を呈し、深さ 0.3m を測る。

出土遺物（Fig.22）　248 は新羅陶器。外面に格子叩き、内面に平行当具の痕跡が残る。色調は暗灰色を呈する。214 は土師器鉢で、口縁は「く」の字状を呈する。外面はハケメ、内面はヘラ削り。

（2）その他の古代遺物

出土遺物（Fig.22　Ph.49）　250 は老司系軒丸瓦。複弁で、圏線に珠文、外縁に鋸歯文が巡る。251 は平瓦で、凸面に小さめの斜格子文叩きを施す。224 は土馬の頭部で、刺突により、鼻を表現している。色調は橙色を呈する。253 は焼塩壷。器面には指頭圧痕が残る。254 は須恵器坏蓋で、天井部に扁平の摘がつく。器高 1.6㎝、口径 15.3㎝を測る。

Ph.49　その他の古代出土遺物

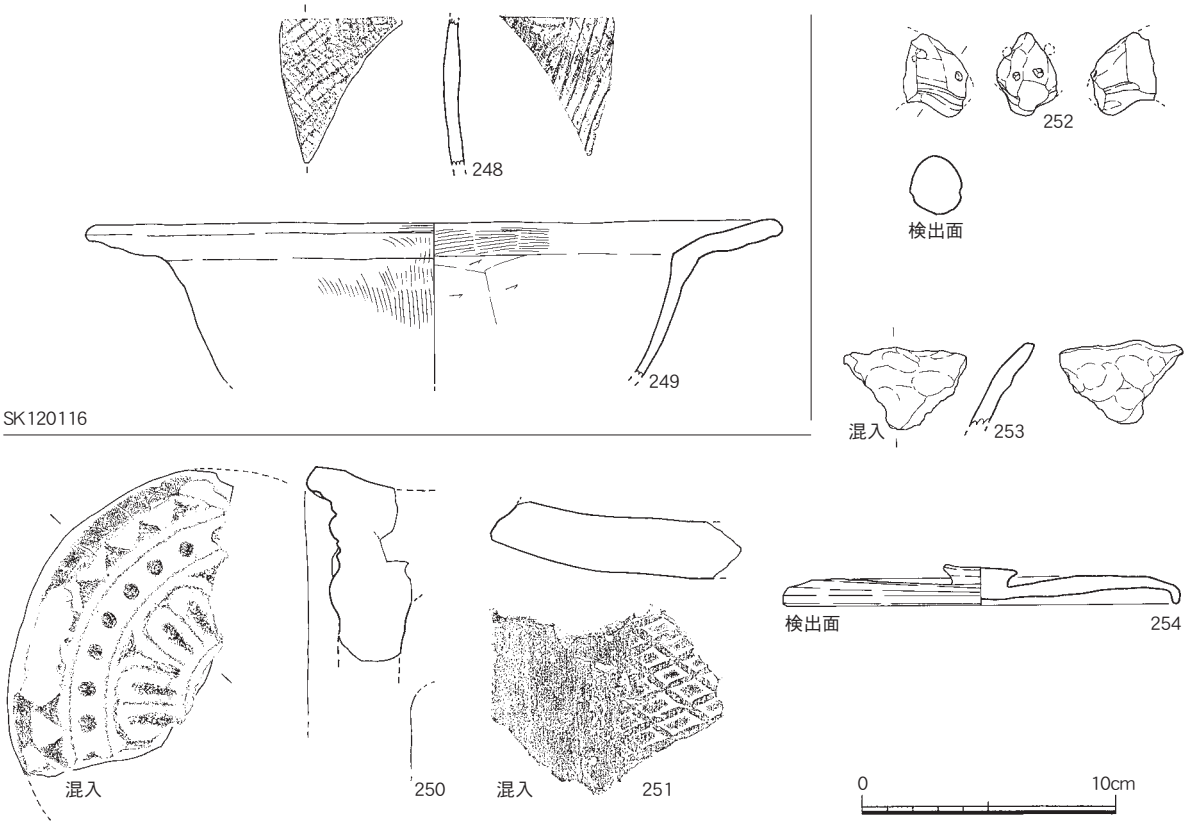


Fig.22　SK120116 その他の出土遺物実測図（1/3）

5）古墳時代後期の調査

（1）土坑

SK120078（Fig.21　Ph.50）　調査区南側で検出された。大半が撹乱を受けて、形状は不明。深さ 0.3㎝を測る。

出土遺物（Fig.23　Ph.51）　255 は須恵器坏蓋である。256 は軟質土器の体部で、外面に擬格子目の叩き、内面に平行当具痕が残る。257 は分銅状の石製品で、摘部分に円形の孔があく。高さ 1.5㎝を測る。258 は石製の勾玉。長さ 3.2㎝、厚さ 1.0㎝を測る。

（2）その他の古墳時代後期遺物

出土遺物（Fig.23　Ph.51）　259、260 は須恵器坏身で短いかえりがつく。口径 10.4、9.0㎝を測る。260 は底部にヘラ記号を施す。261 は須恵器甕で、外面は縦方向の平行叩き後カキメ、内面は同心円文の当て具痕が残る。口径 21.1㎝を測る。262 は土師器の移動式竈で、鍔の部分である。器面には指頭圧痕が残る。色調は褐灰色を呈する。263 は滑石製の紡錘車。厚さ 1.2㎝を測る。264、265 は棒状土錘で、端部付近に円形の孔があく。

Ph.50　SK120078（西から）

Ph.51　SK120078 他の出土遺物

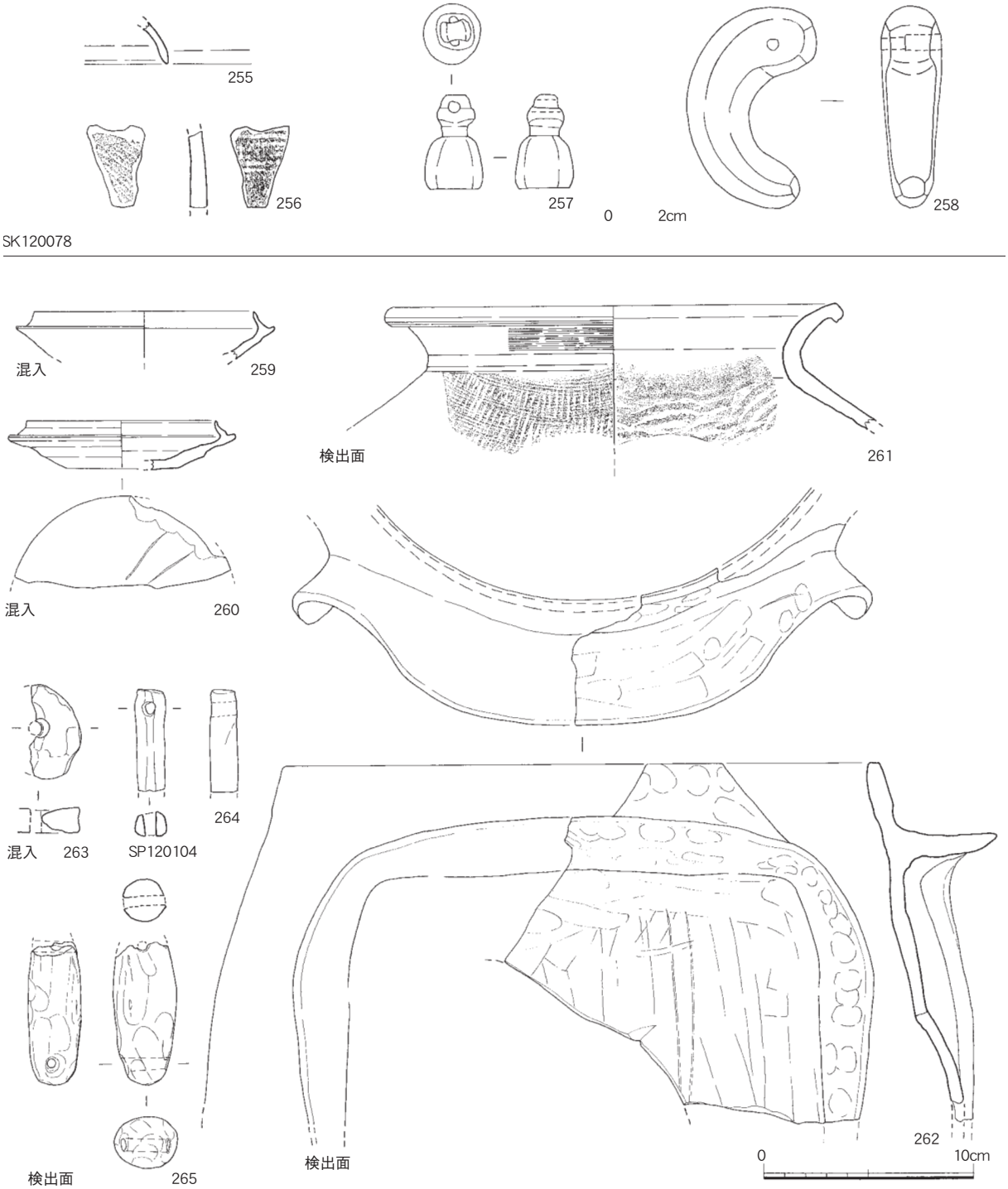


Fig.23　その他の古墳時代後期出土遺物実測図（1/3・1/1）

6）古墳時代前期の調査

（1）竪穴住居

SC120006（Fig.24）　調査区北側で検出された。撹乱のため、平面形は不明確であるが、長方形を呈するものか。東西長 2.4m、深さ 0.2m を測る。南北長は不明。主柱穴は不明。

出土遺物（Fig.25）　266 は土師器甕口縁。色調はにぶい黄褐色を呈する。

SC120019（Fig.24）　調査区北側で検出された。SC020 を切る。撹乱のため、平面形は不明確であるが、長方形を呈するものか。東西長 2.5m、深さ 0.2m を測る。南北長は不明。主柱穴は不明。

出土遺物（Fig.25）　267~270 は土師器。267 は小型丸底壷口縁。色調はにぶい黄褐色を呈する。268、269 は在地の甕口縁。「く」の字形を呈する。調整はハケメ。270 は山陰系の二重口縁甕である。色調は灰黄褐色を呈する。

SC120054（Fig.24　Ph.52~54）　調査区中央北よりで検出された。撹乱のため、平面形は不明確であるが、長方形を呈するものか。規模は不明。深さ 0.2m を測る。床面の 2 カ所の柱穴から土師器のジョッキ型土器、壷が出土した。主柱穴は 4 本か。

出土遺物（Fig.25　Ph.55）　271~275 は土師器である。271 は SP055 から出土したジョッキ型土器で、完形品である。体部は口縁にかけて丸みを持って窄まる。断面円形の把手がつく。底部は平底である。外面の調整は縦方向のヘラケズリ、内面はナデ。色調は黄灰色を呈する。器高 9.0㎝、口径 9.5㎝、底径 5.9㎝を測る。272 は丸底壷で、口頸部は欠損している。外面の調整はハケメ、内面は横方向のヘラケズリ、内底面に指頭圧痕が残る。273 は高坏の坏部で、口縁は接合部で大きく外反する。器面には細かなヘラミガキを施す。外面には波状の暗文を施す。色調は灰褐色を呈する。274 は甕口縁、275 は短頸壺である。

SC120149（Fig.24）　調査区中央で検出された。撹乱のため、平面形は不明確である。規模は不明。深さ 0.2m を測る。主柱穴は不明。

出土遺物（Fig.26）　286 は土師器甕である。調整は内外面ともハケメ。色調はにぶい黄褐色を呈する。287 は丸底の壷底部。外面の調整はケズリ。色調は橙色を呈する。

Ph.52　SC120054（北から）

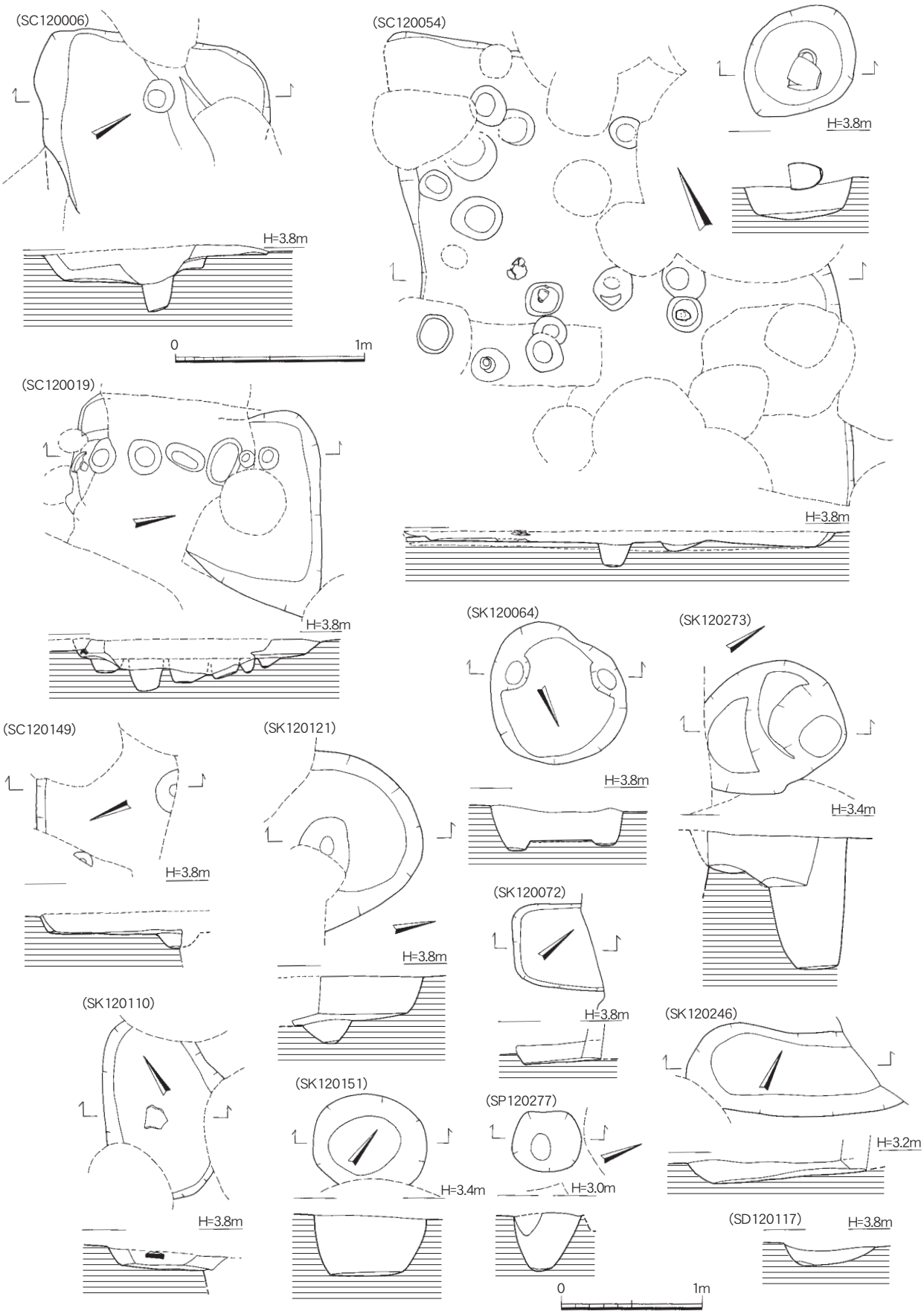
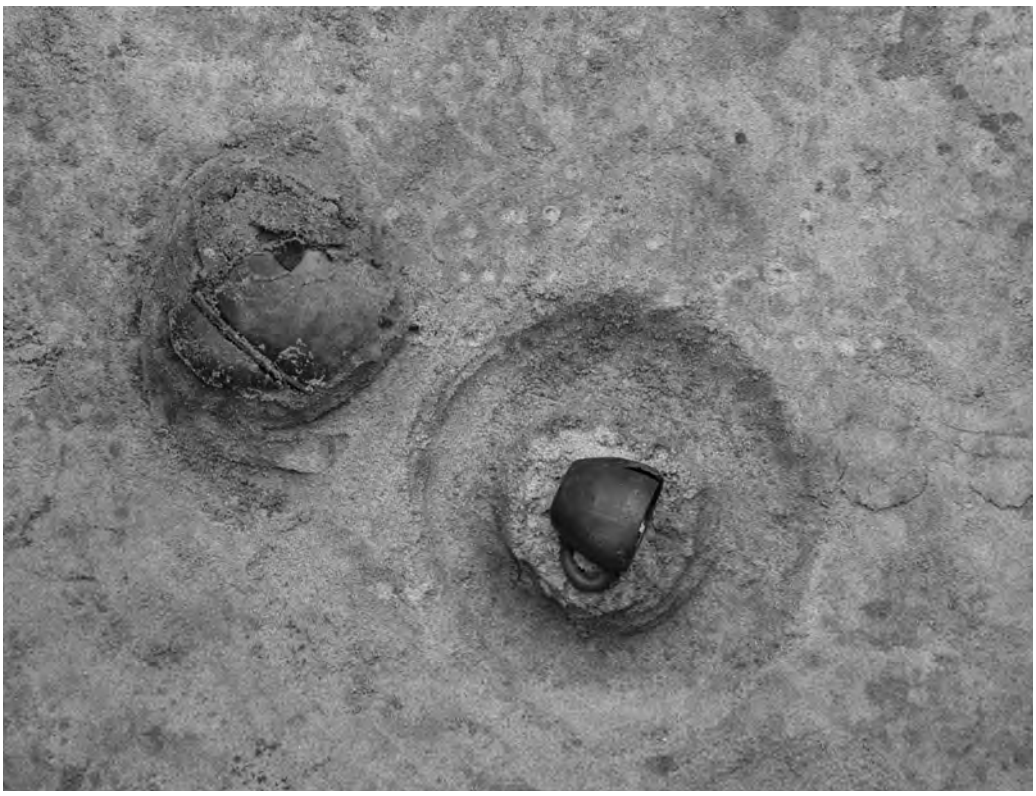


Fig.24　SC120006・120019・120054・120149、SK064・120072・120110・120121・120151・120246・120273、SP120277、SD120117 実測図（1/60・1/40）

Ph.53　SC120054（東から）



Ph.54　SC120054 土器出土状況（東から）

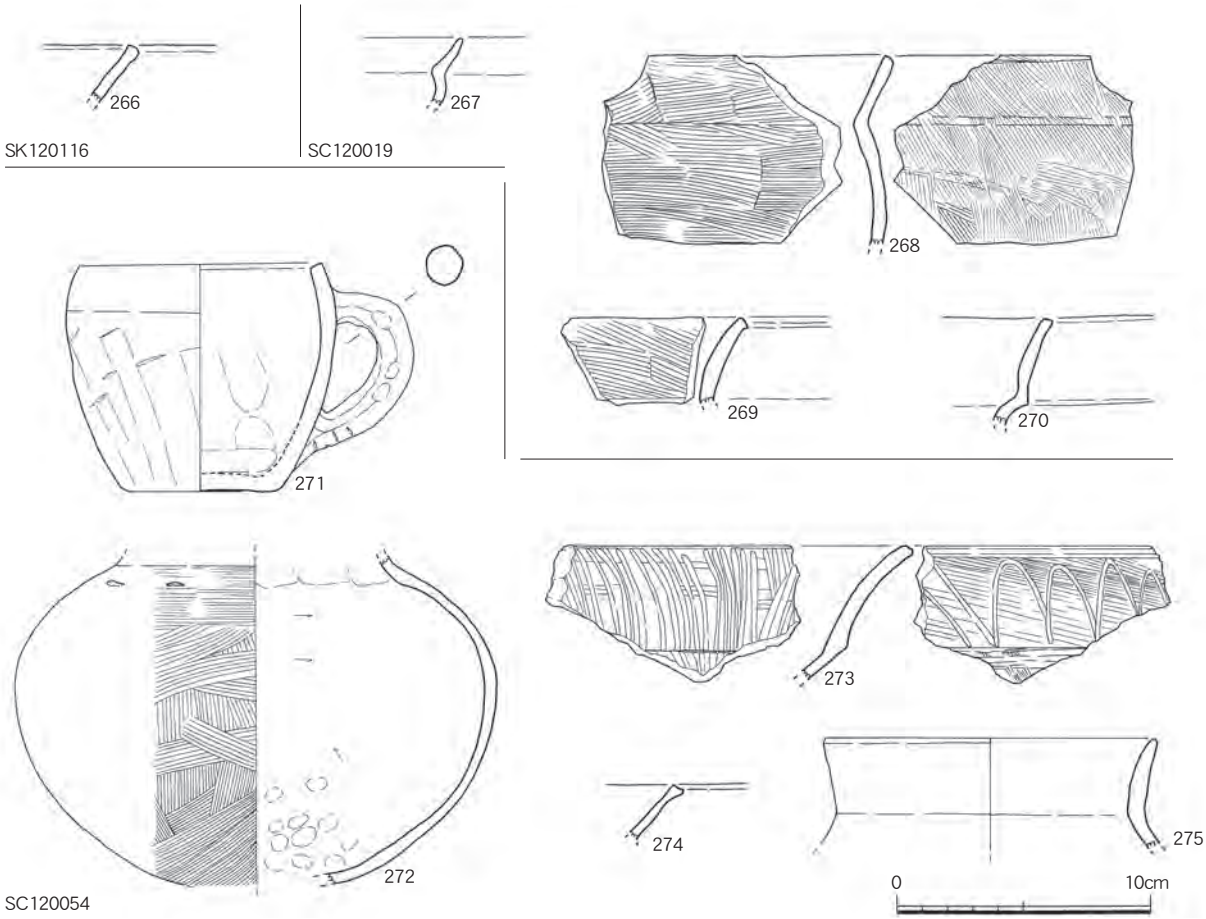
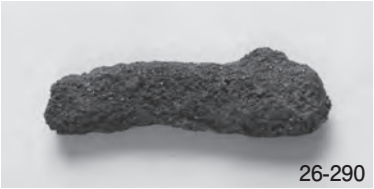


Fig.25　SC120006・120019・120054 出土遺物実測図（1/3）



Ph.55　SC120054・SK120151 出土遺物

（2）土坑

SK120064（Fig.24）　調査区中央北よりで検出された。径 0.9~1.1m の不整円形を呈し、深さ 0.3m を測る。

出土遺物（Fig.26）　276 は土師器甕である。調整は内外面ともハケメ。色調は赤色を呈する。

SK120072（Fig.24）　調査区中央で検出された。調査区外側に広がる。隅丸長方形を呈し、幅 0.6m、深さ 0.1m を測る。

出土遺物（Fig.26）　277 は高坏の坏部で、口縁は接合部で大きく外反する。器面には細かなヘラミガキを施す。外面には縦方向の暗文を施す。色調は褐灰色を呈する。

SK120110（Fig.24）　調査区中央で検出された。径約 0.8m の不整円形を呈し、深さ 0.1m を測る。

出土遺物（Fig.26）　278・279 は土師器甕である。調整はハケメを施す。280・281 は短頸壺である。調整は内外面ともハケメ。282 は大型の甕で、口縁は緩やかに外反し、屈曲部に断面三角形の突帯がつく。調整は内外面ともハケメである。色調はにぶい黄褐色を呈する。口径 40.0㎝を測る。

SK120121（Fig.24）　調査区中央で検出された。撹乱を受け、平面形は不明。幅 1.3m、深さ 0.3m を測る。

出土遺物（Fig.26）　283 は土師器坏で、内外面ともハケメ。色調はにぶい橙色を呈する。284 は甕口縁。調整はハケメ。285 は山陰系の二重口縁甕である。色調は灰黄色を呈する。

SK120151（Fig.24）　調査区中央で検出された。径 0.7~0.9m の楕円形を呈し、深さ 0.4m を測る。

出土遺物（Fig.26）　288 は蛸壺で、口縁からやや下がったところに円形の孔をあく。器面には指頭圧痕が残る。色調はにぶい赤褐色を呈する。289 は土師器甕で、肩部に櫛描直線文と櫛描原体による刺突文が施される。外面の調整はハケメ、内面はヘラケズリ。290 は不明鉄製品。厚さ 0.8㎝を測る。

SK120168（Fig.27）　調査区中央南よりで検出された。撹乱を受けて全長は不明であるが、隅丸長方形を呈し、長さ 1.4m、深さ 0.2m を測る。

出土遺物（Fig.28）　291 は土師器丸底坏で、内外面ともハケメ。色調は灰黄色を呈する。292 は蛸壺である。器面に指頭圧痕が残る。

SK120174（Fig.27　Ph.57）　調査区中央南よりで検出された。撹乱を受けて全長は不明であるが、隅丸長方形を呈し、深さ 0.1m を測る。

出土遺物（Fig.28）　293 は土師器甕口縁。色調は灰黄褐色を呈する。294 は山陰系の二重口縁甕である。色調はにぶい橙色を呈する。295 は刀子で、切先、茎は欠損。現存長 5.3㎝、厚さ 0.5㎝。296 は鉄鏃の茎。断面形は方形で、厚さ 0.5㎝を測る。

SK120220（Fig.27）　調査区南側で検出された。撹乱を受けているが、不整楕円を呈し、現存長 1.1m、深さ 0.7m を測る。

出土遺物（Fig.28　Ph.57）　297 は広口壷口縁か。端部を拡張し、ヘラ描きの鋸歯文を施す。色

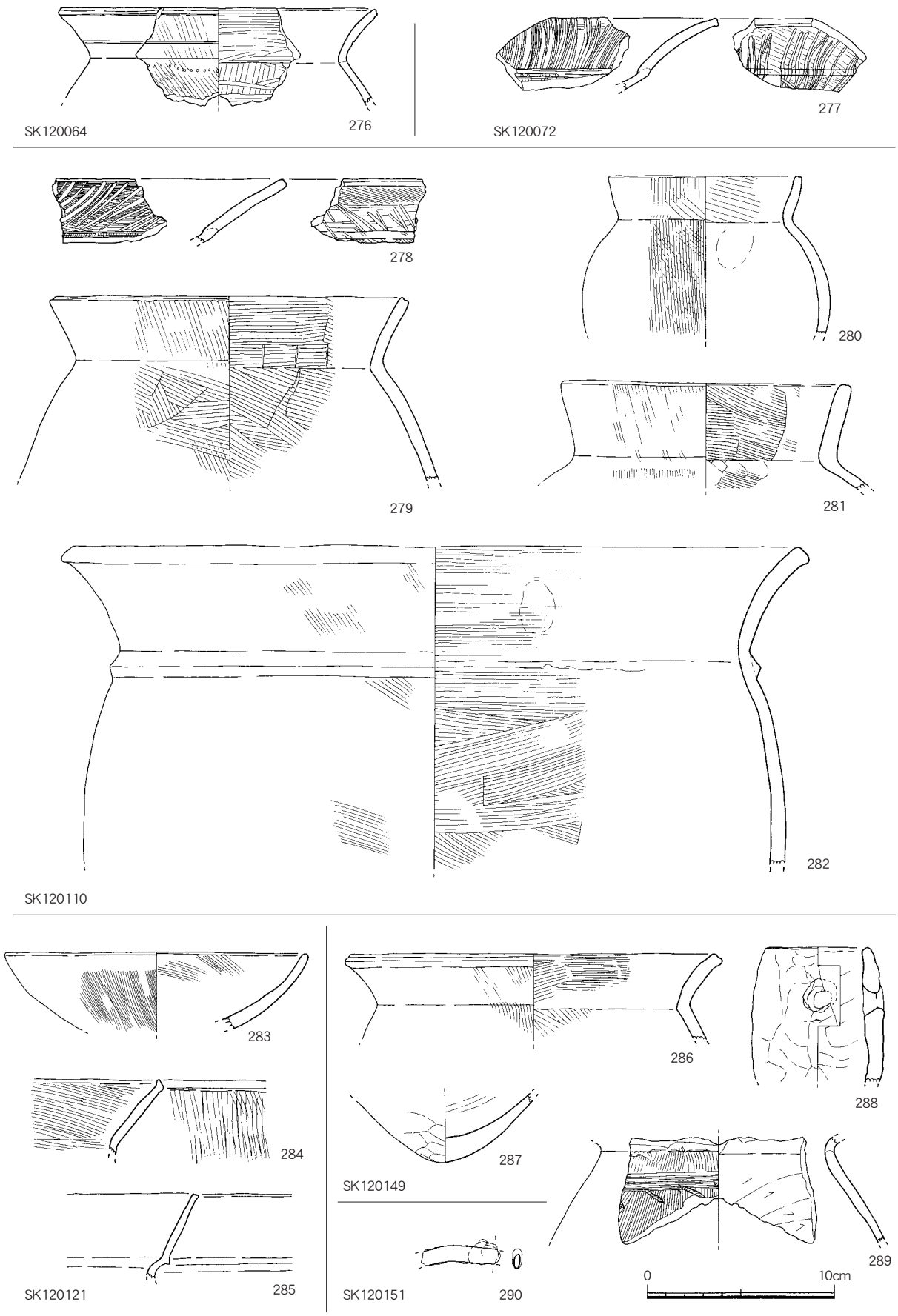


Fig.26　SK120064・120072・120110・120121・120149・120151 出土遺物実測図（1/3）

調はにぶい褐色を呈する。298 は複合口縁壷で、外面に波状文を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。299 は小型丸底壷で、器面には細かいヘラミガキを施す。色調は浅黄橙色である。300 は山陰系の二重口縁甕である。色調は浅黄橙色を呈する。

SK120246（Fig.24　Ph.57）　調査区南側で検出された。撹乱を受けて全長は不明であるが、隅丸長方形を呈し、幅 0.6m、深さ 0.2m を測る。

出土遺物（Fig.28）　301 は土師器甕で、肩部に櫛描波状文が施される。外面の調整はハケメ、内面はヘラケズリ。色調は灰色を呈する。302 は壷底部。上げ底気味の平底。色調は灰黄色を呈する。303 は不明鉄製品。

SK120273（Fig.24）　調査区南側で検出された。径 0.9~1.1m の楕円形を呈し、深さ 1.0m を測る。

出土遺物（Fig.28　Ph.57）　304 は土師器坏で、内外面とも暗文風のヘラミガキ。外面は黒変する。305 は鉄製鋤先の袋部。ひな形か。蛸壺である。器面に指頭圧痕が残る。

Ph.56　SK120151（右・南から）

（3）溝

SD120117（Fig.24）　調査区中央南側で検出された。残存長 3.0m、幅 1.0m、深さ 0.2m を測る。

出土遺物（Fig.28）　306 は土師器直口壷。307、308 は甕口縁。307 は口縁端部を摘上げる。309 は吉備系の二重口縁甕。色調はにぶい褐色を呈する。310 は高坏の坏部で、口縁は接合部で大きく外反する。器面には細かなヘラミガキを施す。色調は橙色を呈する。

（4）柱穴その他の出土遺物

SP120123（Fig.27）　調査区中央南よりで検出された。径 0.7~0.8m、深さ 0.3m を測る。

出土遺物（Fig.28　Ph.57）　311 は瓦質土器の甕で、外面には縄席文叩きを施し、沈線が巡る。色調は灰白色を呈する。312 は鉄鏃。

SP120165（Fig.27）　調査区中央南よりで検出された。径 0.7~1.2m、深さ 0.6m を測る。

出土遺物（Fig.28　Ph.57）　314 は陶質土器の甕で、外面には縄席文叩きを施す。内面はヘラミガキが残る。色調は灰色を呈する。315 は土師器甕口縁。口縁端部を摘上げる。色調は灰黄褐色を呈する。316 は丸底坏で、内外面ともヘラミガキ。内面は縦方向の暗文。色調は橙色を呈する。口径 13.6㎝を測る。317 は片刃の小型板状鉄斧。長さ 3.8㎝、幅 1.9㎝、厚さ 0.6㎝を測る。

SP120277（Fig.24）　調査区南側で検出された。径 0.4~0.5m、深さ 0.4m を測る。

出土遺物（Fig.28）　313 は土師器甕で、外面には水平方向の叩き、内面はヘラケズリを施す。色調はにぶい黄色を呈する。

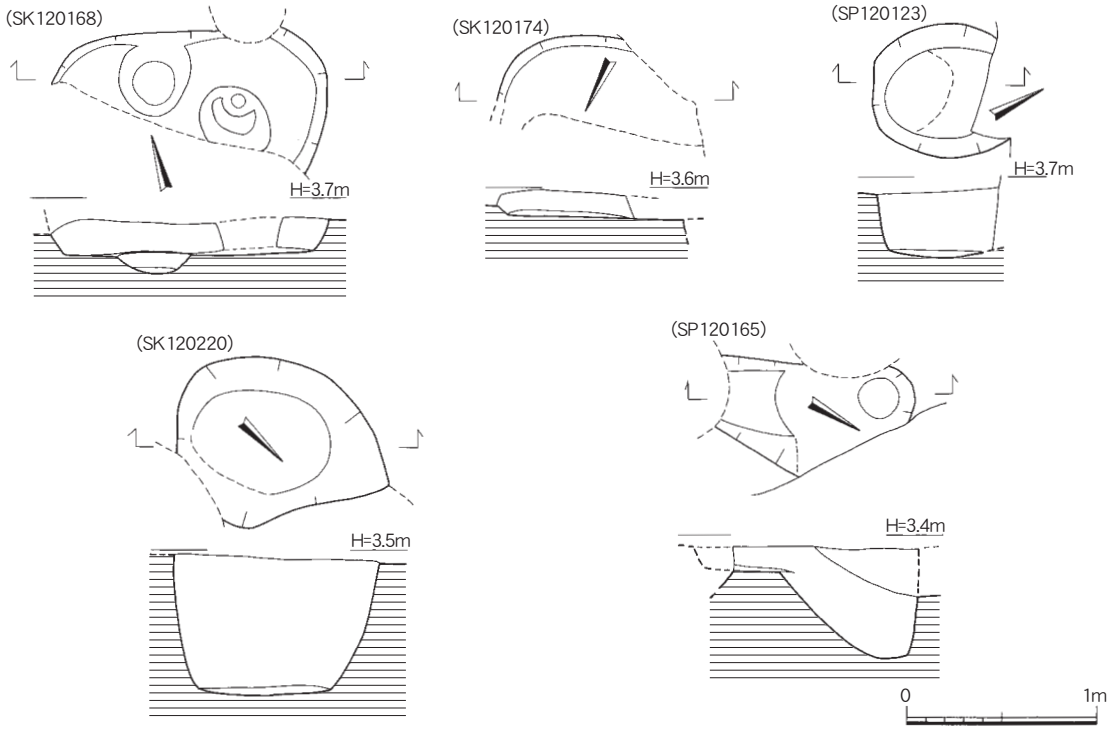


Fig.27　SK120168・120174・120220、SP120123・120165 実測図（1/40）

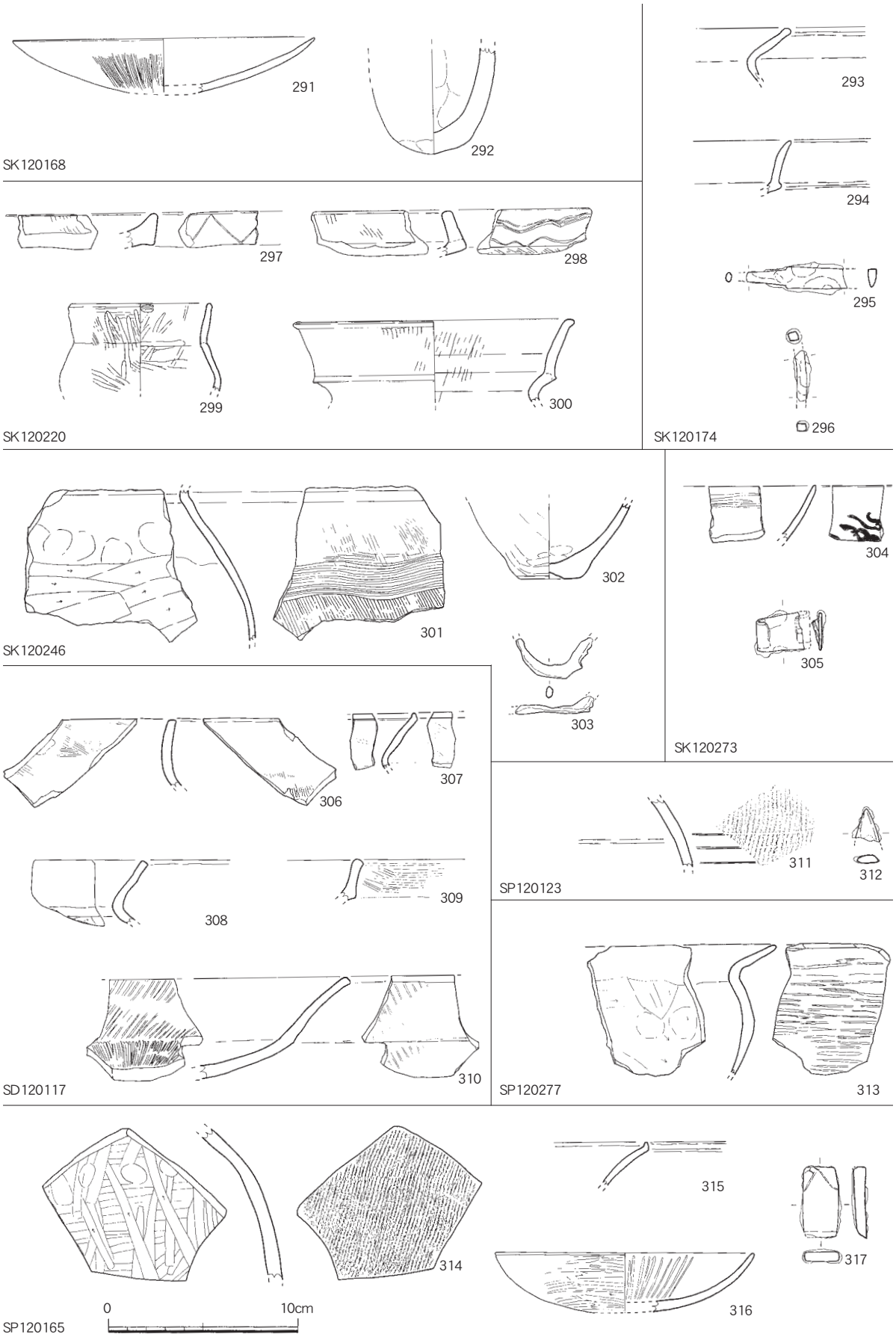
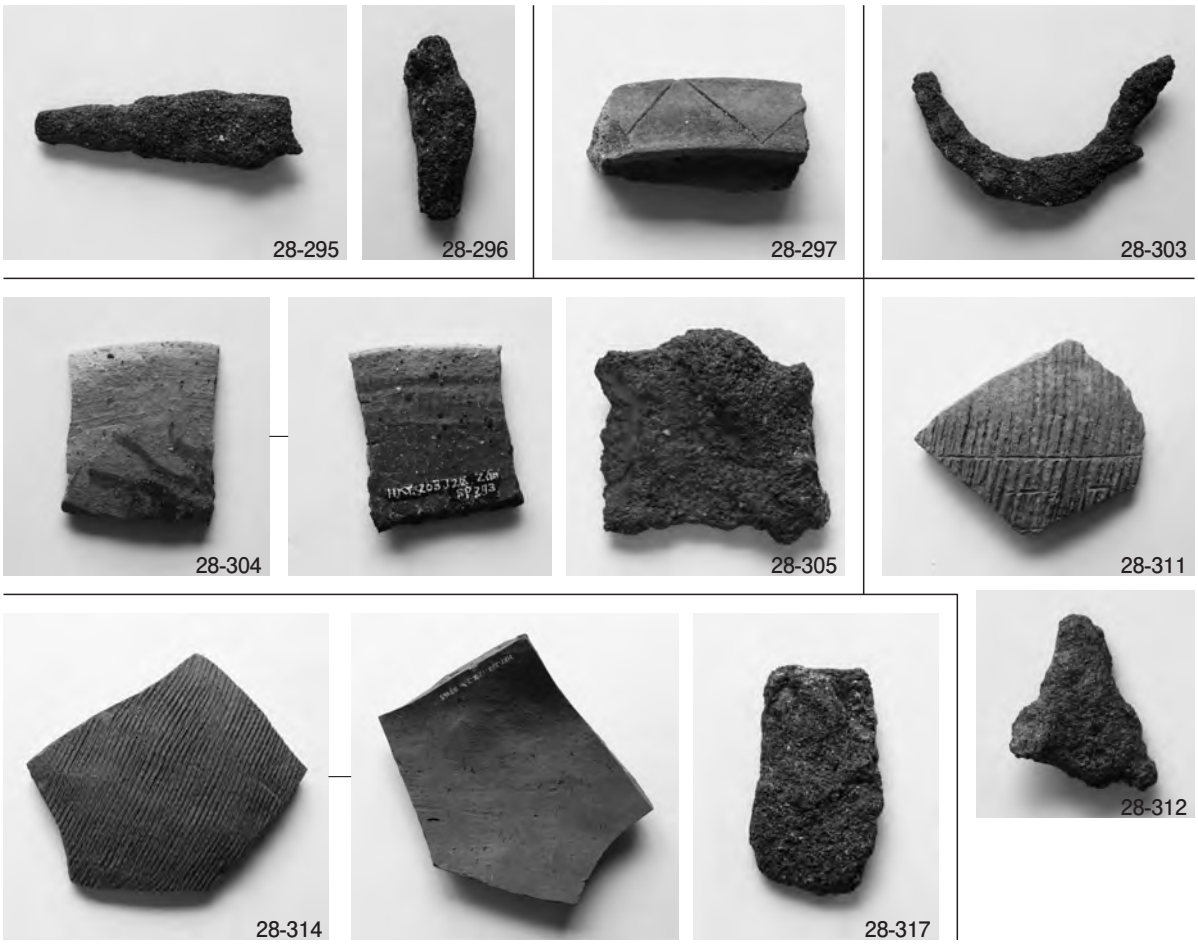


Fig.28　SK120168・120174・120220・120246・120273、
SD120117、SP120165・120277 出土遺物実測図（1/3）



Ph.57　SK120174・120220・120246・120273、SP120123・120165・120277 出土遺物

その他の遺物（Fig.29~32　Ph.58~61）　318 は土師器の壷口縁で、外面にヘラ描きの波状文と竹管文を施す。色調は橙色を呈する。319 は複合口縁壷である。調整はナデ。色調は橙色を呈する。320 は土師器の長頸壷で、口縁端部内側に凹線が巡る。器面には丁寧なヘラミガキが施される。色調は橙色を呈する。口径 18.4㎝を測る。広口壷で、内外面の調整はハケメ。口径は 16.6㎝を測る。322 は直口壷で、内外面の調整はハケメである。口径は 13.3㎝を測る。323 は吉備系の甕で、口縁は垂直に立ち上がり、外面には凹線が巡る。内面はヘラケズリを施す。色調は鈍い褐色を呈する。口径 13.2㎝を測る。324 は広口壷である。色調は灰黄色を呈する。口径 16.3㎝を測る。325 は短頸壺である。内外面にヘラミガキを施す。口径 12.0㎝を測る。326 は小型丸底壷である。口縁外面から肩部にかけて縦方向のヘラミガキ、体部下半は横方向のヘラミガキを施す。器高 8.8㎝、口径 7.4㎝を測る。327 は小型丸底の鉢である。内外面にヘラミガキを施す。器高 5.7㎝、口径 10.3㎝を測る。328 は小型の短頸壺である。外面はハケメ、内面はナデで指頭圧痕が残る。口径 5.5㎝を測る。329 は小型の短頸壺である。外面はハケメ後ナデ。内面はナデ。口径 9.8㎝を測る。330 は片口の鉢である。片口の外面には指押えの痕跡。外面はヘラミガキ。内面に赤色顔料が付着。口径 18.6㎝を測る。331 の底部は欠損しているが、脚付きの鉢か。半球の体部で、内外面に縦方向のヘラミガキを施す。口径 15.4㎝を測る。332 は半球状の鉢である。外面の調整はハケメ、内面はヘラミガキ。口径 20.8㎝を測る。333~336 は蛸壺で、333・334・336 は口縁付近に円形の孔があく。口にかけてやや窄まる。底部は丸底。器面には指頭圧痕が残る。333 は器高 9.6㎝、口径 5.3㎝を測る。335 は器高 6.1㎝、口径 5.4㎝を測る。337 は蓋形土器で、内面に受け部がつく。内外面の調整はヘラミガキである。色調は橙色を呈する。338~353 は土師器甕である。338・339 は外面に水平方向の叩き、内面はヘラケズリ。色調は褐灰色を呈する。340 はやや右下がりの細かな叩き。342 は肩部に 4 条の沈線が巡る。343 は口縁端部を摘上げる。外面の調整はハケメ後ナデ。内面はヘラケズリ。色調は浅黄色を呈する。器高 16.1㎝、口径 13.8㎝を測る。345・347・348 は口縁端部を摘上げる。外面はやや右下がりの細かな叩き。351 は肩部に櫛描波状文を施す。内面はヘラケズリ。色調は灰黄褐色を呈する。352、353 は肩部に縦方向の沈線文を施す。354 は甕で口縁は欠損している。外面の調整はハケメ。内面はヘラケズリを施す。355 は複合口縁の壷である。外面には横方向のヘラミガキを施す。356 は大型の甕で、口縁は直立する。頸部に刻み目を施した突帯が巡る。口径 38.4㎝を測る。357 は壷で、外面の調整はナデ、内面はヘラケズリを施す。口径 18.1㎝を測る。358 は山陰系甑形土器の把手。色調はにぶい黄褐色を呈する。359~362 は山陰系の鼓形器台である。外面の調整はヘラミガキ、内面の上半部はヘラミガキを施す。361 の内面下半はヘラケズリを施す。359 は器高 10.5㎝、口径 20.5㎝、底径 18.5㎝を測る。363 は叩石。表と裏、側面に敲打痕が残る。長さ 17.5㎝、幅 8.0㎝、厚さ 3.7㎝を測る。364 は磨石で、前面に磨りの痕跡が残る。長さ 7.4㎝、幅 6.3㎝、厚さ 3.6㎝を測る。365 は砥石である。現存長 8.0m、幅 3.4㎝、厚さ 1.2㎝を測る。366・367 は管玉で、366 は碧玉、367 は土製である。366 は長さ 2.6㎝、径 0.8㎝を測る。368 は平面形三角形の無頸の鉄鏃である。長さ 2.4㎝、幅 2.0m、厚さ 0.2㎝を測る。369~371 は刀子。372 は長頸族の茎である。373 は鉄塊遺物。444 は錐。現存長 2.2㎝、幅 1.2㎝を測る。

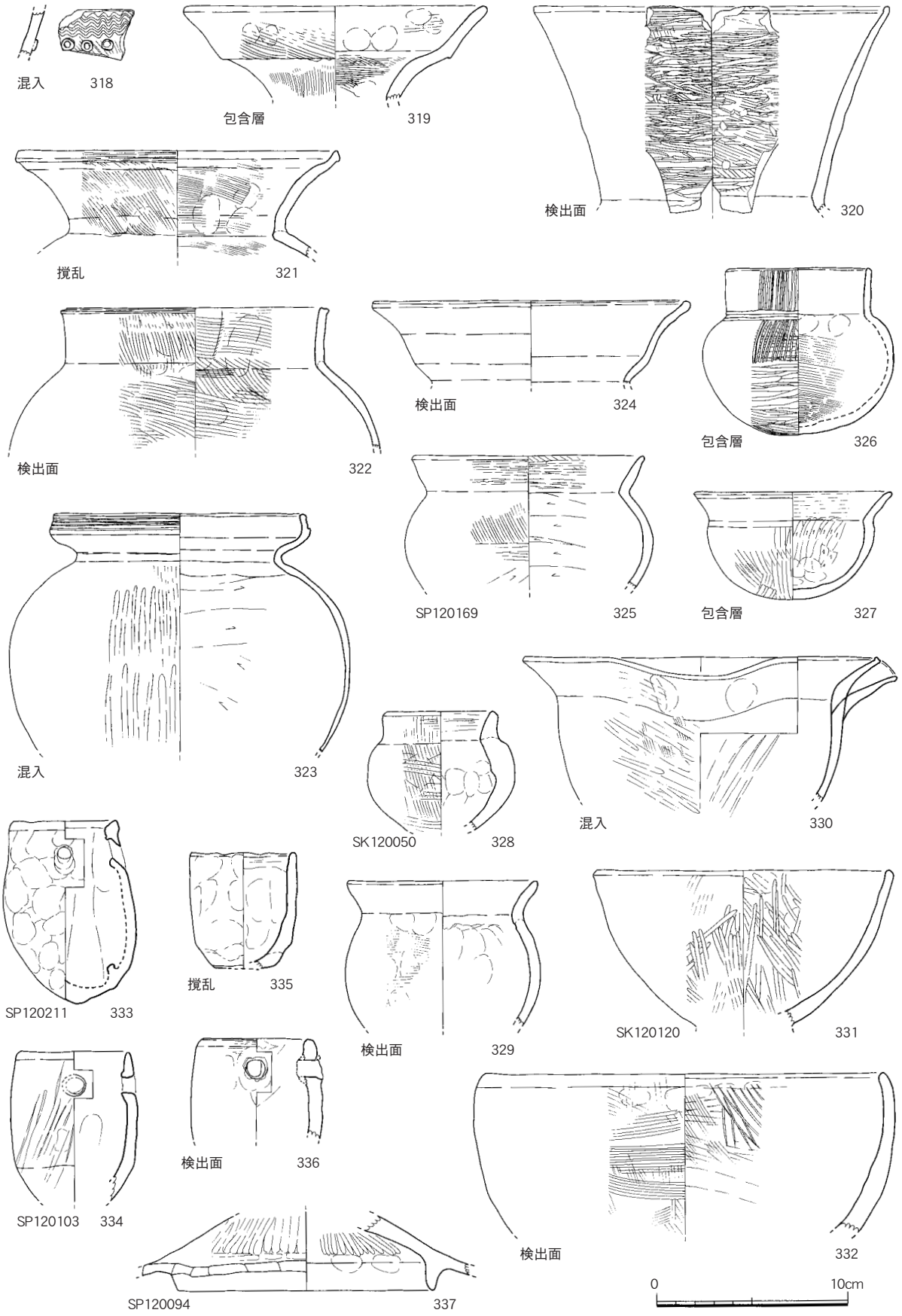
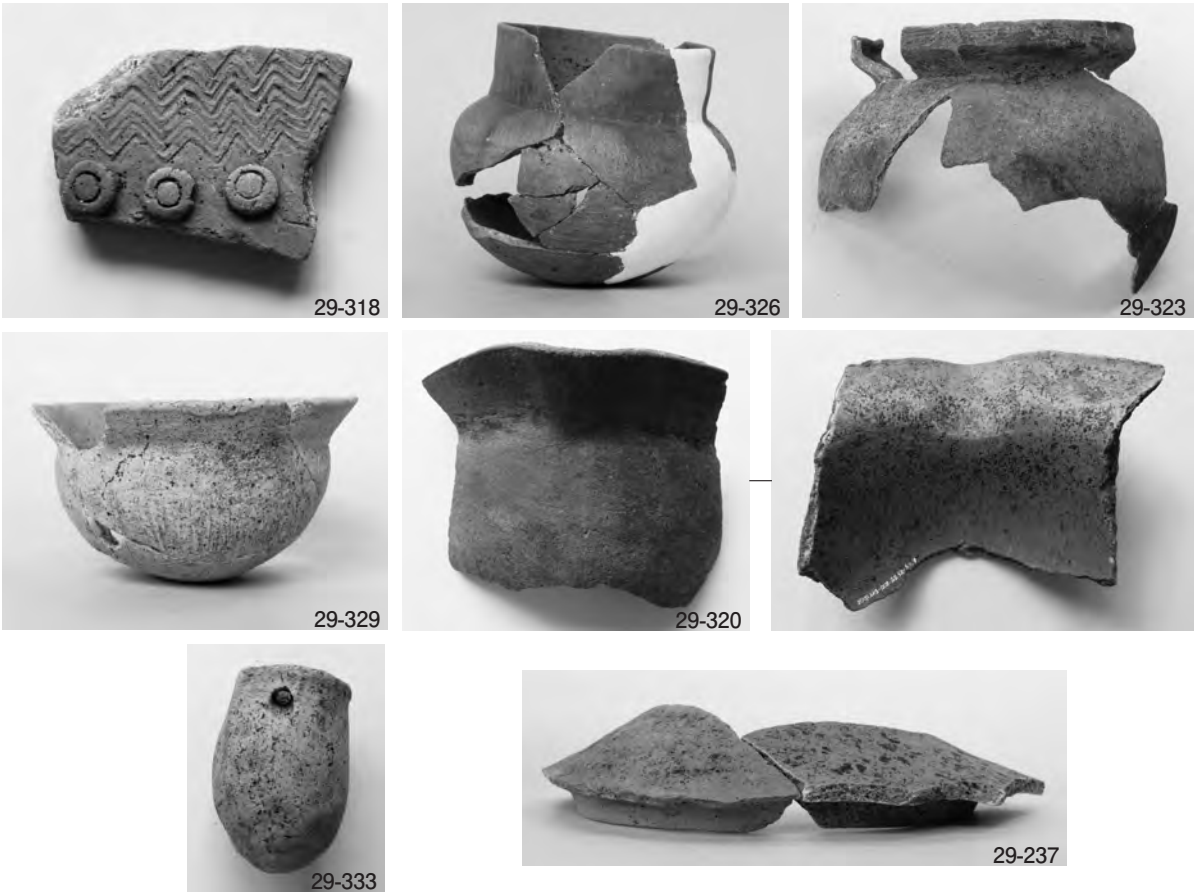


Fig.29　その他の古墳時代前期出土遺物実測図 -1（1/3）



Ph.58　その他の古墳時代前期出土遺物 -1

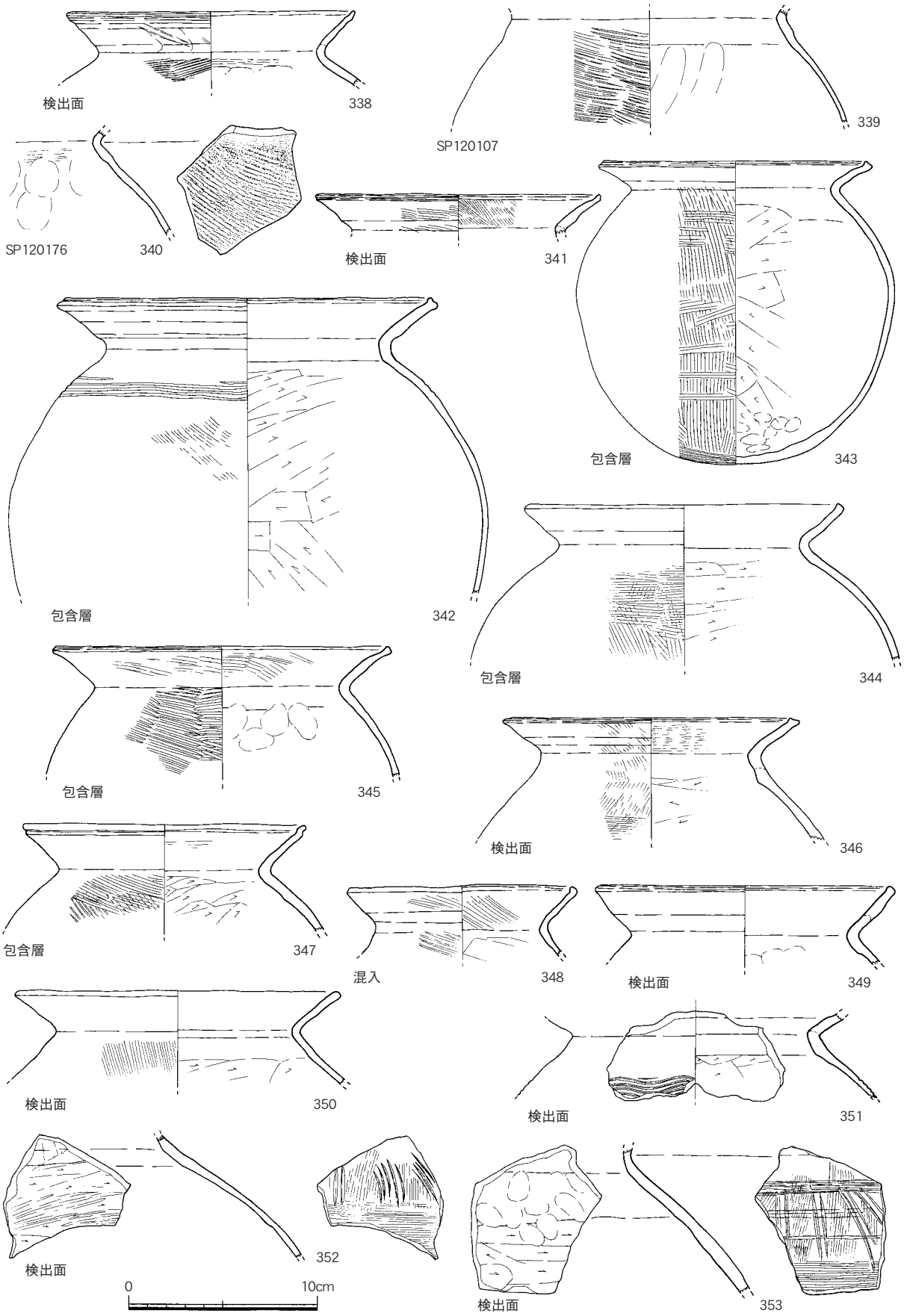


Fig.30　その他の古墳時代前期出土遺物実測図 -2（1/3）

Ph.59　その他の古墳時代前期出土遺物 -2

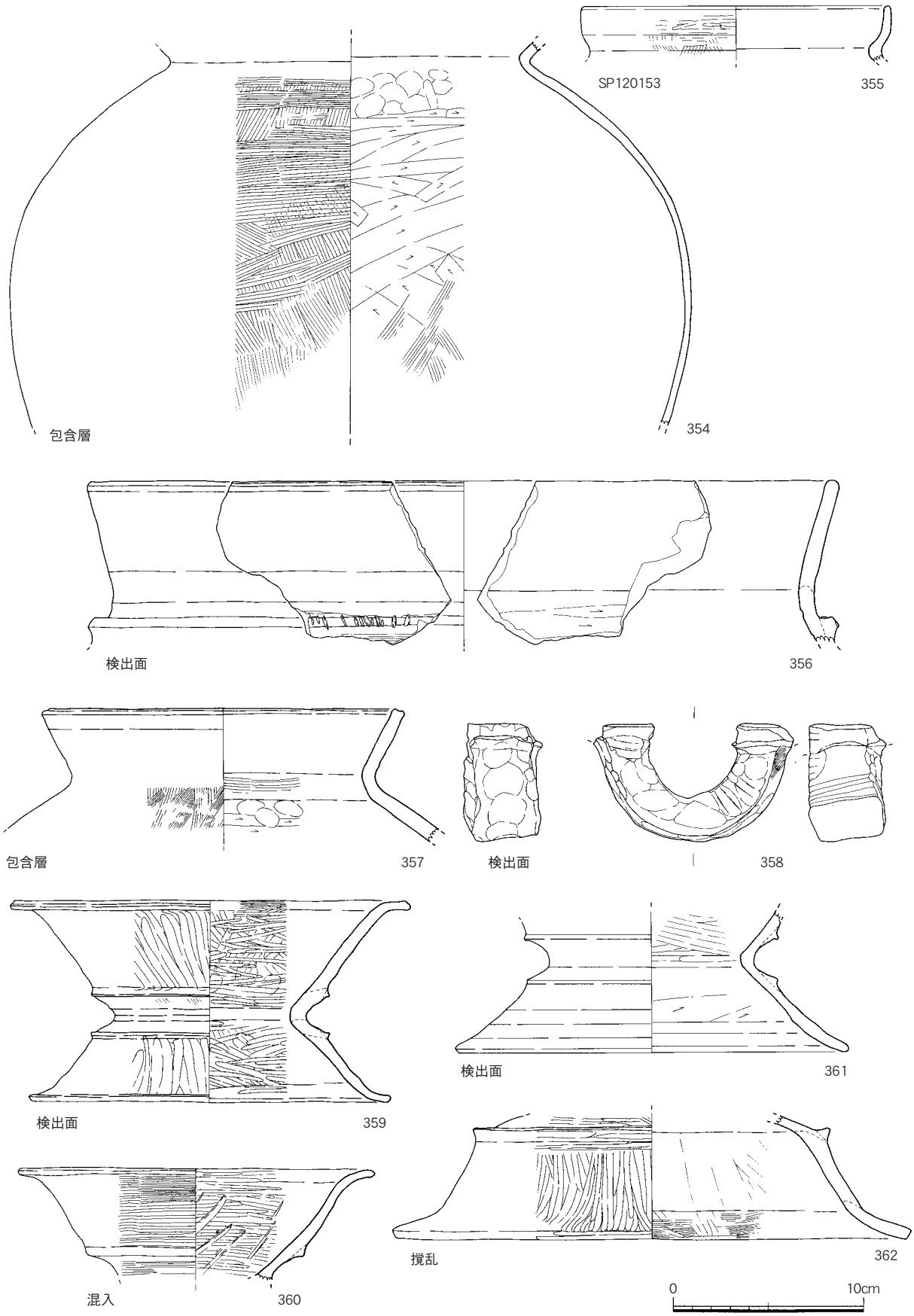


Fig.31　その他の古墳時代前期出土遺物実測図 -3（1/3）

Ph.60　その他の古墳時代前期出土遺物 -3

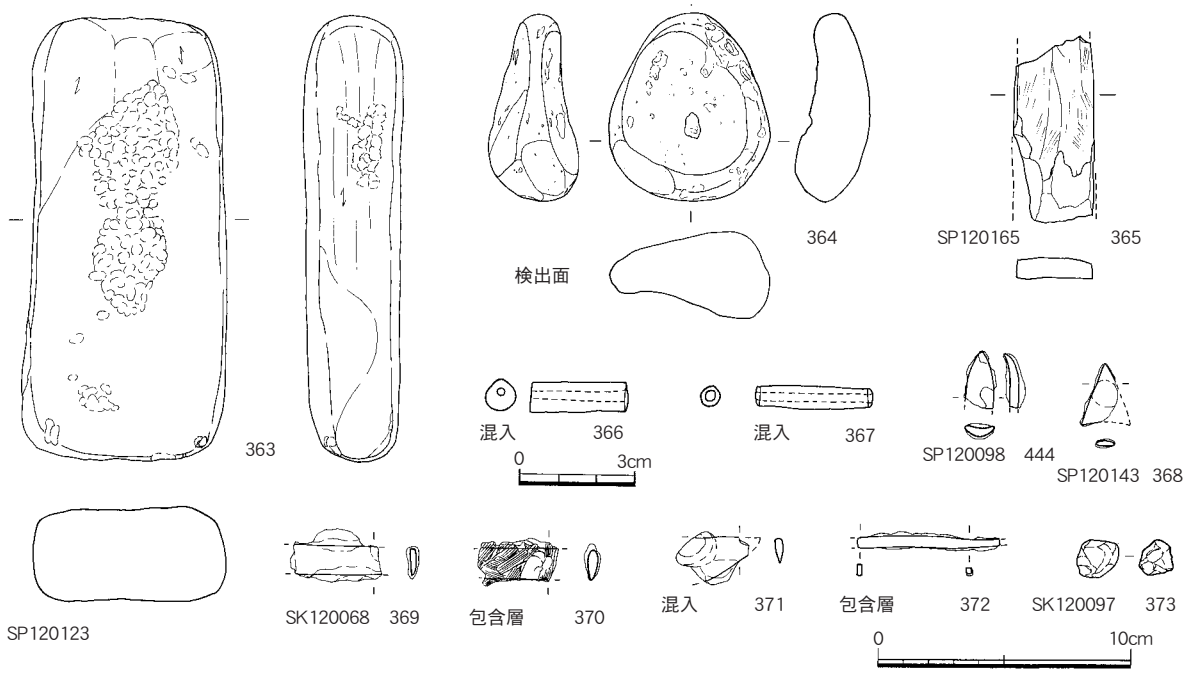
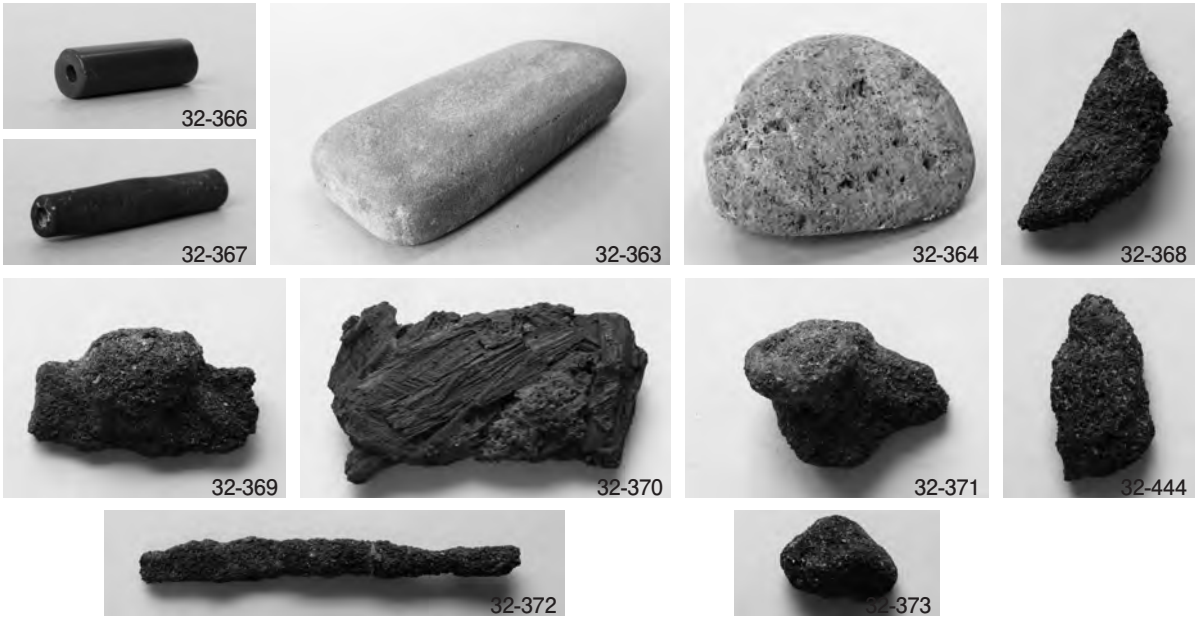


Fig.32　その他の古墳時代前期出土遺物実測図 -4（1/3・1/1）



Ph.61　その他の古墳時代前期出土遺物 -4

7）弥生時代終末期の調査

（1）竪穴住居

SC120021（Fig.33）　調査区北側で検出された。撹乱のため、平面形は不明確であるが、長方形を呈するものか。現存長 2.5m、深さ 0.2m を測る。主柱穴は不明。

SC120134（Fig.33）　調査区中央で検出された。撹乱のため、平面形は不明確であるが、長方形を呈するものか。現存幅 2.2m、深さ 0.2m を測る。主柱穴は不明。

出土遺物（Fig.34）　374 は口縁を拡張させた壷で、外面に竹管文を施した円形浮文を貼り付ける。色調は橙色を呈する。375 は甕口縁である。376 は傘形土器で、器面はヘラミガキを施す。内面にはかえりが巡る。色調は橙色を呈する。377 は丸底の鉢で、口径 13.8㎝を測る。

SC120150（Fig.33）　調査区中央南よりで検出された。撹乱のため、平面形は不明確であるが、長方形を呈するものか。現存幅 3.1m、深さ 0.2m を測る。主柱穴は不明。

出土遺物（Fig.34）　378 は吉備系の甕で、口縁は受け口となる。色調はにぶい黄橙色を呈する。

SC120247（Fig.33）　調査区南側で検出された。撹乱のため、平面形は不明確であるが、長方形を呈するものか。深さ 0.1m を測る。主柱穴は不明。

出土遺物（Fig.34、Ph.69）　379 は高坏の坏部で、口縁は接合部で大きく外反する。器面には細かなヘラミガキを施す。外面には縦方向の暗文を施す。色調は橙色を呈する。380 は甕口縁で、口径 13.8㎝を測る。381、382 は丸底の鉢である。301 は口径 13.8㎝を測る。382 の外面は横方向のヘラミガキを施す。器高 7.3㎝、口径 16.5㎝を測る。

Ph.62　SC120134（南から）

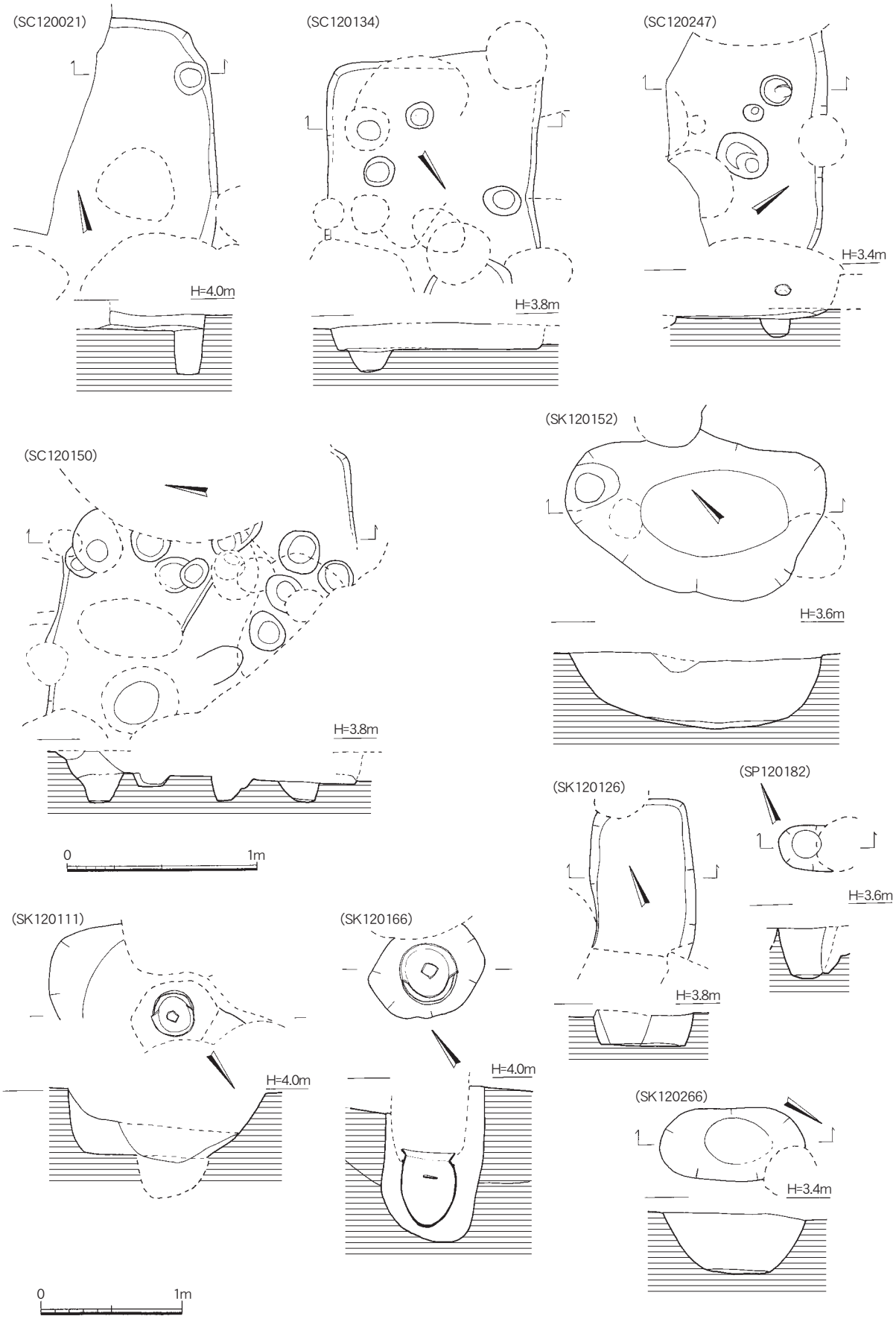


Fig.33　SC120021・120134・120150・120247、SK120111・120126・120152・120166・120266、SP120182 実測図

（2）土坑

SK120111（Fig.33　Ph.64）　調査区中央で検出された。SK166 に切られる。撹乱のため、平面形は不明確であるが、長方形を呈するものか。深さ 0.4m を測る。

出土遺物（Fig.35　Ph.69）　389 は短頸壺で、外面にはヘラミガキを施す。口径 12.9㎝を測る。388~390 は甕で、388 の口縁は緩やかに外反する。口径 23.6㎝を測る。389・390 は口縁は「く」の字形を呈する。口径 21.8㎝、21.1㎝を測る。391 は脚付き甕の脚部である。底径 10.9㎝を測る。

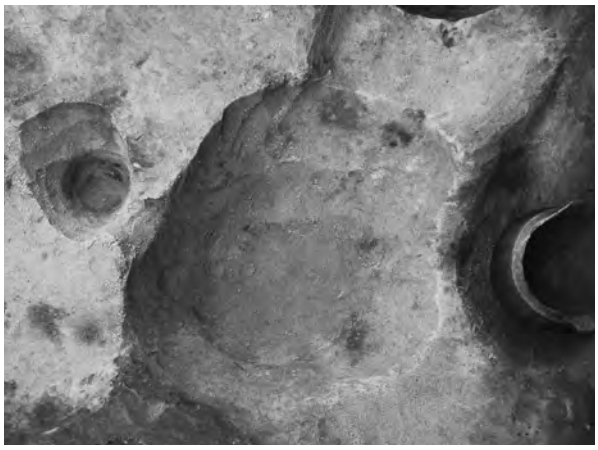
SK120126（Fig.33）　調査区中央で検出された。SK135 に切られる。撹乱を受けて全長は不明であるが、隅丸長方形を呈し、幅 0.7m、深さ 0.2m を測る。

出土遺物（Fig.35）　392 は高坏の坏部で、口縁は接合部で大きく外反する。器面には細かなヘラミガキを施す。外面には波状の暗文、内面は縦方向の暗文を施す。口径 30.0㎝を測る。393 は甕口縁で、口径 23.4㎝を測る。

SK120152（Fig.33　Ph.65）　調査区中央で検出された。不整楕円形を呈し、長さ 1.9m、幅 1.1m、深さ 0.5m を測る。

出土遺物（Fig.35）　446 は高坏の坏部で、口縁は接合部で大きく外反する。器面には細かなヘラミガキを施す。内外面には縦方向の暗文を施す。口径 30.0㎝を測る。394、335 は「く」の字形の甕口縁で、口径 17.6㎝、19.1㎝を測る。

Ph.63　SC120247（南から）



Ph.64　SK120111（東から）

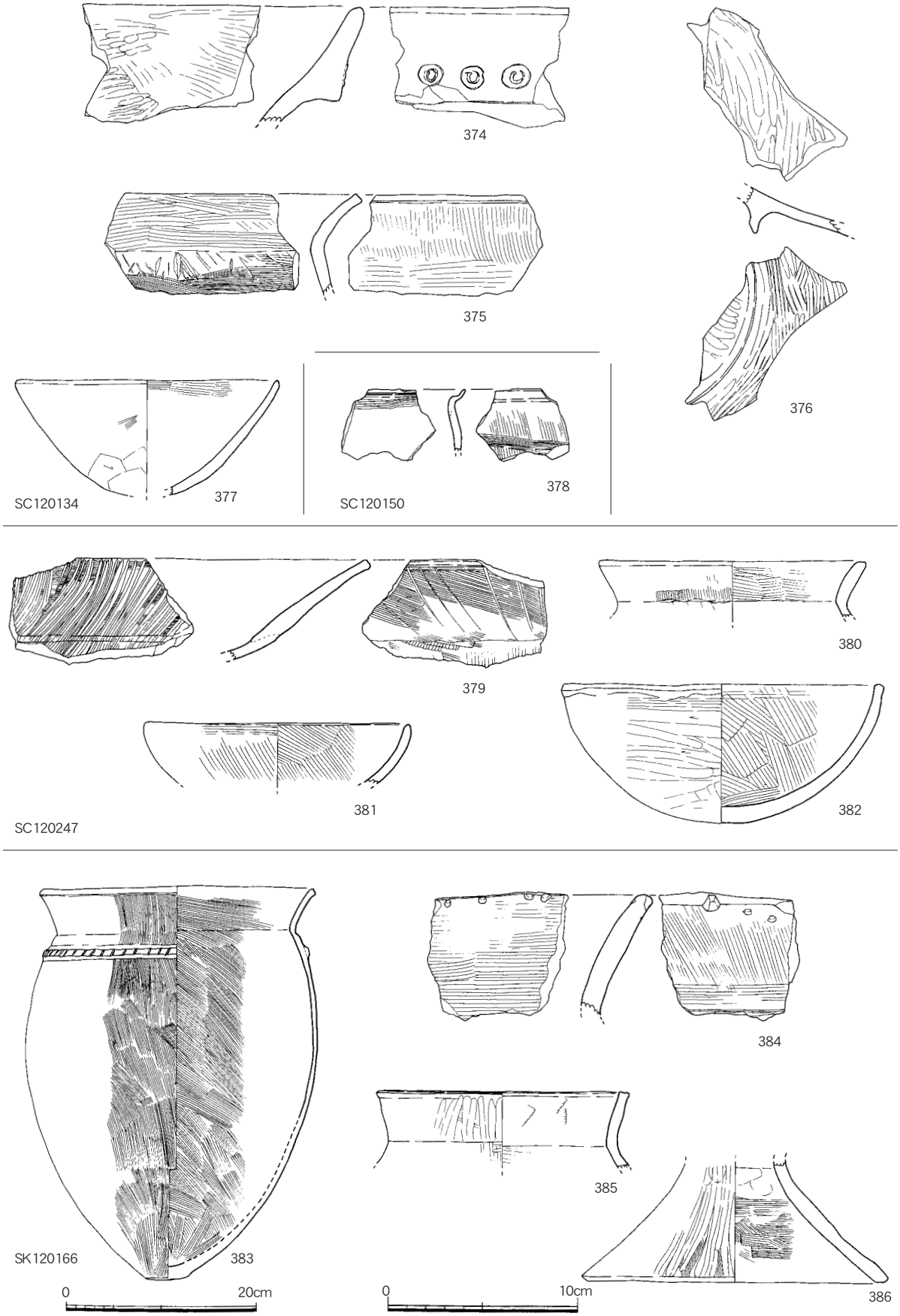


Fig.34　SC-120134・120150・120247、SK120166 出土遺物実測図（1/3・1/6）

SK120166（Fig.33　Ph.66~68）　調査区中央で検出された埋甕。SK111 を切る。径 0.5m の不整円形を呈し、深さ 0.8m を測る。内部に大甕を直立させて埋置する。

出土遺物（Fig.34　Ph.69）　383 は「く」の字形口縁の大型甕で、屈曲部のやや下には突帯がつき、表面に櫛目原体の刺突を施す。底部はレンズ状を呈す。調整は内外面ともハケメを施す。器高 41.8㎝、口径 29.5㎝を測る。384 は大甕口縁で、口唇部内外に刺突文を施す。調整は内外面ともハケメを施す。385 は直口壷で、外面には縦方向のヘラミガキを施す。口径 12.4㎝を測る。386 は脚付き壷の脚部である。外面には縦方向のヘラミガキを施す。底径 15.4㎝を測る。

SK120266（Fig.33）　調査区南側で検出された。不整楕円形を呈し、長さ 1.0m、幅 0.5m、深さ 0.4m を測る。

出土遺物（Fig.35）　396 は丸底の鉢である。内外面にヘラミガキを施す。口径 11.8㎝を測る。

Ph.65　SK120152（南から）

Ph.66　SK120166 検出状況（南から）

Ph.67　SK120166（南から）

Ph.68　SK120166 完掘状況

（3）柱穴その他の出土遺物

SP120182（Fig.33）　調査区中央南よりで検出された。径 0.3~0.4m、深さ 0.3m を測る。

出土遺物（Fig.35）　397 は直口壷である。外面にはヘラミガキを施す。口径 7.4㎝を測る。

その他の遺物（Fig.36・37　Ph.70）　398 は大型の直口壷である。調整はハケメを施す。口径 15.0㎝を測る。399 は直口壷である。調整はハケメを施す。口径 11.3㎝を測る。400 は小型丸底の鉢である。調整はハケメを施す。器高 7.5㎝、口径 11.7㎝を測る。401 は高坏で、坏部の上半で大きく外反する。器面にはヘラミガキを施した後、縦方向の暗文を施す。402 は丸底の鉢で、器面にはヘラミガキを施す。口径 11.8㎝を測る。403、404、405 は丸底鉢で、器面に指頭圧痕が残る。器高 6.0、5.1、3.2㎝、口径 13.2、10.0、7.2㎝を測る。406 は支脚である。器面には指頭圧痕が残る。407 は大型の甕で、屈曲部に断面台形の突帯が巡る。調整は内外面ともハケメを施す。口縁端と内面に刺突文を施す。口径 40.8㎝を測る。408・409 は「く」の字形口縁の甕である。口径 24.0、19.2㎝を測る。410 は短頸壺で、器面に横方向のヘラミガキを施す。口径 19.7㎝を測る。411 は甕口縁で、口径 23.4㎝を測る。412・413 はレンズ状の底部片である。414 は叩石である。敲打と研磨面が見られる。長さ 11.4㎝、幅 7.6㎝、厚さ 7.2㎝を測る。414 は土器転用の円盤である。長さ 6.0㎝、幅 5.0㎝、厚さ 1.4㎝を測る。416・417 は無茎式の三角形の鉄鏃である。長さ 2.5、2.8㎝、幅 2.5、2.1㎝、厚さ 0.4㎝を測る。418 は圭頭の鉄鏃で、現存長 6.3㎝、幅 1.4㎝を測る。419 は長頸の鉄鏃で両端を欠く。420 は鉄鏃の茎である。421 は鉄鏃の鏃身か。422 は不明鉄片。厚さ 0.2㎝を測る。424 は鍛造鉄片。重さ 5.6g。423 は鉄塊。重さ 28.7g。

Ph.69　SC120134・120150・120247、SK120166・120111 出土遺物

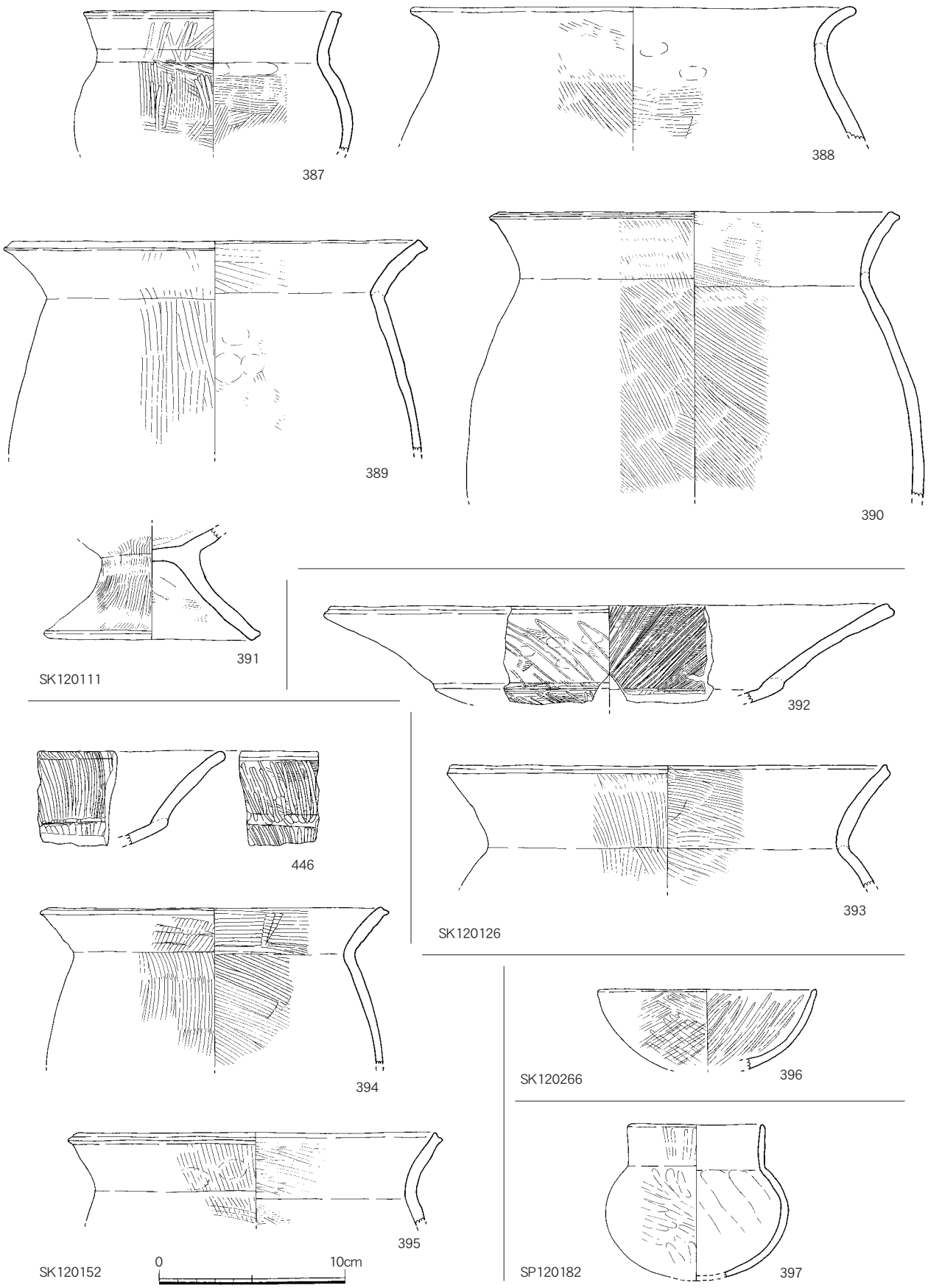


Fig.35　SK120111・120126・120152・120266、SP120182 出土遺物実測図（1/3）

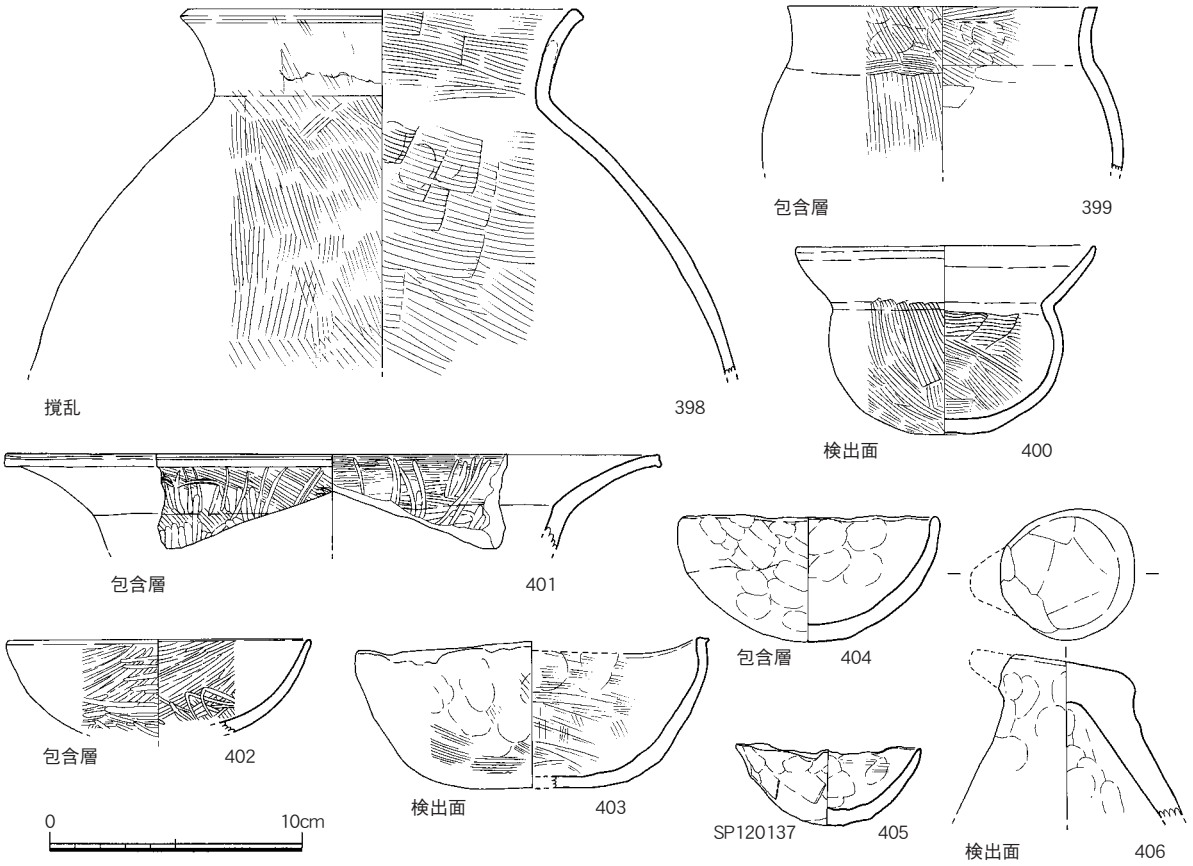
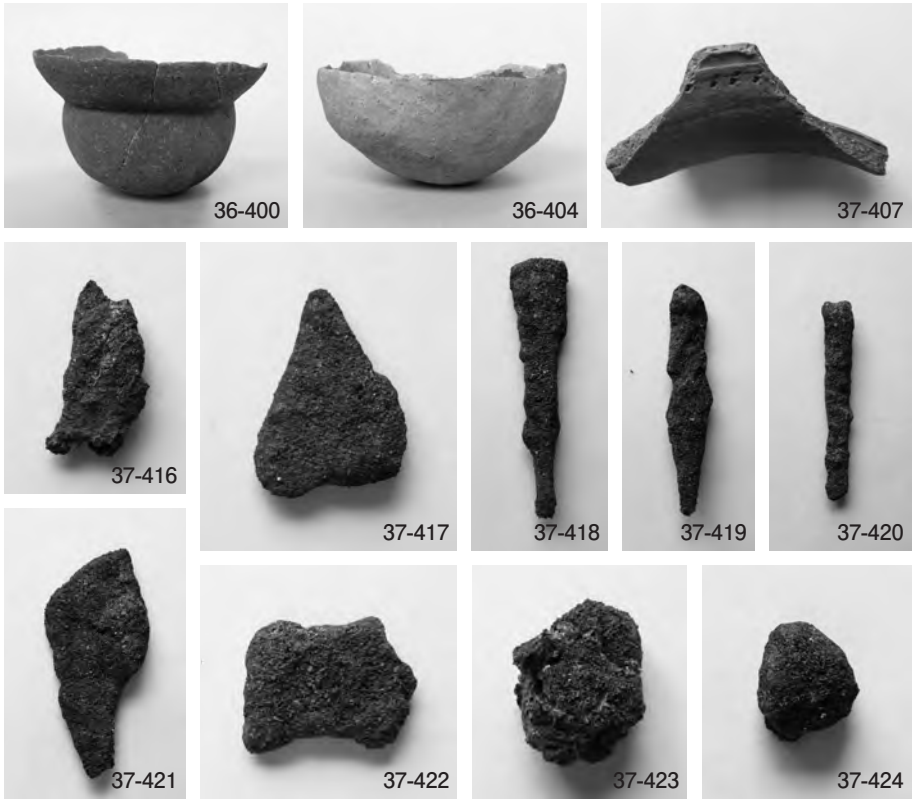


Fig.36　その他の弥生時代終末期出土遺物実測図 -1（1/3）



Ph.70　その他の弥生時代終末期出土遺物

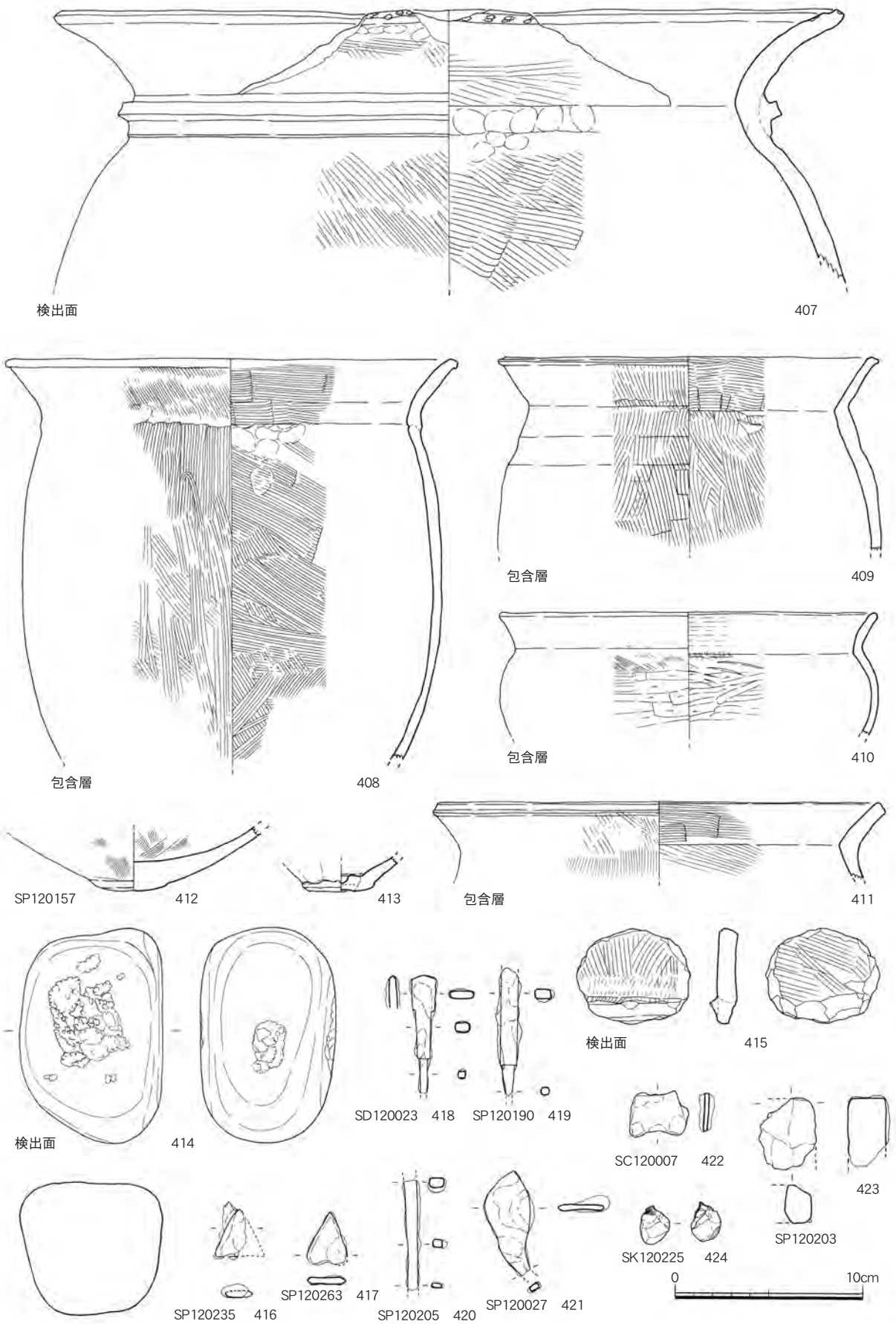


Fig.37　その他の弥生時代終末期出土遺物実測図 -2（1/3）

8）弥生時代中期の調査

（1）甕棺墓

ST120028（Fig.38　Ph.71~75）　調査区の北側で検出された。撹乱を受けているが、中型の合口棺で、下甕が遺存。主軸方位は N-89°-E。棺はほぼ水平に埋置している。棺内には大腿骨が遺存していた。

出土遺物（Fig.39　Ph.92）　303 の上甕は口縁下と胴部中位より下に断面三角形の突帯がつく。外面は黒色顔料塗布か。器高 75.4㎝、口径 63.8cm、底径 8.8cm を測る。304 の下甕は SK120014 より出土。胴部中位より下に断面三角形の突帯がつく。外面は黒色顔料塗布か。黒斑がつく。器高 74.4㎝、口径 66.4cm、底径 10.4cm を測る。両者とも調整はハケメ後、丁寧にナデ調整を施す。

ST120065（Fig.38　Ph.76~78）　調査区の中央北よりで検出された。撹乱を受けているが、広口壷の単棺。主軸方位は N-152°-E。棺は水平より数度傾斜を持ち、埋置している。

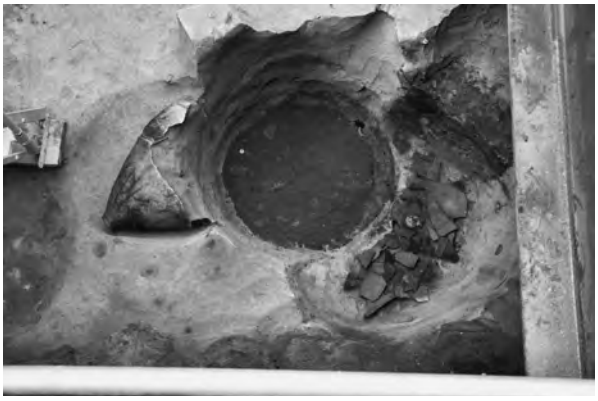
出土遺物（Fig.42　Ph.101）　305 は鋤先口縁の広口壷で、肩部の 2 カ所に断面三角形の突帯がつく。口頸部には縦方向の暗文を断続的に施す。黒色顔料塗布か。器高 42.3m、口径 35.2cm、底径 8.8cm を測る。306 は掘方から出土した広口壷で、305 と同様の形態を呈する。

ST120080（Fig.38　Ph.79~83）　調査区の中央で検出された。小型の合口棺で、主軸方位は N-37°-W。棺はほぼ水平に埋置している。棺全体長 0.7m、幅 0.3m を測る。

出土遺物（Fig.42　Ph.101）　307 の上甕は逆 L 字形口縁である。器高 36.0m、口径 29.2cm、底径 7.7cm を測る。307 の下甕は口縁下に断面三角形の突帯がつく。器高 36.7m、口径 31.3cm、7.4cm を測る。両者とも外面の調整はハケメ、内面はナデを施す。

ST120082（Fig.38　Ph.79、84~88）　調査区の中央で検出された。撹乱を受けているが、大型の合口棺で、主軸方位は N-75°-W。棺はほぼ水平に埋置している。棺内には人骨の一部が遺存していた。

出土遺物（Fig.39　Ph.92）　309 の上甕は口縁下に断面三角形の突帯、胴部中位より下に断面「コ」字形の突帯がつく。外面は黒色顔料塗布か。器高 85.8㎝、口径 67.4cm、底径 13.6cm を測る。310 の下甕は胴部中位より下に断面三角形の突帯がつく。外面は黒色顔料塗布か。器高 85.0㎝、口径 64.8cm、底径 12.0cm を測る。両者とも調整はハケメ後、丁寧にナデ調整を施す。



Ph.71　ST120028、SK120014（南から）

Ph.72　ST120028 検出状況（西から）

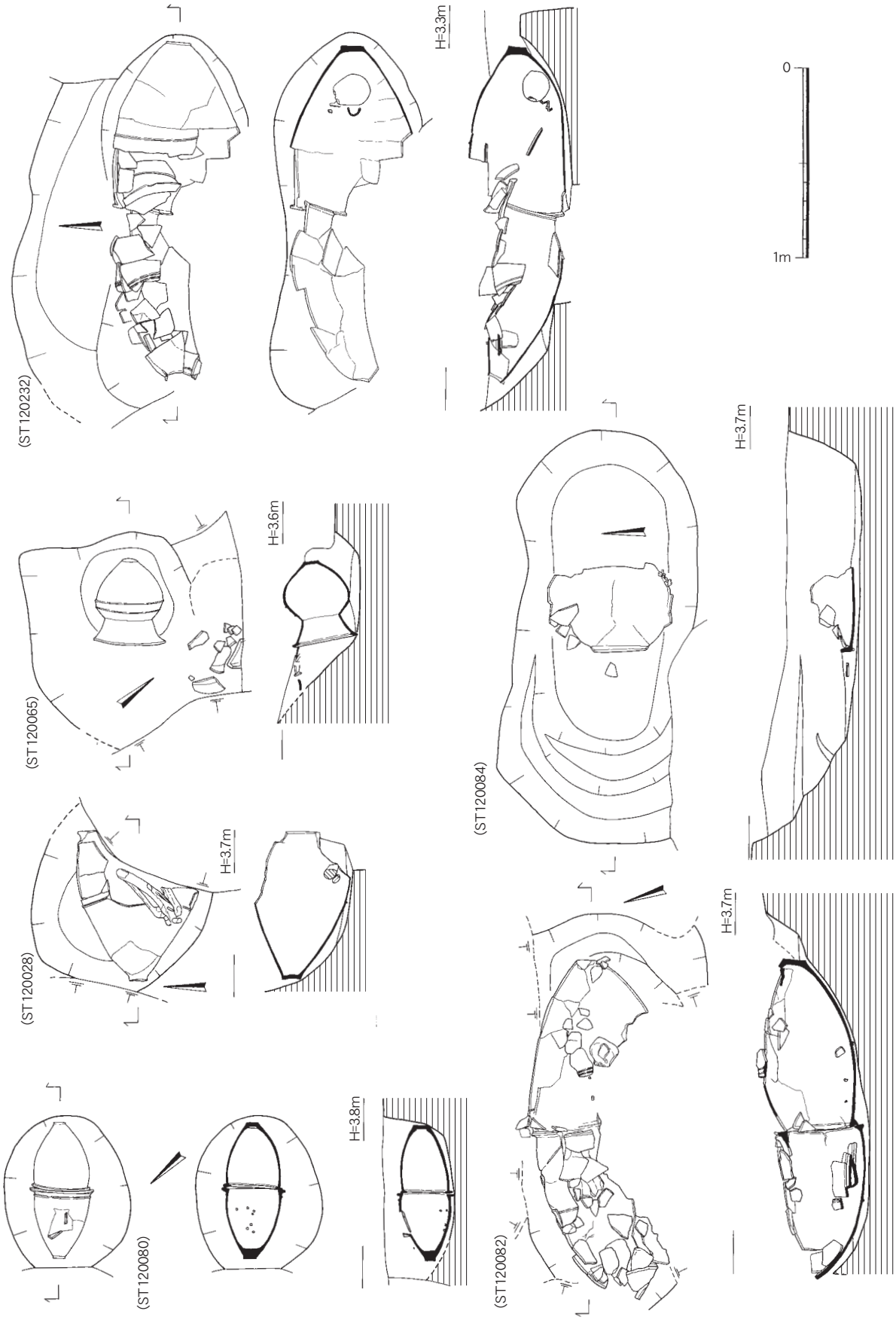
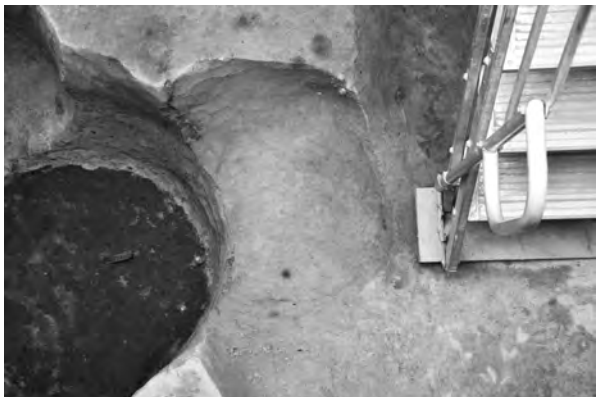


Fig.38　ST120080・120028・120065・120082・120084・120232 実測図（1/30）

Ph.73　ST120028 内部（西から）

Ph.74　ST120028 内人骨（西から）



Ph.75　ST120028 掘方（北から）

Ph.76　ST120065（北から）

Ph.77　ST120065 内部（南から）

Ph.78　ST120065 掘方（南から）

ST120084（Fig.38　Ph.79）　調査区の中央で検出された。撹乱を受けて棺の一部のみが遺存する。単棺か。主軸方位は N-80°-W。棺はほぼ水平に埋置している。

出土遺物（Fig.39　Ph.92）　311 は胴部中位より下に断面「コ」字形の突帯がつく。口径 63.0cm を測る。

ST120085（Fig.40　Ph.89~91・93~96）　調査区の中央で検出された。大型の合口棺で、主軸方位は N-101°-E。棺はほぼ水平に埋置している。棺内には頭骨や四肢骨などが遺存していた。棺全体長 1.8m、幅 0.7m を測る。

Ph.79　ST120080・120082・120084 検出状況（東から）

Ph.80　ST120080 検出状況（南から）

Ph.81　ST120080 内部（南から）

Ph.82　ST120080 歯出土状況（南から）

Ph.83　ST120080 掘方（南から）

出土遺物（Fig.39　Ph.92）　312 の上甕は胴部中位より下に断面「コ」字形の突帯がつく。外面は黒色顔料塗布か。器高 84.8㎝、口径 66.0cm、底径 10.4cm を測る。313 の下甕は胴部中位より下に断面三角形の突帯がつく。外面は黒色顔料塗布か。器高 81.7㎝、口径 61.9cm、底径 9.9cm を測る。両者とも調整はハケメ後、丁寧にナデ調整を施す。

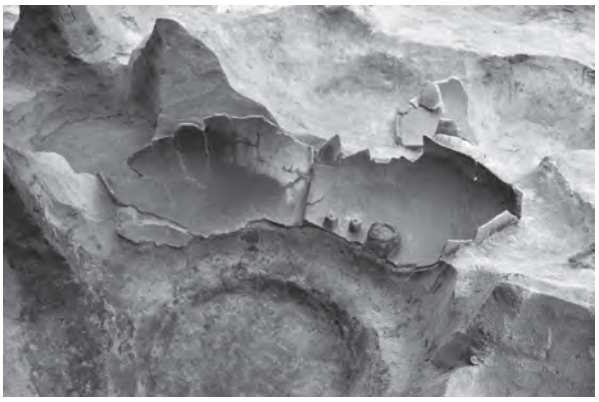
ST120232（Fig.38　Ph.97~103）　調査区の中央南寄りで検出された。撹乱を受けているが、大型の合口棺で、主軸方位は N-86°-W。棺はほぼ水平に埋置している。棺内には頭骨の一部が遺存していた。棺全体長 1.8m、幅 0.7m を測る。

出土遺物（Fig.41　Ph.101）　314 の上甕は胴部中位より下に断面「コ」字形の突帯がつく。外面は黒色顔料塗布か。器高 87.5㎝、口径 61.0cm、底径 11.0cm を測る。315 の下甕は胴部中位より下に断面三角形の突帯がつく。外面は黒色顔料塗布か。器高 86.0㎝、口径 61.2cm、底径 11.3cm を測る。両者とも調整はハケメ後、丁寧にナデ調整を施す。

Ph.84　ST120082 検出状況（南から）

Ph.85　ST120082 検出状況（北から）

Ph.86　ST120082・120084（右）内部（東から）



Ph.87　ST120082 内部（南から）

Ph.88　ST120082 人骨出土状況（南から）

Ph.89　ST120085 検出状況（西から）

（2）その他の遺物

出土遺物（Fig.43　Ph.104）　425 は縄文晩期夜臼式の浅鉢で、口縁は受け口状となる。器面には横方向のヘラミガキが施される。色調はにぶい黄橙色を呈する。426 は弥生前期甕底部を転用した円盤である。底部に葉脈圧痕が残る。427 は鋤先口縁の丹塗りの広口壷である。口径 37.0m を測る。429 は弥生後期甕口縁で、内面と外面屈曲部に突帯が巡る。430 は袋状口縁壷である。口径 11.2㎝を測る。431~433 は器台である。432 は器高 15.5㎝、口径 11.6㎝を測る。433 は口縁内側に刺突列点が巡る。

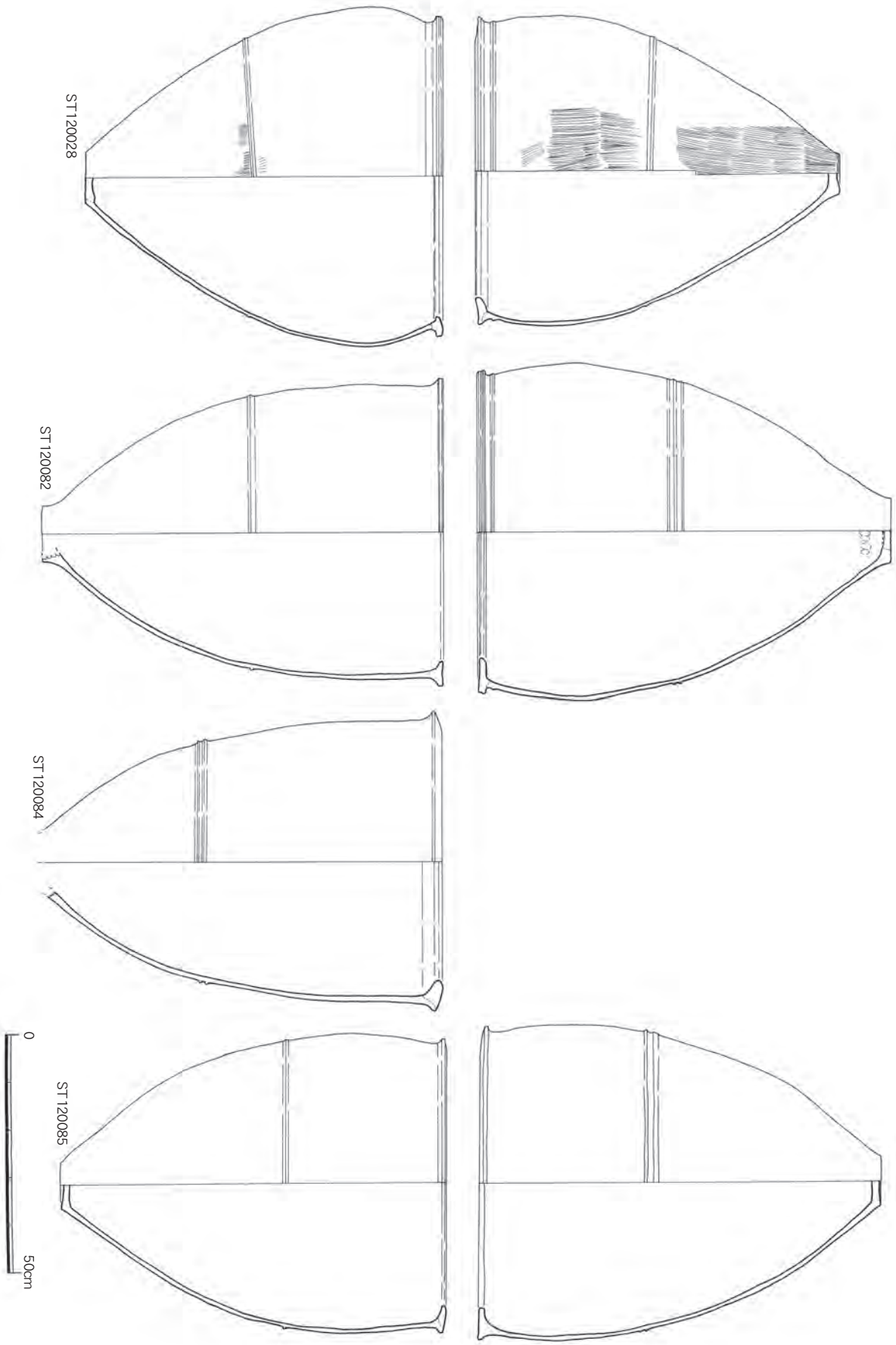


Fig.39　ST120028・120082・120084・120085 甕棺実測図（1/12）

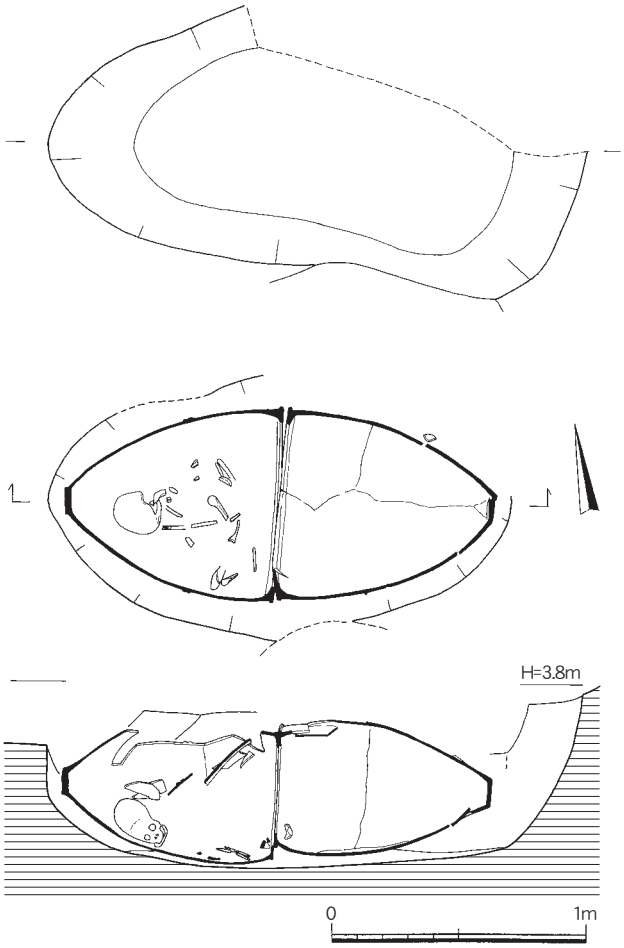
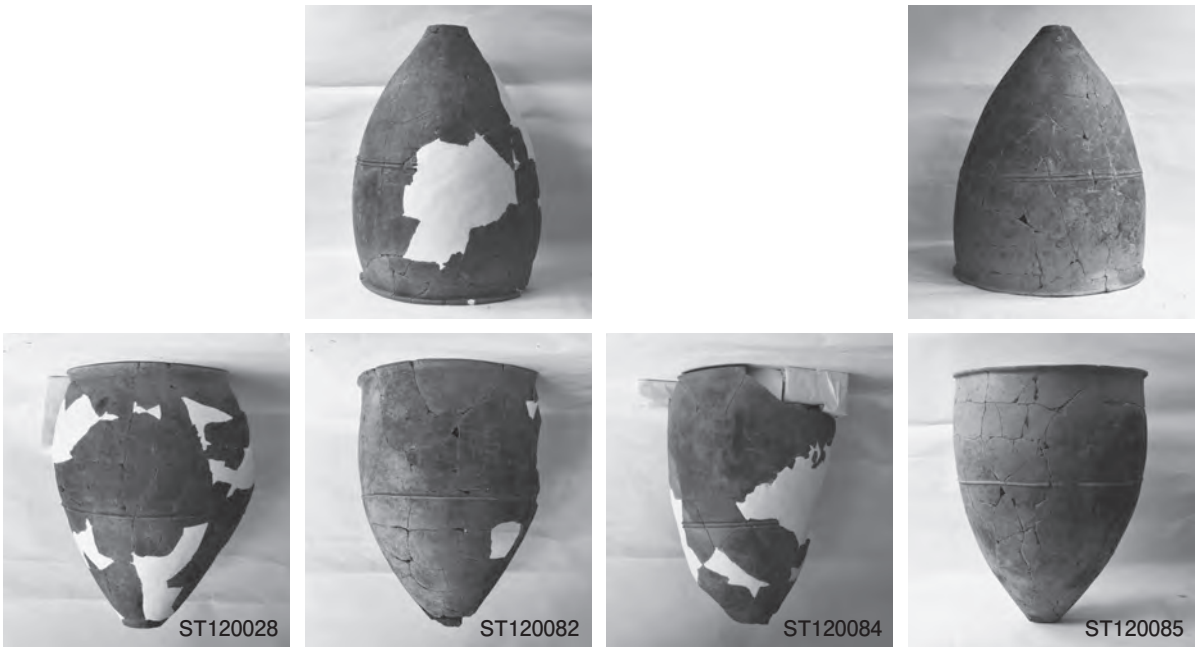


Fig.40　ST120085 実測図（1/30）

Ph.90　ST120085 検出状況（北から）

Ph.91　ST120085 内部（東から）



Ph.92　ST120028・120082・120084・120085 出土甕棺

Ph.93　ST120085 内部（北から）

Ph.94　ST120085 人骨出土状況（東から）

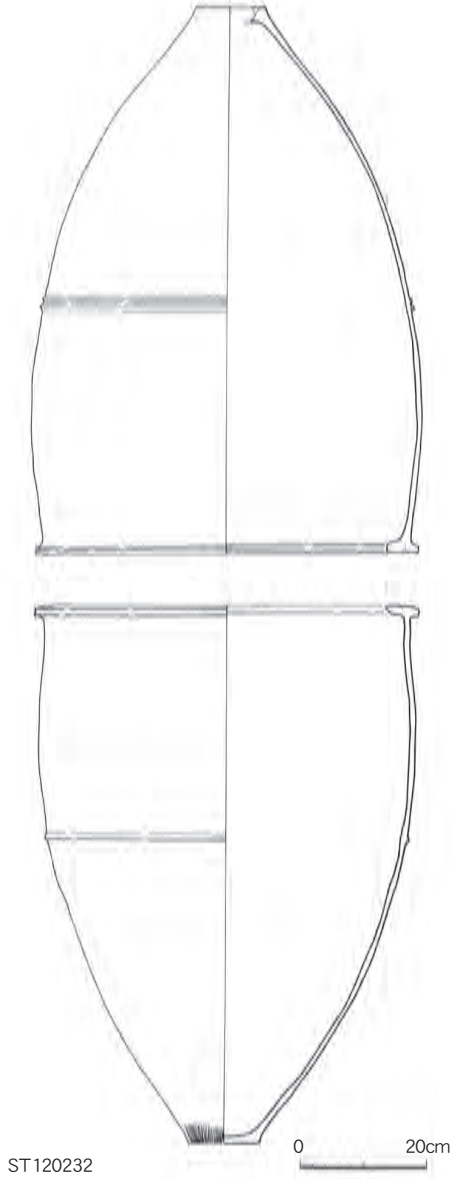


Fig.41　ST120232 甕棺実測図（1/12）

Ph.95　ST120085 人骨出土状況（北から）

Ph.96　ST120085 掘方（南から）

Ph.97　ST120232 検出状況（西から）

Ph.98　ST120232 検出状況（北から）

Ph.99　ST120232 内面（西から）

Ph.100　ST120232 内面（北から）

Ph.101　ST120232・120080・120065 出土甕棺

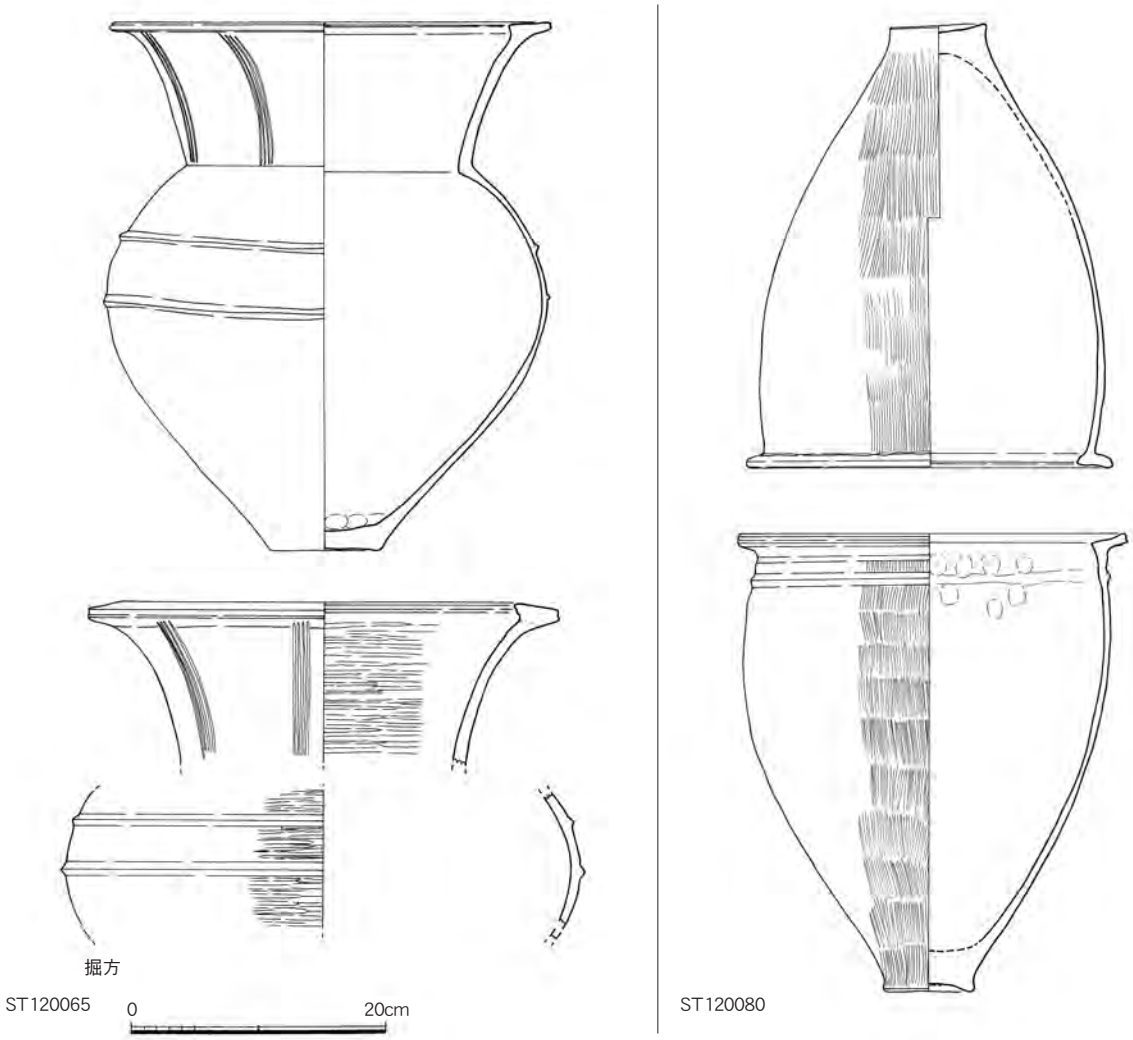


Fig.42　ST120065・120080 甕棺実測図（1/6）

Ph.102　ST120232 人骨出土状況（西から）

Ph.103　ST120232 掘方（西から）

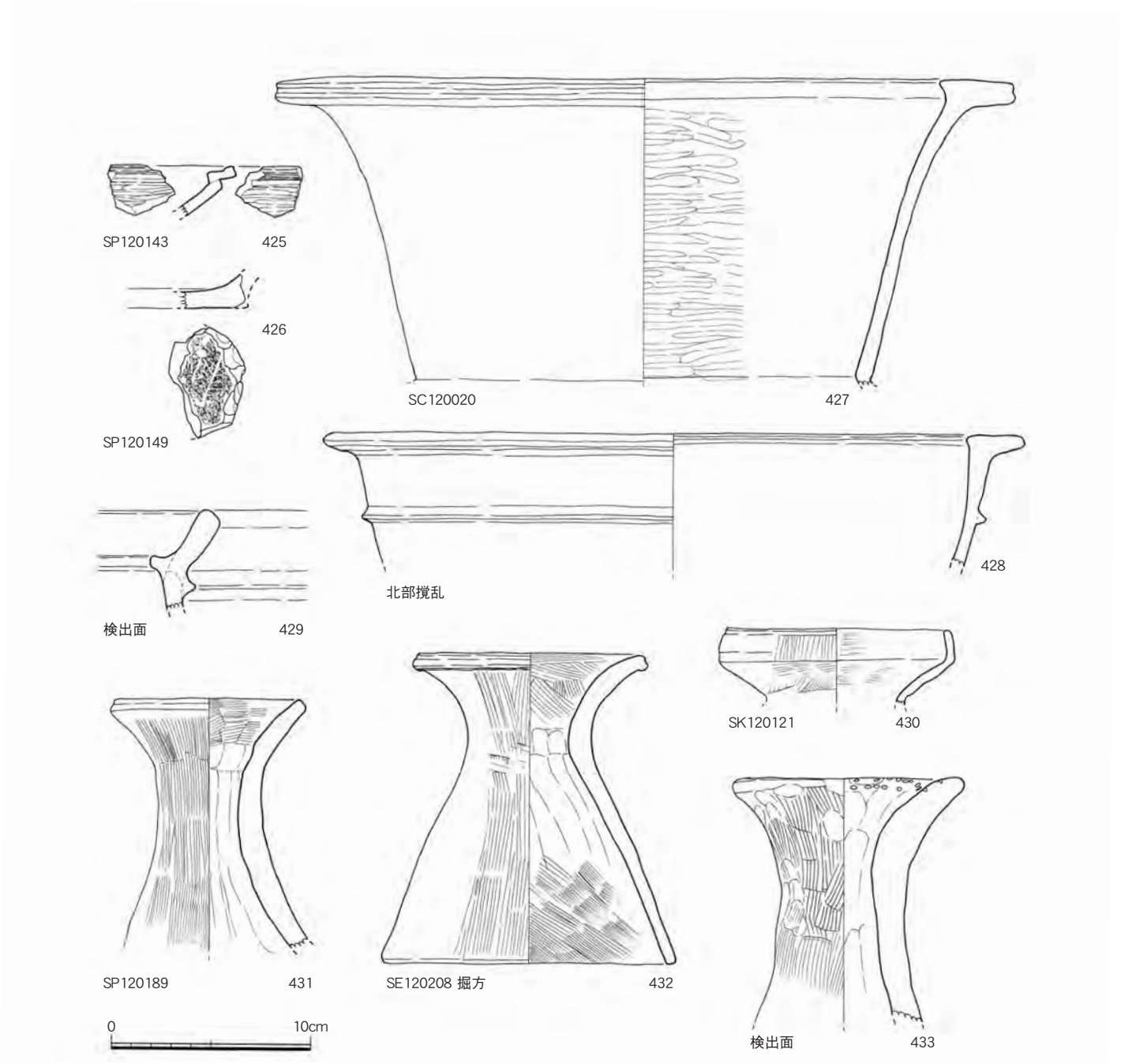
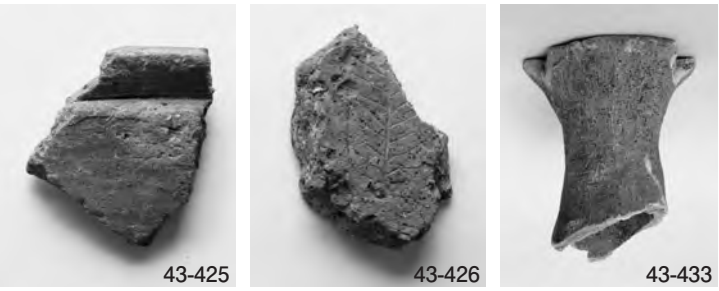
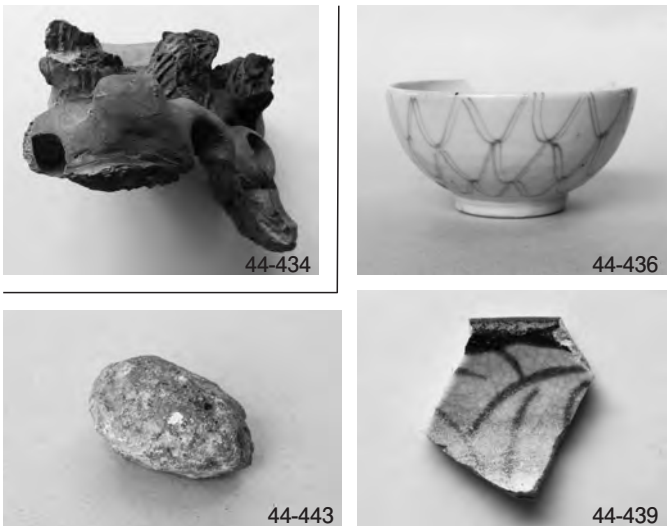


Fig.43　その他の縄文・弥生時代出土遺物実測図（1/3）



Ph.104　その他の縄文・弥生時代出土遺物

9）近世の調査



Ph.105　近世遺物

SE120001　調査区北側で検出された。井戸枠は瓦を積み上げる。

出土遺物（Fig.44　Ph.105）434は鬼瓦である。目から鼻の部分。色調はやや青みがかかった灰色。

SE120058　調査区中央側で検出された。遺構は調査区外に広がる。

出土遺物（Fig.44　Ph.105）435、436は肥前磁器の染付碗である。435は外面に区画された花卉文を描く。436は外面に淡い呉須の網目文を描く。器高4.5㎝、

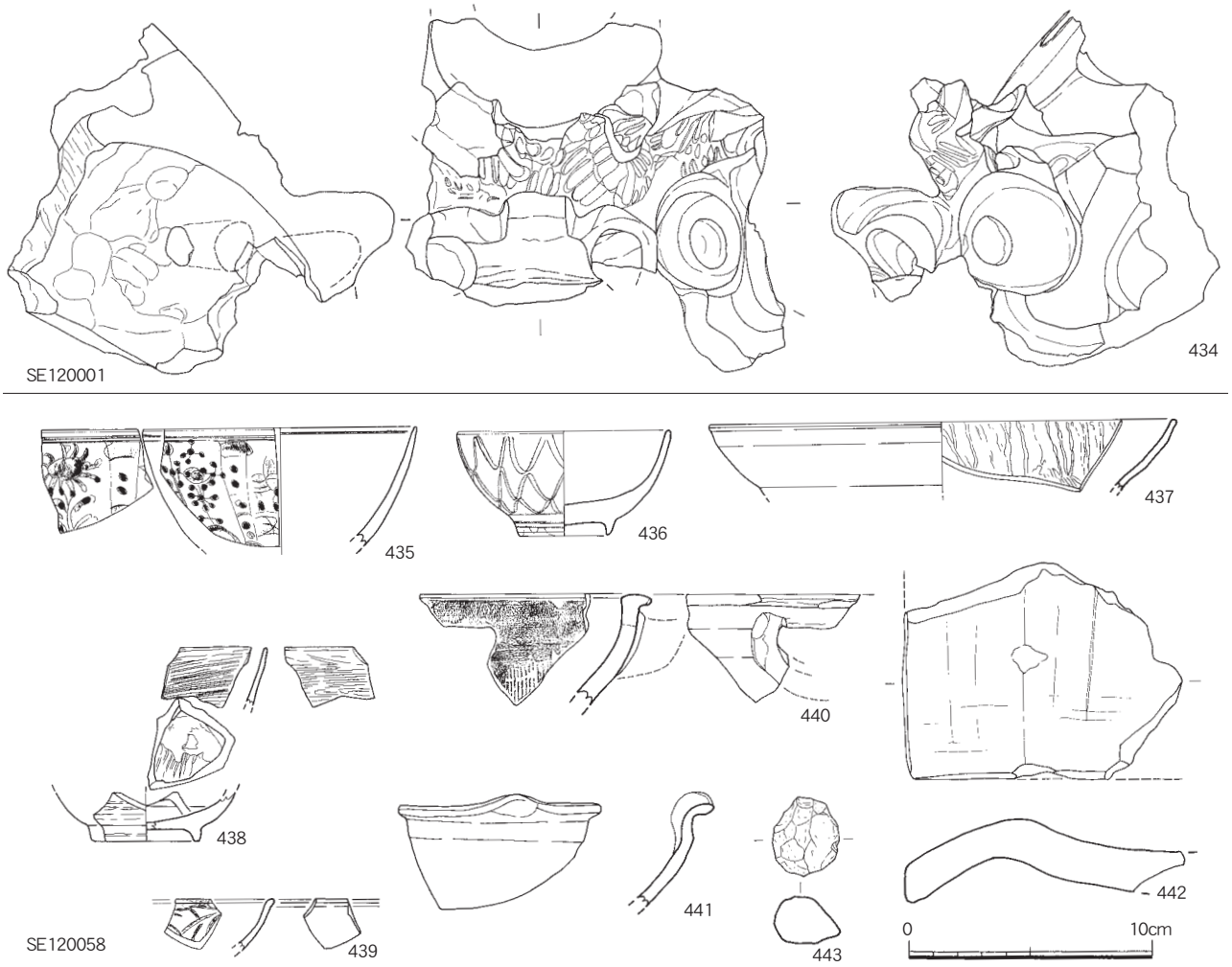


Fig.44　SE120001・120058出土遺物実測図（1/3）

口径 8.8㎝を測る。438 は陶器碗で、器面に刷毛目文様を施す。釉色は暗緑褐色を呈する。439 は志野焼の鉄絵皿か。内面に鉄絵。釉色は灰白色を呈する。440 は片口の擂鉢で、黒褐色の鉄釉がかかる。441 は片口の鉢で、暗褐色の釉がかかる。442 は桟瓦。色調は暗灰色を呈する。443 は鉛塊で、重さ 46g を測る。

10）小結

今回の調査では、11 世紀後半 ~12 世紀前半の（中世 1）土坑 14 基・井戸 2 基を検出し、土坑は径・深さ 1m 近い大型のものが目立ち、炭粒・灰を多量に埋めた土坑 SK120050・120026・120221 の 3 基がある。遺物はガラス坩堝等ガラス製造関係の遺物が SK120026・SE120059・SK120071 の 3 遺構から検出され、120026 からは 5 点出土している。他に SK120133 出土の鍋内型鋳型片がある。SK120221 からは「綱」墨書白磁と「あん内申　謹言　言上」を内面、外面に人面を墨書した土師器皿 100 が出土している。

12 世紀中頃 ~13 世紀前半の（中世 2）の遺構は土坑 5 基・井戸 5 基で、土坑は前代に比べ小型で浅い。ガラス製造に関連する廃棄土坑も無い。井戸は 7~13m 程の間隔をとって均等に分布している。遺物はガラス製造関係の遺物が 7 遺構から検出されるが、4 基は井戸内からの出土で前代からの混入の可能性が高い。他に SE120025 から鬼瓦片 145 とガラス小玉が、他に磁州窯白地鉄絵翡翠釉梅瓶蓋 237 を検出している。博多 4 次調査出土の梅瓶とセットとなるものである。

古代の遺構は土坑 1 基のみで、遺物は、土馬 252、老司式軒丸瓦小片 250 が出土している。

古墳時代後期は、土坑 SK120078 から滑石勾玉 258 と分銅形垂飾 257 が出土し、土壙墓の可能性が高い。

古墳時代前期は、竪穴住居 8 軒・土坑 21 基・溝 2 条を検出しており、竪穴住居は西部から中央部に分布する。遺物は近畿・山陰・吉備系の外来土器や 12 点の鉄器が遺構内から出土し目立つ。他に碧玉製管玉・水銀朱焼成甕が出土している。飯蛸壺・土錘の漁撈具の出土も目立つ。

弥生時代終末期は、竪穴住居 5 軒・土坑 18 基・溝 2 条を検出、竪穴住居は前代の分布とほぼ重なり、方形プランである。SC120054 からは完形に近いジョッキ形土師器 271 が出土している。胴がふくらむ器形で肥後系とはタイプが異なる。柱穴も同様に 1m 近い大型のものが多い。遺物は近畿・吉備・肥後系の外来土器と 10 点の鉄器鉄片の出土が目立つ。

弥生時代中期は前半期の成人甕棺 3 基、中頃の成人甕棺 2 基小形棺 2 基を検出し、幅 10m 程の範囲に東西方向に軸をそろえて分布している。

他に弥生後期の器台・支脚を数点と、縄文晩期夜臼式浅鉢 425 と弥生前期木葉圧痕底部の甕小片 426 を検出している。

14．13 区の調査

1）立会の概要

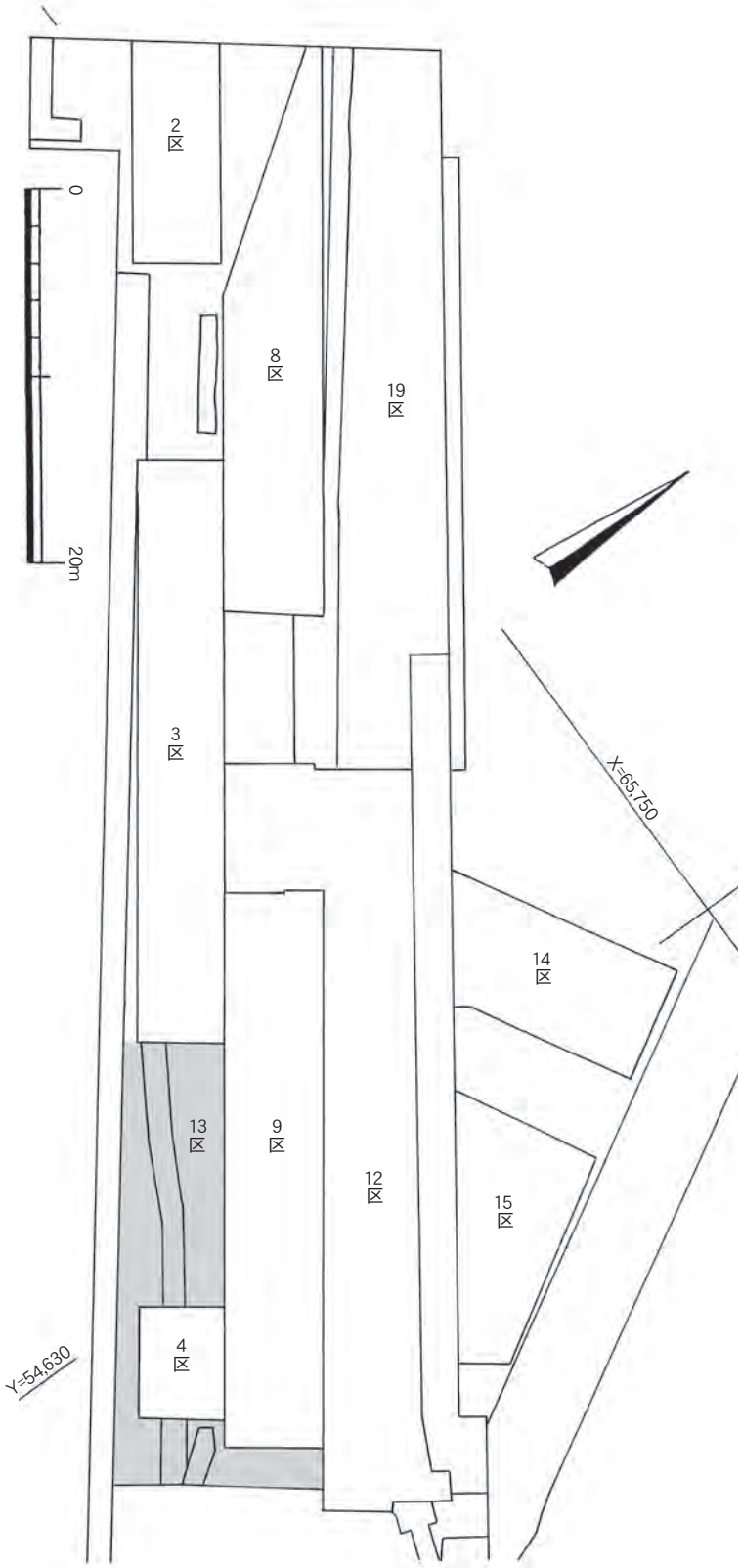


Fig.1　13 区位置図（1/400）

対象地は、西工区の東半部、第3・9・4・12 調査区に囲まれた、島状に残った調査期間確保不能な未調査区である。覆工板工事終了後で GL 下 3.5m までの本工事 1 次掘削は始まっており、覆工板下で調査終了区の掘削を終了した空間から、幅 3m の覆工板単位で、横から重機で掘削を行っている。重機のバケットの奥行き約 50㎝単位で 3m 幅をタテに垂直に掘削を行い、断面に現れた遺構を略測し、これを先に数度繰り返して、これらをつなげ図上で平面形を記録する手法で実施した。このため、50㎝以下の遺構は殆ど記録がとれず、数 m 単位の大きな土坑・井戸の記録が中心となっている。記録は測量基準点が確保できないため 3 × 1m の覆工板列の縦横に番号を振り、これを基準として略測している。また、間近で重機が稼働するため、安全管理上、発掘作業員の導入も行わず，職員のみで立会を行った。

Ph.1　立会風景（北から）

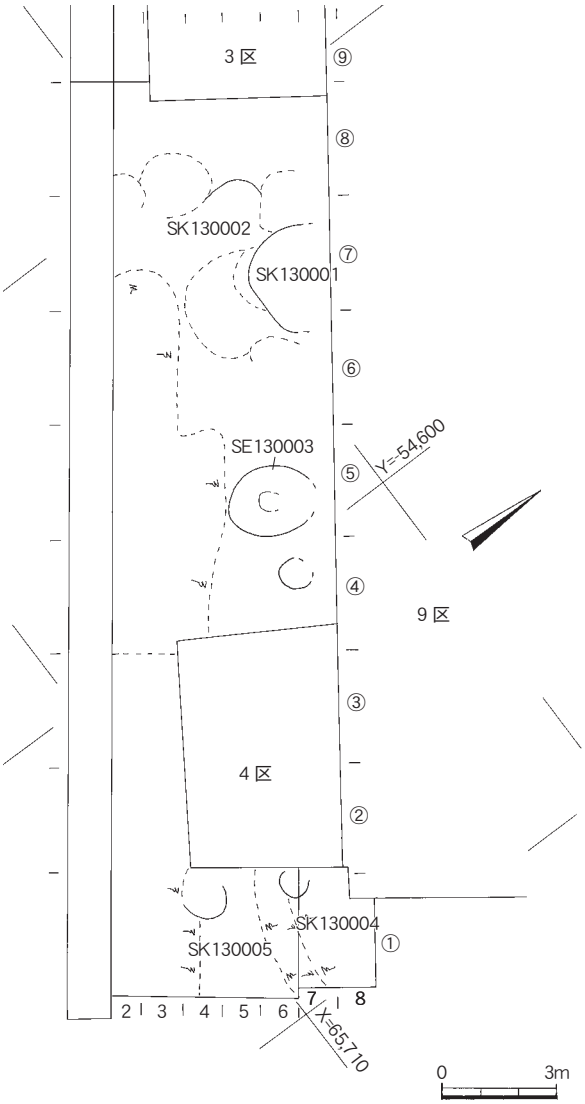


Fig.2　13 区全体図（1/200）

立会は、2016 年 11 月 14 日に⑥⑦ 6・7 で開始し（1 区）、一時中断して 2017 年 4 月 21 日～ 5 月 9 日まで再度実施した。9 区南の④～⑧ 7 ～ 2 で再開し（1 区）、終了後 4 区東の①② 8 ～ 2 で実施して（2 区）5 月 9 日に終了した。2016 年 11 月 14 日・2017 年 4 月 21 日・5 月 1 日・8 日・9 日の延べ 5 日間実施した。面積は 94㎡である。

検出した遺構は 1 区で 12 世紀前半までの土坑 1 基・井戸 1 基、古墳時代前期の土坑 1 基、時期不詳の土坑 4 基、2 区で 12 世紀初頭の土坑 2 基を確認している。

2）中世の報告

時期をが明らかにできた遺構は 12 世紀初頭の、1 区内の SK130001、SE130003、2 区内の SK130004 と SK130005 のみで他の土坑 4 基は時期不詳である。

SK130001（Fig.2　ph.2・3）　1 区⑦ 6 に位置し、北半部は撹乱に切られる。径 2.85m 程の大型の円形土坑で、深さは 1.5m 程を測る。断面は船底形で、内部から大量の炭粒と、ガラス坩堝 7 点をはじめ、多くの遺物を出土した。

出土遺物　（Fig.3 ～ 5）　1 ～ 6 は白磁。1 は四耳壺。口径 7.6 器高 22.1㎝を測る。口唇は外湾して垂下する。丸い胴で肩部に沈線を 3 条施し、以下に 6 ヶ所 4 筋の瓜割線を施す。耳には 3 筋線を施す。胎土は精良で灰白色、釉は内面から高台際まで乳白色の透明釉を掛ける。高台内に墨書がある。2 は鶴首の水注。胴径 12.6㎝を測る。頸部に 2 条肩部に 2 条の突帯を削り出し、以下の胴部にヘラで 6 条瓜割線を施す。胎土は灰白色で微細な褐色粒を多く含み、灰オリーブの透明釉を外面に掛ける。3 ～ 5 は白磁碗。3 は口径 16.4㎝を測り、口縁下まで回転ケズリを施す。胎土は白色粒と微細な黒色粒を含み灰白色を呈し、灰オリーブの透明釉を内外面に掛ける。4 は小さな玉縁口縁で口径 16.8 器高 7.6㎝を測る。外面口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は精良で、灰オリーブの透明釉を内面～外面体部下位まで掛ける。5 は玉縁口縁で口径 16.6 器高 6.6㎝を測る。外面口縁下まで回転ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で精良で、灰オリーブの透明釉を内面～外面体部中位まで掛ける。6 は平底皿で口径 12.2 器高 2.5㎝を測る。外面口縁下まで回転ヘラケズリを施し、口縁の器壁が薄い。見込にヘラと櫛描きで花文を描く。胎土は灰白色で精良、乳白色の透明釉を内面～外面底部際まで掛ける。7 は青白磁の平底皿で口径 9.0 器高 1.4㎝を測る。外面体部中位まで回転ヘラケズリを施し稜を成す。見込にヘラと櫛描きで花文を描く。胎土は灰白色で精良、明オリーブ灰色の透明釉を内面～外面底部際まで掛ける。8 は青白磁の香炉。口径 11.2㎝を測る。体部脚部外面を鎬蓮弁で飾る。口縁内面から外面脚内面まで明青灰色の透明釉を掛ける。9・10 は中国陶器の盤口水柱。9 は口縁と把手を欠き、ガラス坩堝としての使用の準備を終えている。残存で器高 22.0㎝口径 8.4㎝を測る。頸部と胴中央部に赤色粘土が焼き付き全体も 2 次被熱を受けており、溶解炉に据えて空だきした状態である。胎土は 4㎜以下の白色粒を多く含み暗灰～灰黄褐色を呈する。10 は口縁部で口径 9.7㎝を測る。同じく小さな把手を打ち欠いている。胎土は 5㎜以下の白色粒を多く含み内面は鈍い黄褐色外面は暗灰褐色を呈する。11 は中国陶器四耳壺。胎土は精良で内面は褐灰色外面は灰色を呈する。12 は中国褐釉陶器甕。口径 30.8㎝を測る。胴部外面に平行タタキ頸部にカキメ、内面には無文当具痕が残る。

Ph.2　SK130001 断面（南から）

Ph.3　SK130001 断面（西から）

外面肩部に「十一」様のヘラ記号がある。胎土は灰褐色で黒色粒等を含み、外面から内面肩部まで暗褐色の半濁釉を掛ける。内面にはハケ塗りの痕跡がある。胎土は精良で内面は褐灰色外面は灰色を呈する 13 ～ 15 は磁灶窯系黄釉鉄絵盤。13 は口径 35.6 器高 9.7㎝を測る。鍔口縁で平底を成す。全面に回転ナデを施し、内面に鉄絵で草花文を描く。胎土露胎部は明黄褐色で白色黒色褐色粒を多く含み、灰黄褐色の半濁釉を内面から外面中位までに掛ける。口縁上面は拭き取り目跡が多く並ぶ。14 は無頸で口径 36.7 器高 13.8㎝を測る。胎土露胎部は灰色で白色黒色褐色粒を多く含み、灰オリーブの半濁釉を内面に、外面上位までに薄い褐釉を掛ける。口縁上面は拭き取り目跡が多く並ぶ。15 は口径 35㎝程で器高 10.1㎝を測る。鍔口縁で、内面に鉄絵で草花文を描く。胎土露胎部は明黄褐色で白色黒色褐色粒を多く含み、明黄褐色の半濁釉を内面から外面中位までに掛ける。口縁上面は拭き取り目跡が多く並ぶ。16 は丸底の皿。口径 7.1 器高 1.3㎝を測る。口縁は緩く湾曲して強く開き底部境の稜は緩い。外底は回転ヘラ切り後ナデを施し板圧痕が残る。内外面に回転ナデ後内底にタテナデを施す。胎土は精良で内外面は暗灰～暗灰黄色を呈する。17 は丸底坏。口径 15.2 器高 3.3㎝を測る。口縁は湾曲して強く開き底部境の稜は緩い。外底は回転ヘラ切り後ナデを施し板圧痕が残る。内外面に回転ナデ後内面に丁寧なヘラナデを施す。胎土は精良で内外面は灰褐色を呈する。他に使用済みのガラス坩堝 7 点が出土している。時期は 12 世紀初頭を示す。

SE130003（Fig.2　ph.4 ～ 6）　1 区⑤ 5・6 に位置し、径 2.4m 程の掘方に径 50㎝程の桶井側を据える。

Ph.4　⑤ -7 ブロック SE130003 断面（北から）

出土遺物　（Fig.6）　19 は低い高台の白磁皿で口径 12.4 器高 3.0㎝を測り、外面中位まで回転ケズリを施す。胎土は灰白色で精良、灰白色の透明釉を内面から高台内側まで掛ける。時期は 12 世紀代。

SK130005（Fig.2　ph.14 ～ 16）　1 区 ⑦ 5 に位置し、径 1.5m 程の円形土坑である。

出土遺物　（Fig.6）　20 は白磁高台皿で口径 11.6㎝を測り、外面口縁下まで回転ケズリを施す。胎土は灰白色で精良、灰オリーブの透

Ph.5　⑤ -6 ブロック SE130003 断面（北から）

Ph.6　⑤ -5 ブロック SE130003 断面（北から）

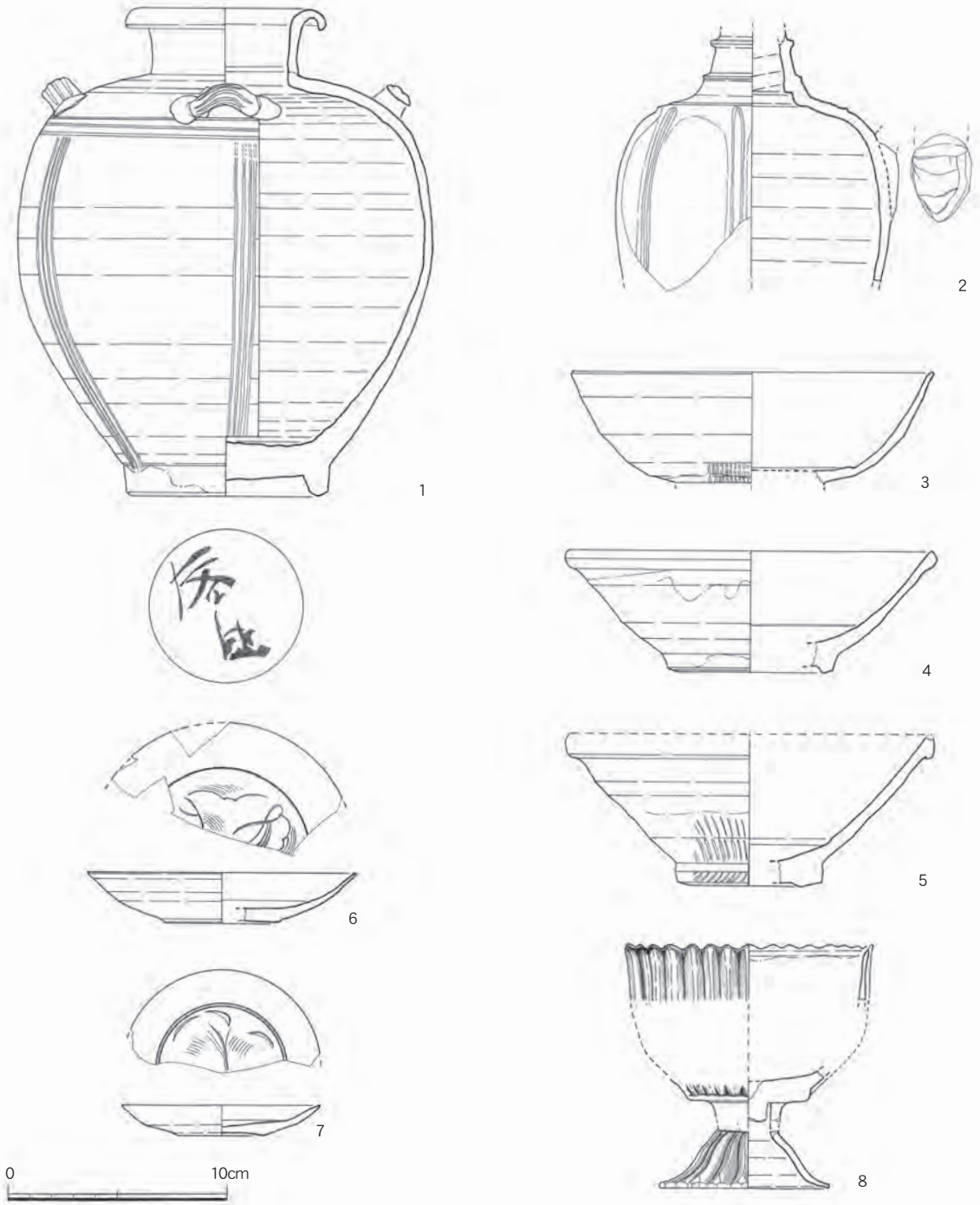


Fig.3　SK130001 出土遺物実測図 -1（1/3）

明釉を内外面に掛ける。21 は白磁輪花碗で口径 14.0㎝を測り、輪花内面下に白堆線を施す。胎土は灰白色で精良、灰白色の透明釉を内外面に掛ける。他にヘラ切りの土師器坏が出土する。時期は 12 世紀初頭を示す。

他に⑦で見込に櫛歯で花文を描き高台内に墨書を施す白磁碗 24 が出土している。25 は⑥出土の土師質甕で、口径 17.0㎝測る。

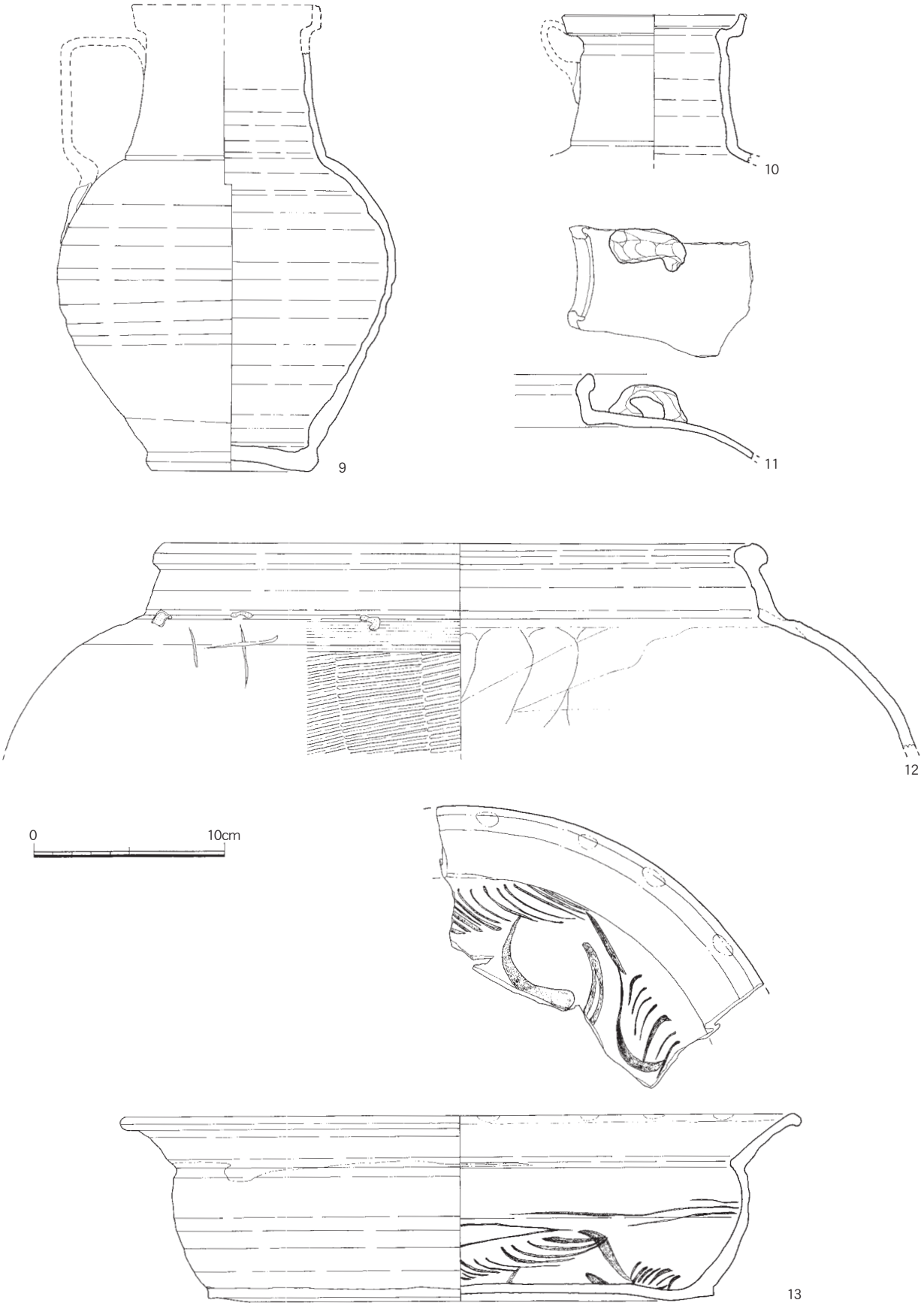


Fig.4　SK130001 出土遺物実測図 -2（1/3）

3）古墳時代前期・弥生終末期の報告

時期をが明らかにできた遺構は、1 区内の SK130002 のみである。

SK130002（Fig.2　ph.2･3）　1 区⑦ 6 に位置し、径 1.5m 程の円形土坑で、深さは 1.5m 程を測る。断面は船底形で、内部上位で上下逆転した状態で完形の土師器甕が出土した。

出土遺物　（Fig.6）　18 は吉備系の甕で口径 16.4 器高 23.9㎝を測る。口縁から肩部内外にヨコナデ後二重口縁の外面にハケ工具で 10 ～ 12 様の多条沈線を施し、肩部にハケ工具で寸断した波状文を施す。胴部外面上位にはヨコ、以下にタテハケを施し煤が付着する。胴部内面はケズリを施す。胎

Ph.7　① -7 ～ 6 ブロック SK130004 断面（北から）

Ph.8　④ -6 ～ 5 ブロック土坑断面（北から）

Ph.9　④ -6 ブロック土坑断面（北から）

Ph.10　⑤ -3 ブロック土坑断面（西から）

Ph.11　⑥ -4 ブロック土坑断面（北から）

Ph.12　⑥ -4 ブロック土坑断面（西から）

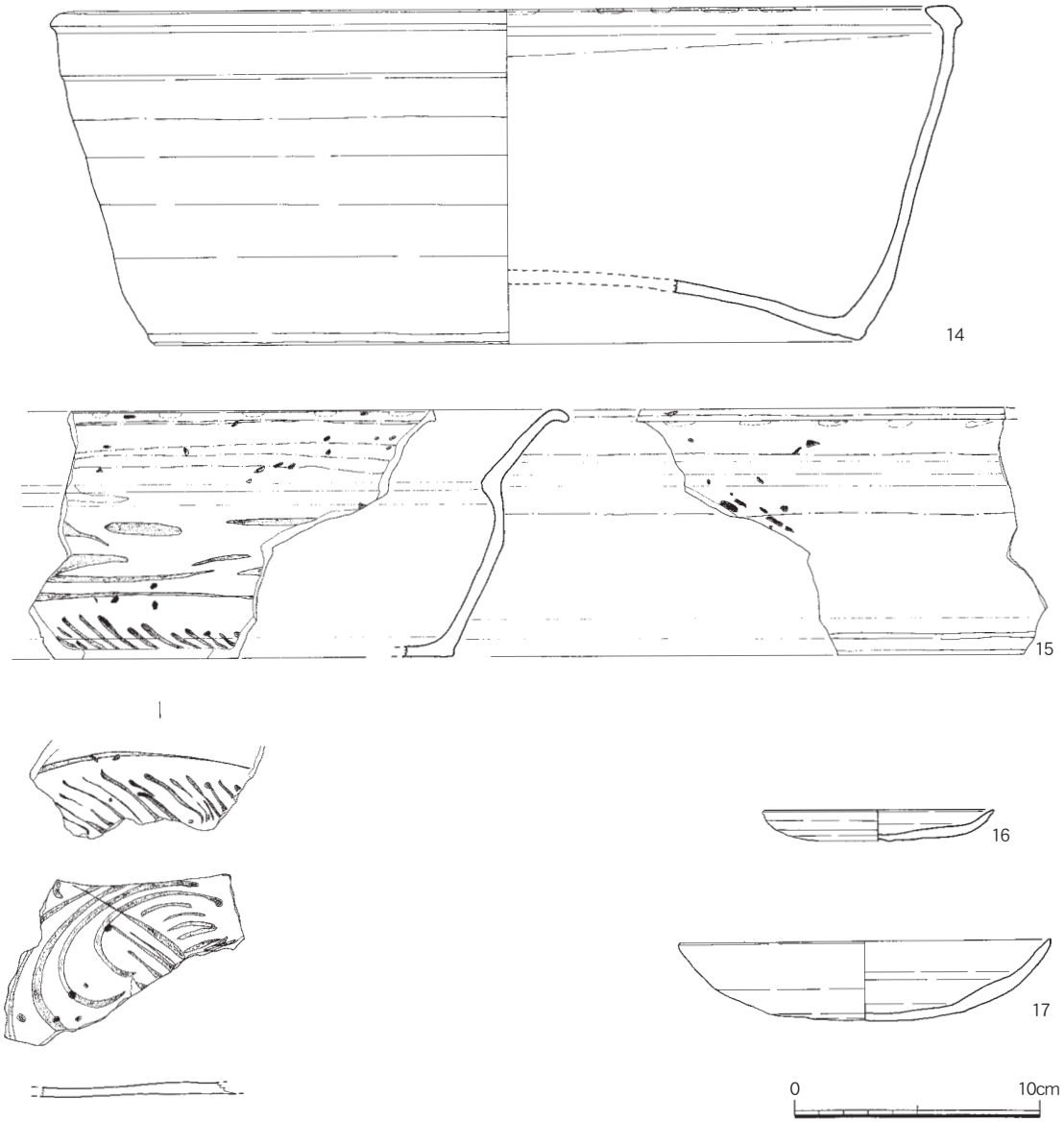


Fig.5　SK130001 出土遺物実測図 -3（1/3）

Ph.13　⑧ -6 ～ 2 ブロック断面（北から）

土は 2㎜以下の白色粒を多く含み、内外面は鈍い黄橙色を呈する。時期は前期前半を示す。

他に⑥で口径 17.4㎝の終末期甕 22、口径 15.4 器高 5.7㎝を測る西部瀬戸内系の丸底浅鉢 23 も出土している。内面に細かなヨコハケ、外面にヨコケズリ後緩いヨコナデを施す。

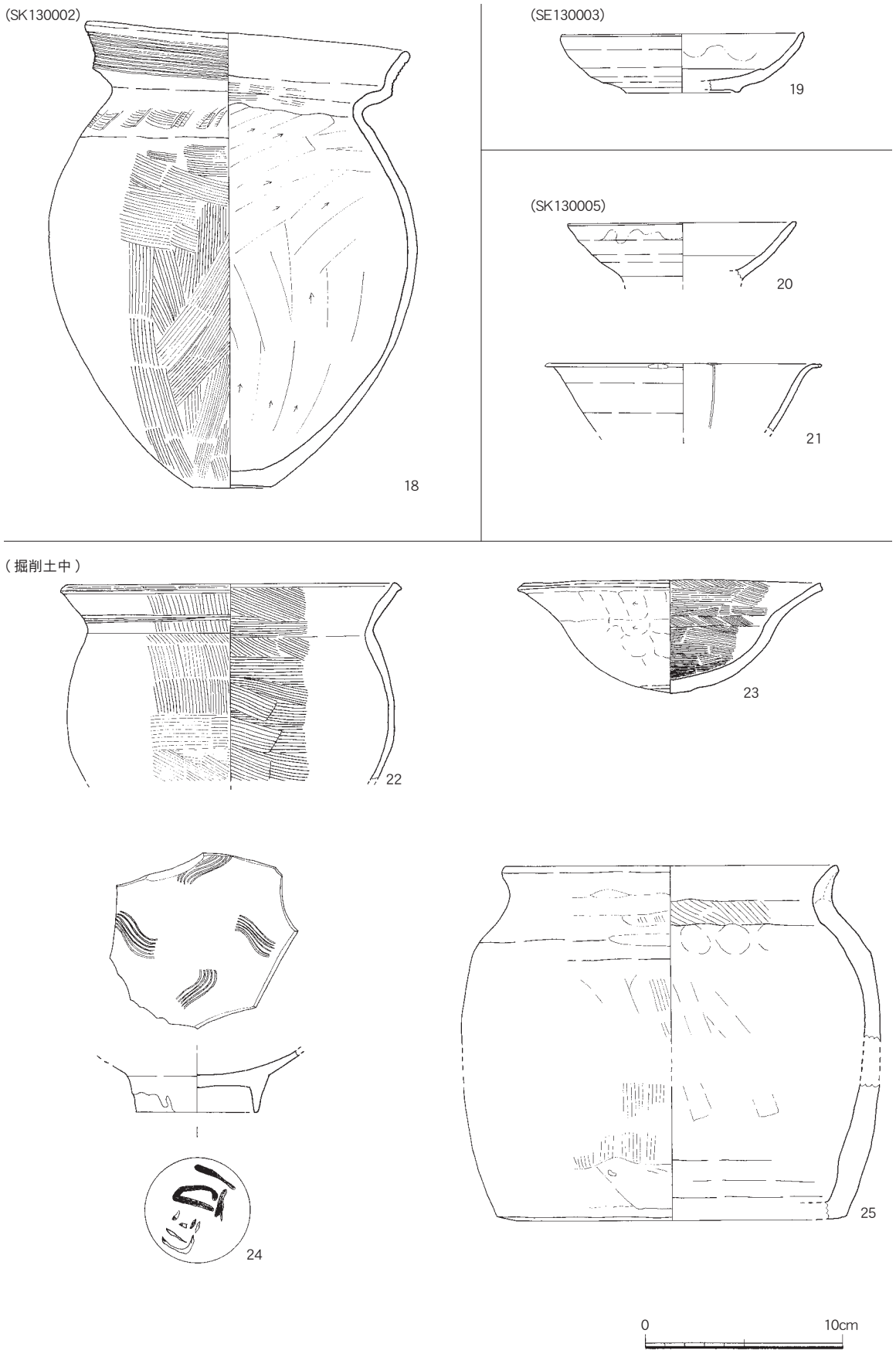


Fig.6　SK130002・130005、SE130003 他出土遺物実測図（1/3）

Ph.14　⑦-6～2ブロックSK130002断面（西から）

Ph.15　SK130002土器出土状況（北から）

Ph.16　SK130002内土器（北から）

4）小結

今回の94㎡の立会では、1区で12世紀初頭～前半までの土坑1基・井戸1基、古墳時代前期の土坑1基、時期不詳の土坑4基、2区で12世紀初頭の土坑2基を確認している。

12世紀初頭のSK130001からは多くの陶磁器とともにガラス坩堝が7点まとまって検出され、ガラス工房が南まで展開していることが実証された。

弥生終末から古墳時代前期では、数少ない資料のなかでも、山陰から吉備・西部瀬戸までに広がる土器が検出され、広域にわたる交流を実証している。

15. 14 区の調査

1）概要（Ph.1・2）

14 区は調査区中央、西工区の北東端に位置する。換気棟が設置される場所で、地下鉄沿線より北東側へ張り出す。調査に先行して、平成 28 年 12 月 5 日 ~12 月 15 日まで矢板設置のための確認調査を行い、その後、矢板設置と遺構面までの鋤取りを行った。現地表面は標高 5.8m を測る。調査前はビルが建てられ、現地表面より 1.8m 下まではコンクリートの基礎で撹乱されていた。そのため、調査を行った第 1 面の標高は 4.0m を測り、先行して調査した南側に位置する 9 区の第 4 面にあたる。そこから約 30cm 下で砂丘面を検出し、ここを第 2 面とした。調査面積は 64.10㎡である。発掘調査は 3 月 24 日から 4 月 3 日まで行い、排土は南側へ一旦仮置きし、溜まった段階で、その都度、重機により鋤き取り、場外へ搬出した。

検出した遺構は竪穴住居跡、井戸、土坑、ピットである。本調査区の時期の主体は弥生時代終末から古墳時代前期にかけてと 12 世紀である。少数ながら、古墳時代後期、古代、14 世紀の遺構も確認した。ただし、古墳時代や古代の遺構の遺存状況は悪い。遺物はコンテナケース 37 箱分出土する。

2）第 1 面の調査（Fig.1　Ph.3・4）

第 1 面はにぶい黄褐色土層の上面、標高 4.0m の平坦面で検出した。検出した主な遺構は井戸 4 基、土坑 7 基、柱穴である。

（1）井戸（SE）

SE140001（Fig.2　Ph.5~10）　調査区北東側に位置し、北側は調査区外へ延びる。北東側の大部分は SE140012 に削平される。検出時には 2 基の井戸を確認できず、上層部は同時に掘削してしまった。また、壁際で崩落の危険があるため、標高 0.8m 付近までしか掘削できなかった。湧水はしない。検出したのは井側半分と南側の掘方である。掘方は楕円形を呈し、直径は現状で約 4.6m を測る。東側の壁は緩やかに落ち、標高 2.8m 付近で、狭いテラスを有する。一方、西側の壁は傾斜を急にする。なお、土層（Fig.2）からは 9 層が直径 60cm を測る井側、10~12 層が井側の掘方、5~8 層は廃棄の際の埋土と確認できる。また、標高 1.2m 付近で部分的に縦方向の板目を確認したため（Ph.7･8）、井側には桶を使用したと考えられる。

Ph.1　14 区遠景（南東から）

Ph.2　14・15 区全景（南西から）

出土遺物（Fig.3・4　Ph.11・12）　1~6 は井側内から出土した遺物である。1・2 は回転糸切り底の土師器の坏である。口径は 12.6、12.8cm を測る。3 は青白磁の碗の口縁部片で、輪花を有する。内面は片彫りで花文が描かれる。4・5 は龍泉窯系青磁である。4 は碗 I 類の高

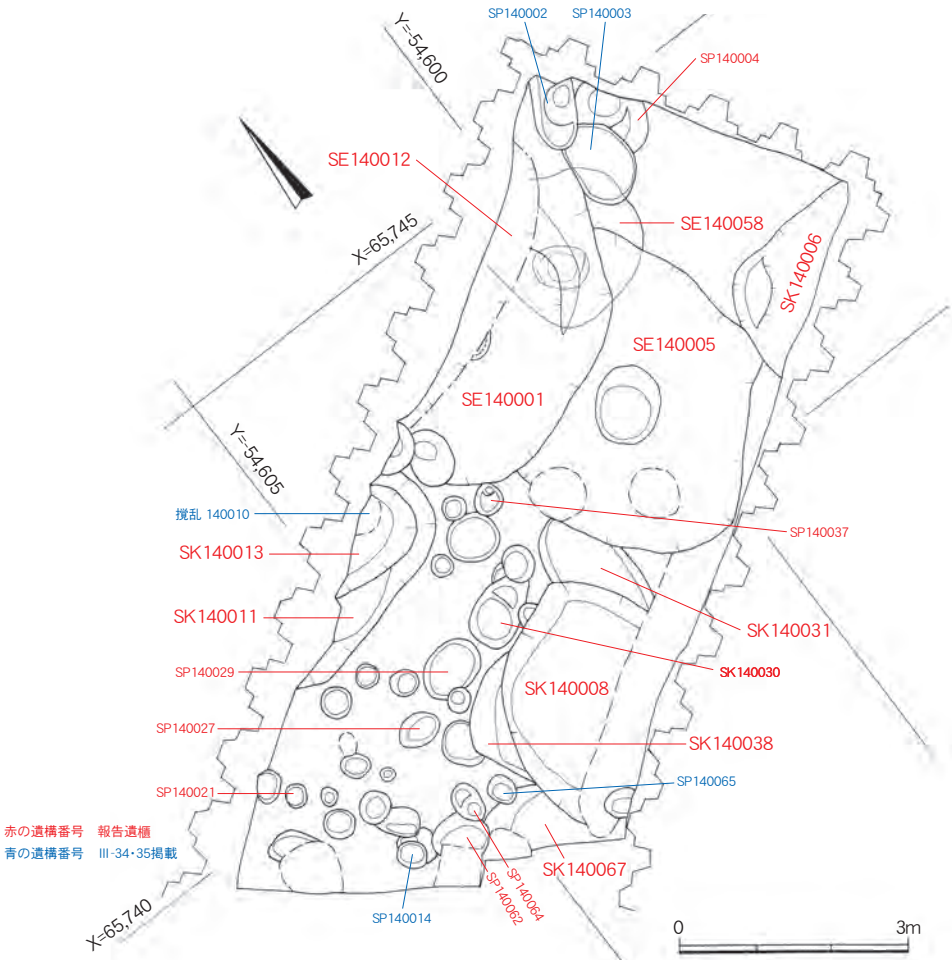
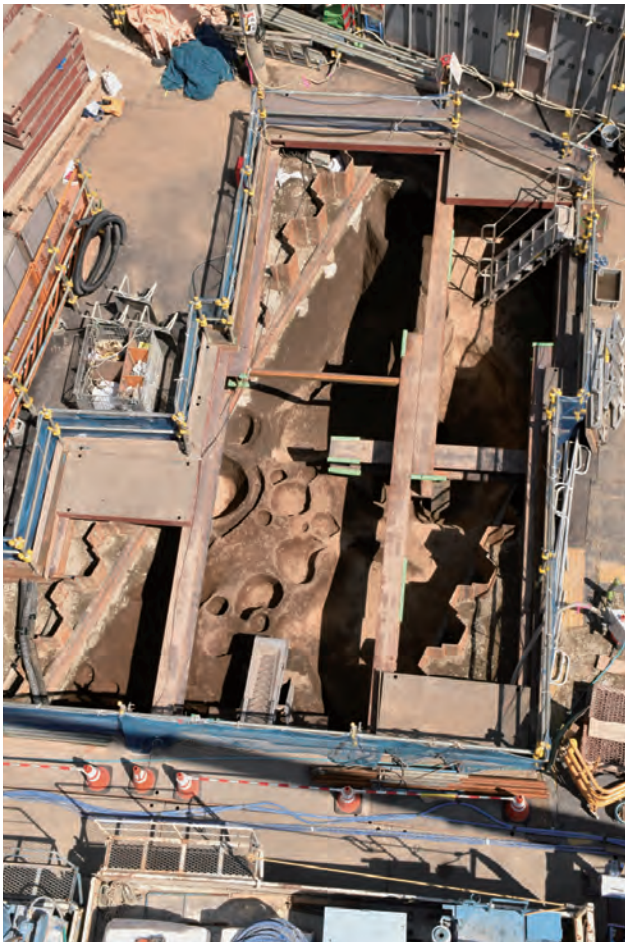
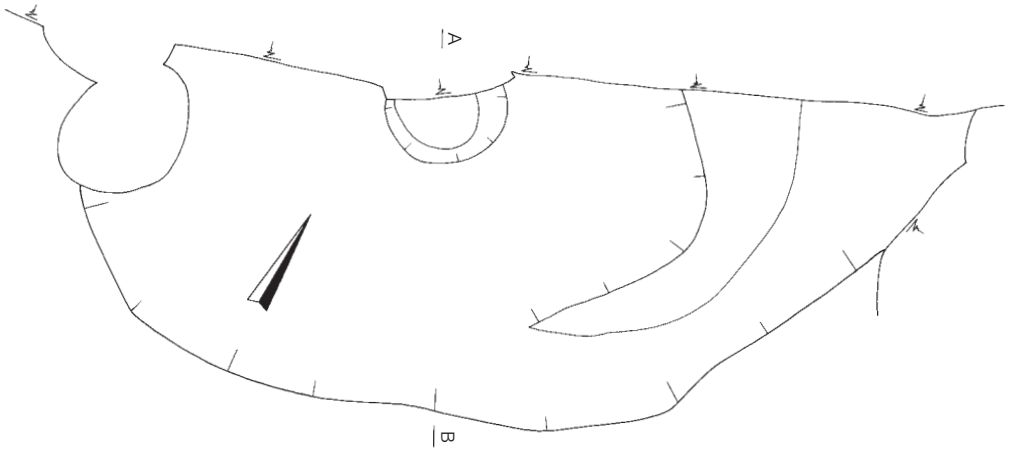


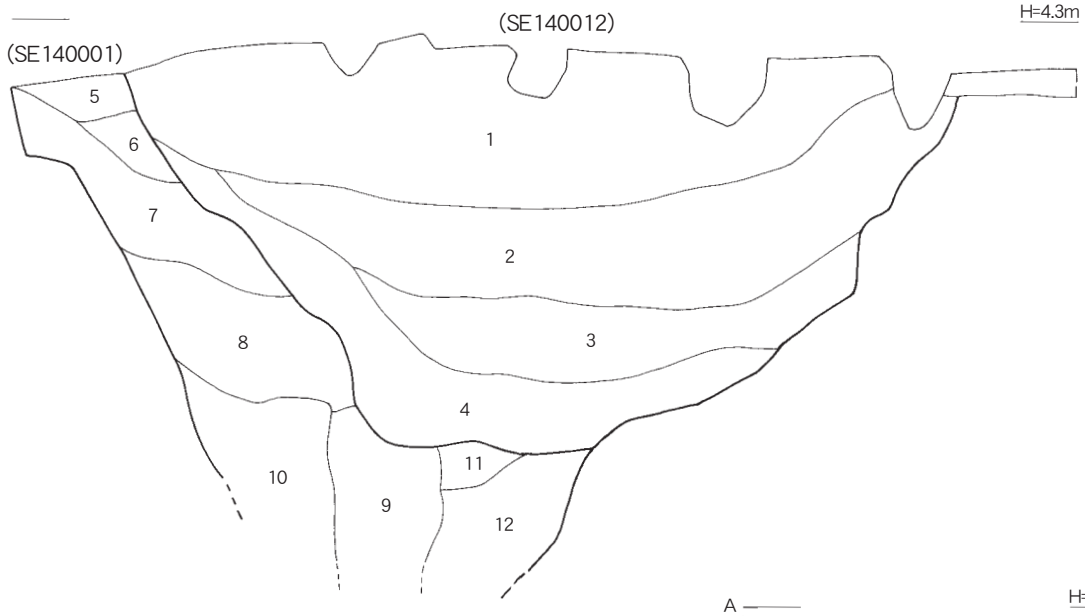
Fig.1　第 1 面全体図（1/100）



Ph.3　1 面全景（南西から）

Ph.4　1 面北側（南西から）





SE140012
1　灰褐色粘質土に黄褐色・淡黄色粘質土混入（褐色焼土・炭化物含む）
2　灰褐色粘質土に灰色粘質土が層上に混入（焼土・炭化物含む）
3　灰色粘質土と灰黄色砂質土の互層
4　灰黄褐色粗砂に灰色粘土混入

SE140001
5　灰黒色粘質土に灰褐色粘質土混入（炭化物多く含む）
6　黒褐色シルト
7　灰黒色シルトと黄褐色粗砂の互層
8　黄褐色粗砂と灰褐色シルトの互層
9　黒褐色粘質土に褐色砂質土混入（SE140001井側）
10　灰褐色シルト・粘質土と褐色砂質土の互層（SE140001井側掘方）
11　灰褐色粘質土と褐色シルト互層（SE140001井側掘方）
12　灰褐色シルトに灰褐色粘質土混入（SE140001井側掘方）

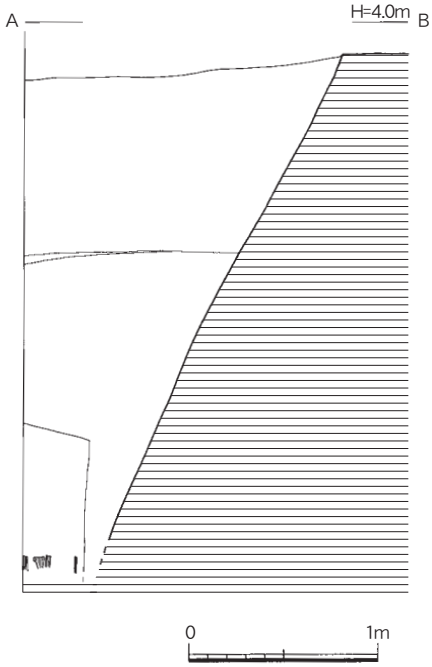


Fig.2　SE140001・140012 実測図（1/40）

Ph.5　SE140001・140005・140012・140058
（北西から）

Ph.6　SE140001（南西から）

Ph.7　SE140001 井側内桶検出状況（南から）

Ph.8　SE140001 井側内桶検出状況（北西から）

Ph.9　SE140001・140012 土層南側（北東から）

Ph.10 SE140001・140012 土層北側（南東から）

台部片で、内部に墨書を有する。5 は鍔縁盤の口縁部片で、鍔の先端をつまみあげ、青緑色の釉が厚くかかる。6 は滑石製の石鍋の転用品で、内外面には煤が付着する。側縁部には浅い刻みが入る。重さは 23.37g を量る。

7~18 は掘方から出土した遺物である。7・8 は龍泉窯系青磁である。7 は碗Ⅰ -b 類で口縁端部に輪花を有する。内外面共に細かい貫入が入る。8 はⅠ -2 類の口縁部片で、内面に花文が描かれる。9 は越州窯系青磁碗Ⅰ -2 ア類で、高台畳付より内部は露胎である。高台と見込みに目跡があり、内面には縦方向の箆彫を有する。10 は青白磁小壺で、受部を露胎とする。11・12 は白磁である。11 は碗Ⅴ類、12 は碗Ⅷ類で、内面見込みの釉を環状に掻き取ったものである。13 は陶器の瓶の肩部片である。白色砂粒を含む灰色の胎土に、外面肩部には暗茶褐色の釉がかかり、下半は露胎である。14 は天目碗で、黒褐色の釉が厚くかかる。高台部は露胎で、内面に墨書を有する。15 は磁州窯系絞胎土器の胴部片である。黄灰色の胎土と暗茶褐色の胎土を練りこみ、器面にマーブル模様を作り出す。内面に黄濁色の釉がかかるが、外面は露胎である。16 は防長産の緑釉陶器の口縁部片で、口縁は緩やかに外反する。軟質で橙色の胎土に濃緑色の釉がかかる。17 は滑石製の石鍋で、外面に煤が付着する。18 は須恵器の坏蓋で、天井部には回転ヘラ削りが残る。

19~27 は上層の廃棄後の埋土から出土した遺物である。19~21 は白磁で、19 は四耳壺、20 は合子の蓋、21 は碗の底部片で高台内に墨書が残る。22 は同安窯系青磁碗である。23 は楠葉型瓦器椀の口縁部片で、体部外面の研磨調整は粗い。24 は須恵器の瓶の胴部片である。胎土は白色砂粒を多く含む粘質のある褐色、色調は部分的に灰色を呈する。25 は軒丸瓦で、花卉文を配する。外面は強いナデ、内面は布目が残る。26 は管状土錘で、6.15g を量る。27 は小型の滑石製石鍋の転用品である。口縁内部上端や外面下端に刻みを有する。重さは 13.30g である。

28~40 は SE140001 と SE140005 を同時掘削した最上層より出土した遺物である。28~32 は白磁で、28 は皿Ⅸ -1a 類、29 は皿Ⅵ -1a 類、30 は皿Ⅵ -2a 類、31 は碗Ⅷ類、32 は四耳壺の口縁部片である。33 は同安窯系青磁皿Ⅰ -2b 類である。34・35 は龍泉窯系青磁で 34 は皿Ⅰ類、35 は碗Ⅲ -2c 類である。36 は陶器の壺の把手部で、黒色・白色砂粒を含む灰色の胎土に淡灰緑色の釉がかかる。37 は瓦器椀で、内面は斜め方向の粗い研磨調整を施す。外面体部上半は回転ナデの後、横方向の粗い研磨を行うが、下半には回転ヘラケズリが残る。38 は畿内産の緑釉陶器と思われる。無高台で、橙色から灰色の胎土に明緑色の釉が前面に施釉される。39 は砂岩製の磨石で、表面に浅い刻みが残る。40 は丸瓦で、凸面には縄目叩きが残り、凹面には布目が認められる。他に、鉄釘、鉄滓、金属坩堝（Ⅲ -34 Fig.3-50）、ガラス坩堝（Ⅲ -34 Fig.29-604・606）、硅石、羽口（Ⅲ -34 Fig.33-637）、粘土塊、関連遺物が出土し、井戸の時期は 13 世紀末から 14 世紀前半と考えられる。

SE140012（Fig.1・2　Ph.13・14）　調査区北東側に位置し、大半は北側の調査区外へ延び、掘方のみを検出した。検出時に SE140012 を確認できず、SE140001 と同時に掘削してしまったため、検出面で、平面プランを確認することはできなかった。Fig.2 の土層では 1~4 層が掘方に該当し、土層からは壁が緩やかな傾斜をもち掘削されていることがわかる。

出土遺物（Fig.5　Ph.15）　すべて掘方からの出土である。41 は回転糸切り底の土師器の皿で復元口径は 9.0cm を測る。42 は楠葉型瓦器椀で三角形の低い高台が付く。体部内面には細かい横方向の研磨が施され、見込みには連結輪状文が描かれる。43 は瓦器椀、44 は土師質の火舎、45 は防長産の緑釉陶器で、底部には回転糸切りが残る。橙色の胎土に黄緑色の釉が全体にかかる。46・47 は白磁で、46 は皿Ⅲ -1 類、47 は碗で、赤褐色粒・黒色粒を含む明橙色の胎土に白濁色の釉がかかる。外面下半は露胎である。48・49 は青白磁で、48 は合子の蓋、49 は壺の胴部片で、渦文が描かれる。

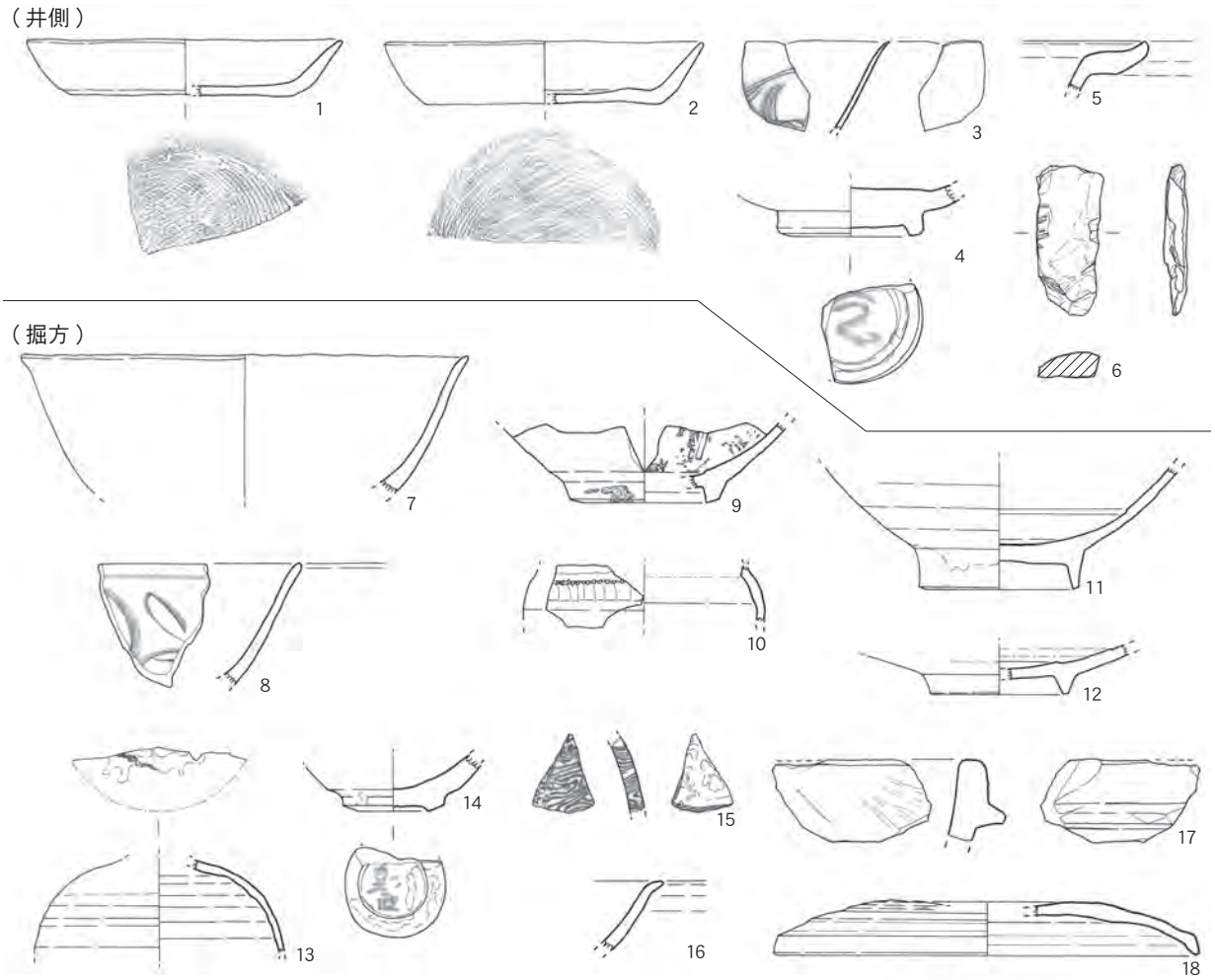
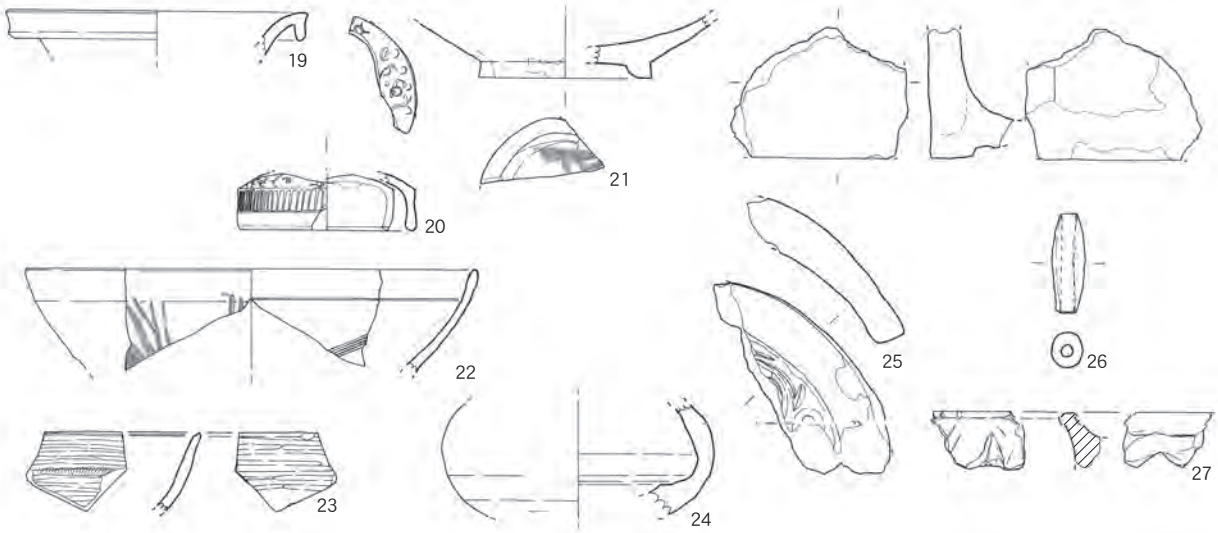


Fig.3　SE140001 出土遺物実測図①（1/3）　0　10cm

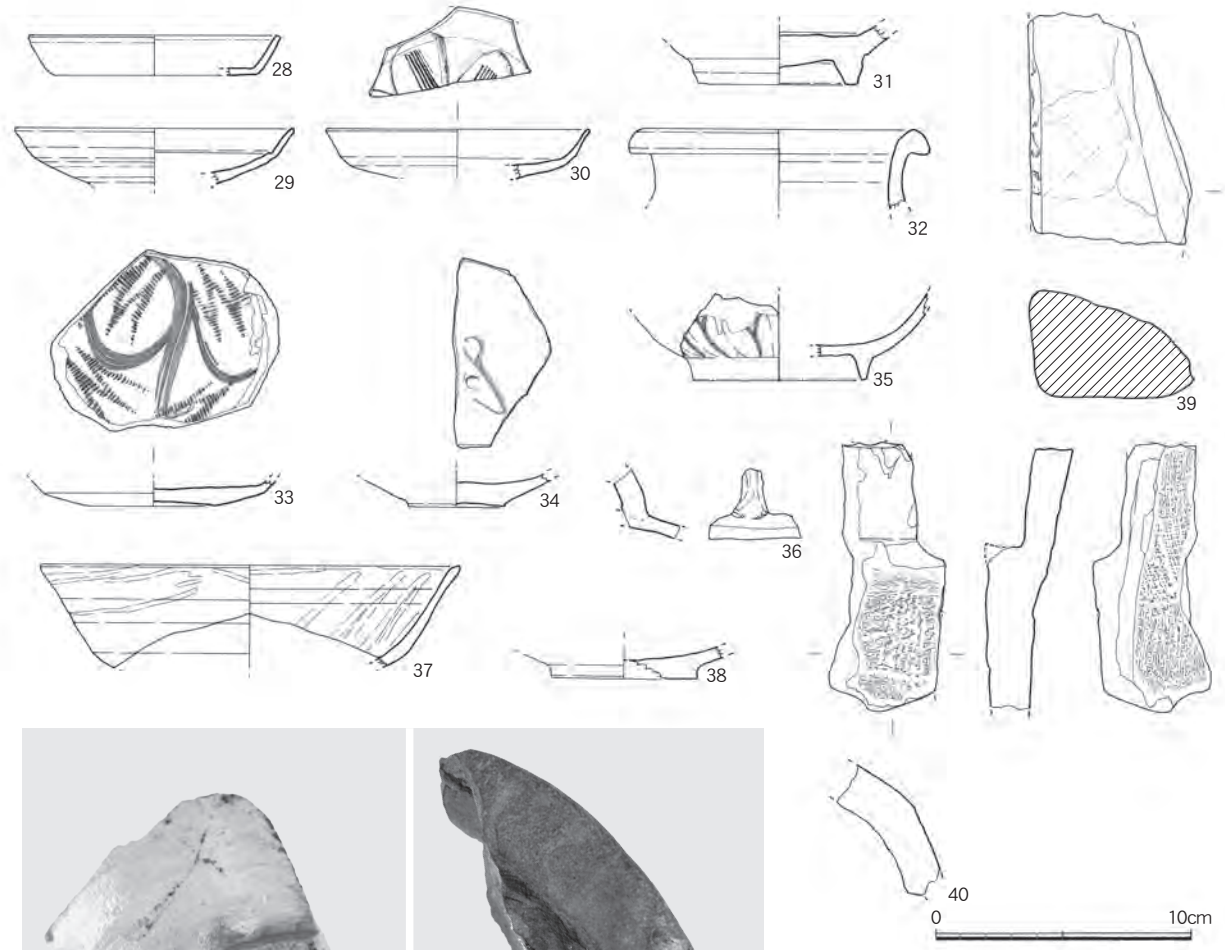
Ph.11　SE140001 井側内・掘方出土遺物

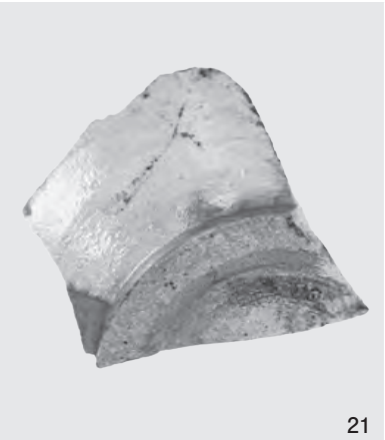
50 は同安窯系青磁碗Ⅰ-1a 類、51･52 は龍泉窯系青磁で、51 は碗Ⅰ-6a 類、52 は碗Ⅰ-2 類である。53 は陶器の長胴形の壺で、頸部と胴部の境は段が付き明瞭である。黒色粒を含む灰色の胎土に暗緑

（上層）



（SE140001・SE140012 混）

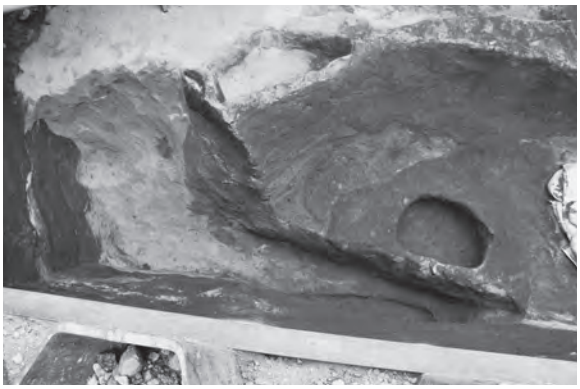




Ph.12　SE140001 上層出土遺物

Fig.4　SE140001
出土遺物実測図②（1/3）

Ph.13　SE140012（北から）



Ph.14　SE140012（北西から）

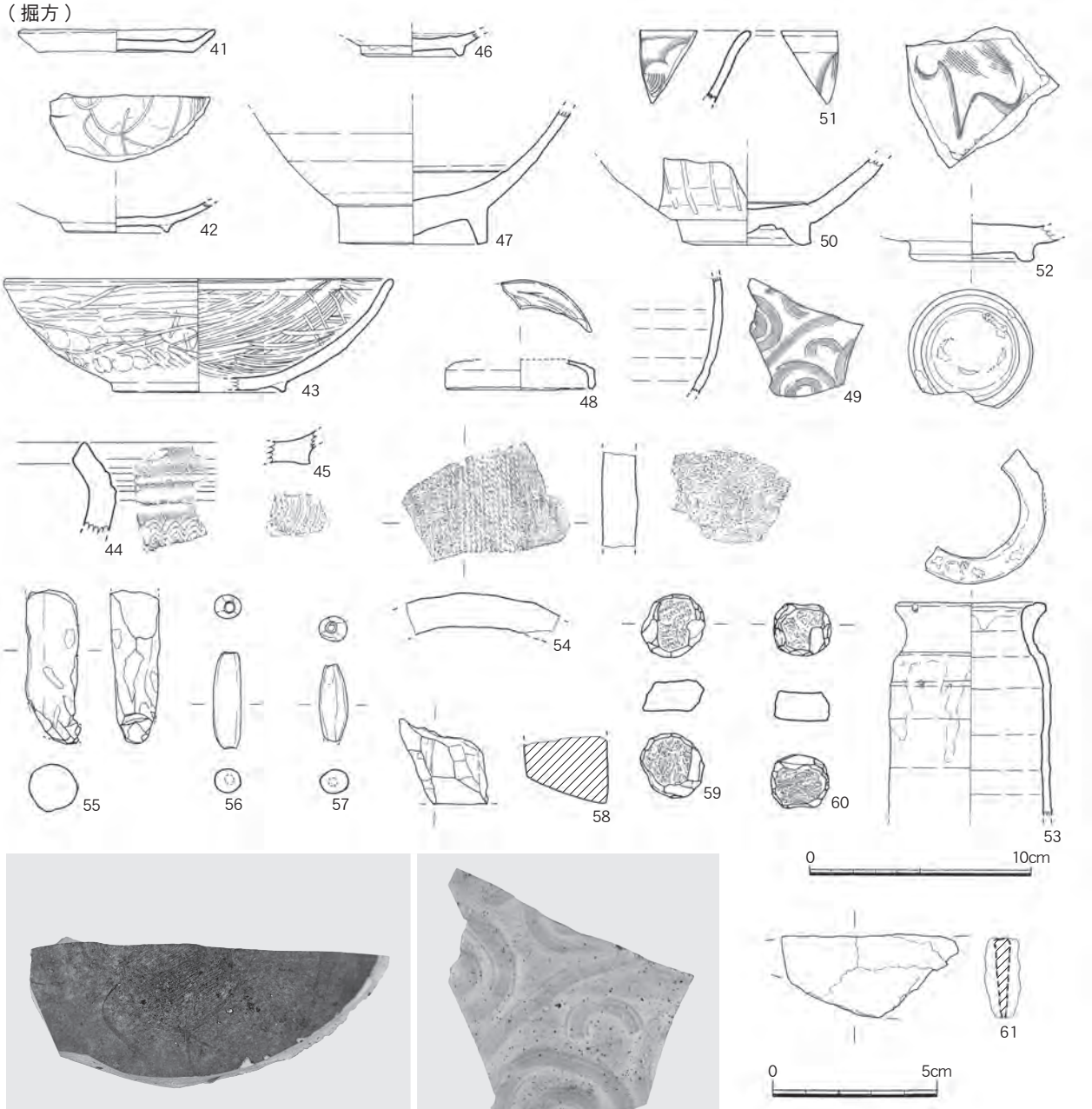
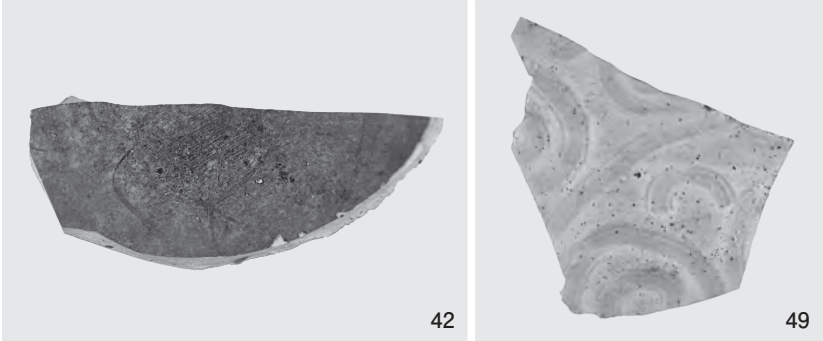


Fig.5　SE140012
出土遺物実測図（1/3・1/2）



Ph.15　SE140012 出土遺物

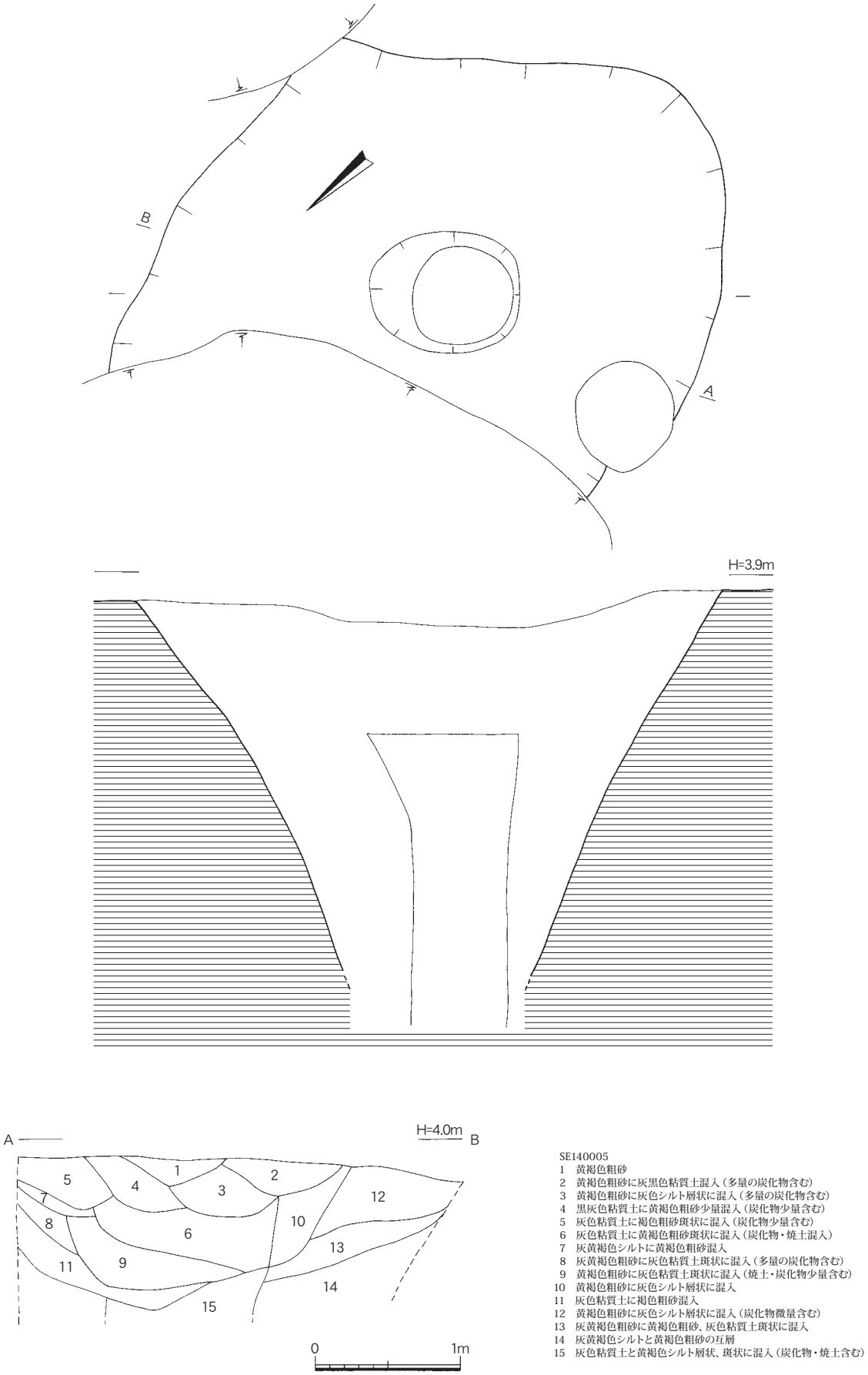


Fig.6　SE140005 実測図（1/40）

Ph.16　SE140005（北西から）

Ph.17　SE140005 上層土層（南東から）

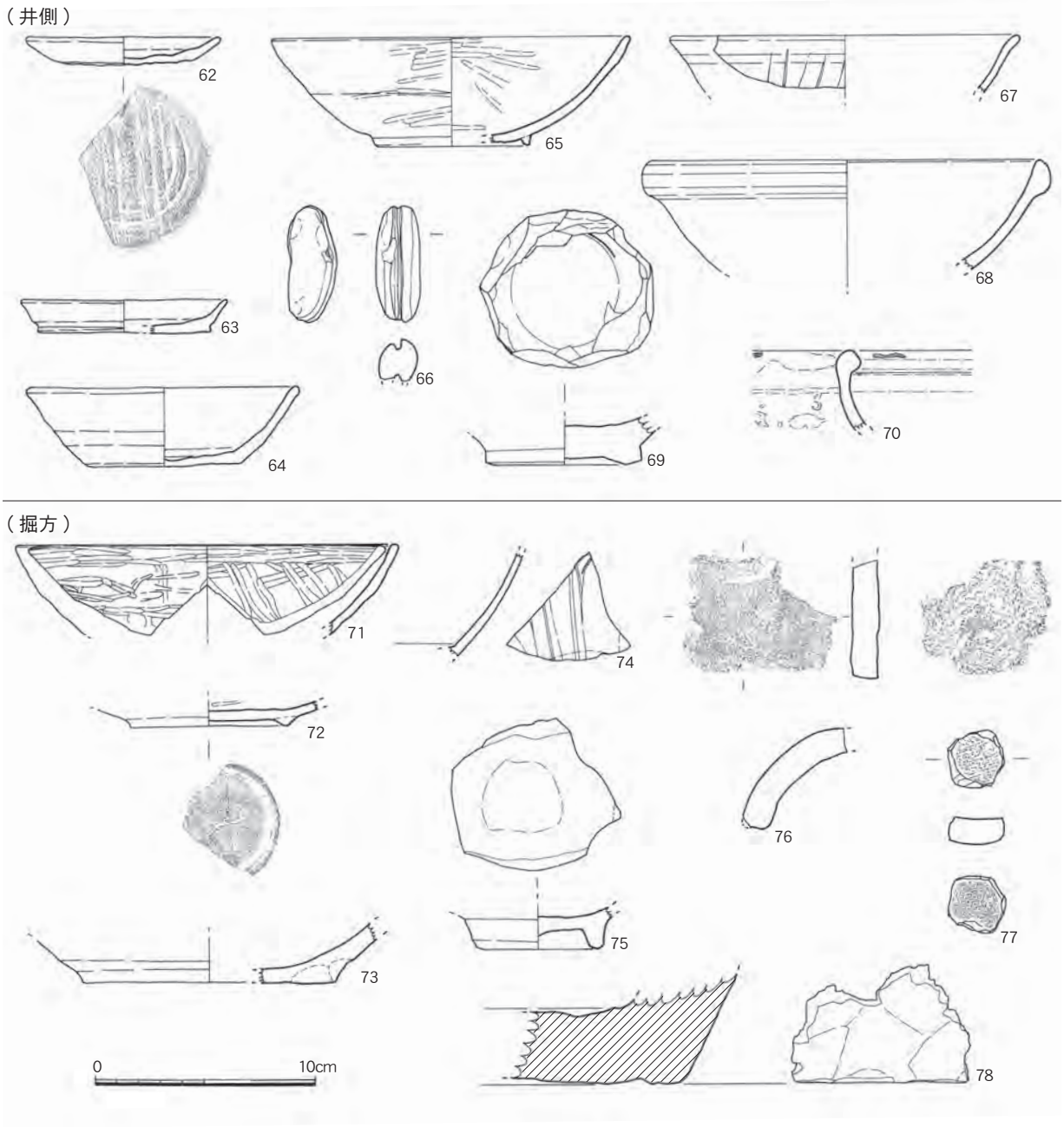


Fig.7　SE140005 出土遺物実測図①（1/3）

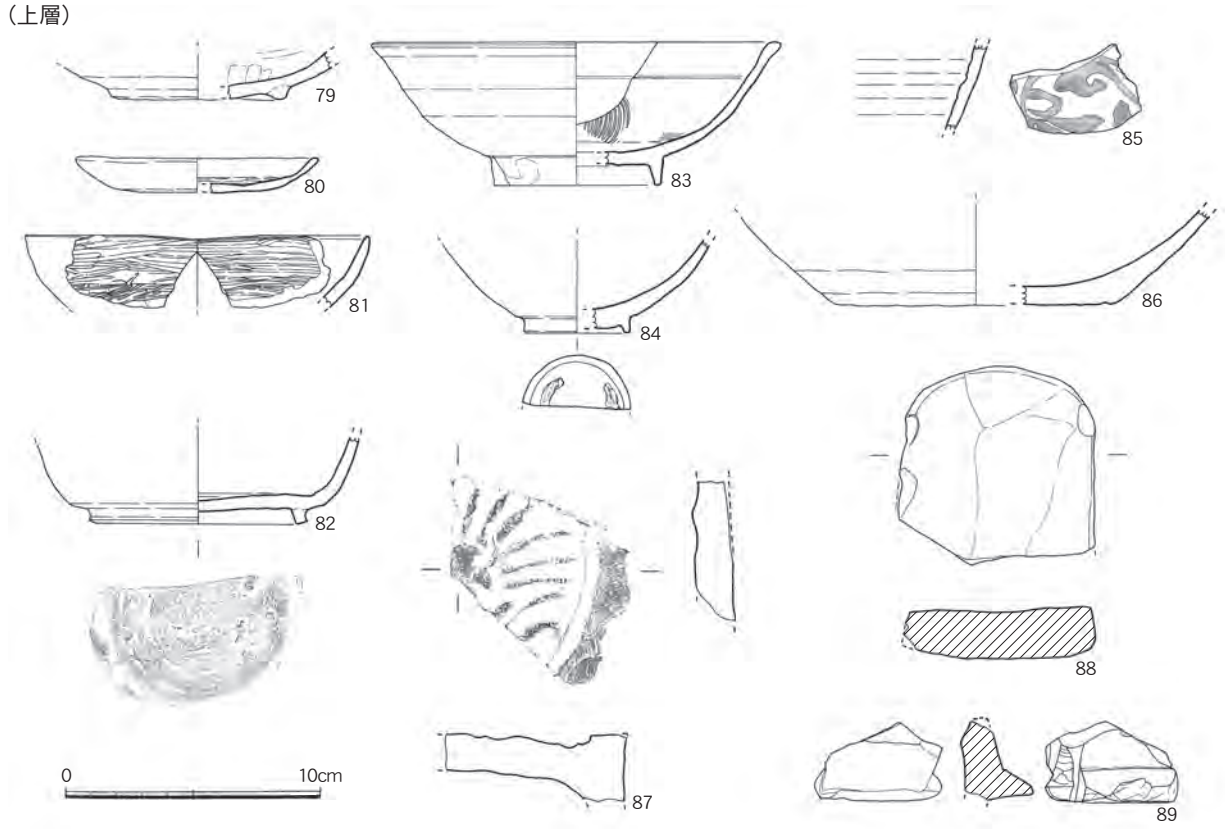
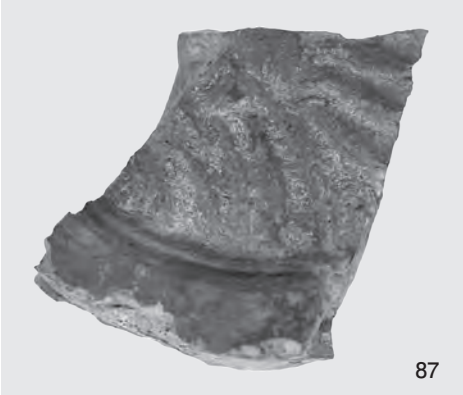


Fig.8　SE140005 出土遺物実測図②（1/3）

色の釉がかかる。54 は丸瓦で、凸面には縄目叩きが残り、凹面には布目が認められる。55 は土製の脚部片と思われ、設置面は平坦をなす。全面に煤が付着する。56・57 は管状土錘で、56 は 6.71g、57 は 4.18g を量る。58 は粘板岩製の砥石片で、3 面に使用痕が残る。59・60 は瓦玉で、平瓦片の周縁部を打ち欠いて整形したものである。59 は土師質、60 は瓦質で、重さはそれぞれ 12.55g、9.92g を量る。61 は不定形の鉄片である。他に、鉄釘、ガラス坩堝（Ⅲ -34 Fig.25-573）、金属坩堝（Ⅲ -34 Fig.1-5・6）、炉壁、粘土塊、被熱した石が出土する。井戸の時期は SE140001 との関係から 14 世紀後半以降と考えられる。

SE140005（Fig.6　Ph.16・17）　調査区東側中央に位置し、北側は SE14001 に切られる。平面形は歪な楕円形を呈し、長径 4.0m、短径 3.0m 以上を測る。掘方の壁は一定の傾斜で掘り込まれる。井側は検出面より 1m 下で確認した。土層は 1~10 層が廃棄の際の埋土、12~14 層が掘方、15 層が井側であることを示す。井側は上面で 85~105cm、最下面の標高 0.8m では 68cm を測る。木質等は確認できなかった。

出土遺物（Fig.7・8　Ph.18）　62~70 は井側内から出土した遺物である。62~64 は土師器で、62 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 9.0cm を測り、橙色を呈する。63 は回転糸切り底の小皿で、復元口径は 9.4cm、金雲母を多く含み、明橙色を呈する。ともに外底部に板状圧痕を有する。64 は古代の坏で、底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。外面には煤が付着する。65 は瓦器椀で、内外面ともに粗い磨きが施される。66 は土錘で両側面に抉りを入れる。重さは 22.23g を量る。67 は同安窯系青磁碗



Ph.18　SE140005 出土遺物

Ⅲ -1a 類、68・69 は白磁碗Ⅳ類である。69 は高台片で、縁辺を打ち欠いて円盤状に整形しようとしており、瓦玉の製作途中と考えられる。70 は陶器の壺の口縁部片で、黒色粒を含む灰色の胎土に茶褐色の釉がかかる。

71~78 は掘方から出土した遺物である。71・72 は瓦器椀で、71 の口縁部片は焼成良好で銀化する。72 の高台内にはヘラで刻みが入る。73 は須恵質の擂鉢で、内面は使用され、滑らかとなる。底部、外面はナデで調整される。胎土に黒色粒、赤褐色粒、白色砂粒が多く入る。74 は白磁碗の胴部片で、外面に蓮弁が刻まれる。75 は同安窯系青磁碗Ⅲ -2 類で、内面見込み部分の釉を環状に掻き取る。76 は丸瓦で、凸面はナデを施し、凹面には細かい布目が残る。77 は瓦玉で、土師質の平瓦片の周縁部を打ち欠いて整形する。10.3g を量る。78 は大型の滑石製石鍋である。内外面ともに煤が付着する。

79~89 は上層の廃棄後の埋土から出土した遺物である。79 は黒色土器 B 類の椀である。外面は横方向のナデ、内面は粗い磨きで調整する。80 は瓦器皿、81 は楠葉型瓦器椀の口縁部片で、内外面ともに細かい磨きが施される。82 は須恵器の坏身で高台内にはヘラ切り調整と板状圧痕が残る。83 は白磁碗Ⅴ -4b 類、84 は越州窯系青磁の小碗で、高台内に胎土目が残る。85 は磁州窯系陶器の壺の胴部片で外面に唐草文の鉄絵が描かれる。86 は無釉陶器の捏鉢である。内面はよく使用され、滑らかとなる。胎土に白色砂粒、黒色粒を多量に含む。87 は須恵質の軒丸瓦で、瓦当には界線と草花文が施される。88 は粘板岩製の砥石で、欠損部以外は全てよく使用されており、上面は凹状に窪む。89 は滑石製石鍋の口縁部片である。他に、黒色土器 A 類、土錘、軽石、鉄釘、鉄塊系遺物、ガラス坩堝（Ⅲ -34 Fig.19-449）、硅石（Ⅲ -34 Fig.19-450・451）粘土塊が出土する。井戸の時期は 12 世紀後半と考えられる。

SE140058（Fig.9　Ph.19~22）　調査区北東側に位置し、北側は SE140001 に切られる。南側の掘方と下層の井側が遺存していた。掘方の平面形は円形を呈し、直径 2.1m を測る。掘方の壁は傾斜を急にする。井側は南側よりに作られており、上層で 55~75cm、最下面で 45cm を測る。標高 1.1m 付近から幅 4cm の縦方向の板目を確認した。井側には桶を使用したと考えられる。また、10cm 下の標高 1.0m 付近で、直径約 40cm を測る環状の木質が確認できた。水溜には曲物が使用されたと考えられる。湧水はしなかった。

出土遺物（Fig.10）　90~105 は井側内から出土した遺物である。90~92 は土師器で、90・91 は回転糸切り底の坏で、口径は 14.3cm、15.6cm を測る。92 は回転糸切り底の小皿で、口径は 8.8cm である。ともに外底部に板状圧痕を有する。93~95 は瓦器である。93 は回転糸切り底を有する皿、94・95 は椀である。96 は土鍋の口縁部片で、粗いナデで調整する。内外面ともに煤が付着する。97~99 は白磁で、97・98 は皿Ⅵ -1a 類、99 は碗Ⅷ類である。100・101 は同安窯系青磁碗Ⅰ -1b 類、102 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。103 は施釉陶器の鉢で、碁笥底風の底部がつく。黒色粒を含む灰色の胎土に灰緑色の釉がかかる。体部外面下位に目跡を有する。104 は施釉陶器の甕の口縁部片である。口縁部は内側へ屈折し外面に稜線を作る。胴部外面は目の粗い平行叩き、内面は同心円の当て具痕を有する。胎土は赤褐色を呈し、白色砂粒、黒色粒、赤褐色粒を多く含み、緑褐色釉がかかる。105 はⅤ様式系の甕の底部片で底部に穿孔を有する。白色砂粒、金雲母を胎土に含み、色調は灰橙色を呈する。内外面ともに粗い刷毛目で調整するが、外面胴部下位はナデを施す。

106・107 は掘方から出土した遺物である。106 は施釉陶器の鉢である。暗茶褐色の胎土に暗灰緑色の釉がかかる。口縁部は折り曲げて玉縁状に肥厚させる。107 は施釉陶器の耳壺である。胎土は茶灰色で、明茶褐色の釉が外面にかかる。他に、鉄釘、不明鉄製品、鉄滓、ガラス坩堝（Ⅲ -34 Fig.19-452）、珪石、リシア雲母（Ⅲ -34 Fig.19-453）、粘土塊等が出土し、井戸の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

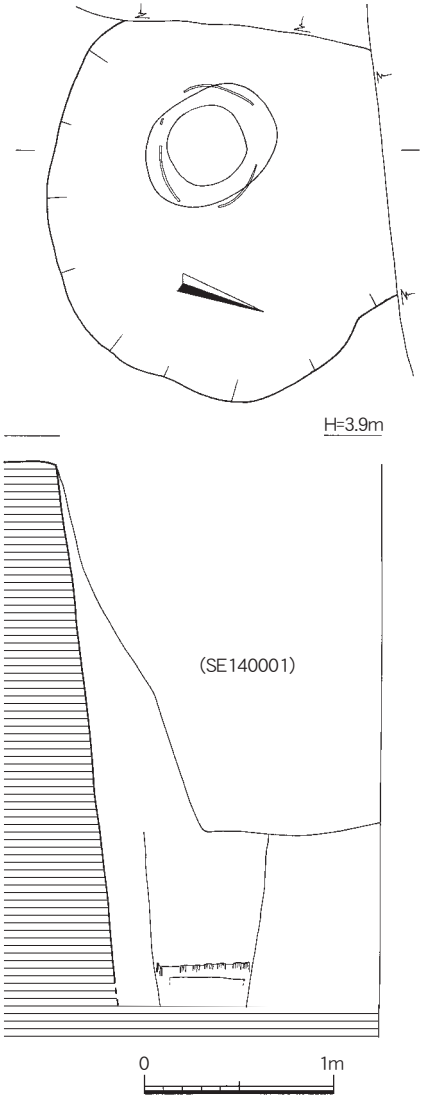
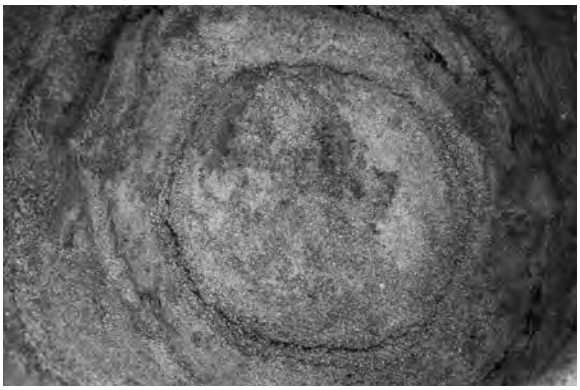


Fig.9　SE140058 実測図（1/40）

Ph.19　SE140001・140005・140058（北西から）

Ph.20　SE140058（北から）

Ph.21　SE140058 井側内桶・曲物検出状況（西から）



Ph.22　SE140058 曲物検出状況（西から）

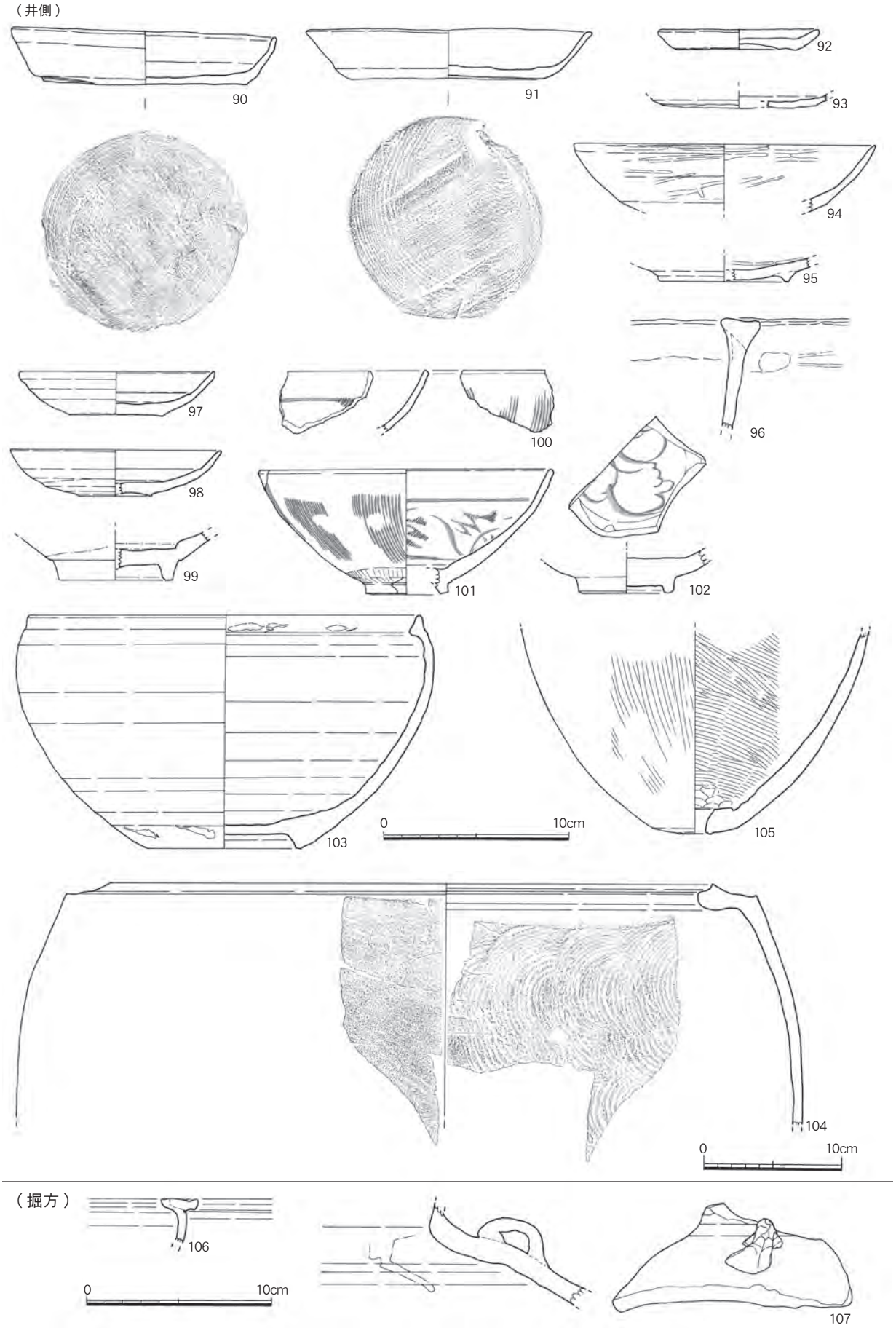


Fig.10　SE140058 出土遺物実測図（1/3・1/4）

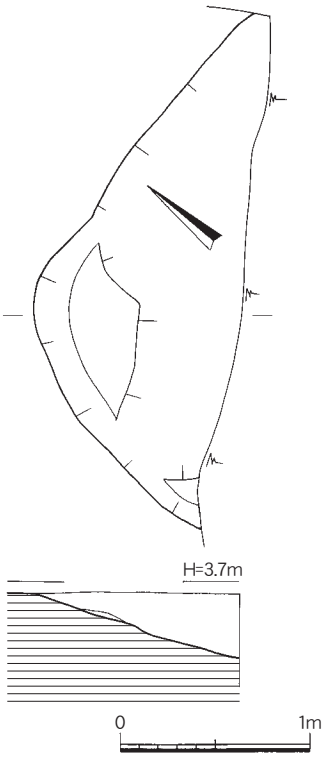


Fig.11　SK140006 実測図（1/40）

Ph.23　SK140006 土層（北から）

（2）土坑（SK）

SK140006（Fig.11　Ph.23）　調査区南東側に位置し、南側の大部分は調査区外へ延びる。現況で、東西 2.0m 以上、深さは 33cm 以上を測り、北側と西側にテラスを有する。覆土は茶褐色シルトと黄褐色シルトの互層である。出土遺物は金属坩堝（Ⅲ -34 Fig.1-4）、弥生土器、土師器の細片が出土する。土坑の時期は古代と考えられる。

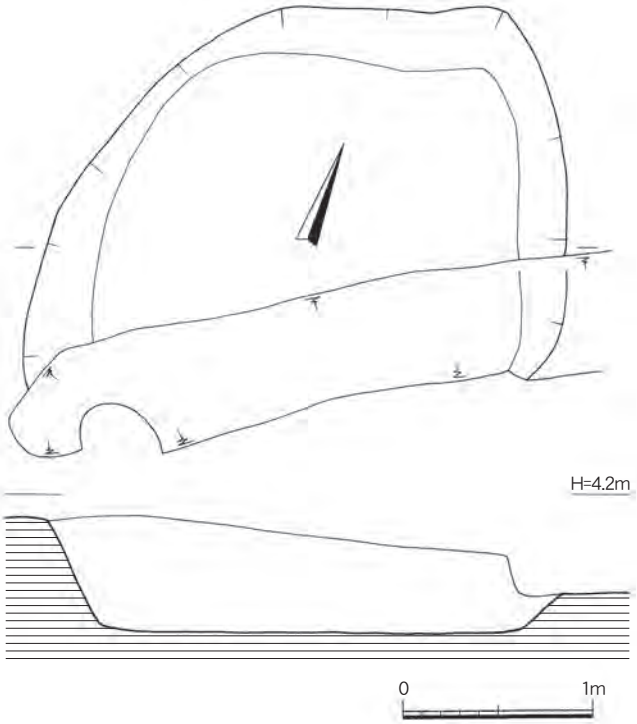
SK140008（Fig.12　Ph.24）　調査区南西端に位置し、南側の大部分は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈し、東西方向の一辺は 2.8m、南北方向は 2.0m 以上を測る。断面形は逆台形をなす。深さは 60cm で、覆土は灰色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.12）　108 は回転糸切り底の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。口縁端部は一部細かく割れ、それ以外の箇所に煤が付着する。灯明皿として使用される。109・110 は白磁で、109 は皿Ⅵ -1b 類、110 は碗Ⅶ -2b 類である。111・112 は同安窯系青磁で、111 は碗Ⅰ -1b 類の口縁部片、112 は碗Ⅰ類の底部片、113・114 は龍泉窯系青磁碗である。113 は外面に細かい縦の櫛目、内面には片彫り草花文を施す。114 は高台畳付付近まで釉がかかるが、高台内は露胎である。見込みには細かい櫛目と片彫り草花文が施される。115 は越州窯系青磁碗の胴部片で、内面には片彫りによる草花文を描く。116 は施釉陶器の水注である。黒色粒を含む灰色の胎土に黒色の釉がかかるが、熱を受け、発泡する。117 は土師質の丸瓦で、色調は明橙色、部分的に黒色を呈する。他に、ヘラ切り底の土師器、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、高麗陶器、須恵質の磚、ガラス坩堝（Ⅲ -34 Fig.29-605）、硅石が出土する。土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

SK140011（Fig.13　Ph.25）　調査区北側中央に位置し、SK140013 に東側を切られ、北側の大部分は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈し、東西方向の一辺は 3.0m、南北方向は 1.0m 以上を測る。断面形は逆台形をなす。深さは 45cm を測り、覆土は灰褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.13）　118・119 は白磁碗Ⅳ類、120 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ -3a 類である。121 は青磁片で、外面には粗い縦方向の櫛目、内面は花文を描く。胎土は灰黄色を呈し、灰緑色の釉がかかる。122 は施釉陶器の小壺で、肩に稜線が入る。白色砂粒、黒色粒を含む橙色の胎土に濃灰緑色の釉がかかる。123 は無釉陶器の捏鉢である。内面はよく使用され、滑らかとなる。胎土には白色砂粒、黒色粒を多量に含み、明橙色を呈する。124 は施釉陶器の鉢で、碁笥底風の底部がつく。黒色粒、白色砂粒を含む明橙色の胎土に灰緑色の釉がかかる。125 は古墳時代の鉄片である。他に、瓦器、鉄釘、滑石片、瓦質の瓦、金属坩堝、炉壁が出土する。土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

SK140013（Fig.13　Ph.26）　調査区北側中央に位置し、北側の大部分は調査区外へ延びる。平



Ph.24　SK140008（北から）

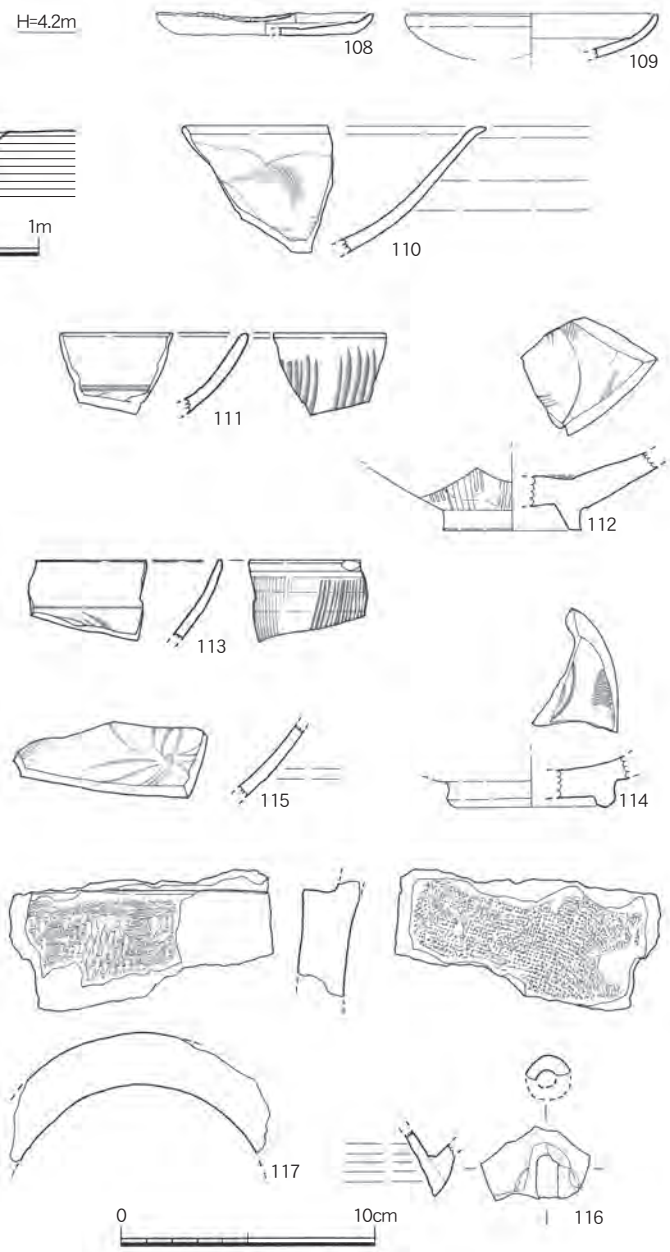


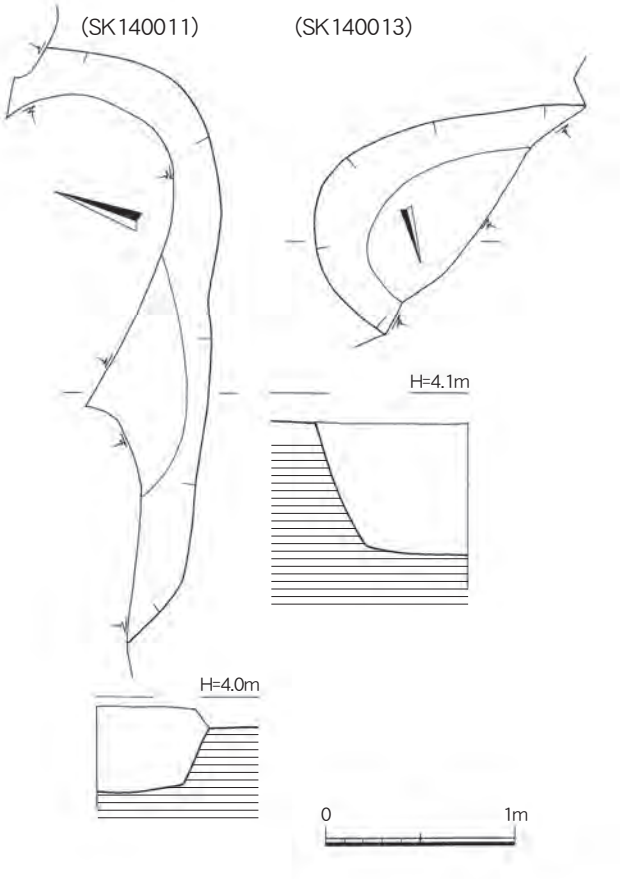
Fig.12　SK140008 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）

面プランは楕円形を呈し、長径 1.3m 以上、短径 1.0m 以上を測る。断面形は逆台形をなす。深さは 65cm を測り、覆土は灰白色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.13）　126 は回転糸切り底の土師器の小皿で、復元口径は 8.8cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。127 は白磁碗Ⅴ -4a 類、128 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ -3a 類である。129 は陶器の盤で、黒色粒、白色砂粒を含む灰色の胎土に黄釉が施釉される。他に粘板岩製の砥石片、滑石片、鉄釘、鉄塊系遺物、炉壁、被熱した石が出土し、土坑の時期は 12 世紀後半と考えられる。

SK140031（Fig.14　Ph.27）　調査区中央に位置し、東側を SE140005、西側を SK140008 に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.6m 以上、短径 1.0m を測る。深さは 23cm で、覆土は灰白色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.14）　130・131 は土師器の甕の口縁部片である。130 の



Ph.25　SK140011（南から）

Ph.26　SK140013（南から）

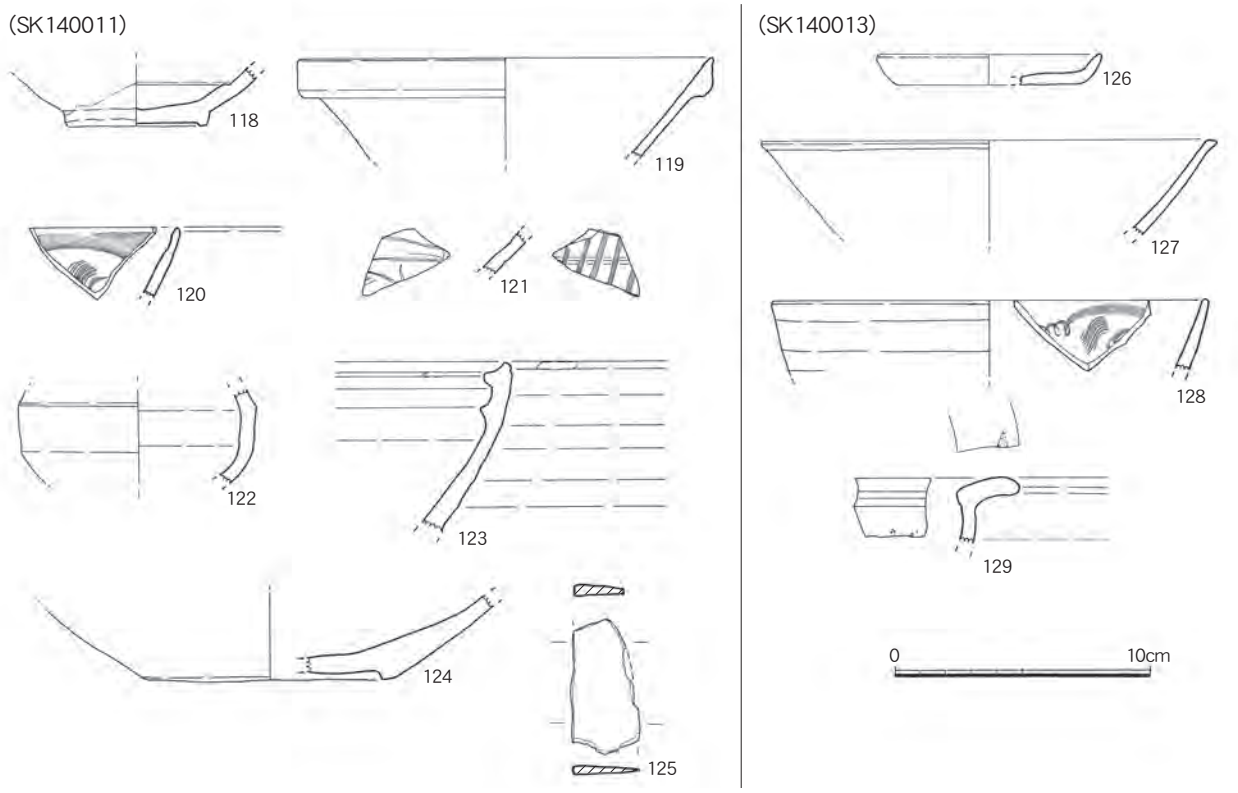


Fig.13　SK140011・140013 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

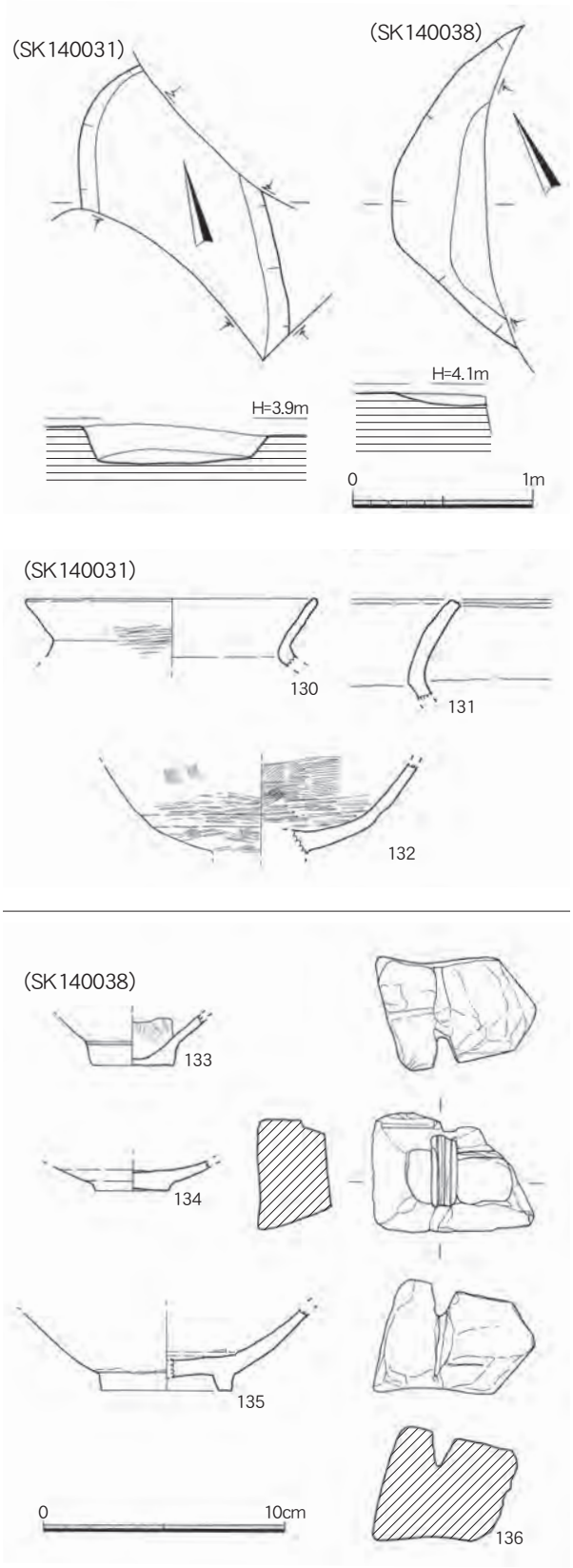


Fig.14　SK140031・140038 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）

Ph.27　SK140031（西から）

口縁部は横方向のナデ、体部内面は削り、頸部外面にはわずかに叩きの痕跡が残る。胎土に金雲母を多く含み、橙色を呈する。131 の口縁部は緩やかに外反し、端部は角張る。白色砂粒、金雲母をわずかに含み、明橙色を呈する。132 は高坏の坏部片で、丸味を帯びて立ち上がり、下位に稜線を有する。外面と内面上半は横方向の細かいナデで調整し、内面底部は磨きが施される。他に混入と考えられる金属坩堝片（Ⅲ -34 Fig.2-28）が出土する。土坑の時期は古墳時代前期と考えられる。

SK140038（Fig.14）　調査区西側に位置し、南東側の大部分を SK140008 に切られる。平面プランは隅丸方形を呈すると考えられ、一辺 1.3m 以上を測る。深さは 5cm ほどしか残っておらず、覆土は黒褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.14）　133 は青白磁の小碗の底部片で、細かい貫入が入る。底部径は 3.3cm と小さく、平底を呈し、露胎である。体部内面には櫛目による文様が描かれる。極めの細かい灰白色の胎土に青緑色の釉がかかる。134・135 は白磁で、134 は皿Ⅵ類、135 は碗Ⅷ類の底部片で、内面見込みの釉を輪状に掻き取る。見込みには目跡も残る。136 は滑石製石鍋を転用した錘である。縦耳の部分を使用したと思われ、外面と側面中央に一周するよう溝が刻まれる。煤の付着はみられない。重さは 194.64g を量る。他に、回転糸切り底の土師器、瓦器、龍泉窯系青磁、施釉陶器、砂岩製の砥石、ガラス坩堝、金属坩堝が出土する。土坑の時期は 12 世紀中頃から後半と考えられる。

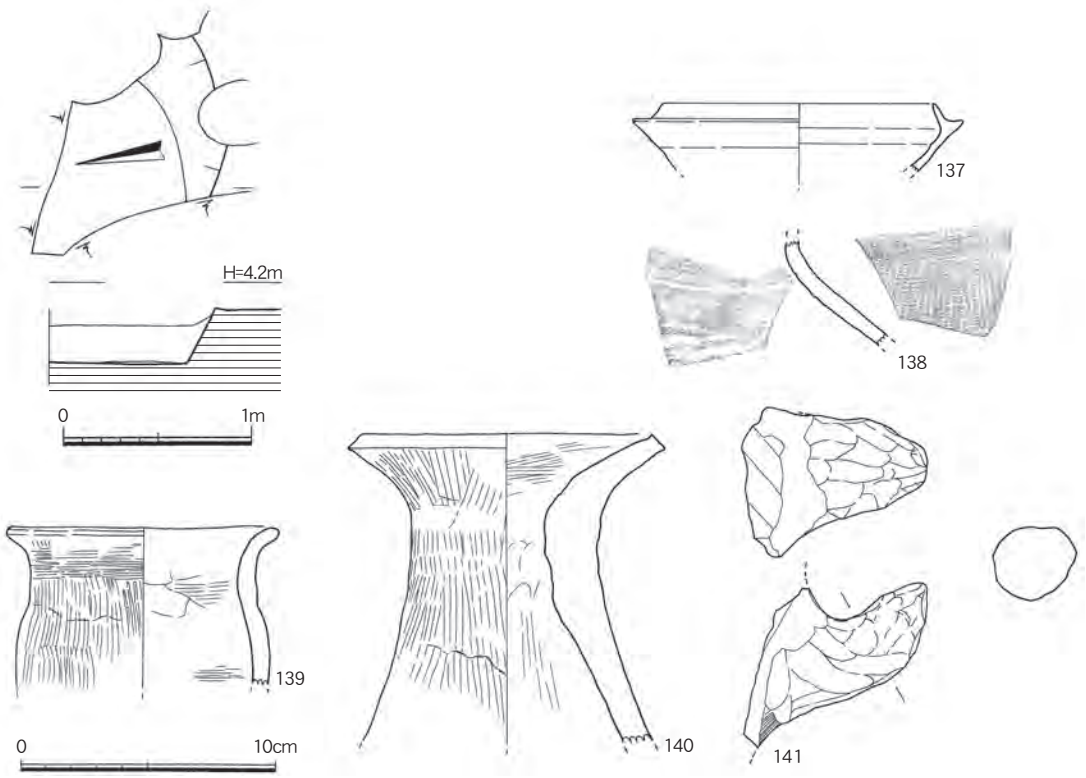


Fig.15　SK140067 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK140067（Fig.15）　調査区南西端に位置し、大部分は調査区外へ延びる。断面形は逆台形をなす。深さは 28cm を測り、覆土は灰色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.15）　137・138 は須恵器である。137 は坏身の口縁部片である。胎土は白色砂粒を含み、赤橙色を呈する。138 は甕で、胴部に叩き及び当て具痕が残る。139 は土師器の甕である。胴部外面は粗い縦方向の刷毛目、内面は強いナデで調整する。細かい金雲母を多く含み、色調は明橙色を呈する。口縁部から胴部外面にかけて煤が付着する。140 は下層の遺物の混入で、弥生土器の器台である。器壁が厚く、受部と脚部の境が緩く屈曲する。141 は甑の把手である。他に、移動式竈片が出土する。土坑の時期は 6 世紀末から 7 世紀前半と考えられる。

（3）SP 出土遺物（Fig.16）

142 は SP140004 出土の須恵器の坏蓋で、天井部はヘラ切り未調整、ヘラ記号が残る。143 は SP140021 出土の土師器の脚付鉢の脚部片である。刷毛目調整ののち、細かい磨きが施される。胎土に金雲母を多く含み、脚部外面は明橙色、鉢底部と脚部内面は黒色を呈する。144 は SP140027 出土の高坏の坏部と脚部の接合箇所の縁辺を丁寧に打ち欠き、円盤状に仕上げたものである。145 は SP140037 出土の弥生土器の甕の底部片である。146~148 は SP140062 出土、146・147 は土師器である。146 は甕の口縁部片で、外面は叩き、内面下位は斜め方向の削りで調整する。口縁端部は摘み上げる。147 は高坏の口縁部片で、内面は横、斜め方向の刷毛目、内面はナデで調整したのち、縦方向の暗文を内外面ともに施す。148 は砂岩製の砥石である。左側面の上半には幅 3mm ほどの細い溝状の窪みがあり、下位は敲打した痕跡が残る。他面でもわずかであるが、研磨痕が残る。重さは 220.64g である。149 は SP140064 出土の須恵器の坏身である。底部外面はヘラ切りの

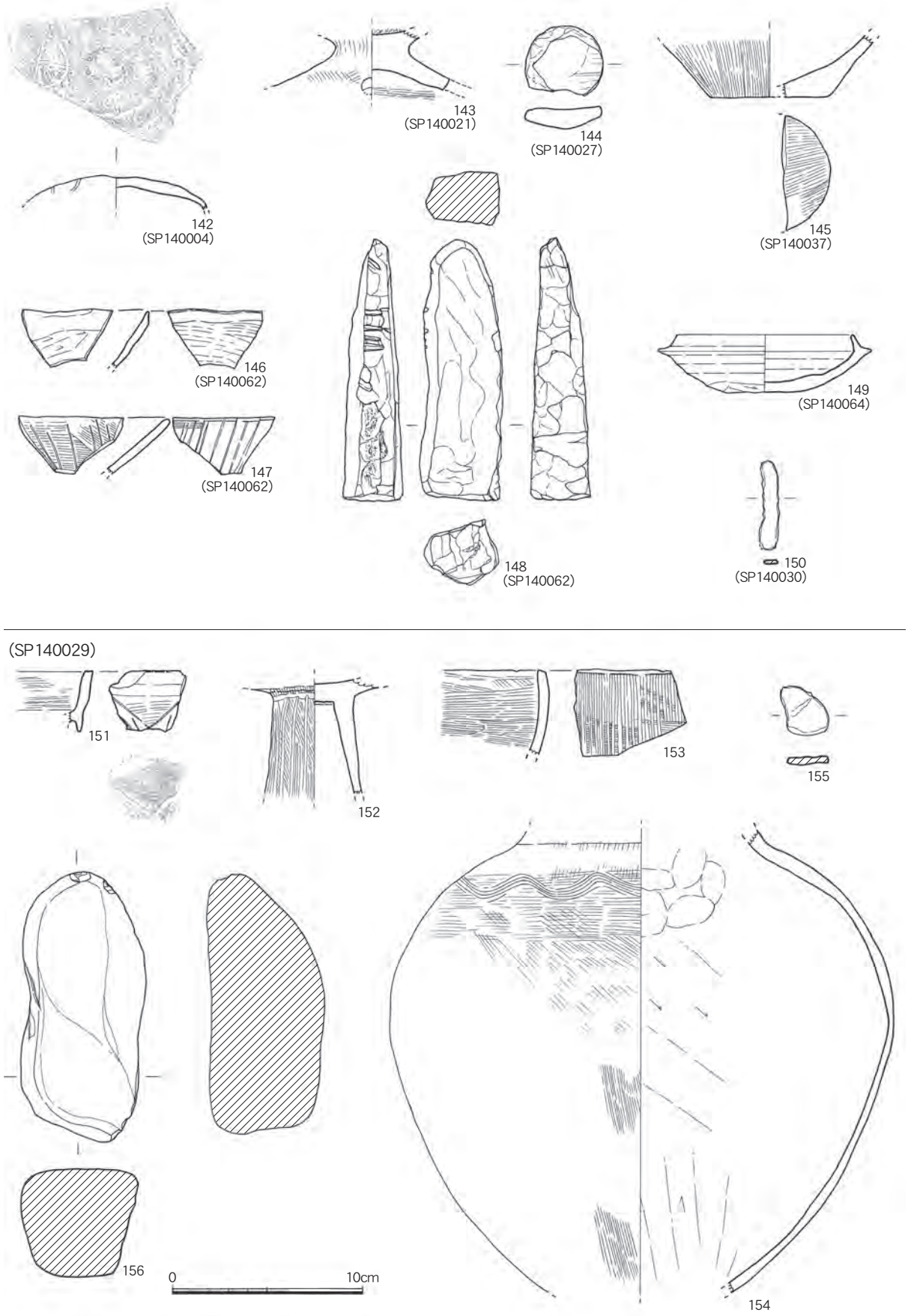


Fig.16　第 1 面 SP 出土遺物実測図（1/3）

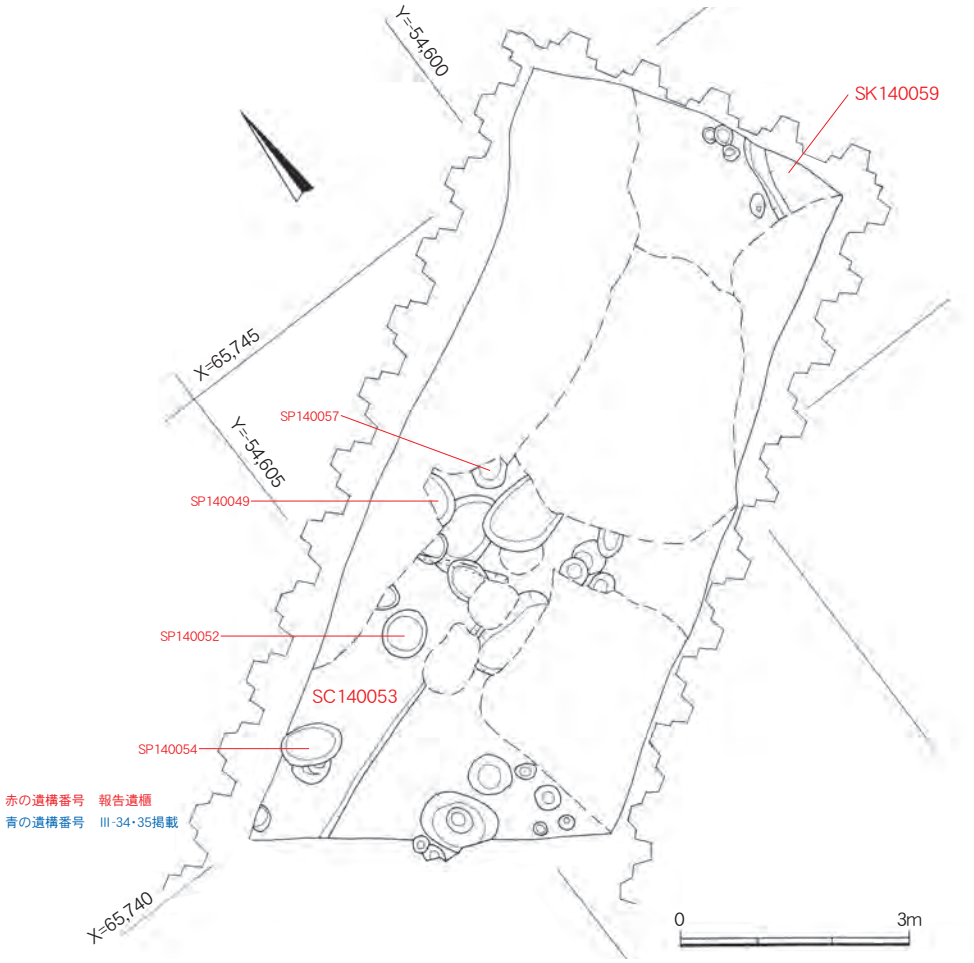


Fig.17　第２面全体図（1/100）

Ph.28　２面全景（南西から）

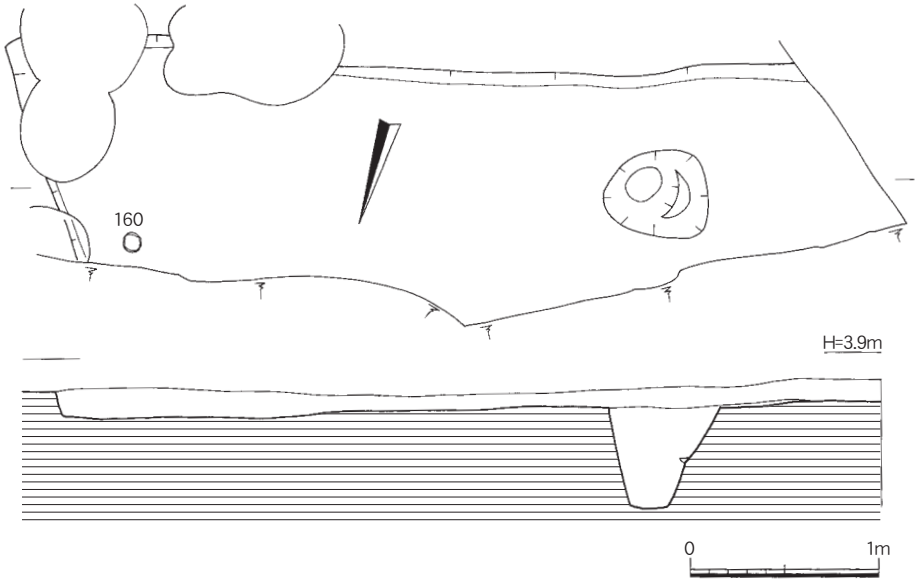


Fig.18　SC140053 実測図（1/40）

Ph.29　SC140053（北から）

Ph.30　SC140053 土師器出土状況（西から）

後、手持ちでの削りで調整する。胎土は白色砂粒、金雲母を多く含み、色調は明橙色を呈する。150 は SP140030 出土の厚さ約 2.0mm の古墳時代の鉄片である。151~156 は SP140029 出土の遺物である。151 は西部瀬戸内系の二重口縁壺の口縁部片である。内外面ともに横方向の刷毛目調整が残り、下位には文様が施される。152~154 は土師器である。152 は高坏の脚部片で、外面は縦方向の刷毛目調整の後、間隔を空けて縦方向の磨きを施す。153 は鉢の口縁部片で、内外面ともに横方向の刷毛目調整の後、外面は細い縦方向の磨きを丁寧に施す。154 は壺の胴部片で、外面は刷毛目調整の後、肩部に波状文を施す。内面の頸部付近は指オサエ、胴部は削りで調整する。155 は厚さ約 3.0mm の不定形な鉄片である。156 は断面台形を呈する叩き石で、上端中央部に敲打痕が残る。重さは 858.25g である。

3）第 2 面の調査（Fig.17　Ph.28）

第 2 面は黄褐色砂の砂丘上面、標高約 3.7m で検出した。検出した主な遺構は竪穴住居跡 1 基、土坑 1 基、柱穴である。

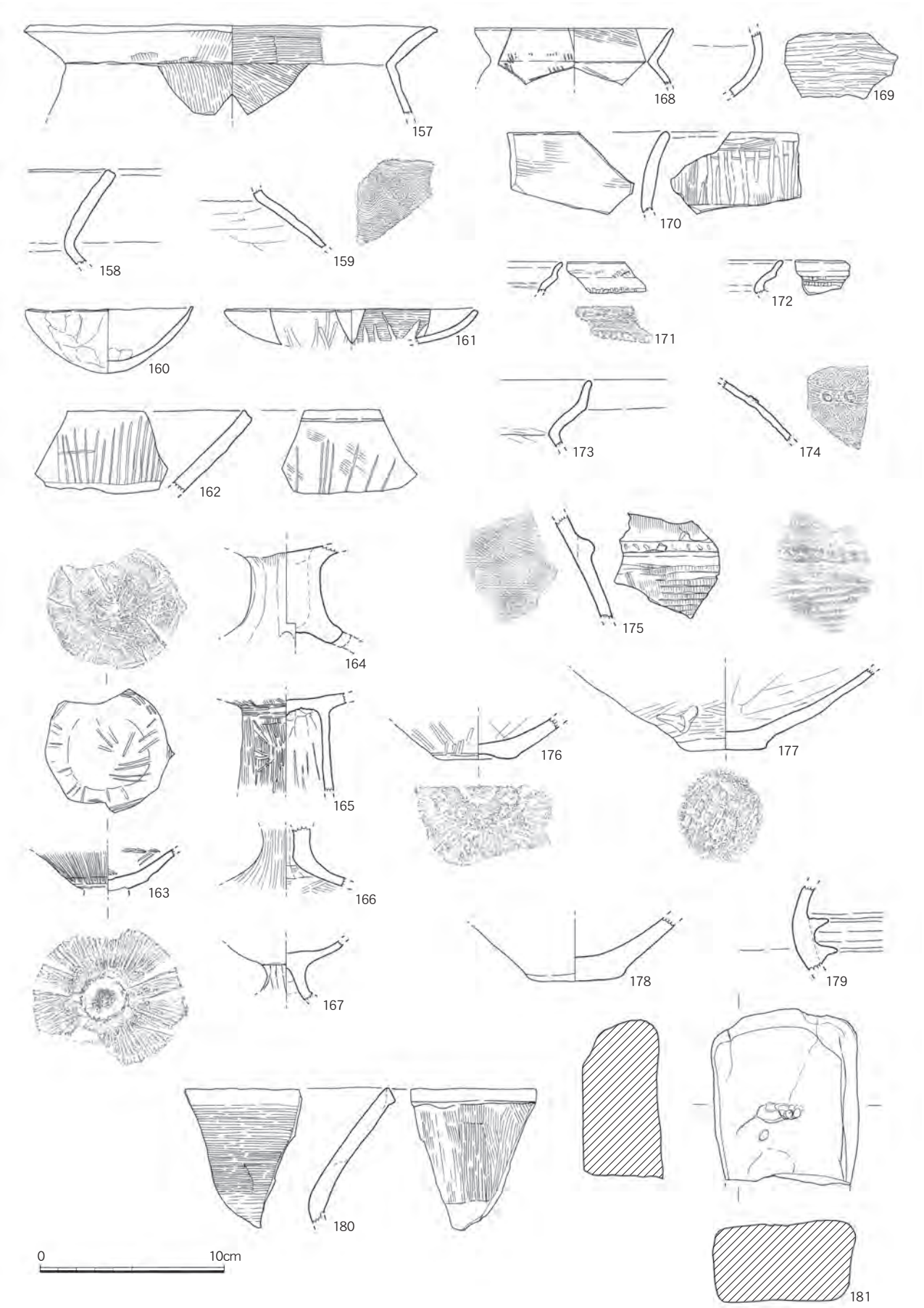


Fig.19　SC140053 出土遺物実測図①（1/3）

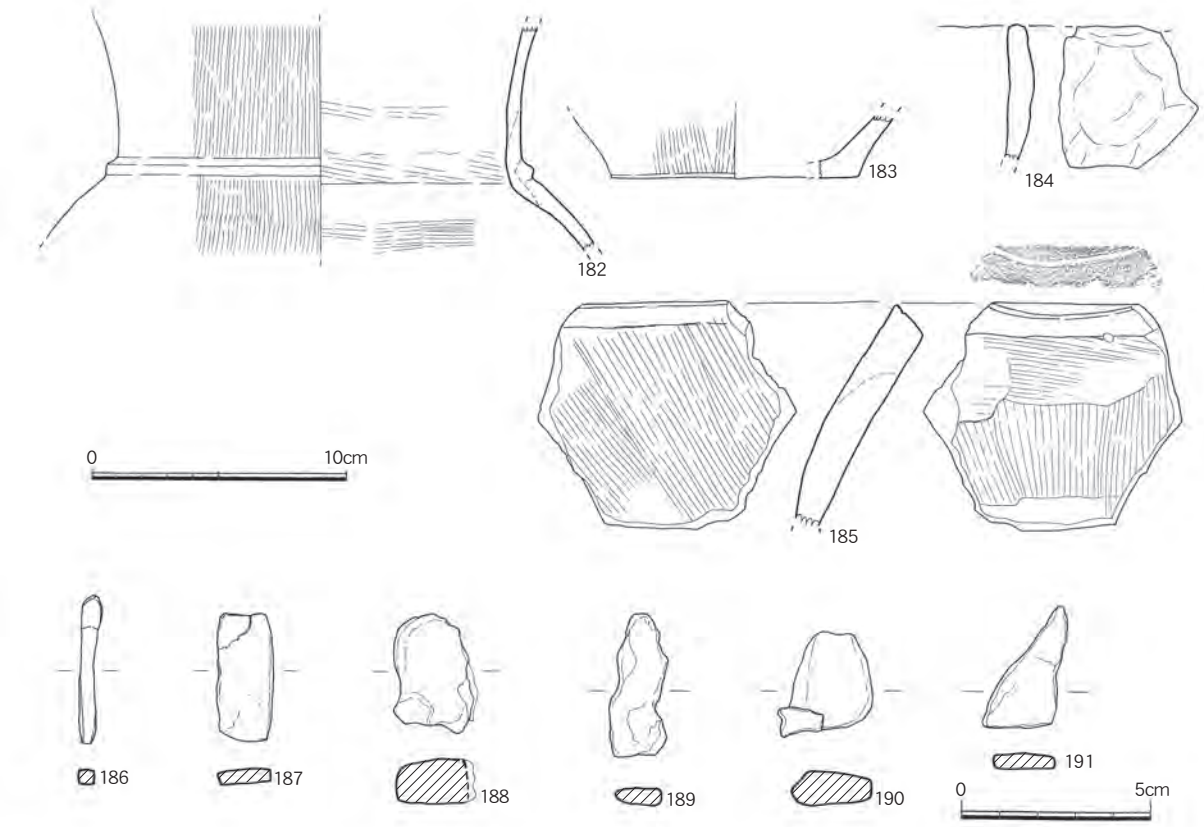
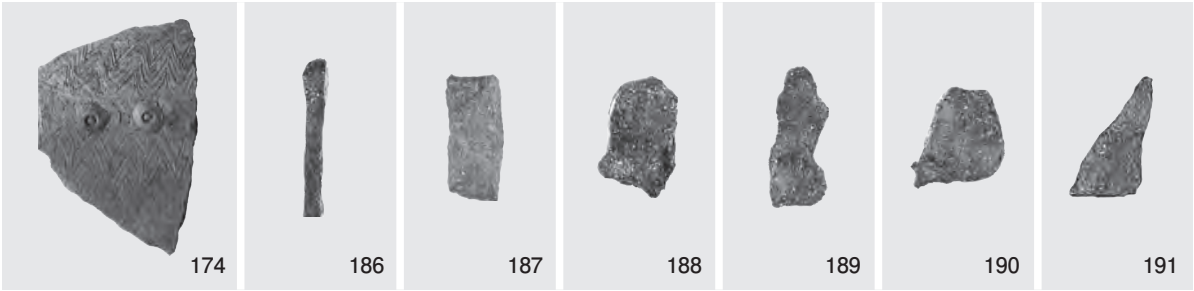


Fig.20　SC140053 出土遺物実測図②（1/3・1/2）



Ph.31　SC140053 出土遺物

（1）竪穴住居跡（SC）

SC140053（Fig.18　Ph.29・30）　調査区西側に位置し、北側と西側は調査区外へ延びる。平面プランは方形で、東西の長さ 4.1m 以上、床面までの深さはわずか 15cm である。西側で深さ 55cm のピットを検出したが、東側で対応するピットを確認することができなかったため、主柱穴となるかは不明である。覆土は灰黄褐色を呈し、わずかに炭化物が混入する。

出土遺物(Fig.19･20　Ph.31)　157~159 は土師器の甕である。157 は内外面刷毛目調整を施す。外面には煤が付着する。158 の口縁部外面はナデ、内面は磨滅しており調整不明である。159 の内面は削り、外面は刷毛目調整ののち、ナデ消し、肩部に波状文を描く。160 は完形品の手捏ねの鉢で、北東側床面より 5cm 程浮いた状態で出土した。外面底部は指オサエが残り、口縁部は横ナデで調整する。金雲母を多く含み、明橙色を呈する。161 は小型器台の受部で、内面は刷毛目、外面は横方向のナデで調整したのち、内外面に放射状の暗文を施す。162~167 は高坏である。162 は坏部の口縁部片で、内外面丁寧なナデで仕上げるが、外面には一部刷毛目調整が残る。内面は放射状、外面は縦方向の暗文を施す。163 は坏部の接合部分で、外面は粗い刷毛目、内面は磨きで仕上げるが、工具痕が多く残る。164 はＶ様式系の高坏脚部で、外面は一部刷毛目が残るが、磨滅が著しい。脚部

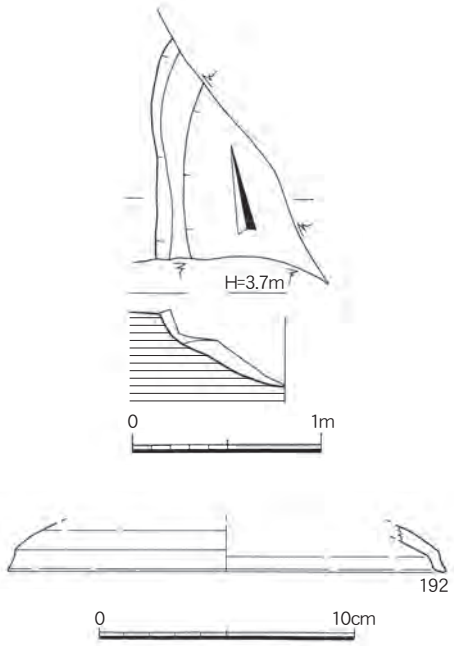


Fig.21　SK140059 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）

に穿孔を有する。165~167 の脚部外面は縦方向の研磨が施される。168~180 は壺である。168 は口縁部片で、体部外面にはわずかに叩きが残る。細かい金雲母、赤褐色粒を含み、色調は橙色を呈する。169 は小型丸底壺の胴部片で、外面には細かい横方向の磨きを施す。170 は口縁部片で、外面は横方向と縦方向の磨きを行う。金雲母を多く含み、色調は赤褐色を呈する。171・172 は東海系 S 字状口縁台付き甕の口縁部片である。171 の口縁部外面には刷毛工具による押し引きを行う。172 の色調は暗灰橙色を呈し、内外面に煤が付着する。外面屈曲部には縦方向の沈線が入る。173 は二重口縁壺の底部片で、体部内面は削り、他はナデで調整する。外面に煤が付着する。174 は畿内系の壺の胴部片で、器壁は薄く、色調は橙色を呈する。肩部外面は丁寧なナデで調整したのち、櫛状工具による平行沈線と波状文を描く。さらに、平行沈線上には竹管文を貼り付ける。175 は胴部片で、体部に台形状の突帯が巡り、端部に刻みをいれる。下半は叩きが残る。176~178 はＶ様式系の底部片で、内面には板ナデの痕跡が残る。179 は断面三角形の二重突帯が巡る。色調は明橙色を呈する。180 は口縁部片で外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目で調整する。181 は砂岩製の台石である。凹面の中央に敲打痕が残る。重さは 592.16g である。182・183 は弥生土器である。182 は複合口縁壺の頸部片で台形状の突帯が巡る。183 は底部片である。184 は蛸壺で、手捏ねで作られ、指ナデの痕跡が残る。185 は大甕の口縁部片である。内外面ともに刷毛目で調整し、端部は横方向のナデで仕上げる。186~191 は鉄片である。不定形で、形状、断面の厚さ等も不揃いである。以上の出土遺物から住居跡の時期は古墳時代前期前半である。

（2）土坑（SK）

SK140059（Fig.21）　調査区東端に位置し、東側の大部分は調査区外へ延び、南側は SK140006 に切られる。深さは 40cm を測り、壁は検出面より 15cm 下までは傾斜を急にするが、それより下は緩やかとなる。覆土は灰白色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.21）　192 は須恵器の坏蓋である。口縁部はわずかに摘みだし、端部は平坦に仕上げる。天井部は回転ナデの痕跡が残る。胎土に黒色粒を多く含み、色調は灰色を呈する。他に土師器の甕が出土する。土坑の時期は 8 世紀前半から中頃と考えられる。

（3）SP 出土遺物（Fig.22）

193・194 は SP140052 出土である。193 は弥生土器の逆「L」字状口縁を有する大甕である。194 は土師器の高坏である。内外面ともに縦方向の磨きを有するが、その下に刷毛目調整が残る。195~197 は SP140054 出土の土師器である。195 は複合口縁壺の口縁部片である。196 は鉢で、胎土に金雲母を多く含み、口縁部付近は明橙色、下位は橙色を呈する。197 は庄内系の甕で、口縁端部は摘み上げる。外面は太い叩き目が残り、煤が付着する。内面は粗い刷毛目で調整され、工具痕が残る。198 は SP140049 出土の不定形な鉄片、199・200 は SP140057 出土の棒状の鉄片で、厚さは 2.0~3.0mm である。

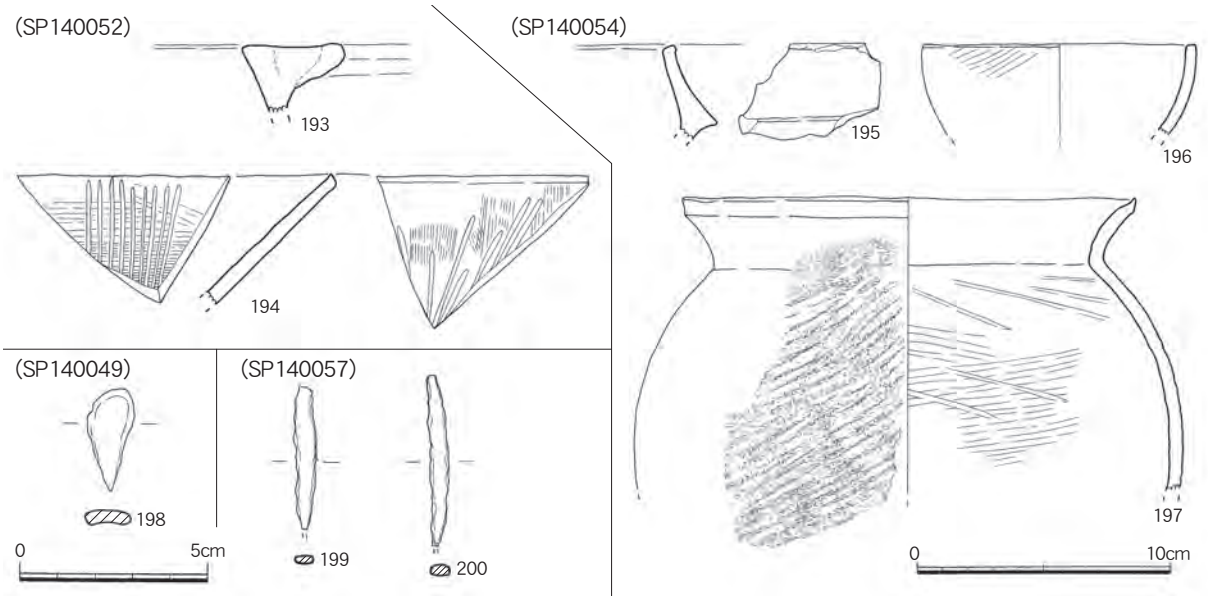


Fig.22　第 2 面 SP 出土遺物実測図（1/3・1/2）

4）その他の出土遺物（Fig.23　Ph.33）

201~204 は調査区北西隅で確認した遺構からの出土であるが、上層を SE140012 に削平されており、掘削時は別遺構と判断できず、SE140012 として掘削してしまったため、平面プランを確認することができなかった。14・15 層（Ph.32）から出土した遺物を確認するとわずかに時期差が認められるため、別遺構と考えられる。201~203 は 15 層出土で、201 は都城系土師器の大坏である。内外面ともに回転ナデで調整したのち、体部内面に放射状の細かい暗文を施し、見込みと体部中位に連弧文を描く。体部外面は密な横方向の磨きが施される。胎土には金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、色調は明橙色を呈する。202 は土師器の坏蓋、203 は須恵器の高台付坏の底部片で、底部はナデで仕上げる。204 は 14 層出土の白磁碗XI類の底部片で、胎土は淡灰色で、灰白色の釉がかかる。

205~219 は 1~2 面の包含層より出土した遺物である。205・206 は東海系 S 字状口縁甕の破片である。206 は短く屈曲した口縁をもち、外面に押引文を施す。肩部は粗い叩きで調整され、その後、頸部付近は横方向のナデを行う。外面には煤が付着する。頸部内面には横方向の櫛目が残り、体部内面は刷毛目の後、指オサエ、ナデで調整される。207~212 は須恵器である。207・208 は坏蓋、209 は坏身で、天井部及び底部はヘラ切り未調整である。210 は平底鉢の底部片で、横方向のナデで調整され、外面には工具痕が残る。211 は坏で、体部内面に段を有する。212 は甕の口縁部片で、頸部外面にヘラ記号が残る。213 は楠葉型の瓦器椀で、口縁内面の端部付近に浅い沈線をもつ。内外面ともに細かい磨きを施す。214 は白磁皿Ⅲ類で内面見込み部分の釉を環状に掻き取り、目跡が残る。215 は白磁碗Ⅴ類を使用した瓦玉で、重さ 58g である。216 は青白磁の合子の蓋で、天井部を円盤状に打ち欠く。217 は蛸壺、218 は有孔土錘で、上下端に横方向の穿孔を有する。重さは 28.96g である。219 は砂岩製の石球で稜を持たず、丁寧に作られ、23.33g を量る。220~227 は撹乱より出土した遺物である。220~222 は撹乱 140010 よりまとまって出土した。220・221 は回転糸切り底の土師器の小皿、222 は秉燭である。223 は土師器の甕で、外面には煤、内面には焦げが付着する。224 は土師器の壺で、頸部を巡る突帯にヘラで斜格子状の刻みを刻む。225 は越州窯系青磁碗Ⅰ -2a ア類である。226・227 はいぶし瓦で、226 は軒瓦に付属する万十小巴、227 は鬼瓦である。

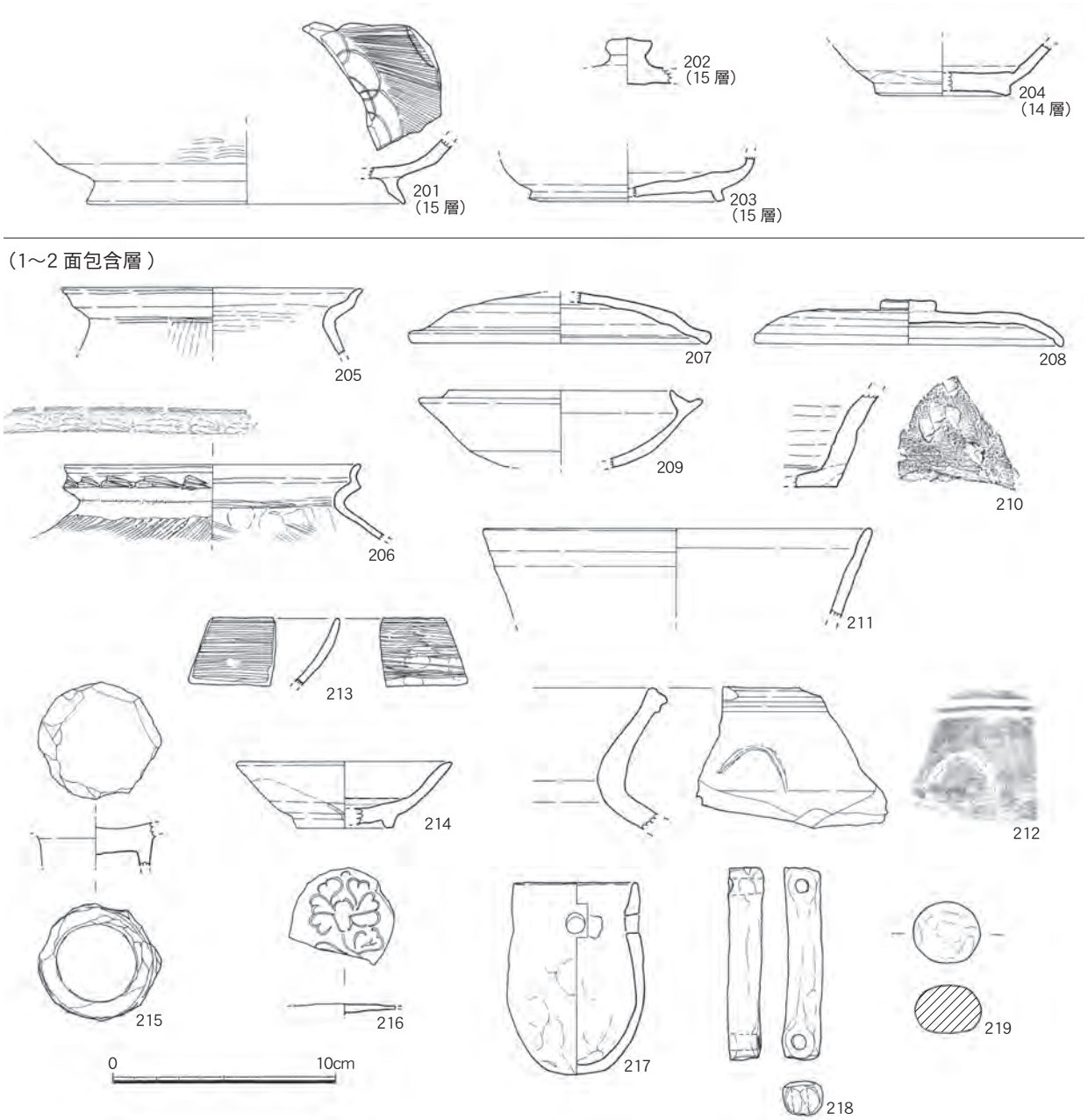


Fig.23　第 1~2 面包含層出土遺物実測図（1/3）

Ph.32　14 区北西端土層（南から）

Ph.33　第 1~2 面包含層出土遺物

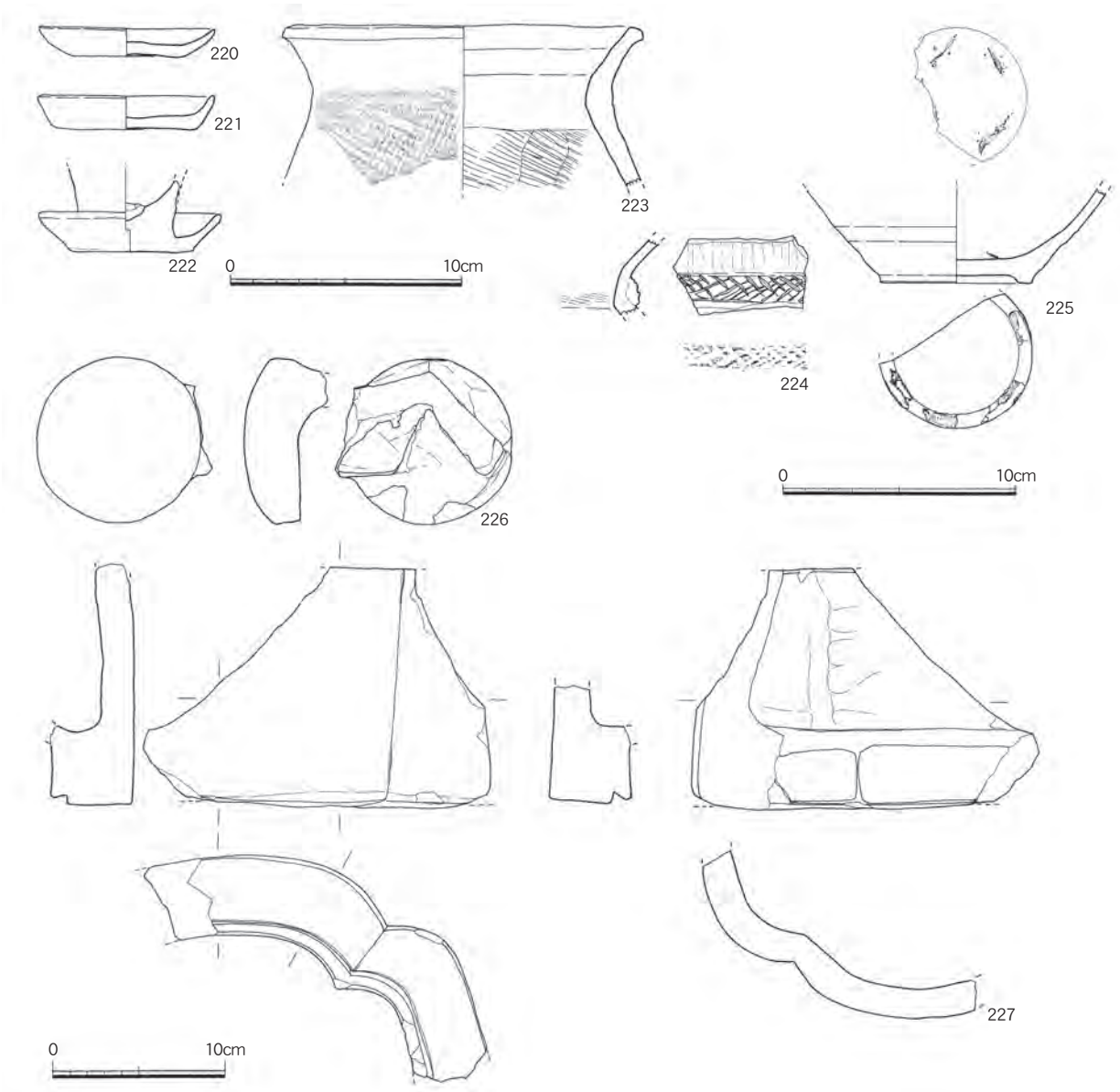


Fig.24　撹乱出土遺物実測図（1/3・1/4）

5）小結

14 区は 203 次調査において、最も標高が高く、内陸側に位置する。他の調査区と同様、弥生時代終末から中世にかけての遺構を検出した。古墳時代前期前半の竪穴住居跡 SC140053 からは、在地土器とともに畿内系の壺や高坏、東海系の S 字状口縁台付き甕など他地域の土器が多く出土する。また、不定形で、形状、断面の厚さも不揃いな鉄片も多量に出土しており、他の竪穴住居跡とは様相を異にしている。竪穴住居跡からの鉄片の出土量は他の住居跡と比較しても SC140053 は多く、炉跡等は検出できなかったが、鍛冶工房であった可能性がうかがえる。なお、古代の土坑も狭小な調査区の中で、多く検出しており、都城系土師器の椀や坏、防長産や畿内産の緑釉陶器もみられる。また、中世においては 12 世紀中頃から 14 世紀前半にかけての井戸が密集して検出される。ガラスの坩堝や鉛塊、珪石等、ガラス製造関連遺物が出土しており、９区で大量に見つかったガラス関連の廃棄状況は 14 区でも連続しており、内陸側に工房等が存在する可能性が高いと考えられる。

16. 15 区の調査

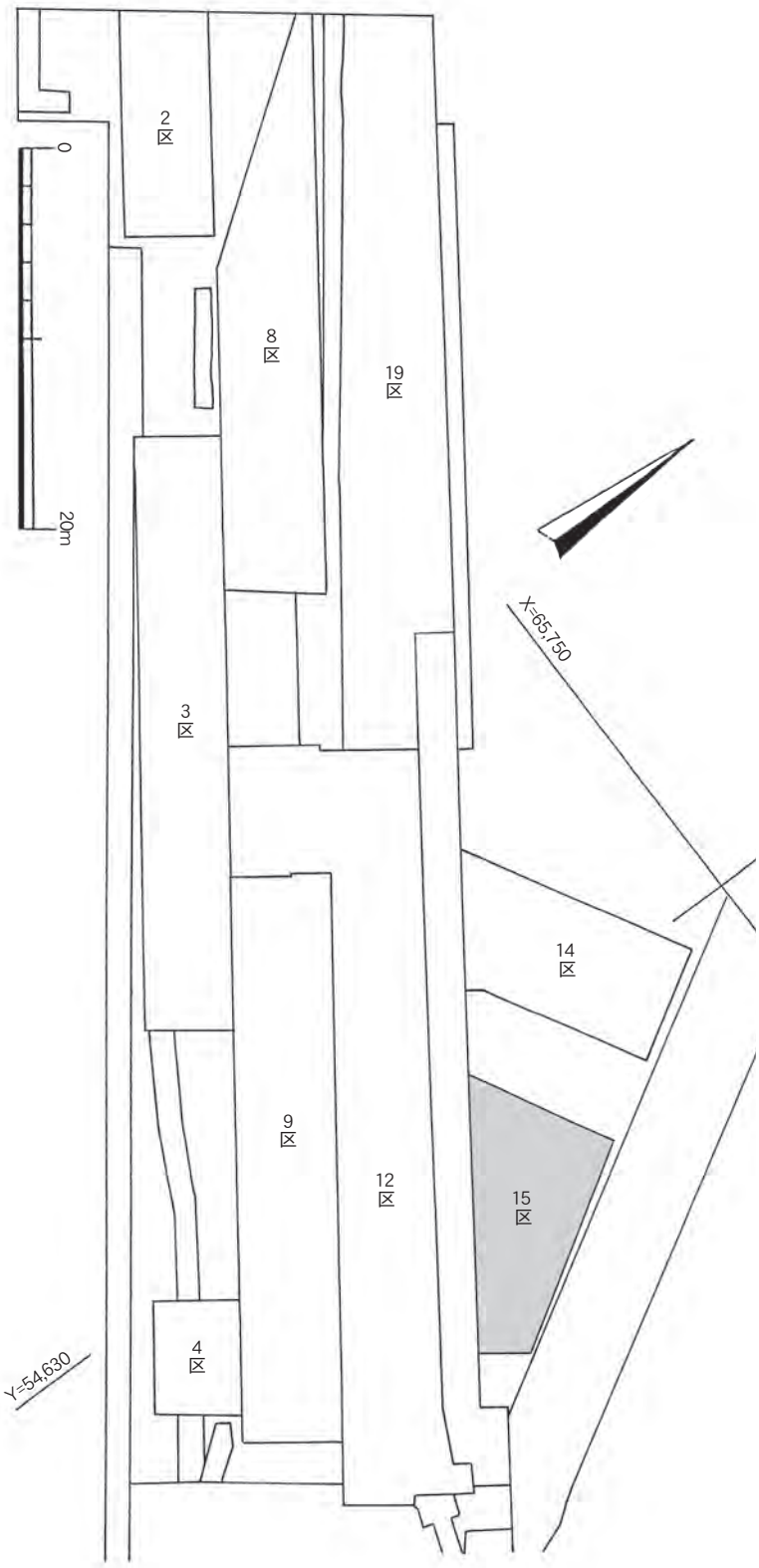


Fig.1　調査区位置図（1/400）

1）調査の概要

本調査区は事業地の中央北部に位置し、現況は建物で、駅舎の排気塔建設予定地である。15 × 8.3m 程の変形台形の調査区となっている。南にはガイドウォールの 24 区が隣接し、さらに 12 区が南に位置する。(Fig.1)。地表標高は約 5.3m を測り、南に緩く下がる。調査区外周の鋼矢板土留め工事の埋設管確認掘削に立会い GL1.0 ～ 1.4m まで 3 面で遺構を確認後、土留め工事を実施し、覆工板工事が終了後、1m 程の表土・撹乱層の除去を重機で行った。この面を調査第 1 面とし、さらに約 60 ㎝下方の砂層上面まで 4 面にわたる調査を実施している。

基本層序は、1m 程の表土直下、40㎝程の暗灰褐色土（1 層）、さらに 20㎝程の茶褐色砂質土が堆積し（2 層）黄灰～淡黄白色砂の地山層上面となる。調査第 1 面は 1 層上面の EL4.2m 程（Fig.2）、第 2 面は 2 層中を任意で EL4.0m 程（Fig.3）、第 3 面は茶褐色砂質土上面の EL3.8m 程（Fig.4）、第 4 面は砂層上面の EL3.6m 程（Fig.5）で、地形は南に緩く下がる。

Ph.1　調査風景（東から）

Ph.2　調査風景（西から）

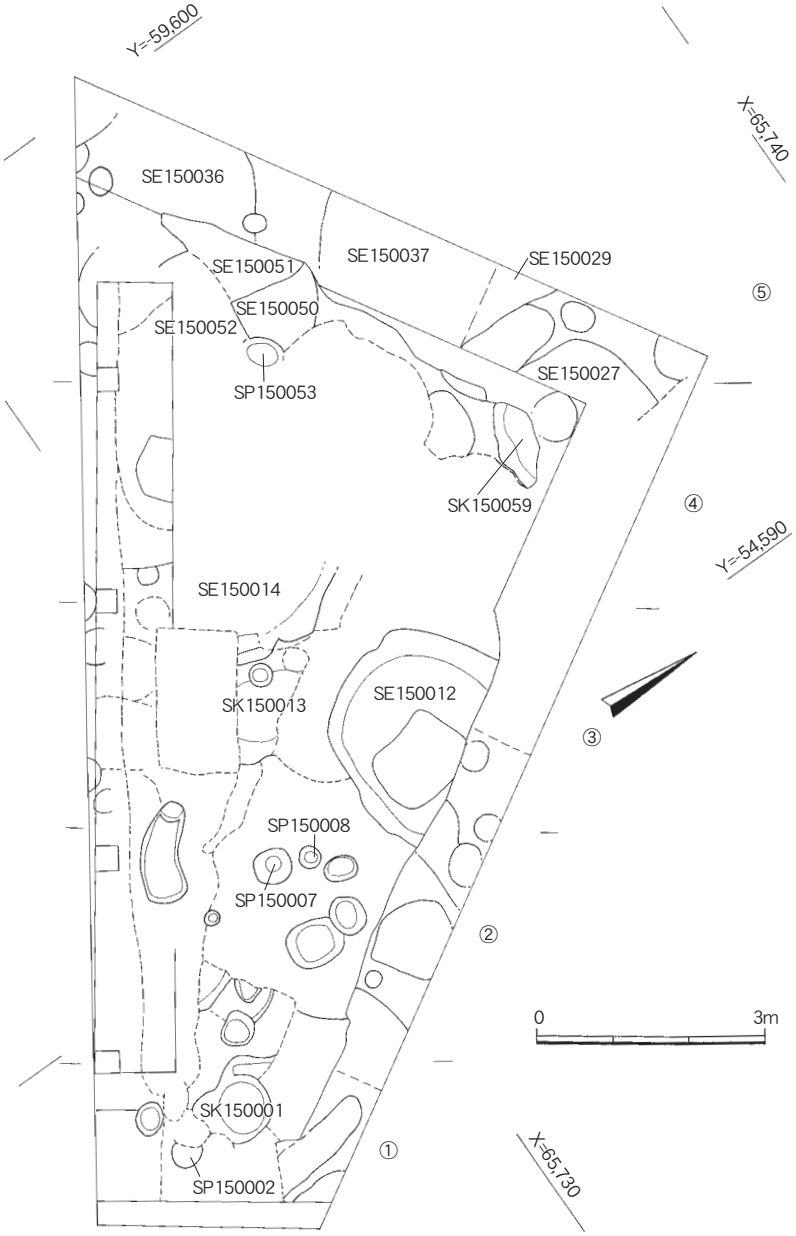


Fig.2　第 1 面全体図（1/100）

調査は、覆工板工事終了後のため、覆工板 3m 単位の 5 ブロックに分割し、東の 1 ～ 3 ブロックを先行して、後半を西の 4・5 ブロックで実施した。測量の 2m グリッド線は本体工事基準線に合わせ設定した。

2016 年 3 月 22 日より東半部の調査に着手し、3 月 28 日に第 1 面の全景を、3 月 29 日に第 2 面を、3 月 30 日に第 3 面の全景を、4 月 5 日に第 4 面の全景を撮影した。実測を完了後反転し西半部に着手、4 月 5 日に第 1 面の全景を、4 月 12 日に第 2 面の全景を、4 月 14 日に第 3 面の全景を、4 月 19 日に第 4 面の全景を撮影した。実測を完了後、調査機材を撤収し 4 月 19 日調査を完了した。調査面積は 83.1㎡で、遺物はコンテナ 35 箱分出土している。

Ph.3　東部１面全景（西から）

Ph.4　東部２面全景（西から）

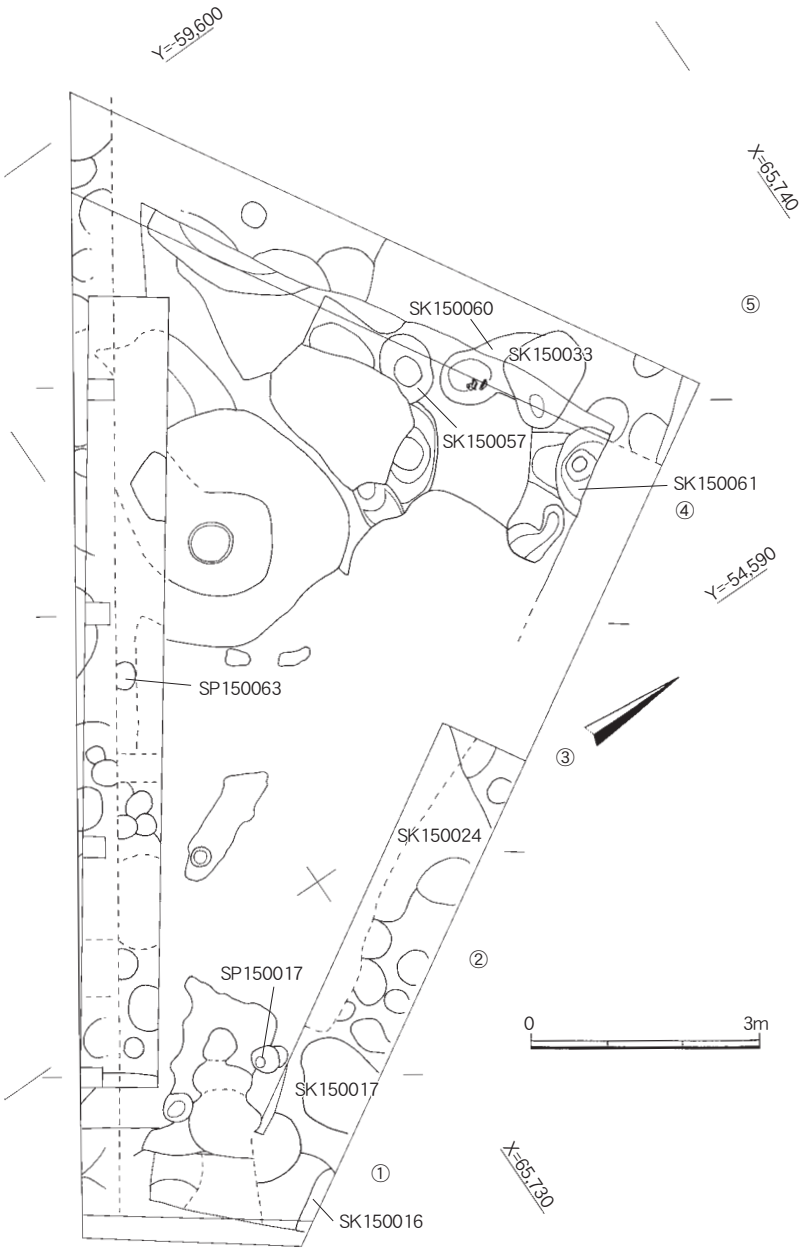


Fig.3　第２面全体図（1/100）

２）中世の調査（１）

12 世紀後半以降の中世の調査について説明する。

（１）井戸

SE150014（Fig.6　Ph.7・8）

第２面③・④グリッドで検出した円形井戸である。南側を撹乱で破壊されているが、掘方の径は 3.6 m。深さ２ｍで井側の痕跡が確認され、2.6 ｍまで掘削した。井側は結桶で径 50cm を測る。

出土遺物（Fig.7・8　Ph.9）

１～ 32 は井筒より出土。１は高麗青磁碗の口縁部である。胎土は精良で釉は光沢あるオリーブ灰色を呈する。復元口径 14.0cm、残存高 3.3cm。小片のため復元口径にやや難あり。２・３は初期龍泉･同安窯系青磁碗０類の口縁部。２は口縁端部内面が肥厚する。内面に片彫花文と櫛描文、外面は片彫の縦線を施す。胎土は灰色精良で黒色微粒子を少量含む。釉は光沢あるオリーブ色を呈する。復元口径 16.0cm、残存高 3.2cm。３は口縁端部が外反する。外面は片彫の縦線を施す。胎土は灰白色で黒色粒をわずかに含む。灰オリー

Ph.5　東部３面全景（西から）

Ph.6　東部４面全景（西から）

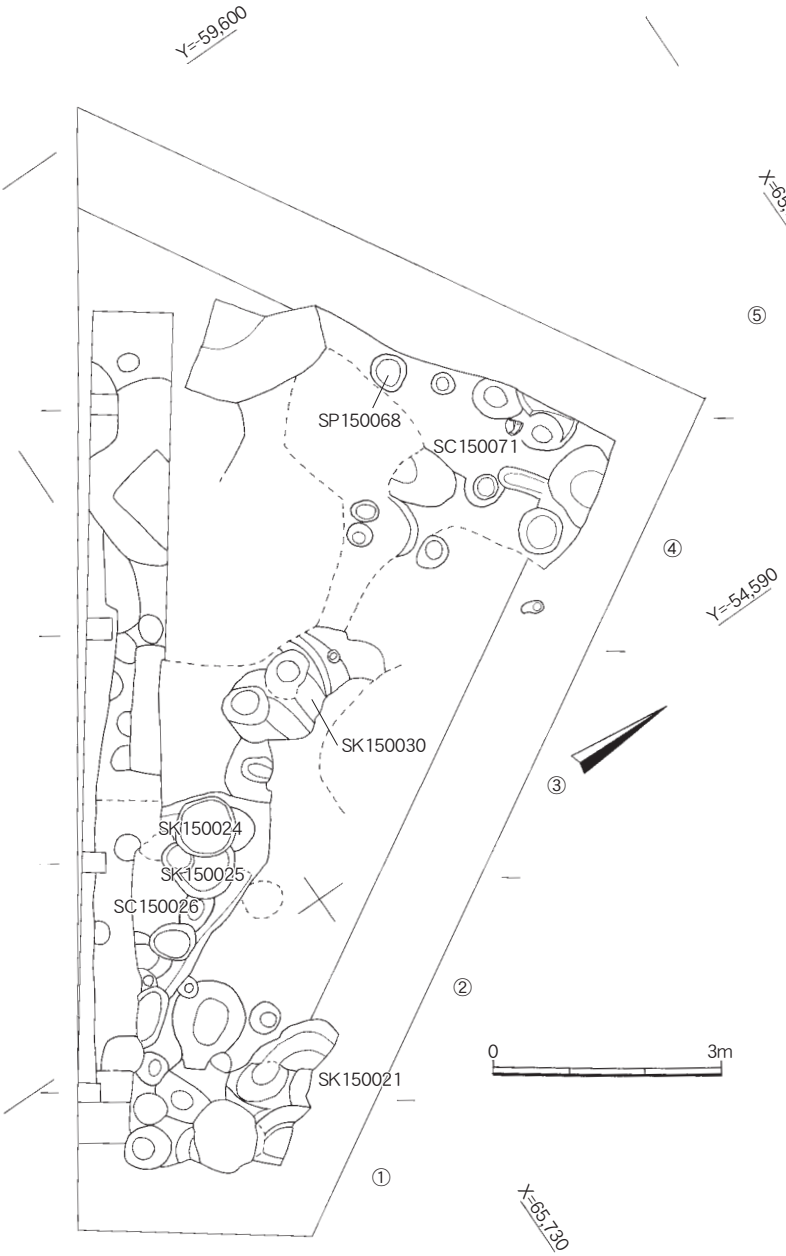


Fig.4　第３面全体図（1/100）

ブ色～オリーブ黄色の透明釉が掛かる。残存高 2.3cm。４は龍泉窯系青磁碗Ⅰ - ４ａ類。口縁部破片で胎土は灰黄色を呈すし、微細な砂粒をわずかに含む。釉は透明で灰オリーブ色を呈する。復元口径 17.0cm、残存高 4.9cm。５は龍泉窯系青磁碗Ⅰ - １ａ類。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含む。緑灰色～灰白色の半濁釉が掛かる。復元口径 17.0cm、残存高 6.2cm。６は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類の底部である。胎土は灰白色で微細な黒色粒をわずかに含む。明緑灰色の透明釉を厚く掛け、畳付の釉を掻き取る。復元高台径 5.2cm、残存高 1.7cm。７は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類。胎土は黄灰色で微細な黒色粒、気泡を少量含む。灰オリーブ色の透明釉が掛かり、底部の釉を掻き取る。復元口径 11.3cm、復元底径 4.0cm、器高 2.7cm。８は同安窯系青磁碗Ⅰ - １ｂ類の口縁部である。胎土は灰色を呈し、微細な黒色粒、気泡をわずかに含む。灰オリーブ色の透明釉が掛かる。残存高 3.1cm。９は龍泉窯系青磁碗Ⅰ - ６類の口縁部。胎土は灰色で、やや暗い灰オリーブ色の釉が掛かる。残存高 2.3cm。10

は同安窯系青磁碗Ⅰ - 1 b類の底部である。胎土は灰色で微細な砂粒を少量含む。灰オリーブの透明釉が体部外面下半まで掛かる。高台径 5.0cm、残存高 3.1cm。11 は青白磁鉢の胴部である。内外面にヘラ描き文様が入る。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含む。釉は明緑灰色透明で貫入が入る。残存高 5.2cm。12 は陽刻蓮弁文の青白磁香炉の胴部。胎土は灰白色で微細な砂粒、黒色粒をわずかに含み明青灰の釉が掛かる。二次被熱で釉は荒れる。残存高 1.8cm。13 は青白磁合子蓋。上面に陽刻印花文を施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒をわずかに含む。外面に明緑灰色の釉を掛け、口縁部の釉は掻き取る。復元口径 10.0cm、残存高 1.8cm。14 は青白磁皿。体部内面下半以下に印花文を施す。胎土は灰白色。灰白色～明青灰色の釉が全面に掛かり、口縁部の釉を掻き取る。器高 2.0cm。15 は白磁壺口縁部である。胎土は灰白色で微細な黒色粒をわずかに含み、灰白色の釉が掛かる。復元口径 11.1cm、残存高 2.9cm。16 は白磁小壺の口縁部である。胎土は灰白色で微細な黒色粒をわずかに含む。外面に淡黄色の釉が薄く掛かる。復元口径 8.0cm、残存高 1.9cm。17 は白磁碗。内面に白堆線が入り、口縁部は輪花となる。胎土は灰白色で微細な黒色粒をわずかに含み灰白色の釉が掛かる。復元口径 17.0cm、残存高 4.2cm。18 は白磁碗Ⅵ - 1 b類。胎土は灰白色精良。光沢を持つ灰白色釉が掛かる。復元口径 14.6cm、残存高 3.2cm。19 は白磁碗Ⅳ - 1 a類。胎土は灰白色で微細な黒色粒をわずかに含む。明オリーブ灰色の釉が高台外面まで掛かる。復元口径 15.0cm、復元高台径 5.2cm、器高 5.9cm。20 は白磁碗Ⅷ類。胎土は灰白色で微細な黒色粒、気泡をわずかに含む。灰白色の釉が体部外面下半まで掛かり、内底の釉を輪状に掻き取る。高台内には墨書がある。復元高台径 7.0cm、残存高 3.5cm。21 は白磁碗Ⅴ類を打ち欠いた瓦玉。畳付部分も打ち欠いている。碗内底に櫛描文が入る。胎土は灰白色を呈し、微細な砂粒、黒色粒をわずかに含む。灰白色の釉が上面に掛かる。径 7.3cm 程度、残存高 2.1cm。22 は吉州窯玳皮天目碗の口縁部。微細な砂粒をわずかに含む灰黄色の胎土に黒釉と黄釉を二重掛けする。復元口径

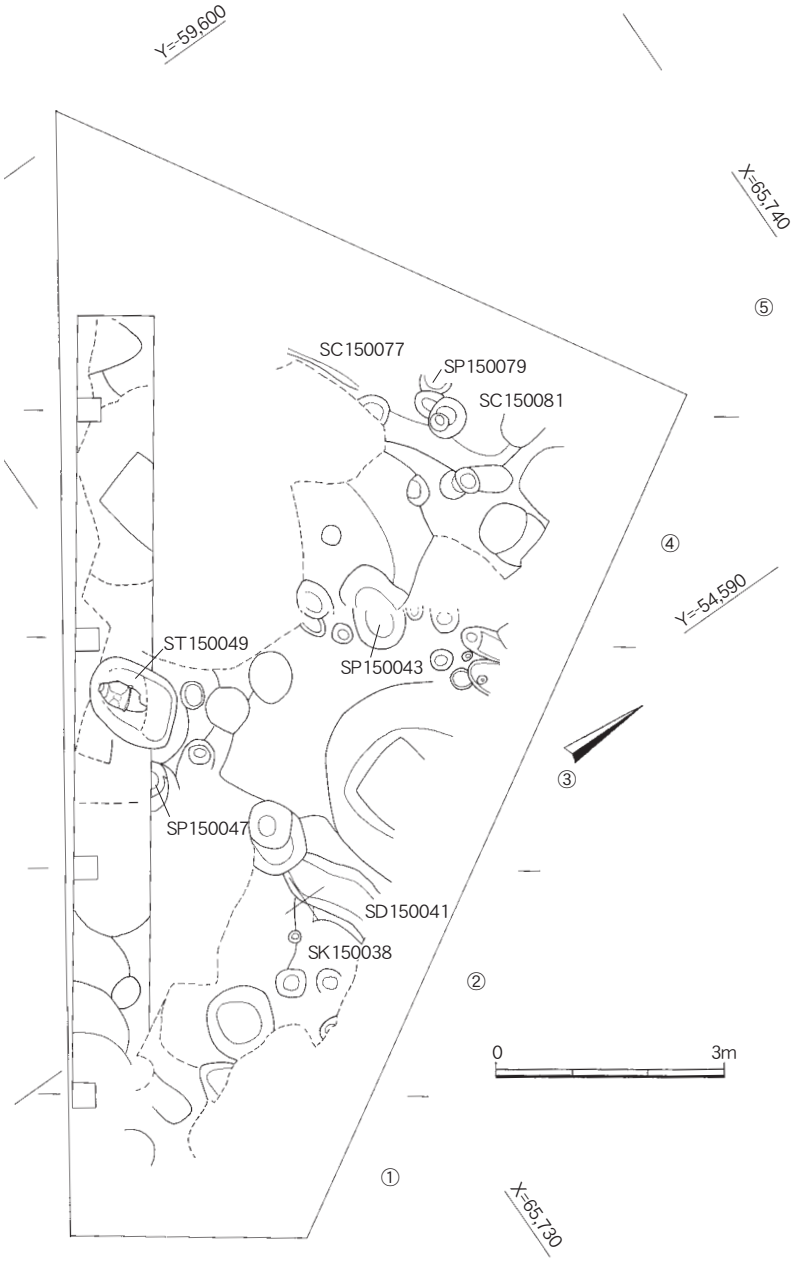


Fig.5　第 4 面全体図（1/100）

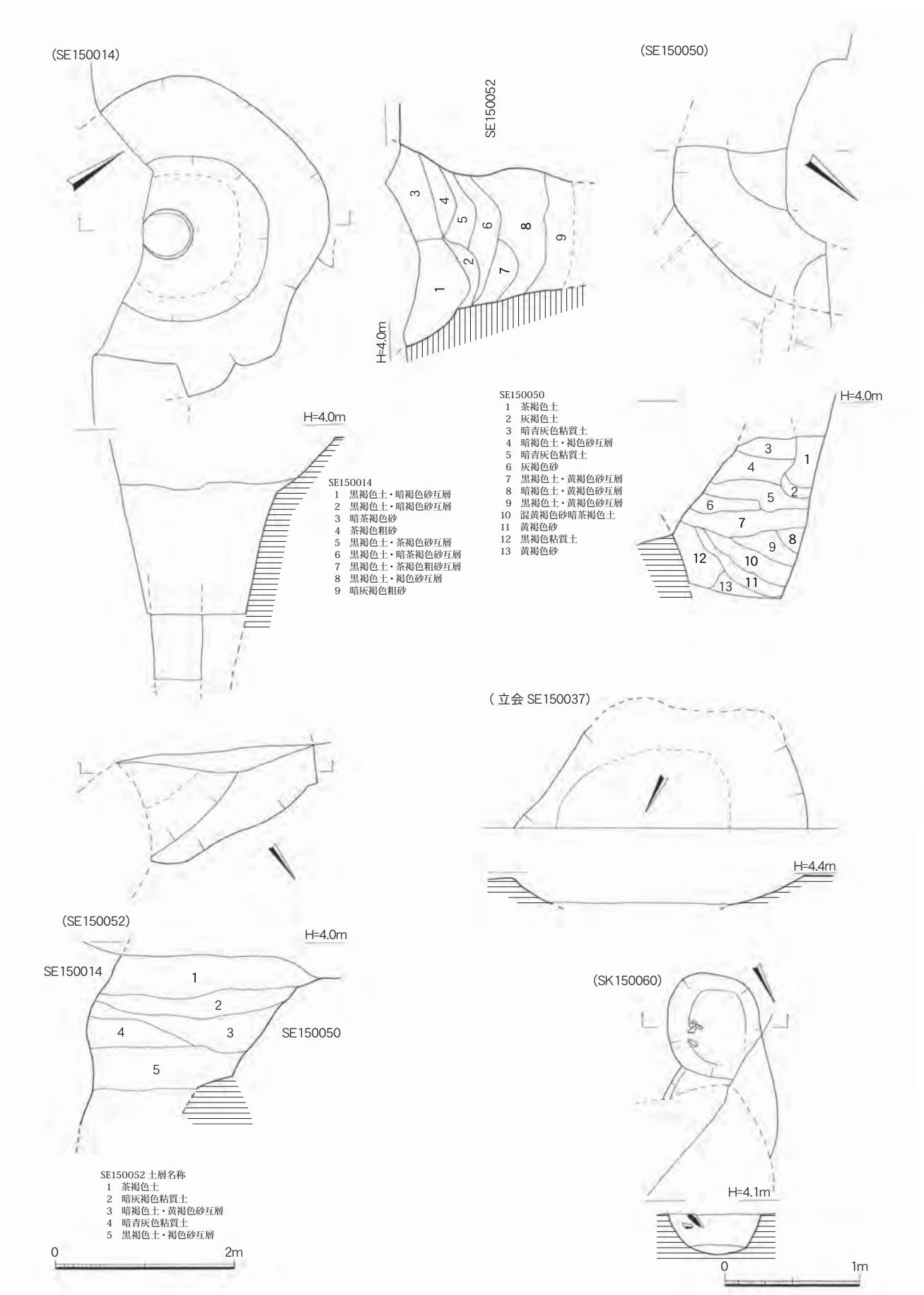


Fig.6　SE150014・150050・150052・立会 150037、SK150060 実測図（1/60・1/40）

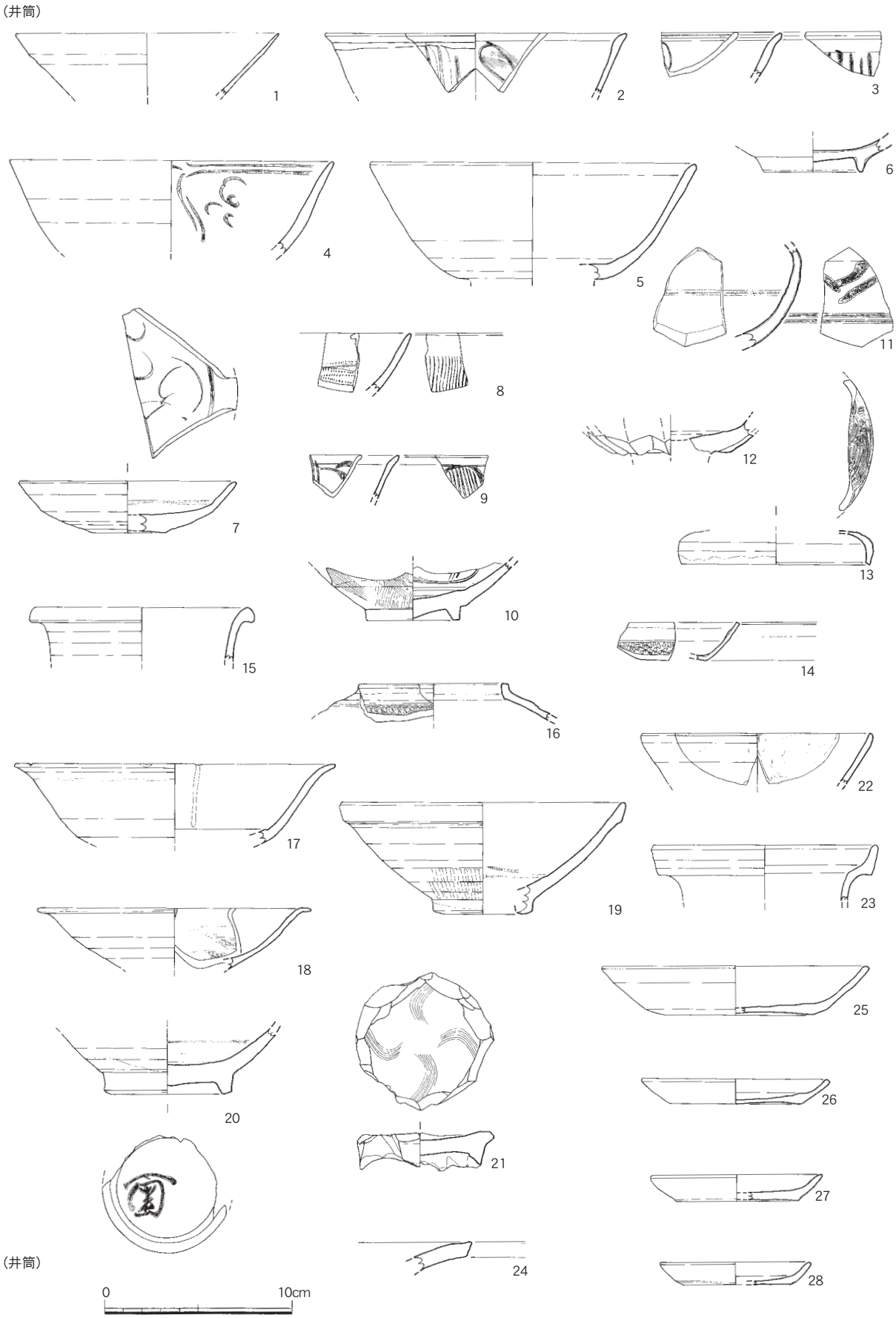


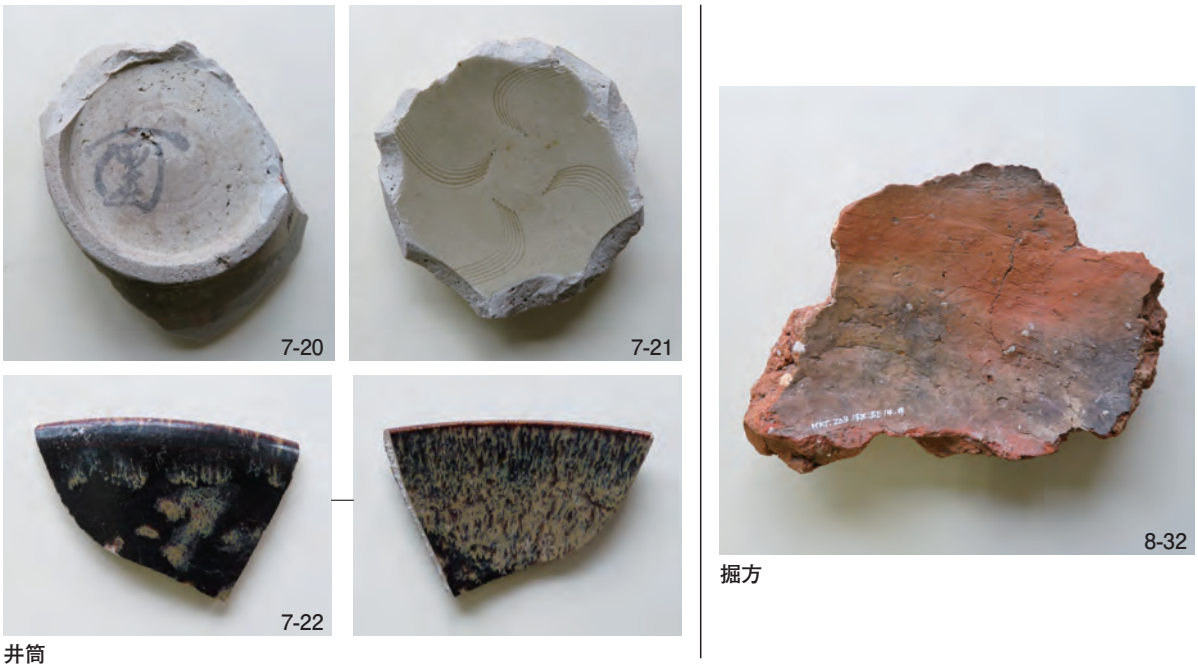
Fig.7　SE150014 出土遺物実測図 -1（1/3）

12.0cm、残存高 2.7cm。23 は盤状口縁の中国陶器水注口縁部。胎土は灰褐色を呈し、微細な砂粒をわずかに含む。オリーブ黒色の釉が掛かる。復元口径 11.9cm、残存高 3.0cm。24 は瀬戸焼甕の口縁部。灰白色の粉っぽい胎土に灰オリーブ色の透明釉が薄く掛かる。25 は土師器坏。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。胎土は精良でにぶい黄橙色を呈する。復元口径 14.2cm、復元底径 8.2cm、器高 2.6cm。26 ～ 28 は土師器小皿。26 は底部回転糸切りで板状圧痕が残る。胎土は精良でにぶい黄橙色を呈する。復元口径 10.0cm、復元底径 7.0cm、器高 1.3cm。27 は底部回転糸切り。胎土は精良でにぶい橙色を呈する。復元口径 9.2cm、復元底径 6.6cm、器高 1.4cm。28 は底部回転糸切りで板状圧痕が残る。胎土は精良でにぶい黄橙色を呈する。復元口径 8.0cm、復元底径 5.6cm、器高 1.2cm。29 は平瓦。胎土は灰色精良で黒色微粒子を含む。残存幅 7.4cm、残存長 11.0cm、残存厚 0.8cm 前後。30 は滑石素材。各面、ケズリ、ケンマ面があり、不整方向の工具痕跡がある。ススが付き、黒ずむところがあり、石鍋の転用とみられる。縦 4.2cm、横 4.8cm、高さ 3.1cm。31 は砥石。中粒砂岩製で赤褐色を呈する。残存長 12.4cm、残存幅 5.2 ～ 6.4cm、残存厚 5.2 ～ 5.8cm、残存重量 701 g。32 は炉壁である。胎土は橙色～黒褐色を呈し、1 ～ 5mm の石英、長石粗粒子を多く含む。外面は未調整で、内面は工具によるナデ調整を施す。

Ph.7　SE150014 井筒検出（北から）

Ph.8　SE150014（北から）

33 ～ 39 は掘方出土。33 は同安窯系青磁碗Ⅲ類。明オリーブ黄色の透明釉が掛かる。復元口径 17.4cm、残存高 3.9cm。34 は同安窯系青磁皿Ⅰ - 2 b 類。胎土はにぶい黄橙色を呈し、微細な黒色粒をわずかに含む。灰オリーブ色の釉が掛かる。胎土、釉の色調から二次被熱を受けている。復元底径 6.4cm、残存高 1.1cm。35 は耀州窯系青磁碗の口縁部。内面は印刻の花文、外面は片切りの縦線を施す。胎土は灰色、精良でや



Ph.9　SE150014 出土遺物

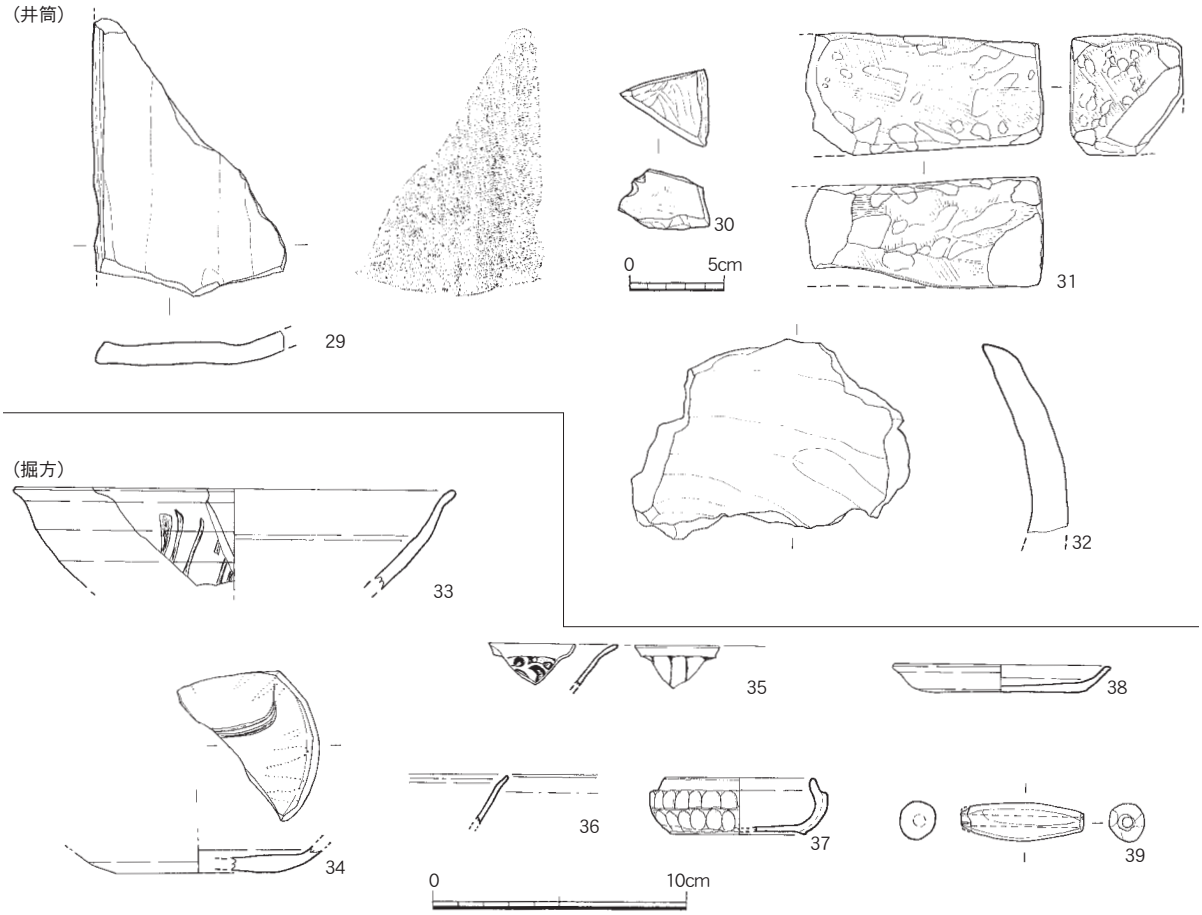


Fig.8　SE150014 出土遺物実測図 -2（1/3・1/4）

や暗いオリーブ灰色の釉が掛かる。残存高 1.7cm。36 は青白磁坏の口縁部。胎土は灰白色で微細な黒色粒をわずかに含む。釉は明緑灰色透明で口縁端部の釉を掻き取る。残存高 1.9cm。37 は青白磁合子身。外面に二段の菊弁文を施す。胎土は灰白色で微細な黒色粒をわずかに含む。釉は明緑灰色半濁で口縁受部と底部の釉を掻き取る。復元口径 5.7cm、復元底径 5.4cm、器高 2.2cm。38 は土師器小皿。底部は回転糸切り。胎土は精良で灰褐色を呈する。復元口径 8.6cm、復元底径 6.6cm、器高 1.1cm。39 は土錘である。胎土はにぶい黄橙色を呈し、微細な砂粒少量と微細な雲母をわずかに含む。長さ 4.8cm、最大幅 1.5cm、孔径 0.4cm。

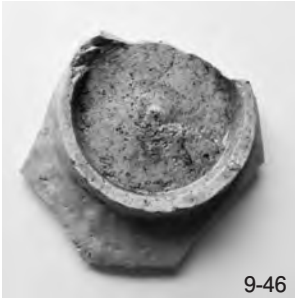
以上の出土遺物よりこの井戸は 12 世紀後半に構築され 13 世紀後半には廃絶したものと思われる。

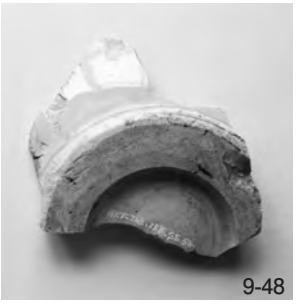
SE150050（Fig.6　Ph.10）　第２面⑤グリッドで検出した井戸で立会の工区とまたがるため、規模が判然としない。全体の四分の一程度を調査した。SE150052 に切られる。残存部では半径 1 m 程度の規模で、深さ 1.8 mまで掘削できた。

出土遺物（Fig.9　Ph.11）　40 は同安窯系青磁碗Ⅰ - 1 b 類。胎土は灰白色で微細な黒色粒を少量含む。灰オリーブ色の透明釉が掛かる。残存高 4.2cm。41 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ - 3 a 類。胎土は灰白色で微細な黒色粒をわずかに含む。灰オリーブ色の透明釉が掛かる。残存高 2.9cm。42 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類口縁部。内面にヘラ切りで花文を施す。口縁を輪花にする。胎土は灰色で光沢を持つオリーブ灰色の釉が掛かる。残存高 3.4cm。43 は白磁四耳壷口縁部。灰白色、セメント質で緻密な胎土に光沢を持つ明オリーブ灰色の釉が掛かる。内外に粗い貫入が入る。残存高 3.2cm。44 は白磁四耳壷の口縁部である。胎土は灰白色で光沢ある明オリーブ灰色の釉が掛かる。内外面に粗い貫入が入る。残存高 3.2cm。45 は白磁碗Ⅳ類。胎土は灰白色で黒色微粒子を少量含む。光沢を持つ乳白色の釉がやや厚めに掛かる。復元口径 17.2cm、残存高 4.5cm。46 は白磁皿Ⅲ - 1 類の底部。浅黄色の胎土に明オリーブ灰色から灰白色の釉が内面から外面体部下、高台外面まで掛かる。高台内に「六（花押）」の墨書。高台径 5.0cm、残存高 1.8cm。47 は白磁碗Ⅷ類の底部。胎土は灰白色で黒色微粒をわずかに含む。明オリーブ灰色の透明釉が内面から外面体部下、一部高台外面まで掛かり、内底の輪状に掻き取る。高台径 5.6cm、残存高 3.0cm。48 は白磁碗Ⅰ - 1 類の底部。胎土は灰白色で精良。光沢ある乳白色の釉が掛かり、畳付と高台内は露胎となる。復元高台径 6.2cm、残存高 1.8cm。49 は白磁碗底部の瓦玉。胎土は灰白色を呈し、微細な砂粒を少量と微細な雲母、気泡をわずかに含む。灰白色の釉が碗内底に掛かる。復元高台径 6.7cm、残存高 1.7cm。50 は白磁皿Ⅷ - 1 b 類。内面にヘラ切りで花文を施す。灰白色の胎土に緑がかった灰白色

Ph.10　SE-150050（西から）

の釉が掛かる。復元口径 10.0cm、底径 3.6cm、器高 1.8cm。51 は中国陶器壺の把手。胎土はにぶい黄橙色で二次被熱を受けた部分は黒褐色を呈する。3.0mm 以下の砂粒を多量含む。黄褐色から暗オリーブ褐色の半濁釉が厚く掛かる。残存高 10.1cm。52・53 は底部回転糸切りの土師器坏。52 の胎土はにぶい黄橙色を呈し、黒色粒子、赤褐色粒子を含む。復元口径 14.6cm、復元底径 9.8cm、器高 2.9cm。53 の胎土は暗灰褐色。復元口径 17.0cm、器高 2.4cm。小片のため復元口径にやや難あり。54・55 は土師器小皿。54 は底部回転糸切りで板状圧痕が残る。胎土は灰黄褐色を呈し、精良。口縁内側は黒変しており灯明皿として利用されたか。復元口径 9.4cm、復元底径 7.0cm、器高 1.5cm。





Ph.11　SE150050 出土遺物

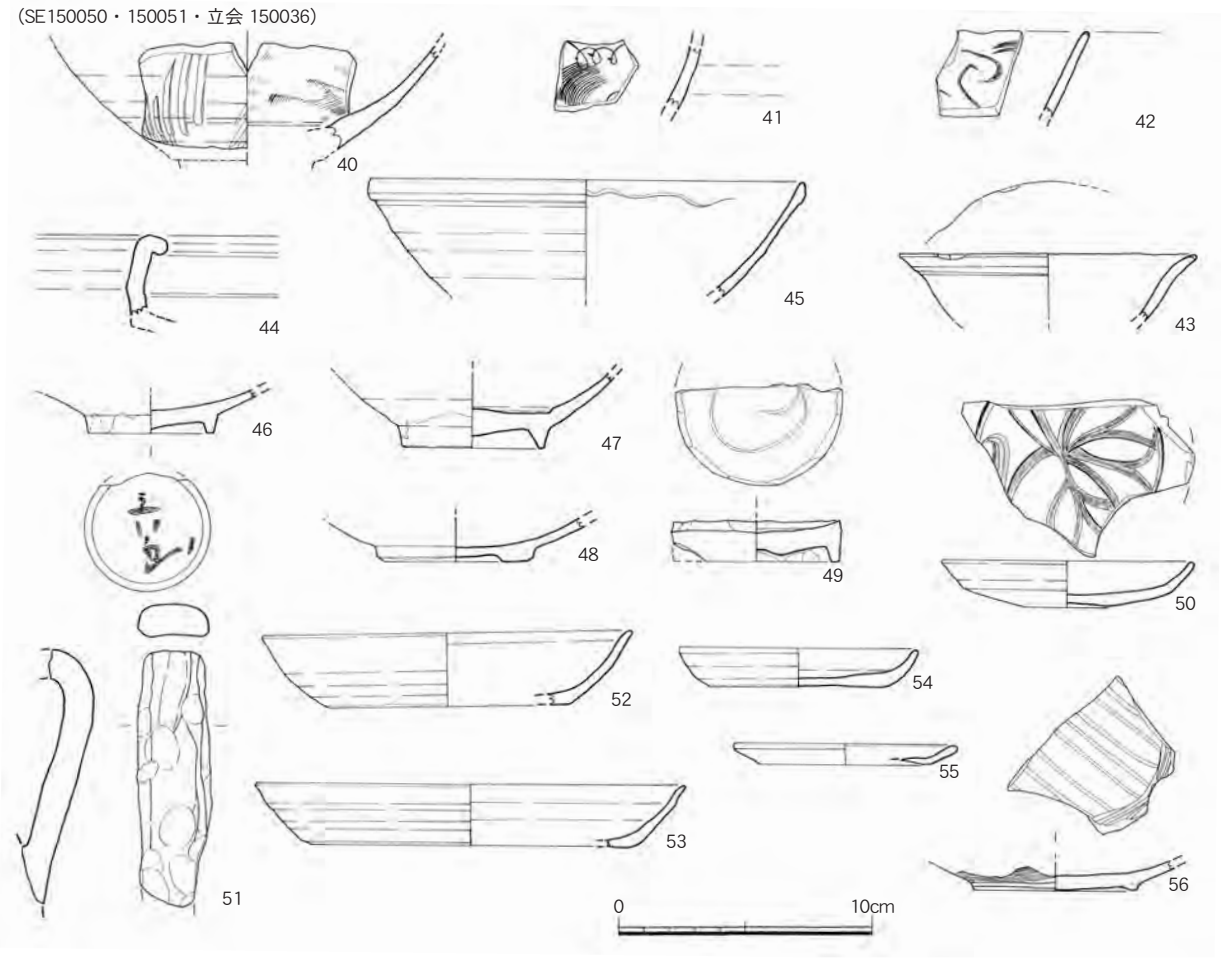


Fig.9　SE150050（150051、立会 150036）出土遺物実測図（1/3）

55 は底部回転糸切り。胎土はにぶい橙色を呈し、精良。復元口径 8.8cm、復元底径 6.4cm、器高 0.8cm。56 は楠葉型瓦器椀の底部。胎土は黒色で微細な砂粒を少量、微細な雲母を多量含む。復元底径 6.4cm、残存高 1.2cm。

出土遺物より SE150050 は 12 世紀後半の井戸と考えられる。

SE150052（Fig.6）　第２面④・⑤グリッドで検出した井戸で立会の工区とまたがるため、規模が判然としない。深さ 1.5 mまで調査できた。SE150014 に切られ、SE150050 を切る。

出土遺物（Fig.10　Ph.12）　68 は越州窯系青磁碗Ⅰ - ５類の底部。灰色の胎土に暗オリーブ色の釉が掛かる。残存部外面は露胎。重ね焼きの目跡が内面に残る。復元底径 8.2cm、残存高 2.1cm。69 は天目碗の口縁部。胎土は灰色で微細な砂粒を多量含む。黒色と褐色の不透明釉が掛かる。残存高 3.5cm。70 ～ 72 は底部回転糸切りの土師器小皿である。70 はにぶい橙色の胎土で精良。復元口径 9.0cm、復元底径 7.4cm、器高 1.1cm。71 はにぶい橙色の胎土で精良。復元口径 8.6cm、復元底径 6.6cm、器高 1.0cm。72 はにぶい橙色の胎土で精良。復元口径 9.4cm、復元底径 7.6cm、器高 1.2cm。73 は滑石製品。残存長 4.1cm、幅 2.9cm、厚さ 1.0cm。片面に径 1.6cm、深さ 0.15cm の円形の孔１か所、対面に径 1.0cm 前後、深さ 0.1cm の円形の孔２か所が穿たれる。孔は刀子で抉った後、回転した工具で摩耗している。弓錐軸受具か。

以上の出土遺物と重複関係から SE150052 は 12 世紀後半の井戸と考えられる。

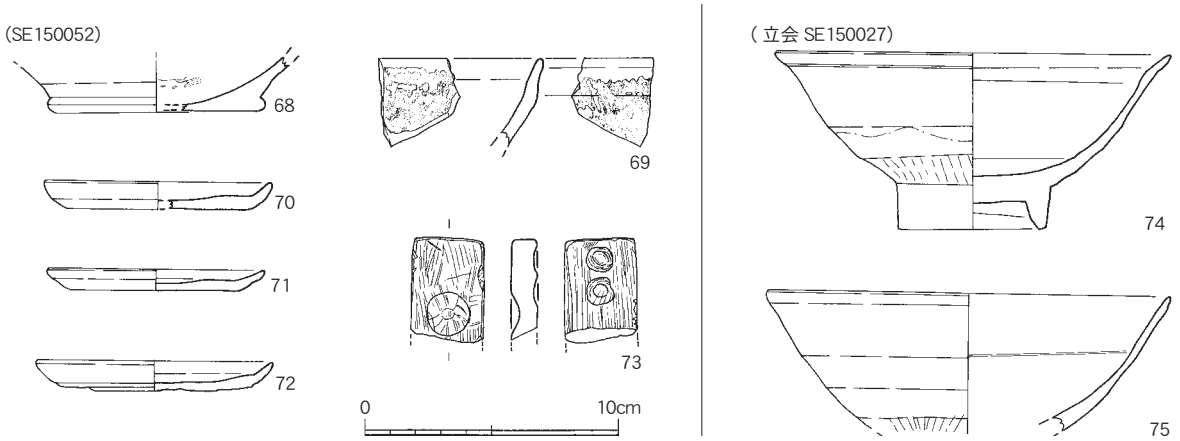


Fig.10　SE150052 他出土遺物実測図（1/3）

立会 SE150037（Fig.6）　矢板立会調査第１面⑤グリッドで検出した井戸。径は 3.2 m程度。立会調査のため深さ 0.3 m程しか調査できなかった。

出土遺物（Fig.11）　57 は同安窯系青磁碗Ⅰ - 1 b類。胎土は灰白色で黒色微粒子が入り、オリーブ灰色の釉が掛かる。復元口径 13.2cm、残存高 4.8cm。58 は高麗青磁碗Ⅲ - 1 類。口縁は外反する。暗灰色の胎土にやや暗い灰オリーブ色の釉が全体に掛かる。内底に３か所の目跡が残る。畳付に重ね焼きの粘土が付着している。復元口径 12.5cm、高台径 5.0cm、復元器高 6.1cm。59 は白磁四耳壷。灰白色の胎土に明オリーブ灰色の釉が高台外面中位まで掛かる。胴部径 17.4cm、高台径 7.5cm。60 は白磁碗Ⅳ類口縁部。胎土に褐色微粒子を含む。釉は浅黄色を呈し、細かい貫入が内外面とも入る。復元口径 15.4cm、残存高 3.2cm。61 は中国陶器捏鉢。胎土に 1 ～ 2mm の石英、長石、黒色粒子

Ph.12　SE150052、立会 150027 出土遺物

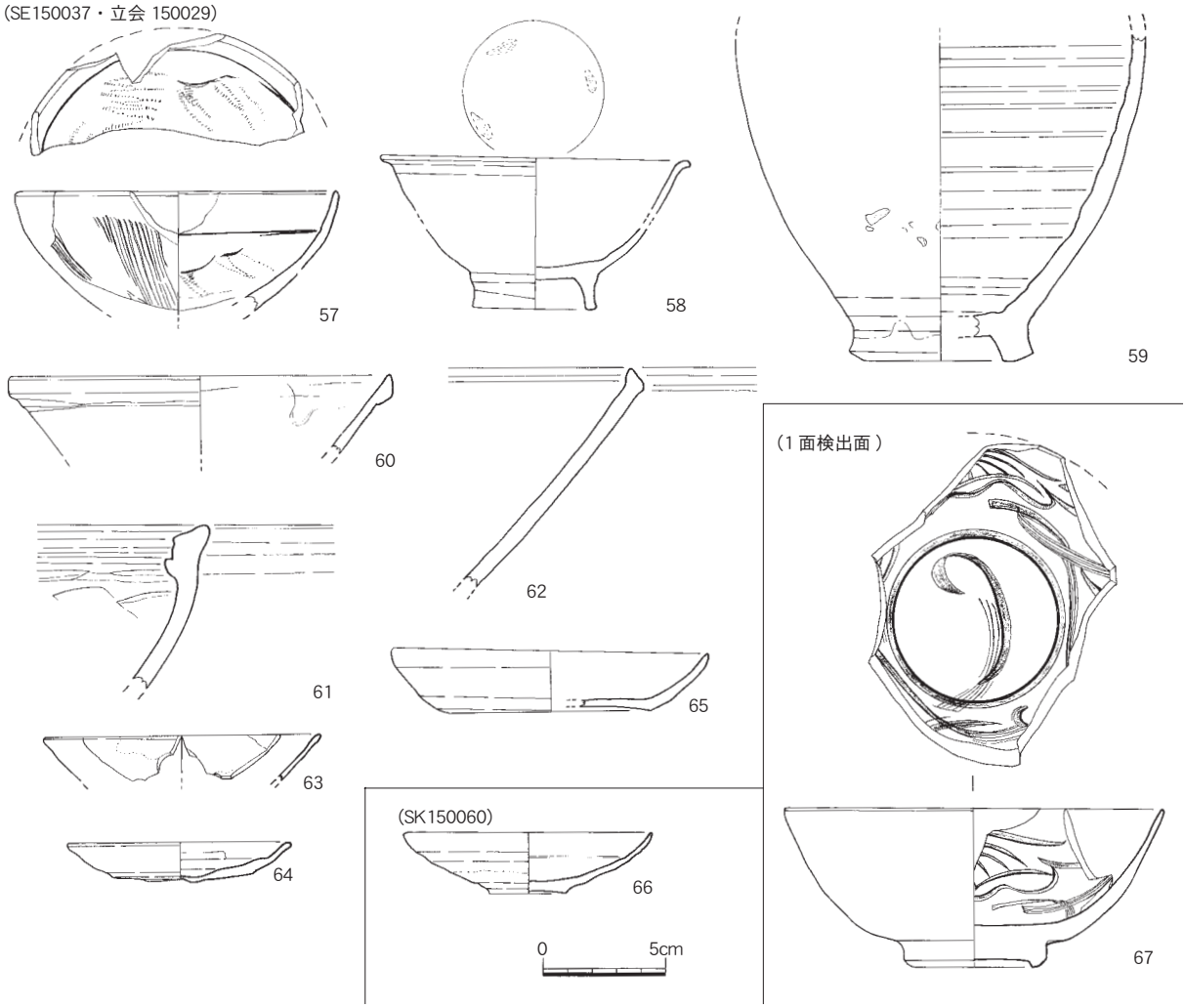


Fig.11　立会 SE150037・立会 150029・SK150060 他出土遺物（1/3）

を含む。暗褐色の釉が掛かる。内面は工具でケズルようにナデており、工具痕が残る。残存高 6.6cm。62 は東播系須恵器鉢。胎土は暗青灰色を呈し、白色粒子、黒色粒子を多く含む。口縁端部に自然釉が掛かる。残存高 9.0cm。63 は土師器坏。胎土は浅黄色～赤灰色で精良。二次的に被熱しており、器面は赤黒色に変色し、浅黄色の付着物が内外面に付く。残存高 1.8cm。64 は土師器小皿。胎土は暗褐灰色を呈し、精良。内面下半は不整ナデ、体部は回転ヨコナデ。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。復元口径 9.0cm、器高 1.6cm。65 は土師器坏。胎土は橙色を呈し、精良。底部は回転糸切り。復元口径 12.8cm、底径 8.0cm、器高 2.3 ～ 2.8cm。

以上の出土遺物から立会 SE150037 は 12 世紀後半の井戸と考えられる。

立会 SE150027　矢板立会調査第 1 面④・⑤グリッドで検出した井戸。立会調査のため規模は判然としない。

出土遺物(Fig.10　Ph.12)　74 は白磁碗Ⅴ - 2 a 類。胎土は白色で少し粉っぽく、褐色粒子が入る。灰白色の釉が体部外面中位まで掛かる。口径 15.7cm、高台径 5.9cm、器高 7.0cm。75 は白磁碗Ⅷ - 2 類。胎土は灰色で精良。光沢のある灰オリーブ色の釉が外面体部下位まで掛かる。復元口径 16.0cm、残存高 5.4cm。

以上の出土遺物から立会 SE150027 は 12 世紀後半の井戸と考えられる。

（2）土坑

SK150060（Fig.6　Ph.13）　第 1 面④・⑤グリッドで検出した土坑。長軸 80cm、短軸 70cm、深さ 30cm。検出面からやや下がったあたりで獣骨歯が出土している。

出土遺物（Fig.11）　66 は白磁皿Ⅵ - 1 a 類。光沢を持つ薄い灰オリーブ色の釉が内面から外面中位まで掛かる。釉には細かい貫入が入る。

（3）その他の遺物

Ph.13　SK150060 内獣骨（南から）

67 は 1 面検出時の遺物。龍泉窯系青磁碗Ⅰ - 2 類である。胎土は灰色精良。オリーブ灰色の釉が高台外面まで掛かる。復元口径 15.2cm、高台径 5.3cm、器高 6.4cm。

3）中世の調査（2）

11 世紀後半から 12 世紀前半の中世の調査について説明する。

（1）土坑

SK150001（Fig.12　Ph.14）第 1 面①グリッドで検出した円形土坑。径 1 m程度、深さ

0.8 mの規模である。

出土遺物（Fig.13　Ph.16）　76・77 は瓦玉。白磁碗の体部を打ち欠いている。76 は白磁碗Ⅴ類の底部で胎土は灰白色、精良。灰オリーブ色に近い釉が掛かる。高台径 4.6cm、残存高 2.8cm。77 は白磁碗Ⅴ類の底部で胎土は灰白色で黒色粒子、褐色微粒子を含む。明オリーブ灰色の釉が掛かる。高台径 6.0cm、残存高 1.8cm。78 は土師器丸底坏。回転横ナデの後、内面はミガキを施す。外面は強いナデで段が残る。胎土は浅黄色を呈し、精良。復元口径 16.0cm、残存高 2.9cm。79・80 は土師器小皿。79 は底部ナデで板状圧痕が残る。判然としないが回転糸切りであろう。胎土は浅黄色で精良。白色微粒子少量含む。復元口径 9.6cm、復元底径 6.0cm、器高 1.5cm。80 は底部回転ヘラ切り後、ナデで板状圧痕が残る。胎土は浅黄色で精良。復元口径 9.4cm、底径 5.0cm、器高 1.5cm。

出土遺物より SK150001 は 12 世紀前半の土坑と考えられる。

SK150013（Fig.12　Ph.15）　第 1 面③グリッドで検出した土坑。東西は撹乱により破壊される。残存幅 1.4 m、深さ 0.6 m。

出土遺物（Fig.13　Ph.16）　81 は白磁皿Ⅱ - 1 a 類。胎土は灰白色で黒色微粒子を含む。オリーブ灰色の釉が厚めに掛かる。復元口径 10.6cm、残存高 2.4cm。82 は白磁碗ⅩⅡ - 1 b 類。胎土は白味の強い灰白色。灰白色の透明釉が掛かり、貫入が入る。火を受けて表面が荒れている。復元口径 15.4cm、残存高 3.7cm。83 は土師器丸底坏。内面は丁寧で平滑なミガキを施す。外面はヨコナデ。底部はヘラ切り後、ナデを施す。胎土は灰黄色を呈し、精良。復元口径 16.6cm、残存高 2.8cm。84 は土師器小皿。底部回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。胎土はにぶい黄橙色で精良。口径 9.2cm、器高 1.3cm。

出土遺物より SK150013 は 11 世紀後半の土坑と考えられる。

SK150061（Fig.12）　第 2 面④グリッドで検出した楕円形土坑。東側は撹乱で破壊される。長軸 1 m、深さ 0.4 m。

出土遺物（Fig.13　Ph.16）　85 は中国陶器四耳壷Ⅴ類。黒色粒子を含む灰色の胎土に暗オリーブ色の釉が掛かる。復元口径 11.2cm、残存高 15.7cm。86 は白磁鉢Ⅲ類。内面に鉄絵が施される。

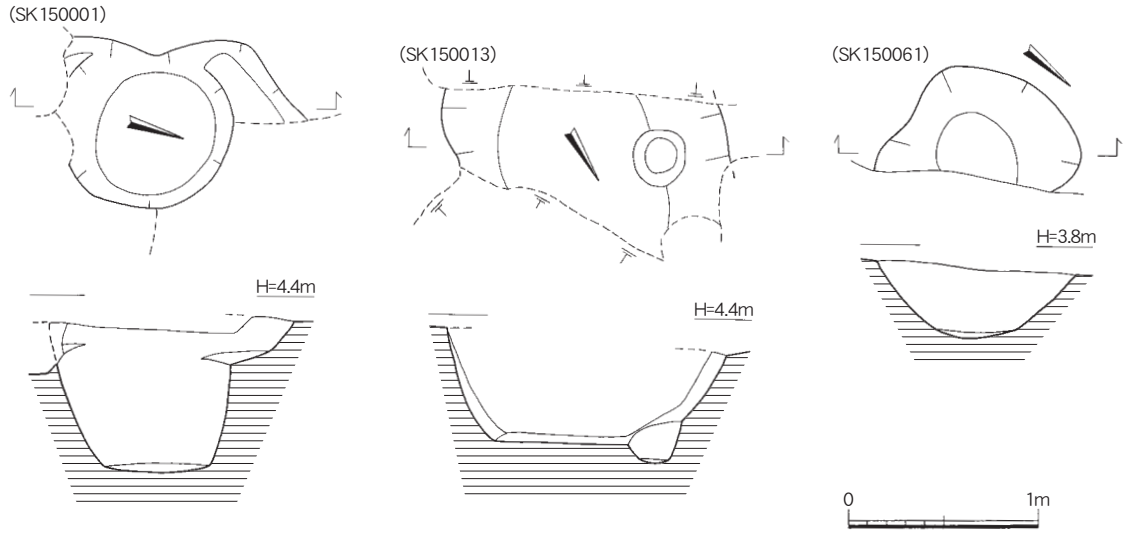


Fig.12　SK150001・150013・150061 実測図（1/40）

胎土は灰褐色、精良で灰オリーブ色の透明釉が薄く掛かる。復元口径 20.0cm、残存高 4.8cm。87 は滑石製石鍋。体部上方に鍔がめぐる。残存高 7.9cm。88 は土師器小皿。底部回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。胎土は内面浅黄色～灰色、外面灰黄褐色で精良。復元口径 9.6cm、復元底径 7.4cm、器高 1.1cm。

出土遺物より SK150061 は 11 世紀後半～ 12 世紀前半の土坑と考えられる。

SK150059　第 1 面④グリッドで検出した土坑。

出土遺物（Fig.13）　89 は管状土錘である。胎土は灰褐色を呈し、1mm 内外の白色微粒子を含む。長さ 4.6cm、最大幅 1.6cm、孔径 0.5cm。

Ph.14　SK-150001（南から）

Ph.15　SK-150013（北から）

立会 SK150017　　矢板立会調査第２面①・②グリッドで検出した土坑。

出土遺物（Fig.13）　　90・91 は土師器丸底坏。90 の胎土は明黄褐色、精良。内面は丁寧で平滑なヘラミガキ、口縁部から外面体部は横ナデ、底部は回転ヘラ切りで板状圧痕がわずかに残る。復元口径 15.4cm、残存高 3.4cm。91 の胎土は淡黄褐色、精良。内面は丁寧で平滑なヘラミガキ、口縁部から外面体部は横ナデ、底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。復元口径 15.0cm、残存高 3.2cm。

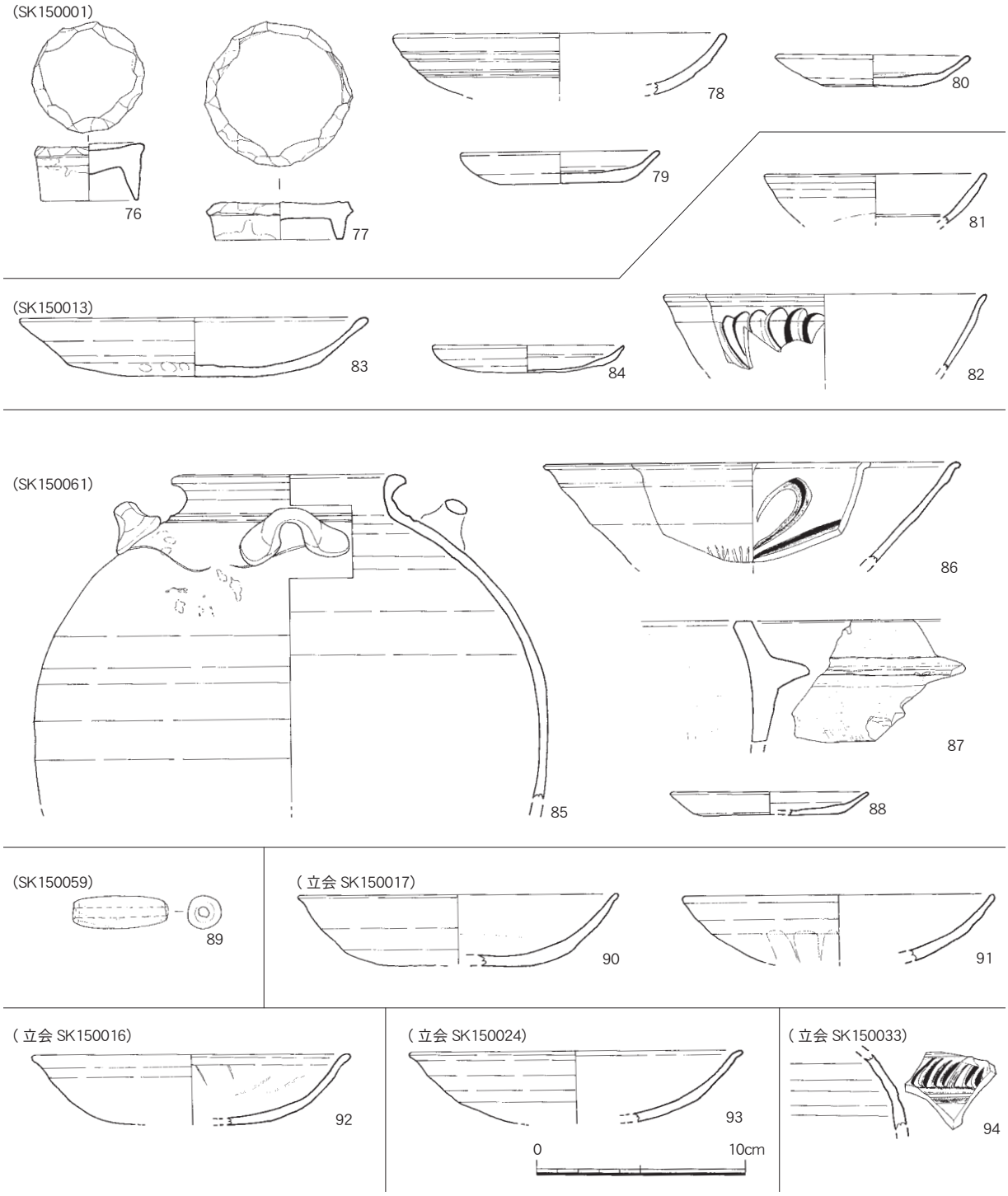


Fig.13　SK150001・150013・立会 150024・150061 他出土遺物実測図（1/3）

Ph.16　SK-150001・150061 出土遺物

立会 SK150016　　矢板立会調査第２面①グリッドで検出した土坑。立会 SK150014 を切るが大半が調査区外のため規模不明。

出土遺物（Fig.13）　　92 は土師器丸底坏。口縁部が外反する。胎土は淡黄褐色、精良。内面は丁寧なヘラミガキが施されコテ当て痕が残り、口縁部から外面体部は横ナデ、底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。復元口径 15.3cm、残存高 3.4cm。

立会 SK150024　　矢板立会調査第２面②・③グリッドで検出した土坑。立会 SK150024 に切られる。

出土遺物（Fig.13）　　93 は土師器丸底坏。口縁部が外反する。胎土は淡黄褐色、精良。内面は丁寧なヘラミガキ、口縁部から外面体部は横ナデ、底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。復元口径 16.0cm、残存高 3.5cm。

立会 SK150033　　矢板立会調査第２面④・⑤グリッドで検出した土坑。SK150066 と同一。SK150060 を切る。

出土遺物（Fig.13）　　94 は白磁壺。肩部破片で外面にヘラ切りで文様を施す。淡い青灰白色の釉が薄く掛かる。

（2）その他の中世遺物（Fig.14　Ph.17）

ここではこれまで触れられなかった 11 世紀後半～ 12 世紀前半の中世出土遺物を紹介する。

95 は白磁壺下半部である。胎土は灰色を呈し、明オリーブ灰色釉が内面一部と外面高台外側まで掛かる。高台内に記号化花押の墨書がある。割れ口を擦っており、内面に黒褐色の物質が付着している。壺の破損後、何らかの再利用がなされているか。立会第 1 面 SP150002 出土。96 は中国陶器四耳壷Ｖ類。灰白色で精良な胎土に灰オリーブ色の釉薬が掛かる。口径 12.7cm、残存高 15.2cm。 2 面の撹乱出土。97 は青白磁小壺蓋である。灰白色、精良な胎土に青味がかった灰白色釉が下半に掛かる。径 3.1cm、高さ 1.2mm。③グリッド撹乱出土。98 は白磁碗Ⅳ類の口縁部。灰色で少し黄味がかるに灰黄色の不透明釉が掛かる。表面は焼爆ぜており、二次的被熱を受ける。高台径 8.2cm、残存高 7.8cm。立会第 1 面 SP150002 出土。99 は土師器丸底坏。胎土は浅黄色で精良。内面は丁寧で平滑なナデ、ミガキ。口縁部から外面体部は回転ヨコナデを施す。底部はヘラ切りの後丁寧なナデを施す。板状圧痕の痕跡がかすかに残る。復元口径 15.2cm、残存高 3.3cm。立会第 1 面 SP150007 出土。100・101 は土師器小皿。立会第 1 面 SP150008 出土。100 の胎土はにぶい黄橙色で精良。表面の摩滅が著しく、底部切り離し方法不明。復元口径 10.0cm、復元底径 8.0cm、器高 1.0cm。101 の胎土は黒褐色、精良。底部は回転ヘラ切りの後、ナデ調整。板状圧痕が残る。復元口径 9.6cm、復元底径 7.6cm、器高 1.5cm。102 は土器片を円形に打ち欠いて製作した円盤。胎土は褐灰色で白色微粒子多く含む。中央に貫通していない孔が 4mm 穿たれる。径は 3.7cm 程度、高さは 1.1cm。第 1 面 SP150053 出土。103 は平瓦。胎土はやや暗い灰色で精良。図面右二辺は切断している。凹面には細かい布目が、凸面には縄目叩き痕跡が残る。残存幅 10.1cm、残存長 14.1cm、厚さ 1.1 ～ 1.2cm。第 1 面 SP150053 出土。104 は高麗陶器甕口縁部。胎土は赤褐色精良、内面は灰色、外面は漆黒色を呈する。口縁外面に自然釉が掛かる。残存高 4.7cm。立会北第 1 面～ 2 面包含層出土。105 は土師器小皿。胎土は淡黄色で精良。内定は不整ナデ、体部は回転ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り後、ナデを施す。板状圧痕が残る。口径 10.0cm、底径 8.0cm、器高 1.2 ～ 1.8cm。立会北第 1 面～ 2 面包含層出土。106 は土師器丸底坏。内面は丁寧で平滑なナデを施す。外面上半は回転ヨコナデ。体部外面下半から底部はヘラ切り後、丁寧なナデを施す。板状圧痕が残る。胎土は淡黄色を呈し、精良。口径 15.9cm、残存高 4.4cm。⑤グリッド第 1 面～ 2 面包含層出土。107 は土師器坏。胎土は黄灰色、精良。復元口径 12.2cm、残存高 2.6cm。①・②グリッド第 1 面～ 2 面包含層出土。108 は鉄鏃か。長さ 6.1cm、幅 1.7cm、厚さ 0.6cm。立会第 1 面～ 2 面包含層出土。109 は鞴の羽口。浅黄色を呈する。⑤グリッド第 2 ～ 3 面包含層出土。110 は管状土錘である。胎土はにぶい橙色を呈する。長さ 4.1cm、最大幅 1.6cm、孔径 0.5cm。⑤グリッド第 1 面～ 2 面包含層出土。111 は瓦玉。瓦片を利用か。胎土は青灰色を呈し、1 ～ 2mm の白色砂粒を含む。径 2.2 ～ 2.4mm、高さ 1.9mm。①・②グリッド第 1 面～ 2 面包含層出土。112 はトチン。内面は灰褐色～橙色を呈し、1 ～ 3mm の石英、長石を多く含む。表面は暗緑灰色を呈し、良く焼け、一部ガラス質化する。立会第 2 ～ 3 面包含層出土。113 は滑石製品。径 6mm 前後の孔が穿たれる。下面は敲打調整後、ミガキの二次調整痕がある。残存幅 5.9cm、残存長 2.0cm、残存高 2.5cm。排気立会第 1 面北側遺構検出時出土。114 は手持砥石。泥岩もしくは粘板岩製で、暗灰色を呈する。上下両側面を使用している。幅 2.2cm、残存長 5.1cm、厚さ 0.6 ～ 1.0cm。⑤グリッド第 1 面～ 2 面包含層出土。115 は砥石である。上面と右面が主に使用されている。左面は敲打痕と研磨面があり一時的な使用か。幅 6.1cm、残存長 18.3cm、厚さ 5.3cm。排気立会西第 1 面～ 2 面包含層出土。

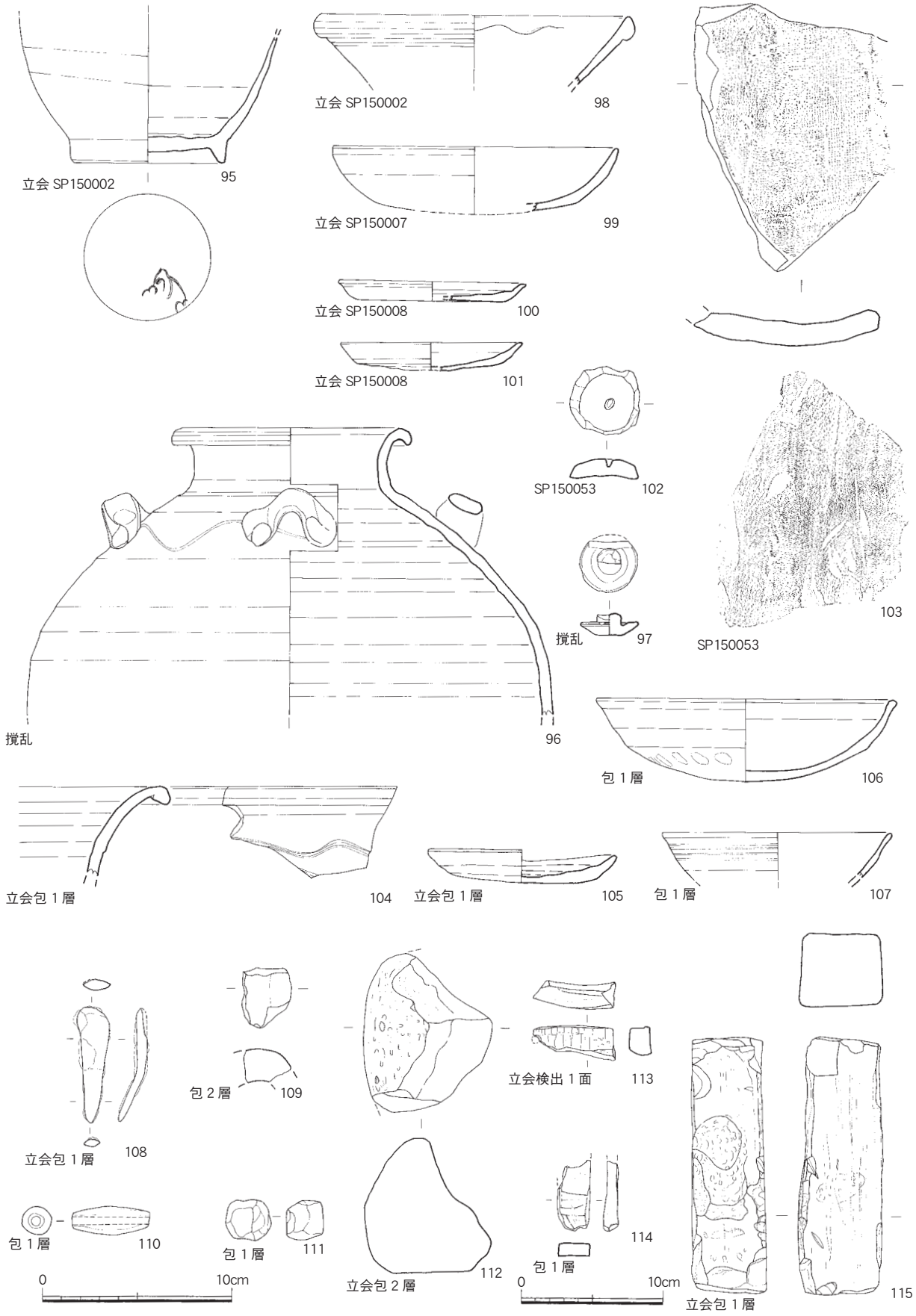


Fig.14　柱穴その他の出土遺物実測図（1/3・1/4）

Ph.17　柱穴その他の中世遺物

4）古代の調査

（1）井戸

SE150012（Fig.15　Ph.18・19）　第1面②・③グリッドで検出した井戸。東側は立会調査区で判然としない。掘方は円形で、径 2.6 m程度。深さ 1.8 mまで調査した。井側は 1 mの方形で、木質が泥化しているが、縦板組のようである。

出土遺物（Fig.16　Ph.22）　116 は越州窯系青磁水注の胴部。胎土は褐灰色を呈し、微細な雲母をわずかに含む。灰オリーブ色の透明釉が掛かる。残存高 2.5cm。117 は越州窯系青磁碗底部。胎土は褐灰色を呈し、微細な黒色粒、赤褐色粒をわずかに含む。灰オリーブ色の透明釉が掛かる。高台内に目跡が残る。復元高台径 4.8cm、残存高 1.8cm。118 は白磁碗。二次被熱により胎土・釉ともにぶい黄橙色を呈する。胎土には 1.0mm 以下の黒色粒を少量含む。内面にヘラ描きで文様を入れる。残存高 2.0cm。119 は防長系の緑釉陶器鉢。胎土は浅黄橙から灰色を呈し、1.0mm 以下の砂粒をわずかに含む。残存高 3.0cm。120 は新羅焼。胎土は内面で暗灰色、外面で黒青灰色を呈し黒色粒子、白色粒子を含む。外面は自然釉が掛かり、光沢を帯び、斜方向の羽状文様のタタキが施される。残存高 5.0cm。121 は黒色土器A類埦。内面は黒色、外面は浅黄色を呈する。胎土に 3.0mm 以下の砂粒、微細な雲母を少量含む。内面は細かいミガキ、外面は回転ナデを施す。復元高台径 8.9cm、残存高 2.3cm。122 は土師器製塩土器甕の口縁部。内面は灰色～赤味がかったにぶい黄褐色、外面は灰赤色を呈し、1 ～ 2mm の石英、長石粒子を含む。内面は粗いタタキ、外面は粗いナナメの併行タタキを施す。外面はススが付着する部分や使用により剥落している部分がある。復元口径 16.6cm、残存高 5.5cm。

出土遺物より SE150012 は 10 世紀後半の井戸と考えられる。

（2）竪穴住居

SC150026（Fig.15　Ph.20）　第3面②・③グリッドで検出した竪穴住居。西側は調査区外に延びるため、規模は不明。残存壁高 0.3 m。SK150024・150025 に切られる。

出土遺物（Fig.16）　123 は須恵器坏蓋。胎土は暗青灰色を呈し、赤褐色と白色粒子を含む。外面は全面に自然釉が掛かり、上面に「×」のヘラ記号がある。残存高 2.6cm。124 は須恵器甕の口縁部。

胎土は灰色で精良。残存高 4.2cm。

出土遺物より SC150026 は 7 世紀後半の竪穴住居と考えられる。

（3）土坑

SK150024（Fig.15　Ph.21）　第 3 面③グリッドで検出した円形土坑である。SK150025・SC150026 を切る。径 0.8 m、深さ 0.2 m。

出土遺物（Fig.16）　125 は須恵器坏身。胎土は灰色で黒色粒子、白色粒子を少量含む。復元高台径 6.6cm。残存高 2.8cm。

126 は土師器甕口縁部である。胎土は灰黄褐色で白色砂粒、雲母を含む。復元口径 28.8cm、残存高 5.7cm。

出土遺物より SK150024 は 8 世紀前半の土坑と考えられる。

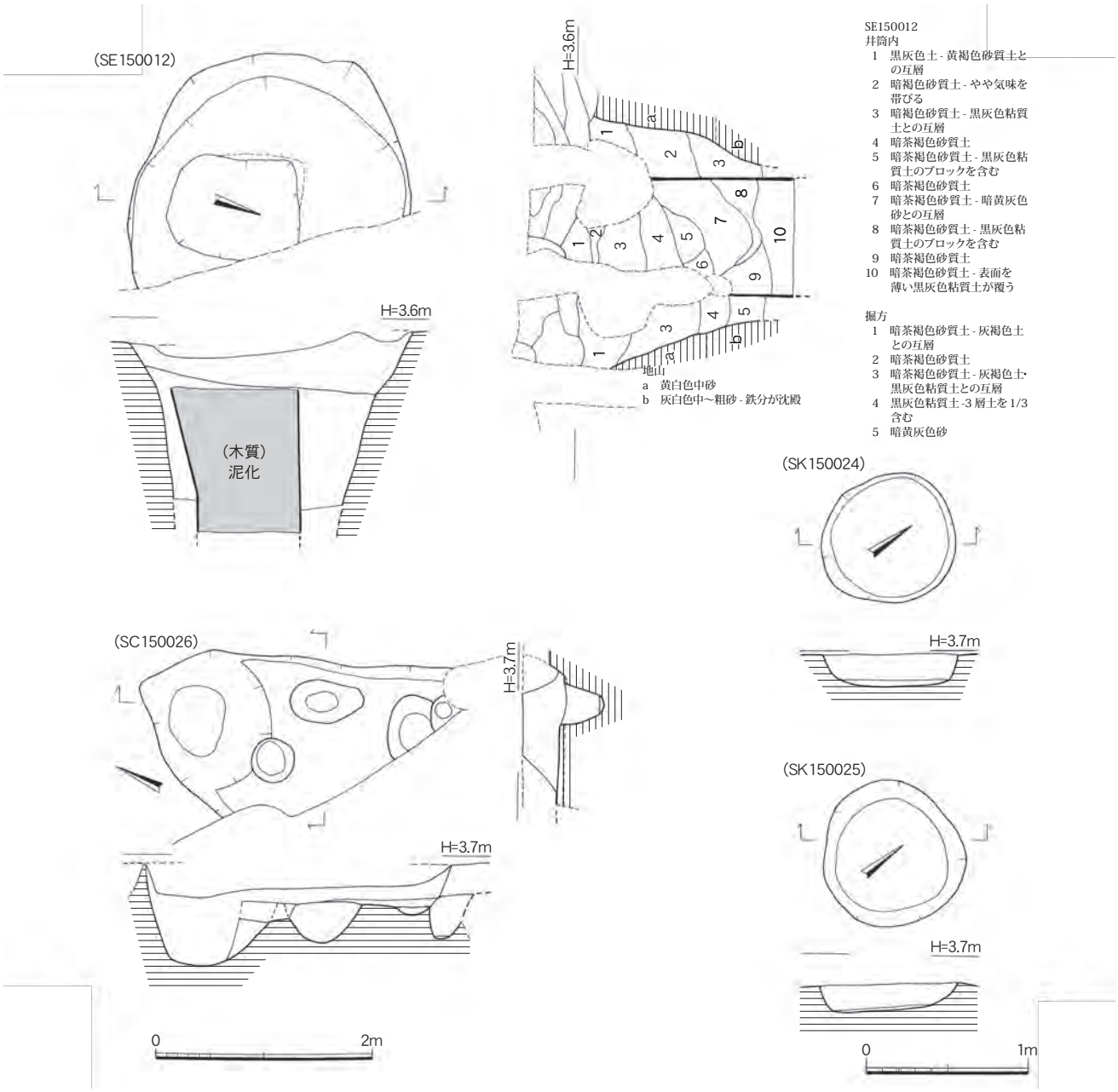


Fig.15　SE150012、SC150026、SK150024・150025 実測図（1/60・1/40）

SK150025（Fig.15）　第３面②・③グリッドで検出した円形土坑である。SK150025 に切られ、SC150026 を切る。径 0.9 m、深さ 0.2 m。

出土遺物(Fig.16　Ph.22)　127 は須恵器坏蓋。胎土は暗灰色で精良。内外面は灰赤色を呈する。残存高 1.4cm。128 は土師器高台皿。内面灰褐色、外面にぶい赤褐色を呈し、胎土に金雲母粒子を含む。口径 18.9cm、高台径 12.3cm、器高 4.2cm ～ 4.4cm。

出土遺物より SK150025 は７世紀後半の土坑と考えられる。

立会 SK150060　中間杭立会調査第４面②グリッドで検出した土坑である。立会 SE150057・立会 SK150058 に切られ、南西は調査区外へ延びる。

Ph.18　SE150012 検出状況（西から）

Ph.19　SE150012（西から）

出土遺物(Fig.16　Ph.22)　129 は鉄製円盤に鉄釘が斜めに銹着したもの。円盤は径 1.6 ～ 1.7cm、厚さ 0.4cm。釘は長さ 2.5cm、最大幅 1.0cm。

Ph.20　SC150026（東から）

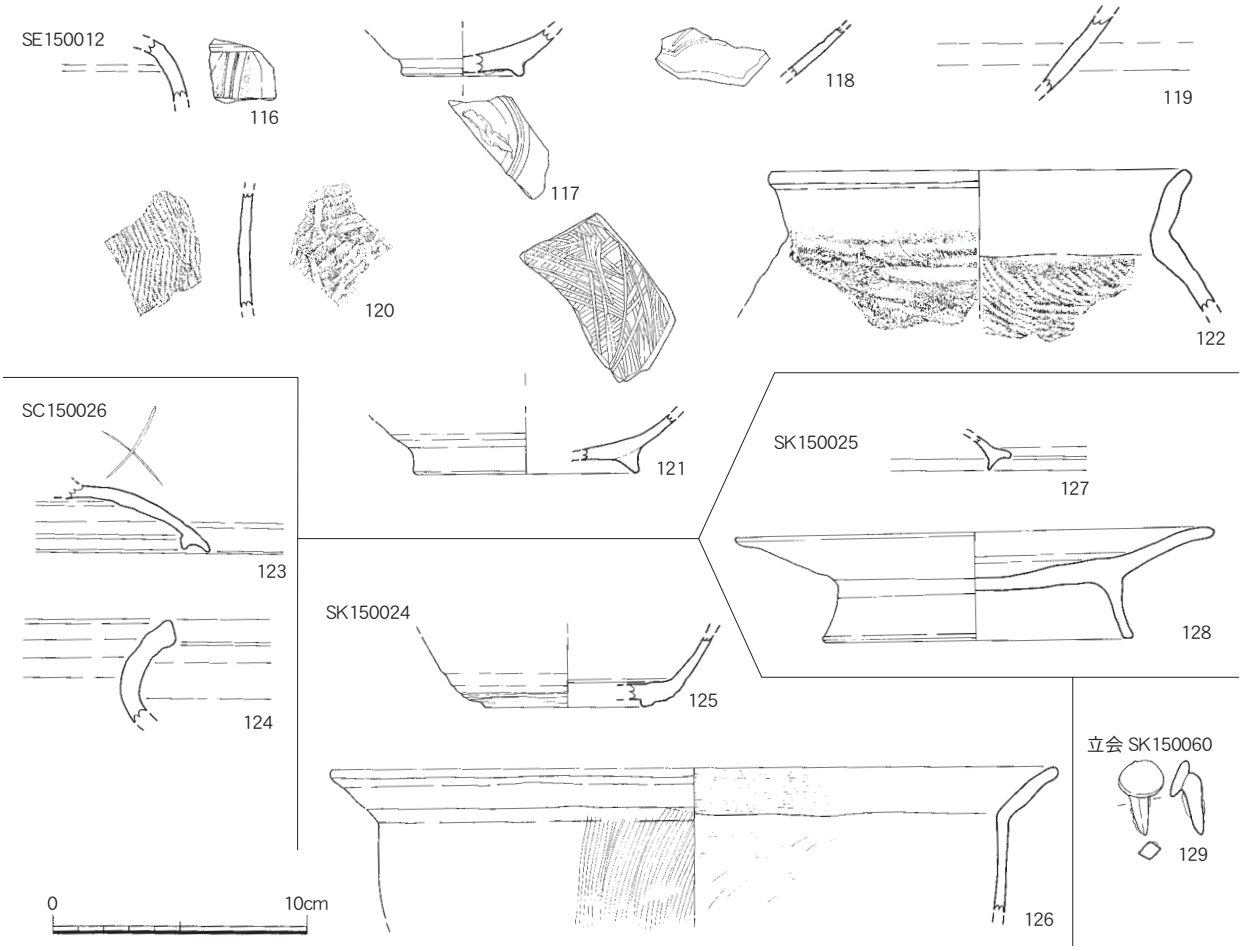


Fig.16　SE150012、SC150026、SK150024・150025・150060 出土遺物実測図（1/3）

（４）その他の古代出土遺物（Fig.17　Ph.23）

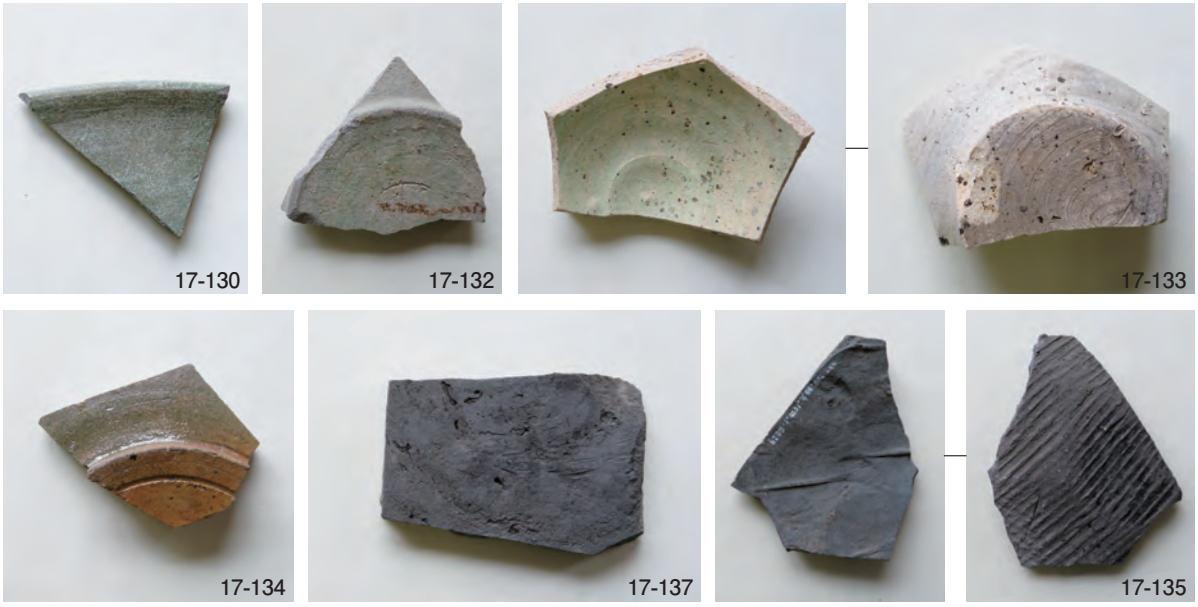
ここではこれまで取り上げられなかった古代出土遺物を紹介する。

130 は緑釉陶器椀口縁部。灰色、精良の胎土に光沢あるオリーブ灰色の釉が薄く掛かる。残存高 2.2cm。第３面 SK150021 出土。131 は防長系の緑釉陶器椀高台部。灰色、精良の胎土に灰オリーブ色の釉が外面に掛かる。残存高 1.1cm。第２面 SK150033 出土。132 は緑釉陶器皿底部。二次被熱を受けている。胎土は須恵質で黄灰色呈し、微細な砂粒を少量含む。オリーブ灰色の釉が全面に薄く掛かる。底径 5.7cm、残存高 1.0cm。SE150050・150051・150052 出土。133 は緑釉陶器坏底部である。明灰白色の胎土に明黄緑色の釉が内面に薄く掛かる。底部は回転糸切り。底径 3.6cm、残存高 1.9cm。①・②グリッド第１面～２面包含層出土。134 は緑釉陶器椀底部である。胎土は精良で赤く変色しており、二次被熱を受けたか。内面から高台外面まで光沢を持つやや暗い灰オリーブ色の釉が掛かる。外底は明黄褐色を呈し、薄い透明釉が掛かる。復元底径 6.4cm、残存高 1.9cm。第１面～２面包含層出土。135 は須恵器の甕。胎土は青灰色を呈し、1mm 内外の白色微砂を多く含む。外面はナナメ方向の平行タタキ、内面に当具痕が残る。残存高 8.1cm。第１面 SK150029 出土。136 は須恵器の皿。胎土は灰色、精良。復元口径 14.4cm、器高 1.9cm。③グリッド撹乱出土。137 は陶硯。須恵器の皿を転用する。胎土は灰色を呈し、1mm 以下の砂粒を少量含む。底部に「家」と

Ph.21　SK150024（西から）

Ph.22　SE150012・SK150025・立会 SK150060 出土遺物

墨書。幅 5.1cm、長さ 3.4cm、厚さ 0.6cm。SE150052 出土。138 は都城系土師器。胎土は橙色で 1mm 内外の白色粒子を多く含む。表面ヘラミガキの後、内面にヘラによる暗文を粗く放射状に施す。復元口径 20.2cm、残存高 3.3cm。中間杭立会 SP150068 出土。139 は平瓦。凹面に細かい布目、凸面に斜格子目叩きが残る。残存幅 12.1cm、残存長 13.8cm、厚さ 1.6 ～ 1.9cm。立会西第 1 面～２面包含層出土。



Ph.23　その他の古代出土遺物

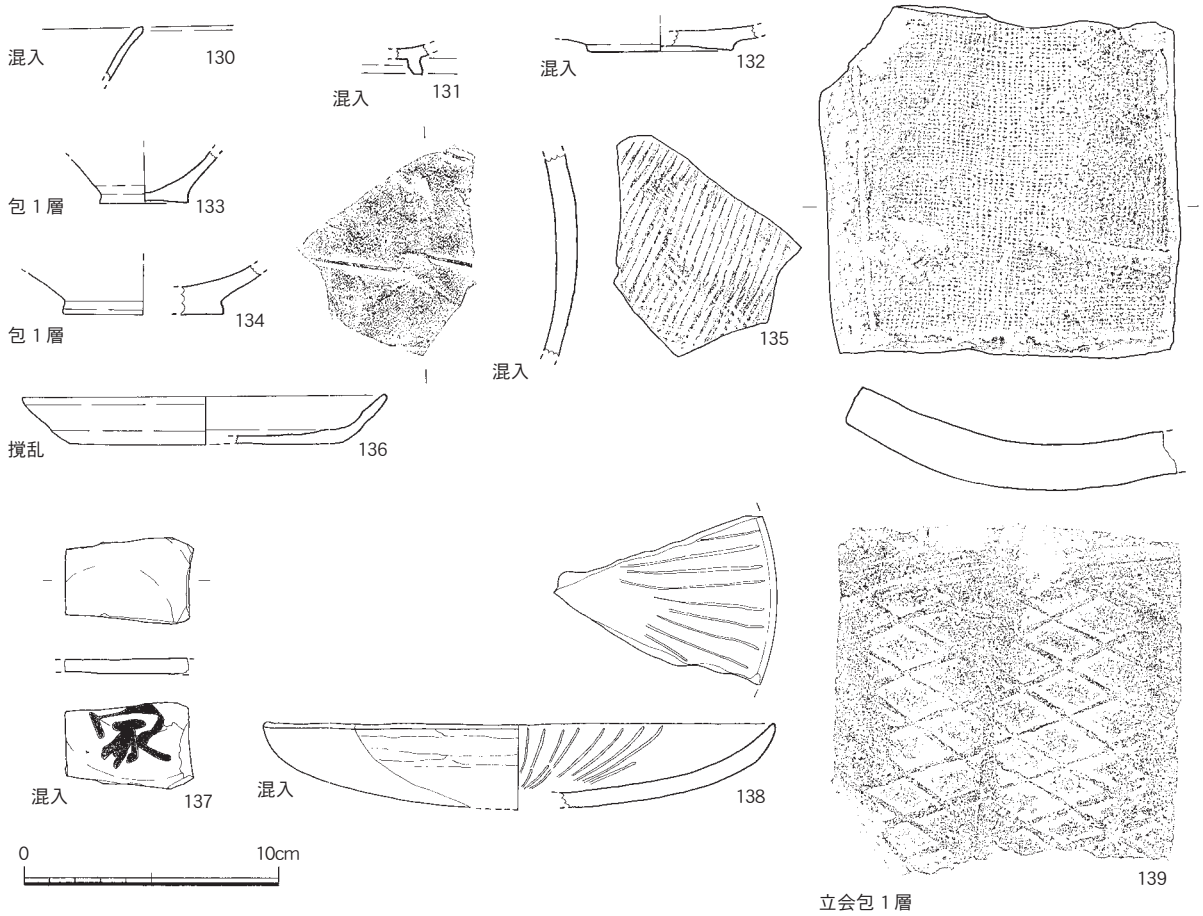


Fig.17　その他の古代出土遺物実測図（1/3）

5）古墳時代後期の調査

（1）土坑

SK150057（Fig.18　Ph.25）　第２面⑤グリッドで検出した楕円形土坑である。南側は一部撹乱で破壊される。長軸 0.9 m、短軸 0.7 m、深さ 0.3 m。

出土遺物（Fig.18　Ph.24）　140 は須恵器坏蓋。胎土は明るい灰色で精良。表面は内外とも黒灰色～案灰色を呈する。復元口径 13.0cm、残存高 2.6cm。141 は鉄滓で流出滓。褐灰色を呈し、残存幅 3.2cm、残存長 2.0cm、残存厚 2.0cm。142・143 は棒状土錘。142 の胎土は淡橙色を呈し精良。径 1.0cm 前後、残存長 7.9cm。143 の胎土はにぶい橙色を呈し精良。径 0.9cm 前後、残存長 2.3cm。

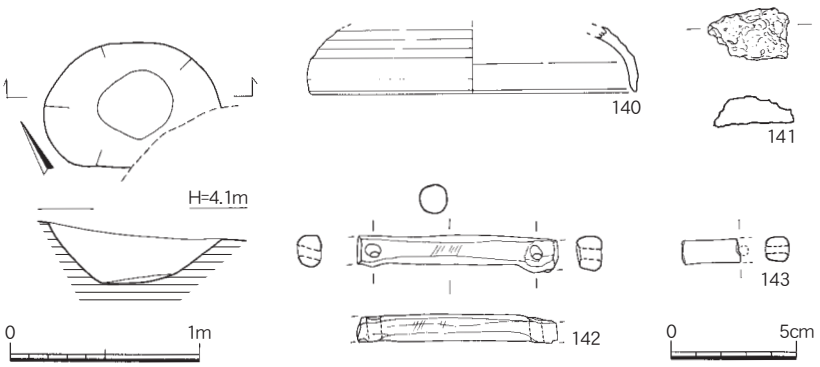
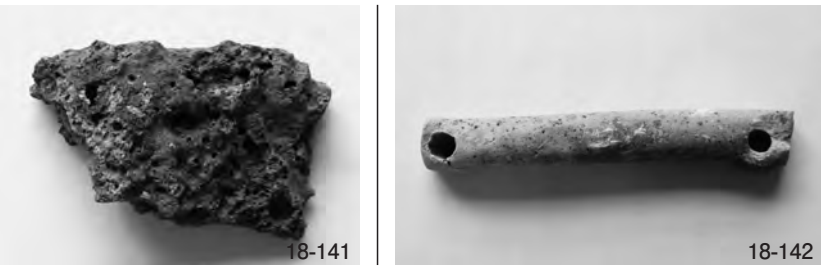


Fig.18　SK150057 出土遺物実測図（1/40、1/3）



Ph.24　SK-150057 他古墳時代後期出土遺物

Ph.25　SK150057（南から）

６）古墳時代前期の調査

（１）竪穴住居

SC150067（Fig.19　Ph.26・27）　第４面④グリッドで検出した竪穴住居。北東隅のみ残存する。残存壁高 0.2 m。柱穴とみられる SP150069 は径 0.4 m、深さ 0.5 mである。

出土遺物（Fig.20）　144 は土師器高坏の坏部。胎土は明赤褐色で精良。内外面タテ方向のヘラミガキを施し、後、外面上部はヨコナデを施す。復元口径 22.6cm、残存高 6.1cm。

（２）土坑

Ph.26　SC150067（南から）

Ph.27　SC150067（南から）

SK150021（Fig.19　Ph.28）第３面①・②グリッドで検出した不整楕円形土坑。東側は調査区外に延びる。北側が深く 0.4 m、南側は 0.1 m。

出土遺物（Fig.20）　145 は布留式甕。胎土は暗灰黄色を呈し、精良。金雲母粒子を含む。復元口径 15.4cm、残存高 8.9cm。

（３）柱穴

SP150047（Fig.19　Ph.29）第４面③グリッドで検出したピット。南側は立会調査区で判然としない。径 0.7 m程度、深さ 0.9 m。

出土遺物（Fig.20）　146 は山陰系壺の口縁部。胎土は灰黄色を呈し、精良。残存高 3.1cm。147 は布留式甕。内面は浅黄色、外面は灰黄色を呈し、胎土に金雲母微粒子を含む。復元口径 15.0cm、残存高 4.0cm。

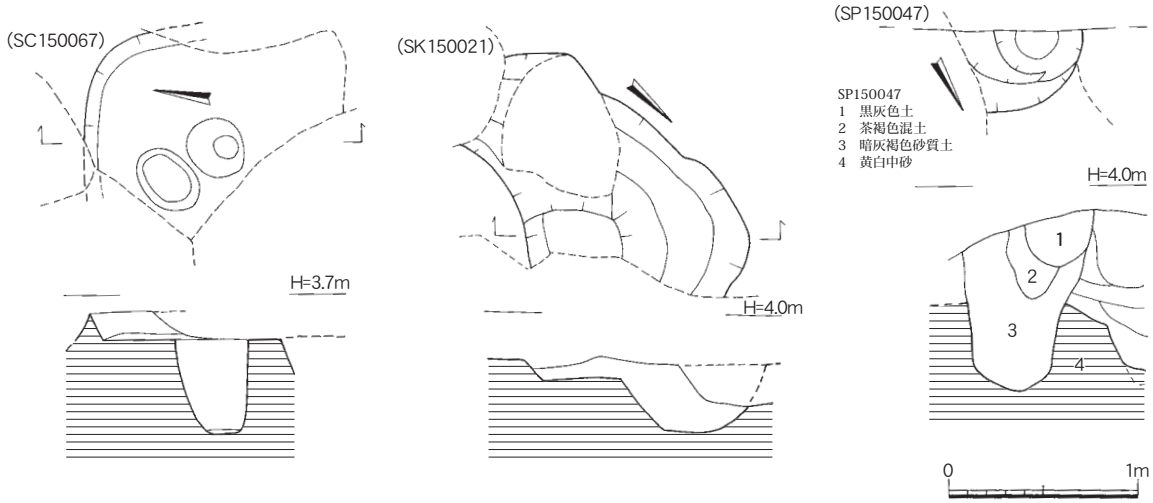


Fig.19　SC150067、SK150021、SP150047 実測図（1/40）

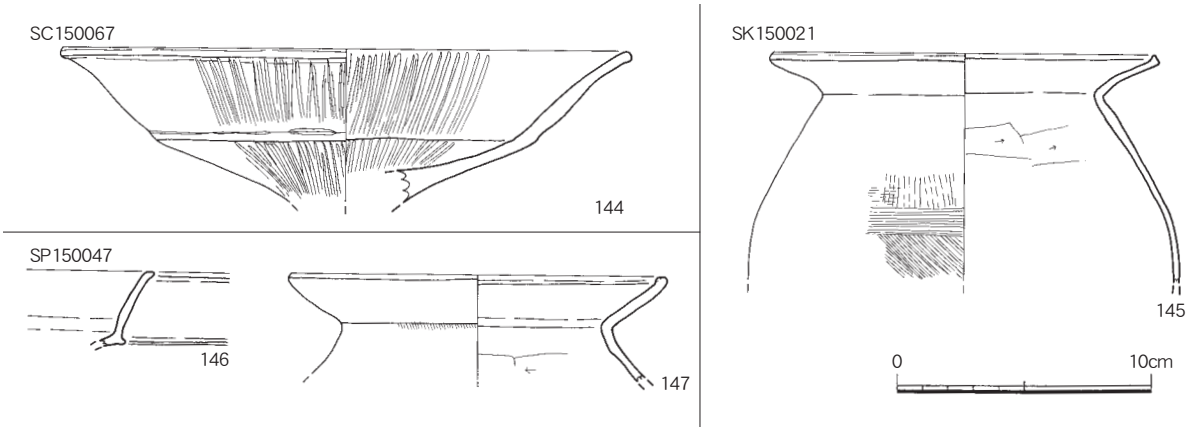


Fig.20　SC150067、SK150021、SP150047 出土遺物実測図（1/5）

Ph.28　SK150020・150021（南から）

Ph.29　SP150047（北から）

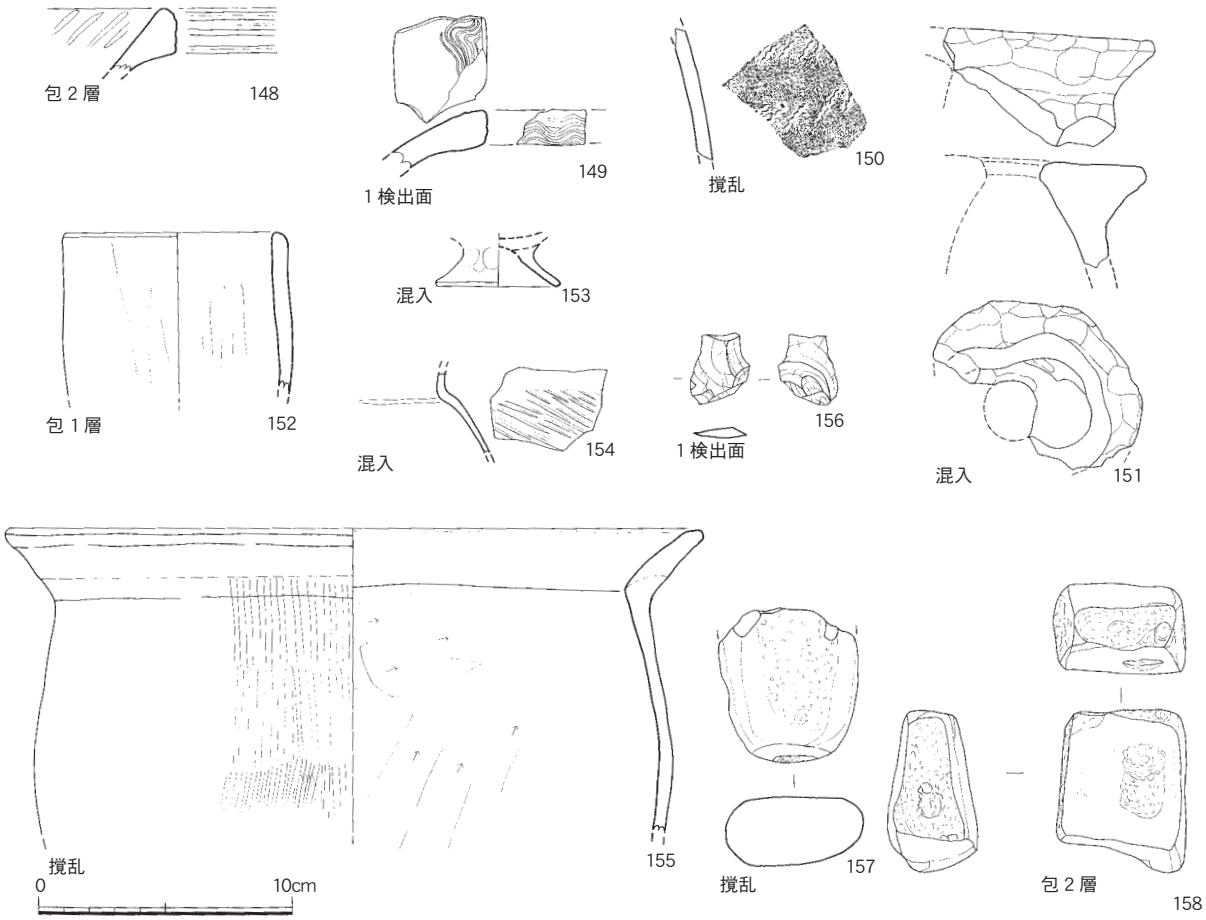
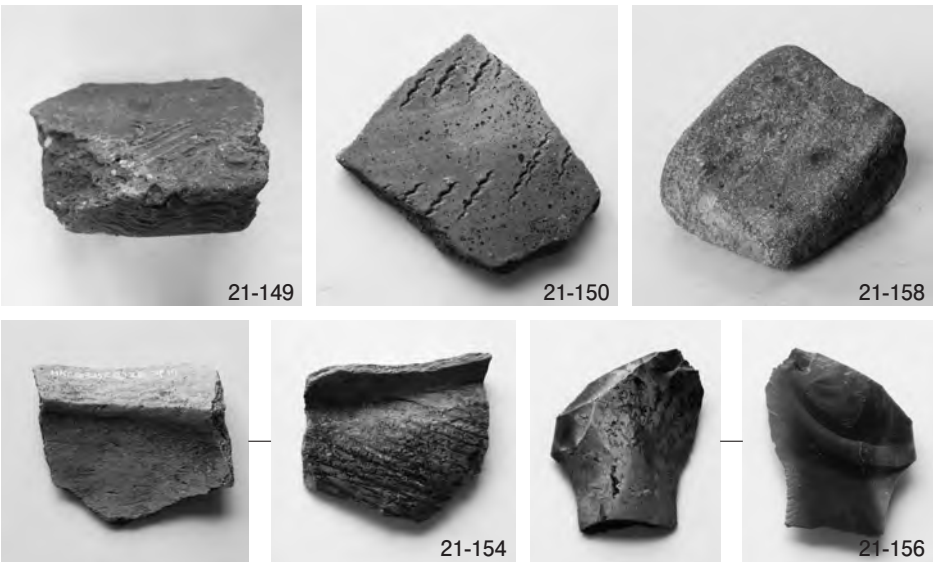


Fig.21　その他の古墳時代前期遺物実測図（1/3）



Ph.30　その他の古墳時代前期出土遺物

（４）その他の古墳時代前期出土遺物（Fig.21　Ph.30）

ここではこれまで取り上げられなかった古墳時代前期の出土遺物を紹介する。

148・149 は土師器壺口縁部である。148 の胎土は橙色を呈し、1 ～ 2mm の白色砂粒含む。内面にヘラ切り文、口縁部に横方向の凹線文を施す。残存高 2.5mm。①グリッド第２面～３面包含層出土。149 の胎土は橙色を呈し、1 ～ 2mm の石英、長石粒子を含む。口縁端部の上面と側面に櫛描波状文を施す。残存高 2.4mm。第１面清掃時出土。150 は古式土師器壺胴部である。胎土は内面暗青灰色、外面にぶい橙色を呈し、白色微粒子を含む。外面に櫛歯の刺突文を施す。残存高 5.6mm。③グリッド撹乱出土。151 は土師器支脚。胎土はにぶい黄橙色を呈し、1 ～ 2mm の石英、長石を含む。側面は指おさえで成形し、頂部は丁寧に平滑にミガキ、仕上げる。残存高 5.0cm。SE150014 掘方出土。152 は飯蛸壺。胎土は灰黄褐色で精良。復元口径 9.0cm、残存高 6.5cm。⑤グリッド第１面～２面包含層出土。153 は製塩土器。胎土は浅黄橙色で精良。使用により黒褐色を呈し、表面は荒れる。復元底径 5.0cm、残存高 1.7cm。ST150049 掘方出土。154 は土師器甕肩部。内面は明褐灰色から橙色、外面は灰黄色を呈し、胎土は精良。内面に水銀朱が付着する。残存高 3.3cm。第２面 SP150017 出土。154 は土師器甕。内面は灰オリーブ色、外面はにぶい黄色を呈し、中位以下スス付着で黒色となる。胎土に 1 ～ 2mm の白色粒子を多く含む。復元口径 27.6cm、残存高 12.2cm。②グリッド撹乱出土。155 は碧玉の剥片。濃緑色から緑色を呈する。残存幅 3.2cm、残存長 3.8cm、残存厚 0.5cm。③・④グリッド第１面清掃時出土。156 は敲石。花崗岩製。黄味がかった灰白色を呈する。先端部と正面に敲打痕がある。残存幅 7.3cm、残存長 8.2cm、残存厚 3.6cm。⑤グリッド撹乱出土。158 は敲石もしくは磨石。安山岩製か。暗灰褐色を呈する。残存幅 7.0cm、残存長 8.6cm、残存厚 4.8cm。③グリッド第２面～３面包含層出土。

７）弥生時代終末期の調査

（１）竪穴住居

SC150071　　第３面④・⑤グリッドで検出した竪穴住居である。SC150081 の上層か。

出土遺物(Fig.23)　　159 は弥生土器坏。胎土は明黄褐色で精良。外面わずかに黒斑が認められる。残存高 2.8cm。

SC150081（Fig.22　Ph.31・32）　　第４面④・⑤グリッドで検出した竪穴住居である。南東隅を検出し、大半は北側調査区外に延びる。残存壁高 0.3 m。

出土遺物（Fig.23　Ph.33）　　160 は弥生土器直口壷口縁部。胎土は暗褐色～黒褐色を呈し、精良。内外面にタテ方向の粗いヘラミガキを施す。残存高 3.2cm。床面出土。161 は弥生土器甕底部。胎土は橙色を呈し、1 ～ 2mm の石英などの白色粒子を含む。底部に黒褐色の黒斑が認められる。柱穴 SP150079 出土。162 は弥生土器低脚坏。胎土は内面黒色、外面明黄褐色を呈し、石英、長石微粒子を多く含む。内面に丁寧なミガキ、外面と脚内部に細かいハケメを密に施す。残存高 5.3cm。163 は弥生土器甕。胎土は内面灰褐色、外面暗灰黄色を呈し、精良。白色微砂含む。復元口径 16.5cm、残存高 19.0cm。床面出土。

（２）土坑

SK150030（Fig.22　Ph.34）　　第３面③グリッドで検出した土坑。径 1.3 m前後、南側が深く 0.4 m、北側は 0.2 m。

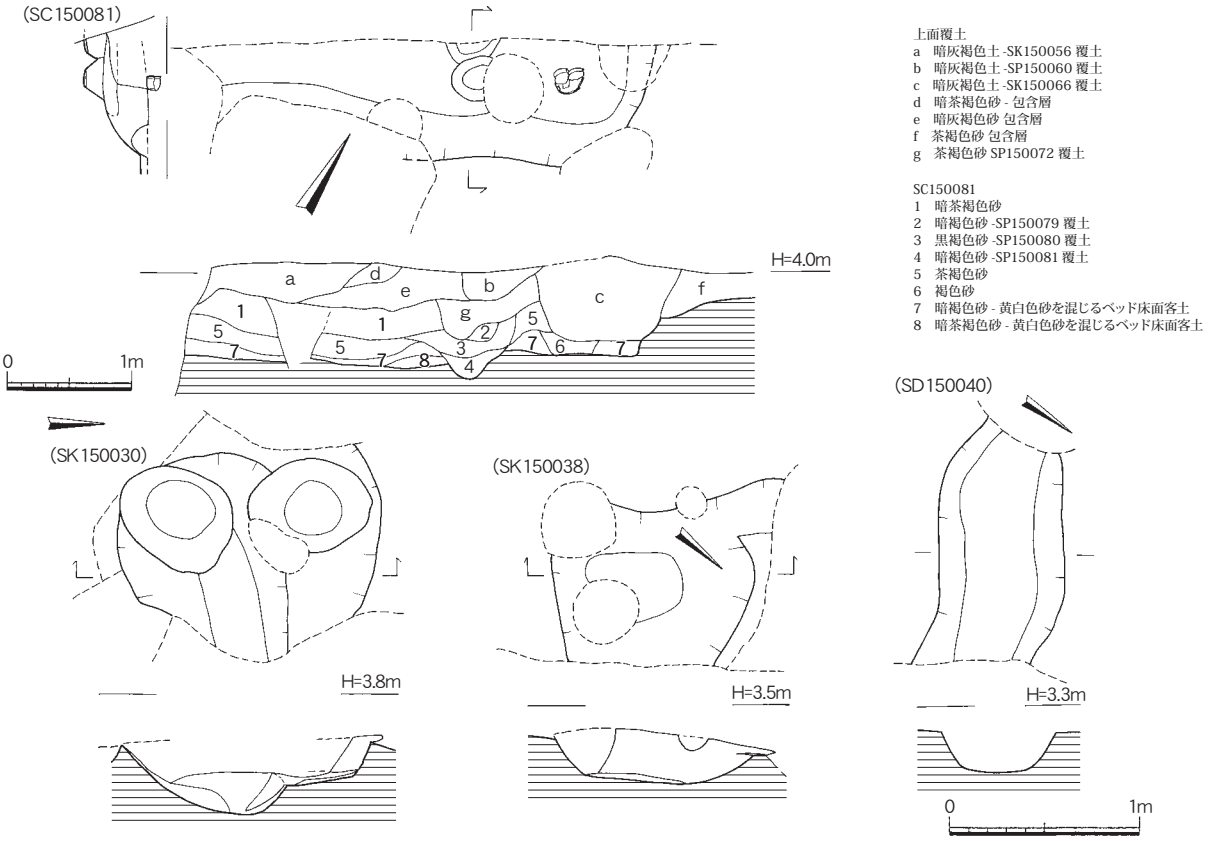


Fig.22　SC150081（150071）、SK150030・150038、SD150040 実測図（1/60・1/40）

Ph.31　SC150081（南から）

Ph.32　SC150081 内土器（南から）

出土遺物（Fig.20）　164 は弥生土器甕。胎土はにぶい赤褐色を呈し、1 ～ 5mm の石英、長石粒を含む。復元口径 18.2cm、復元底径 4.7cm、器高 22.8cm。

SK150038（Fig.22　Ph.35）　第 4 面②グリッドで検出した土坑。径 1.1 m前後、深さ 0.3 m。出土遺物（Fig.20）　165 は弥生土器器台脚部。胎土は内面明黄褐色、外面黒色を呈し、最大 5mm

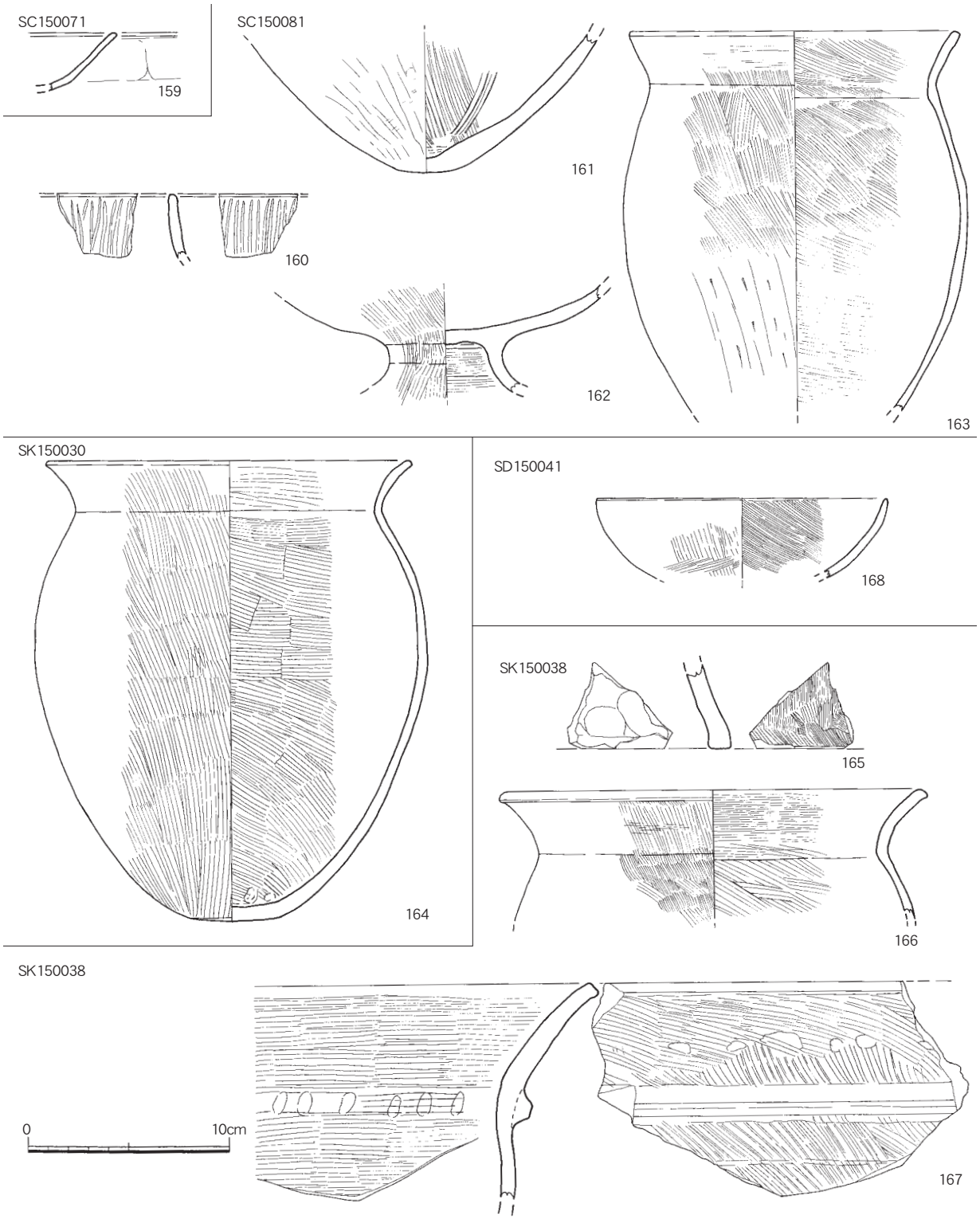


Fig.23　SC（71）81、SK150030・150038、SD150041 出土遺物実測図（1/3）

Ph.33　SC150081・SK150030 出土遺物

内外の粗砂を多く含む。残存高 4.3cm。166・167 は弥生土器甕口縁部である。166 の胎土は内面明黄褐色、外面暗灰黄色を呈し、1 ～ 2mm の石英、長石粒子を含む。復元口径 21.2cm、残存高 6.4cm。167 の胎土は内面黒斑部と橙色、外面明赤褐色～橙色を呈し、1 ～ 2mm の石英、長石粒を多く含む。頸部に突帯が付き、その内面には楕円形の押さえた痕跡が残る。残存高 10.6cm。

（3）溝

SD150041（Fig.22　Ph.36）

第 4 面②・③グリッドで検出した溝。幅 0.6 m、深さ 0.2 m。1.2 m分検出した。

出土遺物（Fig.20）

168 は弥生土器坏。胎土は内面黒色、外面灰黄色を呈し、1 ～ 2mm の白色砂粒多く含む。復元口径 14.4cm、残存高 4.0cm。

Ph.34　SK150028・150029・150030（北から）

Ph.35　SK150038・150042（南から）

（４）その他の弥生時代終末期出土遺物（Fig.24）

ここではこれまで取り上げられなかった弥生時代終末期の出土遺物を紹介する。

169 は弥生土器器台。胎土は内面オリーブ褐色、外面暗灰黄色を呈し、1 ～ 2mm 内外の石英、長石粒子を多く含む。内外面は粗いハケメで、上端部に櫛歯状の刺突文。復元口径 14.6cm、残存高 5.1cm。SE150012 掘方出土。170 は弥生土器坩。胎土は橙色を呈し、1 ～ 2mm 内外の石英、長石粒子を含む。復元口径 9.0cm、器高 7.1cm。⑤グリッド第 1 面～ 2 面包含層出土。171 は弥生土器直口壺。胎土は内面暗灰黄色、外面にぶい黄褐色を呈し、金雲母微砂を含む。外面に黒斑が認められる。復元口径 11.8cm、残存高 4.5cm。⑤グリッド第 2 面～ 3 面包含層出土。172 は弥生土器Ｖ様式系の底部。胎土は内面明黄褐色、外面にぶい黄褐色を呈し、底部は黒化している。1mm 内外の砂粒、雲母粒子多くを含む。残存高 3.2cm。SE150012 掘方出土。173 は弥生土器甕。胎土は内面にぶい黄橙色、外面にぶい褐色～にぶい黄褐色を呈し、5mm 以下の砂粒を少量、微細な雲母を多量含む。復元口径 36.2cm、残存高 11.0cm。SE150012 掘方出土。

Ph.36　SD150041（西から）

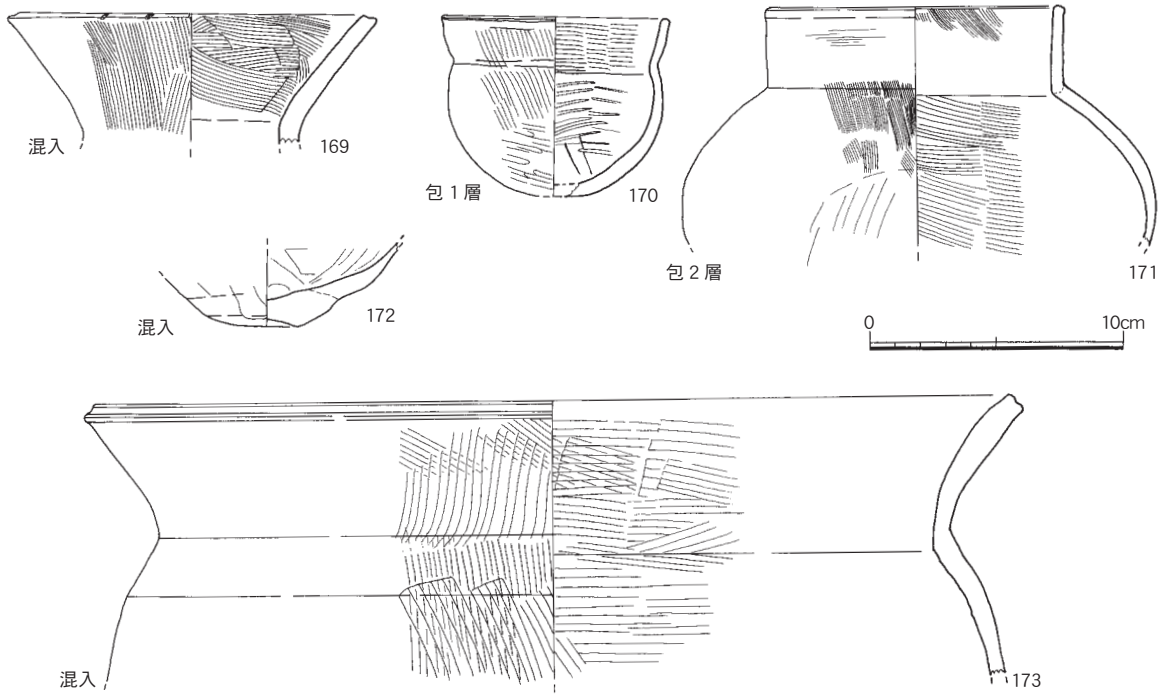


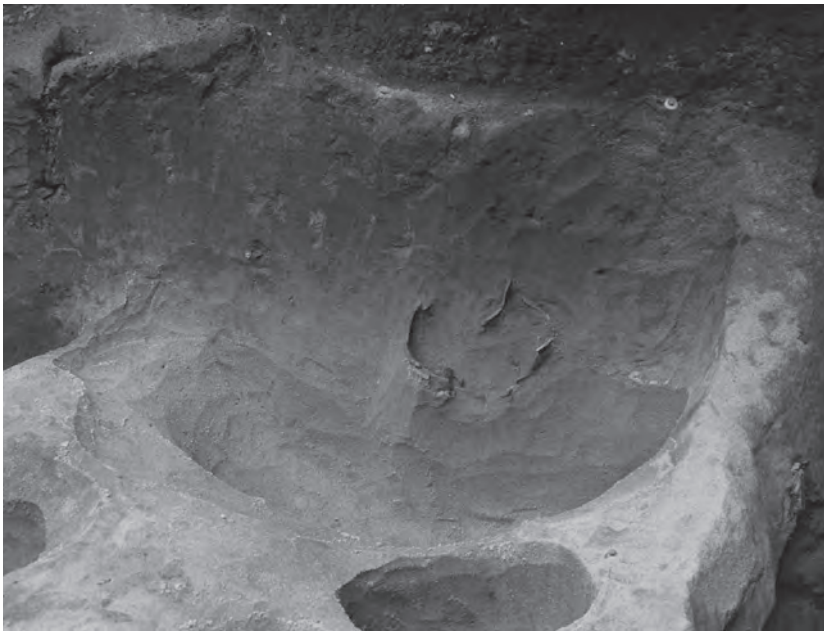
Fig.24　その他の弥生終末期出土遺物実測図（1/3）

8）弥生時代中期の調査

（1）甕棺墓

ST150049（Fig.25　Ph.37 ～ 41）　第 4 面③グリッドの西部で検出した甕棺墓。接合式の小児棺である。北東 - 南西に軸をとり、約 17°の傾斜を持って埋置されている。上甕を大きく欠損する。墓壙は平面長軸 1.1 m、短軸 1.0 m確認できた。残りの良い部分で深さ 0.6 m残存する。

上甕は底部を欠損する。やや内傾した逆 L 字形口縁を呈し、口縁下に幅 0.9cm の三角形突帯を巡らす。口縁部はヨコナデで、内面は平滑に丁寧にナデを施す。外面は幅 1.5cm 程度のハケメ工具で細かいタテハケを密に入れる。胎土は黄褐色を呈し、石英・長石粒子を若干含む。復元口径 30.0 ～ 30.5cm、残存高 29.5cm。下甕はやや内傾した逆 L 字形口縁を呈し、口縁下に幅 0.7cm の三角形突帯を二条巡らす。底部は平底である。口縁部はヨコナデ。内面はナデ調整で粘土輪積み成形時の指おさえ痕が残る。外面は幅 1.5 ～ 2cm 程度の単位の粗いタテハケを密に入れる。胎土は内面浅黄色、外面にぶい浅黄色～黒褐色を呈し、外面には黒斑部が認められる。1 ～ 2mm の石英・長石粒子を含む。口径 31.5 ～ 32.3cm、底径 7.8cm、器高 41.8 ～ 42.6cm。



Ph.37　ST150049 土層断面（北から）

Ph.38　ST150049（東から）

Ph.39　ST150049 内面（南から）

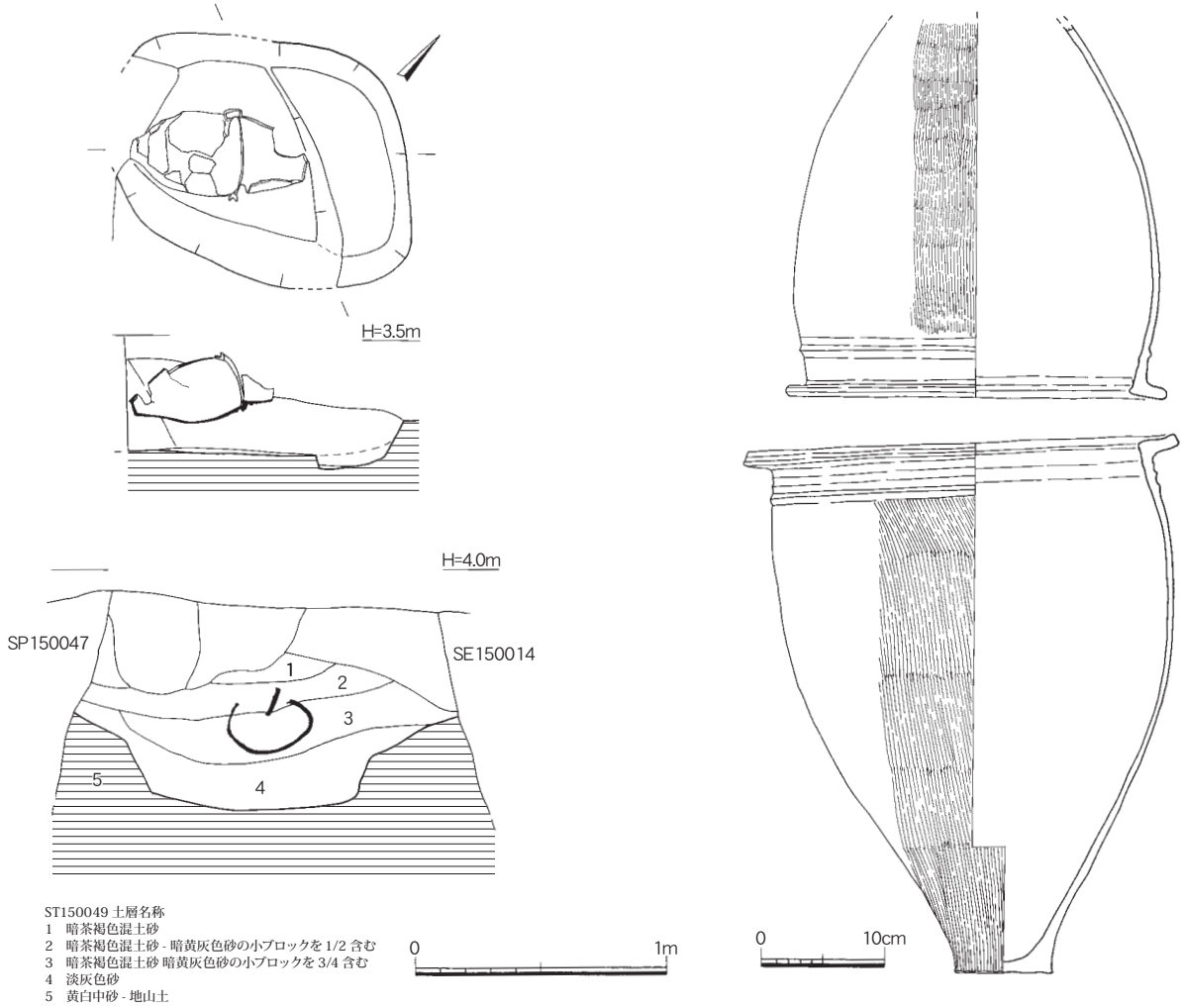
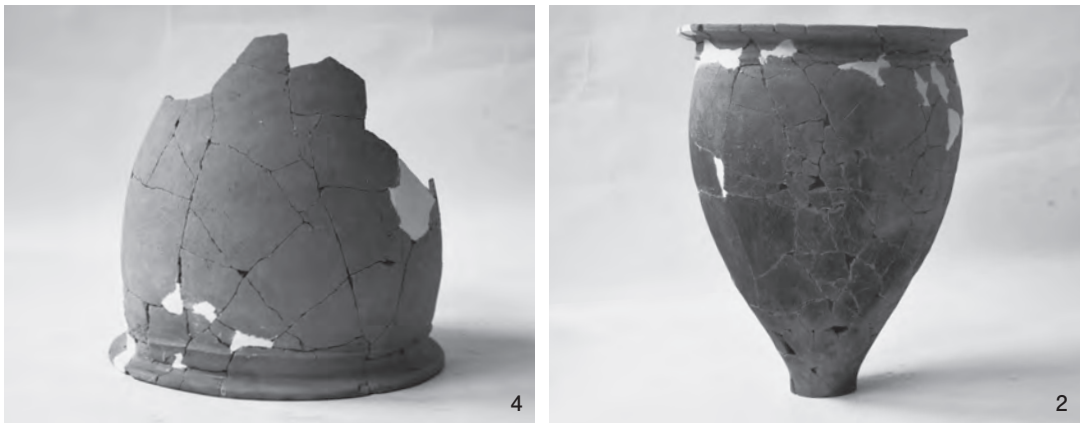


Fig.25　ST150049 実測図（1/30・1/6）

9）近世その他の出土遺物（Fig.26　Ph.42）

ここではこれまで取り上げられなかった近世その他の出土遺物を紹介する。

174 は人形の土製雌型。胎土は橙色を呈し、精良。赤褐色粒子を含む。布袋の顔下半と左肩、手の部分が残る。残存幅 8.8cm、残存長 10.7cm、残存厚 2.8cm。③グリッド撹乱出土。175 は近世の肥前陶器碗。胎土は暗灰色で精良。オリーブ黒色釉に白泥で内面縮緬状、外面波状のハケメを施す。復元口径 11.2cm、残存高 3.6cm。②グリッド撹乱出土。176 は土師器甑底部。胎土は内面にぶい黄褐色、外面暗オリーブ色を呈し、精良。白色、褐色微粒子を含む。底部に径 1cm 前後の蒸気孔が複数配される。復元底径 8.1cm、残存高 3.8cm。中間杭立会 3 面 SP150054 出土。177 は石庖丁。灰色を呈し、石材は泥岩か。残存幅 4.6cm、残存長 3.1cm、残存厚 0.4cm。SE150014 出土。178 は打製石鏃。黒曜石製。凹基鏃で両側縁に 1 か所突起を作り出す。幅 1.6cm、長さ 3.0cm、厚さ 0.3cm。４面 SP150043 出土。



Ph.40　ST150049 出土甕棺

Ph.41　ST150049 掘方（北から）

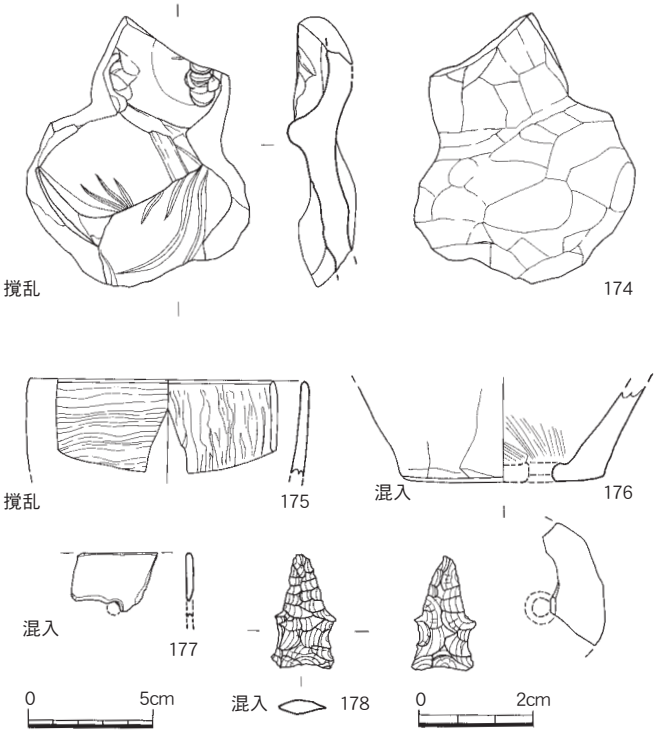


Fig.26　その他の出土遺物実測図（1/3・1/2）

Ph.42 その他の出土遺物

10）　小結

今回の調査では、83.1㎡の面積で 4 面にわたって弥生時代中期～ 12 世紀後半を中心とした遺構を検出した。遺物はコンテナ 35 箱分出土している。

矢板部分も含め、検出したおもな遺構は、12 世紀中頃～ 13 世紀前半で（中世 1）、土坑 9 基・井戸 4 基で、遺物は 5 基の遺構内から 37 点のガラス坩堝が出土している。遺構内からでは最大の量である。他に吉州窯天目碗小片 22 が出土している。

11 世紀後半～ 12 世紀前半は（中世 2）土坑 27 基・井戸 2 基・溝 3 条を検出した。遺物は 10 基の遺構内から 14 点のガラス坩堝が出土している。他に墨書白磁 20・46・95 が 3 点出土している。

古代の遺構は土坑 4 基・竪穴住居 1 軒・井戸 1 基を検出した。井戸 SE150012 は板を方形に組んだ井側である。遺物は越州窯系青磁水注・長門系緑釉皿・新羅焼等が出土している。他に東海系を含む 4 点の緑釉陶器、定窯かと思われる白磁碗 48、都城系土師器皿、「家」の墨書がある須恵器転用移硯 137 等官衙的要素が強い。

古墳時代後期は土坑 SK150057 のみ検出され、鉄滓 141 と棒状土錘 142・143 が出土している。

古墳時代前期は竪穴住居 2 軒・土坑 10 基を検出しており、遺物は天草式製塩土器 153、水銀朱焼成甕 154、碧玉剥片 156 を出土している。鉄器の検出は無い。

弥生時代終末期は竪穴住居 2 軒・土坑 2 基を検出しており、遺構・遺物は少ない。

弥生中期は中頃の小形甕棺 1 基を検出。他に縄文晩期黒曜石駒形鏃 178、石包丁片 177 を出土した。

17. 16 区の調査

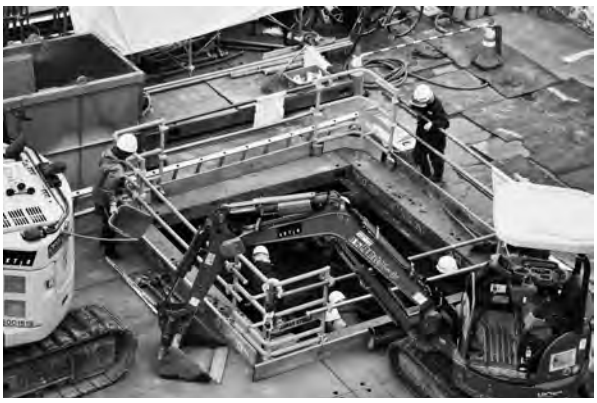
1）概要（Ph.1~12）

16 区は、東工区の南東側に位置する。本調査を行った 5・6・10・11 区、先行して立会調査を行った 27・29 区を除く地点で、調査面積約 143.85㎡である。この地点は、東側に交差点が位置し、車線規制ができず、また、生活道路確保のため、発掘調査を行うことはできなかった。そこで、覆工板を道路全面に設置した後、立会調査を行うこととした。周囲の調査で得た遺構面を参考とし、3 面の調査を予定とした。調査は 1 日で、地山面まで終了させなければならなかったため、覆工板 2~3 枚を目途に開け、遺構検出を行い、上端のみ図面にスケッチした。時期をおさえるため、できる限り遺構を掘削し、写真撮影を行い、深さと土色を記録した。遺構を掘削した後、周囲の包含層を掘り下げ、遺物を採集したが、次の遺構面まで深さがあり、時間を要する場合は、重機による掘削も行った。重機で掘削する際も、薄く剥ぎ、遺物は収集した。排土はその都度、搬出した。なお、覆工板毎の調査で、工程の都合上、前日の隣の覆工板の箇所を調査できない場合もあったため、隣の調査区で検出した遺構の続きを確認できないなど、遺構検出の整合性を図ることができなかった。また、竪穴住居跡等の大型の遺構の確認も難しく、深い遺構も完掘できていない。

調査は工程の都合で、2017 年 1 月 26 日から 2017 年 2 月 6 日と 2017 年 4 月 13 日（⑥⑦ -9・10・11）に行った。第 1 面は現道路面から西側が約 1.0m 下で、標高 4.0m、東側が約 0.8m 下で 3.5m に設定したが、埋設管等による削平が著しく、遺構は全く残っていなかった。調査区の北西から南東に下水道管、調査区南側に電力や通信管が埋設され、砂丘面まで撹乱されていた（Fig.1　Ph.9~12）。第 2 面も撹乱が著しく、遺構は調査区西側で一部確認できただけで、標高は 3.3~3.8m である。第 3 面は地山の砂丘面で標高 3.0~3.4m を測り、西側から東側に向かって徐々に傾斜する。

Ph.1　② -8~10 遠景（南西から）

Ph.2　① -2・3 調査風景（東から）



Ph.3　② -8~10 調査風景（南西から）

Ph.4　② -8~10-3 面掘削状況（南東から）

Ph.5　① -12・13 下水道管撹乱（南西から）

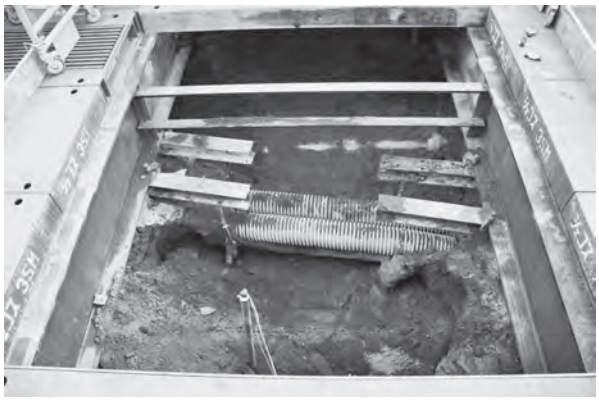
Ph.6　⑨ -2~4 電力管撹乱（北西から）

Ph.7　① -2・3 下水道管撹乱（南東から）

Ph.8　① -4・5 電力管撹乱（南東から）

Ph.9　④ -2~4 電力管撹乱（南東から）

Ph.10　⑥ -2~4 電力管撹乱（南東から）



Ph.11　⑦ -4~6 電力管撹乱（南西から）

Ph.12　⑦ -4~6 電力管撹乱（南東から）

調査区は覆工板を基準として、東から西に①から⑨、南から北へ 1 から 11 と付け、その組み合わせによるグリッド表記を用い、遺構の位置等を示す（Fig.1）。

検出した遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡 2 基、古代の竪穴住居跡 1 基、11 世紀後半 ~12 世紀の井戸 2 基、各時代の土坑、ピットである。2 面から 3 面の包含層からは弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、滑石製品等がコンテナケース 13 箱分出土する。

2）第 2 面の調査（Fig.1　Ph.13~18）

第 2 面は暗茶褐色砂質土の上面で検出し、西側が現道路面から約 1.2m 下で、標高は 3.8m、東側は約 1.0m 下で標高 3.3m を測る。検出した遺構は弥生時代終末から古墳時代の竪穴住居跡 1 基、土坑 1 基、ピット、古代の竪穴住居跡 1 基、土坑 1 基、11 世紀後半から 12 世紀前半の井戸 1 基、土坑 5 基、ピット 1 基である。

（1）竪穴住居跡（SC）

SC160048（Fig.1　Ph.13・14）　調査区西側⑦ -9・10 に位置する。遺存状況は悪く、北側は削平を受け、南側の壁面のみ検出した。平面プランは方形で、南西側の壁の長さは 1.3m、南東側は 0.9m である。南側の遺存状況が良好な箇所で、深さは約 20cm を測る。覆土は茶褐色砂質土を主体とする。第 3 面で多くのピットを検出したが、主柱穴等は不明である。

出土遺物（Fig.2）　1 は弥生土器の甕で、口縁は頸部から緩やかに立ち上がる。口縁端部は工具による強いナデを施し、内と外に突出する。頸部下に突帯が巡り、刻みを施す。体部外面は叩き、口縁外面と内面は密な刷毛目で調整する。2 は土師器の高坏の坏部片で、内外面ともに密な研磨調整を行う。3 は花崗岩の台石で、直径約 12.0cm、厚さ 5.3cm の扁平な自然石をそのまま使用する。自然面は黄白色であるが、上面と下面の中央に敲打痕が残り、白色となる。重さは 1060.84g を量る。他に土師器の鉢、壺等が出土し、竪穴住居の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

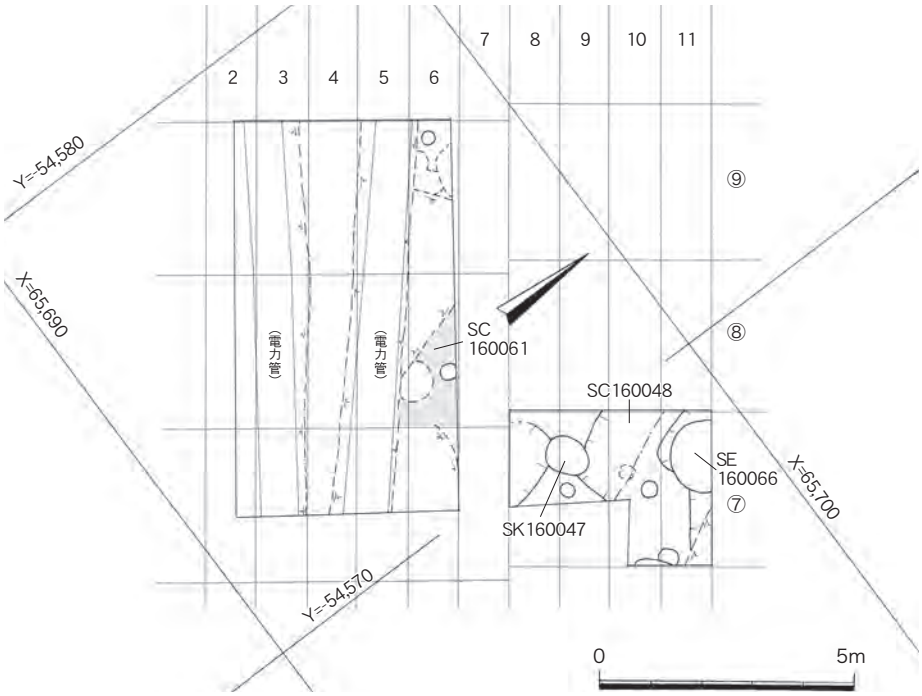
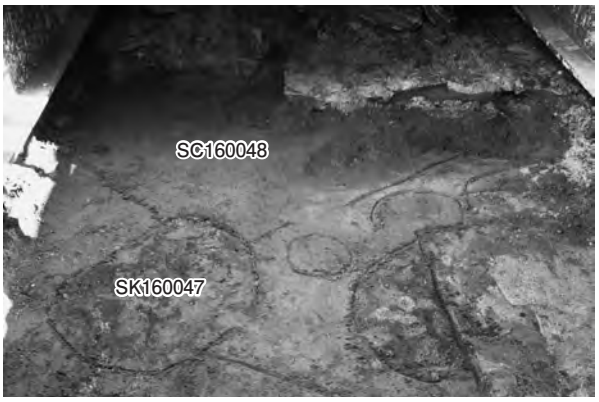


Fig.1　第 2 面全体図（1/150）

Ph.13　⑦ -8~10-2 面（南西から）



Ph.14　⑦ -8~10-2 面（南西から）

Ph.15　⑦ -9~11-2 面（南西から）

Ph.16　⑦ -9~11-2 面 SE160066（南西から）

Ph.17　⑧ -6・7-2 面（南東から）

Ph.18　⑨ -5・6-2 面（南東から）

SC160061（Fig.1　Ph.17）　調査区西側⑧ -5・6 に位置する。南側と西側は撹乱され、北側 27 区の立会調査では対応する竪穴住居跡を検出できなかった。しかし、遺物がまとまって出土し、他の同時期の遺構と覆土等も類似することから、竪穴住居跡とした。遺存状況は比較的良好で、遺構の深さは約 35cm を測る。覆土は灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.2）　6~9 は須恵器である。6 は摘みを有する坏蓋で、復元口径 15.2cm を測る。摘み部は欠損し、口縁はわずかに下方へつまみ出す。天井部はヘラ切り未調整である。7 は坏で、復

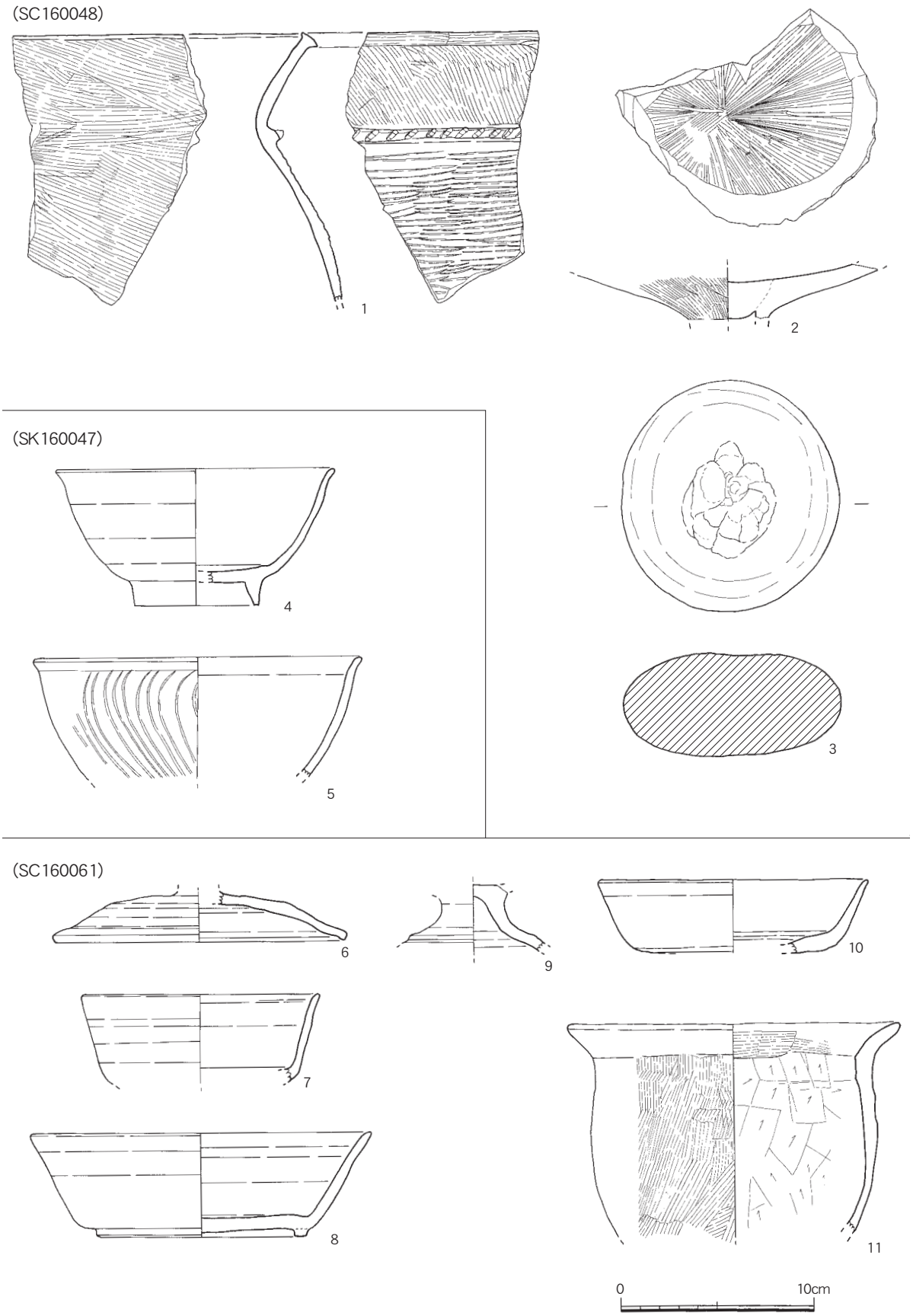


Fig.2　SC160048・160061・SK160047 出土遺物実測図（1/3）

元口径 12.4cm を測り、ナデで調整する。8 は高台付坏で、復元口径 17.6cm、器高 5.4cm である。断面方形の低い高台が体部と底部の境よりやや内側に付く。体部は底部から直線的に外に開く。9 は高坏の脚部片で、裾は大きく外に開き、中位に沈線が 1 条巡る。胎土は赤褐色粒を多く含み、色調は暗紫灰色を呈する。10・11 は土師器である。10 は坏で、復元口径 14.0cm、器高 4.8cm を測る。底面はヘラ切り未調整で、底部と体部の境は丸く仕上げる。体部は回転ナデで調整する。11 は甕で、口縁は頸部より強く外反するが、頸部と口縁の境はやや不明瞭である。口縁部内面は横方向の刷毛目、外面はナデ、体部内面は縦方向の削り、外面は刷毛目で調整する。外面には煤が付着する。出土遺物より竪穴住居の時期は 8 世紀後半と考えられる。

（2）土坑（SK）

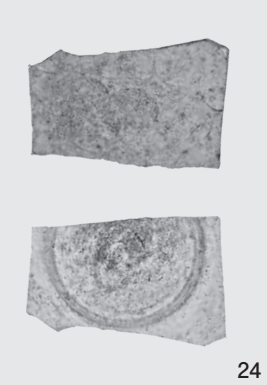
SK160047（Fig.1　Ph.13・14）　調査区西側⑦ -8・9 に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 0.8m、短径 0.6m、深さは 30cm を測る。覆土は黒褐色砂質土を主体とする。

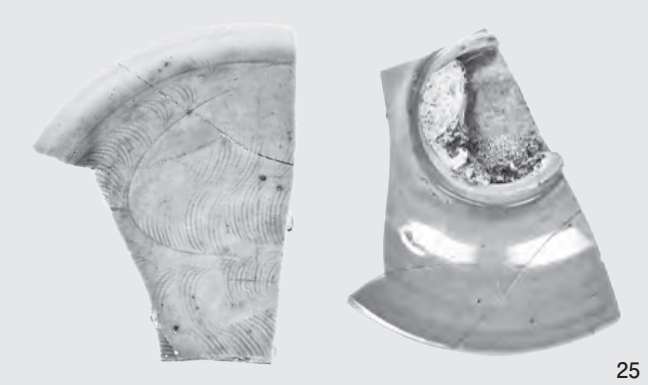
出土遺物（Fig.2）　4・5 は白磁で、4 は碗Ⅻ -1a 類で、内面見込みに段が付く。高台は細く高い。灰白色の胎土に化粧土が施され、やや灰青色を帯びた釉が内面と外面は高台畳付を巻き込んで高台内までかかる。細かい貫入が入る。5 はⅫ -1b 類の口縁部片で、外面に縦箆花弁文を施す。橙色の軟質な胎土に化粧土が施され、黄味を帯びた白色釉がかかる。他に回転糸ヘラ切り底の土師器、中国の施釉陶器、軽石が出土する。土坑の時期はこれらの遺物から 11 世紀後半と考えられる。

（3）井戸（SE）

SE160066（Fig.1　Ph.15・16）　調査区西側⑦ -11 に位置する。掘方の平面プランは直径 1.4m を測る円形で、遺構検出面から深さ 2.0m まで掘削を行った。覆土は黒褐色土、茶褐色砂質土を主体とし、焼土を含む。掘方の中央に井側を検出したが、安全が確保できないため、掘削は行わなかった。覆土は灰褐色、茶褐色シルト、黒褐色土である。

出土遺物（Fig.3~5　Ph.19・20）　12~19 は土師器である。12~15 は回転ヘラ切り底の小皿で、口径 9.2~9.6cm、器高 1.3~1.4cm を測り、12~14 は外底部に板状圧痕を有する。すべての小皿が内面を強い回転ナデで調整されているため、器面が凸凹状を呈する。胎土は精良で、色調も暗橙色をなす。15 の内外面には煤が付着し、灯明皿として利用される。16~18 は丸底坏で、口径は 14.8~15.2cm、器高 2.7~3.5cm を測り、17・18 は外底部に板状圧痕を有する。内面は丁寧なナデで調整されるが、18 は工具痕が残る。色調は 16 が白橙色、17 が明褐色、18 は橙色を呈する。19 は回転糸切り底の坏で、口径 15.6cm、器高 3.7cm を測る。胎土に白色砂粒を含み、色調は橙色である。20・21 は瓦器椀である。20 は体部片で、体部下半は不規則な磨き、上半は横方向の細い磨きを行い、器壁も薄い。21 は復元口径 15.8cm、器高 5.1cm





Ph.19　SE160066 出土遺物①

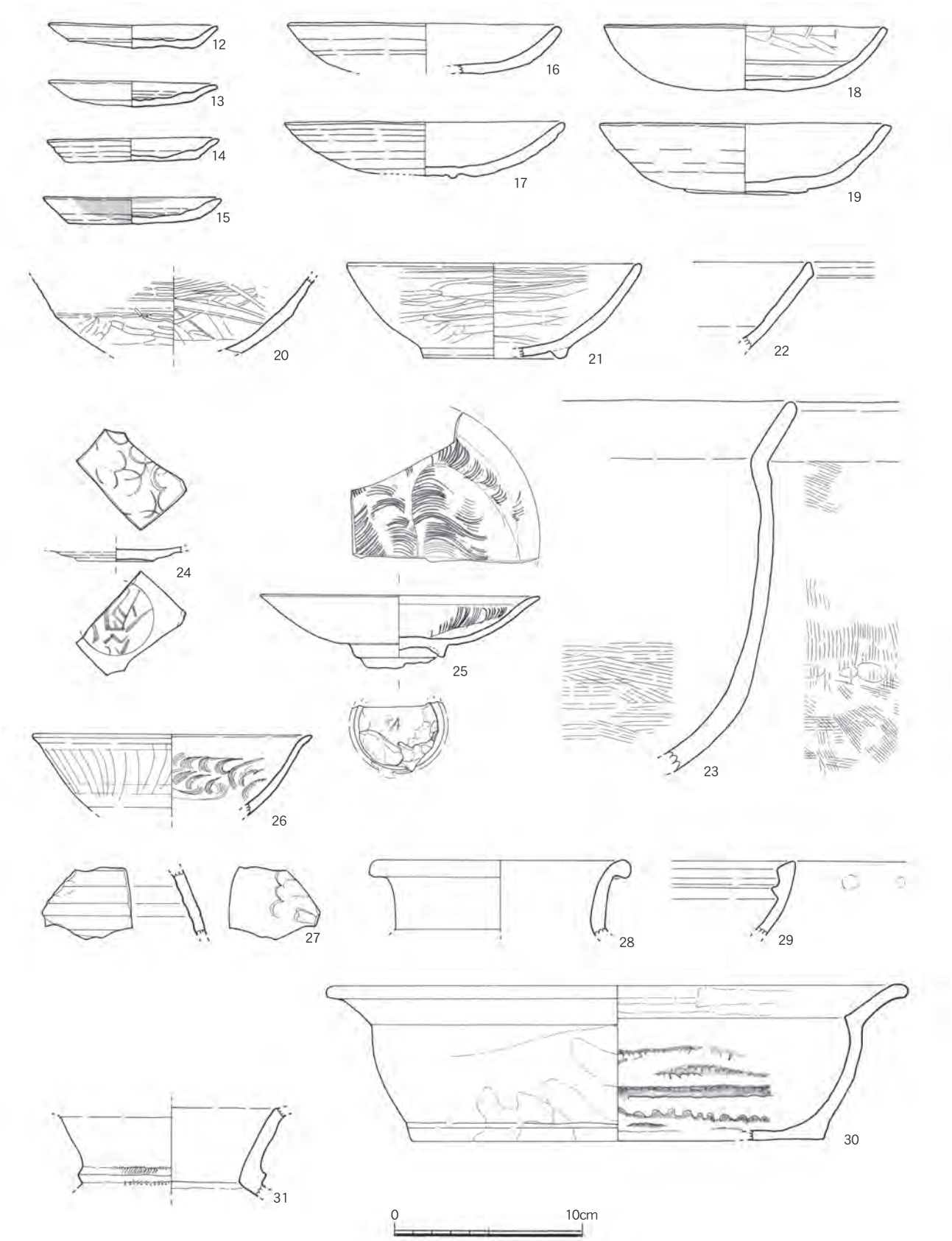


Fig.3　SE160066 出土遺物実測図①（1/3）

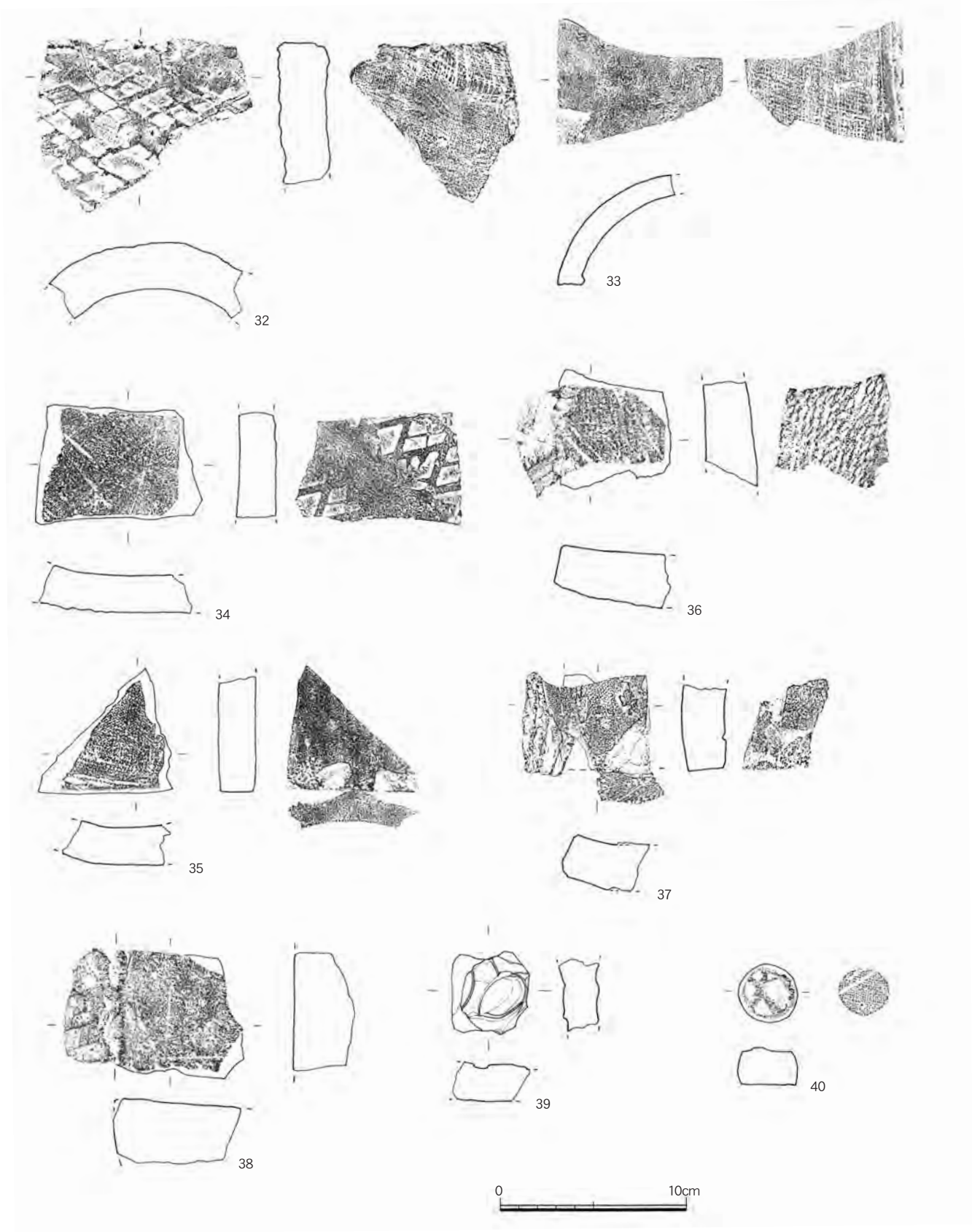


Fig.4　SE160066 出土遺物実測図②（1/3）

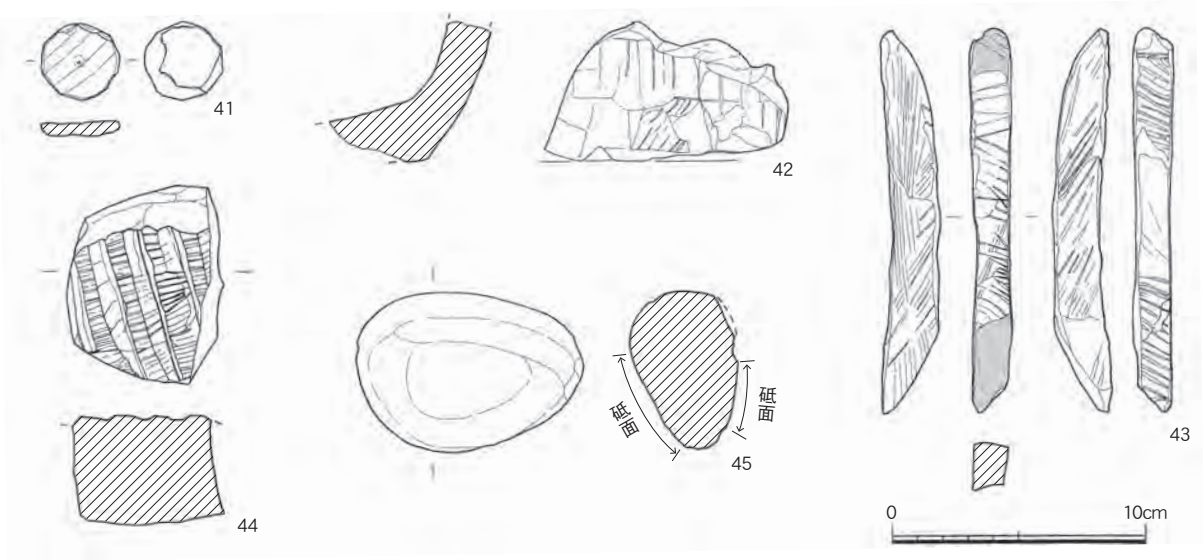
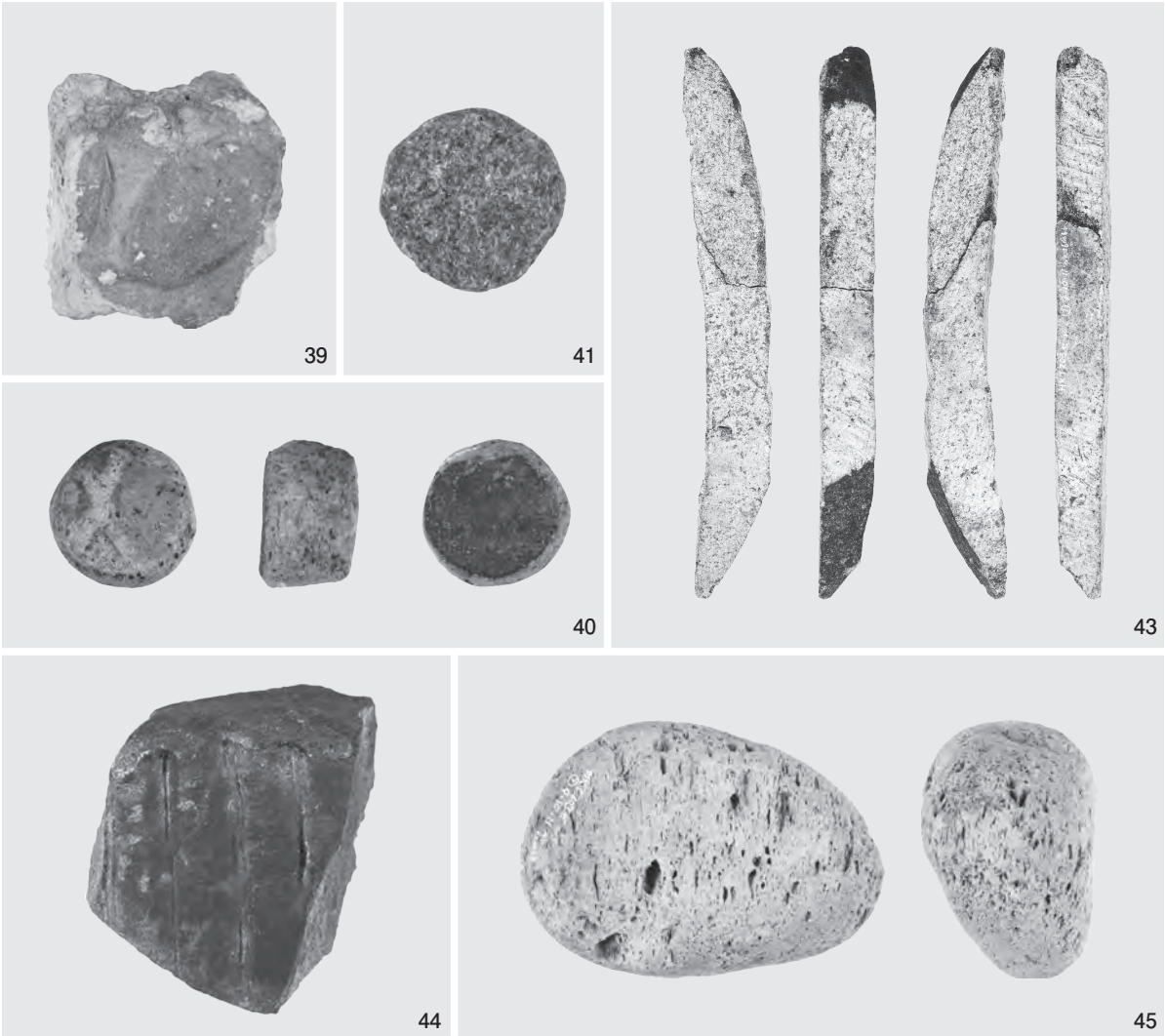


Fig.5　SE160066 出土遺物実測図③（1/3）



Ph.20　SE160066 出土遺物②

と浅く、底部と体部の境が不明瞭で、低い高台を付す。内面と体部上半は横方向の磨きを行うが、体部下半は削りが残る。22 は東播系須恵器の鉢の口縁部片である。23 は土師器の鍋である。丸味をもつ底部から体部は直立気味に立ち上がり、口縁は頸部から外に開く。底部内面は横方向の刷毛目、体部内面はナデ、口縁部内面は磨滅が著しく調整不明で、赤褐色、白色砂粒、石英、金雲母が露出する。底部外面は斜方向、横方向の刷毛目、体部外面は縦方向の刷毛目で調整されるが、外面も口縁から体部にかけ、部分的に器面が磨滅する。外面には多量の煤が付着し、底部内面付近には焦げの痕跡が残る。24~27 は白磁である。24 は皿Ⅶ-b 類で、底部外面はわずかに削りこみ小さな高台状とする。黄橙色の胎土に化粧土を施し、釉をかける。内面には箆で花文を描く。高台内には墨書が残る。25 は碗Ⅵ-1b 類で、内面に短い櫛目文を施す。釉は高台畳付けを超え、高台内までかかる。高台内は胎土目の付着により、凸凹状を呈し、墨書が残る。26 はⅤ-4b 類で、内面に櫛目文、外面に縦箆花弁文を描く。27 は壺の体部片で、外面に箆で花文を施す。28 は施釉陶器の壺の口縁部片で、黒色粒を含む灰色の胎土に、黄緑色の釉がかかる。29 は無釉陶器の鉢で、口縁内面に 2 条の突起を有する。30 は施釉陶器の盤で、内面に鉄絵が描かれ、体部内面と口縁部外面に黄褐釉がかかる。口縁部外面下には胎土目が残る。31 は土師器の壺の頸部片で、断面三角の突帯を貼付し、突帯の上面と下端に工具による押し引きを施す。32~40 は瓦である。32 は須恵質の丸瓦で、厚さ 2.5cm を測る。凸面は格子目の叩き、凹面は細かい布目が残る。33 は陶質の丸瓦で、厚さ 1.2cm を測る。凸面は工具による縦方向のナデ、凹面は布目、側面には切り離しの痕跡が残る。胎土は赤褐色粒、白色、灰白色砂粒を多く含み、色調は褐色を呈する。34 は須恵質の平瓦で、厚さ 2.0cm を測る。凸面は 32 と類似した格子目叩きを施し、内面は部分的にナデを行う。35 は須恵質の平瓦で、現状で厚さ 1.7~2.0cm を測る。凸面は縦方向の工具によるナデ、凹面には細かい布目が残る。両面ともに自然釉がかかる。36 は土師質の平瓦で、厚さは 2.7cm を測る。器面は磨滅するが、凸面は縄目、凹面は布目がうかがえる。37 は土師質の平瓦で、厚さ 2.0~2.5cm を測る。凸面は指ナデ、凹面には細かい布目が残る。側面は工具による強いナデを行う。38 は土師質の平瓦で、厚さ 3.5cm 以上を測る。凹面にはかすかに布目がうかがえる。39 は土師質の磚か。厚さ 2.0cm を測り、表面にはレリーフが描かれる。胎土は白色砂粒、石英を含み、比較的精良で、色調は褐色を呈する。40 は土師質の厚さ 2.0cm の平瓦を使用した瓦玉である。瓦は凸面に格子目、凹面に布目を残す。直径 3.2cm のほぼ正円に整形し、丁寧に側面をナデて仕上げる。重さは 22.23g である。41 は円盤状に整形した滑石製品である。直径 3.1cm の円形で、厚さは現状で 0.6cm を測る。中央に 1.5mm 程度のわずかな窪みが確認できる。重さは現状で 8.41g である。42 は滑石製石鍋の底部片で、外底部は剥離する。外面にはノミの痕跡が残り、多量の煤が付着する。内面は丁寧に仕上げられる。43 は煤の付着がみられることから滑石製石鍋の二次加工品である。内外面に溝状の痕跡が多数みられ、手持ち砥石として利用した可能性がある。重さは 78.65g である。44 は砂岩の溝状砥石の破片である。砥面は 1 面のみ遺存し、4 本の「V」字状の溝が刻まれる。熱を受けたのか、黒色化する。45 は軽石で、砥石として使用し、研磨した箇所は平坦となる。重さは 48.73g を量る。他にガラス小玉、ガラスの未成品、ガラス坩堝、鉄釘等が出土する。井戸の時期は出土遺物より 12 世紀前半と考えられる。

3）第 3 面の調査（Fig.6　Ph.21~32）

第 3 面は黄褐色砂の砂丘面で、西側が現道路面から約 1.6m 下で、標高は 3.4m、東側は約 1.3m 下で標高 3.0m を測る。西から東へ向かって徐々に傾斜する。検出した遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡 1 軒、土坑 10 基、ピット 12 基、古代の土坑 4 基、柱穴 1 基、11 世紀後半から 12 世紀前半の井戸 1 基、土坑 12 基、ピットである。

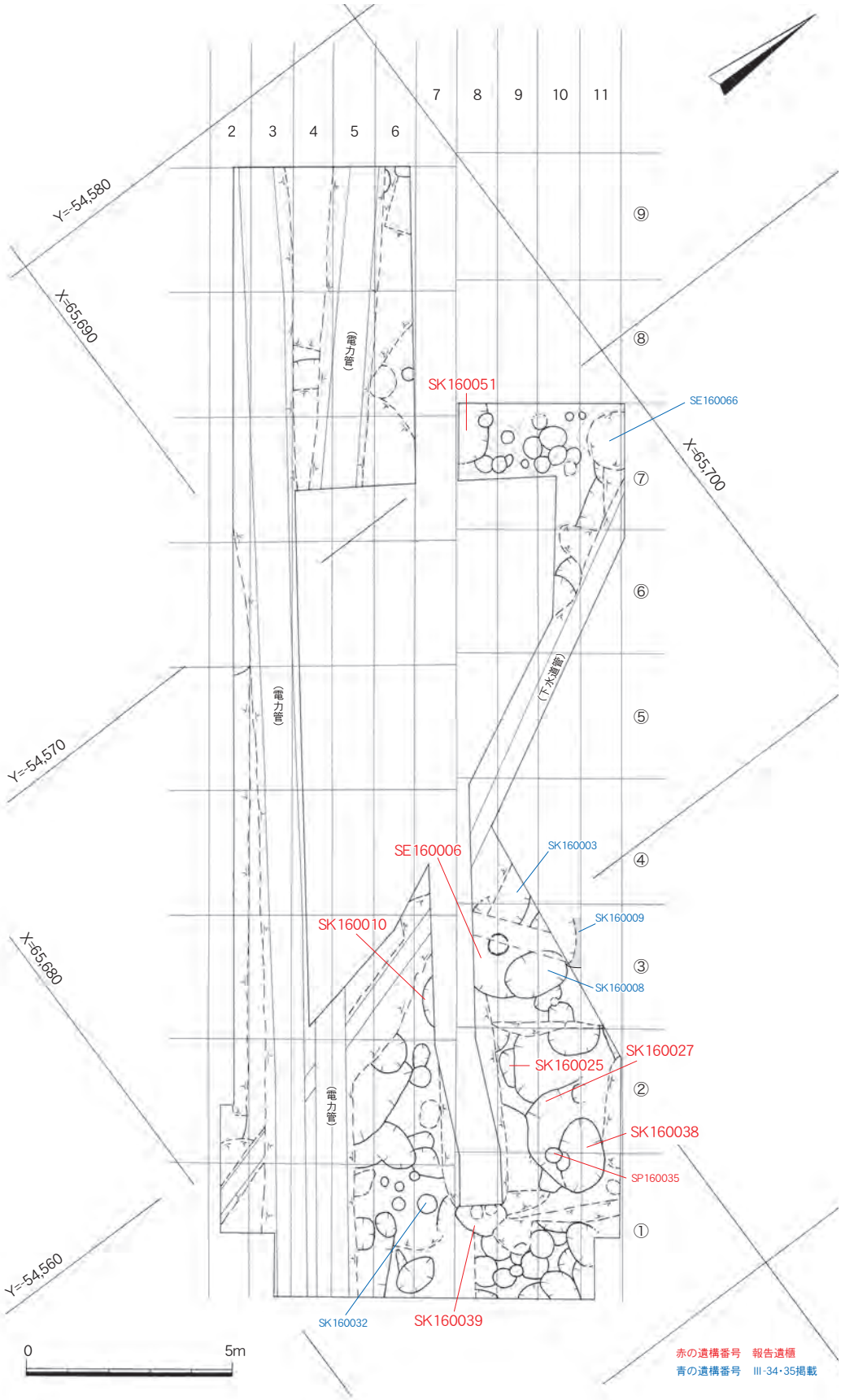


Fig.6　第３面全体図（1/150）

Ph.21　① -6・7-3 面（南東から）

Ph.22　① -8~10-3 面（南東から）

Ph.23　① -11-3 面（南東から）

Ph.24　② -6・7-3 面（南西から）

Ph.25　② -8~10-3 面（南東から）

Ph.26　② -11-3 面（南東から）

Ph.27　③ -5~7-3 面（南西から）

Ph.28　③ -9・10-3 面（南西から）

Ph.29　⑥ -9~11-3 面（南東から）

Ph.30　⑦ -8~10-3 面（南西から）

Ph.31　⑧ -3・4-3 面 SK160059（南東から）

Ph.32　⑨ -5・6-3 面（南東から）

（1）井戸（SE）

SE160006（Fig.6　Ph.33~36）　調査区東側③ -8~10 に位置し、西側は 10 区の矢板設置により、南側は下水道管により削平される。平面は長径 3.0m、短径 2.5m を測る楕円形で、覆土は灰褐色土を主体とする。検出時より井側も掘方のやや南側で確認でき、直径約 0.5m を測る。覆土は上層では黒褐色粘質土、下層は灰色シルト、灰黒色粘質土となる。下層で、縦方向の板目を確認し（Ph.34・35）、井側には桶を使用したと考えられる。最下層は褐色砂となり、湧水する。標高は 1.0m 前後である。

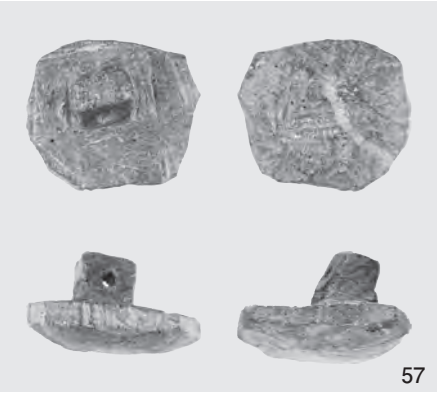
出土遺物（Fig.7　Ph.37）　46 は回転糸切り底の土師器の小皿で、口径 8.8cm、器高 1.2cm を測る。胎土に赤褐色粒、黒色粒、白色砂粒を含み、色調は橙色を呈する。47 は楠葉型の瓦器椀で、口縁内面の端部付近に浅い沈線をもつ。内外面ともに細く密な磨きを施す。体部外面下半には指オサエの痕跡が残る。48 は青白磁の小皿で、口縁には輪花を有する。白色の精良な胎土に青味を帯びた白色釉がかかる。49・50 は白磁である。49 は皿Ⅵ -1b 類、50 は碗Ⅷ類で、内面見込みの釉を輪状に掻き取る。51 は龍泉窯系青磁皿Ⅰ -2c 類で、復元口径 9.8cm を測り、内面見込みに箆による花文と櫛目文を有する。口縁は部分的に細かく打ちく。52 は施釉陶器の壺の底部片で、褐色の胎土に、茶褐色の釉がかかる。53 はメンコ状に整形した土製品で、長さ 3.7cm、幅 3.4cm、厚さ 1.6cm、重さ 21.60g である。胎土に赤褐色粒、黒色粒、石英等を含み、焼成は良好である。表面にはしわやひびが入る。54 は管状土錘の完形品ある。重さは 5.86g を量る。55 は土師質の丸瓦の破片で、厚さは 1.0cm を測る。凸面は工具によるナデ、凹面は布目と横方向に紐の痕跡が残る。側面は打ち割り後、未調整である。1~8mm 大白色砂粒が多く入り、焼成は良好である。56 は須恵質の平瓦で、厚さ 1.8cm を測る。凸面は格子状の叩きの後、部分的に刷毛目で調整する。凹面は布目が残り、側面は工具による強いナデを施す。57 は滑石製のスタンプで、スタン

Ph.33　③ -8~10-3 面 SE160006 上面
（南東から）

Ph.34　③ -8~10-3 面 SE160006 井側桶
（南東から）

Ph.36　③ -8~10-3 面 SE160006 井側
（南東から）

Ph.35　③ -8~10-3 面 SE160006 井側桶
（南東から）



Ph.37　SE160006 出土遺物

プ面は凸状を呈する。削り痕、擦痕が多く残り、側面は不整形で、面を持つことから、未成品とも考えられる。摘みは中央に付かず、片寄り、横方向の穿孔を有する。重さは 39.28g である。他に鉄釘、ガラス坩堝が出土する。図示していないが、井側内からは白磁Ⅳ、Ⅴ類が出土しており、井戸は 12 世紀前半から中頃に使用され、12 世紀中頃から後半に廃絶されたと考えられる。

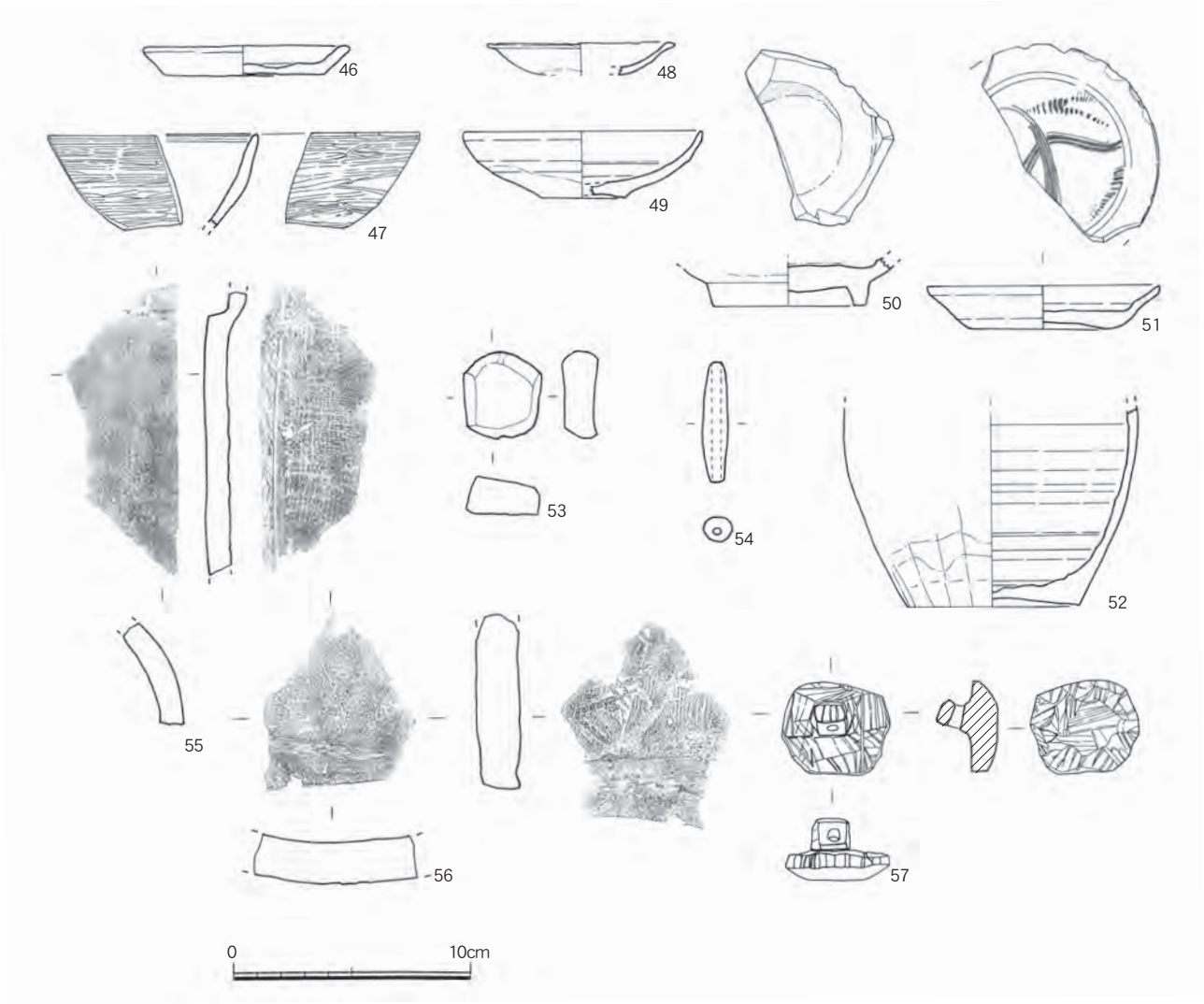


Fig.7　SE160006 出土遺物実測図（1/3）

（2）土坑（SK）

SK160010（Fig.6　Ph.38）　調査区東側③ -7 に位置し、北側は電気の埋設管で削平される。平面プランは円形を呈すると考えられ、深さは 35cm を測る。覆土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.8）　58 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、口径 9.8cm、器高 1.3cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。59 は土師器の丸底坏で、口径 15.0cm、器高 3.2cm を測り、底部に板状圧痕を有する。内外面ともに丁寧なナデを施す。胎土は精良で、色調は橙色から明橙色を呈する。60 は白磁碗Ⅳ類の底部片で、釉は体部下半までかかる。61 は施釉陶器の壺の口縁部片で、体部は樽型となる。黒色粒を含む灰褐色の胎土に黄褐釉がかかる。62 は砂岩製の台石で、上面は砥面としてよく使用され、器面は滑らかとなり、凹状に窪む。幅 2.0~3.0mm、深さ 0.5mm の溝が複数刻まれる。側面および下面は破面、もしくは自然面である。被熱のためか、一部黒色、赤色を呈する。他に鉄製品が出土する。土坑の時期は出土遺物から 11 世紀後半と考えられる。

SK160025（Fig.6　Ph.25）　調査区東側② -9 に位置し、北側は他の遺構に切られる。平面プランは方形を呈し、一辺 0.8m を測る。深さは約 20cm、褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.9　Ph.39）　63 は弥生土器の複合口縁壺の口縁部片で、頸部は内外面、刷毛目で調整され、口縁部外面は横方向のナデ、内面も横方向のナデを施すが、中位に指オサエの痕跡が残る。

Ph.38　③ -7-3 面 SK160010（南東から）

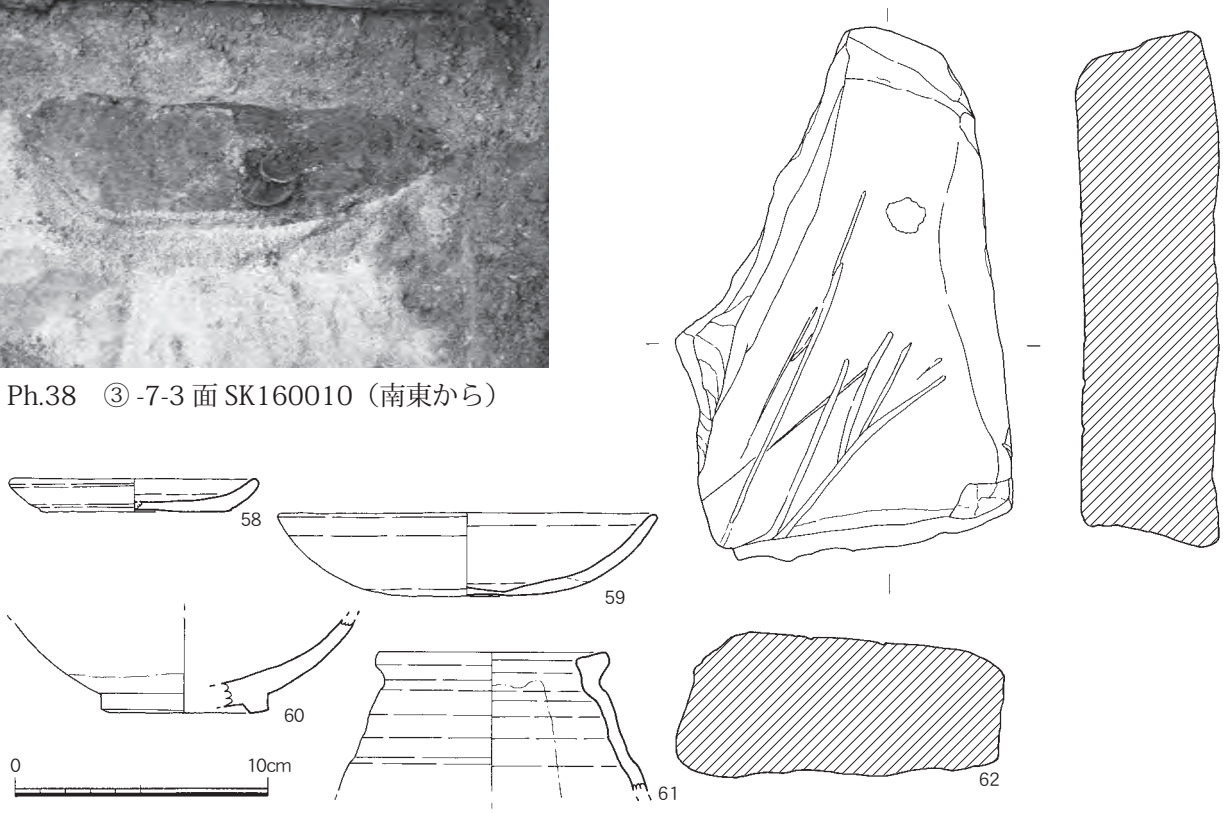


Fig.8　SK160010 出土遺物実測図（1/3）

外面に赤色顔料が付着する。土坑の時期は弥生時代後期と考えられる。

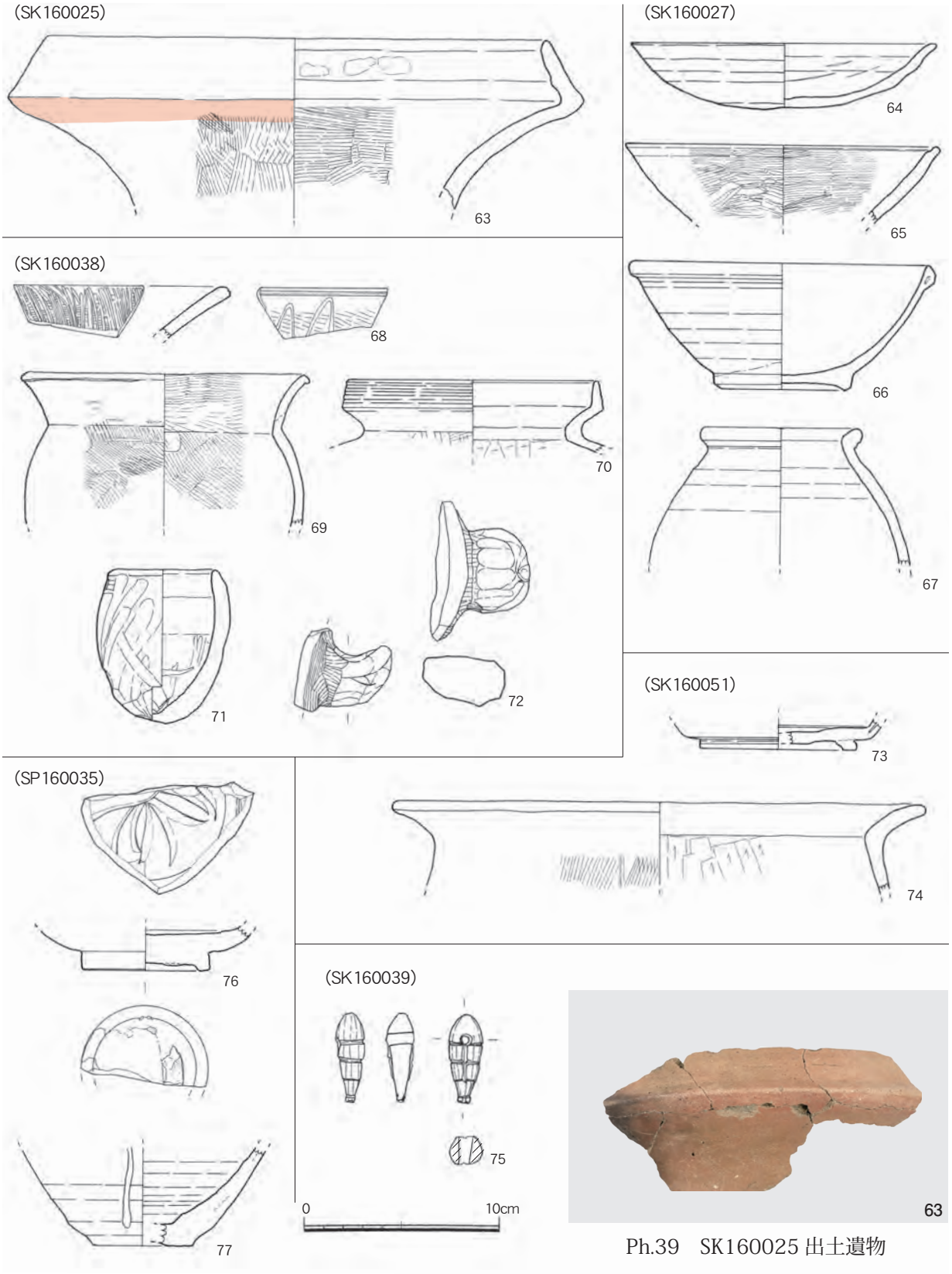
SK160027（Fig.6　Ph.25）　調査区東側①② -9・10 に位置し、北側は一部 SK160038 に切れ検出することができなかった。平面プランは歪な楕円形を呈し、東西方向は約 2.2m を測る。深さは 50cm であり、底面は平坦である。覆土は黒褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.9）　64 は丸底坏で、外底部に板状圧痕を有し、口径 15.7cm、器高 3.4cm を測る。65 は楠葉型の瓦器椀で、口縁内面の端部付近に浅く太い沈線をもつ。内外面ともに細く密な磨きを施す。外面口縁下には指オサエの痕跡が残る。66 は白磁碗Ⅳ類、67 は施釉陶器の無頸壺の口縁部片で、口縁は外に折り曲げて、丸く仕上げる。黒色粒、白色砂粒を含む灰色の胎土に濁緑色の釉がかかるが、熱を受け、釉飛びする。他に龍泉窯系青磁が出土し、土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

SK160038（Fig.6　Ph.22）　調査区東側①② -10・11 に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.8m、短径 1.1m である。深さは東側で 50cm、西側で 80cm を測り、底面は傾斜する。覆土は暗黄褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.9）　68 は弥生土器の土師器の坏部片で、内外面刷毛目で調整した後、ジグザグ状の暗文を施す。69 は土師器の甕で、内外面ともに細かい刷毛目で調整した後、口縁部外面は指オサエとナデで調整する。胎土に赤褐色粒、白色砂粒を含む。70 は吉備系土器の甕である。頸部から口縁は横方向のナデ、体部内面は箆削りを行う。71 は小型の蛸壺である。72 は土師器の鍋の把手で、体部内面には焦げが付着する。他に古代の須恵器の細片、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての弥生土器、土師器、鉄製品が出土する。

SK160039（Fig.6　Ph.22）　調査区東側① -8・9 に位置し、西側は電気の埋設管、北側は他の



Ph.39　SK160025 出土遺物

Fig.9　第 3 面遺構出土遺物実測図（1/3）

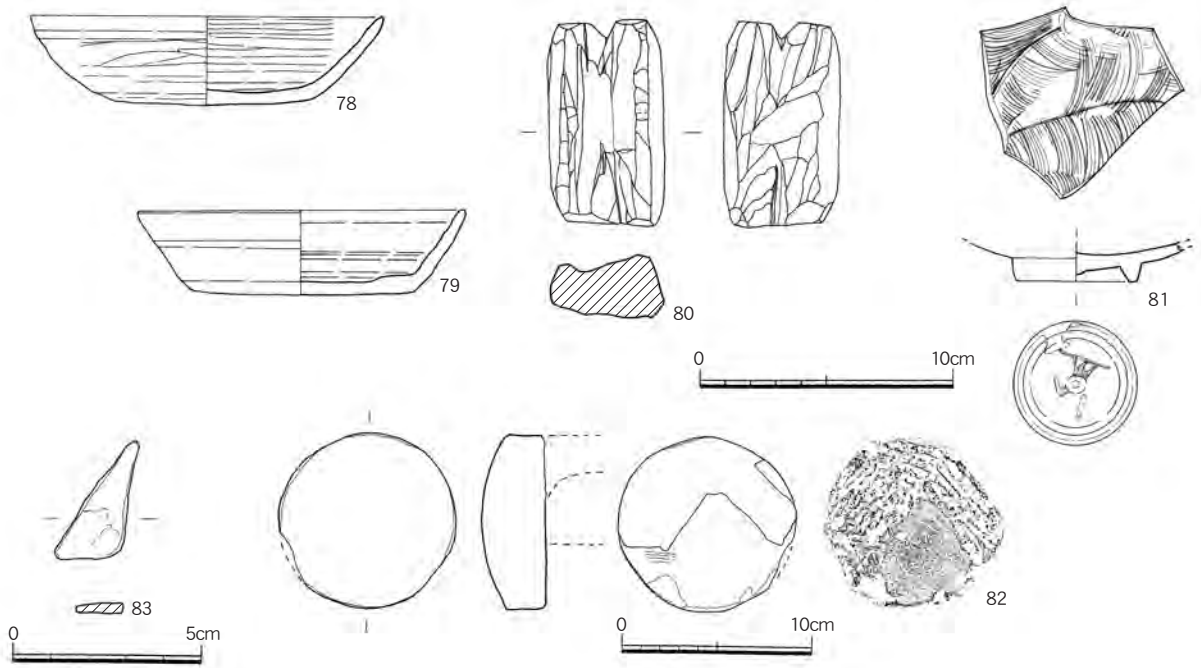


Fig.10　その他出土遺物実測図（1/3・1/2・1/4）

遺構で削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.2m 以上、短径約 1.2m、深さ約 30cm を測る。覆土は茶褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.9　Ph.40）　75 は滑石製の有孔石錘の完形品で、重さは 12.91g である。長さは 4.6cm、最大幅 1.7cm、最大厚 1.4cm を測る。穿孔は片面穿孔で、孔径は 0.5cm と 0.7cm である。穿孔の下に横方向の 2 条の沈線、縦方向にも穿孔から下端を通り、反対側の穿孔まで沈線を巡らせる。下位は幅 0.8cm で深さ 0.1cm ほど削っているため、縦方向の沈線はうかがえない。全面丁寧に研磨され仕上げられる。他に白磁 2 点、弥生時代終末から古墳時代前期の土器が出土する。

SK160051（Fig.6　Ph.30）　調査区西側⑦ -8 に位置し、南側は電気の埋設管に削平され、西側は信号機が位置し、掘削することができなかった。平面プランは隅丸方形を呈すると考えられる。深さは 10.0cm を測り、覆土は暗褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.9）　73 は須恵器の高台付坏で、外面はナデで調整する。74 は土師器の甕で、外面には煤が付着する。他に鉄製品が出土し、土坑の時期は 8 世紀と考えられる。

（3）ピット（SP）

SP160035（Fig.6　Ph.22）　調査区東側①② -10 に位置する。直径 20cm の円形を呈し、深さは 10cm を測る。覆土は黒褐色シルトである。

出土遺物（Fig.9）　76 は龍泉窯系青磁碗の底部片で、見込みに片彫で花文が描かれる。高台内には胎土目が残る。77 は無釉陶器の壺の底部片で、外面には縦方向の分割線が入る。胎土には一部溶解した黒色粒や砂粒が多く入り、内面は茶褐色、外面は暗紫色を呈する。

4）その他の出土遺物（Fig.10　Ph.40）

78 は 2~3 面の包含層出土の土師器の坏で、口径 14.0cm、底径 7.5cm、器高 3.5cm を測る。体部外面下半から底部は回転ヘラ削り、上半から内面は丁寧なナデの後、磨きを行う。胎土は精良で、赤

Ph.40　SK160039・その他出土遺物

褐色粒、白色砂粒を含み、色調は明橙色を呈する。79~82 は撹乱からの出土遺物である。79 は須恵器の坏で、口径 13.0cm、底径 8.8cm、器高 3.4cm を測る。外底部はヘラ切り未調整である。80 は石錘で、滑石製石鍋の転用品で、外面の煤が残る。上下端に紐を固定させるための抉りを入れる。重さは 149.94g を量る。81 は白磁の皿で、内面は櫛目による花文が描かれる。高台内には墨書が残る。82 は軒瓦の小巴である。いぶし瓦で、裏面には桟瓦と垂れに接合する箇所に粗い刷毛を施す。83 は SK160009 から出土した三角の形状をした鉄片である。

5）小結

16 区は 203 次調査において、東側の緩斜面に位置する。時間的制約を受け、1 日あたりの調査面積も狭小な立会調査であったため、遺構の全貌を把握することは難しかった。遺構は、調査区南側では埋設管により大きく削平を受け、東側の砂丘面では比較的良好な遺存状況であった。他の調査区同様、弥生時代後期から近世までの遺構を確認した。弥生時代終末から古墳時代前期にかけては、竪穴住居跡や土坑を検出し、SK160038 からは吉備系の搬入土器が出土している。古代では 8 世紀を中心とした竪穴住居跡と土坑を検出した。11 世紀後半から 12 世紀にかけての遺構が最も多く、井戸、土坑、ピットを検出している。

【博多遺跡群第 203 次調査の公報について】

博多遺跡群第 203 次調査は多くの公報関係者に新聞やテレビ等に取り上げていただき、調査の成果を市民に知っていただく機会を得た。また、受託者である交通局の協力のもと、平成 27 年 7 月 18 日に現地説明会を行った。歴史の重層性を現場を見学することで体感してもらい、アジア諸国との交流や当時の人々のものづくりの技術を出土遺物を通して感じてもらうことができた。

博多遺跡群第 203 次調査現地説明会資料　　平成 27 年 7 月 18 日

博多遺跡群を知ろう！

～地下鉄七隈線延伸工事の発掘調査～

1.「博多遺跡群」ってどんな遺跡なの？

博多遺跡群は、博多湾岸に沿って形成された砂丘上に立地しています。遺跡の範囲は、大博通りをほぼ中心として、東側は御笠川、西側は博多川、北側は大博町・祥屋町、南側は博多駅前一・二丁目あたりまでで、その規模は東西約 800m、南北約 1600m です(図１)。

博多遺跡群の発見は今から約 40 年前の昭和 52 年にさかのぼり、その時も今回同様に市営地下鉄の建設工事に先立つ発掘調査が行われました。その調査では、中国産や朝鮮半島産の陶磁器が数多く出土し、博多が中世の国際貿易都市であったことが広く知られるきっかけとなりました。これまでの発掘調査件数はすでに 200 件を超え、古くは弥生時代に始まり、平安時代から室町時代にかけて国内有数の対外貿易拠点であったことが判明しています。その後も戦乱を乗り越えながら近世以降も商業都市として発展し続けています。

なお、今回の発掘調査は、地下鉄七隈線延伸工事箇所の中間駅(仮称)部分を対象とした 203 次調査で、遺跡群の南西端に位置しています。

図１）今から約 700 年前の博多(福岡市博物館作成)

：第 203 次調査区

2. この発掘調査でどんなことがわかったの？

今回の発掘調査では、今から約 2000 年前の弥生時代から人々が生活していたことが明らかとなりました。主な成果を古い時代から順に紹介します。

弥生時代
(約 2000 年前)

今回の調査でみつかった最も古い時代の遺構です。地下約２ｍの砂丘上で甕棺墓や壺棺墓など 10 数基からなる墓地を発見しました。使われた棺の大きさから大人と子どもが葬られていたことがわかります。また、弥生人の骨や歯が残っているものもあり、性別やおおよその年齢などを推定することもできます(写真１･２)。

写真１）大人用の甕棺墓

写真２）砂丘の上につくられた墓地

古墳時代
(約 1600 年前)

古墳時代では、竪穴住居（写真３)からなるムラのあとを確認しました。住居は一辺４ｍ以上を測る方形の形態です。調査区が狭く全体が現れてはいませんが、４本の柱で屋根を支え、中央には屋内炉があったと推測できます。また、出土遺物の中には畿内(近畿地方)、山陰地方等の土器があり、他地域との交流が行われていたことがうかがえます。このほかに道具も出土しており、付近に古墳が存在する可能性があります。

写真３）竪穴住居

奈良時代
(約 1300 年前)

井戸(写真４)やゴミ穴、柱穴などを確認しました。今回の調査区から北東側約 300m では、約 100m 四方の溝で囲まれた区画や掘立柱建物が発掘され、役人がいた施設や居宅があったことが推定されています。今回の調査では役人の帯を飾る青銅製の金具が出土しています。また少量ですが、長門や陶質(山口県)で生産された緑釉陶器や中国産の越州窯系青磁が出土しており、今回の調査区でも同様の役人にかかわる施設があったことがうかがえます。

写真４）　井　戸

平安時代
(約 1000 年前)

平安時代のおわり頃には、井戸やゴミ穴、柱穴が急増します。これは博多遺跡群全体での様相と同様です。出土品には、中国産の白磁の碗、皿、四耳壺や施釉陶器の盤、壺のほか、国産の土師器(素焼き)の坏・皿、瓦器椀などが多数あり、まとまって捨てられているもの(写真５)が多く見られます。この時期は、外交との窓口であった鴻臚館が衰退し、対外貿易の拠点が博多に移った頃です。その後は中国商人も在住し、その財力を背景に発展を続け、中世日本最大の貿易都市「博多」が誕生します。なお、朝鮮半島産の高麗陶器も出土しています。

また、今回の調査では、ガラス製の玉や容器等とともに坩堝(ガラスの原料を加熱して液体の状態にする器)が出土しており、付近にガラス工房があったと考えられます。商人だけではなく、手工業に従事する職人も住む都市であったことがわかります。

写真５）平安時代のゴミ穴

鎌倉時代～戦国時代
(約 400～700 年前)

鎌倉時代の終わり頃と推定される直径約５ｍの大きな窪みから多数の土師器坏・皿とともに白磁や龍泉窯系青磁、施釉陶器、青銅製品、銅銭、鉄釘、碁石、ガラス製小玉、イルカの背骨等の獣骨が出土しました(写真６)。中世の儀礼や宴会に使われた土師器は使い捨てされることが多く、鎌倉幕府がこの博多に鎮西探題を設置した頃、盛んに行われた宴の跡ではないかと推測されます。その後、この周辺は元弘３年(1333 年)の鎮西探題襲撃の際の火災によって大きな被害を受け、16 世紀後半の戦国時代末まで畑地となっていたようで、それを裏付けるように、この時期の遺構や遺物はほとんど見ることができません。

写真６）鎌倉時代の廃棄土坑

3. どんなモノが発見されたの？

これまでの調査で出土した遺物には、先に紹介したように数多くのものがあります。その種類は食器、道具、工具、装飾品、食べかすなどがあり、その素材も土製や石製、金属製など時代や用途によりさまざまです。本日、事務所で出土品を見学できますので、ぜひご覧ください。

その他これまでに記さなかったものを紹介します。

翼形石器
(縄文時代早期
約１万年前)

青銅製の鐸(平安時代)
・羊神の鐘

墨書陶器
(平安時代)

・人名や数字、花押を高台内に墨で書いています。所有者や数量を示すものと考えられます。

小型素文鏡(古墳時代)
・直径 2.1cm と極小

博多遺跡群第 203 次調査
現地説明会資料
発行日　平成 27 年 7 月 18 日
発　行　福岡市経済観光文化局
埋蔵文化財調査課

18. 17 区の調査

1）概要（Ph.1~10）

17 区は、東工区の南西端に位置し、29 区が西隣に接する。調査面積は 24.24㎡である。欠損防護壁を設置する箇所で、発掘調査が必要であるが、交通規制をかけることができる場所ではなかったため、立会調査とした。16 区同様、覆工板を開け、1 日で、地山面まで調査を終えることを繰り返した。重機により第 1 面まで掘削後、遺構検出を行い、上端のみ図面にスケッチした。その後、できる限り遺構を掘削し、写真撮影を行い、深さと土色を記録した。遺構を掘削後、周囲の包含層を掘削し、遺物を採集した。なお、排土はその都度、トラックで搬出した。

調査は、2017 年 2 月 21 日から 2017 年 2 月 24 日まで行った。調査区の中央には東西方向に電力管、南北方向に下水道管（Ph.2）が埋設され、大きく削平されていた。また、南側は旧電力管、水道管、下水道管、通信管も埋設され（Ph.4・6）、第 3 面で、土坑を 1 基検出しただけであった。また、北側も第 1 面は大きく撹乱されており、ピットを 1 基検出したに留まる（Fig.1　Ph.3）。第 1 面は現道路面から約 0.8m 下で、標高約 3.5m（Fig.1　Ph.3・4）、第 2 面は標高約 3.3m（Fig.2　Ph.5・6・10）、第 3 面は地山の砂丘面で標高 3.0m を測る（Fig.3　Ph.7~9）。

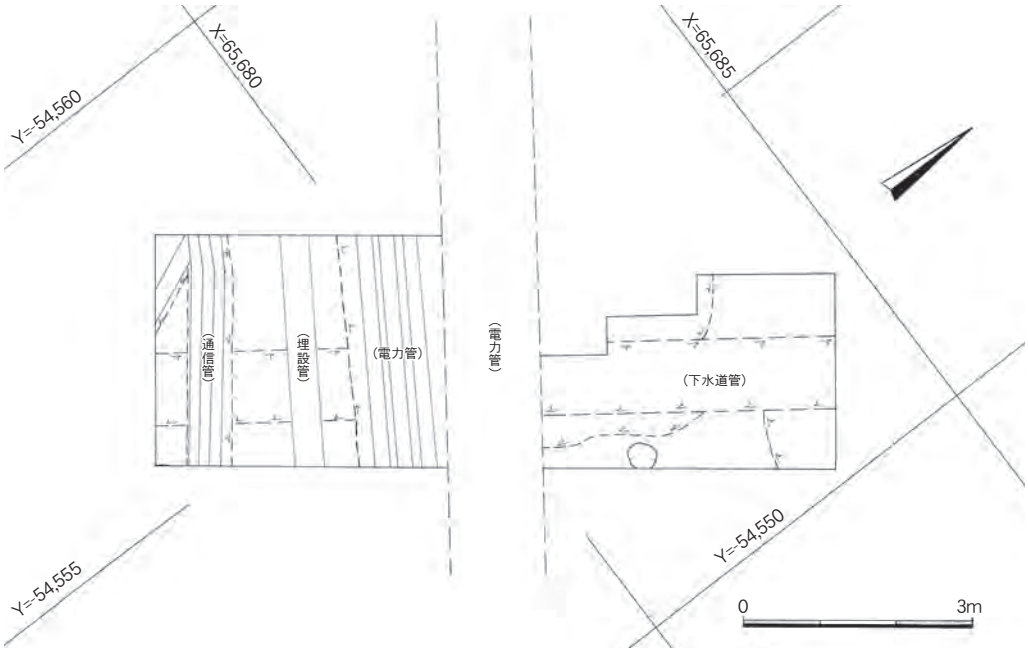
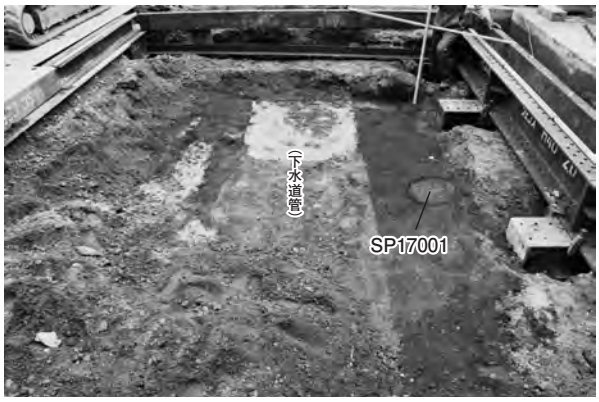


Fig.1　第 1 面全体図（1/100）

Ph.1　17 区遠景

Ph.2　南端下水道・電力管撹乱状況（南西から）

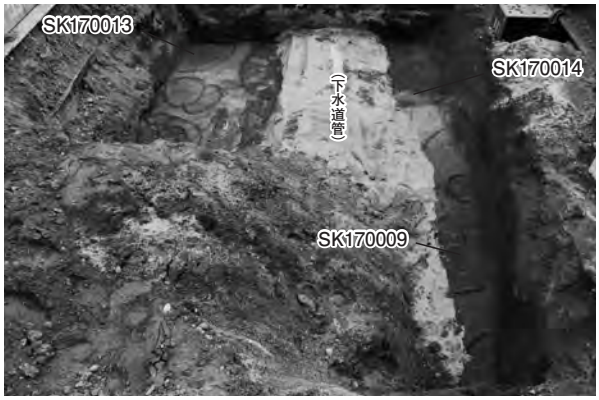


Ph.3　北側 1 面（南西から）

Ph.4　南側 1 面通信管撹乱（南東から）

Ph.5　北側 2 面（南西から）

Ph.6　南側 2 面下水・通信・電力管撹乱状況（南西から）



Ph.7　北側 3 面（南西から）

Ph.8　南側 3 面（南西から）

Ph.9　北側 3 面（南東から）

Ph.10　北側 2 面（南西から）

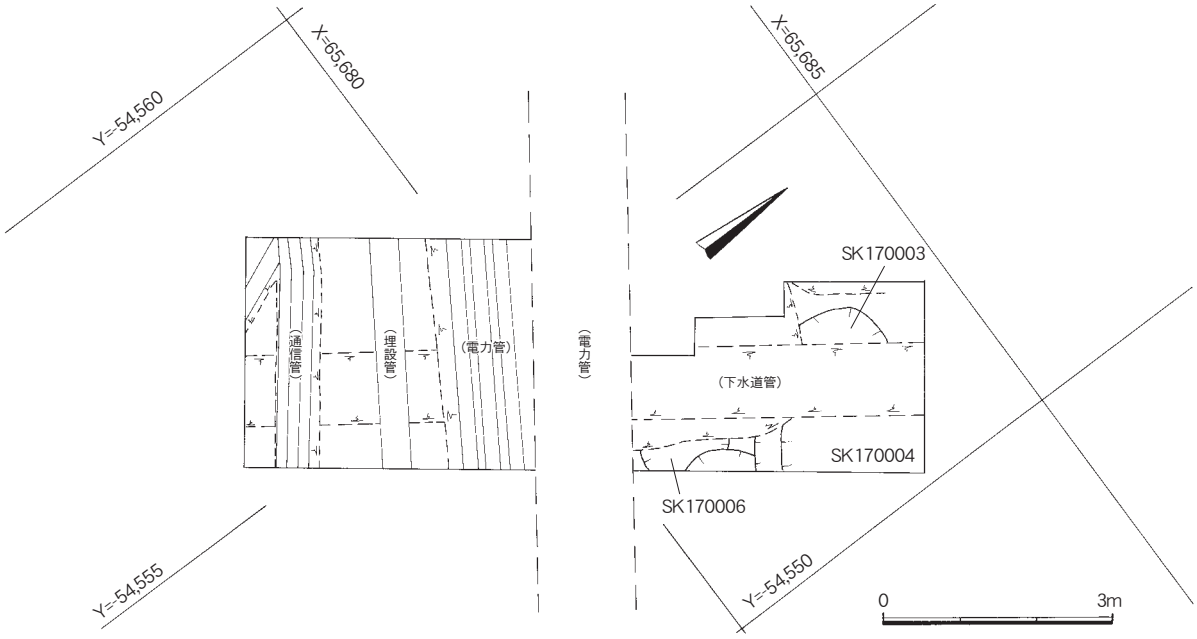


Fig.2　第 2 面全体図（1/100）

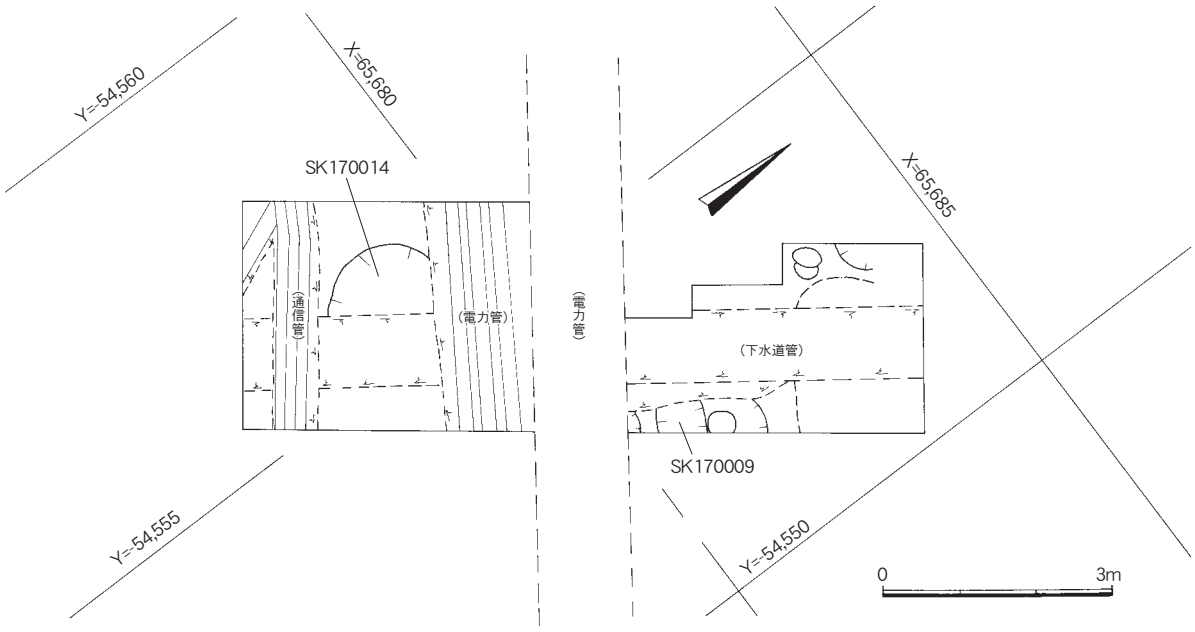


Fig.3　第 3 面全体図（1/100）

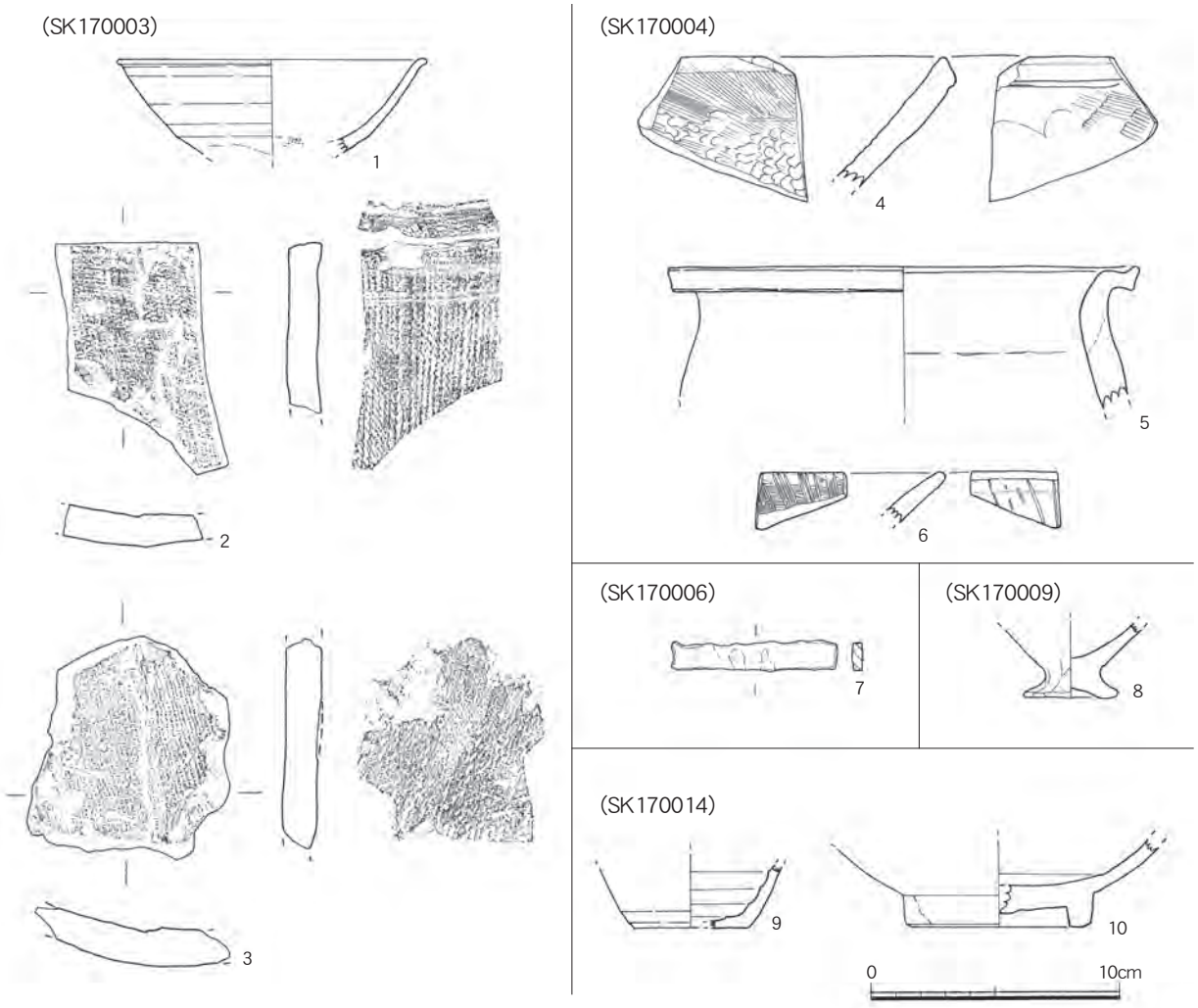


Fig.4　SK 出土遺物実測図（1/3）

検出した遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭の土坑３基、ピット１基、11 世紀後半から 12 世紀の土坑４基、ピットである。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶器のほか、滑石製石鍋、鉄器、銅銭、ガラス製造関連遺物、鉄滓がコンテナケース２箱分出土する。

2）第２面の調査（Fig.2　Ph.5・6・10）

第２面は現道路面から約 1.0m 下の暗茶褐色砂質土の上面で検出し、標高は 3.3m を測る。検出した主な遺構は弥生時代終末から古墳時代の土坑１基、11 世紀後半から 12 世紀前半の土坑３基である。

（1）土坑（SK）

SK170003（Fig.2　Ph.5・10）　調査区北側に位置し、東側を下水道管に削平される。平面プランは円形を呈すると思われ、深さは 60cm を測る。覆土は暗灰褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.4）　１は白磁の小碗で、口縁は外反し、端部は丸く仕上げる。灰白色の胎土に灰色の釉が体部外面下半までかかる。２・３は須恵質の平瓦で、凸面は縄目の叩きの後、部分的にナデを行い、凹面は細かい布目が残る。２の側面は工具によるナデで調整する。他に回転糸切り底の土師器、瓦器、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、滑石製石鍋の小片が出土し、土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

SK170004（Fig.2　Ph.5・10）　調査区北側に位置し、東側は調査区外へ延び、西側を下水道管

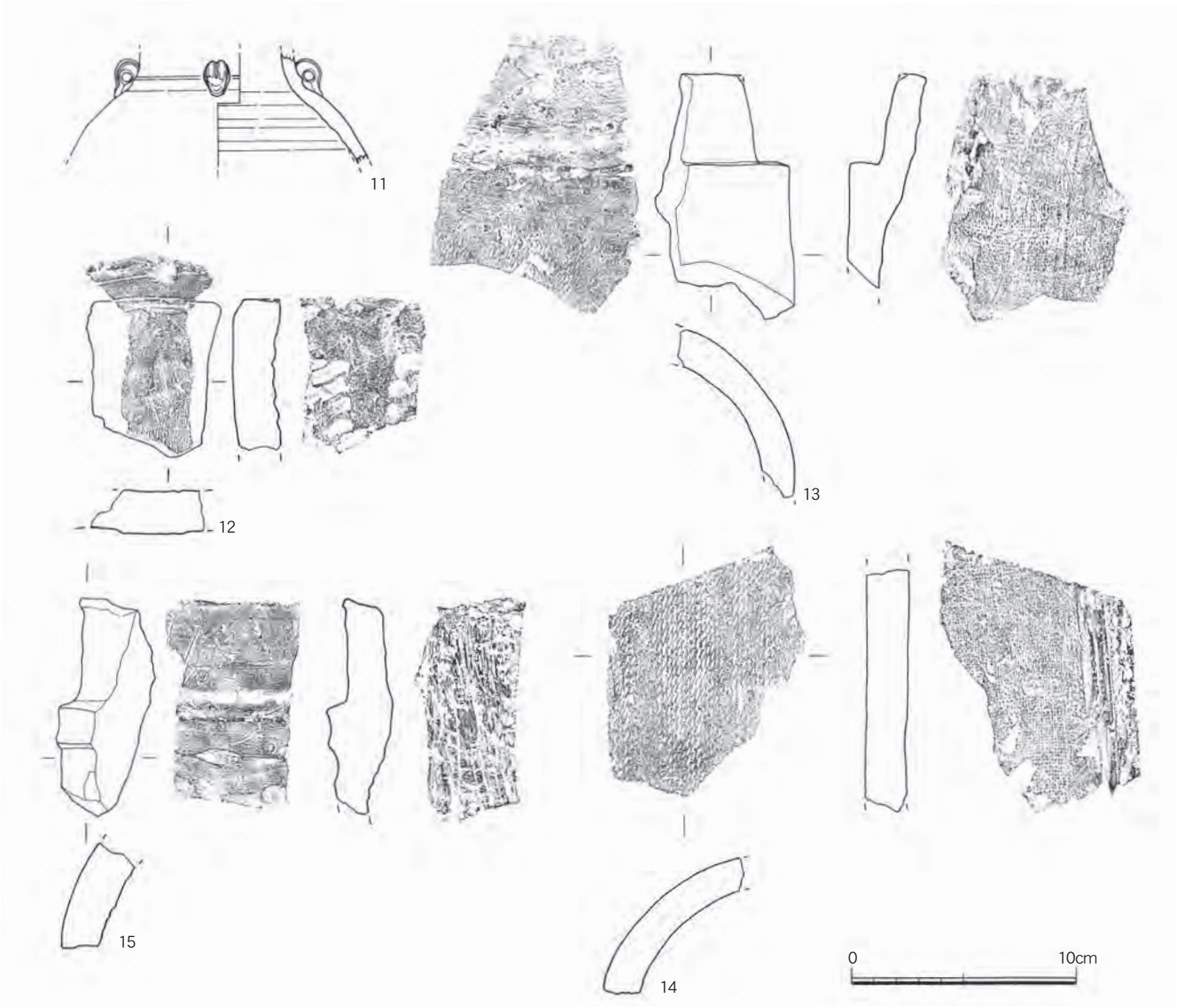


Fig.5　1~2 面包含層出土遺物実測図（1/3）

に削平される。深さは 95cm を測る。覆土は暗灰褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.4）　4 は瓦質土器の鉢で、外面上半は刷毛目、下半は指ナデで調整する。内面は刷毛目を施すが、使用の痕跡か、下半の磨滅が著しく、器面は荒れる。5 は無釉陶器の口縁部片で、砂粒を多量に含む暗橙色の胎土に自然釉がかかる。6 は下層の遺物の混入で、弥生土器の高坏である。外面はナデ、内面は刷毛目で調整後、ジグザグ状の暗文を施す。他に回転糸切り底の土師器、瓦器、白磁Ⅴ類、龍泉窯系青磁、ガラス坩堝が出土し、土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

SK170006（Fig.2　Ph.5）　調査区北側に位置し、東側は調査区外へ延び、西側を下水道管に削平される。平面プランは円形を呈すると思われ、直径約 1.1m を測る。深さは 20cm で、覆土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.4）　7 は板状の鉄片である。長さ 6.5cm、幅 1.0cm、厚さ 0.3cm を測る。他に土師器、白磁、施釉陶器の細片が出土する。土坑の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

3）第 3 面の調査（Fig.6　Ph.7~9）

第 3 面は現道路面から 1.3m 下の黄褐色砂の砂丘面で、標高は 3.0m を測る。検出した主な遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭の土坑 3 基、ピット 1 基、11 世紀後半から 12 世紀前半の土坑 1 基、ピット 1 基である。

（1）土坑（SK）

SK170009（Fig.3　Ph.7・9）　調査区北側に位置し、東側は調査区外へ延び、西側は下水道管に削平される。平面プランは円形を呈し、直径は約 0.65m、深さは 10cm を測る。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.4）　8 は製塩土器の脚部片である。直径約 3.6cm を測る円形の脚部に深鉢が付く。内面はナデで仕上げ、外面は指オサエの痕跡が残る。また、内面はやや黒色化する。他は弥生土器、土師器が出土し、土坑の時期は古墳時代初頭と考えられる。

SK170014（Fig.3　Ph.8）　調査区南側に位置し、北側は電力管、東側は下水道管に切られる。平面プランは円形を呈する。深さは約 50cm、暗褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.9）　9 は回転糸切り底の土師器の小壺である。内面は強い回転ナデで、器面が凸凹状となる。色調は明褐色を呈する。10 は白磁碗Ⅳ類の底部片である。土坑の時期は出土遺物より 12 世紀前半と考えられる。

4）その他の出土遺物（Fig.10）

11~15 は 1~2 面の包含層から出土した遺物である。11 は越州窯系青磁の壺の頸部片である。良質な胎土に黄緑色の釉がかかる。12 は須恵質の平瓦、13~15 は須恵質の平瓦である。凸面は 12 が格子目、13・14 は縄目叩き、15 は強い横方向のナデが施される。

5）小結

17 区は埋設管が多数敷設され、遺構は大きく削平を受けていた。検出した遺構は、弥生時代終末から中世前期、12 世紀中頃までの土坑、ピットである。出土遺物も他の調査区と同様、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての弥生土器や土師器、11 世紀後半から 12 世紀中頃にかけての土師器、瓦器、輸入陶磁器が出土する。17 区では、古墳時代前期の土坑（SK170009) から脚部のみであるが、製塩土器が出土しており、付近で塩づくりが行われていたこがうかがえる。九州で本格的に塩づくりが始まったのは、弥生時代終末から古墳時代初頭といわれており、203 次調査区でもいち早くこの技術を取り入れたといえる。

Ph.11　17 区調査前（北東から）

Ph.12　覆工板撤去状況（北西から）

19. 18 区の調査

1）概要（Ph.1~12）

18 区は、東工区西側に位置する。発掘調査を行った 4~6 区、9~10 区までの間で、先行して立会調査を行った 27~29 区を除く地点である。調査面積約 211.30㎡である。ここは、はかた駅前通りと北西側の瓦町通りが交差する箇所で、昼間の調査が行えなかったため、夜間の立会調査となった（Ph.1・2）。調査方法は前述の 16・17 区同様、覆工板の設置後、2~3 枚の覆工板を開け、その日のうちに調査を終了させ、覆工板を元に戻すものであった。周囲の調査で得た遺構面を参考とし、3 面の調査を行った。投光器の灯りで、時間の制約もあり、通常の調査はできなかった。第 1 面まで、重機による掘削を行い、遺構検出、写真撮影後、上端のみ図面にスケッチし、可能な限り遺構掘削を行った。遺構の深さと覆土を記録し、遺物を遺構ごとに取り上げた。その後、第 2 面までの包含層を人力と重機で掘削し、遺物採集した後、第 2 面、第 3 面の調査を繰り返した。ただし、狭い箇所での遺構確認であったこと、夜間の調査であったこと等から、別の日に行った覆工板の調査で、隣接する遺構の続きを確認できなかったり、新たに確認したりと、遺構の検出ラインに齟齬が生じている。また、住居跡等の大型の遺構の確認も難しく、深い遺構も完掘できなかった。

調査は、2017 年 2 月 28 日から 2017 年 3 月 16 日と 2017 年 4 月 20 日（⑪⑫ -11~13）に行った。第 1 面は現道路面から約 1.0m 下で西側が標高 4.3m、東側が 3.8m に設定した。埋設管等による削平が著しく、調査区西端には電力管が南北方向に（Ph.13・14）、北側では古い水道管が東西方向に（Ph.15・16・20）、南端には古い電力管が東西方向に敷設される。電力管は地山面まで達していたが、それ以外の埋設管や撹乱は第 2 面まで達しておらず、第 2 面・第 3 面は比較的良好な遺構の遺存状況であった。第 3 面の砂丘面は標高 3.4m を測り、西側から東側に向かって徐々に傾斜する。

調査区は覆工板を基準として、東から西に⑧から⑮、南から北へ 1 から 19 と付け、その組み合わせによるグリッド表記を用い、遺構の位置等を示す（Fig1・6・15）。

検出した主な遺構は弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴住居跡 3 基、11 世紀後半の溝 1 条、11 世紀後半 ~12 世紀の井戸 6 基、各時代の土坑、ピットである。包含層として掘削した箇所から、完形の遺物が出土したことから、遺構として確認できなかったものも多いと考えられる。他の調査区と同様、弥生時代終末から中世にかけて多くの遺物がコンテナケース 22 箱分出土する。

2）第 1 面の調査（Fig.1　Ph.3~20）

Ph.1　⑫ -1~4 調査区遠景（南東から）

Ph.2　⑩ -8~11 掘削状況（南東から）

第 1 面は暗褐色土の上面で検出し、現道路面から約 1.0m 下で、標高は西側が 4.3m、東側が 3.8m を測る。前述のとおり、北側、西端、南端に埋設管が敷設され、それ以外も近現代の撹乱（Ph.3・4）で削平される。なお、⑨ -8~10 は信号機があり、この部分は掘削することができなかった。検出した主な遺構は古代の土坑 1 基、ピット、11 世紀後半から 12 世紀前半の井戸 3 基、土坑 6 基、ピットである。

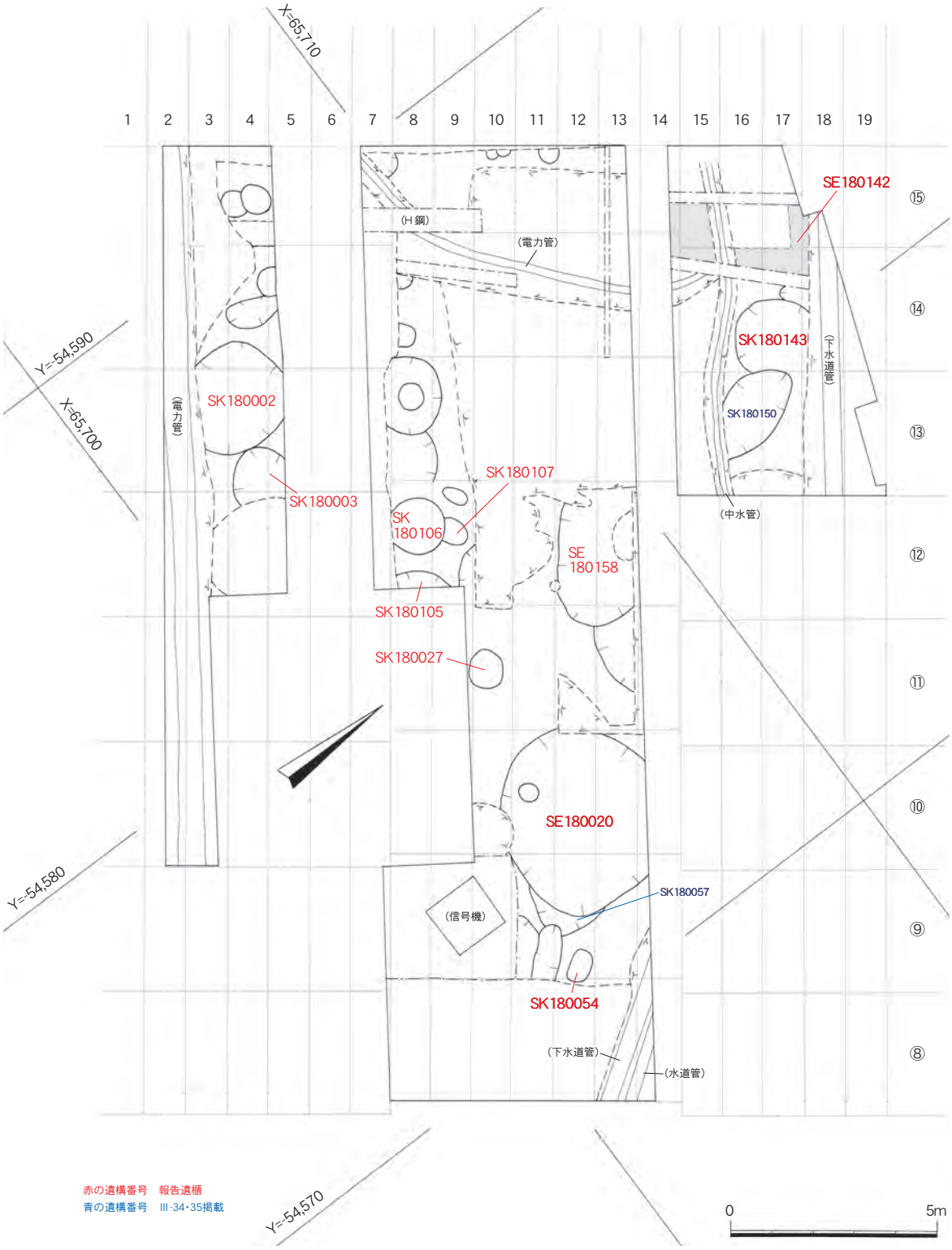
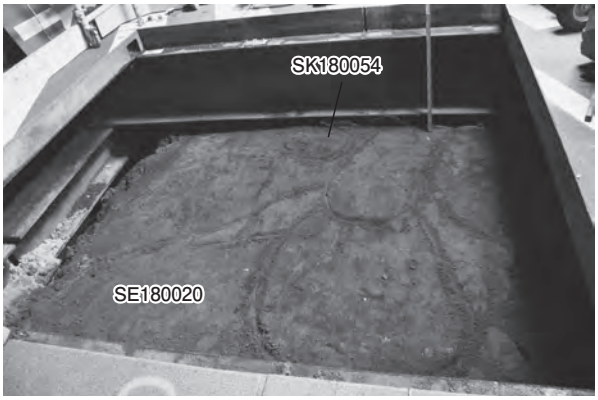


Fig.1　第 1 面全体図（1/150）

Ph.3　⑧ -8~11-1 面撹乱（南西から）

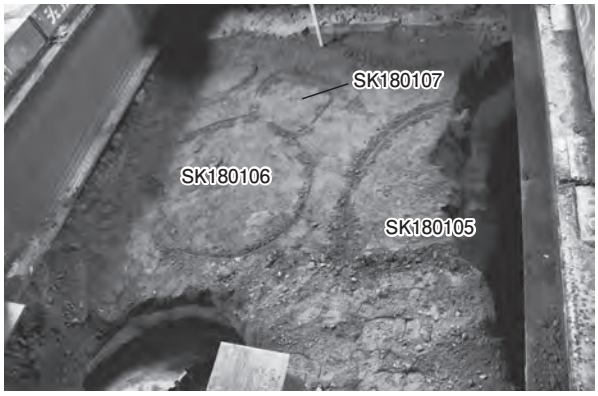
Ph.4　⑧ -12・13-1 面撹乱（南西から）



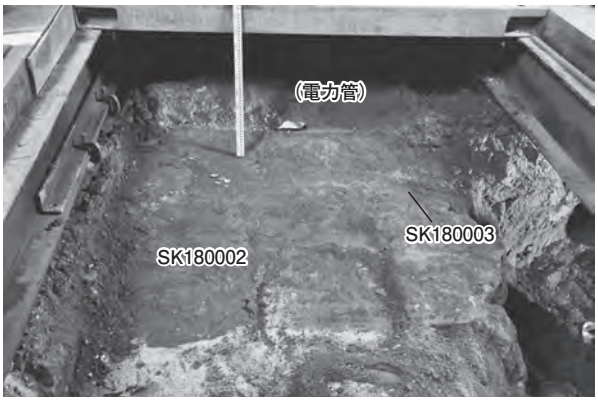
Ph.5　⑨ -11~13-1 面（北西から）

Ph.6　⑩ -8~11-1 面（南西から）

Ph.7　⑪ -8~11-1 面（南西から）



Ph.8　⑫ -7~9-1 面（南西から）



Ph.9　⑬ -1~4-1 面（南西から）

Ph.10　⑬ -7~8-1 面（南西から）

Ph.11　⑬ -15~17-1 面（北東から）

Ph.12　⑭ -3~5-1 面（南西から）

Ph.13　⑭ -8~10-1 面（北西から）

Ph.14　⑭ -11~13-1 面（南西から）

Ph.15　⑭ -15~17-1 面（南西から）

Ph.16　⑭ -18-1 面（南西から）

Ph.17　⑮ -2~4-1 面（南西から）

Ph.18　⑮ -6~8-1 面（南西から）

Ph.19　⑮ -10~13-1 面（南西から）

Ph.20　⑮ -15~17-1 面（南西から）

（1）井戸（SE）

SE180020（Fig.1　Ph.5・6・21・31・32・60）　調査区東側⑨⑩ -10~13 に位置する。北側の 28 区では撹乱されていた。掘方の平面プランは直径約 4.0~4.6m を測る略円形で、遺構面から深さ 2.6m まで掘削をしたが、それ以上の掘削は危険なため行わなかった。井戸と思われるが、井側となる木質等の確認もできていない。覆土は灰黒色粘質土、黄褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.2）　1~4 は土師器である。1 は回転ヘラ切り底の小皿で、口縁をわずかに打ち欠くが、ほぼ完形品である。口径 9.0cm、器高 1.7cm を測る。2 は回転糸切り底の小皿で、こちらも口縁をわずかに欠くが、ほぼ完形で、口径 9.1cm、器高 1.1cm を測る。3・4 は回転糸切り底の坏で、復元口径 12.4cm、15.6cm を測る。すべて外底部に板状圧痕を有する。5 は瓦器椀で、内外面ともに丁寧な研磨を施す。6 は白磁の小壺で、底部を欠損する。白色の胎土に透明釉が内外面ともに下半までかかる。7 は青白磁の紅皿の蓋で、外面には花文を施す。8 は龍泉窯系青磁の皿Ⅰ -2c 類の底部片である。9 は無釉陶器の瓶で、胎土に径 5.0mm の黒色粒を多量に含み、色調は灰褐色を呈する。10 は施釉陶器の瓶で、精良なにぶい赤褐色の胎土に黄灰色釉がかかる。11 は施釉陶器の盤で、内面に鉄絵を描く。12 は瓦質土器の火鉢で、内面は煤が付着し、器面は磨滅する。外面は回転ナデで調整され、暗文が施される。13 は下層の遺物の混入で、土師器の甕の口縁部である。体部外面はタタキが残り、口縁下には赤色顔料が付着する。他に白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、同安窯系青磁、滑石製石鍋、鉄器、金属坩堝（Ⅲ -34 Fig.3-51）、大量のガラス坩堝（Ⅲ -34 Fig.30-614）、珪石、石英が出土し、井戸の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

SE180142（Fig.1　Ph.20・22）　調査区西端⑭⑮ -16・17 に位置する。北側は下水道管、南側は中水管、東側と西側は電力管に撹乱され、平面プランを確認することはできなかった。覆土は茶褐色粘質土、灰褐色粘質土を主体とし、深さ 160cm まで確認したが、既設の埋設管があるため、それ以上は掘削できなかった。深さ、覆土から井戸と思われる。

出土遺物（Fig.2）　14 は同安窯系青磁碗Ⅰ -1b 類で、灰白色の胎土に青味を帯びた灰白色の釉がかかる。15 は龍泉窯系青磁の壺の口縁部片で、口縁端部は露胎である。頸部に細い沈線を巡らせる。他に白磁Ⅳ・Ⅴ類、凸面が縄目タタキの須恵質の平瓦、ガラス坩堝等が出土する。井戸の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

SE180158（Fig.1）　調査区東側⑪⑫ -12・13 に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 3.5m 以上、短径 3.0m と考えられる。深さ 160cm まで掘削したが、遺構はまだ下に続く。この段階では、井側等は検出できず、木質等も出土しなかった。

出土遺物（Fig.3）　16 は防長産の緑釉陶器の底部片で、淡橙色の軟質な胎土に淡緑色の釉がか

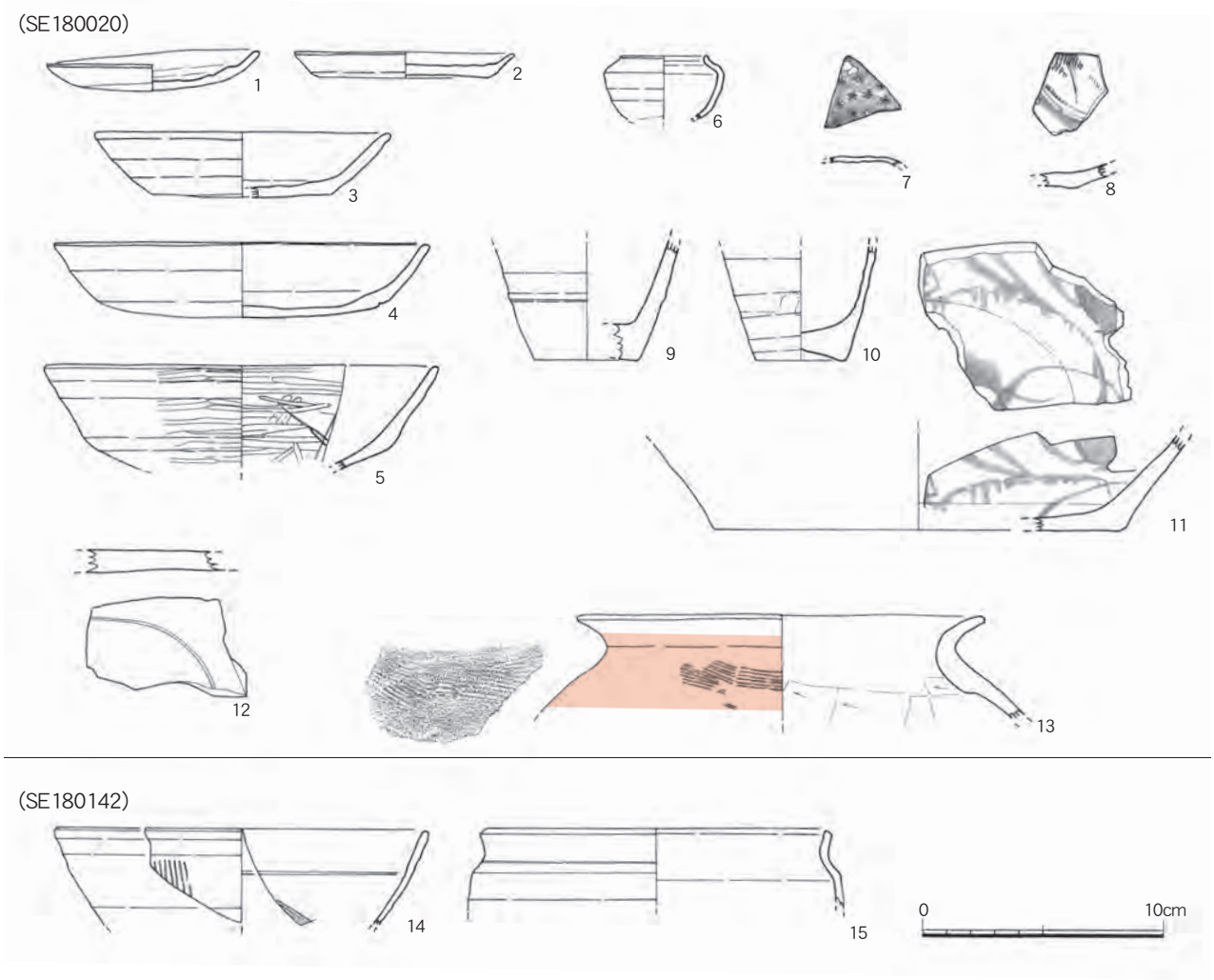
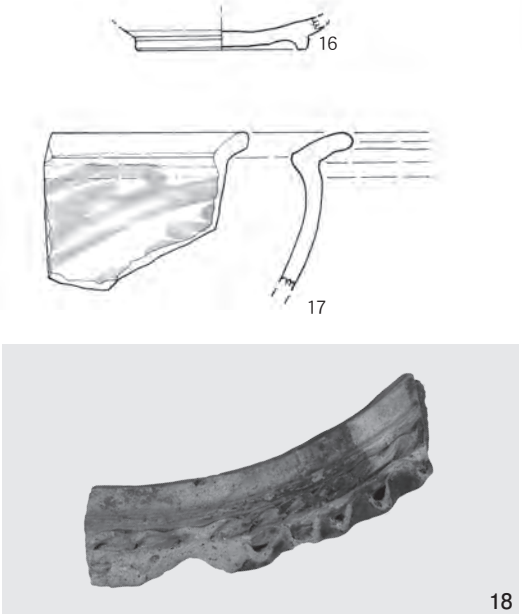


Fig.2　SE180020・180142 出土遺物実測図（1/3）

Ph.21　SE180020 土層（北西から）

Ph.22　SE180142 土層（南東から）

かる。火を受けたためか、破面を含め、黒色化する。17 は施釉陶器の盤で、内面には鉄絵を描く。18 は押圧波状文の軒平瓦で、3 重の重弧文を作り出し、中央の弧文をヘラ状工具を用いて押圧し、波状とする。下端も波状に押圧を加える。平瓦部分の凸面は粗い横方向のナデ､凹面もナデを施すが、部分的に布目が残る。瓦質で、灰黒色を呈する。火を受けており、煤が付着する。他に回転ヘラ切りおよび糸切り底の土師器、瓦器、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類、凸面縄目タタキを施す丸瓦、滑石製石鍋、ガラス坩堝、石英、炉壁等が出土する。井戸の時期は 12 世紀前半と考えられる。



Ph.23　SE180158 出土遺物

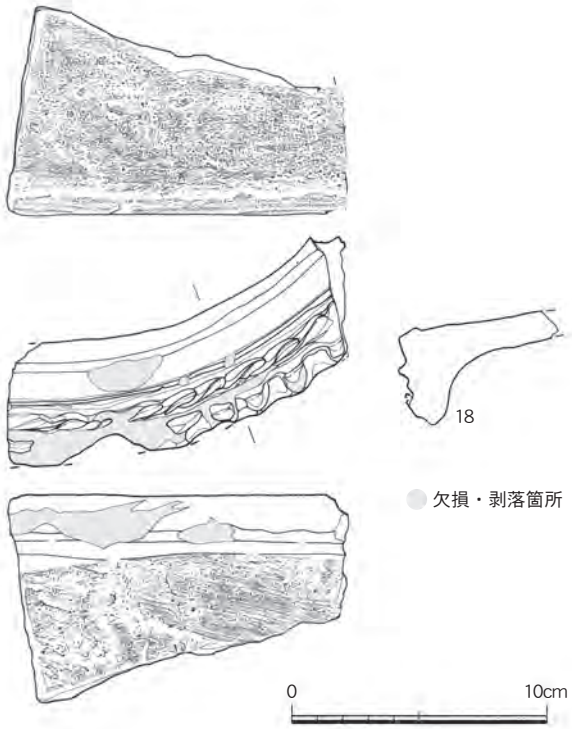


Fig.3　SE180158 出土遺物実測図（1/3）

（2）土坑（SK）

SK180002（Fig.1　Ph.9・12・24・25・65）　調査区西側⑬⑭ -3~5 に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長辺 2.7m、短辺 2.4m、深さ 1.4m を測る。覆土は灰黒色粘質土で、焼土を多量に含む。

出土遺物（Fig.4）　19 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、口縁をわずかに欠くが、ほぼ完形で、口径 9.3cm、器高 1.8cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。20 は須恵質土器の椀で、外底部に回転糸切りの痕跡が残る。内面見込み内は研磨されており、器面は滑らかである。また、窪みには、赤色顔料が付着しており（Ⅲ -34 参照）、顔料の擦り潰しに使用されたと思われる。21 は白磁皿Ⅰ -1a 類、22 は白磁碗Ⅴ類である。23 は施釉陶器の壺の底部片で、胎土に溶解した黒色粒を含む灰黒色の胎土に濁緑色の釉がかかる。内外面に焼き膨れがみられる。24 は施釉陶器の盤で、内面に鉄絵を描く。25 は滑石製石鍋の小片で、外面に煤が付着する。他に越州窯系青磁が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

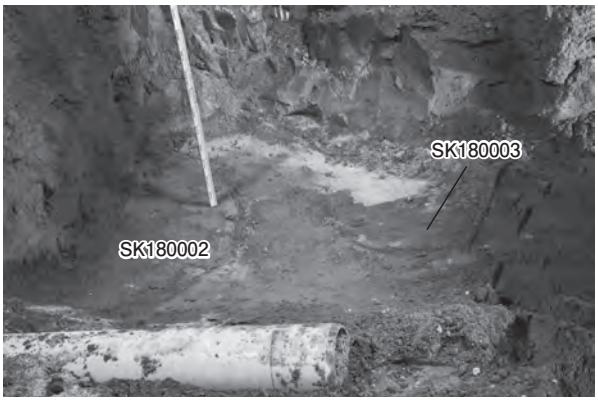
SK180003（Fig.1　Ph.9・24・65）　調査区西側⑫⑬ -4・5 に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 1.5m を測る。深さは 1.1m で、覆土は灰黒色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.4）　26 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。27 は瓦器椀の口縁部片で、内外面ともに太く粗い磨きを行う。外面下半は磨滅し、器面が凹状を呈する。28 は白磁碗Ⅷ -2 類である。29 は土師質の平瓦で、厚さ 2.0cm を測る。凸面は縄目、凹面は布目が残り、側面は工具によるナデを施す。30 は大型の滑石製石鍋で、外面に煤が付着する。出土遺物から土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

SK180027（Fig.1　Ph.7）　調査区中央⑪ -9・10 に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 0.9m、深さ 0.2m を測る。覆土は灰黒色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.5）　31 は白磁碗の底部片で、高台内に「綱丁」の墨書が残る。他に回転ヘラ切り底の土師器、黒色土器 A 類、瓦器、白磁碗Ⅳ類が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

SK180054（Fig.1　Ph.5）　調査区中央⑨ -12 に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 0.9m、短径 0.5m、深さ 1.0m を測る。覆土は黒色粘質土を主体とする。



Ph.24　SK180002・180003（南西から）

Ph.25　SK180002 土層（南西から）

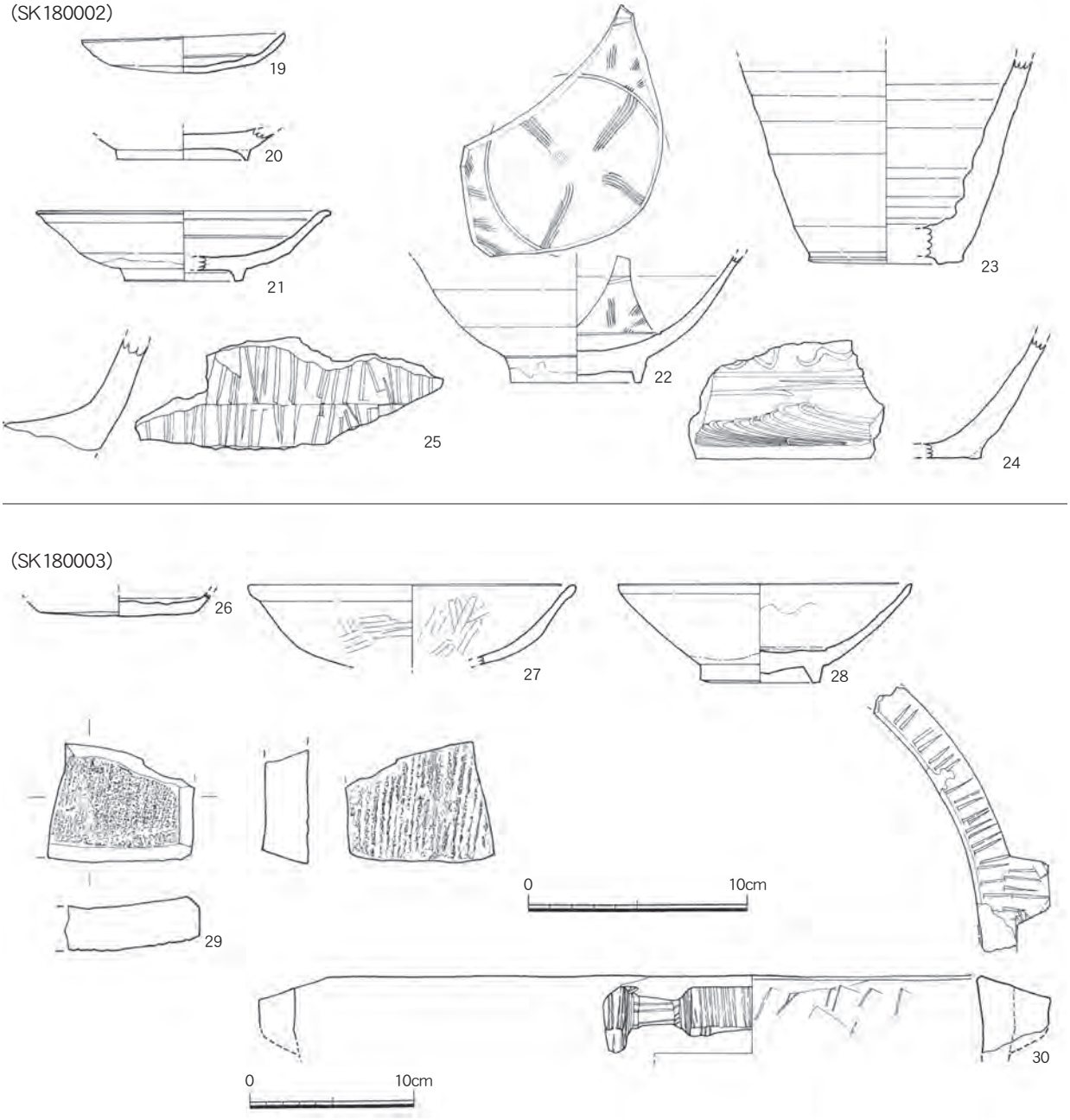


Fig.4　第 1 面 SK 出土遺物実測図①（1/3・1/4）

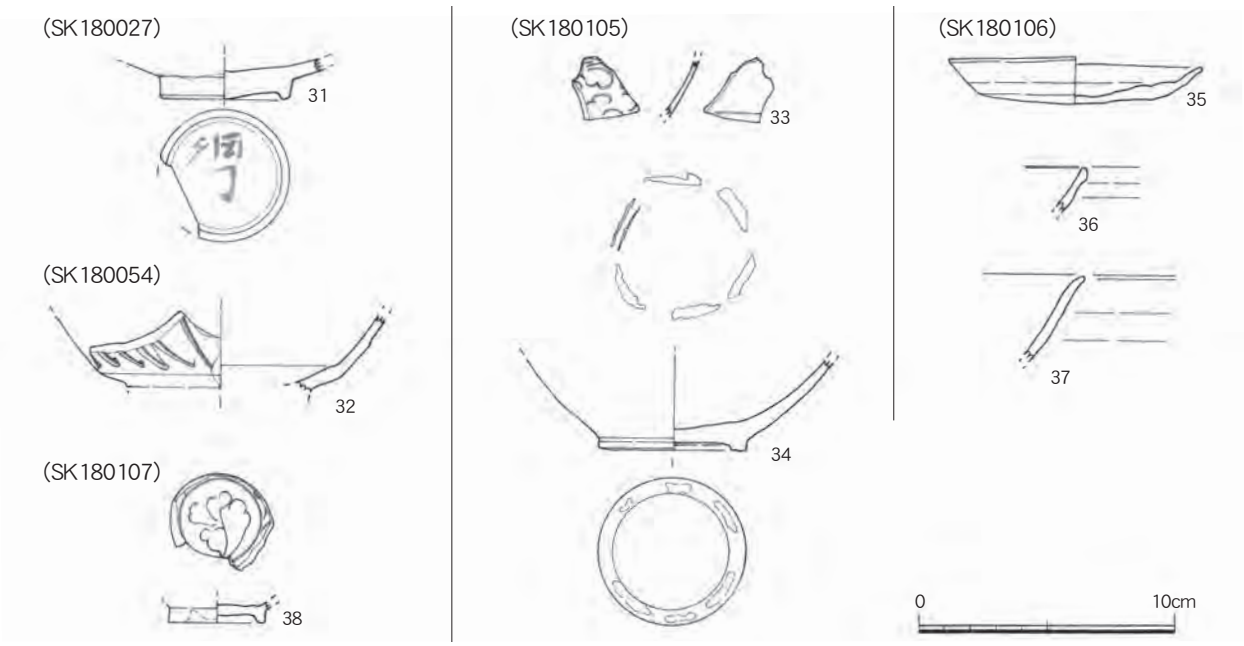
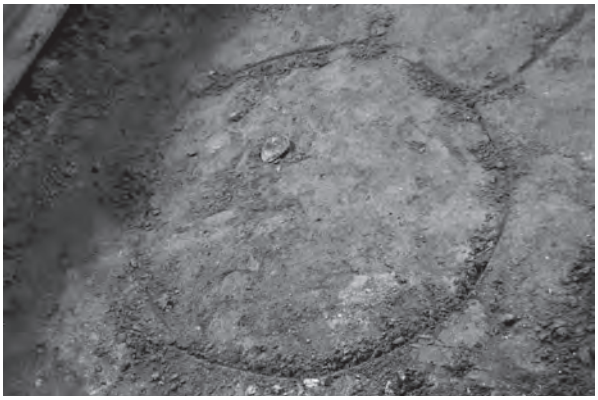


Fig.5　第 1 面 SK 出土遺物実測図②（1/3）

Ph.26　SK180027 出土遺物



Ph.27　SK180106（南西から）

出土遺物（Fig.5）　32 は白磁碗で、体部下半で、屈曲し、明瞭な稜線をもって立ち上がる。外面には縦箆花弁文を施す。他は肥前陶磁器が出土し、土坑の時期は近世である。

SK180105（Fig.1　Ph.8）　調査区中央⑫ -8・9 に位置する。平面プランは円形を呈すると考えられ、深さ 0.3m を測る。覆土は灰色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.5）　33 は白磁小碗で、内面に箆で花文を描く。34 は越州窯系青磁碗Ⅰ -2a ア類である。他に回転ヘラ切り底の土師器が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半頃と考えられる。

SK180106（Fig.1　Ph.8・27）調査区中央⑫ -8・9 に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 1.4m、深さ 0.3m を測る。覆土は灰黒色粘質土を主体とし、炭化物、焼土を多量に含む。

出土遺物（Fig.5）　35 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。36 は白磁碗Ⅱ類、37 は白磁碗Ⅴ類の口縁部片である。土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

SK180107（Fig.1　Ph.8）　調査区中央⑫ -9 に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 0.6m 以上、短径 0.5m、深さ 0.4m を測る。覆土は灰黒色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.5）　38 は白磁の小碗の底部片で、SK180105 の 33 と類似した文様を描く。他に土師器片が出土する。

3）第 2 面の調査（Fig.6　Ph.28~47）

第 2 面は暗茶褐色砂質土の上面で検出した。遺構面の高さは、西側で、現道路面から約 1.2m 下の標高約 4.0m、東側は現道路面から約 1.4m 下の標高約 3.6m である。北側の北東方向に走る下水道管、西端の南北方向に走る電力管（Ph.41~47）、南側の東西方向に走る電力管（Ph.34・35）による撹乱はあるものの、それ以外は良好な状況で遺構は遺存していた。

検出した主な遺構は弥生時代終末から古墳時代の竪穴住居跡 1 基、土坑、ピット、古代の土坑 4 基、ピット、11 世紀後半から 12 世紀中頃の井戸 3 基、土坑 10 基、ピットである。

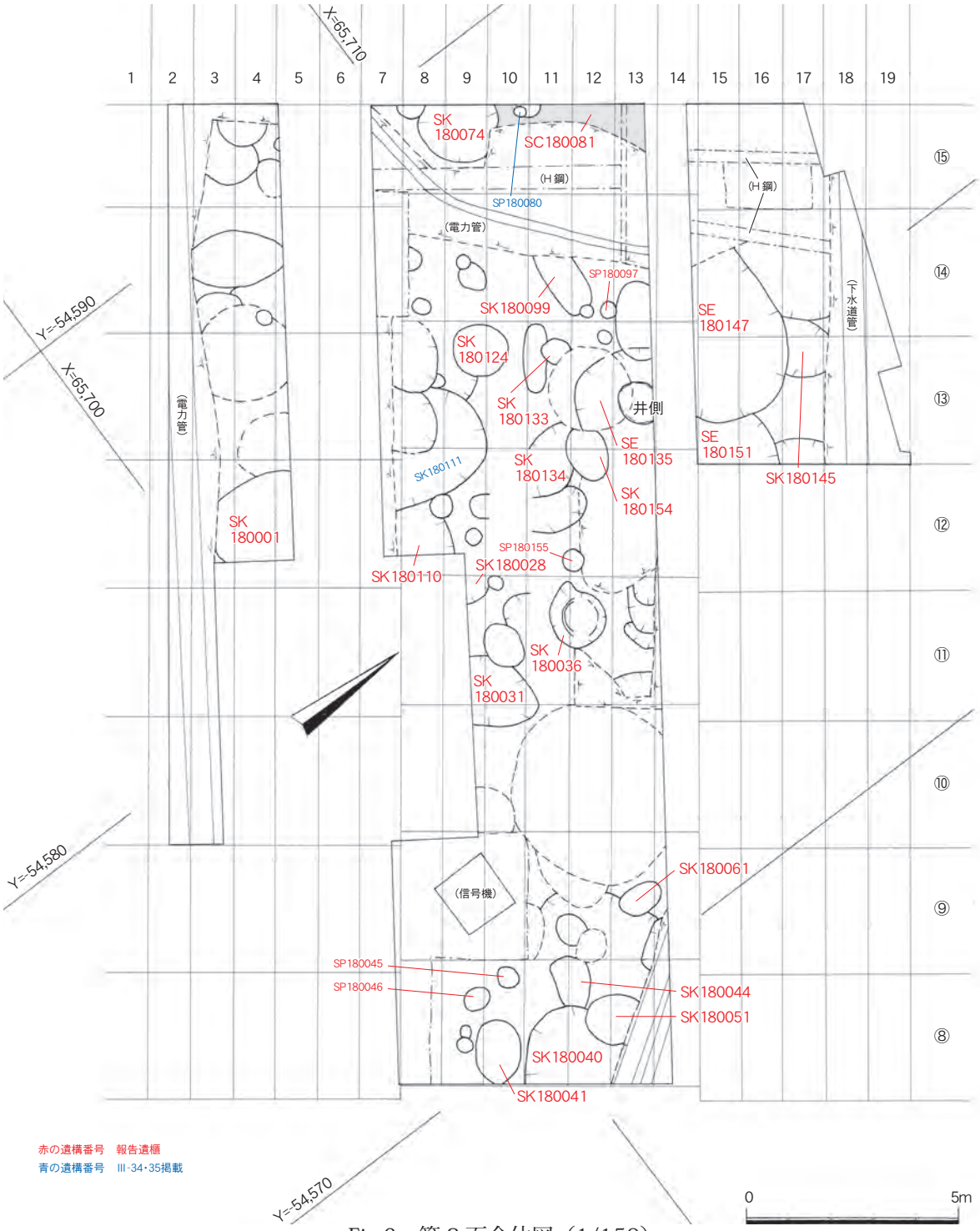


Fig.6　第 2 面全体図（1/150）

Ph.28　⑧ -8~11-2 面（南西から）

Ph.29　⑧ -12・13-2 面（南西から）

Ph.30　⑨ -11~13-2 面（北西から）

Ph.31　⑩ -8~11-2 面（南西から）

Ph.32　⑩ -12・13-2 面（南西から）

Ph.33　⑪ -8~10-2 面（南西から）

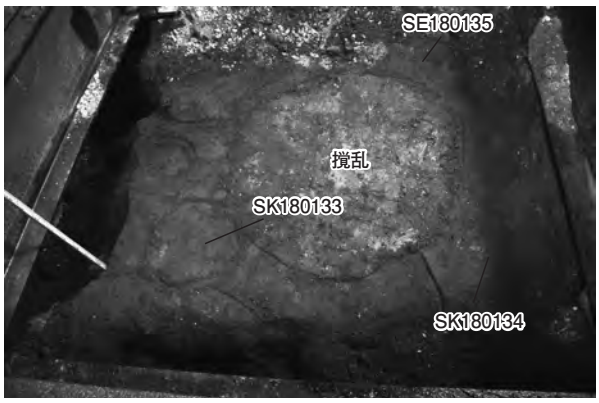
Ph.34　⑪ -11-2 面（南西から）

Ph.35　⑫ -1~4-2 面（南西から）

Ph.36　⑫ -7~9-2 面（南西から）

Ph.37　⑬ -7~8-2 面（南西から）

Ph.38　⑬ -9~10-2 面（南から）



Ph.39　⑬ -11~13-2 面（南西から）

Ph.40　⑬ -15~17-2 面（南西から）

Ph.41　⑭ -3~5-2 面（南東から）

（1）竪穴住居跡（SC）

SC180081（Fig.6　Ph.47・48）　調査区西側⑮ -10~13 に位置し、東側は電力管、西側は調査区外、北側は水道管、南側は他の遺構に切られ、遺構ラインは検出していない。覆土は茶褐色砂質土で、多量の土器が出土することから、竪穴住居跡とした。規模は南北方向が 2.5m 以上、東西方向は 1.5m 以上、深さは約 30cm を測る。

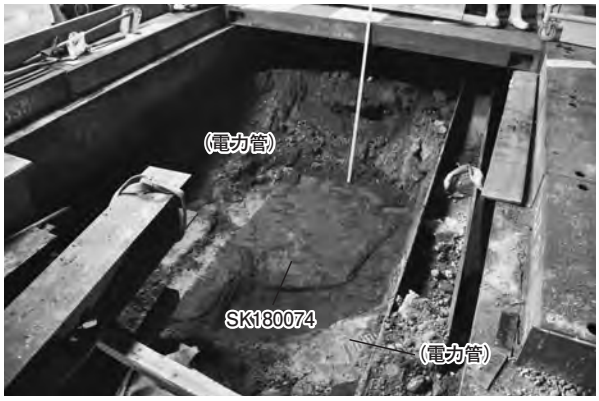
出土遺物（Fig.7）　39 は小型の土師器の甕で、口縁は緩やか外反する。内面は縦方向の削りの後、

Ph.42　⑭ -8~10-2 面（南西から）

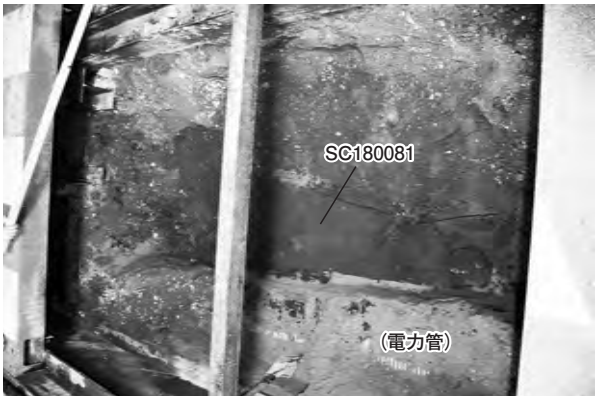
Ph.43　⑭ -11~13-2 面（南西から）

Ph.44　⑭ -15~17-2 面（南西から）

Ph.45　⑮ -2~4-2 面（南西から）

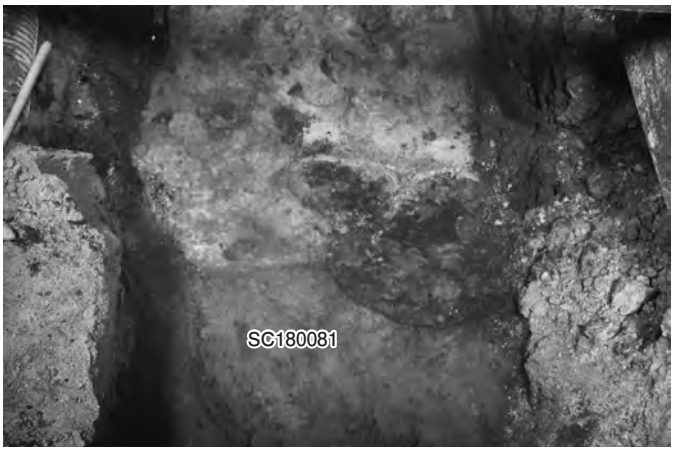


Ph.46　⑮ -6~9-2 面（南西から）



Ph.47　⑮ -6~9-2 面（南西から）

ナデを行う。40 は弥生土器の甕で、内外面ともに刷毛目で調整する。41 は布留式土器の甕で、体部内面は削りを施し、口縁は頸部から強く外反する。42・43 は弥生土器の甕の底部片で、凸レンズ状を呈する。44 は弥生土器の大甕で頸部に三角突帯を巡らせる。内外面ともに密な刷毛目で調整する。45・46 は弥生土器の器台で、受部と脚部の境は 45 はやや不明瞭であるが、46 は明瞭である。また、46 の受部端部は上方に摘み上げる。47 は沓形の支脚で、突出部を欠損する。上方に焼成前の穿孔を有する。他に敲打痕をもつ台石等が出土する。竪穴住居の時期は出土遺物から弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。



Ph.48　SC180081（南西から）

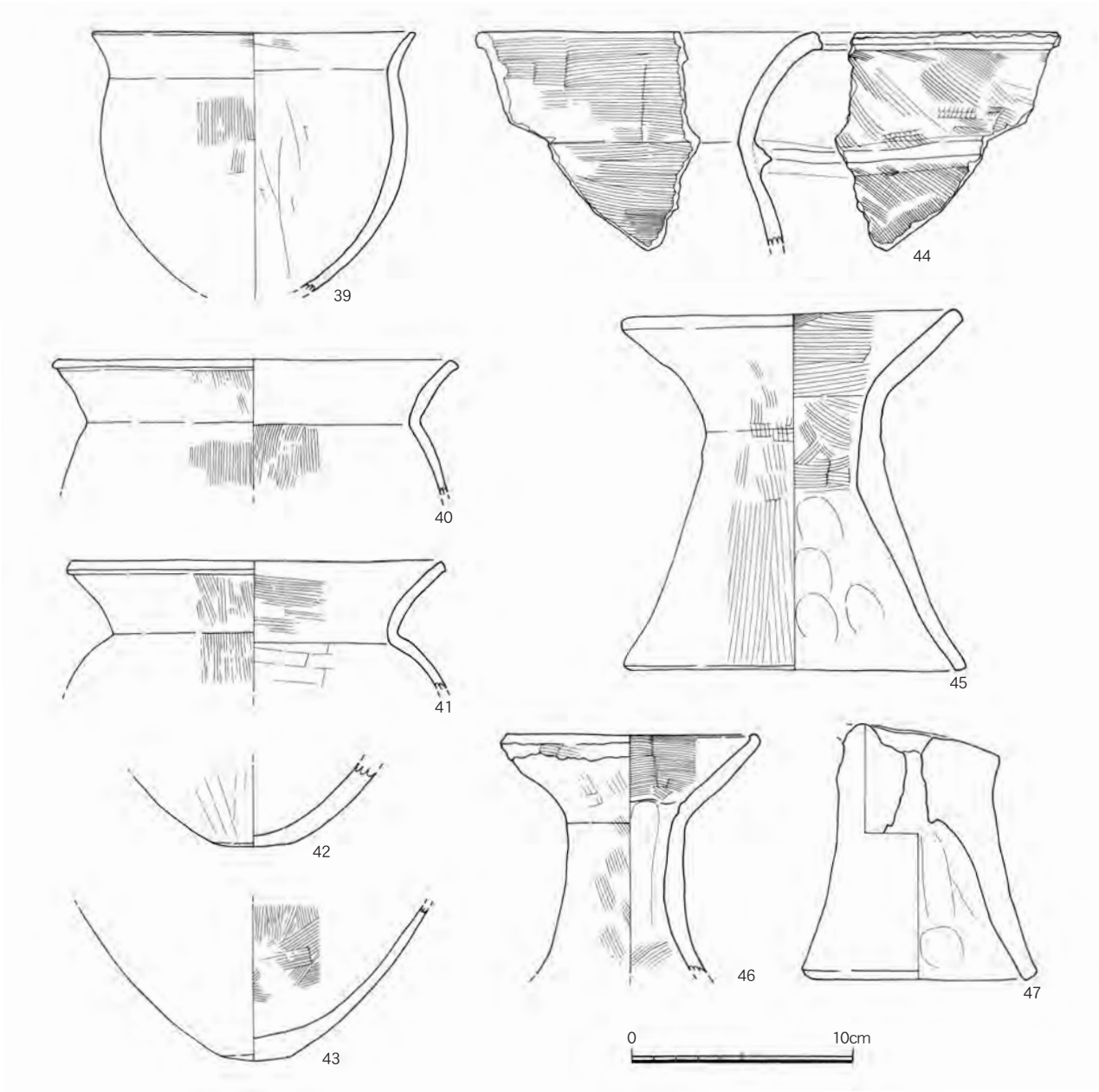


Fig.7　SC180081 出土遺物実測図（1/3）

Ph.49　SE180135（南西から）

Ph.50　SE180135 井側（南東から）

（2）井戸（SE）

SE180135（Fig.6　Ph.39・49・50・68）　調査区東側⑬-13 に位置する。掘方の平面プランは円形を呈すると思われ、井側を中心に据えれば、直径 2.5m を測る。掘方の覆土は茶褐色砂質土、黒色シルト、灰黒色粘質土、井側の覆土は黒色粘質土である。井側は検出面ですでに確認でき、直径 1.0m を測る。井側内からは白磁がまとまって出土した。またイヌと考えられる哺乳類の骨も確認している。遺構検出面から深さ 1.1m まで掘削を行ったが、それ以上は掘削できなかった。

出土遺物（Fig.8　Ph.51）　48~59 は井側内出土遺物である。48 は瓦質土器の椀で、外面は指オサエの後、ナデ、内面は回転ナデを行った後、粗い研磨を施す。49 は施釉陶器の大甕の底部片である。底径は 22.0cm を測る。外面はナデ、内面は同心円状の当て具の痕跡が窺えるが、不明瞭である。白色砂粒を多量に含む明褐色の胎土に暗灰緑色の釉がかかる。50~59 は白磁である。50 は小碗で、器壁は薄く、口縁は体部から緩やかに外反する。白橙色の胎土に白色の釉がかかり、細かい貫入が入る。51 は皿Ⅵ-1a 類で、外底部に墨書を有する。52 は碗Ⅱ-1 類、53 は碗Ⅵ類、54~59 は福建省の窯の碗で、底部の器壁は厚く、体部の器壁は 2.5mm と非常に薄い。56 の高台は高台内を浅く削り、端部は平坦に仕上げる。57~59 の高台は細く、端部はやや内に折れる。外面は蓮弁文、内面は箆による片彫りと櫛目で文様を描く。やや灰色を帯びた白色の胎土に緑色を帯びた白色釉が口縁は薄く、高台付近は厚く溜まる。細かい貫入が密に入る。他に井側からは回転ヘラ切り底の土師器、天目茶碗が出土する。掘方からは白磁碗Ⅱ類、褐釉陶器片、外面格子タタキの須恵質の瓦が出土する。井戸の時期は 11 世紀後半と考えられる。

SE180147（Fig.6　Ph.40・44）　調査区西側⑬⑭-15・16 に位置する。南側は 28 区の№.229 として検出している。西側は電力管で削平される。掘方の平面プランは楕円形を呈し、長径 3.5m 以上、短径 3.4m を測る。覆土は灰黒色粘質土とシルトを主体とし、多量の炭化物も出土する。深さは遺構検出面から 80cm 下の標高 3.0m まで掘削した。井側等の検出はできなかった。

出土遺物（Fig.9）　60~64 は土師器である。60~62 は回転糸切り底の小皿で、口径 8.6~9.2cm、器高 1.1~1.2cm を測り、60・61 は外底部に板状圧痕を有する。60・61 は胎土に赤褐色粒を含み、色調は明橙色である。63 は回転糸切り底の坏で、口径 15.0cm、器高 3.1cm を測る。胎土に赤褐色粒を含み、色調は明橙色である。また、外底部に板状圧痕を有し、内底面を平行にナデるなど、60 と作りが類似する。64 は高台付き皿の底部片で、細く高い高台を付す。65 は楠葉型の瓦器椀で、内面は丁寧なナデで調整した後、暗文風の磨きを行う。外面は指オサエの痕跡が残る。66 は白磁碗Ⅳ類、67 は白磁の壺、68 は白磁壺の体部片で、箆で文様を描く。69 は初期龍泉窯系青磁の碗で、橙色の

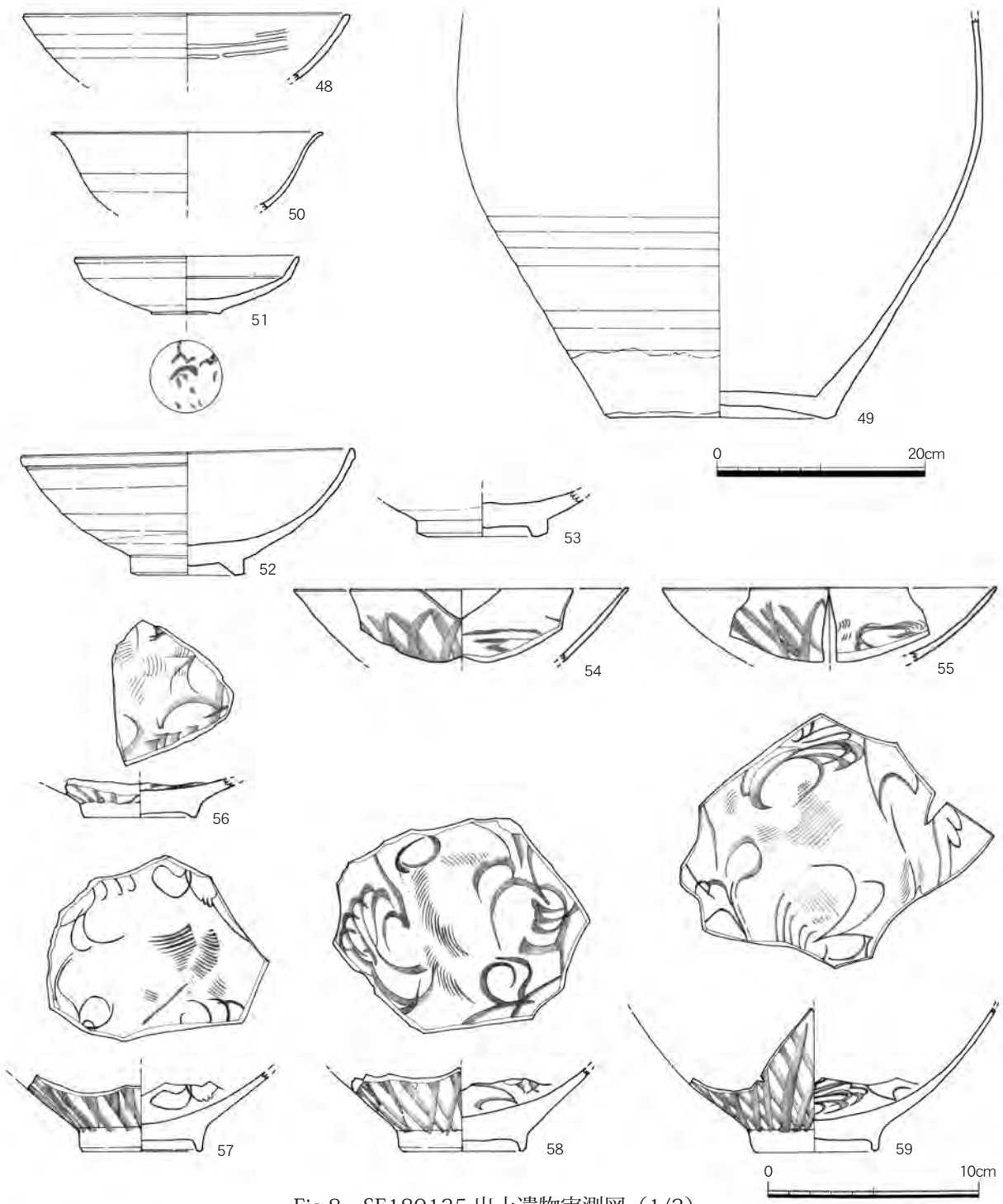
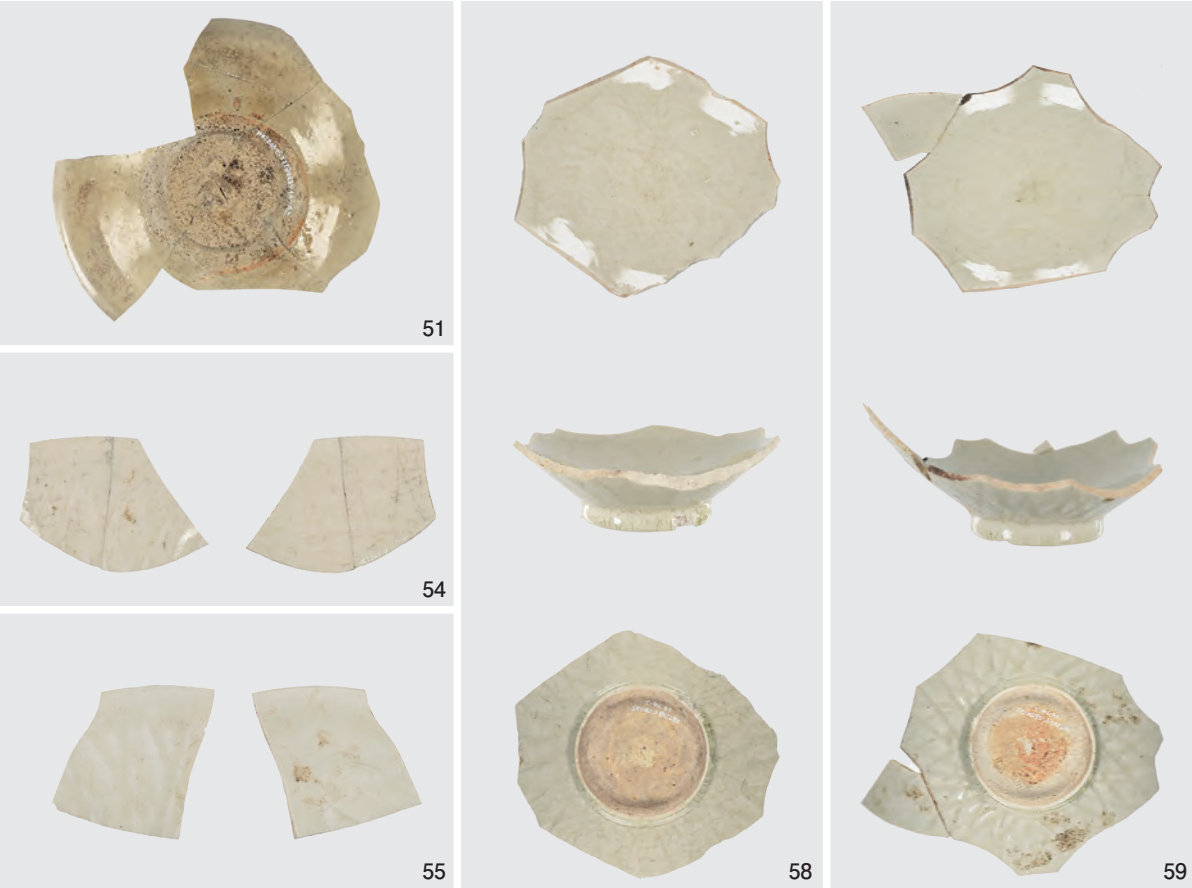


Fig.8　SE180135 出土遺物実測図（1/3）

胎土にやや青味を帯びた白灰色釉がかかる。70 は龍泉窯系青磁の小碗で、体部外面に幅広の櫛目文を施す。71 は越州窯系青磁の碗である。72~74 は施釉陶器である。72・73 は鉢で、口縁端部には胎土目が残る。72 は黄褐色の胎土に緑灰色の釉がかかる。73 は灰色の胎土に濃緑色の釉がかかる。74 は壺の底部片で、赤褐色の胎土に茶褐色の釉がかかり、外底部縁辺の釉は掻き取る。75 は土師質の丸瓦で、厚さ 1.0cm を測る。凸面は縦方向の工具によるナデを施し、凹面は布目が残る。76 は須恵質の平瓦で、凸面は横方向のナデを行い、凹面は布目が残り、側面は分割後、未調整である。他に回転ヘラ切り底の土師器、ガラス坩堝、珪石、炉壁が出土し、井戸の時期は 12 世紀中頃と考えられる。



Ph.51　SE180135 出土遺物

SE180151（Fig.6　Ph.40）　調査区西側⑬ -15・16 に位置する。西側は SE180147 に、東側は撹乱で削平され、南側の 28 区では検出できていない。掘方の平面プランは円形で、直径 2.0m 以上を測る。深さは約 80cm 掘削したが、それ以上は危険なため、掘削できなかった。覆土は灰色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.9）　77 は回転糸切り底の土師器の小皿で、復元口径 9.2cm、器高 1.2cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。78 は施釉陶器の盤の底部片である。他に回転ヘラ切り底の土師器、瓦器、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、凸面縄目タタキの須恵質の瓦、滑石製石鍋、ガラス坩堝、石英、鉛塊が出土する。以上の出土遺物より井戸の時期は 12 世紀前半と考えられる。

（3）土坑（SK）

SK180001（Fig.6　Ph.35・52・63）　調査区西側⑫ -3~5 に位置する。平面プランは直径約 2.5m の円形を呈する。深さ 1.4m を測り、覆土は黒褐色粘質土を主体とし、多量の炭化物を含む。

出土遺物（Fig.10）　79 は土師器の丸底坏で、復元口径 14.0cm、器高 3.7cm を測る。80 は白磁皿Ⅵ -1b 類で、外底部に墨書を有する。81 は最大厚 2.5cm の台形状の滑石の砥石である。器面には多くの擦痕、溝が残る。341.40g を量る。他に回転ヘラ切り底の土師器、瓦器、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類が出土し、土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

SK180028（Fig.6　Ph.33）　調査区西側⑪ -9 に位置し、西側、南側は確認できていない。平面プランは円形を呈すると思われ、推定直径約 1.1m である。覆土は灰褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.10）　82 は土師器の椀で、復元口径 11.6cm、器高 4.1cm を測る。他に須恵器の小片が出土し、土坑の時期は 10 世紀前半頃と考えられる。

SK180031（Fig.6　Ph.33・61）　調査区中央⑩⑪ -9~11 に位置し、南側は 5 区へ延びる。平

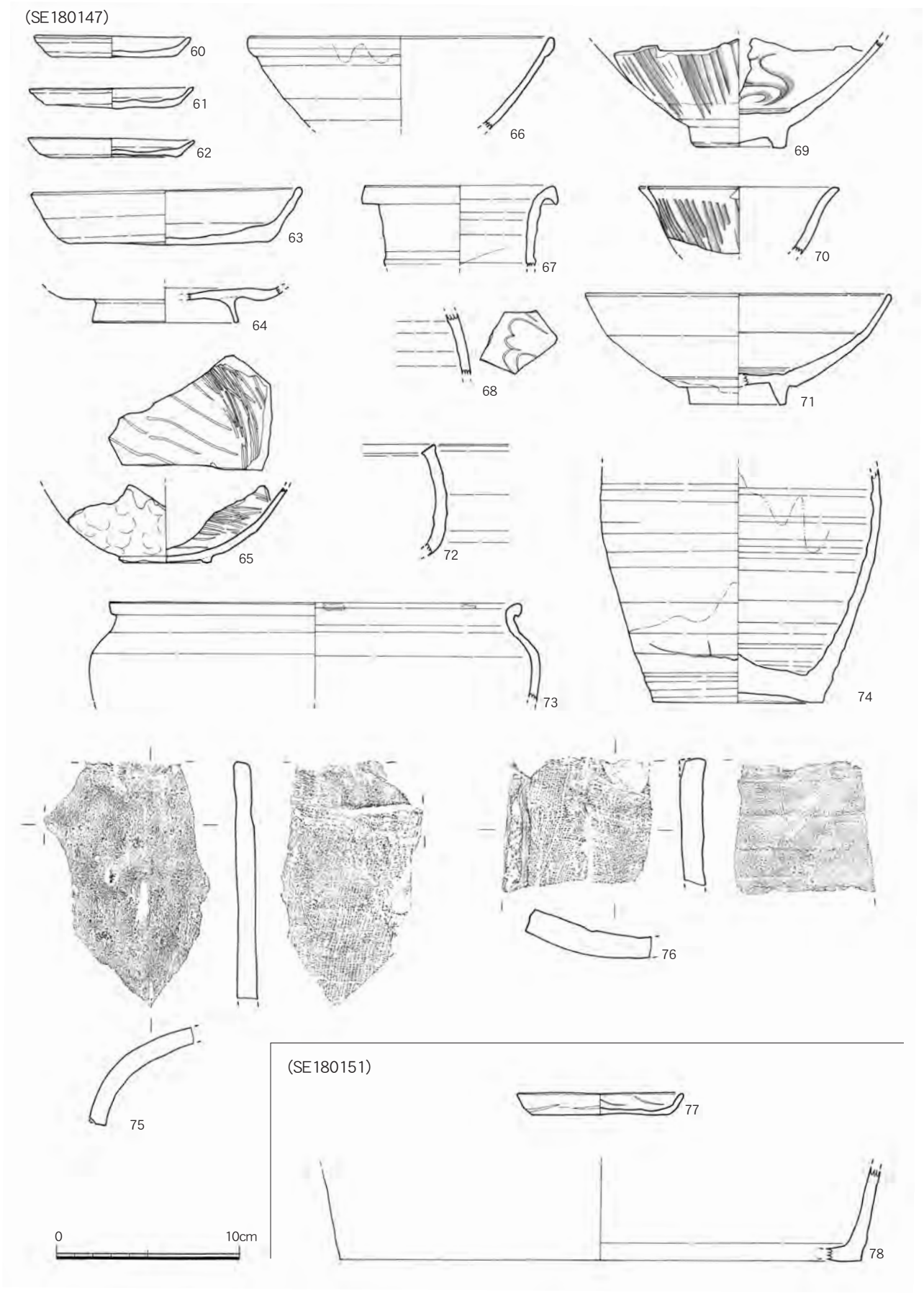


Fig.9　SE180147・180151 出土遺物実測図（1/3）

Ph.52　SK180001 東側（南西から）

Ph.53　SK180036（北西から）

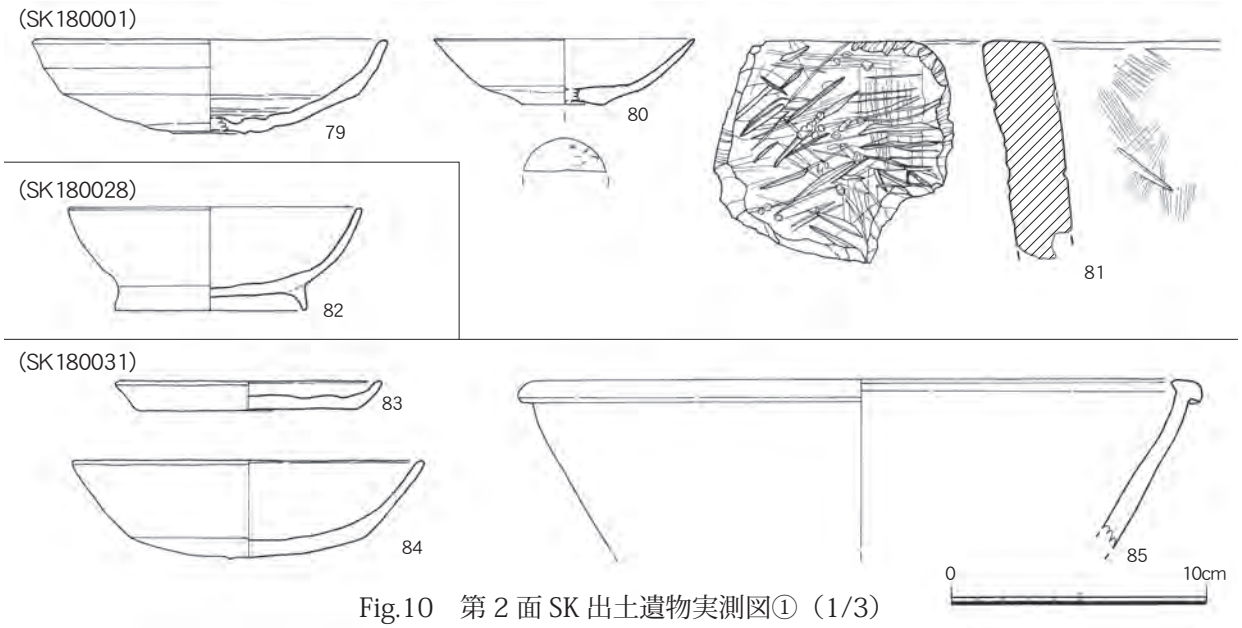


Fig.10　第 2 面 SK 出土遺物実測図①（1/3）

面プランは楕円形を呈し、長径 1.7m 以上、短径 1.65m、深さは 40cm を測る。覆土は灰黒色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.2）　83・84 は土師器で、83 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径 10.6cm、器高 1.2cm を測り、胎土に赤褐色粒を多く含み、白橙色を呈する。84 は丸底坏で、復元口径 14.0cm、器高 3.8cm を測り、胎土に 1.0cm の石英を含む。85 は施釉陶器の鉢で、白橙色の胎土に濃緑色の釉がかかる。回転ヘラ切り底の土師器しか出土せず、土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

Ph.54　SK180001 出土遺物

SK180036（Fig.6　Ph.34・53）　調査区中央⑪-11 に位置し、平面プランは直径 1.3m の円形を呈し、直径 0.8m、厚さ 5.0cm の炭化物層を有する。深さは 45cm、土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

SK180040（Fig.6　Ph.28・29）　調査区東側⑧-11・12 に位置する。平面プランは円形を呈し、直径約 2.1m、深さは 40cm を測る。覆土は上層が黒色粘質土、下層が茶褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.11）　86 は瓦器椀で、内面上半は磨滅するが、下半は斜方向の磨きが残る。87 は黒色土器 B 類で、内面は横方向の研磨の後、斜方向に暗文を施す。88~91 は白磁である。88・89 は皿Ⅱ-1a 類で、口縁部は直口し、体部内面中位に段を有する。90 は蓋で、口縁端部は長く下方へ延び

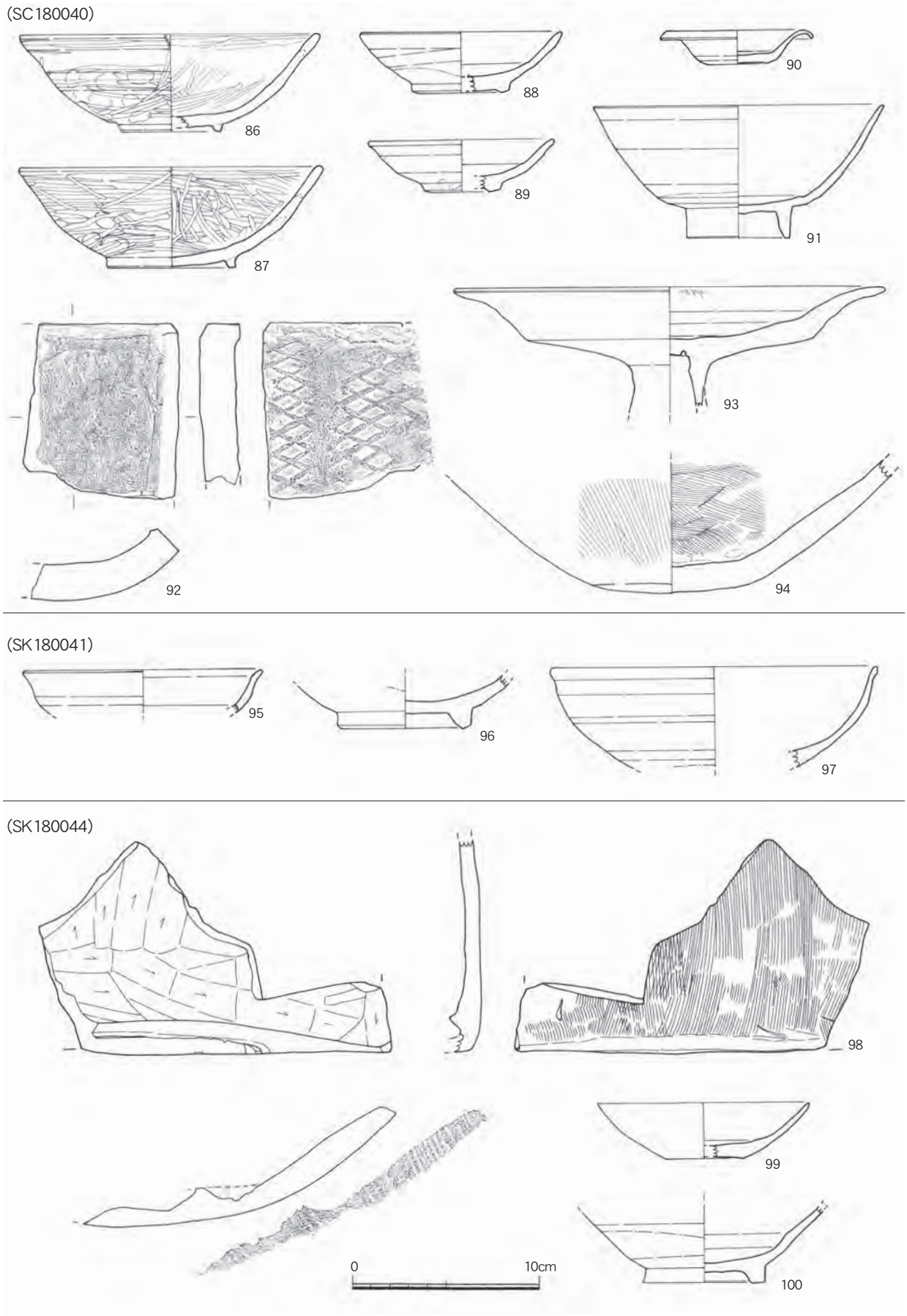


Fig.11　第 2 面 SK 出土遺物実測図②（1/3）

る。内面から口縁部外面まで釉がかかる。91 は碗Ⅴ -1a 類である。92 は須恵質の平瓦で、凸面は細かい格子目、内面は布目が残り、側面は工具によるナデで調整する。93・94 は下層の遺物の混入で、93 は土師器の高坏で、坏底部は回転ナデで調整する。94 は弥生土器の壺の底部片で、凸レンズ状を呈し、内外面ともに刷毛目を施す。他に滑石片が出土し、土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

SK180041（Fig.6　Ph.28）　調査区東側⑧ -10 に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.5m、短径 1.0m、深さは 40cm を測る。覆土は灰色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.11）　95~97 は白磁である。95 は皿Ⅺ -3 類で、体部中位でわずかに屈曲する。白色の胎土に水色を帯びた白色釉がかかる。96 は碗Ⅺ類で、高台は低く、内側は斜行する。胎土、色調ともに 95 に類似する。97 は碗Ⅱ類の体部片で、丸味を帯びた体部に小さい玉縁の口縁が付く。白橙色の胎土に化粧土が施され、白色釉がかかる。土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

SK180044（Fig.11　Ph.28・29）　調査区東側⑧ -11・12 に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長辺約 1.3m、短辺 1.0m を測る。深さは 30cm で、黒色粘質土を主体とし、炭化物、焼土を含む。

出土遺物（Fig.11）　98 は移動式竈の焚口付近の基部である。99 は白磁碗Ⅵ -1b 類、100 は白磁碗Ⅺ類で、内面見込みは広い。化粧土が施され、やや青味を帯びる釉がかかる。他に土師器、須恵器が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

SK180051（Fig.6　Ph.29・58）　調査区東側⑧ -12・13 に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.3m 以上、短径 1.2m、深さは 60cm を測る。覆土は黒色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.12）　101・102 は白磁皿Ⅵ -2a 類で、101 は内面見込みに箆と櫛による花文を施す。102 は箆で細文を描く。他に土師器、瓦器、白磁碗Ⅳ類、凸面格子目の須恵質の丸瓦が出土し、土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

SK180061（Fig.6　Ph.30）　調査区東側⑨ -13 に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.1m、短径 0.7m を測る。深さは 30cm で、覆土は灰黒色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.12）　103 は土師器の小型の甕で、口縁は体部から緩やかに外反する。体部外面は粗い刷毛目、内面は削り、口縁内外面はナデで調整する。胎土には多量の赤褐色粒、白色砂粒、金雲母を含み、色調は橙色である。土坑の時期は古墳時代前期と考えられる。

SK180074（Fig.6　Ph.46）　調査区西側⑮ -8・9 に位置し、西側は調査区外へ延びる。平面プランは円形を呈し、直径約 1.7m、深さは 60cm を測る。覆土は黄茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.12）　104 は大型の土師器の摘みで、宝珠形を呈する。摘み径は 4.8cm を測り、回転ナデで調整される。胎土に多量の赤褐色粒、石英を含み、色調は明橙色である。他に内面に青海波の当て具痕を有する須恵器の甕が出土する。土坑の時期は古代である。

SK180099（Fig.6　Ph.43）　調査区西側⑭ -11・12 に位置し、西側は電力管で削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.5m 以上、短径 0.9m、深さは 90cm を測る。覆土は上層が明黄褐色シルト、下層が灰褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.12）　105 は土師器の釜で、体部外面は刷毛目、内面は削りで調整する。胎土は精良で、色調は橙色を呈する。内面には多量の焦げが付着する。106 は玄武岩の台石で半月状を呈する。長さ 21.4cm、現存幅 12.5cm、厚さ 4.3cm を測る。上下面中央は敲打の痕跡が残り、凹状に窪む。また、色調も他より明るく、灰白色を呈する。部分的に赤色となる箇所がみられる。他に須恵器の小片が 1 点出土する。土坑の時期は古代と考えられる。

SK180110（Fig.6　Ph.36）　調査区西側⑫ -7・8 に位置する。深さは 70cm を測る。覆土は炭化物、焼土を含む灰色粘質土である。

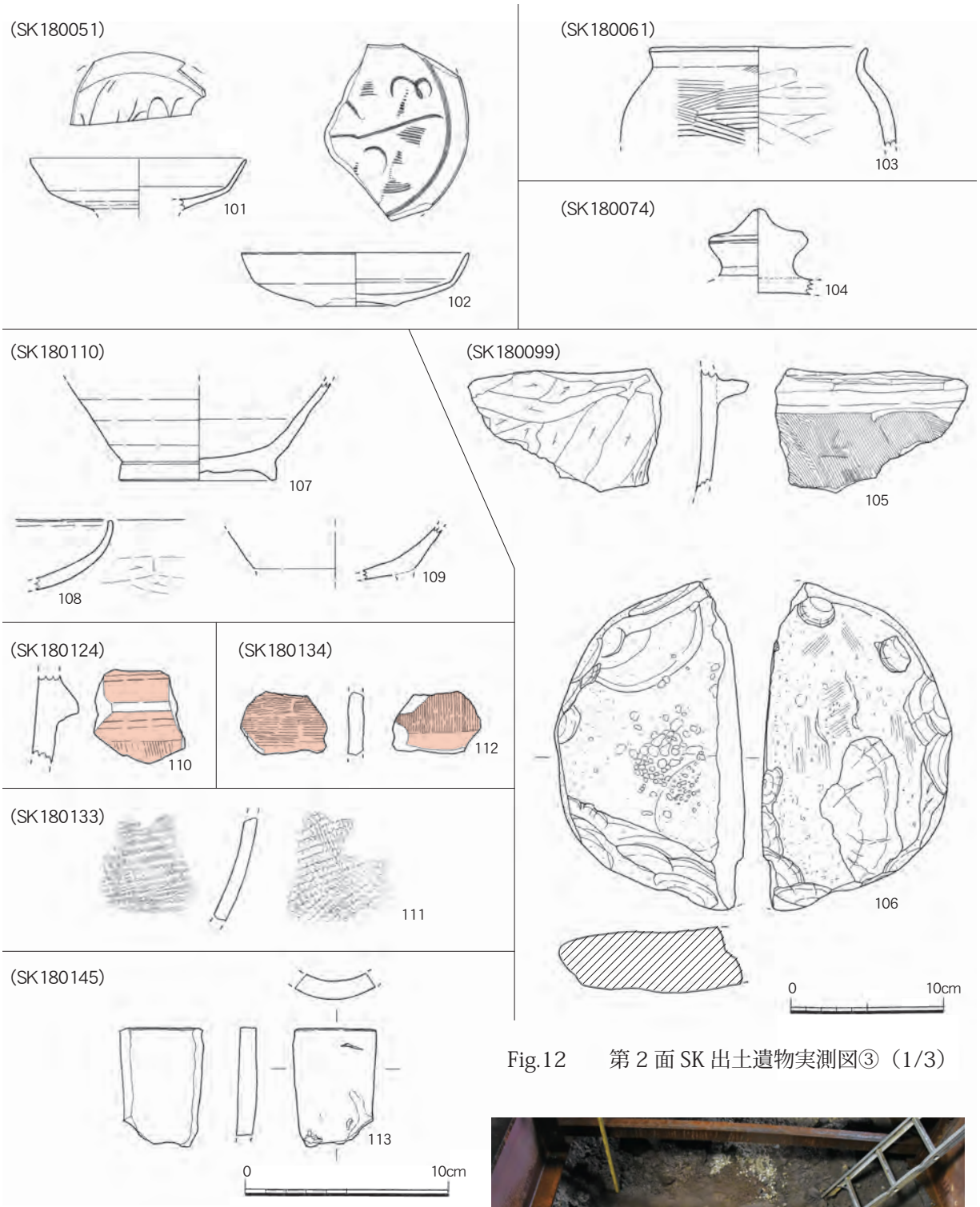


Fig.12　第 2 面 SK 出土遺物実測図③（1/3）

Ph.55　SK180145 出土遺物

Ph.56　SK180124（南西から）

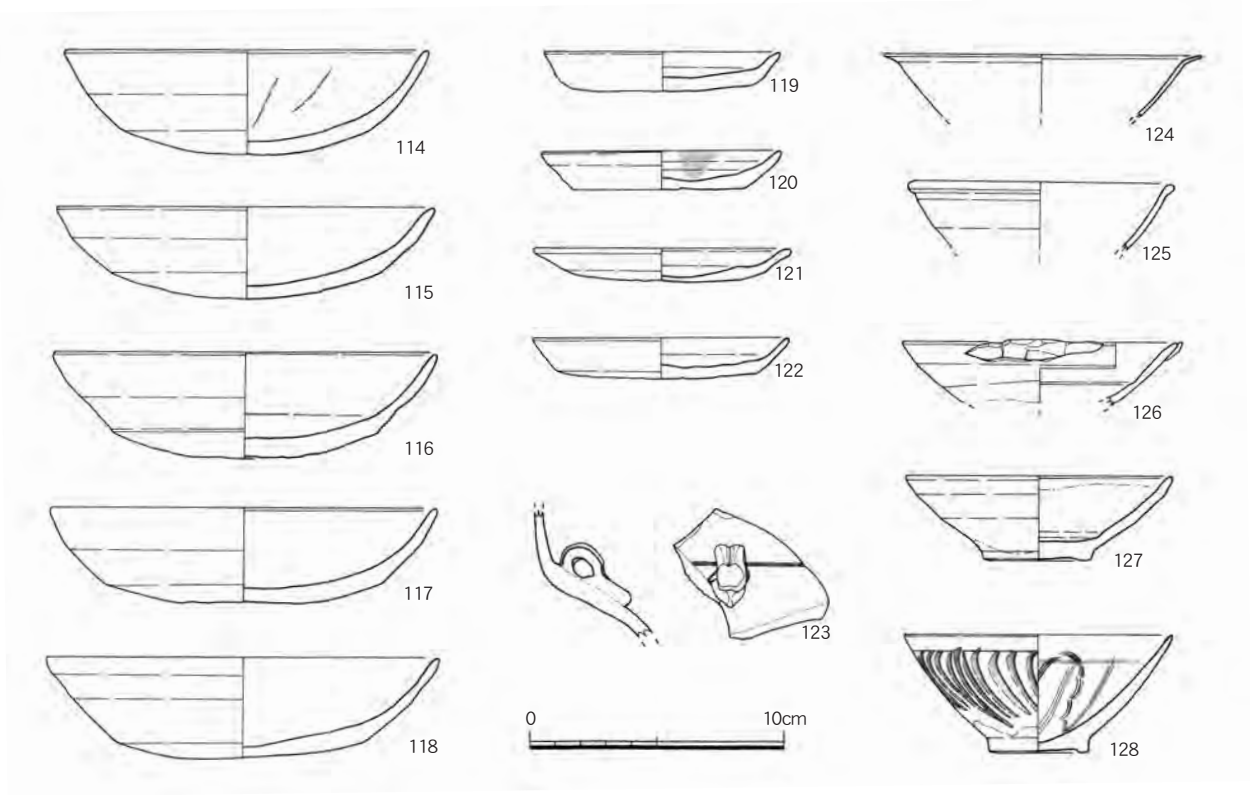


Fig.13　第２面 SK 出土遺物実測図④（1/3）

出土遺物（Fig.12）　107~109 は土師器である。107 は椀で、高台は底部と体部の境に付く。内外面ともに回転ナデで調整される。内面には焦げが付着する。外面の色調は明褐色である。108 は坏の口縁部片で、口縁端部は内に折れる。体部下半は横方向の削り、他はナデで調整する。胎土に赤褐色粒、白色砂粒を含み、色調は明橙色である。109 は坏で、やや丸底気味の底部をもつ。ナデで調整され、色調は底部が黒色、他は橙色を呈する。他に黒色土器 A 類、刀子の刃先が出土する。土坑の時期は古代である。

SK180124（Fig.6　Ph.38・56・67）　調査区西側⑬ -9・10 に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 1.3m、深さは 110cm 測る。覆土は灰褐色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.12）　110 は下層の遺物の混入で、円筒埴輪の小片である。太い三角突帯を巡らせ、外面には赤色顔料を施す。外面下半は縦方向の刷毛目で調整される。土坑からは回転ヘラ切り底の土師器、白磁、凸面格子タタキの須恵質の瓦が出土し、時期は 11 世紀後半と考えられる。

SK180133（Fig.6　Ph.39）　調査区西側⑬ -11 に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 0.6m、深さは 30cm を測る。覆土は灰褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.12）　111 は軟質土器の甕の体部片で、外面は格子目タタキを施す。胎土は多量の赤褐色粒、黒色粒、白色砂粒を含み、明褐色を呈する。

SK180134（Fig.6　Ph.39）　調査区西側⑬ -11・12 に位置し、南側は削平され、北側、西側は他の遺構に切られる。深さは 20cm を測る。覆土は茶褐色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.12）　112 は円筒埴輪の小片で、下層の遺物の混入である。内外面に赤色顔料を施す。外面上半は縦方向の刷毛目、下半は横方向のナデ、内面は横方向の刷毛目で調整する。他に回転ヘラ切り底の土師器、白磁、須恵質土器の甕が出土する。土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

SK180145（Fig.6　Ph.40・44）　調査区西側⑬⑭ -17 に位置する。平面プランは楕円形を呈し、

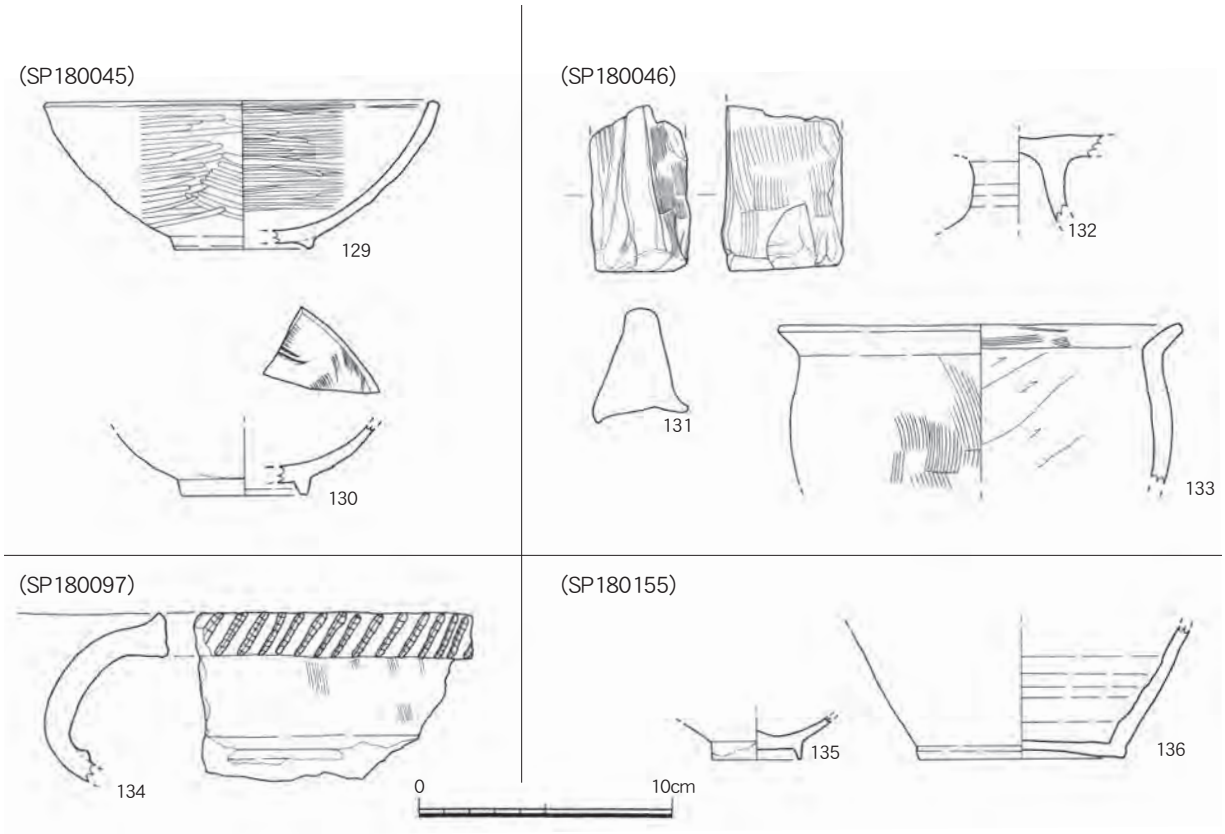


Fig.14　第 2 面 SP 出土遺物実測図（1/3）

長径 1.0m 以上、短径 1.4m、深さは 40cm を測る。覆土は灰黄色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.12）　113 は土師器で、円筒状を呈する。口縁端部は工具によるナデで平滑に仕上げる。他に白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、施釉陶器、ガラス坩堝が出土し、土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

SK180154（Fig.6）　調査区西側⑫ -11~13 に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.3m、短径 0.9m、深さは 50cm を測る。覆土は灰褐色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.13）　114~122 は土師器である。114~118 は丸底坏で、口径 14.4~15.5cm、器高 3.6~4.1cm を測る。114~117 は外底部に板状圧痕を有する。全て内面は丁寧なナデが施され、114、117 は工具痕が残る、119~122 は回転ヘラ切り底の小皿で、口径 9.4~10.2cm、器高 1.3~1.7cm を測る。119~121 は外底部に板状圧痕を有する。120 は口縁部内外面に煤の付着が見られ、灯明皿として使用されている。123 は越州窯系青磁の壺の頸部片で、把手を有する。縦位の把手で、中央を窪ませる。頸部と体部の境は段状の沈線が巡る。124・125 は青白磁の小碗で、ともに白色の胎土にやや青味を帯びた透明釉がかかる。内外面ともに細かい貫入が入る。124 の口縁は嘴状、125 は小さい玉縁状を呈する。126~128 は白磁である。126 は皿Ⅵ -1a 類で、口縁外面に重ね焼きの磁器が付着する。127 は皿Ⅱ -1a 類、128 は小碗で、外面に縦箆花弁文、内面に櫛目文を施す。他に瓦器、滑石片、鉄釘が出土する。土坑の時期はヘラ切り底の土師器しか出土しないことから 11 世紀後半と考えられる。

（4）ピット（SP）

SP 出土遺物（Fig.14）　129・130 は SP180045（⑧ -10）出土で、129 は楠葉型の瓦器椀、130 は白磁碗Ⅵ -b 類である。131~133 は SP180046（⑧ -9）出土で、131 は移動式竈の基部で、底面に煤が付着する。132 は須恵器の高坏の脚部で、外面は灰黒色、内面は暗褐色を呈する。133 は土師器の甕で、内外面に煤が付着する。134 は SP180097（⑭ -12）出土の弥生土器の広口壺の口縁である。135・136 は SP180155（⑫ -11・12）出土で、135 は青白磁の小碗で、全面に細かい貫入が入る。136 は無釉陶器の壺の底部片である。

4）第３面の調査（Fig.15　Ph.57~77）

第３面は黄褐色砂の砂丘面で、現道路面から西側が 1.5m 下の標高 3.7m、東側が 1.6m 下の標高 3.4m を測り、西から東へ向かって徐々に傾斜する。⑭⑮の北側大部分は電力管（Ph.74・76）が地山面ま

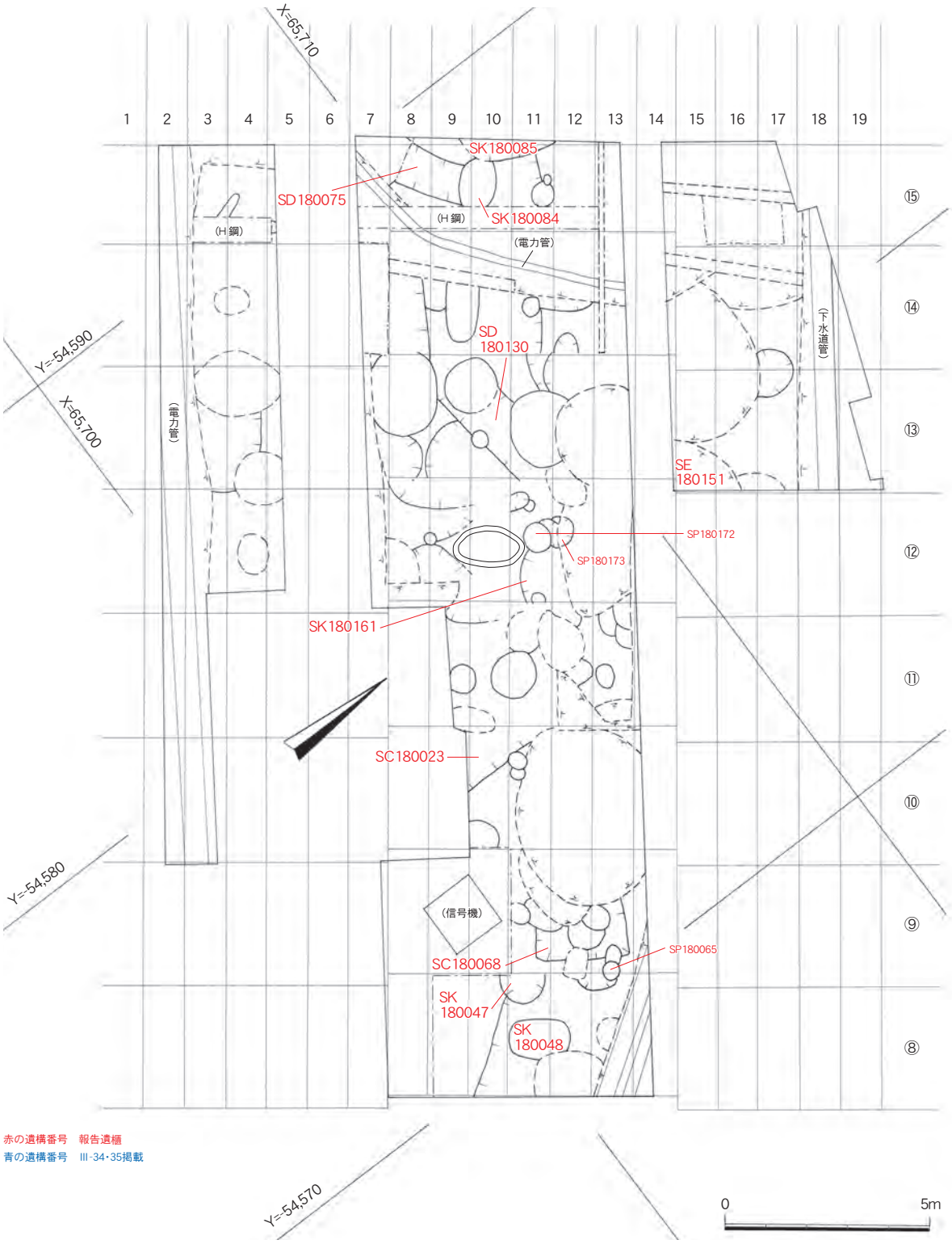
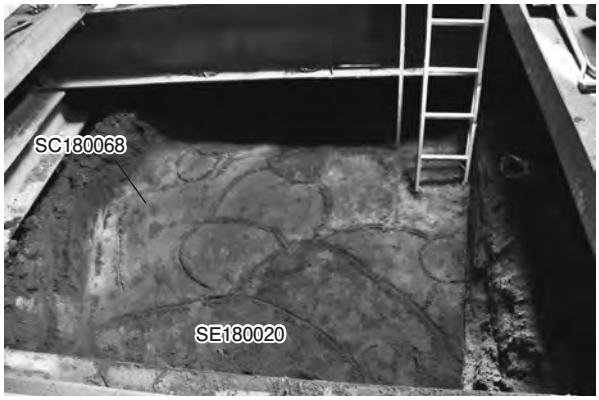


Fig.15　第３面全体図（1/150）

Ph.57　⑧ -8~11-3 面（南西から）

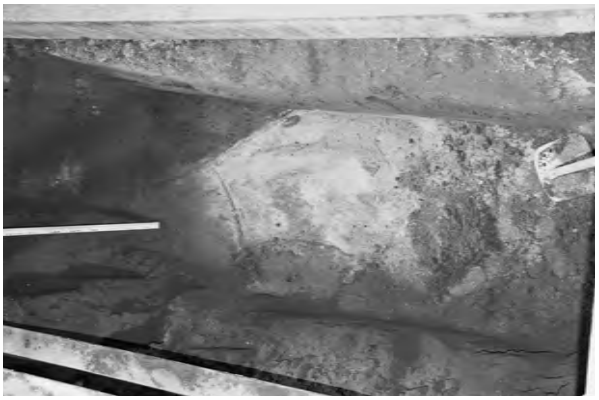
Ph.58　⑧ -12・13-3 面（北西から）



Ph.59　⑨ -11~13-3 面（北西から）

Ph.60　⑩ -8~11-3 面（南西から）

Ph.61　⑪ -9・10-3 面（南西から）



Ph.62　⑪ -11-3 面（南東から）

Ph.63　⑫ -1~4-3 面（南西から）

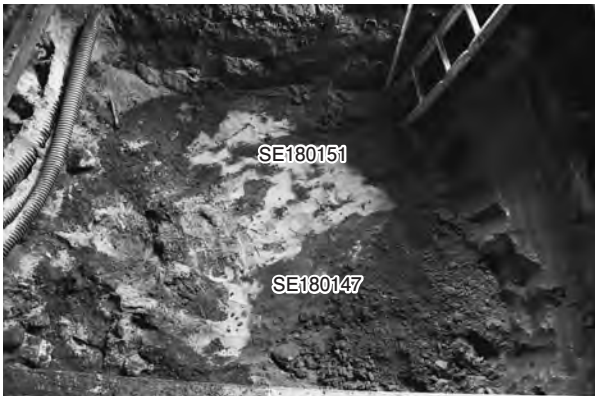
Ph.64　⑫ -7~9-3 面（南西から）

Ph.65　⑬ -1~4-3 面（南西から）

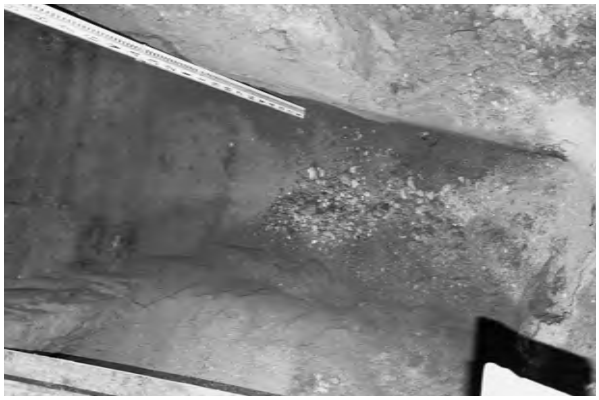
Ph.66　⑬ -7~8-3 面（南西から）

Ph.67　⑬ -9~10-3 面（南西から）

Ph.68　⑬ -11~13-3 面（南東から）



Ph.69　⑬ -15~17-3 面（南東から）



Ph.70　⑭ -3~5-3 面（南西から）

Ph.71　⑭ -8~10-3 面（南西から）

Ph.72　⑭ -11~13-3 面（南東から）

Ph.73　⑭ -15~17-3 面（南西から）

Ph.74　⑮ -2~4-3 面（南西から）

Ph.75　⑮ -6~9-3 面（南西から）

Ph.76　⑮ -10~13-3 面（南西から）

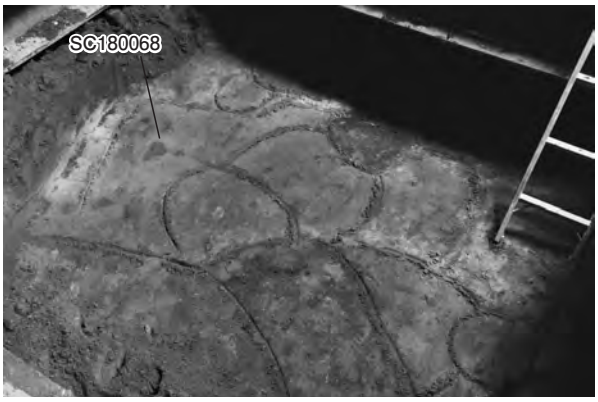
Ph.77　⑮ -15~17-3 面（南西から）

で入っており、遺構は削平される。それ以外は良好な状況で遺存しており、検出した主な遺構は弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴住居跡 2 軒、土坑、ピット、古代の土坑、ピット、11 世紀後半の溝 1 条、11 世紀後半から 12 世紀前半の土坑、ピットである。

（1）竪穴住居跡（SC）

SC180023（Fig.15　Ph.60）　調査区中央⑩ -10・11 に位置し、西側では確認することができなかった。深さは約 50cm を測る。覆土は茶褐色砂質土で、多量の土器が出土する。確認した東側の壁面は、長さ 1.2m である。

出土遺物（Fig.16）　139 は布留式土器の口縁部片で、体部内面は削りで調整する。140 は赤焼土



Ph.78　SC180068（西から）

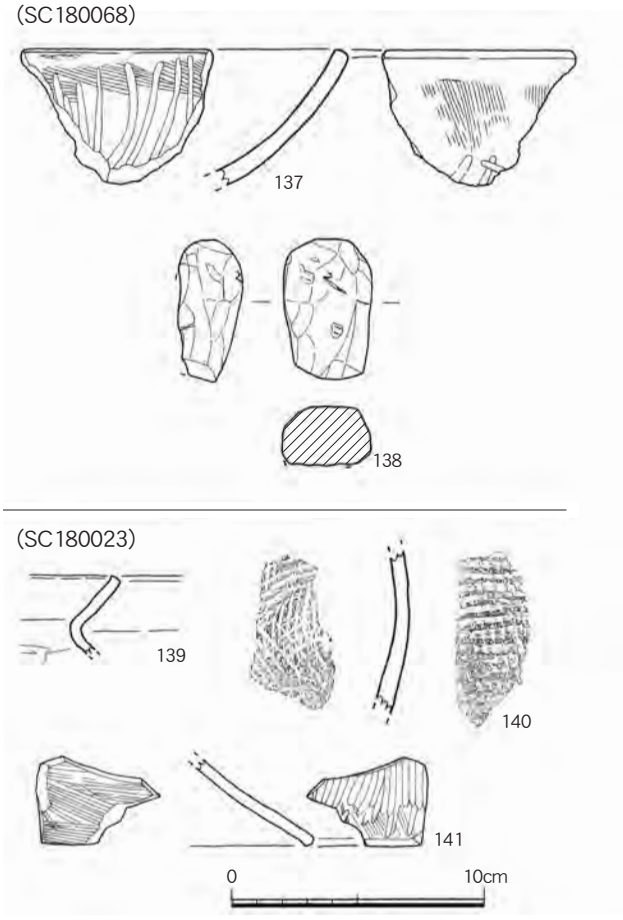


Fig.16　SC180023･180068 出土遺物実測図（1/3）

器の体部片で、外面は格子目、内面は当て具痕が残る。141 は土師器の高坏の脚部片で、脚端部は沈線状に窪む。内外面刷毛目で調整した後、外面は縦方向の磨きを施す。竪穴住居からは赤焼土器が 1 点出土するが混入と考えられる。他は全て古墳時代前期の遺物である。

SC180068（Fig.15　Ph.59・78）　調査区中央⑨ -11~13 に位置し、西側は SE180020 に切られる。平面プランは方形を呈し、南北方向 2.3m、東西方向 1.5m 以上を測る。覆土は茶褐色シルトを主体とし、深さは約 30cm を測る。

出土遺物（Fig.16）　137 は弥生土器の鉢で、外面は刷毛目の後、工具による強いナデを施す。内面は刷毛目調整の後、中位から下半はナデを行った後、縦方向の暗文を入れる。138 は軽石で、砥石として利用され、研磨により細かい面を多くもつ。重さは 10.39g を量る。他に古墳時代の土師器が多量に出土し、竪穴住居の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

（2）溝（SD）

SD180075（Fig.15　Ph75・79）　調査区西側⑮ -8・9 に位置し、北側は SK180084 に切られ、南側は確認することができなかった。長さ 1.5m、幅 1.0m、深さは約 20cm を測り、断面は「U」字状を呈する。覆土は暗茶褐色シルトである。遺物は須恵器と土師器の細片が出土するのみである。

SD180130（Fig.15　Ph.67・80）　調査区西側⑬ -9~11 に位置し、北側、南側は別の遺構に切られる。長さ 3.8m、深さは約 30cm を測り、断面は「U」字状を呈する。覆土は北側が黄褐色シルト、南側は茶褐色シルトである。

出土遺物（Fig.17）　142~145 は土師器である。142・143 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径 7.9cm、10.5cm、器高 1.3cm、1.0cm を測る。142 は外底部に板状圧痕を有する。ともに色調は白橙色、外底面のみ明橙色を呈する。143 の底部には墨書が残る。144・145 は丸底坏で、口径 15.0cm、15.6cm、器高 4.0cm、3.3cm を測り、ともに外底部に板状圧痕を有する。内面は丁寧にナデで調整され、工具痕が残る。146 は下層の土器の混入で、土師器の高坏である。他に白磁Ⅳ・Ⅴ類が出土するが、回転ヘラ切り底の土師器しか出土しないことから、土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

Ph.79　SD180075（南西から）

Ph.80 SD180130（南西から）

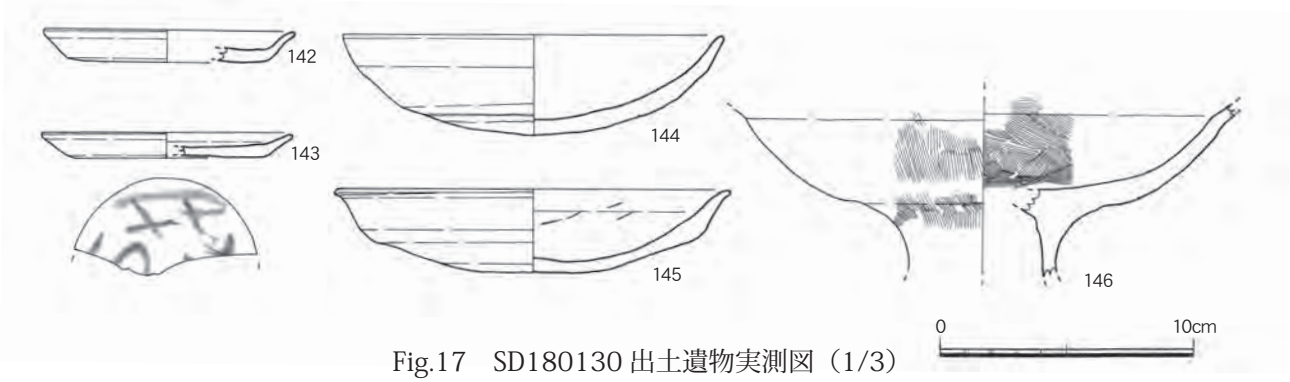
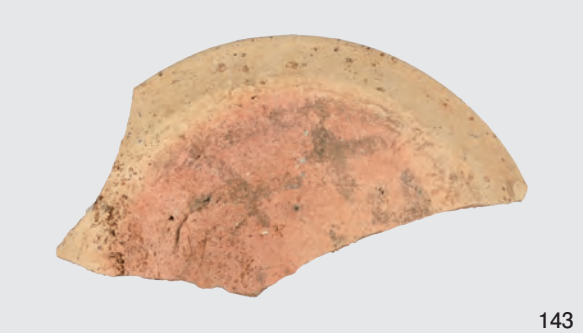


Fig.17　SD180130 出土遺物実測図（1/3）



Ph.81　SD180130 出土遺物

（3）土坑（SK）

SK180047（Fig.15　Ph.57）　調査区東側⑧-10・11 に位置し、西側は検出することができなかった。平面プランは円形を呈し、直径 1.1m を測る。深さは 15cm で、覆土は灰色シルトである。

出土遺物（Fig.19）　147 は土師器の小型丸底壺で、外面下半は削り、上半は丁寧なナデの後、縦方向の細かい磨きを施す。胎土に白色砂粒を含み、色調は明橙色を呈する。他に土師器小片が出土し、土坑の時期は古墳時代前期と考えられる。

SK180048（Fig.15　Ph.57・82）　調査区東側⑧-11・12 に位置する。隅丸方形を呈し、長辺は 1.5m、短辺は 1.0m を測り、深さは 25cm である。覆土は黒色粘質土で、炭化物、焼土を含む。土坑からは、遺存状況のよいシカの頭骨・上腕骨・橈骨・脛骨やイノシシの下顎が出土する。シカの骨にはナタの痕跡が残り、解体されたものと考えられる。

出土遺物（Fig.19）　148 は回転ヘラ切り底の小皿で、完形品である。口径 9.2cm、器高 1.6cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土は精良で、白橙色を呈する。149・150 は白磁皿Ⅳ-2 類で、口縁部は横方向に屈折する。149 は口径 10.4cm、150 は 13.1cm を測る。151 は白磁壺の口縁部片で、口縁は肥厚し、下方へ折れる。灰橙色の胎土に黒みがかった灰白色の釉がかかる。152 は施釉陶器の盤で、内面は鉄絵を描く。他に瓦器、須恵質土器、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類が出土する。回転ヘラ切り底の土師器しか出土しないため、土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

Ph.82　SK180047・180048（南西から）

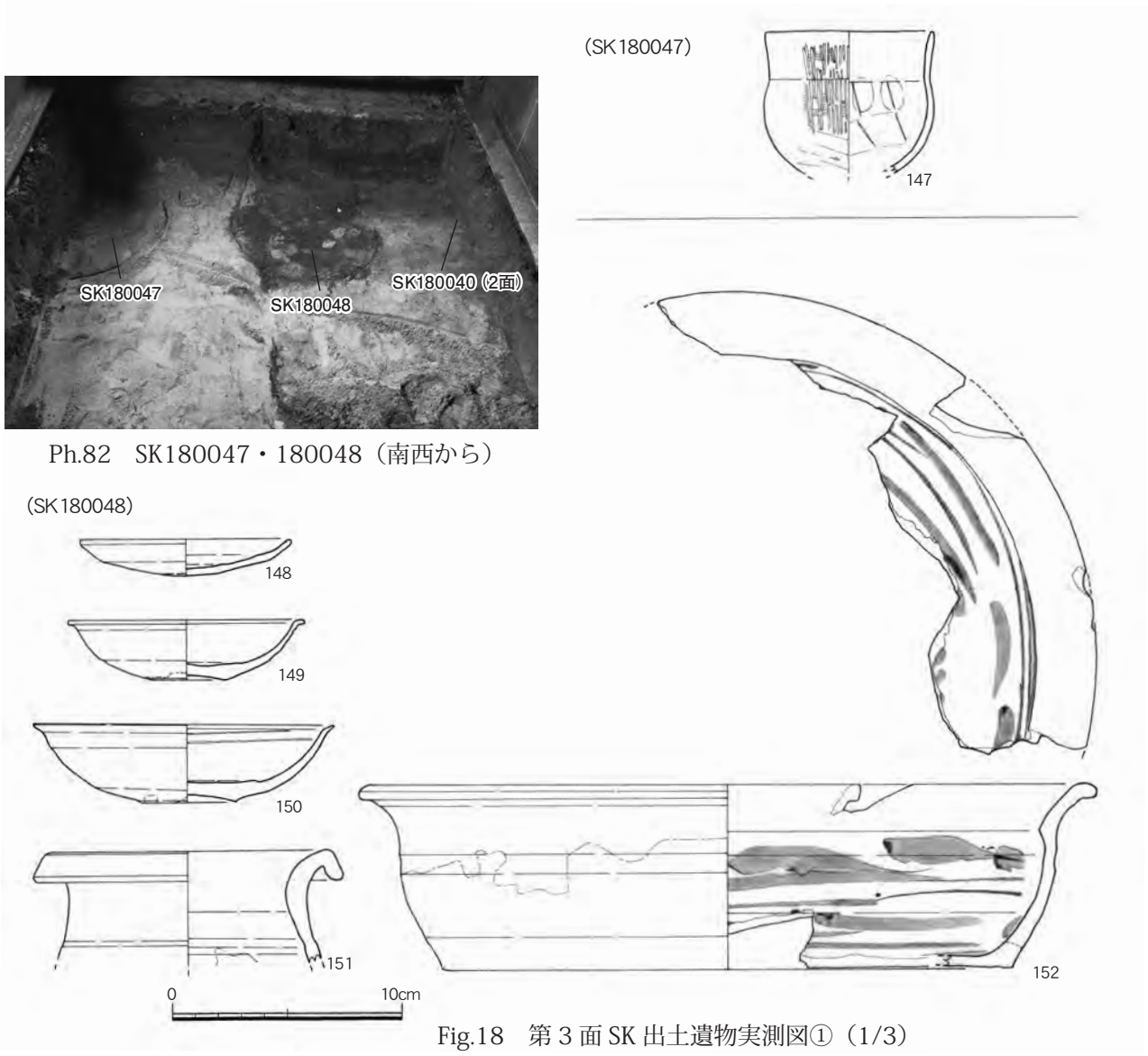


Fig.18　第３面 SK 出土遺物実測図①（1/3）

SK180084（Fig.15）　調査区西側⑮ -9・10 に位置し、東側は H 鋼に阻まれ調査できなかった。平面プランは楕円形を呈し、長辺約 1.3m、短辺 0.85m、深さ 30cm である。覆土は暗茶褐色シルトを主体とし、底面は平坦である。

出土遺物（Fig.18）　153 は弥生土器の鉢で、体部外面は縦方向の刷毛目、内面は縦方向の工具によるナデ、口縁部は横方向のナデで調整する。他に土師器の甕が出土し、土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

SK180085（Fig.15　Ph.76）　調査区西側⑮ -9~11 に位置し、西側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈すると考えられ、現況で、一辺 1.9m 以上を測る。深さは約 60cm で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は暗茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.18）　154 は弥生土器の小型の鉢で、底部は丸底を呈する。内外面ともに刷毛目で調整され、口縁部外面は横方向のナデを行う。155 は弥生土器の大甕の口縁部片で、頸部に台形の突帯を巡らせ、X 状に刻みを施す。他に布留式土器の甕の小片が出土し、土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

SK180161（Fig.15）　調査区中央⑫ -11・12 に位置し北側は SE180158 に切られ、東側では確認できなかった。平面プランは円形を呈し、深さは約 50cm を測る。覆土は灰褐色土である。

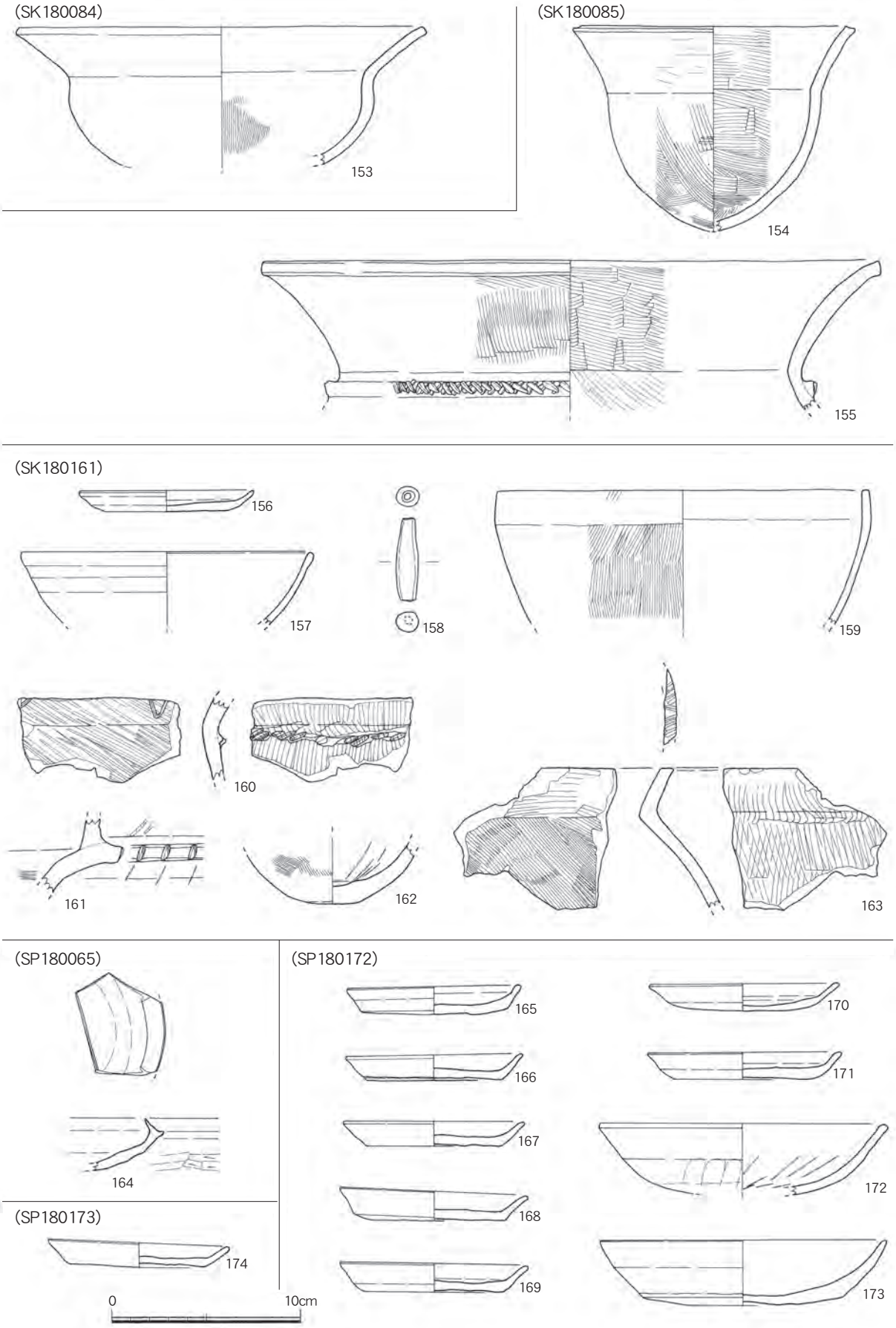


Fig.19　第 3 面 SK 出土遺物実測図②（1/3）

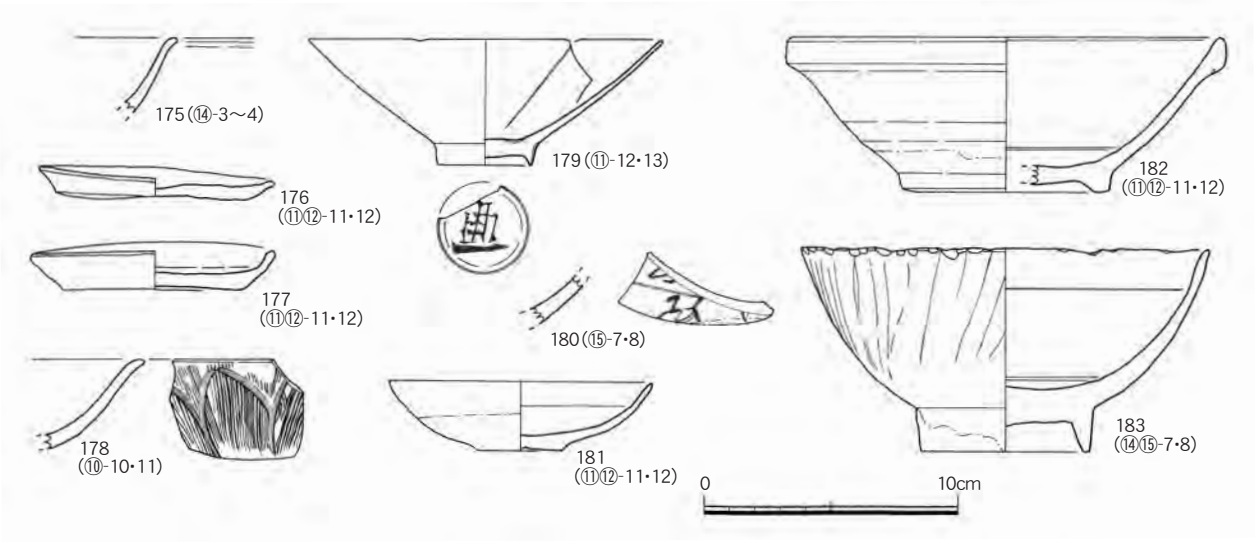


Fig.20　第 1~2 面包含層出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.18）　156 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、復元口径 9.4cm、器高 1.1cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土は精良で、白橙色を呈する。157 は白磁碗Ⅱ類の口縁部片で、全面に細かい貫入が入る。158 は管状土錘の完形品で、5.89g を量る。159~163 は下層遺物の混入である。159 は土師器の鉢、160 は弥生土器の大甕の頸部片で、頸部下には幅の一定しない偏平な突帯を貼り、刻みを施す。内面には篦で文様が描かれる。内外面ともに粗い刷毛目で調整する。161 は複合口縁壺の小片で、外面には刻み目を施す。162 は弥生土器の甕の底部片で、小さな平底を呈する。内面は工具によるナデ、外面は刷毛目で調整する。胎土に角閃石を含む。163 は弥生土器の甕の口縁部片で、内外面ともに粗い刷毛目で調整し、口縁端部はジグザグ状の暗文を入れる。土坑の時期は 12 世紀前半頃と思われるが、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物も多量に出土する。

（4）ピット（SP）

SP 出土遺物（Fig.19）　164 は SP180065（⑨ -13）出土の返りを有する須恵器の坏身である。底部はヘラ削りで調整する。内面には篦記号の一部が残る。165~173 は SP180172（⑫ -11）出土の土師器で、166 は完形品、165・172 はわずかな欠損である。他も接合で、完形近くまで復元できる。165~171 は回転ヘラ切り底の小皿で、口径は 9.2~10.3cm、器高 1.3~1.8cm を測り、165~167・170・171 は外底部に板状圧痕を有する。色調はすべて白橙色を呈する。172・173 は丸底坏で、口径 15.4cm、15.2cm、器高 3.5cm を測る。174 は SP180173（⑫ -12）出土の回転ヘラ切り底の土師器の小皿である。胎土に 5mm 大の赤褐色粒を含み、色調は明橙色を呈する。

5）その他の出土遺物（Fig.20~22　Ph.83）

175~183 は 1~2 面の包含層出土遺物である。175 は防長産の緑釉陶器、176・177 は回転ヘラ切り底のほぼ完形の土師器の小皿で、外底面をナデで仕上げる。178 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ -6a 類、179 は青白磁の碗で、輪花と白堆線をもち、高台内に墨書を有する。180~183 は白磁である。180 は碗の体部片で、化粧土が施され、外面には篦で文様を描く。181 は皿Ⅵ -1a 類、182 は碗Ⅳ -2a 類、

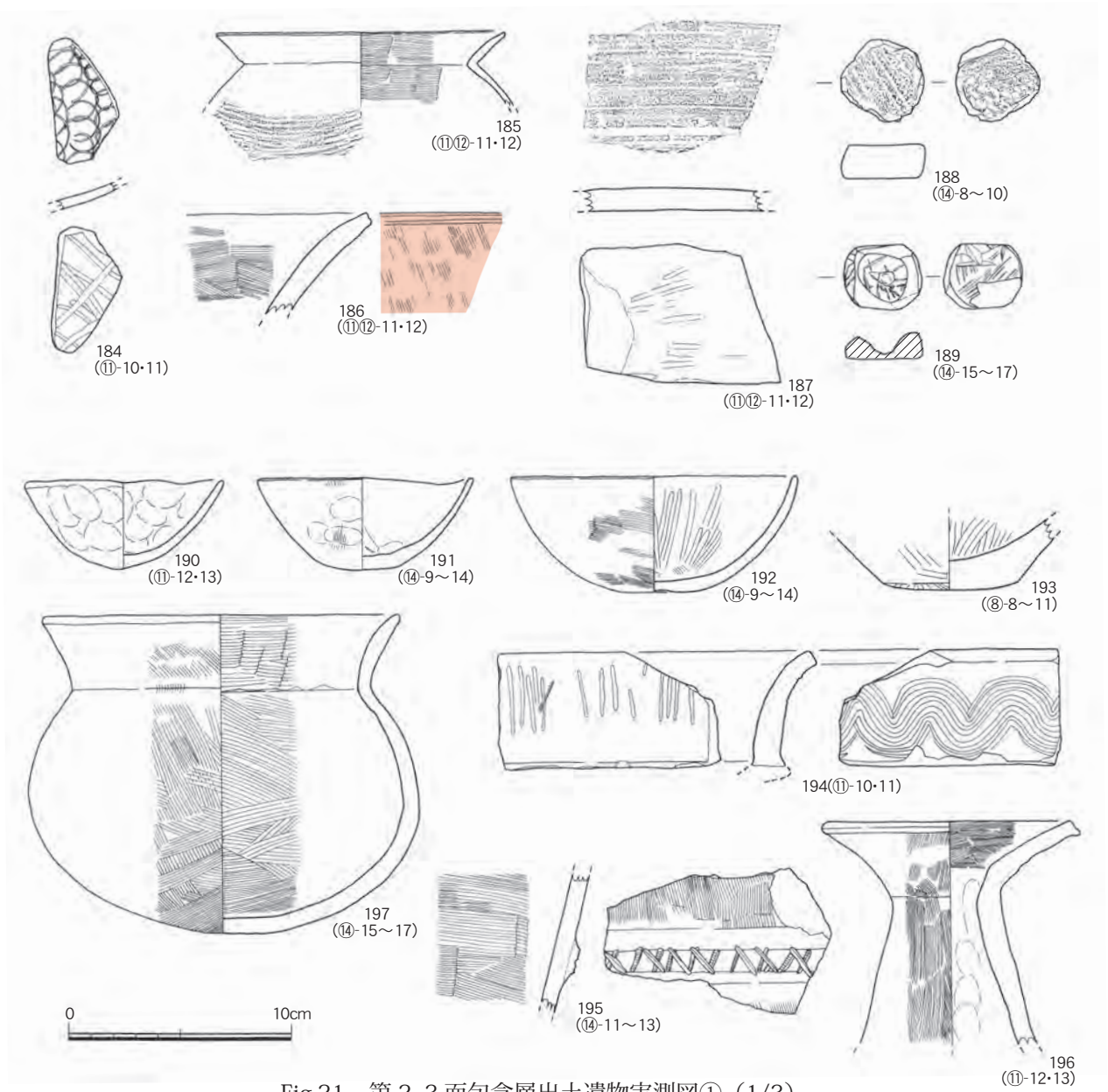


Fig.21　第 2~3 面包含層出土遺物実測図①（1/3）

Ph.83　包含層出土遺物①

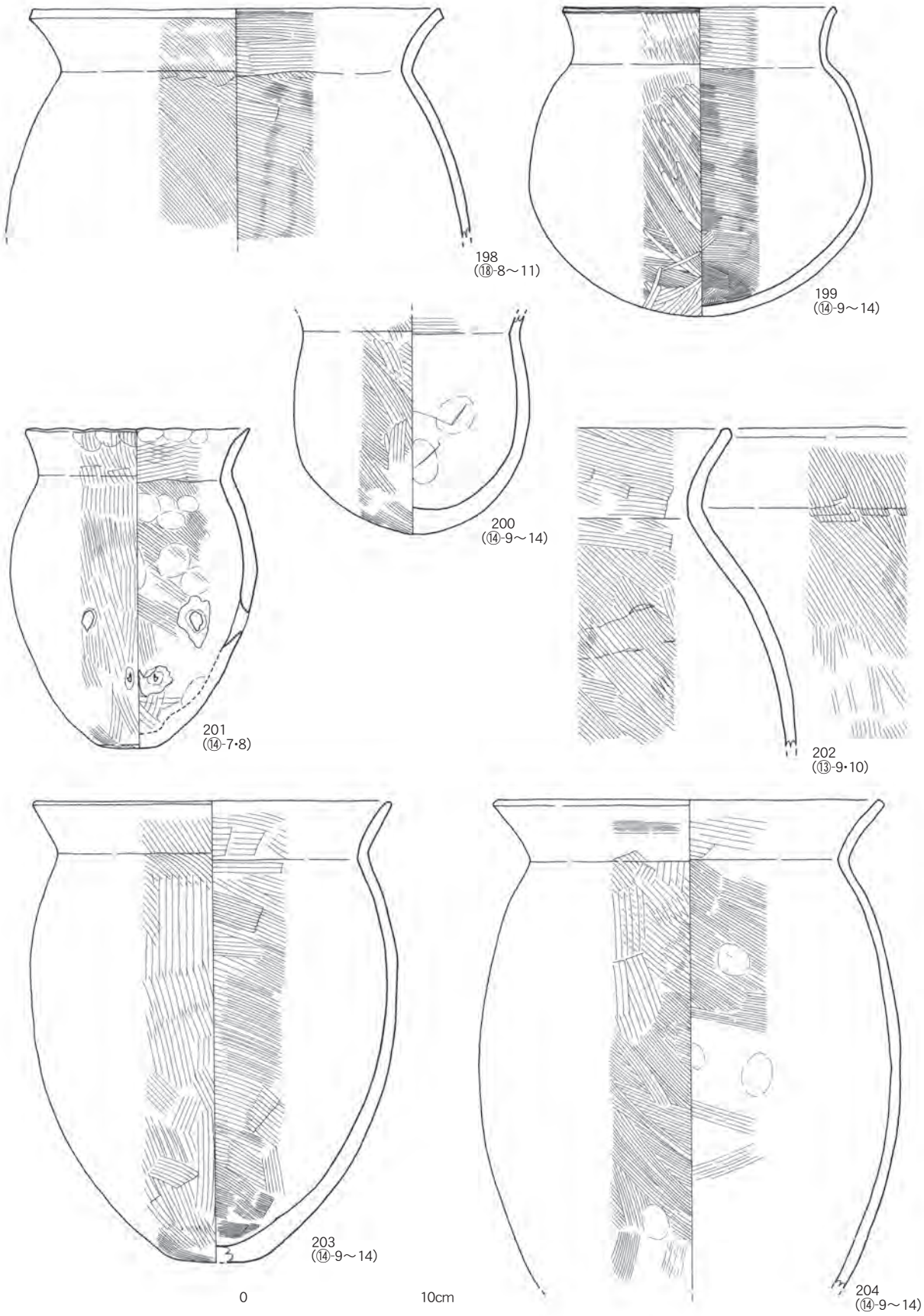


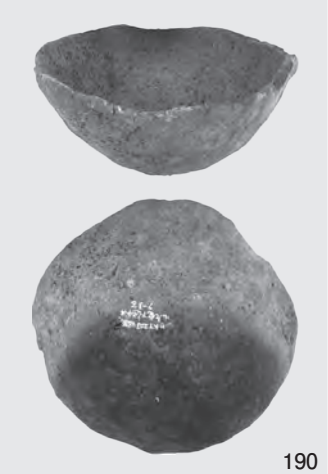
Fig.22　第 2~3 面包含層出土遺物実測図②（1/3）

183 は碗Ⅴ -2b 類で、焼成後、口縁部を細かく打ち欠く。

184~204 は 2~3 面の包含層出土遺物である。184 は土師器の皿で、内面に円弧文を描く。185 は布留式土器の甕の口縁部片で、外面に煤が付着する。186 は円筒埴輪の小片で、外面に赤色顔料が塗られる。187 は土師質の平瓦、188 は須恵質の平瓦を用いた瓦玉で、重さは 26.44g である。189 は方形を呈し、中央が抉られ、容器状を呈した滑石製品で、18.44g を量る。やや赤みを帯びた色調を呈する。190~204 は弥生土器である。190・191 は完形の手捏ね土器の鉢、192 は鉢で、内面は縦方向の研磨が施される。193 は凸レンズ状の壺の底部片で、外面に煤が付着する。194 は二重口縁壺の口縁部で、外面は波状文を描き、内面は縦方向の研磨を施す。195 は壺の体部片で、台形状の突帯に刻目を入れる。196 は器台である。197~204 は甕で、197・199 は胴部に丸味をもつ小型の甕である。200・201 は小型の甕で、201 は内面を 2 箇所薄く剥離し、穿孔する。198・202~204 はなで肩で、長胴形の体部をもち、底部は凸レンズ状を呈する。199・200・204 の外面には煤が付着する。

6）小結

18 区は 203 次調査において、古砂丘の頂部から東側の緩斜面に位置する。時間的制約を受けた立会調査で、かつ夜間の調査となったため、詳細を把握することは困難であった。しかしながら、予想以上に遺構の遺存状況は良好で、周辺の調査と同様、弥生時代後期から近世にかけての遺構を検出した。弥生時代終末から古墳時代前期にかけては、方形の竪穴住居跡 3 件を確認した。規模が判明するものは、一辺 2.3m を測る小型のもののみである。この後、古代まで遺構数は激減するが、調査区からは特筆すべき遺物として赤色顔料を施した円筒埴輪の破片が少数ながら出土する。付近で古墳等は発見されていないが、存在がうかがえる。古代は 9 世紀から 10 世紀の溝や土坑を検出した。その後、11 世紀後半から 12 世紀にかけて、井戸 6 基、溝 1 条を確認し、遺構は調査区全面に広がる。また、土師器が集中して出土する廃棄土坑もみられる。SE180135 の井側からまとまって出土した白磁は、福建省の窯のもので、底部の器壁は厚く、体部の器壁は 2.5mm と非常に薄く、外面は蓮弁文、内面は箆による片彫りと櫛目で文様を描くものであり、出土例としては少ない。また、SE180135 の井側からは、イヌと考えられる骨が出土しており、11 区の SE110002 からほぼ全身が出土しているイヌとあわせ、井戸の祭司を考えるうえで、興味深い。



Ph.84　包含層出土遺物②

20. 19 区の調査

1）立会の概要

対象地は、西工区の西半部、第 8・2・3 調査区の周りの島状に残った調査期間確保不能な未調査区である。覆工板工事終了後で GL 下 3.5m の本工事 1 次掘削は始まっており、一部は覆工板を開けて、上部から重機による掘削に立ち会うことができたが、大部分は覆工板下で調査終了区の掘削を終了後の、幅 3m の覆工板単位での横からの重機での掘削となった。オペレーターにお願いし、バケットの奥行き約 50㎝単位で 3m 幅をタテに垂直に掘削を行い、断面に現れた遺構を略測し、これを先に数度繰り返して、図上で平面形を記録する手法で実施した。このため、50㎝以下の遺構は記録がとれず、数 m 単位の大きな土坑・井戸の記録が中心となっている。記録は測量基準点が確保できないため 3 × 1m の覆工板列縦横に番号を振り、これを基準として略測している。また、間近で重機が稼働するため、安全管理上、発掘作業員の導入も行わず、職員のみで立会を行った。

立会は、2017 年 4 月 7 日から東の⑮・⑯ 8･9 列から開始し（1 区）、北の 14 ～ 16 列を西に掘削し（2 区）、㉓まで掘削が終了した段階で、南の⑲～㉒の 3 区、㉓ ～ ㉖ 7・6 列に移り（4 区）、最後に㉔ 12 ～ 16 列を立会、5 月 18 日に終了した。4 月 7 日・8 日･10 日･11 日 ･20 日 ･24 日･5 月 11 日・12 日 ･13 日 ･15 日 ･18 日の延べ 18 日間に及んだ。面積は 142㎡である。

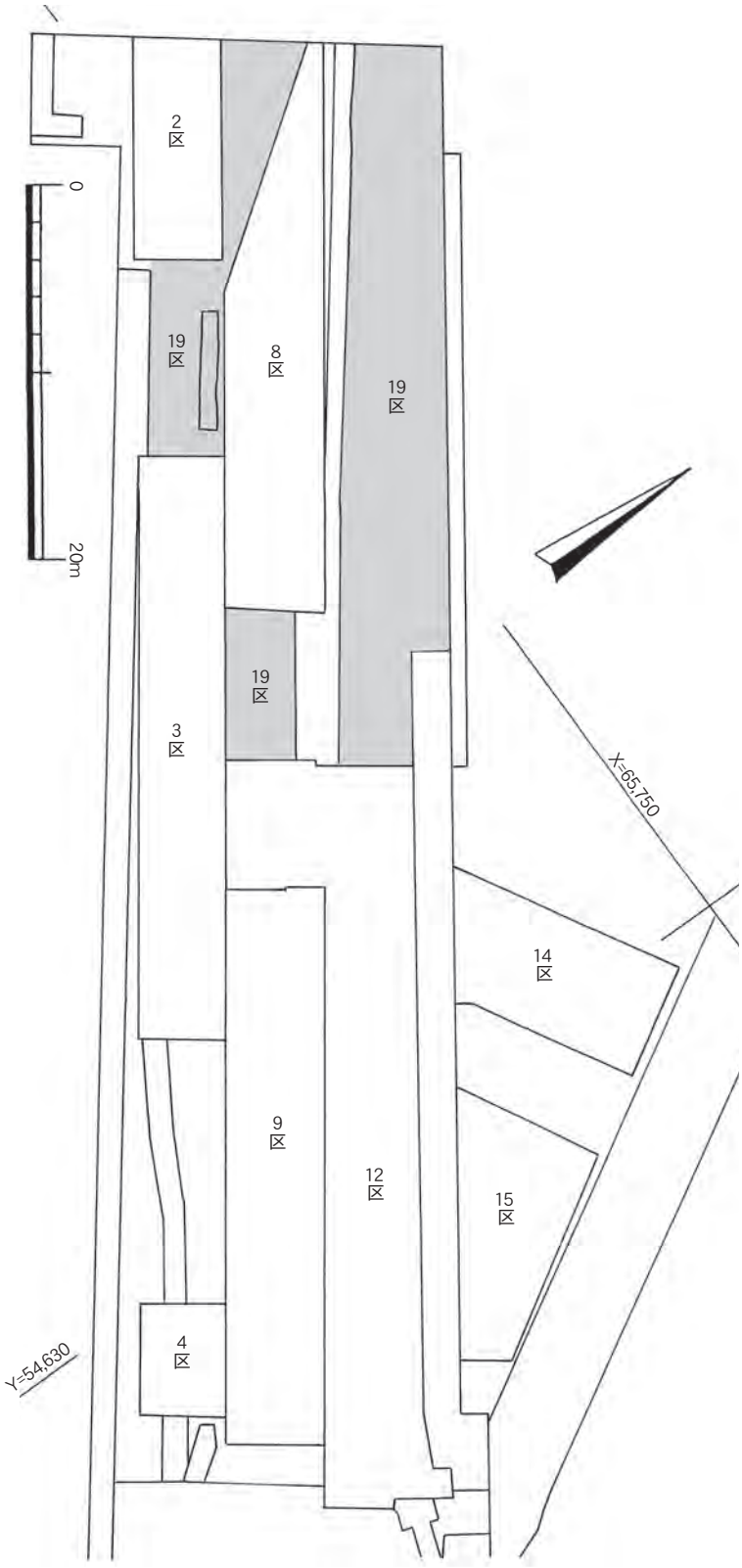


Fig.1　19 区調査区位置図（1/400）

2）遺構

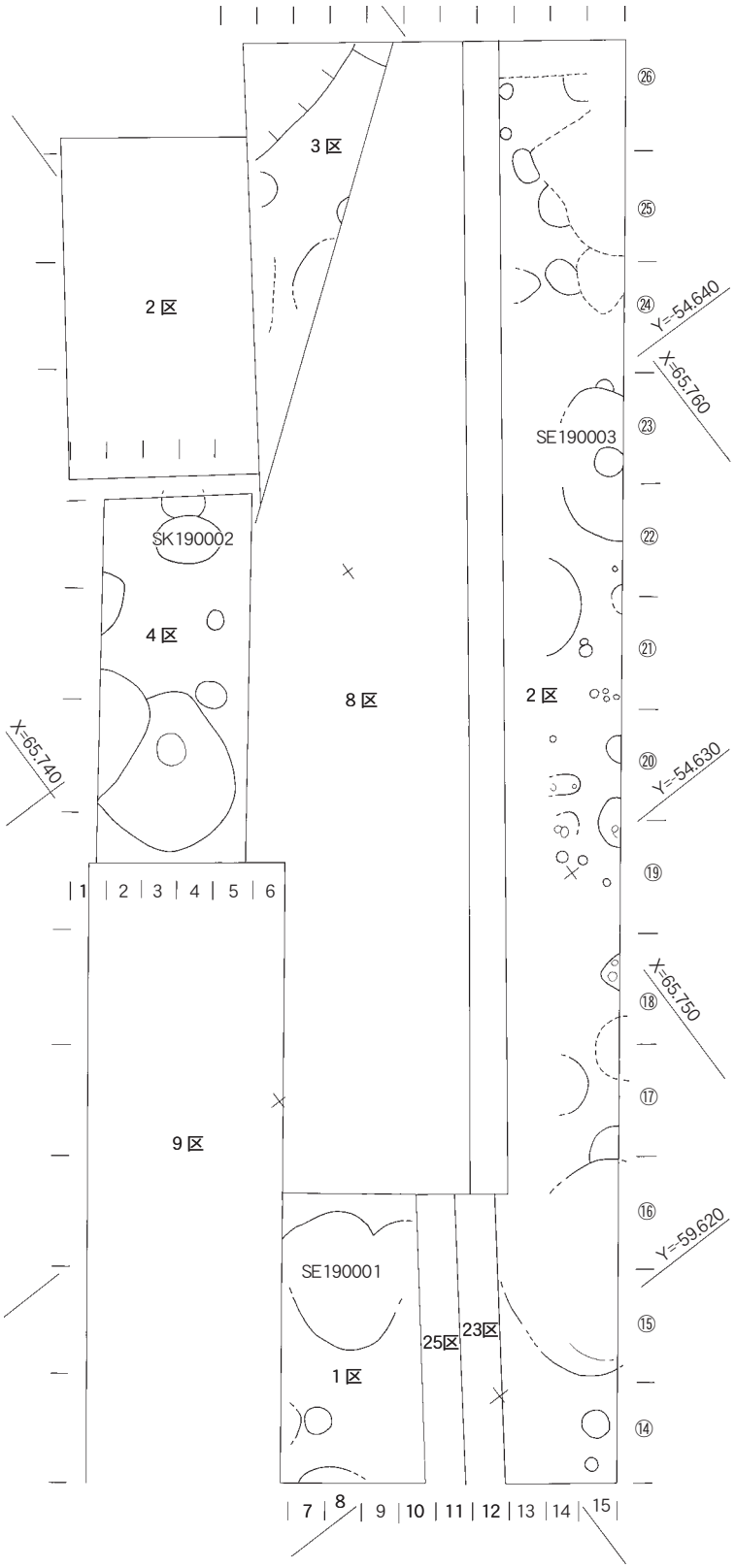


Fig.2　19 区全体図（1/200）

検出した遺構は 1 区で、径 3.8m の井戸 SE190001 と 1 ～ 2 m前後の土坑 3 基、2 区で径 4.2m の井戸 SE190003 と他井戸 2 基、土坑 15 基と柱穴 24 基、3 区で径 4.3m と 3.8m の井戸 2 基、径 2m の土坑 SK100002 と土坑 3 基と柱穴 2 基、4 区で 8 区の SK080487 と SK080473 の続きを、他に径 1 ～ 2m の土坑 3 基を確認した。井戸 3 基は桶井側の井戸である。

遺物は SE190001 から汲田式の大型甕棺片を、SK100002 から十瓶山焼と土師器甕の小片を、SE190003 から、青磁碗・瓦質捏鉢・獣骨片を検出している。他に⑭ 7 ～ 9 で中国陶器の大甕片と汲田式の大型甕棺片、⑮ 7 ～ 9 で同じく大型甕棺片を、⑳ 14・15 で山陰系土師器甕小片を、㉔ 13 ～ 15 で土師器甕片を、㉕ 13 ～ 15 で古式土師器甕小片を、㉕㉖ 6 ～ 15 で白磁碗・中国陶器甕・瓶、平瓦、古式土師器甕、終末期の弥生土器甕、叩石の小片を検出している。

Ph.1　作業風景（西から）

Ph.2　SK190002 断面（北から）

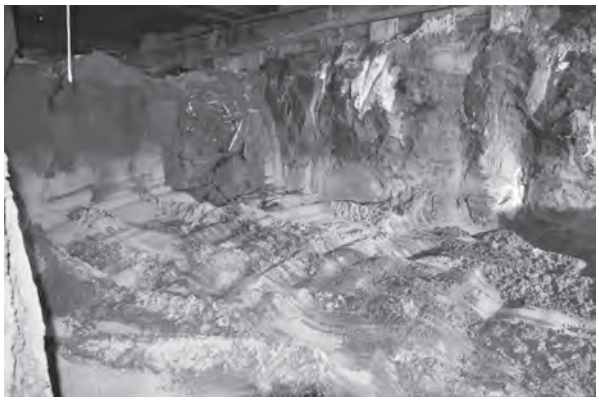
Ph.3　⑲ -1 ～ 3 ブロック井戸断面（東から）

Ph.4　⑳ -1 ～ 3 ブロック井戸断面（東から）

Ph.5　⑲ -4・5 ブロック井戸断面（北から）

Ph.6　⑳ -4・5 ブロック井戸断面（北から）

Ph.7　㉒-1 ～ 3 ブロック土坑断面（東から）



Ph.8　㉔-13 ～ 15 ブロック土坑断面（東から）

Ph.9　㉕-13 ～ 15 ブロック土坑・撹乱断面（東から）

Ph.10　㉖-12 ブロック包含層断面（南から）

Ph.11　㉖-14 ～ 15 ブロック土坑断面（南から）

3）小結

今回の調査では、1 区で、中世の井戸 1 基と土坑 3 基、2 区で 12 世紀後半の井戸 1 基と中世の井戸 2 基、土坑 15 基と柱穴 24 基、3 区で中世の井戸 2 基、12 世紀前半までの土坑 SK1 基と土坑 3 基、柱穴 2 基、4 区で 8 区の弥生終末期の SK080487 と古墳前期の SK080473 の続きを、他に径 1 ～ 2m の土坑 3 基を確認した。井戸 6 基中 3 基は桶井側の井戸である。工事掘削中の排土からの遺物の回収が殆どで、埋土の土色から大部分は中世と思われるが、多くの遺構の時期を詳細に比定できない。

遺物は他に汲田式の大型甕棺、十瓶山焼甕、土師器甕、青磁碗、瓦質捏鉢、獣骨、中国陶器の大甕山陰系土師器甕、古式土師器甕、白磁碗、中国陶器甕・瓶、平瓦、終末期の弥生土器甕、叩石の小片を検出している。

21．20 区の調査

1）20 区の概要・基本層序（Fig.1、2）

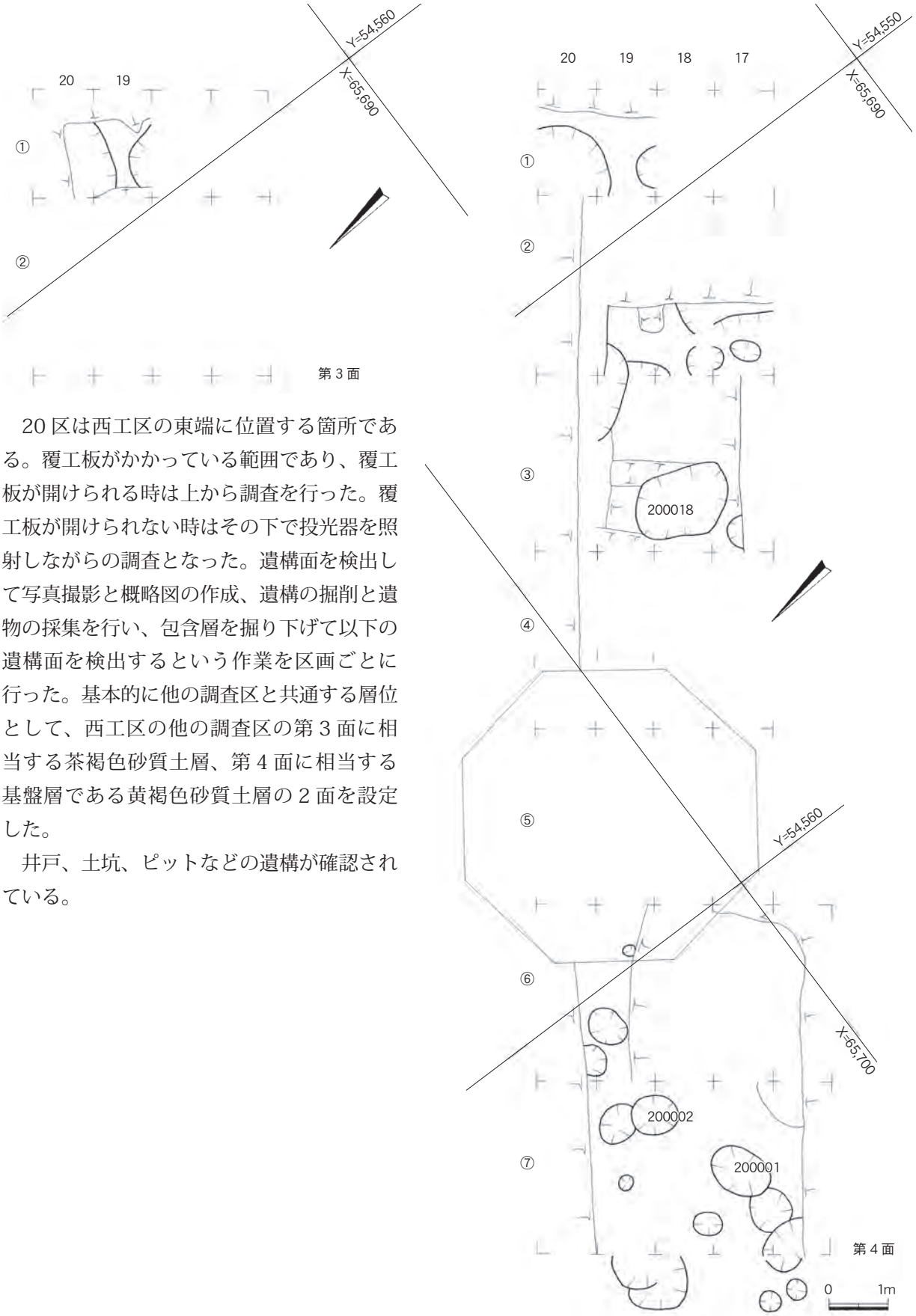


Fig.1　第 3・4 面遺構平面図 1（1/100）

20 区は西工区の東端に位置する箇所である。覆工板がかかっている範囲であり、覆工板が開けられる時は上から調査を行った。覆工板が開けられない時はその下で投光器を照射しながらの調査となった。遺構面を検出して写真撮影と概略図の作成、遺構の掘削と遺物の採集を行い、包含層を掘り下げて以下の遺構面を検出するという作業を区画ごとに行った。基本的に他の調査区と共通する層位として、西工区の他の調査区の第 3 面に相当する茶褐色砂質土層、第 4 面に相当する基盤層である黄褐色砂質土層の 2 面を設定した。

井戸、土坑、ピットなどの遺構が確認されている。

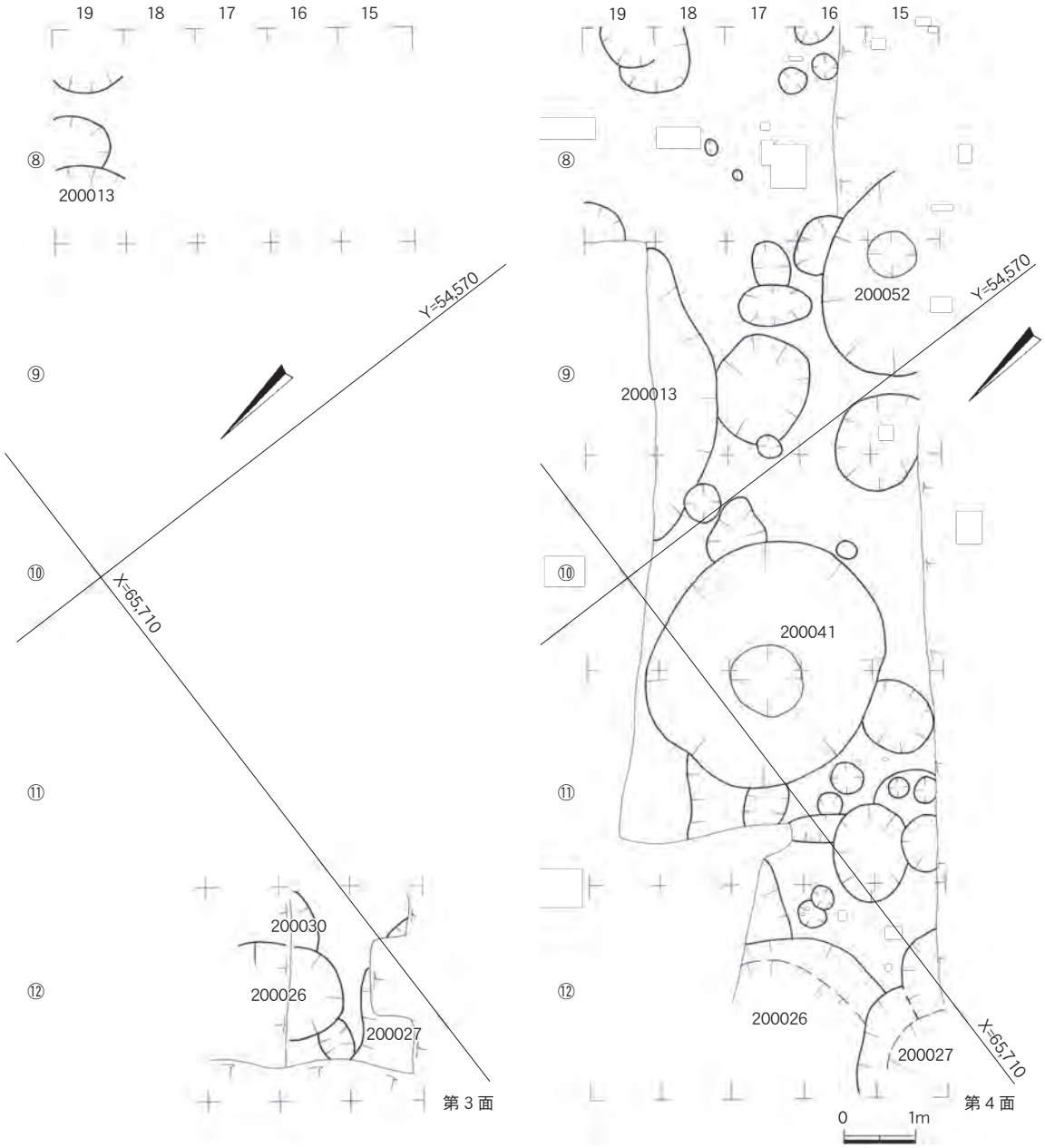


Fig.2　第３・４面遺構平面図２（1/100）

2）遺構と遺物

（1）遺構

SK200001（Fig.1）　17 －⑦区第４面で検出した。長軸 1m、短軸 0.8m の土坑状遺構。11 世紀後半から 12 世紀前半。

出土遺物（Fig.3・1~3）　1、2 は白磁碗。復元口径 16.2、17.8㎝、器高 6.1、6.8㎝、底径 5.5、7.5㎝。2 は器壁がやや外湾する。1 は胴部下半から外底にかけて露胎、2 は外底が露胎となる。1、2 ともに胎土は灰白色を呈するが、1 は釉が青緑色を帯びた透明釉、2 は灰白色を呈する釉がかかる。3 は土師器坏。復元口径 14.2㎝、残存高 3.0㎝。灰褐色を呈する。底部は回転ヘラ切り、内面はミガキで調整される。

Ph.1　200001・200002　4 面検出（東から）

SK200002（Fig.1）　18、19 ― ⑦ 区 第 4 面で検出した。径 1.2m の平面円形の土坑状遺構。11 世紀後半から 12 世紀前半。

出土遺物（Fig.3・4~6）　4 は白磁碗。胴部下半の残存。底径 6.2㎝。外底は露胎。灰黄白色の胎土に灰黄色の釉がかかる。5 は土師器坏。復元口径 15.0㎝、残存高 3.7㎝。内面はミガキ調整。灰茶色を呈する。6 は土師器の高坏脚部。外面はミガキ調整がなされる。褐灰色を呈する。

SE200013（Fig.2）　18、19 ― ⑧、⑨、⑩第 4 面で検出した。掘方の径が 5m は超える井戸になると思われる。検出面から 1m 程度掘削したが、さらに深くなる。古い時期の遺物も混じるが、11 世紀後半 ~12 世紀前半頃。

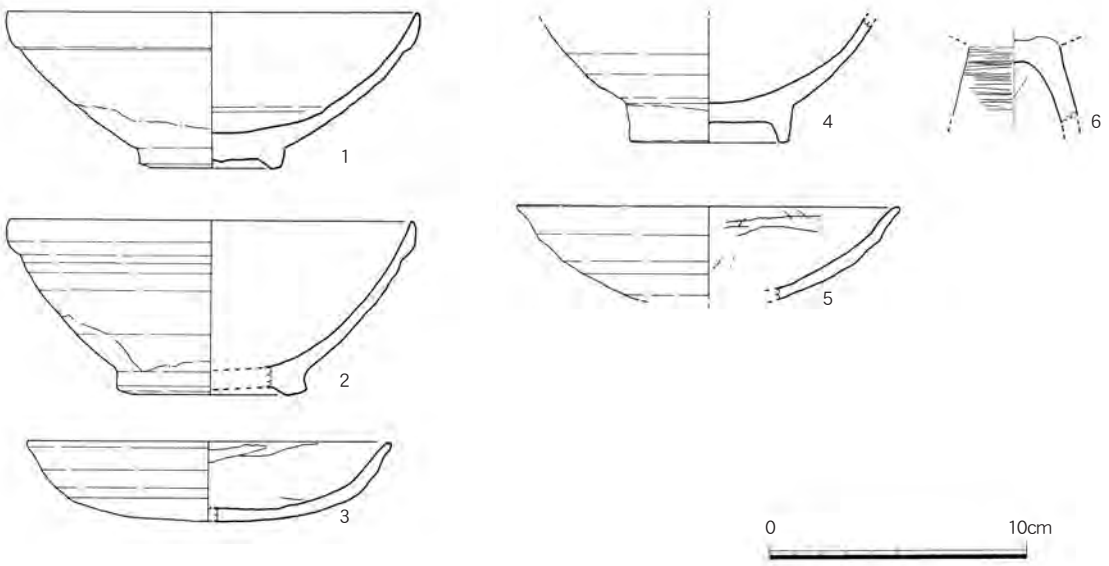


Fig.3　200001・200002 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.4）　7~10 は白磁。7~9 は碗。7 は復元口径 14.0㎝、器高 4.6㎝、底径 5.4㎝。内面にヘラによる文様が施文される。灰白色の胎土に灰色の透明釉がかかる。高台外面まで釉がかかり、高台内部は露胎となる。8 は復元口径 15.4㎝、残存高 4.0㎝。淡灰色の胎土に透明釉がかかる。9 は復元口径 13.4㎝、残存高 3.9㎝。灰白色の胎土に灰色の釉がかかる。胴部外面下半は露胎となる。

Ph.2　200013　3 面検出（東から）

10 は皿。淡灰色の胎土に灰色の透明釉がかかる。碁笥底を呈するが、底部外面は露胎となり、接する部分は化粧土が巡る。11、12 は土師器坏。11 は復元口径 14.2㎝、器高 4.4㎝。内外面はミガキ調整がかかる。淡灰黄色を呈する。12 は底部付近。高台がつく。内外面はミガキ調整がかかり、淡橙色を呈する。13 は製塩土器の底部。復元底径 5.3㎝。外面は赤褐色、内面は灰褐色を呈する。14 は須恵器の坏蓋。

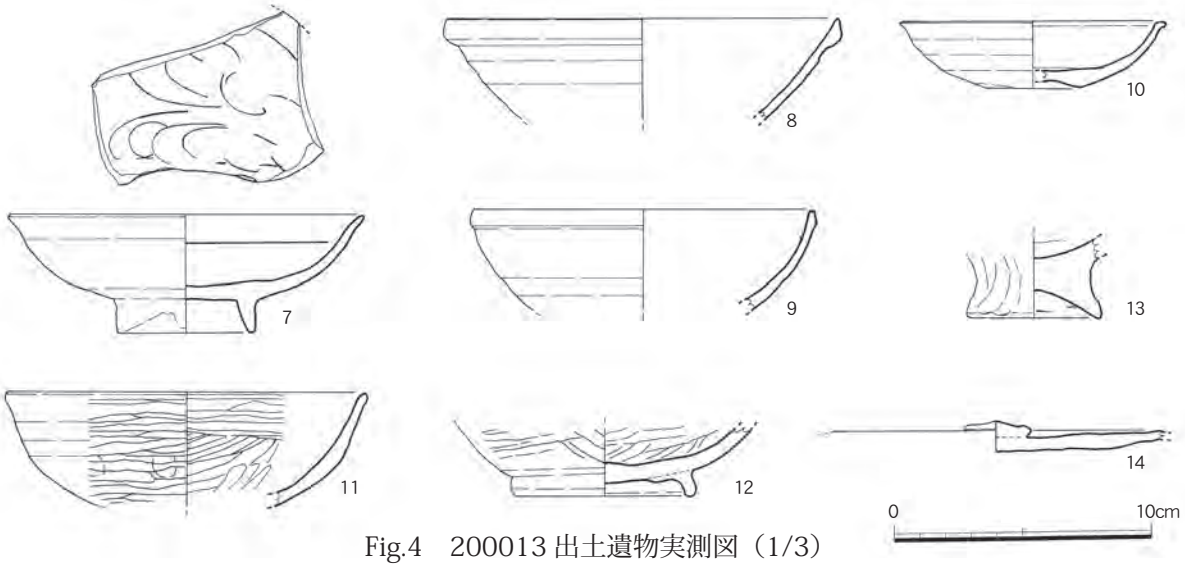


Fig.4　200013 出土遺物実測図（1/3）

SK200018（Fig.1）　17、18、19 －③区の第 4 面で検出した。長軸 1.5m、短軸 1.2m の平面隅丸方形の土坑状遺構。出土遺物は断片的であるが、弥生時代終末から古墳時代初頭頃。

出土遺物（Fig.5）　15、16 は壷の口縁部。15 は内外面にハケメ調整がなされる。口縁部下に突帯が巡ると思われる。16 は外面に一部ハケメが見られるがナデ調整される。おそらくこれも口縁部かに突帯が巡る。17、18 は甕口縁部。17 は外面に刷毛目が見られるが、ナデ消される。18 はナデ調整。19 は壷か甕の胴部。刻み目の入った突帯がつく。内外面にハケメ調整が入る。20 は不明土製品。方形板状製品の一部であろう。残存長 5.2㎝、残存幅 3.4㎝、厚さ 1.3㎝。一部剥離した跡がある。

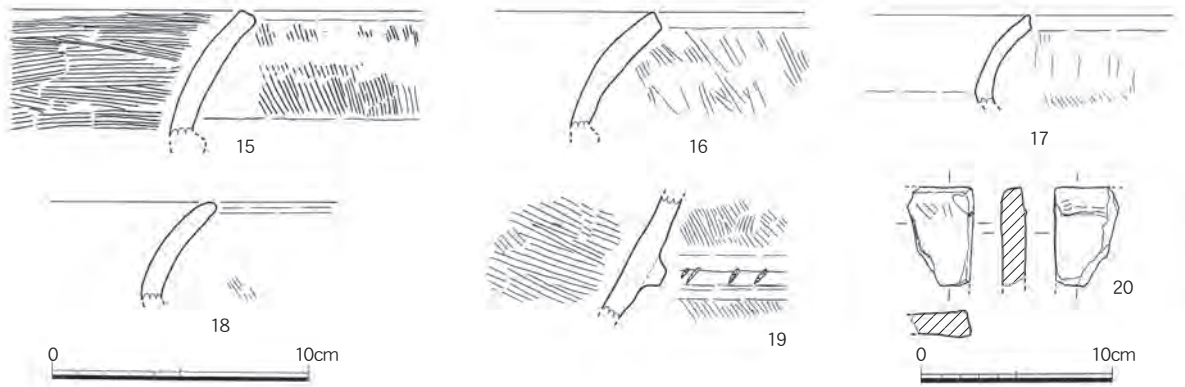


Fig.5　200018 出土遺物実測図（1/3・1/4）

SE200026（Fig.2）　15~17 －⑫区第 3 面で検出した。半径が 2m 以上になる掘方の井戸と思われる。暗灰褐色の埋土。1m 以上掘削したがさらに深くなる。11 世紀後半から 12 世紀前半頃の白磁が多いが、土鍋も出土しており、16 世紀頃の撹乱を受けている可能性がある。

出土遺物（Fig.6）　21~25 は白磁。21 は碗。復元口径 15.5㎝。残存高 3.8㎝。淡灰色胎土に灰色の釉がかかる。22 は復元口径 12.7㎝、器高 5.6㎝、底径 5.2㎝。淡灰色の胎土に灰色の透明釉がかかる。底部付近は化粧土で仕上げられ、釉は高台外部までかかる。口縁端部はやや外反する。23 も碗。胴部から底部。復元底径 6.4㎝、残存高 3.9㎝。灰白色の胎土に黄色味を帯びた釉がかかる。底部付近から外底は露胎となる。24 は皿。復元底径 5.3㎝。灰白色胎土に灰色の釉がかかる。外底は露胎となる。25 は碗底部。復元底径 5.2㎝。灰黄白色胎土に淡青色の釉がかかる。高台外面までかかるが高台内部は露胎となる。高台内部に墨書が見られる。26 は瓦質土器の鍋。復元口径 29.2㎝、残存高 6.4㎝。

Ph.3　200026・200027　4 面検出（東から）

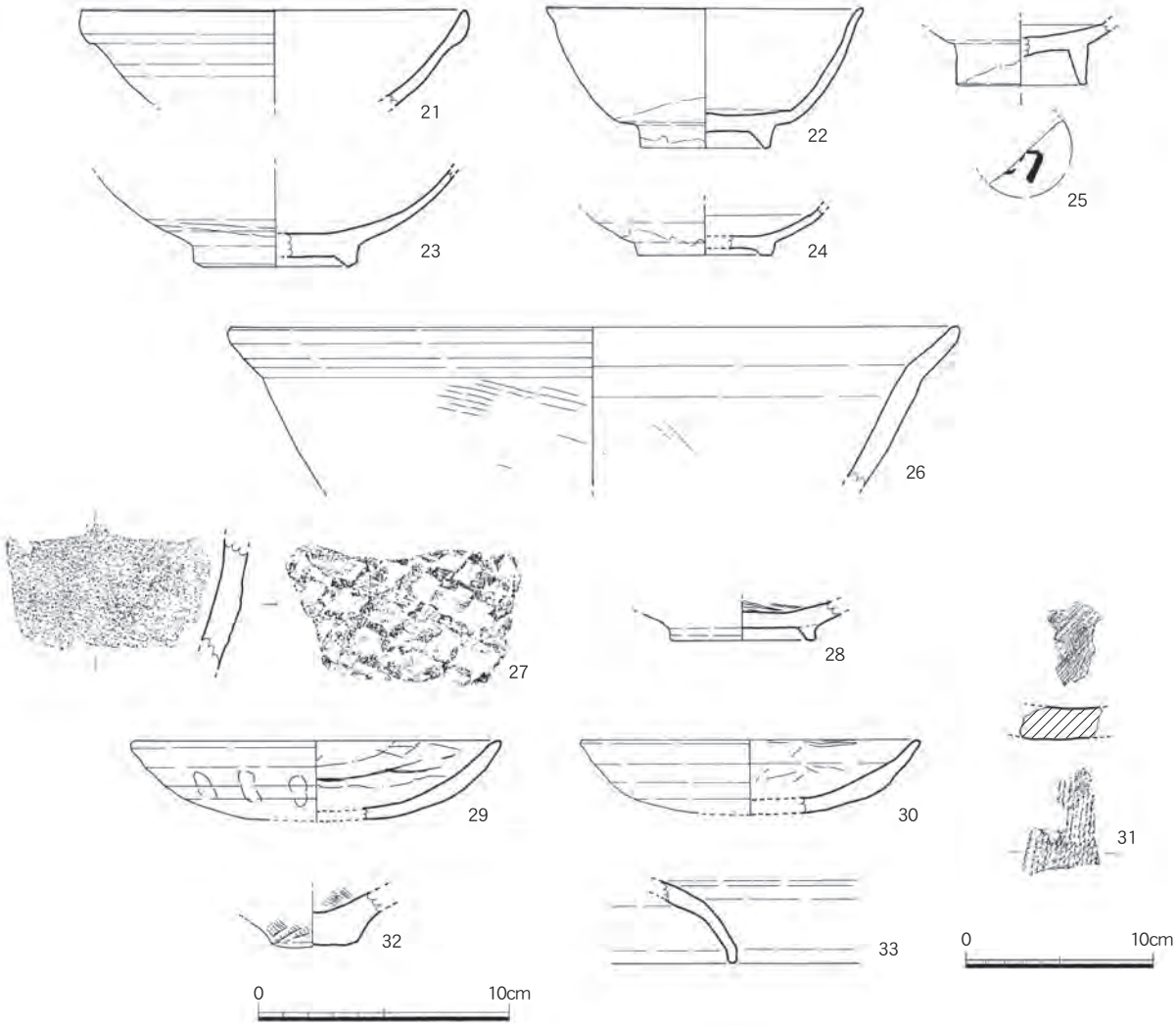


Fig.6　200026 出土遺物実測図（1/3・1/4）

暗灰色を呈する。27 は土師質の鍋か。外面にタタキ痕が残る。すすが付着する。28 は瓦器碗の底部。底径 5.3㎝。内面はミガキ調整がなされる。淡灰色から暗灰色を呈する。29、30 は土師器坏。29 は復元口径 19.8㎝、器高 3.2㎝。内面はミガキ調整、外面は下半は指抑え痕が残る。底部はヘラケズリで板圧痕が残る。橙茶色を呈する。30 は復元口径 13.6㎝、残存高 2.9㎝。内面はミガキ調整、外面はナデ仕上げで底部はヘラケズリである。黄白色を呈する。31 は平瓦。内面は縄目、外面は布目痕が残る。32 は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器の鉢の底部。ハケメ調整が見られる。底径 3.5㎝。33 は井筒から出土した。須恵器坏蓋。灰黒色を呈する。

SE200027（Fig.2）　15、16 －⑫区第 3 面で検出した。200026 に隣接する。これも全体の形状は不明であるが、井戸の掘方であると考える。暗灰褐色の埋土。200026 を切っていることから 200026 より新しい時期となる。

出土遺物（Fig.7）　34~37 は白磁。34 は碗。復元口径 17.7㎝、残存高 5.3㎝。黄白色の胎土に黄白色の透明釉がかかる。35 は碗の口縁部。外面にヘラによる施文が見られる。灰色の胎土に灰色の釉がかかる。36 は碗の底部。底径 6.4㎝。灰黄色の胎土に黄白色の釉がかかる。底部は露胎となる。高台内部に墨書「綱・(花押か)」が見られる。37 は碗底部。復元底径 7.8㎝。黄白色胎土に黄白色釉がかかる。底部は露胎となる。38 は中国陶器の壷または水注と考えられるが、ガラス質が付着し坩堝として使用されていたと思われる。暗灰色の胎土で黄白色のガラス質が内外面に付着する。39 は高麗陶器の壷口縁部。復元口径 19.0㎝、残存高 4.0㎝。灰黒色を呈する。内外面はナデで仕上げられる。40 は中国陶器鉢口縁部。外面は灰色、内面は暗紫茶色を呈する。41 は中国陶器壷または甕の底部。坩堝として使用されていたと思われる。暗灰色を呈するが、内外面に黄白色のガラス質が付着する。42、43 は瓦器

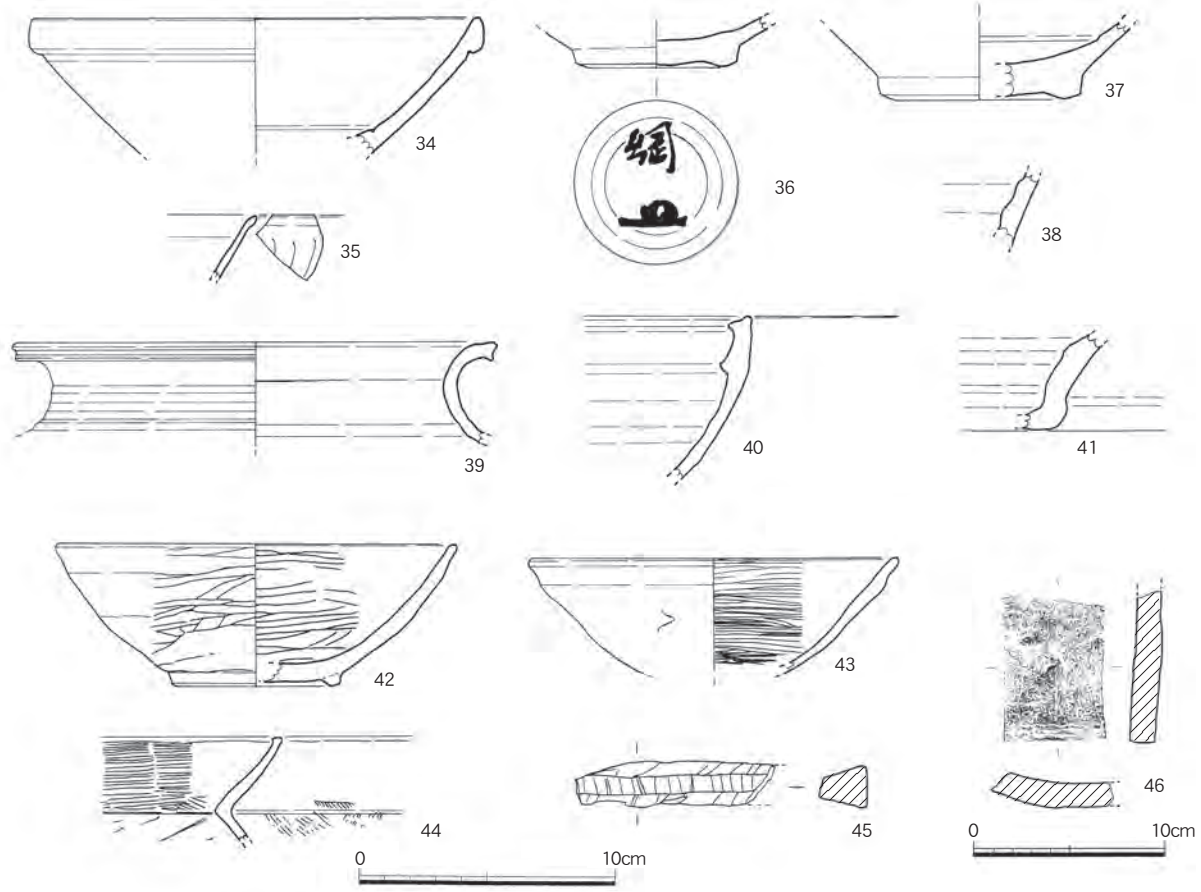


Fig.7　200027 出土遺物実測図（1/3・1/4）

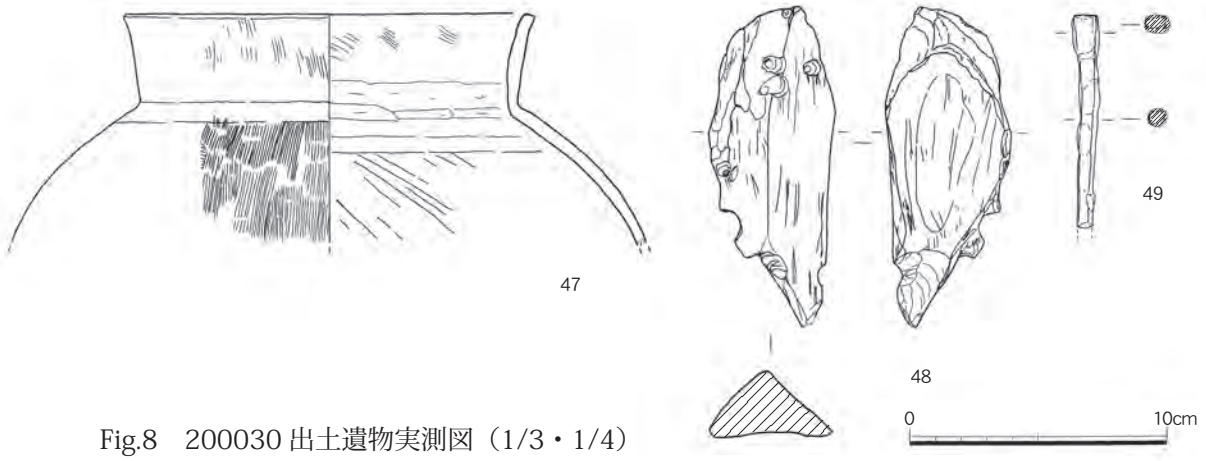


Fig.8　200030 出土遺物実測図（1/3・1/4）

碗。復元口径 15.8㎝、器高 5.5㎝、復元底径 6.6㎝。灰黒色～灰白色を呈する。内外面ともにミガキ調整。43 は楠葉型。復元口径 14.6㎝、残存高 4.5㎝。灰黒色を呈する。内面はミガキ調整、外面はナデ仕上げ。44 は古式土師器の甕口縁部。内面はハケメ、胴部内面はケズリ調整。45 は滑石製石鍋の鍔の部分。加工してある。おそらく石錘として使用したか。残長 7.6㎝。46 は平瓦。外面は布目痕が残る。

SK200030（Fig.2）　16 －⑫区第 3 面で検出した。200026 に切られている。全容の形状は不明。200026、200027 と同じく井戸の掘方の可能性もある。

出土遺物（Fig.8）　47 は弥生時代終末から古墳時代初頭の壷。復元口径 16.0㎝、残存高 9.0㎝。外面はハケメ調整、内面はナデ仕上げ。48 は砥石。3 面を砥面として使用。残長 12.5㎝、幅 5.0㎝、厚さ 2.7㎝。49 は鉄釘。残存長 8.4㎝、幅 0.5~0.9㎝、厚さ 0.4~0.5㎝。

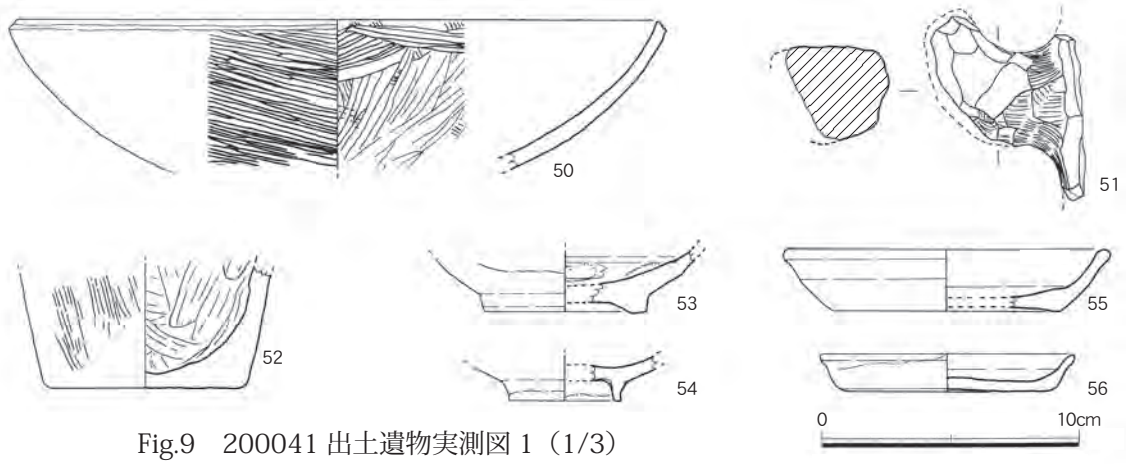
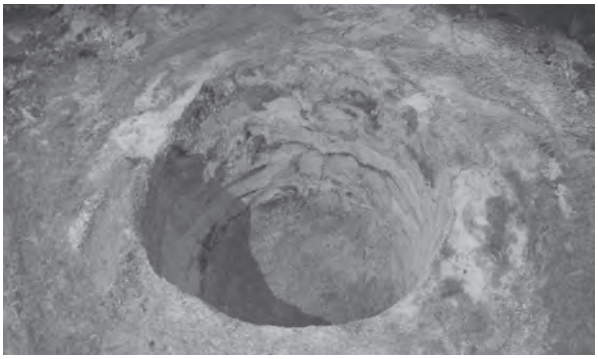


Fig.9　200041 出土遺物実測図 1（1/3）

Ph.4　200041　掘方（南から）



Ph.5　200041　井筒（南から）

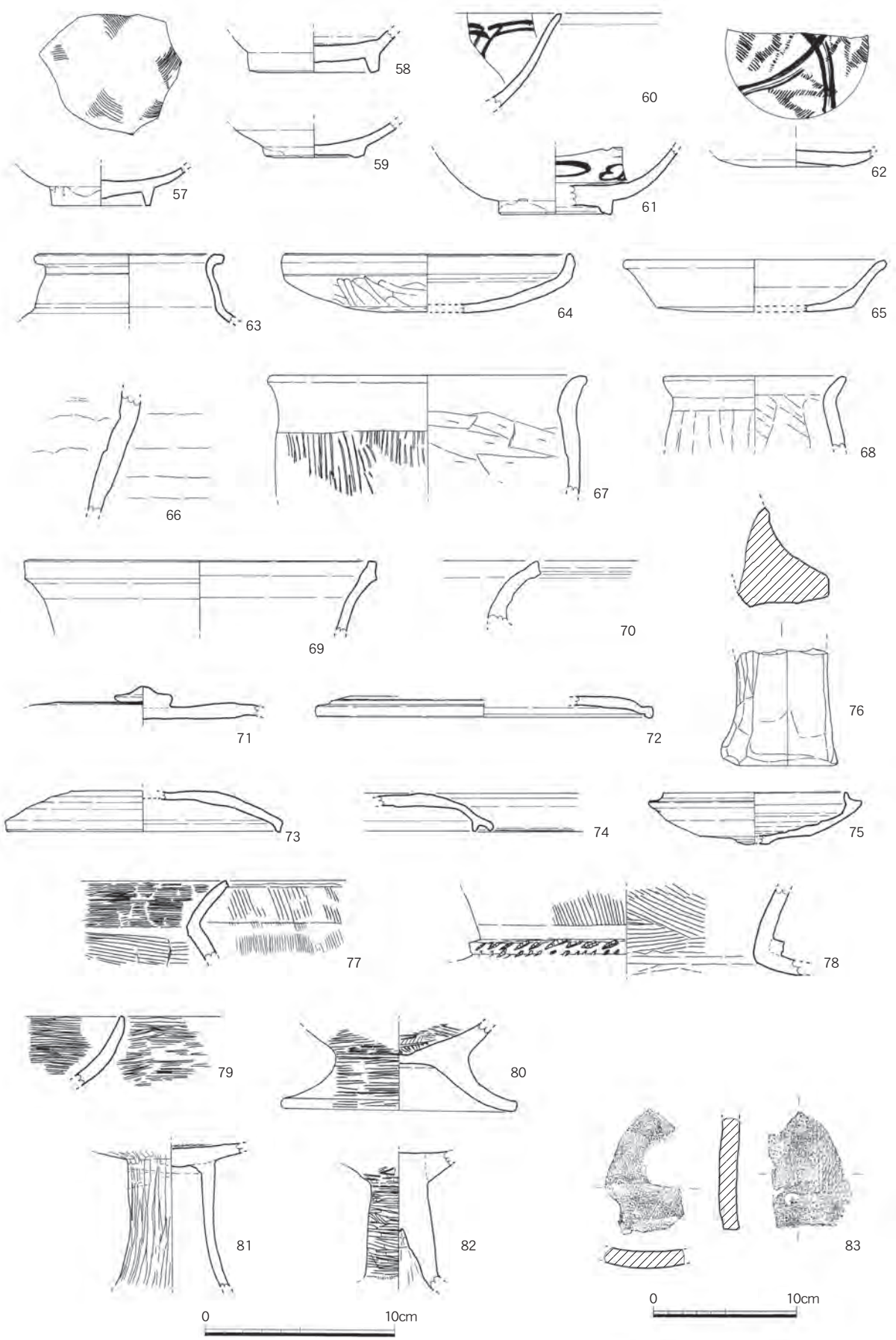
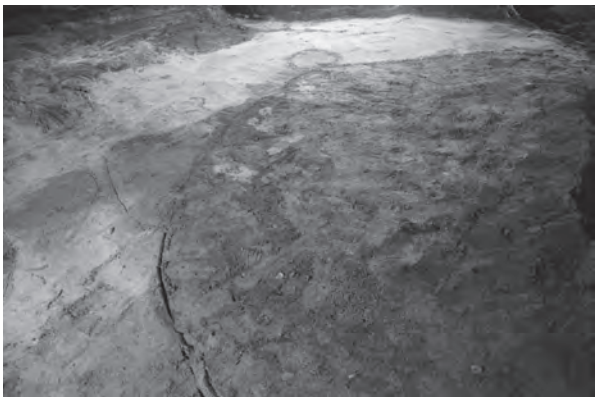
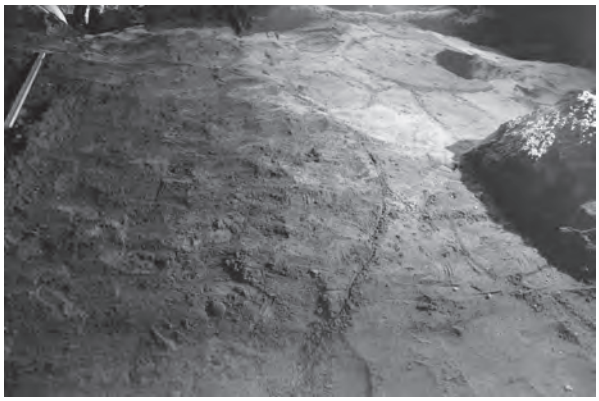


Fig.10　200041 出土遺物実測図 1（1/3・1/4）



Ph.6　200041　検出（北から）1



Ph.7　200041　検出（北から）2

SE200041（Fig.2）　16~18 ー⑩、⑪区第 4 面で検出した。径 3m の平面円形の掘方を持つ井戸。暗灰褐色の埋土。井筒も確認されている。井筒は検出面から 75㎝下で確認された。出土遺物は時期がまたがるが、出土した青磁碗の形状から埋没時期は 14 世紀頃まで下ると思われる。

出土遺物（Fig.9・10）　50~52 は掘方からの出土。50 は弥生時代終末から古墳時代初頭の鉢。復元口径 25.0㎝、残存高 5.8㎝。内外面ともにミガキ調整がなされ、灰色ないし灰黒色を呈する。51 は土師器の把手。把手の長さ 5.0㎝、厚さ約 3.8㎝。52 は弥生土器の甕底部。底径 8.0㎝、残存高 4.9㎝。外面はハケメ、内面はケズリ調整がなされる。灰茶色 ~ 灰赤色を呈する。53~56 は井筒出土。53 は白磁碗。復元底径 6.3㎝。灰白色の胎土に灰色の釉がかかる。底部は露胎。54 は龍泉窯系の青磁碗底部。復元底径 4.4㎝。淡灰色の胎土に淡緑色の釉がかかる。畳付は露胎。55 は土師器坏。復元口径 12.8㎝、器高 2.4㎝、底径 8.9㎝。糸切底で板圧痕が残る。56 は土師器皿。復元口径 10.0㎝、器高 1.5㎝、底径 8.0㎝。糸切底で板圧痕が残る。

Fig.10 はその他の 200041 から出土した遺物。57~59 は白磁。57 は碗底部。底径 5.2㎝。淡灰色の胎土に灰色の釉がかかる。内定に櫛描文が施文される。外底は露胎となる。58 も碗底部。灰白色の胎土に灰色の釉がかかる。見込み内面は輪状に釉を掻き取る。掻き取った部分と畳付周囲に白色土が薄く付着する。復元底径 6.8㎝。外底は露胎となる。高台内部に墨書の跡が見られるが、不明。59 は皿。復元底径 5.2㎝、残存高 1.8㎝。淡灰色胎土に灰色の釉がかかる。高台底部は露胎。60~62 は青磁。60 は龍泉窯系青磁碗口縁部。内面にヘラ彫りによる施文がなされる。灰色の胎土に灰緑色の透明釉がかかる。61 は碗の底部。復元底径 6.0㎝。灰色の胎土に灰緑色の透明釉がかかる。高台畳付から高台内部は露胎となる。内面にヘラ彫りの施文がなされる。62 は同安窯系の青磁皿。底径 4.8㎝。内面に片切り彫りと櫛描きによる施文がなされる。灰色胎土に暗灰緑色の透明釉がかかるが底部外面は露胎。63 は中国陶器の壷。復元口径 10.0㎝。灰茶色の胎土に灰黄色の釉が内外面にかかる。64 は土師器坏。復元口径 15.5㎝、器高 3.1㎝。内面はミガキ調整がなされ、外面は工具によるナデ調整がなされる。灰色から橙色を呈する。65 は土師器坏。復元口径 13.8㎝、器高 2.7㎝、底径 10.4㎝。糸切底で板圧痕が残る。66 はガラス坩堝。外面は灰茶色を呈し、内面に淡緑色や黄白色のガラス質が付着する。67 は土師器甕。復元口径 16.8㎝、残存高 6.3㎝。淡黄茶色を呈する。外面はハケメ、内面はケズリ調整。68 は土師器甕。復元口径 9.6㎝、残存高 3.7㎝。外面はナデ調整、内面は工具によるナデ調整がなされる。明橙茶色を呈する。69~75 は須恵器。69、70 は須恵器壷の口縁部。69 は復元口径 18.5㎝。内面は灰緑色、外面は黒灰色を呈する。70 は内面灰黒色、外面は暗紫北を呈する。71、72 は須恵器の蓋。灰色を呈する。72 は復元口径 17.6㎝。73、74 は須恵器坏蓋。口径 14.5㎝。暗灰茶色 ~ 暗茶色を呈する。74 は一部の残存。暗茶色を呈する。75 はかえりのつく坏身。復元口径

9.6㎝。黒灰色を呈する。76 は移動式竈の鍔の部分。残存高は 6.2㎝。暗灰茶色から黒灰色を呈する。77 ～ 82 は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器。77 は甕口縁部。内外面ともにハケメ調整。暗褐色を呈する。78 は壷の頸部付近。頸部と胴部の境目に刻み目の入った突帯が巡る。橙茶色を呈する。内外面ともにハケメ調整。79 は高坏か。内外面ともにハケメ調整。赤褐色。80 は脚付き鉢。底径 12.4㎝。外面は

Ph.8　200051　4 面検出（南から）

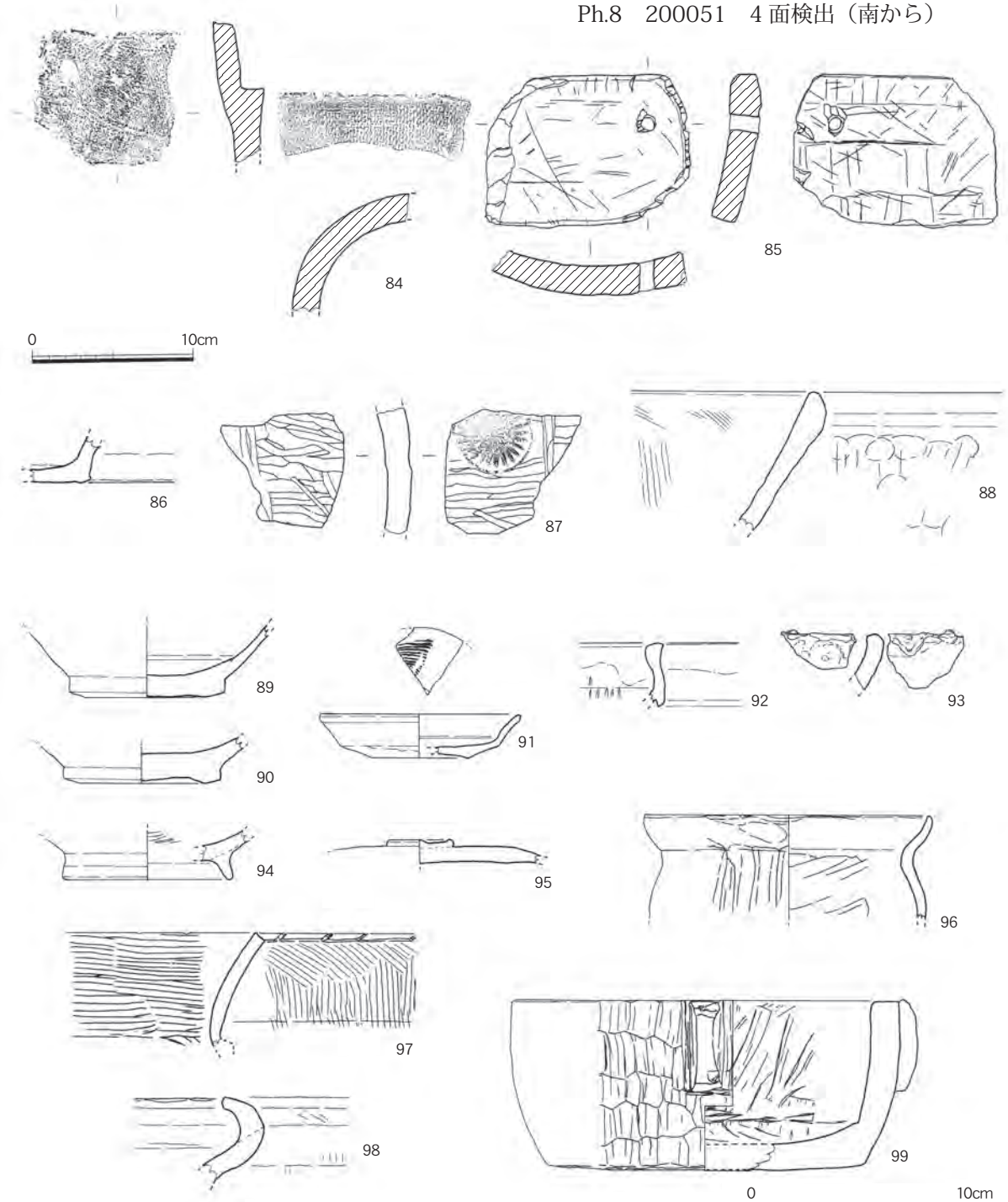


Fig.11　200052 出土遺物実測図 1（1/3）

ハケメ、坏部の内面はハケメ調整。81、82 は高坏脚部。81 は外面はハケのちミガキ調整がなされる。内面はナデ調整。82 は外面はハケメ、ケズリ、ミガキ調整で仕上げられ、内面はケズリである。83 は平瓦。外面は縄目痕、内面は布目痕。

SE200052(Fig.2)　15、16 －⑧、⑨区第 4 面で検出した。径が 3m 程度の掘方を持つ井戸である。井筒も検出されている。灰褐色土の埋土。出土遺物の時期は多岐にわたるが、陶器の擂鉢が出土しており 15 世紀以降であろう。

出土遺物（Fig.11）　84 は丸瓦。内面は布目痕、外面はタタキ痕が残る。85 は滑石製石鍋の加工品。残存長 9.5㎝、幅 7.0㎝、厚さ 1.5㎝。角に 1 カ所穿孔がある。温石として用いられていたか。86 は陶器の盤底部。灰色の胎土に黄灰色の釉がかかる。底部外面は露胎。87 は瓦質の火舎。外面にスタンプが押される。内外面ともにミガキ調整がなされる。88 は瓦質の擂鉢。内面はハケメ調整で摺り目が残る。外面は指抑え痕とハケメ痕が残る。89、90 は白磁碗。89 は底径 7.2㎝。黄白色胎土に黄色味を帯びた釉がかかる。胴部下半から底部外面は露胎となる。90 は底径 7.7㎝。灰白色の胎土に灰色の透明釉がかかる。胴部下半から底部は露胎となる。91 は同安窯系青磁皿。復元口径 9.4㎝、器高 2.0㎝、復元底径 4.5㎝。灰色の胎土に灰緑色の透明釉がかかる。外底は露胎となる。92 は陶器の擂鉢口縁部。内面に摺り目が残る。暗茶色の胎土に黒色釉がかかる。93 は坩堝の口縁部。口縁部端から内面にかけて黒色物質が付着する。94 は黒色土器の坏。底径 8.0㎝。黒色を呈し、内面はミガキ調整。95 は須恵器坏蓋。暗灰色を呈する。96 は小型甕。復元口径 13.4㎝。胴部は内外面ともに工具によるナデ調整がなされる。外面は灰赤色を呈する。97 は弥生時代終末から古墳時代初頭の壷の口縁部。内外面ともにハケメ調整。口縁部下には突帯が巡ると思われる。口縁端部に刻み目が入

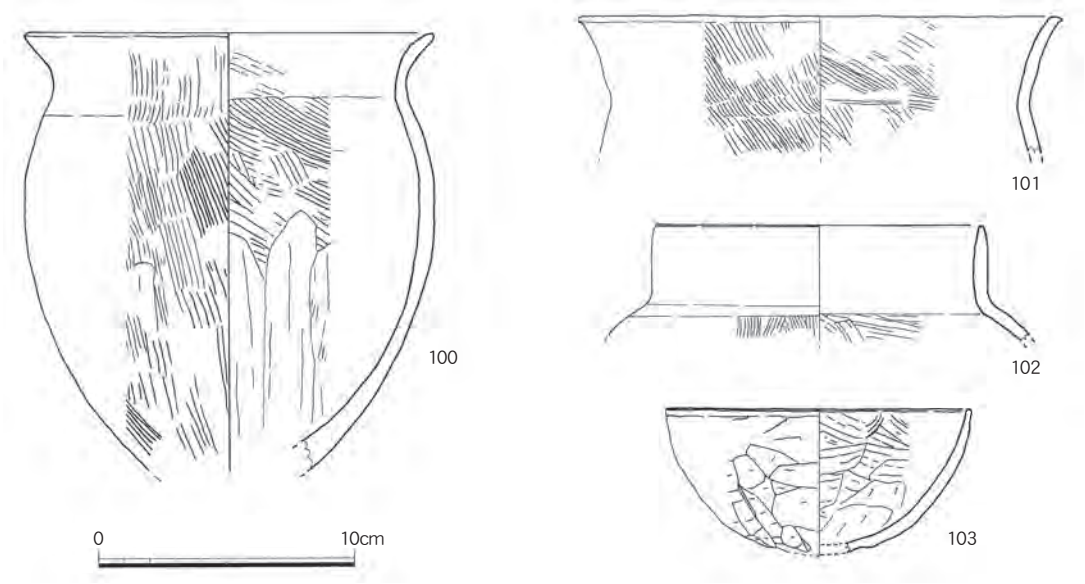


Fig.12　遺構面検出出土遺物実測図 1（1/3）

る。98 は弥生土器の壷の口縁部。外面に一部ハケメが入る。99 は滑石製石鍋。口径 18.0㎝、器高 7.9㎝、底径 14.6㎝。ケズリで成形される。鍔がつく。

（2）包含層出土の遺物（Fig.12~14）

100~103 は⑦区第 4 面検出時の遺物。100、101 は甕。復元口径 16.0㎝、残存高 17.1㎝。内外面ともにハケメ調整。101 は復元口径 19.0㎝。灰茶色を呈する。内外面ともにハケメ調整がなされる。102 は壷口縁部。復元口径 15.0㎝。胴部はハケメ調整がなされる。103 は鉢。内外面ともにケ

ズリで仕上げる。復元口径 12.0㎝、器高 3.8㎝。灰茶色を呈する。弥生時代終末から古墳時代初頭の時期。104~109 は⑧区検出時の遺物。104~106 は白磁。104 は白磁碗。復元口径 15.2㎝、残存高 5.1㎝。灰白色胎土に青色がかった透明釉がかかる。105 は白磁皿。復元口径 11.8㎝、残存高 2.2㎝。内面にヘラ彫りによる施文がある。灰白色の胎土に灰色の釉がかかる。釉の下に化粧土がある。106 は白磁碗底部を利用した瓦玉。7.6 × 7.4㎝の残存。平面が方形を呈し、2 辺は細かな打ち欠きによる加工を施す。107~109 は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器。107 は壷の底部か。外面はミガキ、内面は工具によるナデ仕上げ。暗赤色を呈する。108 は丸底壷。復元口径 8.5㎝、器高 9.4㎝。口縁部外面はミガキ、胴部の上部はハケメ後ミガキ、胴部下半はケズリ、内面はナデ仕上げ。灰茶色を呈する。109 は器台の脚部。復元底径 13.8㎝、残存高 6.1㎝。内外面ともにハケメ調整であるが、外面下半はナデ仕上げ。灰茶赤色を呈する。110 は鉄釘。3㎝残存。

111~114 は 3~4 面の包含層出土。111 は白磁碗底部。⑩区出土。底径 7.8㎝。淡灰色胎土に黄色の透明釉がかかる。高台畳付まで釉がかかるが、高台内部は露胎となる。112 は甕。⑨区出土。復元口径 24.0㎝。内外面ともにハケメとナデで調整する。113、114 は白磁碗。⑫区出土。200026、200027 に伴うものか。113 は復元口径 16.6㎝。灰白色の胎土に灰色の釉がかかる。胴部下半は露胎となる。114 は碗底部。底径 6.3㎝。白色胎土に淡青色の釉がかかる。胴部下半は露胎となる。

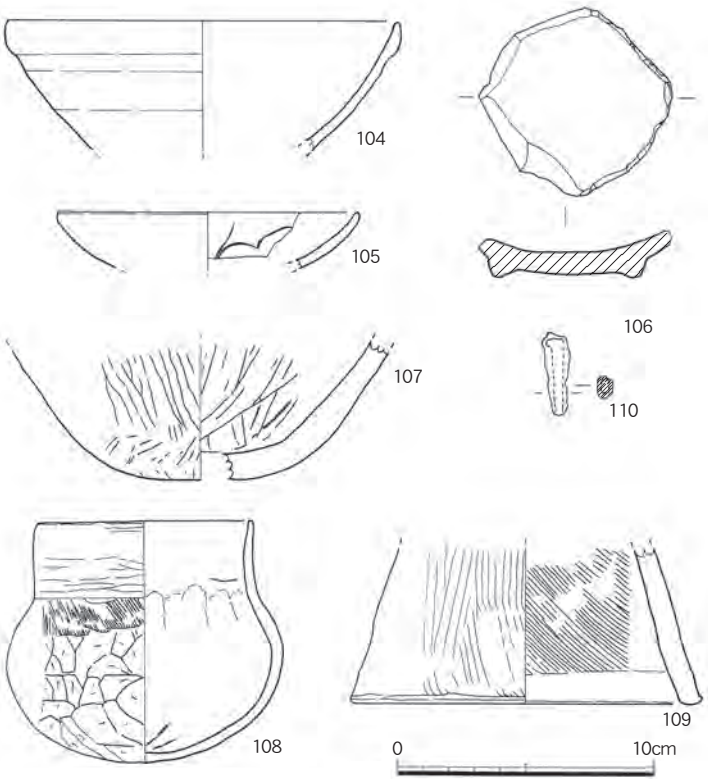


Fig.13　遺構面検出出土遺物実測図 2（1/3）

3）小結

本調査区で最も古い時期の遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭の時期である 200018 で、当該時期の遺物も包含層などから出土している。次に、11 世紀後半から 12 世紀前半頃の 200001、200002、200013 が確認された。その他の井戸は埋没時期が 15 世紀以降まで下り、当該時期まで生活遺構が築かれていたことが窺える。

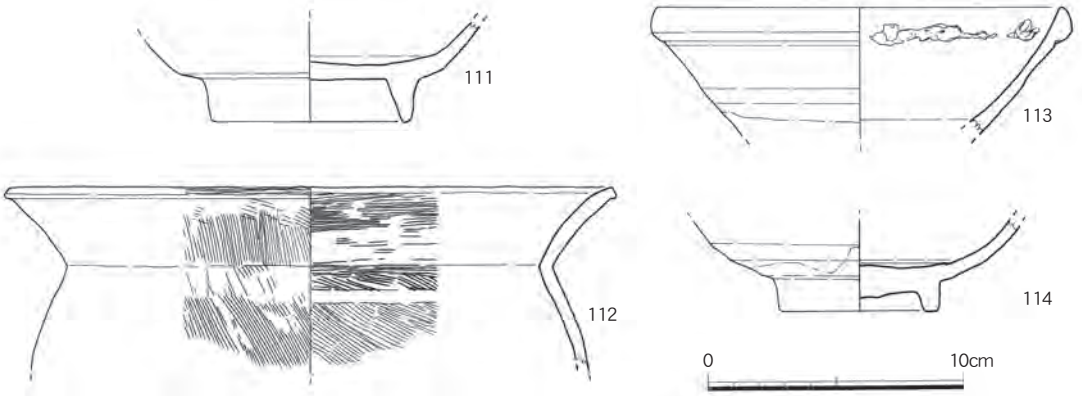


Fig.14　包含層出土遺物実測図（1/3）

22. 21 区の調査

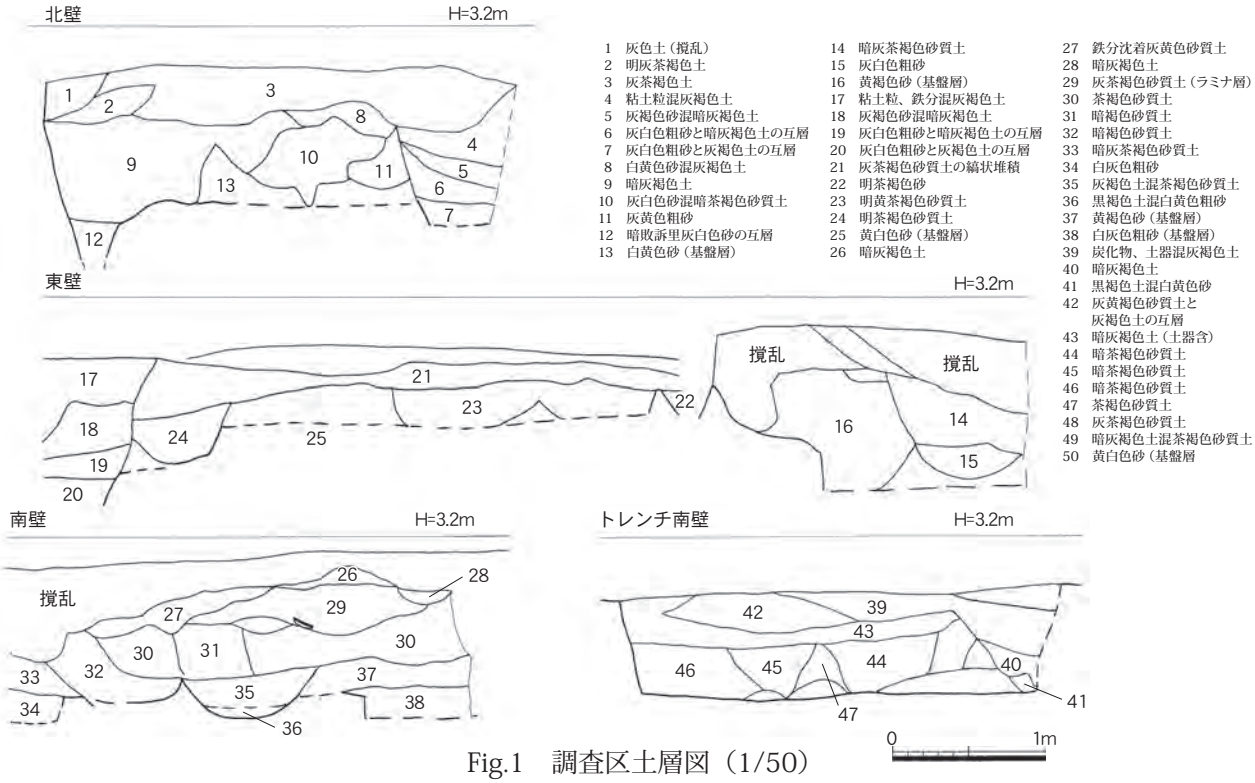
1）各遺構検出面の概要・基本層序（Fig.1~4）

Ph.1　調査区北壁土層（南から）

Ph.2　調査区東壁土層（西から）

Ph.3　調査区南壁土層（北から）

Ph.4　調査区トレンチ南壁土層（北から）



1　灰色土（撹乱）
2　明灰茶褐色土
3　灰茶褐色土
4　粘土粒混灰褐色土
5　灰褐色砂混暗灰褐色土
6　灰白色粗砂と暗灰褐色土の互層
7　灰白色粗砂と灰褐色土の互層
8　白黄色砂混灰褐色土
9　暗灰褐色土
10　灰白色砂混暗茶褐色砂質土
11　灰黄色粗砂
12　暗敗訴里灰白色砂の互層
13　白黄色砂（基盤層）
14　暗灰茶褐色砂質土
15　灰白色粗砂
16　黄褐色砂（基盤層）
17　粘土粒、鉄分混灰褐色土
18　灰褐色砂混暗灰褐色土
19　灰白色粗砂と暗灰褐色土の互層
20　灰白色粗砂と灰褐色土の互層
21　灰茶褐色砂質土の縞状堆積
22　明茶褐色砂
23　明黄茶褐色砂質土
24　明茶褐色砂質土
25　黄白色砂（基盤層）
26　暗灰褐色土
27　鉄分沈着灰黄色砂質土
28　暗灰褐色土
29　灰茶褐色砂質土（ラミナ層）
30　茶褐色砂質土
31　暗褐色砂質土
32　暗褐色砂質土
33　暗灰茶褐色砂質土
34　白灰色粗砂
35　灰褐色土混茶褐色砂質土
36　黒褐色土混白黄色粗砂
37　黄褐色砂（基盤層）
38　白灰色粗砂（基盤層）
39　炭化物、土器混灰褐色土
40　暗灰褐色土
41　黒褐色土混白黄色砂
42　灰黄褐色砂質土と
　　灰褐色土の互層
43　暗灰褐色土（土器含）
44　暗茶褐色砂質土
45　暗茶褐色砂質土
46　暗茶褐色砂質土
47　茶褐色砂質土
48　灰茶褐色砂質土
49　暗灰褐色土混茶褐色砂質土
50　黄白色砂（基盤層

Fig.1　調査区土層図（1/50）

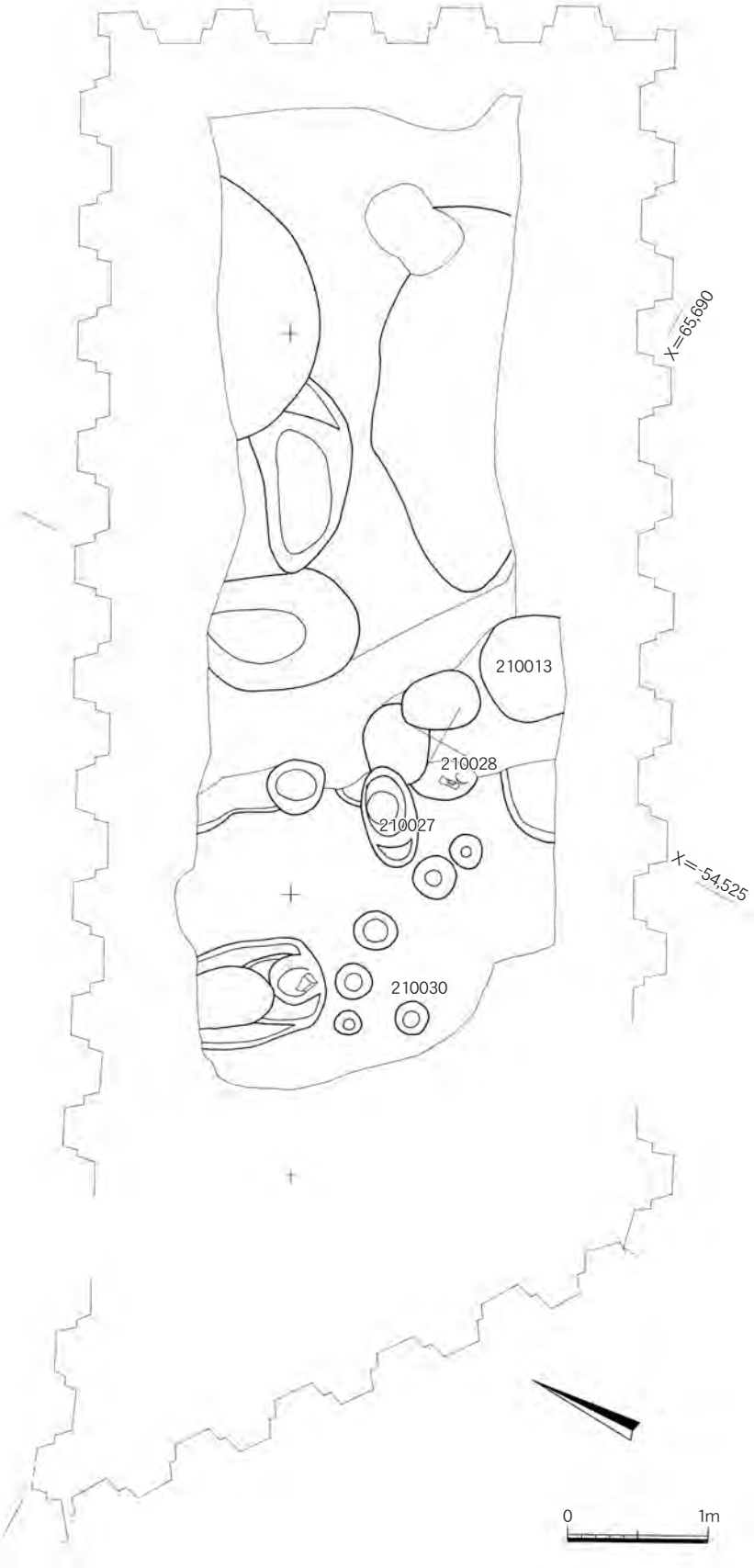


Fig.2　第 1 面遺構平面図（1/50）

Ph.5　調査区北側第 1 面（北から）

Ph.6　調査区南側第 1 面（西から）

21 区は東工区の西端に位置し、出入り口部分となる箇所である。本調査に先立ち、発掘調査を行うための鋼矢板を設置するための布掘りについて立会調査を行った。矢板設置後に第 1 面の遺構面まで工事側で表土の鋤取りを行い発掘調査に着手した。その後は第 1 面から第 4 面まで人力で遺構の検出と掘削を行い、土砂は場内で反転をして調査を進めた。個別の写真撮影、全体

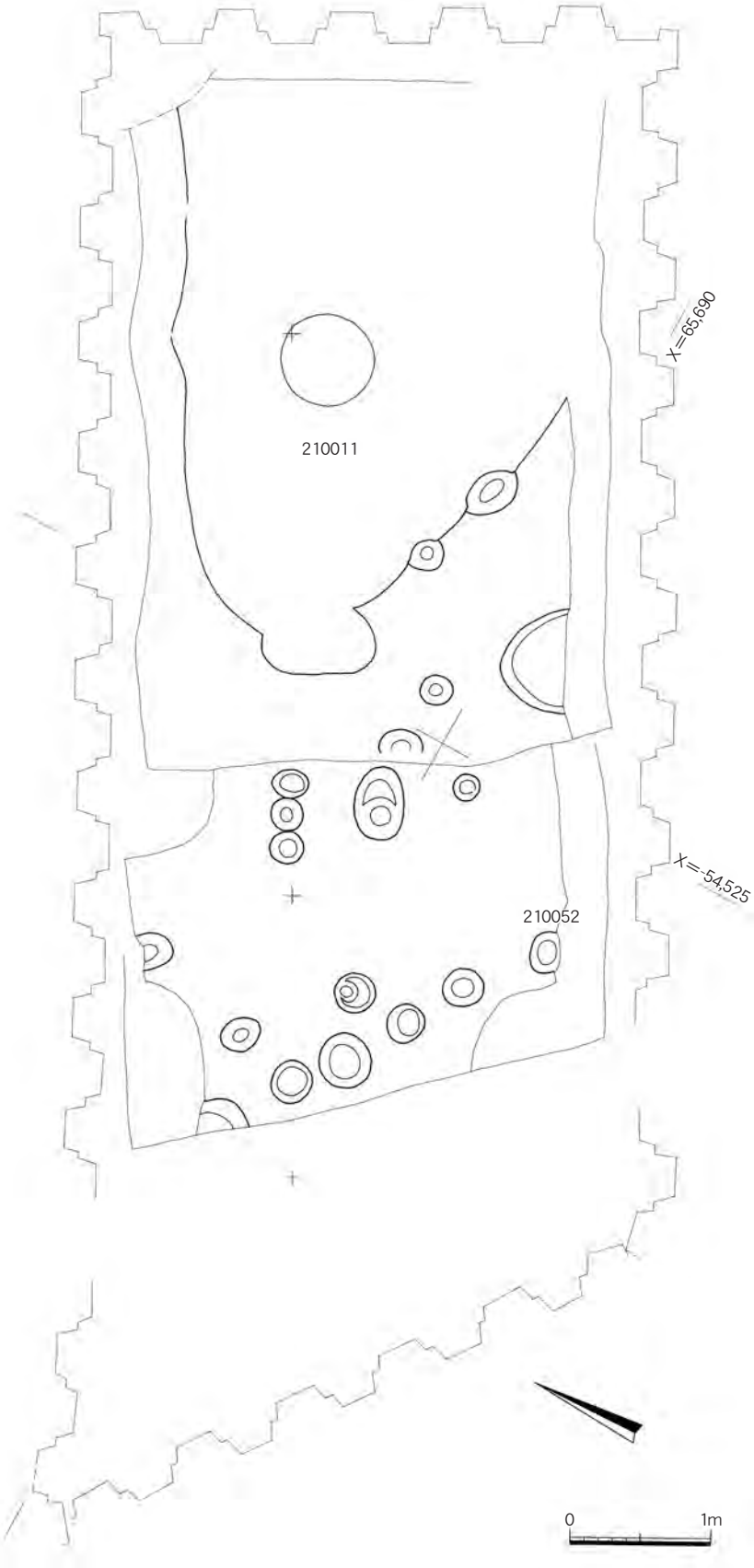


Fig.3　第 2 面遺構平面図（1/50）

Ph.7　調査区北側第 2 面（北から）

Ph.8　調査区南側第 2 面（西から）

写真撮影、1/10、1/20 縮尺の実測図作成による記録保存を行った。

第 1 面は灰茶褐色土層上面で標高 2.9m 前後である（Fig.2）。井戸の掘方、土坑、柱穴が検出された。第 2 面は第 1 面から約 30㎝掘り下げた標高 2.6m 前後の茶褐色砂質土層上面である（Fig.3）。第 1 面から続く井戸の掘方、土坑、柱穴が検出された。

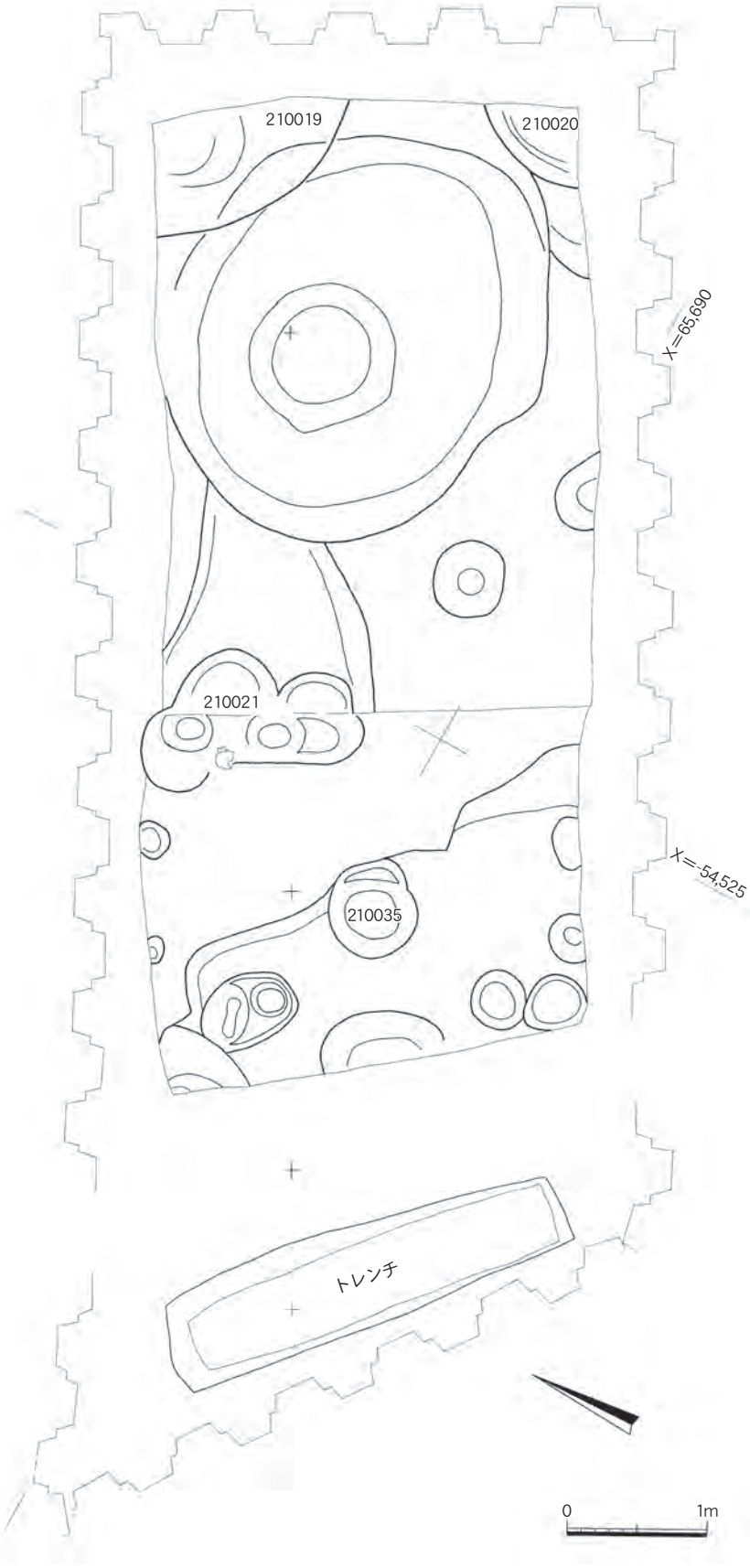


Fig.4　第 3 面遺構平面図（1/50）

Ph.9　調査区北側第 3 面（南から）

Ph.10　調査区南側第 3 面（西から）

Ph.11　調査区トレンチ第 3 面（西から）

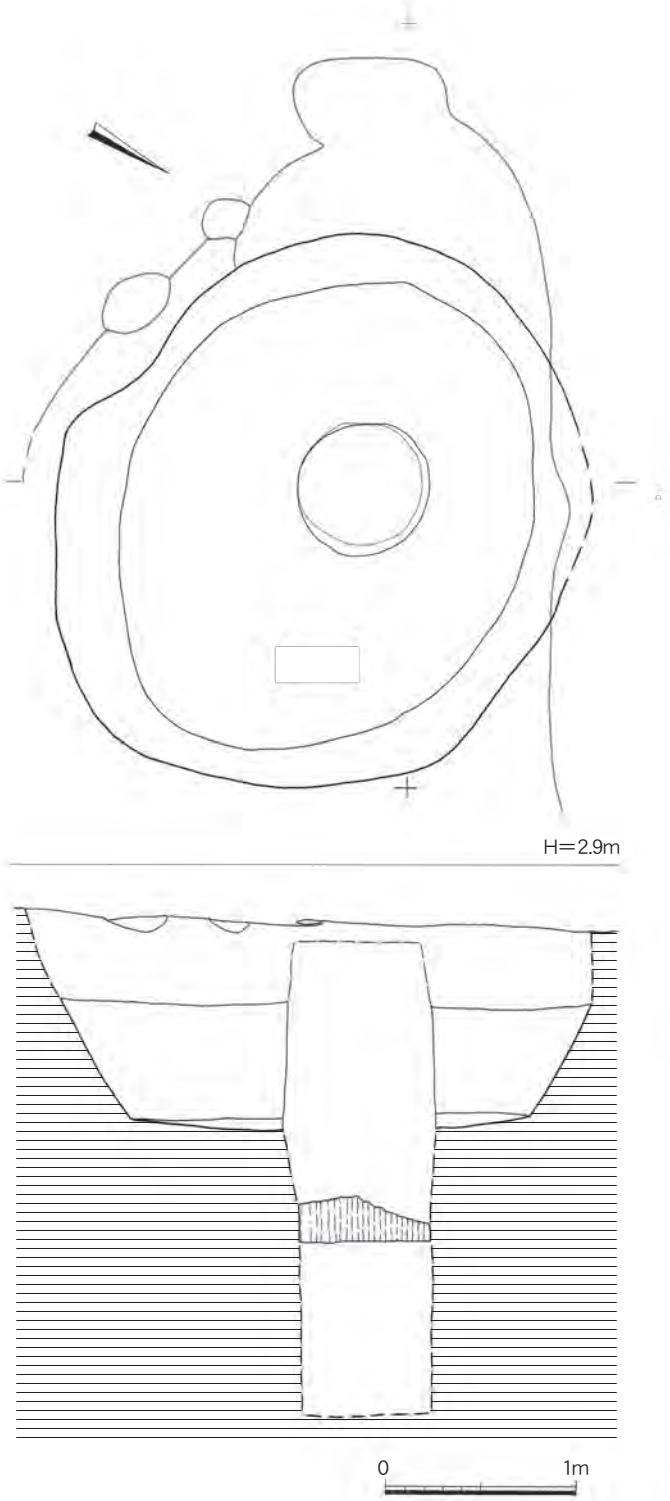
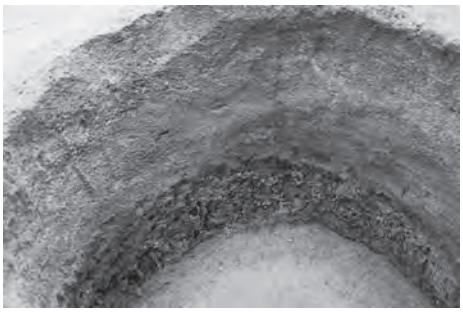


Fig.5　210011 遺構図（1/40）

Ph.12　210011（北から）



Ph.13　210011 井筒（北から）

第 3 面は標高 2.3~2.4m の基盤層の黄褐色砂質土層上面である（Fig.4）。上面遺構の掘り残しである井戸の井筒、土坑が検出された。弥生時代終末~古墳時代の土器が出ている。

2）遺構と遺物

（1）井戸（SE）

SE210011（Fig.5）　調査区北側半分を占める。井筒は第 2 面の検出だが、掘方は第 1 面で確認された。井筒は径 70㎝で結桶が据えられる。湧水点は標高 1.1m となる。明確に確認された掘方は径 1.5m の楕円形を呈する。掘方や井筒から白磁、青磁、陶器、土師器、須恵器、弥生時代終末から古墳時代の土器が出土している。13 世紀頃。

出土遺物（Fig.6　1~33）　1~7 は掘方第 1 層から出土した。1 は白磁皿の底部。底径 4.4㎝。淡灰色の胎土に緑色の不透明釉がかかるが、高台内部は露胎となる。2 は白磁碗の底部。復元底径 6.8㎝。淡茶色の胎土に不透明な白色釉が内面にかかる。3 は土師器坏。復元底径 6.8㎝。底部は糸切り底である。4 は京都系土師器皿。復元口径 9.6㎝。板圧痕が残る。5 は器台の底部。内外面にハケメ調整が残る。

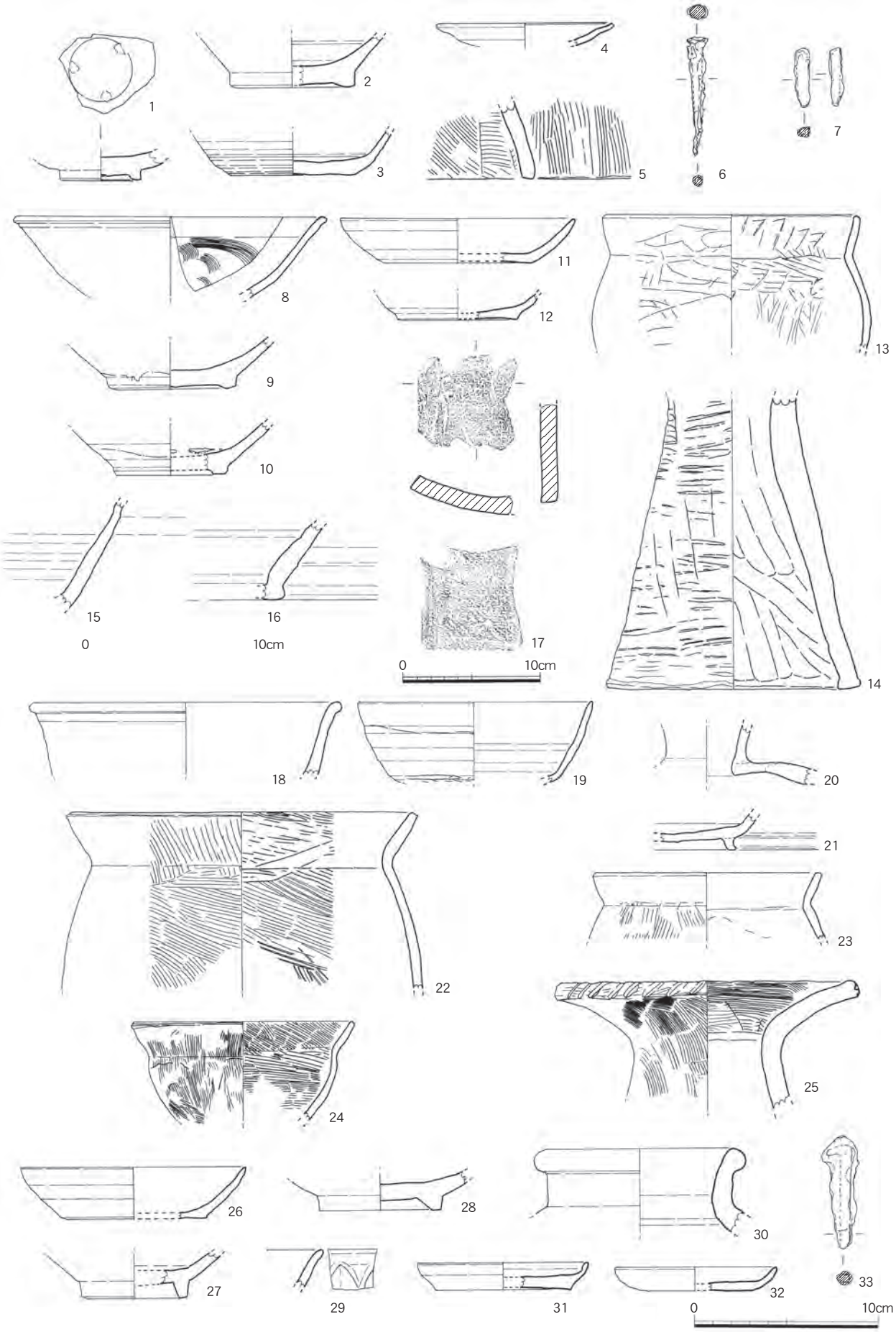


Fig.6　210011 出土遺物実測図 1（1/3）

灰黄～茶灰色を呈する。6、7 は鉄釘。6 は 6.5㎝。7 は残長 3.2㎝。

8~14 は掘方第 2 層出土。8、9 は白磁碗。8 は復元口径 17.1㎝。内面に櫛描文が施される。灰白色の胎土に半透明の灰色釉が内外面にかかる。9 は復元底径 7.0㎝。灰白色の胎土に不透明の灰色釉が外面にかかるが、高台は露胎となる。10 は越州窯系青磁碗の底部。復元底径 6.2㎝。灰色の胎土に灰緑色の不透明釉が内外面にかかるが高台部分は露胎となる。内面に砂目跡が 7~8 カ所残る。11 は土師器坏。復元口径 12.8㎝、器高 2.4㎝、復元底径 8.0㎝。底部は糸切りである。12 は土師器皿。復元底径 6.6㎝。糸切りの底部。13、14 は弥生時代終末から古墳時代初めの土器。13 は短頸壺。復元口径は 14.0㎝、残存高は 9.8㎝。内外面ともにハケメ調整後ナデ消されている。灰褐色を呈する。14 は器台。復元底径 13.8㎝、残存高は 15.8㎝。外面は横方向のタタキのちにナデ調整がなされ、内面はナデ調整がなされる。暗褐色を呈する。15、16 はガラス坩堝。15 は淡緑色のガラス質が内面に厚く付着しており、外面にはまばらに付着する。16 の内面には黄白色のガラス質が付着する。17 は平瓦。外面に布目痕、内面に縄目痕が残る。

18~25 は掘方第 3 層出土。18~21 は須恵器。18 は鉢か。復元口径 17.0㎝、19 は坏。復元口径 13.7㎝。口縁部の外面は黒色化しており、自然釉がかかる。20 は平瓶の頸部付近。21 は坏の底部。22~25 は弥生 ~ 古墳時代の土器。22、23 は甕。22 は、復元口径 19.2㎝、残存高 9.8㎝。内外面ともにハケメ調整がなされる。灰黒色を呈する。23 は復元口径 12.4㎝。胴部外面上部にはハケメ調整が残る。灰橙色を呈する。24 は小型丸底鉢。復元口径 12.0㎝。灰橙色を呈する。25 は器台。復元口径 16.6㎝。口縁部は大きく開き、口縁端部は刻み目が施され、内外面にハケメ調整がなされる。灰茶色を呈する。

26~33 は井筒出土。26 は土師器坏。復元口径 12.2㎝、器高 2.8㎝、底径 8.0㎝。糸切底を呈する。27、28 は白磁碗底部。27 は復元底径 5.8㎝。灰白色の胎土に灰色の透明釉がかかる。胴部外面下半から高台は露胎となり、内面見込みは釉を輪状に掻き取る。28 は復元底径 6.6㎝。黄白色胎土で内面に薄く釉がかかる。29 は龍泉窯系青磁碗の口縁部。外面に片切り彫りの鎬蓮弁文が施される。灰色の胎土に暗灰褐色の釉がかかる。30 は陶器壷の口縁部。復元口径 4.5㎝。紫がかった暗褐色を呈する。31、

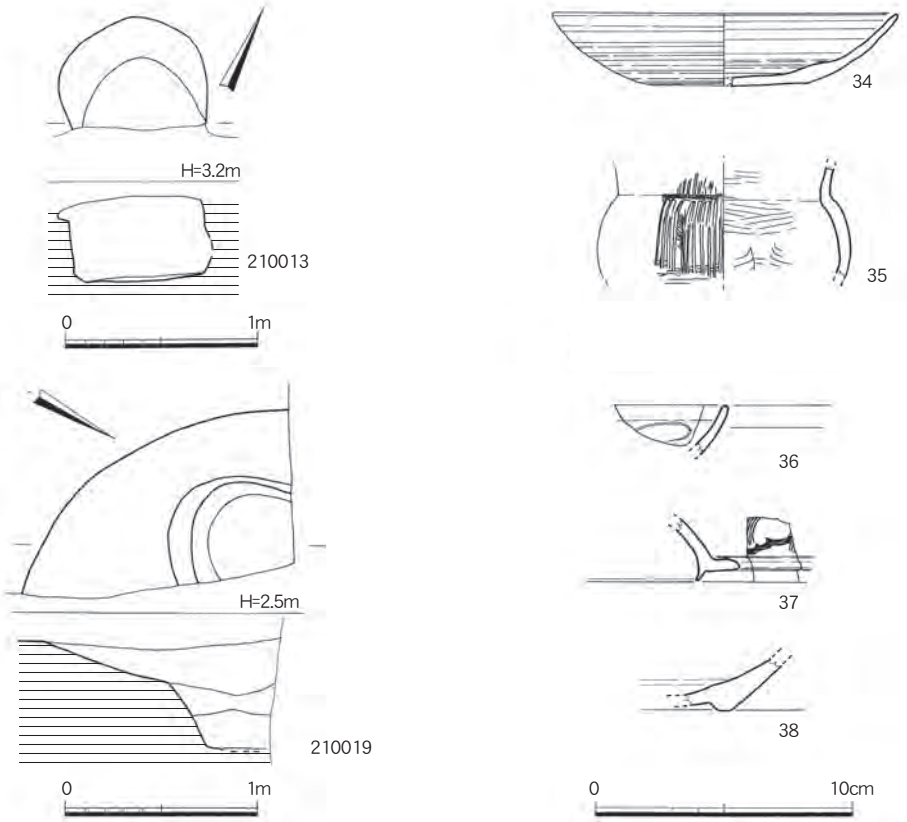


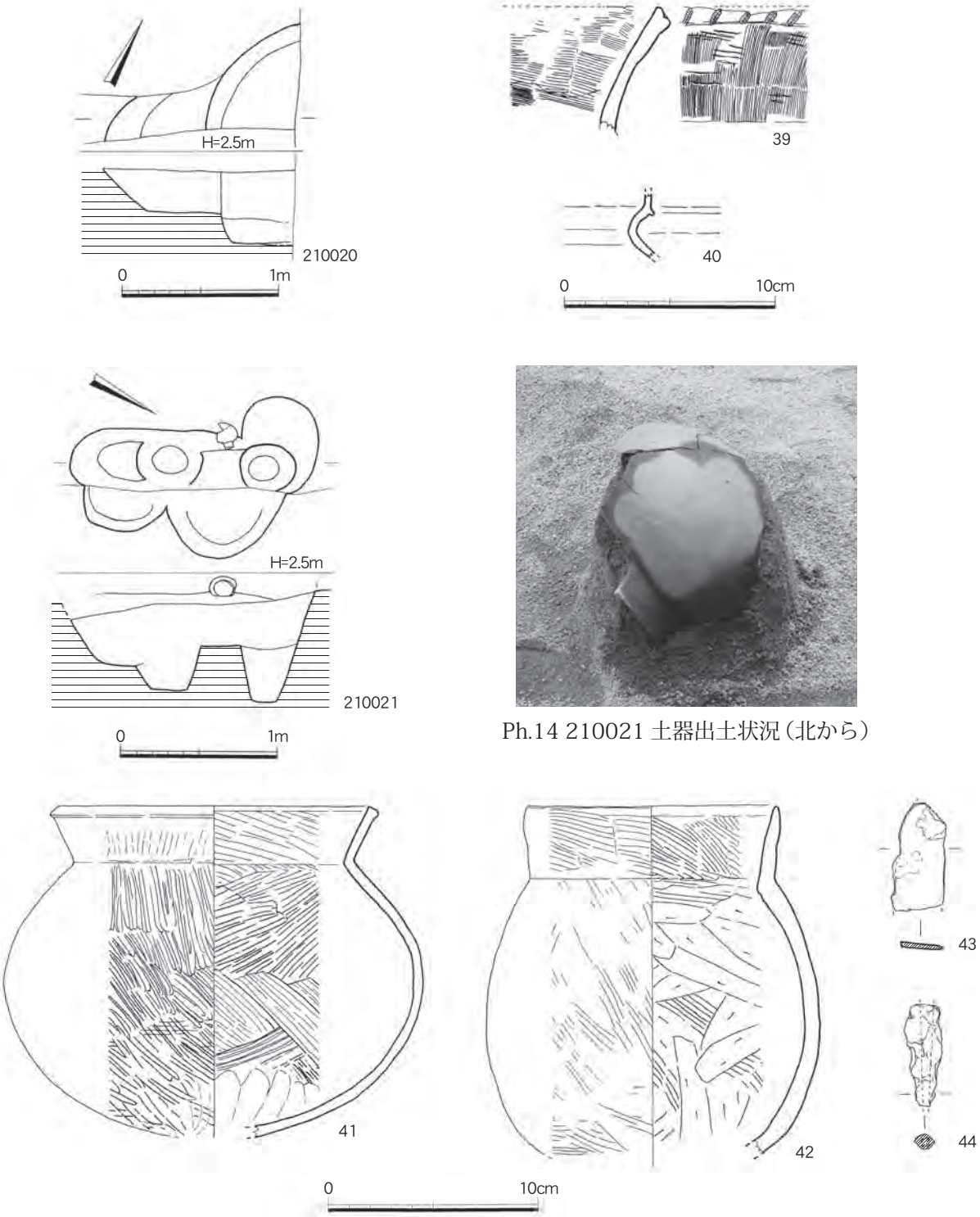
Fig.7　210013・210019 遺構図・出土遺物実測図（1/40・1/3）

32 は土師器皿。復元口径 9.3、8.8㎝、器高 1.5、1.3㎝、底径 7.4、6.1㎝。いずれも糸切底を呈する。33 は鉄釘。長さ 6.2㎝。

（2）土坑（SK）

SK210013（Fig.7）　調査区第 1 面南東側壁の中央付近に切られていた。平面形は楕円、長軸 80㎝、深さ 40㎝。土師器坏と、弥生時代終末～古墳時代の土器が出土している。

出土遺物（Fig.7・34・35）　34 は土師器坏。復元口径 13.4㎝、器高 2.8㎝、復元底径 6.4㎝。35



Ph.14 210021 土器出土状況（北から）

Fig.8　210020・210021 遺構図・出土遺物実測図（1/40・1/3）

は弥生時代終末～古墳時代初めの小型壷。外面はハケのちミガキ、内面はナデのちハケ調整が施される。灰橙色を呈する。

SK210019（Fig.7）　第３面で検出、調査区北角壁に切られている。井戸の一部の可能性もある。

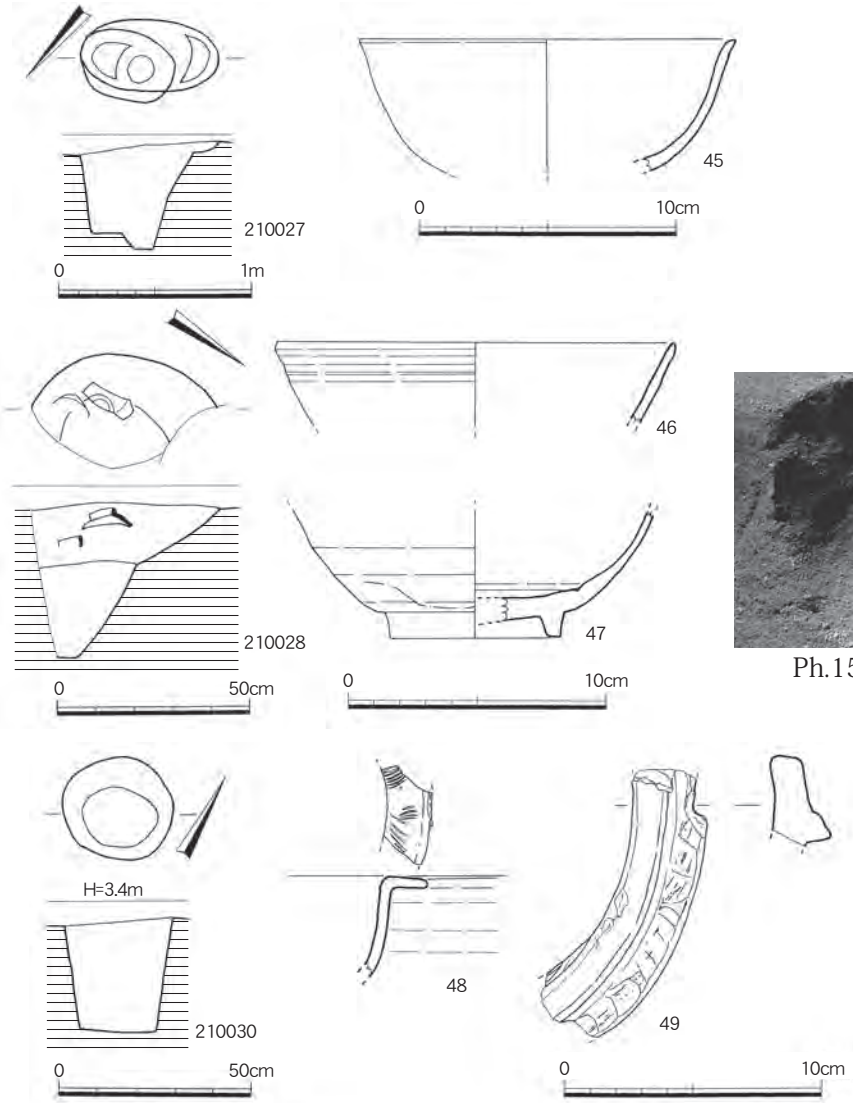
出土遺物（Fig.7・36~38）　36 は白磁皿の一部。内面にヘラで文様が刻まれる。黄白色胎土の内外面に灰色の釉がかかる。37 は龍泉窯系と思われる青磁の蓋。外面に片切り彫りによる櫛描文が施される。灰色胎土の内外面に淡緑色の釉がかかる。38 は陶器の鉢底部。淡茶色の胎土の内外面に灰緑色の釉が施される。

SK210020（Fig.8）　第３面で検出、調査区東角壁に切られている。これも 210019 と同様井戸掘方の一部である可能性がある。

出土遺物（Fig.8・39・40）　39・40 は弥生時代終末～古墳時代初めの土器。39 は壷口縁部。内外面にハケメ調整がなされ、口縁端部には刻み目が施される。灰橙色を呈する。40 は山陰系の土器。甕の口縁部。灰茶色を呈する。

SK210021（Fig.8）　第３面、調査区中央付近で検出した。長軸 150㎝の不定形の平面形を呈する土坑。上層で弥生時代終末から古墳時代初頭の甕を検出した。

出土遺物（Fig.8・41~44）　41・42 は弥生時代終末～古墳時代初めの土器。41 は広口壷。復元口



Ph.15　210028（北から）

Fig.9　210027・210028・210030 遺構図・出土遺物実測図（1/40・1/20・1/3）

径 15.6㎝、残存高 15.7㎝。器壁外面はナデ、ミガキ、ハケメ調整、底部付近はヘラケズリで調整される。内面は工具ナデ、灰赤茶色を呈する。42 は甕。復元口径は 12.0㎝、残存高 16.7㎝。外面はハケメ調整後に部分的にナデ消され、内面はハケメ後にヘラケズリで調整される。灰茶色を呈する。43 は鉄製の鉈か。残存長 5.1㎝。44 は棒状の鉄製品。残存長 4.9㎝。

SK210027（Fig.9）　第 1 面の中央付近で検出した。長軸 40㎝、短軸 20㎝の平面楕円形の土坑。

出土遺物（Fig.9・45）　45 は白磁碗。復元口径 14.6㎝。黄白色の胎土に灰色の透明釉がかかる。

SK210028（Fig.9）　第 1 面の中央付近、210027 の東で検出した。反転した際であったため北半分は不明。長軸 50㎝の平面楕円形の土坑。

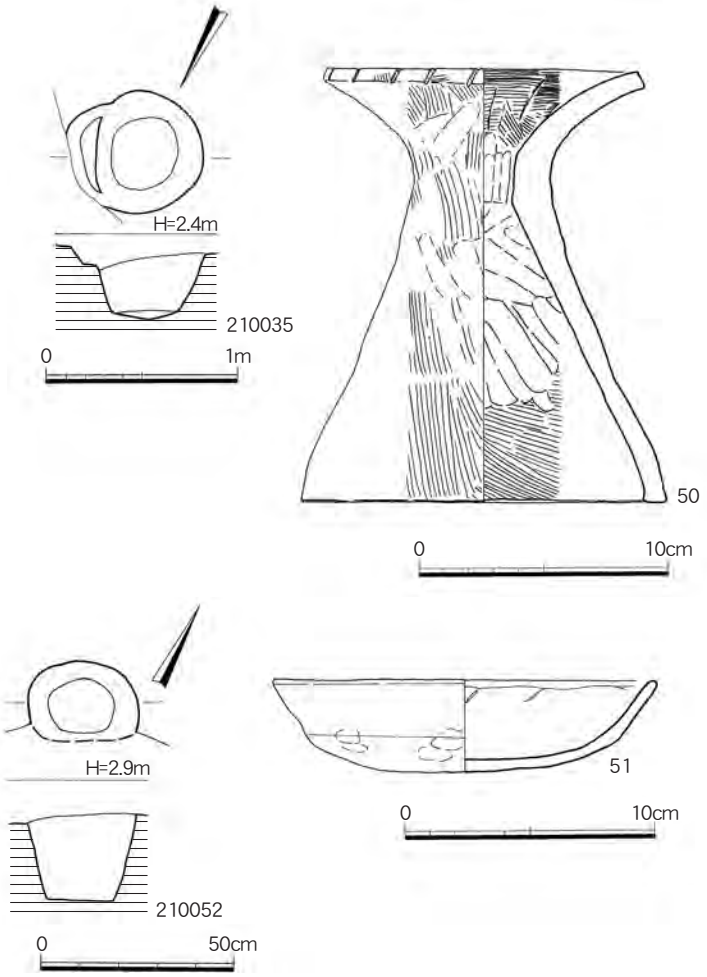
出土遺物（Fig.9・46、47）　46、47 は白磁碗。46 は復元口径 18.6㎝、白色胎土に透明釉がかかる。47 は復元底径 6.7㎝。黄白色の胎土に灰黄色の透明釉がかかる。外底は露胎となる。

SK210030（Fig.9）　第 1 面の南寄りで検出した。平面 30㎝径の円形で深さは 30㎝。

出土遺物（Fig.9・48、49）　48 は青白磁の浅型碗か。口縁端部に櫛描文が施される。白色胎土に淡青色の透明釉がかかる。49 は滑石製石鍋の転用品。鍔の一部をえぐって紐掛けにしている。石錘。残存長 11.0㎝。

SK210035（Fig.10）　調査区第 3 面の南寄りに位置している。2 面から 3 面の掘り下げ中に器台が出土したが掘方は確認されなかった。掘り下げ段階で径 70㎝の平面円形の土坑が確認された。

出土遺物（Fig.10・50）　50 は器台。口径 12.6㎝、器高 16.9㎝、復元底径 14.2㎝。口縁端部に刻



Ph.16　210035（北から）

Fig.10　210035・210052 遺構図・出土遺物実測図（1/40・1/20・1/3）

み目が入り、内外面にハケメ及びナデ調整が見られる。灰橙茶色を呈する。

SK210052（Fig.10）　調査区第 2 面の東壁南側に位置している。長軸 30㎝の平面楕円形。須恵器坏が出土している。

出土遺物（Fig.10・51）　51 は須恵器の坏。口径 15.0㎝、器高 3.7㎝。

（3）トレンチ（Fig.4、Ph.11）

調査区の南側にはガス管が横断していたため、ガス管より南側については最後にトレンチ状に掘削して確認調査を行った。上面では明確に遺構は確認されなかったが、土層で確認すると、調査区南西角に黒褐色土の落ち込みがあり、土師器が多く出土した。土師器の集積遺構があったと思われる。

出土遺物（Fig.11）　52~59 は土師器集積遺構の上層出土。52 は龍泉窯系青磁碗。片切彫りの連弁文が施文される。淡灰色の胎土に淡緑色の透明釉がかかる。53 は坩堝。内面に茶白色の不透明のガラスが厚く付着する。54、55 は土師器坏。復元口径 13.1、12.0㎝、器高 2.6、2.2㎝、底径 8.8、8.5㎝。糸切底で板圧痕が残る。56~58 は土師器皿。復元口径 8.8、7.6、6.7㎝、器高 1.5、1.1、1.9㎝、底径 7.0.5.3、4.8㎝。いずれも糸切底で、58 のみ板圧痕が残る。59 は平瓦。外面には布目、内面にはタタキ痕が残る。

60~66 は土師器集積遺構の下層出土。60~64 は土師器坏。口径 12.1~13.6㎝、器高 2.3~2.5㎝、底径 8.1~9.6㎝。いずれも糸切底で 60、61、64 に板圧痕が残る。61 は土師器皿。復元口径 7.4㎝、器高 1.8㎝、底径 4.8㎝。糸切底。口縁部にすすが付着する。66 は東播系のこね鉢か。

67~69 は基盤層上の茶褐色砂質土層出土。67 は軟質土器の鉢か。外面はタタキ痕、内面は当具痕が残る。68 は器台。内外面にハケメ調整がなされる。69 は手づくねの小型鉢。復元口径 7.6㎝、残存高 5.4㎝。指抑え成形の跡が内外面に見られる。

土師器集積遺構については、14 世紀代と考えられる。

（4）包含層その他出土遺物（Fig.12~14）

Fig.12、13 は遺構面検出時、また包含層から出土した遺物である。70~77 は第 1 層出土。70 は陶器の耳壷。復元口径 9.6㎝。淡灰色の胎土に暗灰緑色の釉がかかる。口縁端部の釉はふき取る。櫛描文が外面に施され、耳がつく。71 は陶器の鉢。淡灰茶色の胎土に暗灰緑色の透明釉がかかる。口縁部の釉はふき取る。72 は土師器坏。内外面ともにミガキ調整がされる。73 は瓦質のすり鉢口縁部。内外面にハケメ調整がなされる。74 は須恵器坏。復元口径 13.2㎝、器高 3.3㎝。75 は土師器甕口縁部。暗灰茶色の胎土。復元口径 16.4㎝。外面にハケメ、内面にケズリ調整が見られる。76 は瓦器碗。復元底径 8.4㎝。外面は濃赤色、内面は茶灰色を呈する。内面はミガキ調整。77 は弥生時代終末から古墳時代初めの甕。口縁部は屈曲する。山陰系。外面はハケメ、内面はケズリとナデで調整される。

78~90 は第 2 層出土。78~80 は弥生時代終末から古墳時代初めの甕。78 は内外面ともにハケメ調整。赤茶色を呈する。79 は復元口径 13.5㎝。内面はハケメ、外面はハケメとタタキ調整。口縁部は立ち上がる。暗褐色。80 は内面はハケメ、外面はハケメとタタキ調整。同じく口縁部は立ち上がる。暗褐色。81 は土師器甕。復元口径は 16.4㎝。外面及び口縁部内面はハケメ、内面はケズリ調整が見られる。82 は須恵器蓋。口径 17.4㎝。83 は須恵器壷の口縁部。復元口径 18.2㎝。84 ～ 87 は弥生時代弥生時代終末から古墳時代初めの土器。84 は甕で山陰系。灰茶色を呈する。口縁部は屈曲して立ち上がる。復元口径 19.0㎝。85 は甕。復元口径 13.5㎝。内面はハケメ調整、外面はハケメ調整で、下半はミガキが見られる。橙茶色を呈する。86 は甕の口縁部。口縁部下に刻み目の入った粘土帯が巡る。灰橙色を呈する。87 は高坏脚部。内面はナデ、外面はハケ、ケズリ、ミガキ調整で仕上げる。裾付近に穿孔が施される。橙茶色を呈する。88 は土錘。長さ 4.2㎝、径 1.2㎝。89 は鉄釘。長さ 5.5㎝。90 は鉄製

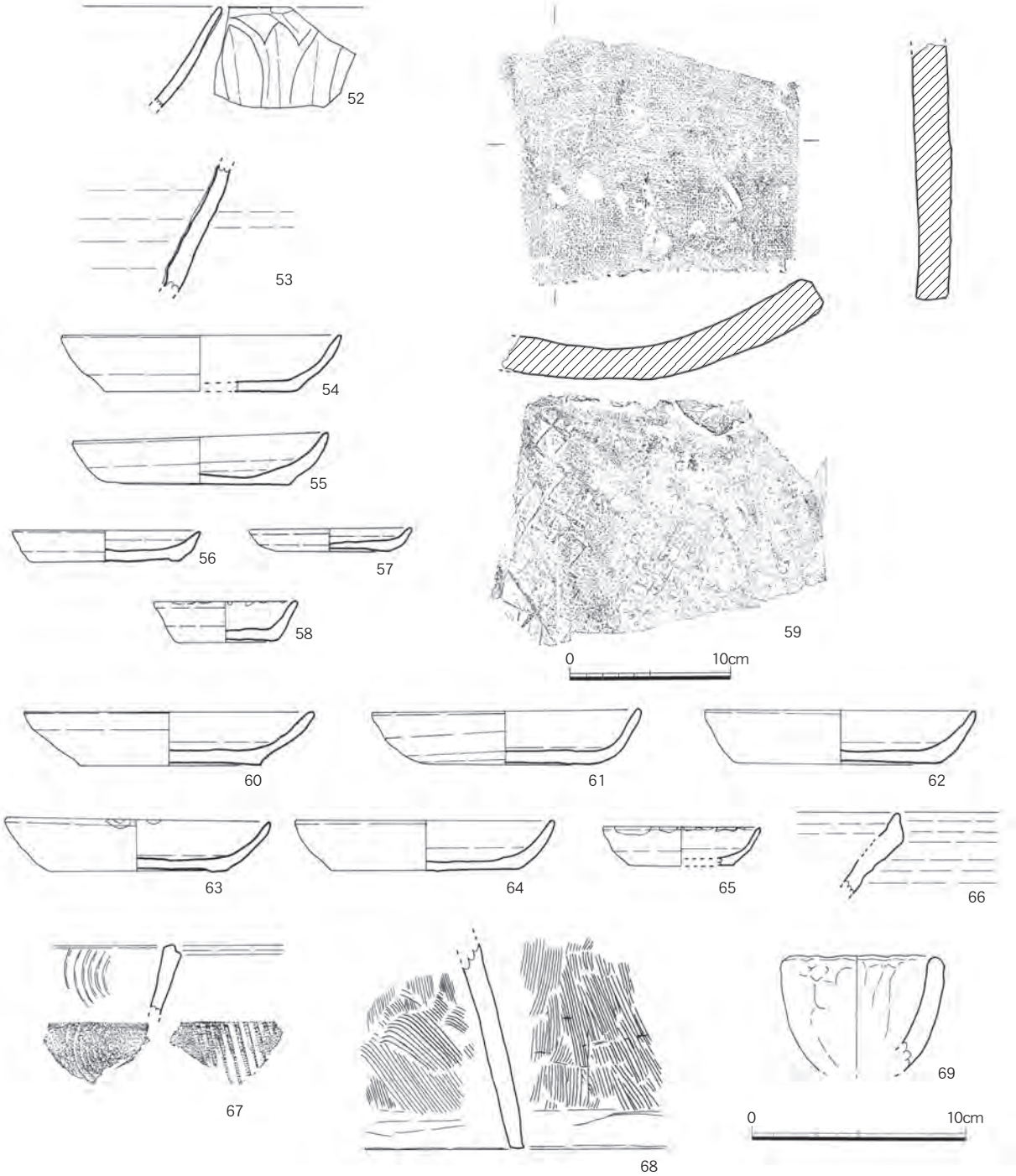


Fig.11　包含層その他出土遺物実測図 1（1/3・1/4）

の刀子。長さ 9.9㎝、幅 1.7㎝。

Fig.13 は第 2 層出土。91 は須恵器坏。底径 9.8㎝。92 は須恵器蓋。口径 11.9㎝、器高 3.9㎝。93 は土師器の把手。94~96 は砂丘面上で検出した。弥生時代終末から古墳時代初めの土器。94、96 は器台。94 は口径 1.0㎝、器高 14.0㎝、底径 13.6㎝。96 は底径 15.0㎝。いずれも内外面はハケ調整がなされ、一部ナデ消される。95 は鉢。内面はヘラミガキ、外面はハケ調整が見られる。

Fig.14 は調査区周辺矢板部分からの出土遺物。97 は白磁碗底部。底径 5.0㎝。淡灰色の胎土に灰色の釉がかかる。見込み内面は釉がかき取られる。98 は須恵器蓋。99 は陶器皿。暗褐色を呈する。100・101 は、弥生時代終末から古墳時代初めの土器。100 は甕口縁部。復元口径 12.8㎝。外面はハケメのちナデ。灰茶色を呈す。101 は脚付鉢。内外面ともに横、縦方向にミガキ調整のち縦方向

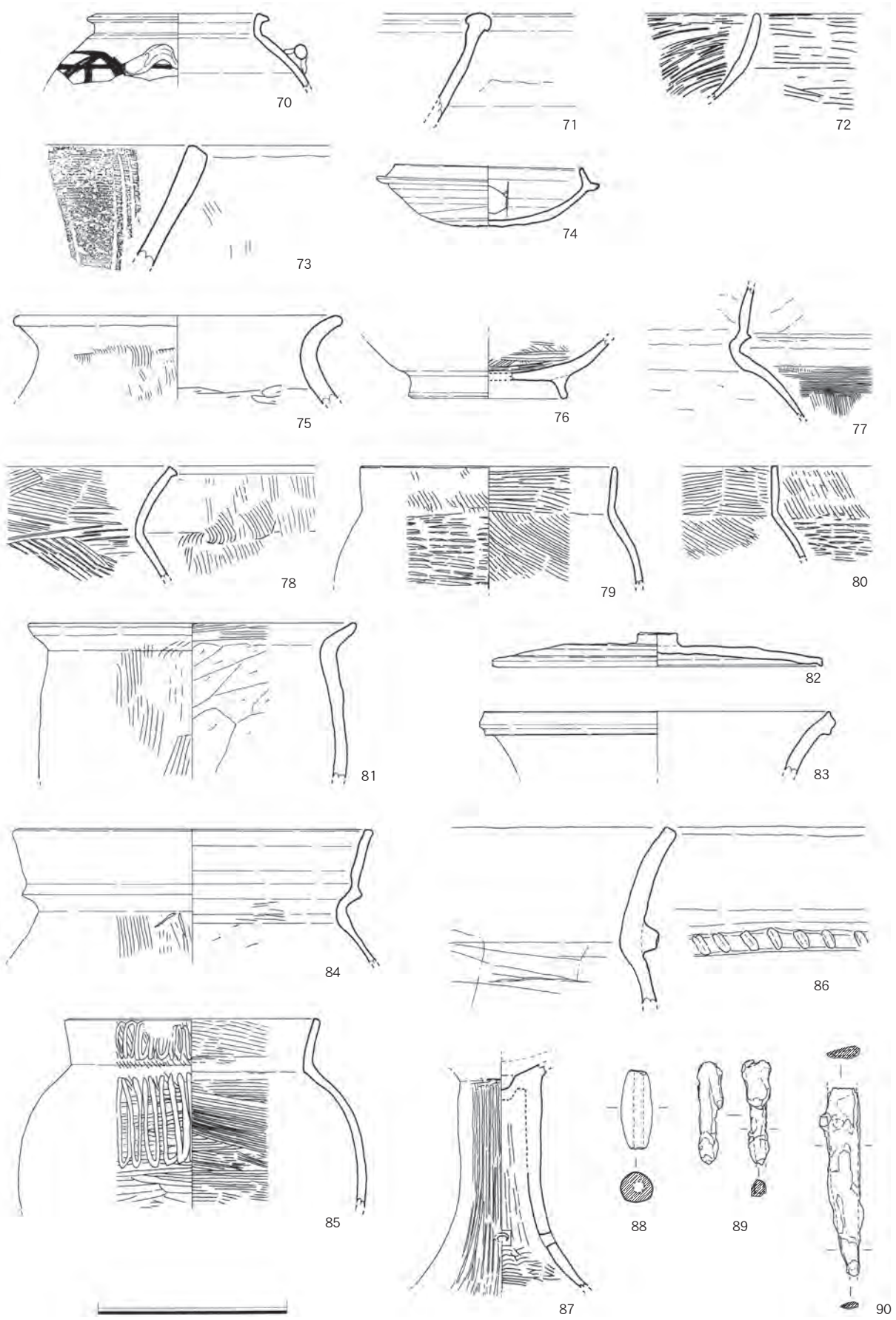


Fig.12　包含層その他出土遺物実測図２（1/3）

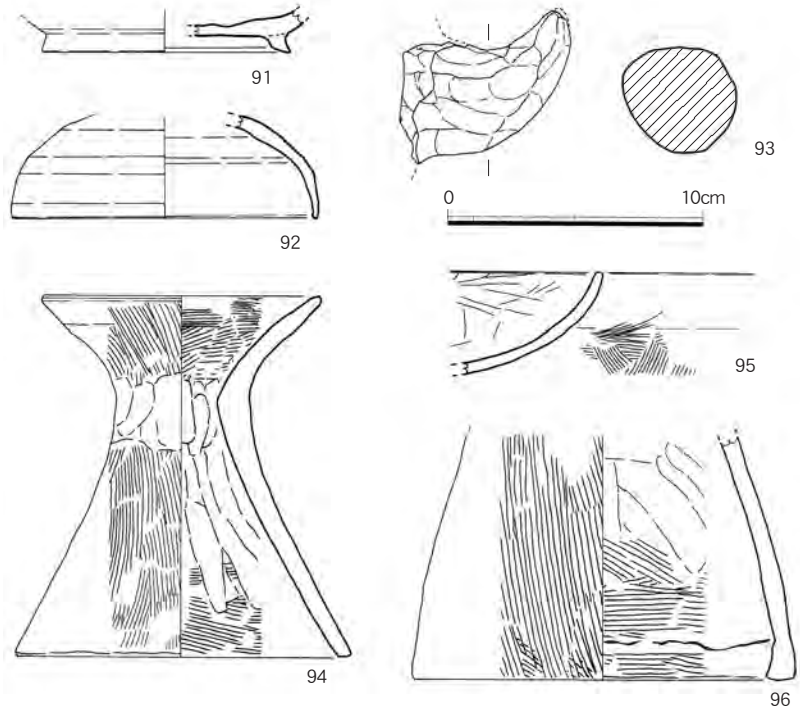


Fig.13　包含層その他出土遺物実測図 3（1/3）

の暗文が施される。灰茶色を呈する。102~104 は白磁。102 は白磁碗底部。復元底径 6.1㎝。淡黄灰色の胎土に灰色味を帯びた透明釉がかかる。外底は無釉となる。103 も碗口縁部。黄白色胎土に灰色の釉がかかる。104 は碗底部。灰黄白色胎土に灰色の釉がかかる。外底は露胎となる。105 は陶器の壷底部。復元底径 9.7㎝。暗灰色の胎土。内面は明灰茶色、外面は暗茶色を呈する。106 は瓦器碗。内外面ともにミガキ調整がなされる。復元底径 6.7㎝。107~109 は土師器坏。口径 13.0、12.8、12.2㎝、器高 2.6、2.5、3.0㎝、底径 7.6、8.4、8.0㎝。いずれも糸切底で、108 は板圧痕が残る。

3）小結

21 区は調査区のおおよそ半分が井戸（210011）の掘方で占められていた。井戸からは弥生時代終末から古墳時代初めの土器から青磁まで幅広い時期の遺物が出土しているが、11 世紀後半から 12 世紀前半の白磁碗が多い。しかし、龍泉窯系の青磁片も出土しており、古くとも 13 世紀代まで下ると思われる。その他の遺構としては、弥生時代終末 ~ 古墳時代初め頃の土坑（210035、210021）、11 世紀後半 ~12 世紀前半代の土坑（210028、210052）、トレンチの 14 世紀代の土師器集積遺構が挙げられる。遺物としては 9~10 世紀代の越州窯系青磁も出土しており、当該時期の生活面が形成されていたと思われる。

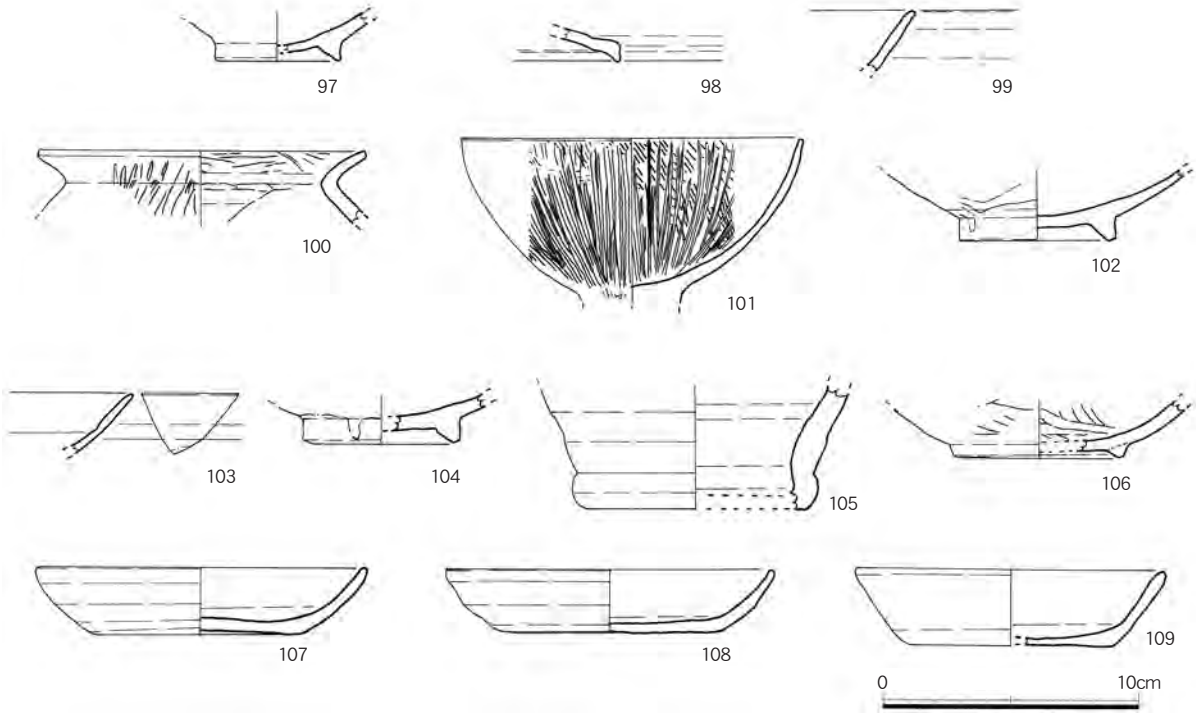


Fig.14　包含層その他出土遺物実測図 4（1/3）

23. 22 区の調査

1）22 区の概要・基本層序（Fig.1 ～ 3）

22 区は東工区の本体部分に相当する。20 区での調査と同様、覆土板の下での調査となった。遺構面を検出して写真撮影と概略図の作成、遺構の掘削と遺物の採集を行い、包含層を掘り下げて以下の遺構面を検出するという作業を区画ごとに行った。基本的に他の調査区と共通する層位として、他の調査区の第 2 面に相当する標高 3m 前後の茶褐色砂質土層上面、第 3 面に相当する標高 2.3 ～ 2.85m の基盤層である黄褐色砂質土層上面の 2 面に一部第 4 面を設定した。

井戸、土坑、ピットなどの遺構の他、東側では房州堀の西側の肩のラインと推定される砂丘の落ちが確認されている。

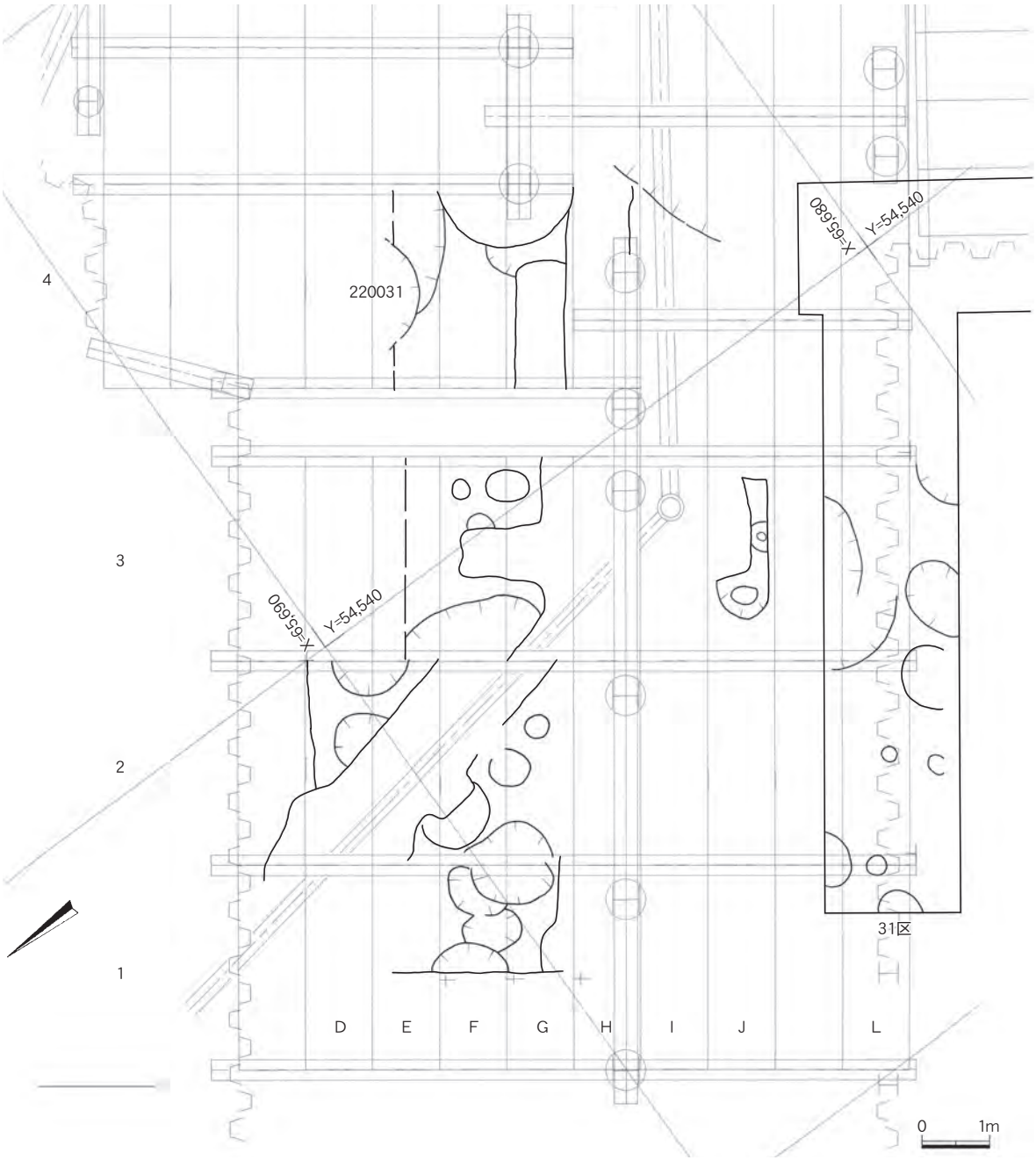


Fig.1　第 2 面遺構平面図（1/100）

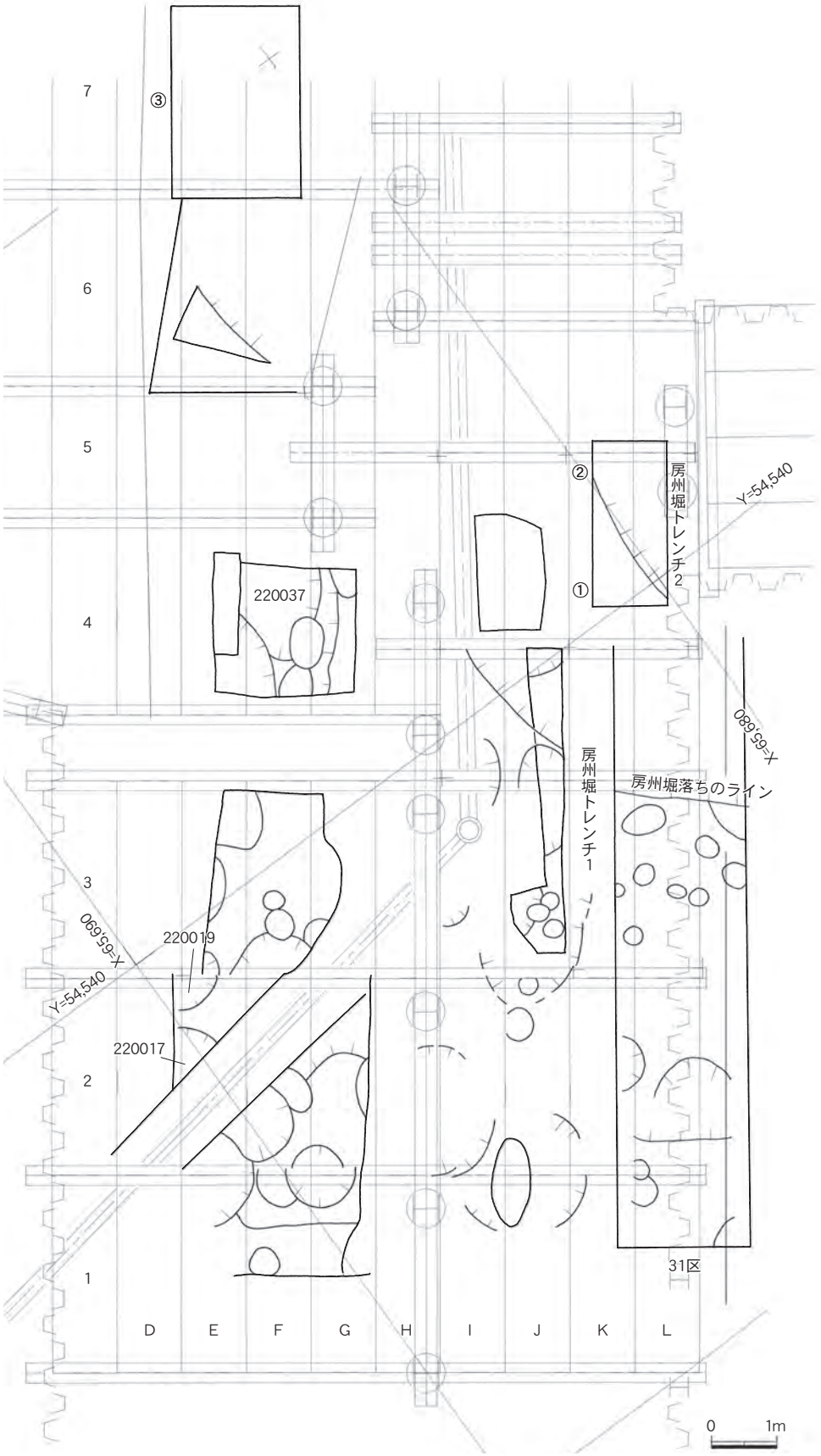


Fig.2　第 3 面遺構平面図（1/100）

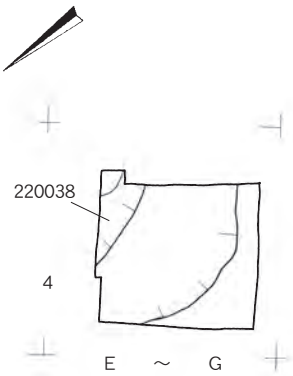
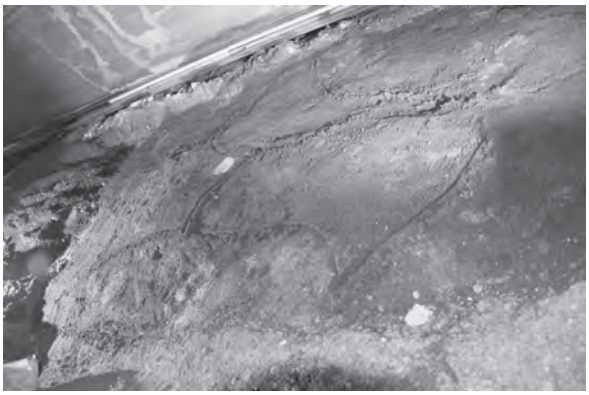
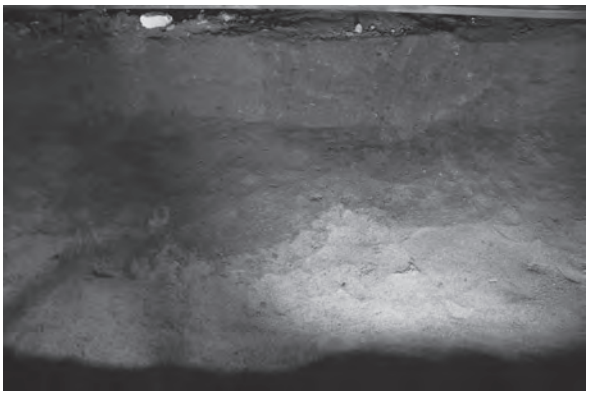


Fig.3　第 4 面遺構平面図（1/100）



Ph.1　E～H－1区2面（東から）



Ph.2　F・G－1区3面（西から）

Ph.3　D～G－3区2面

Ph.4　D～G－2区3面

Ph.5　D～G－3区3面

Ph.6　E～G－3区3面

Ph.7　E～G－4区4面（南から）

Ph.8　G－4区南壁（北から）

2）遺構と遺物

（1）遺構

SK220017（Fig.2）　E－2区の第3面で検出した。検出面は標高約2.75mの砂丘面。平面円形の土坑状の遺構。

出土遺物（Fig.4・1、2）　1は土師器皿。口径9.4㎝、器高1.1㎝、底径2.1㎝。糸切底で板圧痕が残る。2は滑石の石製品。おそらく石鍋を加工したと思われる。板状で、長さ7.0㎝、幅6.5㎝、厚さ2.1㎝。1か所穿孔が見られる。温石として用いられていたと思われる。

SK220019（Fig.2）　E－2区の第3面で検出した。検出面は標高約2.75mの砂丘面。SK220017に隣接する土坑状の遺構。

出土遺物（Fig.5・3～6）　3は白磁碗。復元口径15.3㎝、器高6.4㎝、底径6.9㎝。内面から外面の口縁部付近まで釉がかかり、胴部下半は露胎となる。灰白色胎土に灰茶色の透明釉がかかる。4は瓦器碗。内面から口縁部の外面までは黒褐色を呈する。内外面はミガキ調整がなされる。復元口径5.8㎝。5は土師器皿。復元口径8.8㎝、器高1.0㎝、底径7.0㎝。糸切底部。6は土錘。長さ7.5㎝、最大径2.2㎝。

SK220031（Fig.1）　E－4区の第2面で検出した。標高約3mの茶褐色砂質土層上面。平面円形の大型の土坑か井戸状の遺構。

出土遺物（Fig.6）　7は土師器の把手。残存長9.3㎝。

Ph.9　E～G－4区2面（南から）

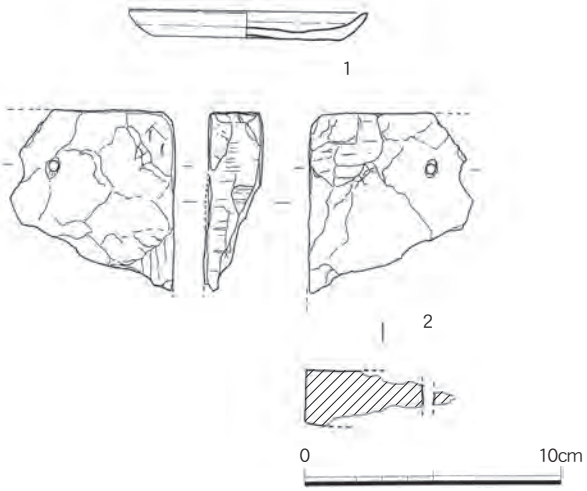


Fig.4　220017出土遺物実測図（1/3）

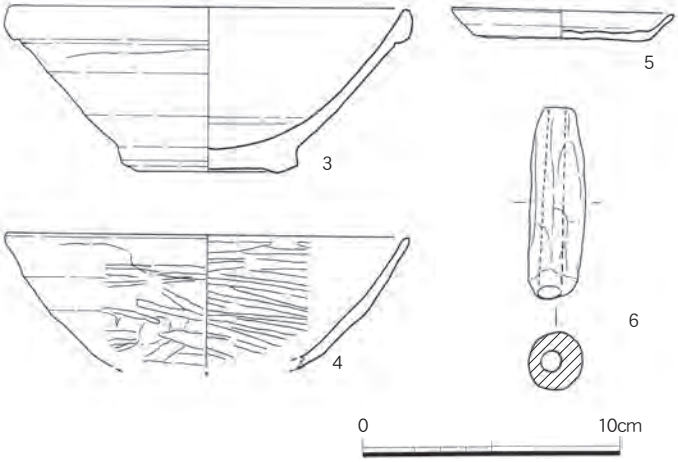


Fig.5　220019出土遺物実測図（1/3）

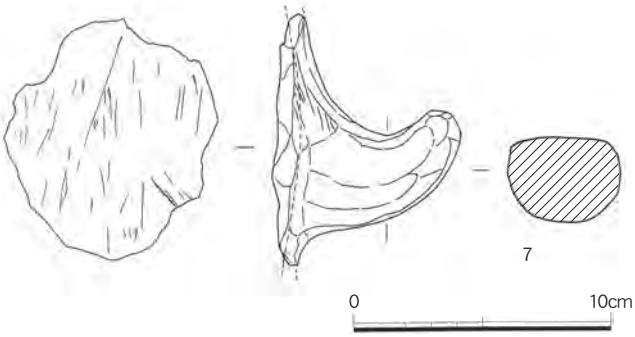
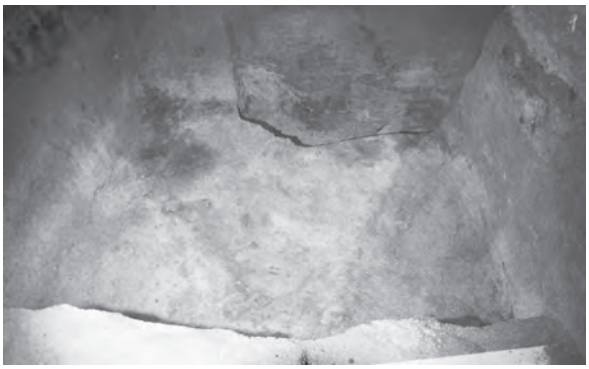


Fig.6　220031出土遺物実測図（1/3）

SE220037、220038（Fig.2、3、7）　F－4区の第3、4面で検出した。220037の検出面は標高約2.3mの砂丘面。井戸であると思われる。220037は掘方、220038は井筒と思われる。井戸の掘方の径は3m程度になろう。220038では土師器、須恵器の集積を検出した。



Ph.10　E ～ G － 4 区（南から）

Ph.11　E ～ G － 4 区南壁（北から）

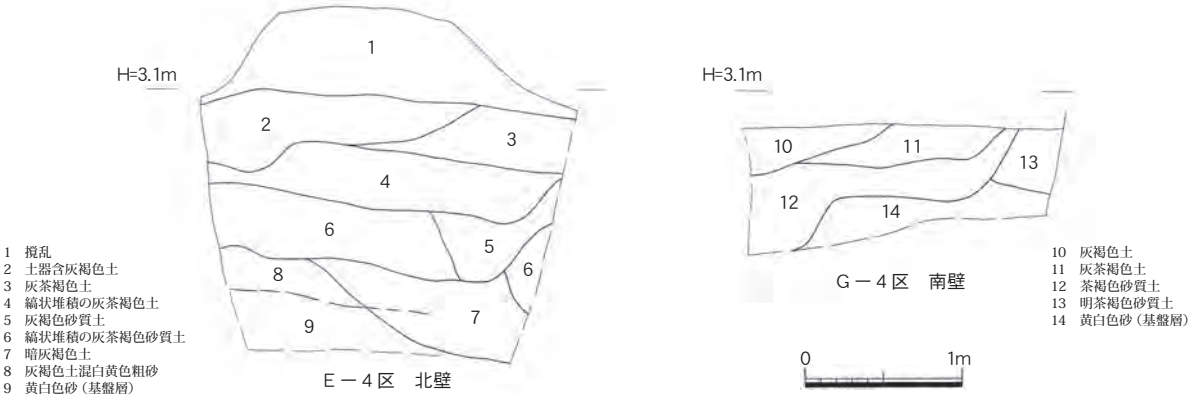


Fig.7　調査区土層図 1（1/50）

Ph.12　220038 土器集積（南から）

出土遺物（Fig.8、9）　8 ～ 16 は須恵器の甕。8 は口径 13.1㎝、残存高 8.2㎝。器壁は灰赤色を呈する。口縁部はハケメ調整、胴部外面はカキ目が施される。9 は胴部のみの残存。最大胴径 20.5㎝。灰白色を呈し、外面はタタキ、内面は当て具痕が残る。10 は胴部から底部付近までの残存。最大胴径 23㎝。灰黒色を呈するが、器壁断面は赤褐色を呈する。胴部外面にはタタキ、内面にはハケメが残る。11 は口縁部から胴部の残存。復元口径 13.0㎝。外面の胴部下半には一部ハケメが残る。灰色を呈する。12 も口縁部から胴部の残存。復元口径 13.0㎝。暗灰色を呈し、外面にはタタキ、内面には当て具痕が残る。13 は頸部から胴部の残存。胴部最大径 15.6cm。黒灰色を呈し、外面はタタキ、内面は当て具痕が残る。14 は口縁部から頸部の残存。復元口径 11.7㎝。外面は灰色､内面は茶黒色を呈する。外面にカキ目が残る。内面はナデ仕上げ。15 は胴部から底部の残存。最大胴径 19.0㎝。胴部外面にはカキ目が残り、下半はケズリ調整がなされる。底部内面は指抑えとナデで仕上げられる。灰黒色を呈する。16 は口縁部から底部付近まで残る。口径 10.3㎝、残存高 8.0㎝。暗灰色から暗赤灰色を呈する。外面下半は格子目状のタタキ、内面は当て具痕が残る。外面上半は回転ケズリで調整される。17 は甕の口縁部。灰色を呈する。復元口径 10.8㎝。

Fig.9 の 18 ～ 20 は土師器の甕。18 の胴部半分は欠損する。復元口径 12.7㎝、器高 29.1㎝。外面はハケ状工具によるナデが全面施され、内面はケズリ調整がなされる。赤褐色を呈する。19 は胴部から底部の残存。外面はハケメ調整、内面はケズリによる調整がなされる。外面は全体にすすが付着

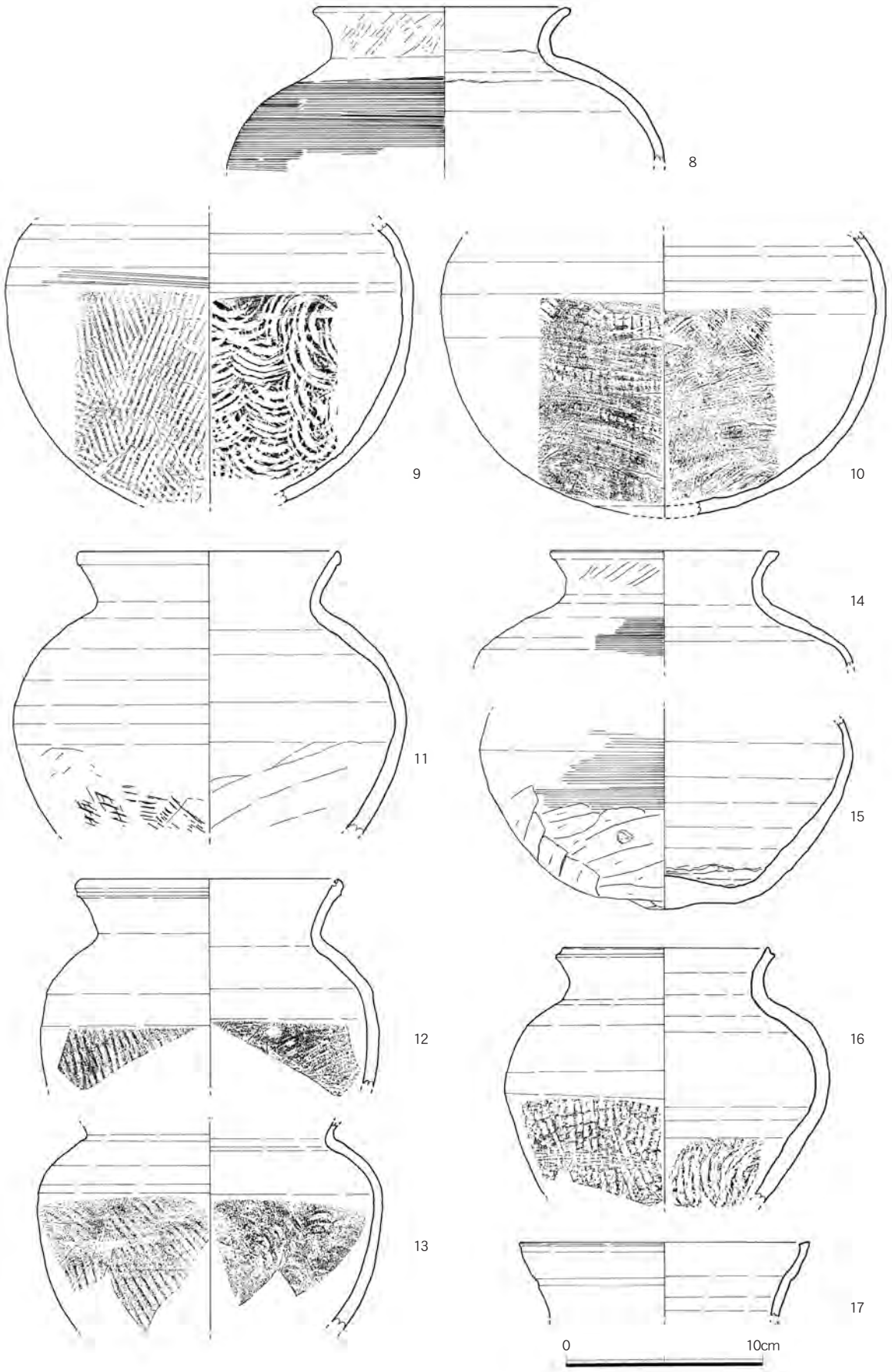


Fig.8　220038 出土遺物実測図 1（1/3）

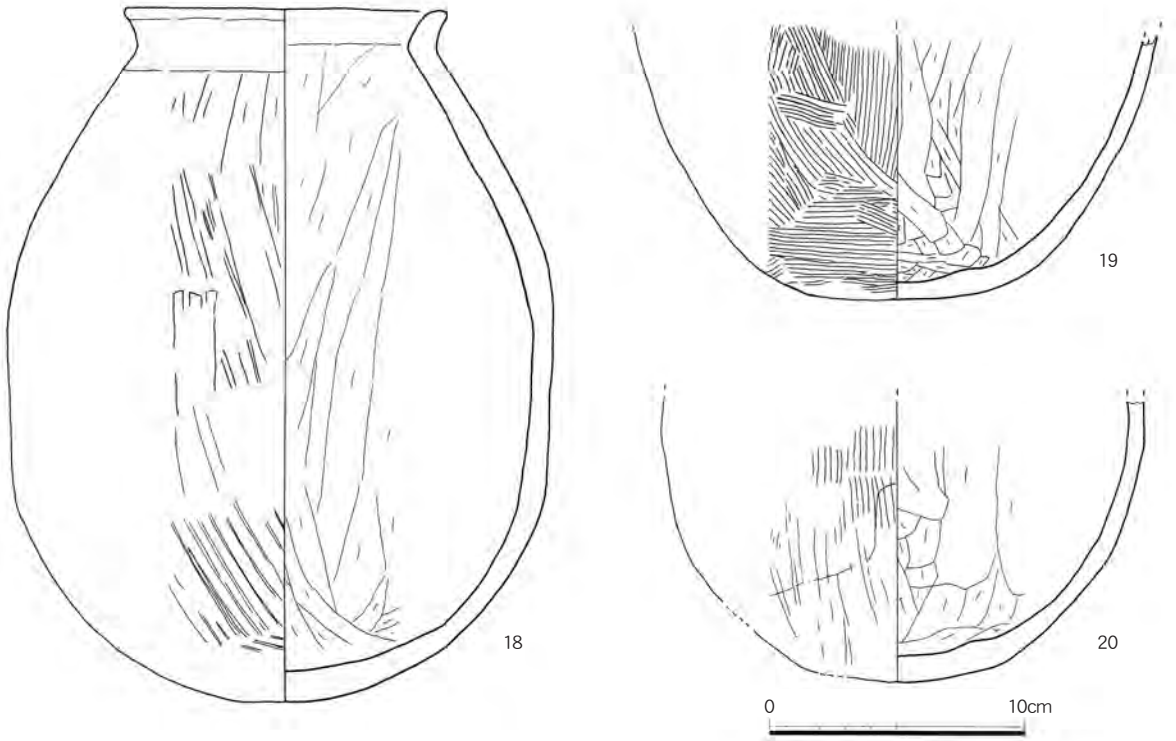


Fig.9　220038 出土遺物実測図 2（1/3）

して黒褐色を呈し、内面は明赤褐色を呈する。20 は胴部から底部の残存。外面はハケメ、内面はケズリによる調整。外面は赤褐色から黒褐色、内面は赤褐色を呈する。土師器の甕は全体に器壁が厚くどっしりしたつくりである。

以上の遺物は一括出土であるが、輸入陶磁器の共伴もなく、時期の特定に悩むところであるが、平安時代の前期に収まると思われる。

房州堀（Fig.2・10・11）　22 区の東側では、これまでの調査で房州堀の肩が確認されることが推定されていたので、推定個所においては、工事掘削の立ち会いを行った。房州堀の落ちが確認されたのは、E、F － 6 区、K、L － 4、5 区（房州堀トレンチ 2）、I、J － 3、4 区（房州堀トレンチ 1）、K、L － 3 区（31 区）である。

房州堀トレンチ 1 では、標高約 2.7m で砂丘面が検出され、東側に砂丘の落ちが確認された（Ph.13・Fig.10 J － 3 区北壁）。K、L － 3 区（31 区）では、砂丘面の標高は約 2.85m で、各々の東端部で砂丘の落ちが見られている。E、F － 6 区では、標高 1.5m までは近世、近代の客土が堆積し、その下は灰褐色粗砂層、白黄色粗砂層となる。粗砂層の堆積状況から落ちが確認される。房州堀トレンチ 2 では、標高 2m まで近世以降の客土が堆積しており、その下層は茶褐色土層、砂質土層と続く。掘削底は標高約 0.9m であるが、近世の遺物を含む土層が確認され、このレベルまで堀の埋土であることが推定される（Fig.11 ①・②）。これらの区も南東のラインで落ちが確認されている。なお、I、J － 4 区では掘削範囲は全て客土であり、堀の中であることが考えられる。E、F － 7 区も標高 0.6m まで明確な砂丘は見られない（Fig.11 ③　Ph.16）。房州堀の肩の推定ラインは、東工区下水道管の項の Fig.3 に示している。

出土遺物（Fig.12-21・22）　I、J － 4 区で出土した。21 は瓦質の鉢である。復元口径 29.4㎝。

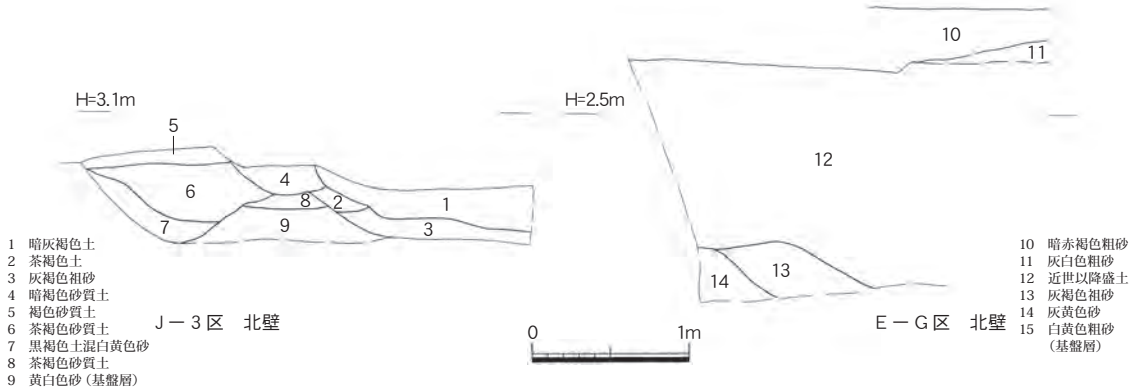


Fig.10　調査区土層図２（1/50）

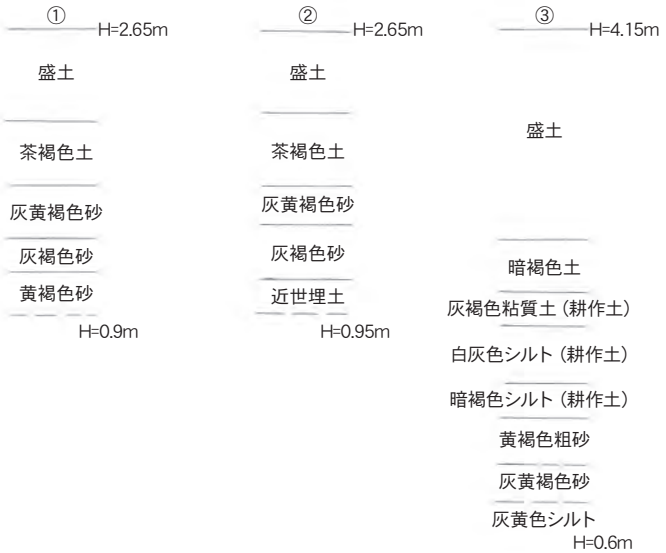


Fig.11　調査区土層模式図

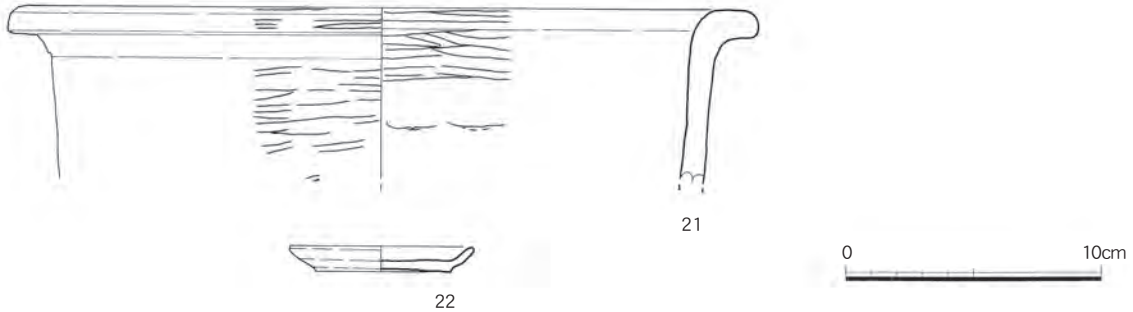
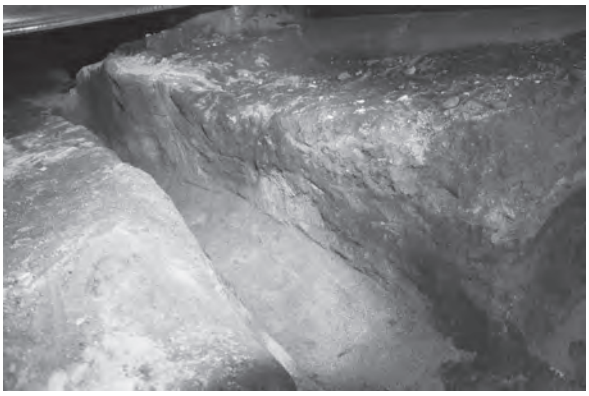


Fig.12　房州堀トレンチ出土遺物実測図（1/3）

外面は工具によるナデのあとミガキ調整をする。内面はナデで仕上げる。黒色を呈するが、器壁断面は淡灰色である。22 は土師器皿。復元口径 7.2㎝、器高 1.0㎝、底径 5.3㎝。糸切底である。

（2）包含層出土の遺物（Fig.13）

23、24 はＤ～Ｇ－２区の２～３面の包含層で出土した。23 は白磁碗底部。復元底径 7.3㎝。白色の胎土に灰色の釉がかかるが、外底は露胎。24 は土師器皿。口径 10.0㎝、器高 1.0㎝、底径 7.8㎝。



Ph.13　房州堀 トレンチ１（東から）

Ph.14　房州堀 トレンチ２（南から）

Ph.15　E、F－７区③

Ph.16　房州堀 トレンチ２－①（南から）

底部はヘラ切りで板圧痕が残る。25 は D ～ G － 3 区の 2 ～ 3 面包含層出土。弥生時代終末から古墳時代初めの鉢。口径 22.8㎝、残存高は 7.5㎝。外面はハケメののち口縁部はナデ仕上げ、底部付近は工具によるナデ仕上げ。内面はハケメのちナデ仕上げをする。暗灰茶褐色を呈する。26 ～ 29 は E ～ G － 4 区 3 ～ 4 面包含層出土。26、27 は須恵器坏。26 は復元口径 12.5㎝、残存高 2.4㎝。内面は灰色、外面は暗灰色を呈する。27 は復元口径 10.6㎝、器高 2.4㎝。外面は暗青灰色、内面は淡灰色を呈する。28、29 は坏。28 は口径 9.1㎝、器高 2.9㎝。暗青灰色を呈する。29 はかえりのつく坏。口径 8.9㎝、器高 2.7㎝。暗青灰色を呈する。

30 ～ 34 は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器。30 は E － 4 区出土。坏。口径 10.9㎝、器高 4.4㎝。外面はケズリとナデ、内面は工具によるナデ仕上げ。31、32 は高坏脚部。E ～ G － 4 区 2 ～ 3 面包含層出土。31 の底径は 11.2㎝。内外面ともにケズリ調整。32 もケズリによる調整。33 は E － 4 区出土。甕の口縁部。外面はハケメ調整。赤褐色を呈する。34 は器台。内外面ともにハケメ調整。復元口径 9.0㎝。

35 ～ 37 は E ～ G － 4 区 2 ～ 3 面包含層出土。35 は土師器の把手。残存長 8.3㎝。36 は鉄製品であるが、用途不明。径 6.1㎝ほどのほぼ平面円形を呈し、縁が立ち上がり、中央が突き出る板状の製品である。紡錘車の可能性もある。37 は平瓦。外面は布目痕、内面は縄目痕が残る。

3）小結

22 区は 2 面の生活面が検出され、東側では房州堀の落ちが検出された。立会調査のため、詳細なデータは得にくかったが、想定される地形を確認することができた。

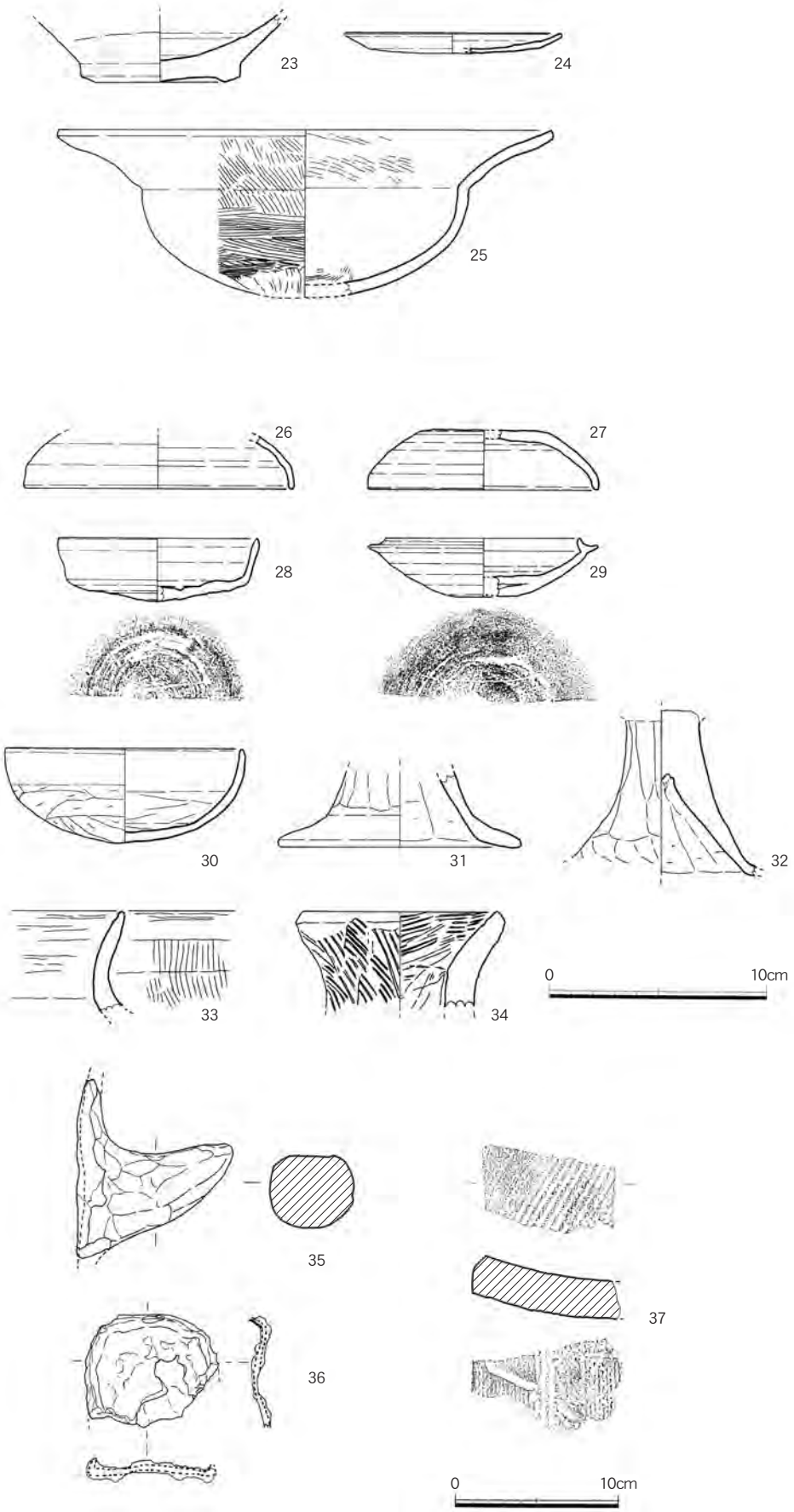


Fig.13　包含層出土遺物実測図（1/3・1/4）

24．23 区の調査

1）概要（Fig.4　Ph.1・2）

23 区は、西工区に位置し、中間杭を設置するための立会調査である。中間杭は、東西方向に 2 列配置され、1.0m 四方に組んだ H 鋼を 1.0~2.0m 置きに設置する（Fig.4）。調査は中間杭が並ぶ範囲を溝状に行った。調査区は幅 1.0m、長さ延長で約 78.5m を測る。北列の中間杭はほぼ直線であるが、南列は、西側で南方向に振れる。23 区は、発掘調査後、その日のうちに埋め戻し、現状に復さなければならないため、短いスパンで 1 面から 3 面（一部 4 面）までの調査を繰り返した。遺構は現道路面から約 1.8m 下の第 5 面まで遺存するが、安全確保のため、約 1.5m 下までの第 3 面までの調査しか行うことができなかった。なお、調査は工事の工程に合わせ行った。便宜的に調査区間を①～⑦と付け、遺構の位置等を示す（Fig1 参照）。調査は他の立会調査と同様、第 1 面まで、重機による掘削を行い、遺構検出、写真撮影後、上端のみ図面にスケッチし、可能な限り遺構掘削を行った。遺構の深さと覆土を記録し、遺物を遺構ごとに取り上げた。その後、第 2 面までの包含層を人力と重機で掘削し、遺物採集した後、第 2 面、第 3 面の調査を繰り返した。調査は、2015 年 9 月 22 日から 2015 年 9 月 30 日に①～⑫を、2016 年 8 月 9 日に⑬～⑮を行った。

遺構面は発掘調査を終了した他の調査区を参考に設定した。第 1 面は西側が道路面から 1.2m 下の標高 4.0m、中央部で約 0.9m 下の標高 4.7m、東側で約 1.0m 下の 4.3m である。第 2 面、第 3 面も中央部が最も高く、東側、西側へと徐々に傾斜する。

調査区は、埋設管（③～⑬北側に水道管）や後世の撹乱（④煉瓦基礎、①東側）、先行して行った発掘調査の矢板設置により削平を受けた箇所もあるが、遺構の遺存状況は比較的良好である。

Ph.1　⑨ -1 面掘削状況（西から）

Ph.2　⑩西 -1 面調査風景（北から）

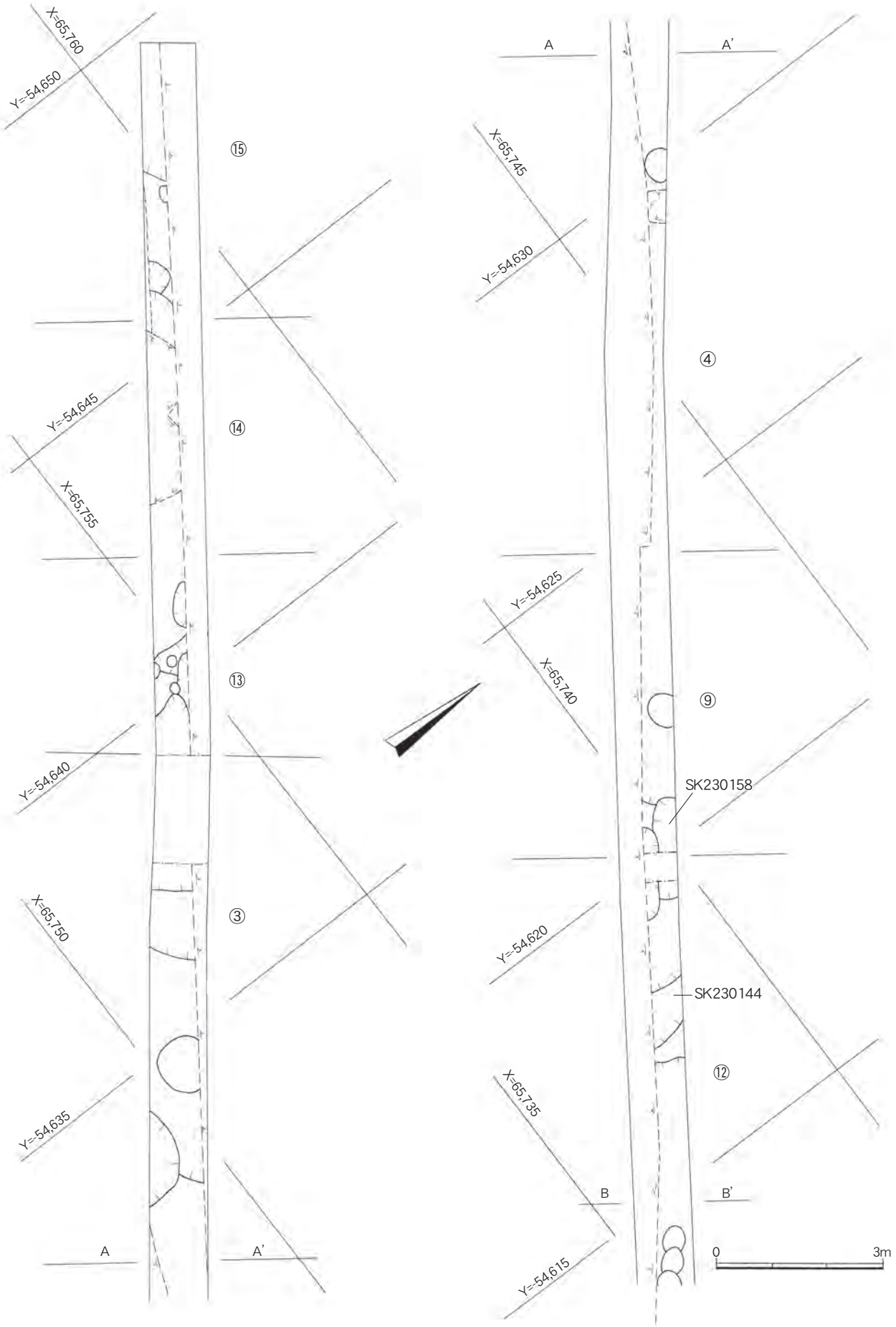


Fig.1　第 1 面全体図①（1/100）

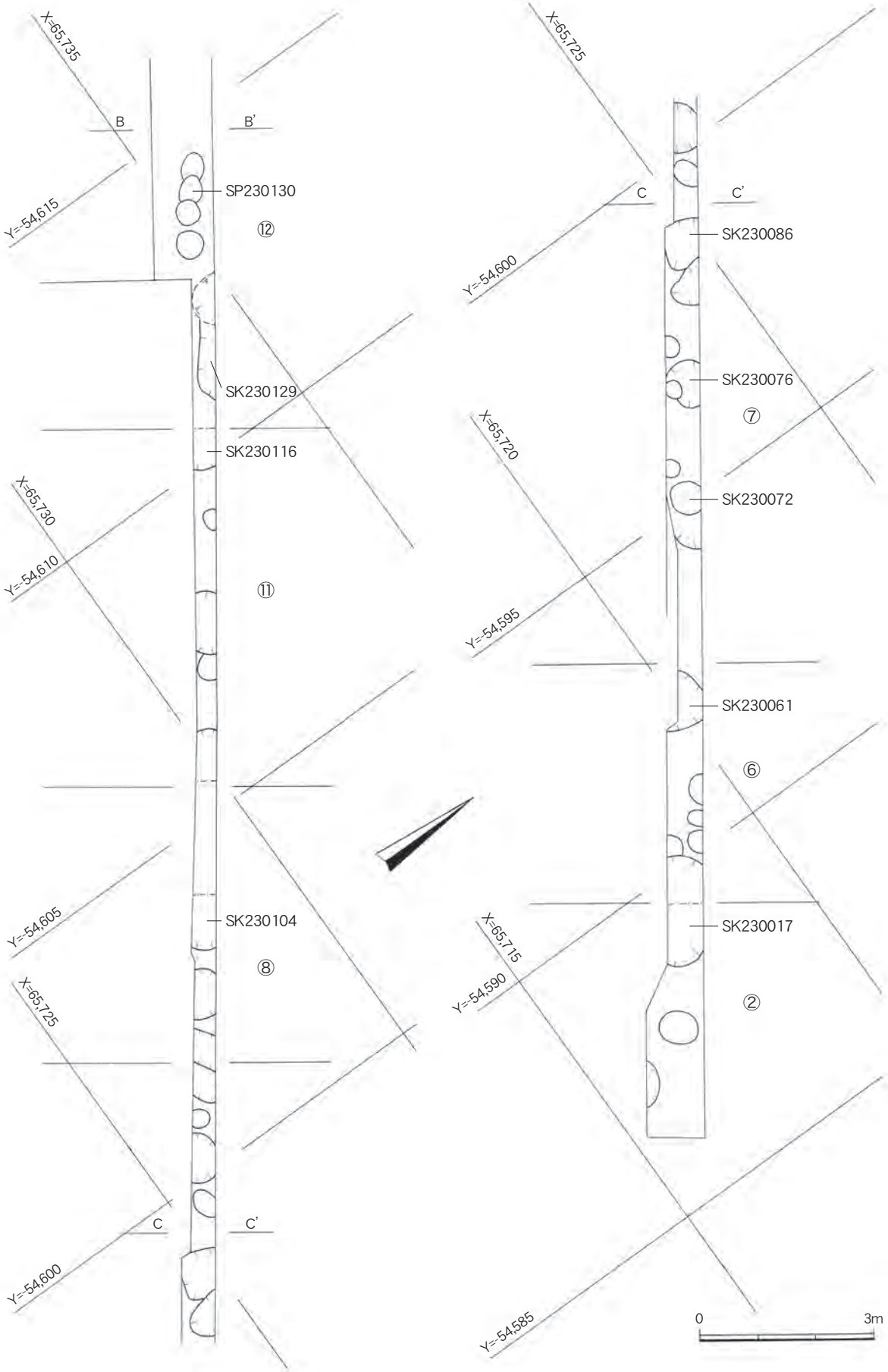


Fig.2　第 1 面全体図②（1/100）

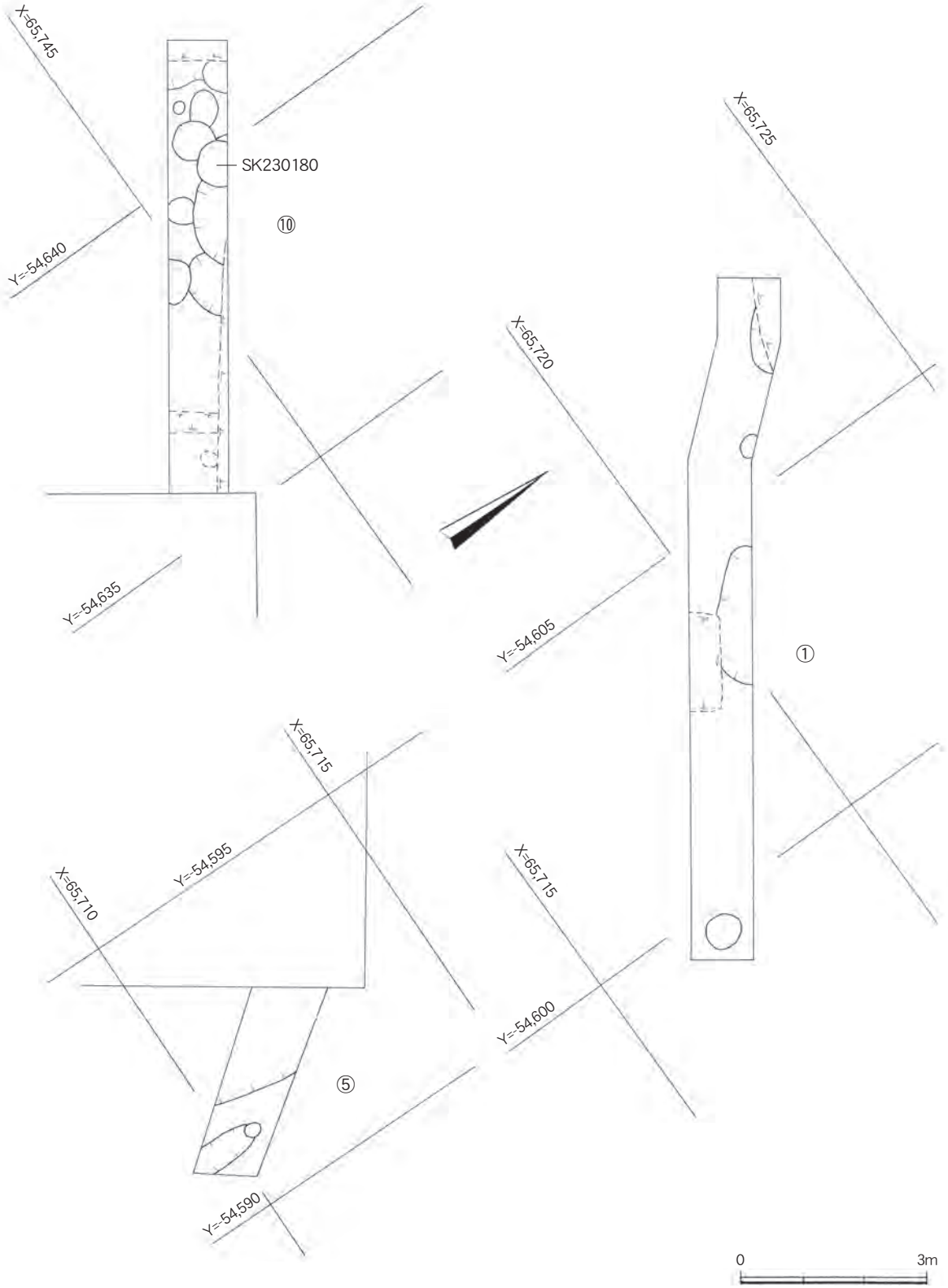


Fig.3　第 1 面全体図③（1/100）

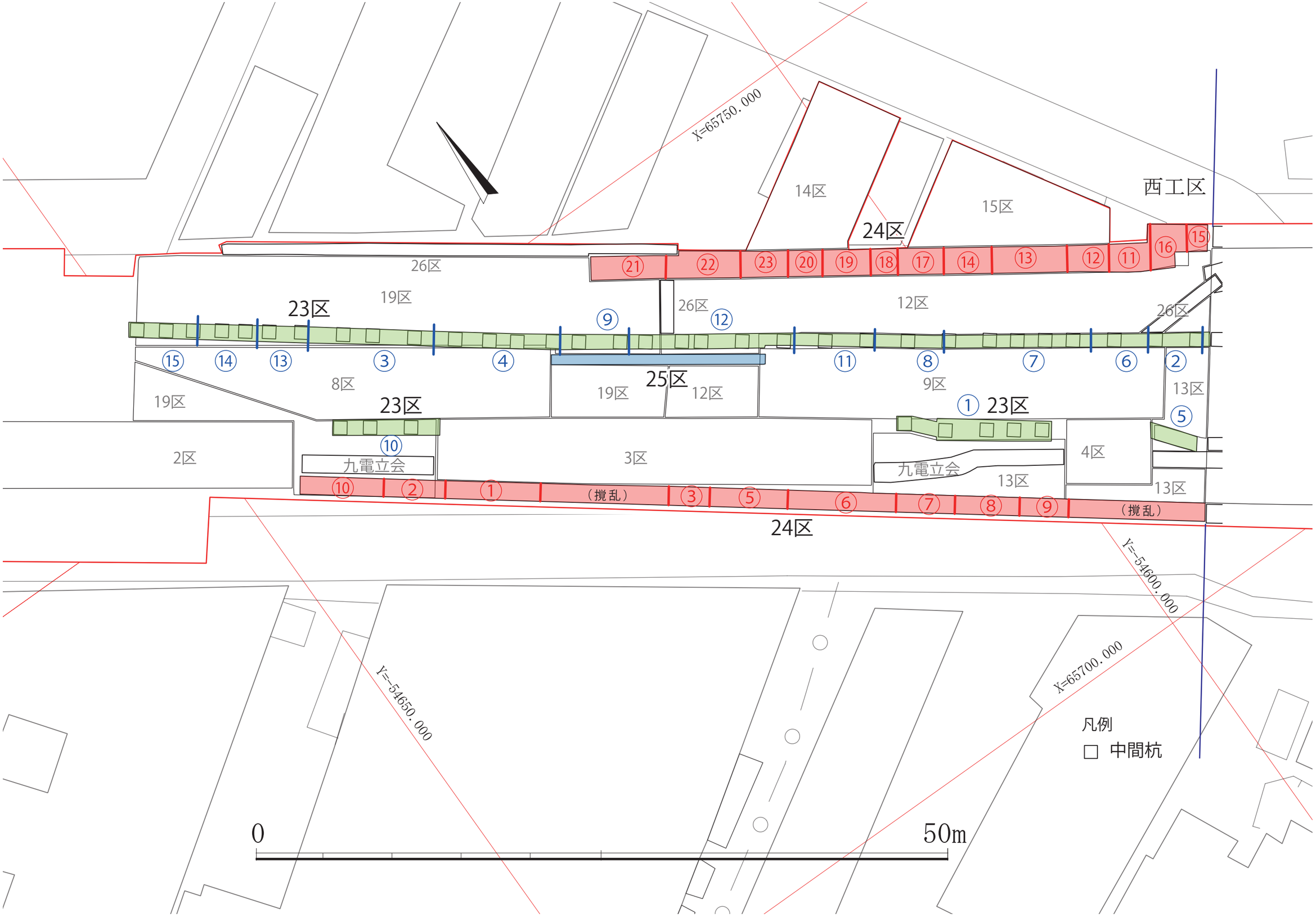
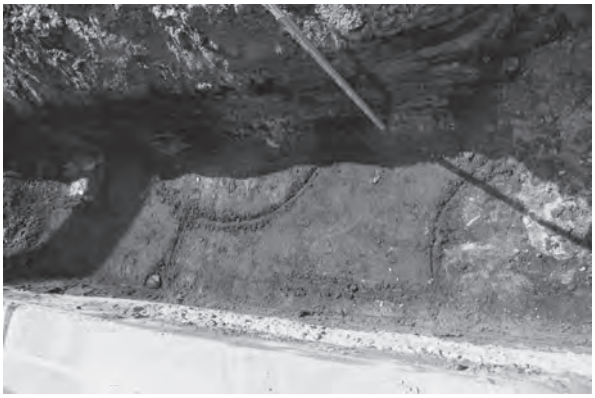


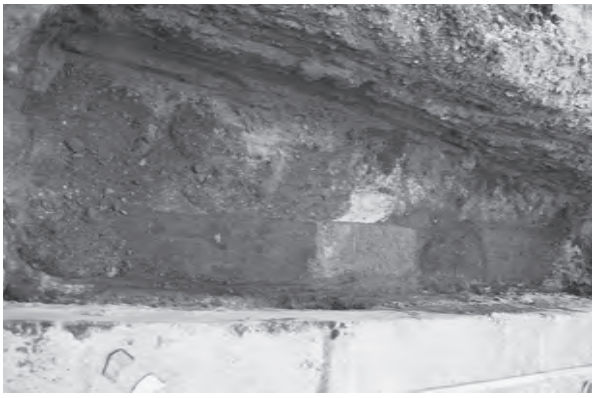
Fig.4　23・24・25区調査地点位置図(1/250)

Ph.3　② -1 面（東から）

Ph.4　③西 -1 面（北から）

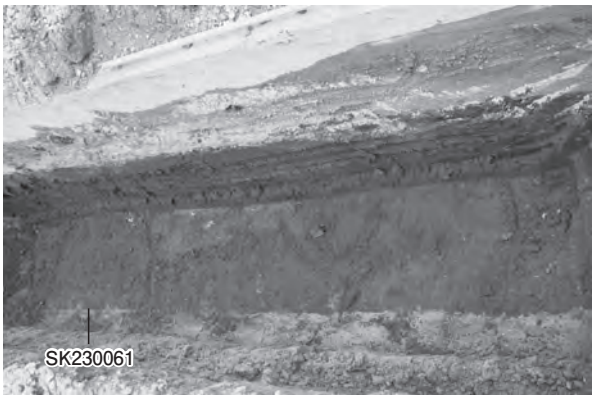


Ph.5　③東 -1 面（北から）

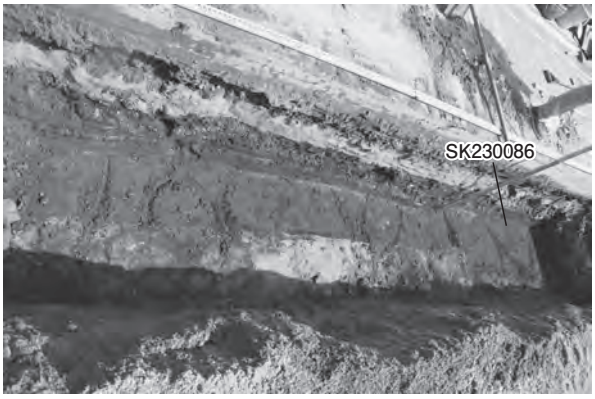


Ph.6　④西 -1 面（東から）

Ph.7 ⑤ -1 面（東から）



Ph.8　⑥ -1 面（南東から）



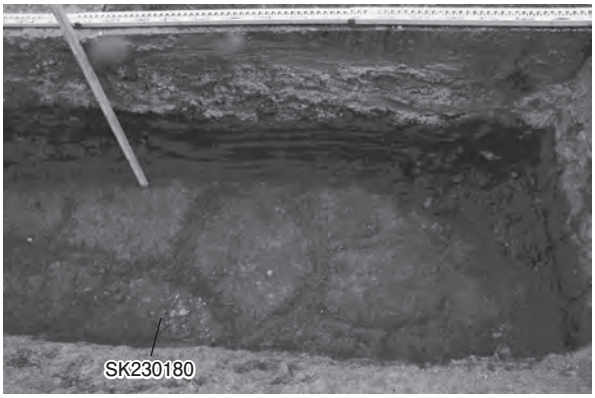
Ph.9　⑦西 -1 面（南から）

Ph.10　⑦東 -1 面（西から）

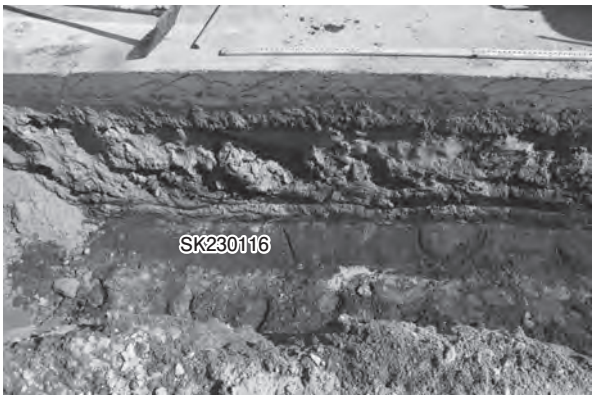
Ph.11　⑧ -1 面（南から）

Ph.12　⑨ -1 面掘削状況（南から）

Ph.13　⑩西 -1 面（北から）

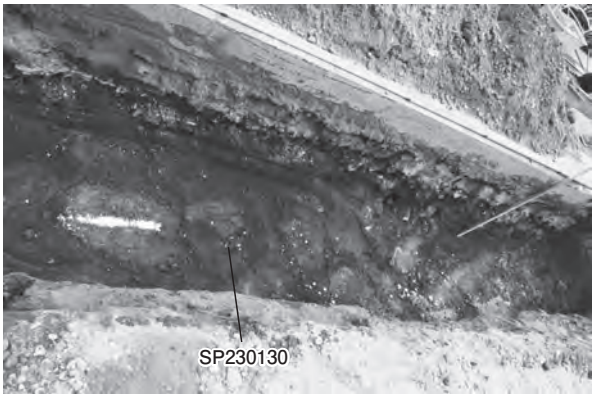


Ph.14　⑩西 -1 面（北から）

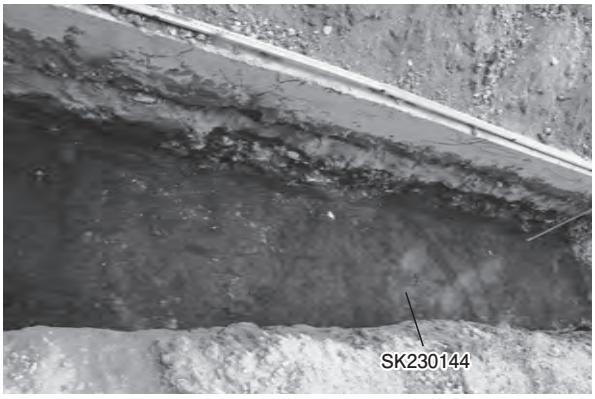


Ph.15　⑪ -1 面（南から）

Ph.16　⑪ -1 面（南から）



Ph.17　⑫西 -1 面（南から）



Ph.18　⑫東 -1 面（南から）

Ph.19　⑬ -1 面（西から）

Ph.20　⑭ -1 面（西から）

Ph.21　⑮ -1 面（西から）

第 4 面・5 面を掘削することができなかったため、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺構は第 3 面で土坑を検出するのみである。8 世紀から 9 世紀を中心とした古代の土坑、11 世紀後半から前半にかけての土坑や 12 世紀中頃の井戸を検出した。出土遺物はコンテナケース 13 箱分である。

2）第 1 面の調査（Fig.1~3　Ph.3~21）

第 1 面は暗黄褐色土、灰褐色土の上面で検出した。西側が道路面から 1.2m 下で、標高は 4.0m、中央部が約 0.9m 下で、標高は 4.7m、東側が約 1.0m 下で標高 4.3m である。遺構の遺存状況であるが、北列は西側⑬～③の北側で水道管の埋設（Ph.19~21）、中央の⑨⑫の南側は 25 区の合流管を敷設する際（Ph.12・17）、削平される。④は後世の撹乱を受け、煉瓦造の基礎が残る（Ph.6）。南列は⑩の東側と①の南側は後世の撹乱を受ける。検出した主な遺構は古代の土坑 1 基、11 世紀後半から 12 世紀前半の土坑 3 基、13 世紀中頃から 14 世紀中頃の土坑 3 基、ピットである。

（1）土坑（SK）

SK230017（Fig.2　Ph.3）　北列②に位置し、西側の⑥で対応するプランを確認できなかった。平面プランは直径 1.0m 以上の円形を呈し、深さは 20cm である。覆土は灰黒色土を主体とする。

出土遺物（Fig.5）　1 は白磁碗Ⅳ -1a 類である。他に土師器小片が出土するが、土坑の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

SK230061（Fig.2　Ph.8）　北列⑥に位置し、平面プランは円形で、直径 1.0m 以上を測る。深さは 30cm で、覆土は灰黒色土を主体とし、炭化物が混入する。

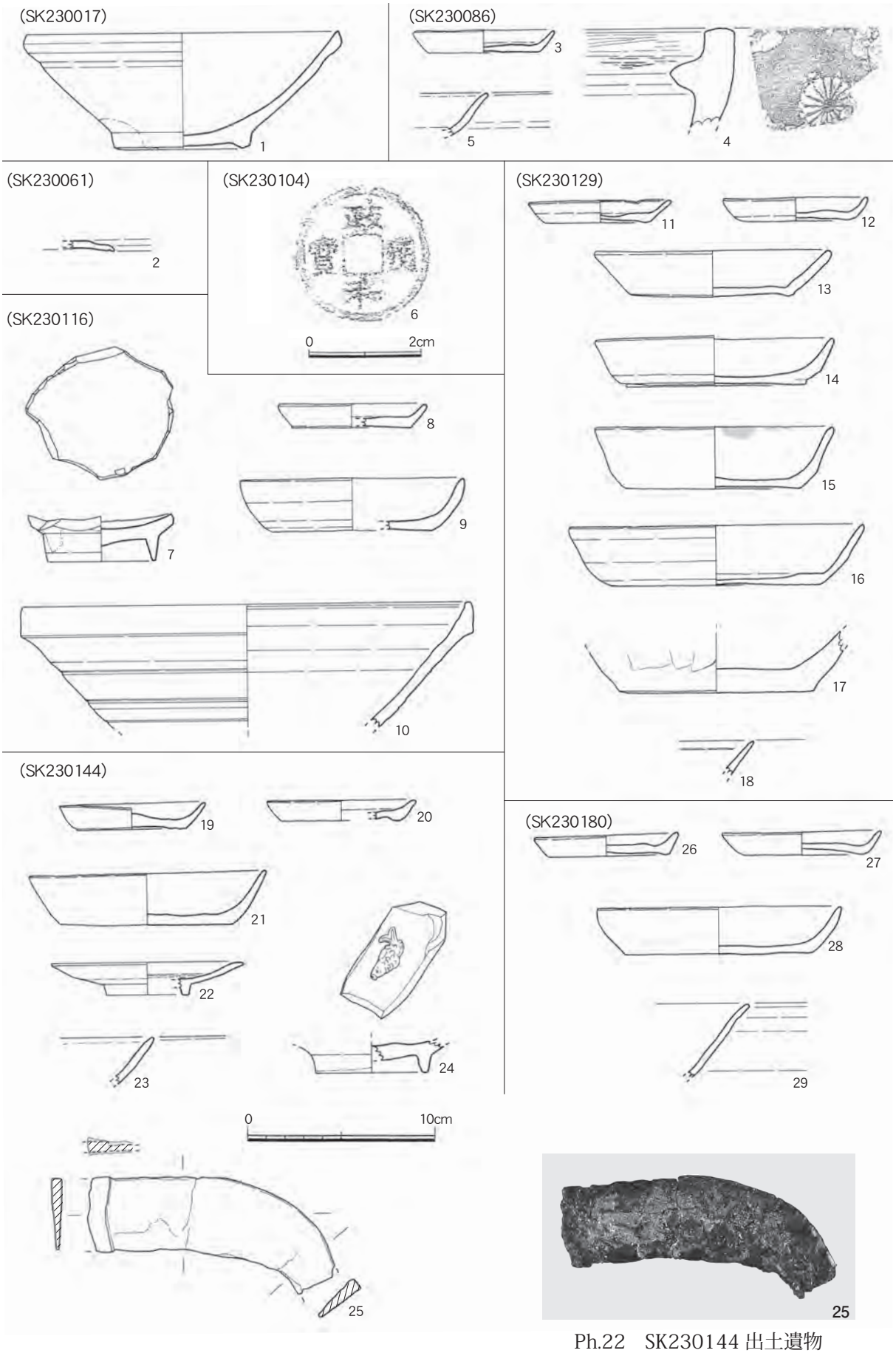


Fig.5　第 1 面遺構出土遺物実測図①（1/1・1/3）

Ph.22　SK230144 出土遺物

出土遺物（Fig.5）　2は土師器の坏蓋の口縁部片で、端部付近で沈線が巡り、わずかに下方へ引き出す。ナデで調整する。他に黒色土器A類が出土する。土坑の時期は9世紀頃と思われる。

SK230086（Fig.2　Ph.9）　北列⑦に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈し一辺0.8mを測る。覆土は上層が灰黒色土、下層は灰茶色土となり、深さは50cmである。

出土遺物（Fig.5）　3は回転糸切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。復元口径7.2cm、器高1.2cmを測る。胎土に赤褐色粒、雲母、白色砂粒を含み、明褐色を呈する。4は瓦質土器の火鉢で、外面に菊花文をスタンプする。5は白磁碗Ⅸ類の口縁部片である。土坑の時期は13世紀中頃から14世紀初頭と考えられる。

SK230104（Fig.2　Ph.11）　北列⑧に位置し、平面プランは円形を呈すると考えられるが、西側のプランは検出することができなかった。深さ20cmを測る、覆土は黒色土を主体とする。

出土遺物（Fig.5）　6は北宋代の銅銭で、「政和通寶」（初鋳年：1111年）である。他に回転糸切り底の土師器、白磁小片が出土する。土坑の時期は12世紀前半と考えられる。

SK230116（Fig.2　Ph.15）　北列⑪に位置し、⑫で西側の立ち上がりを検出することができなかった。深さ40cmを測り、覆土は灰色粘質土である。

出土遺物（Fig.5）　7は白磁碗Ⅴ類の底部片を使用した瓦玉で、縁辺を丁寧に打ち欠いて円盤状にする。重さは89.09gを量る。8は回転糸切り底の土師器の小皿で、復元口径8.0cm、器高1.3cmを測る。胎土に多量の金雲母を含み、赤褐色粒もみられる。色調は暗橙色を呈する。9は回転糸切り底の土師器の坏で復元口径12.0cm、器高2.8cmを測る。10は瓦質土器の捏鉢で、内面下位は器面が滑らかである。他に白磁碗Ⅳ類、施釉陶器が出土する。これらの出土遺物から土坑の時期は12世紀前半と考えられる。

SK230129（Fig.2）　北列⑫に位置し、西側は煉瓦基礎に削平され、北側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈すると思われる。深さ60cm以上を測り、覆土は灰黒色土を主体とする。

出土遺物（Fig.5）　11~16は土師器である。11・12は回転糸切り底の小皿で、ともに口径7.7cm、器高1.2cmを測る。13~16は回転糸切り底の坏で、13・16は外底部に板状圧痕を有する。口径は12.8~15.8cm、器高は2.5cm~3.2cmを測る。15は口縁部内外面と内底部に煤が付着し、灯明皿として使用される。また、11・13の内底部は、工具による調整で渦状となる。同一工人によるものか。胎土に褐色粒、金雲母を含み、色調も明橙色を呈するなど、類似点が多い。17は瓦質土器の捏鉢で、内底部は使用され、滑らである。18は龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。土坑の時期は12世紀中頃から後半と考えられる。

SK230144（Fig.1　Ph.18）　北列⑫に位置し、西側は他の遺構に切られる。平面プランは円形を呈すると考えられ、深さ50cm以上を測る。覆土は茶褐色土と黒色土の混ざりである。

出土遺物(Fig.5　Ph.22)　19~21は回転糸切り底の土師器である。19・20は小皿で、口径は7.8cm、8.0cm、器高はともに1.1cmを測る。21は坏で、口径12.7cm、器高2.9cmを測る。胎土に多量の赤褐色粒を含み、色調は明橙色を呈する。22は白磁皿Ⅲ-1類で、内面見込みの釉を輪状に掻き取る。23は白磁碗Ⅸ類の口縁部片、24は龍泉窯系青磁碗の底部片で内面見込みに魚文を配する。釉が全面にかかり、高台端部の釉は掻き取る。25は大型の鉄鎌の破片である。全幅3.8cm、峰0.5cmを測り、刃部を欠損する。土坑の時期は14世紀初頭から中頃と考えられる。

SK230180（Fig.3　Ph.14）　南列⑩に位置し、北側8区では検出できていない。平面プランは直径0.75mの円形を呈すると考えられる。深さは20cmを測り、覆土は灰黒色土を主体とする。

出土遺物（Fig.5）　26~28は回転糸切り底の土師器である。26・27は小皿、26は完形品で、口径7.8cm、器高1.1cmである。胎土に多量の赤褐色粒を含み、色調は明橙色を呈する。28は坏で、復元口径13.0cm、器高2.5cmで、外底部に板状圧痕を有する。29は白磁の小碗で、口縁は外反し、端部は肥厚する。土坑の時期は出土遺物より14世紀初頭から中頃と考えられる。

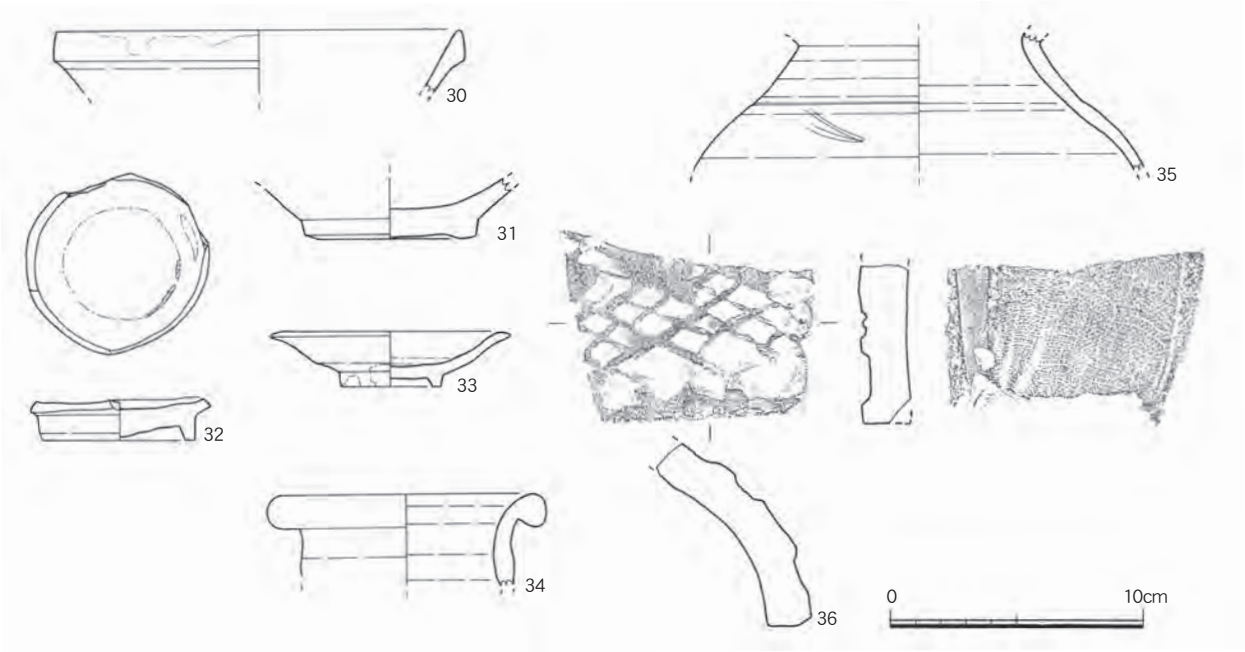


Fig.6　第 1 面遺構出土遺物実測図②（1/3）

（2）ピット（SP）

SP230130（Fig.2　Ph.17）　北列⑫に位置する。平面プランは直径 0.45m の円形を呈し、深さは 20cm を測る。覆土は炭化物を含む灰黒色土である。

出土遺物（Fig.6）　30~34 は白磁である。30 は碗Ⅳ類、31 は碗Ⅳ -1a 類である。32 は碗Ⅷ類で、縁辺を丁寧に打ち欠いて円盤状にし、瓦玉に転用する。重さは 86.0g を量る。33 は皿Ⅲ -1 類で、内面見込みの釉を輪状に掻き取り、胎土目が残る。34 は壺の口縁部片である。35 は施釉陶器の壺の小片で、肩部に工具による文様が施される。黒色、白色粒を含む灰色の胎土に浅黄色の釉がかかる。36 は土師質の丸瓦で、凸面は斜格子の叩き、内面は布目が残り、側面は切り離し後、未調整である。他に瓦器が出土する。土坑の時期は 12 世紀中頃から後半と考えられる。

3）第 2 面の調査（Fig.6　Ph.23~42）

第 2 面は暗褐色土、黄褐色土の上面で検出した。西側が道路面から 1.3m 下で、標高は 3.9m、中央部が約 1.2m 下で、標高は 4.5m、東側が約 1.2m 下で標高 4.1m である。第 1 面で確認した埋設管、撹乱は第 2 面でも同様の状況であった。

検出した主な遺構は 12 世紀中頃から後半の井戸 1 基、11 世紀後半から 12 世紀前半の土坑 6 基、ピットであるが、少数ながら、古代と古墳時代の土坑、ピットも確認した。

（1）井戸（SE）

SE230042（Fig.7　Ph.28）　北列④に位置し、8 区の SE080657 と同一遺構と思われる。覆土は暗茶褐色土を主体とし、多量の炭化物、焼土を含む。

出土遺物（Fig.10）　37 は白磁碗Ⅷ類を使用した瓦玉である。内面見込みの釉を輪状に掻き取り、胎土目を残す。縁辺は丁寧に打ち欠き、円盤状とする。重さは 81.62g を量る。他に龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、施釉陶器、須恵質の凸面に縄目叩きを残す瓦小片が出土する。井戸の時期は 12 世紀中頃から後半と考えられる。

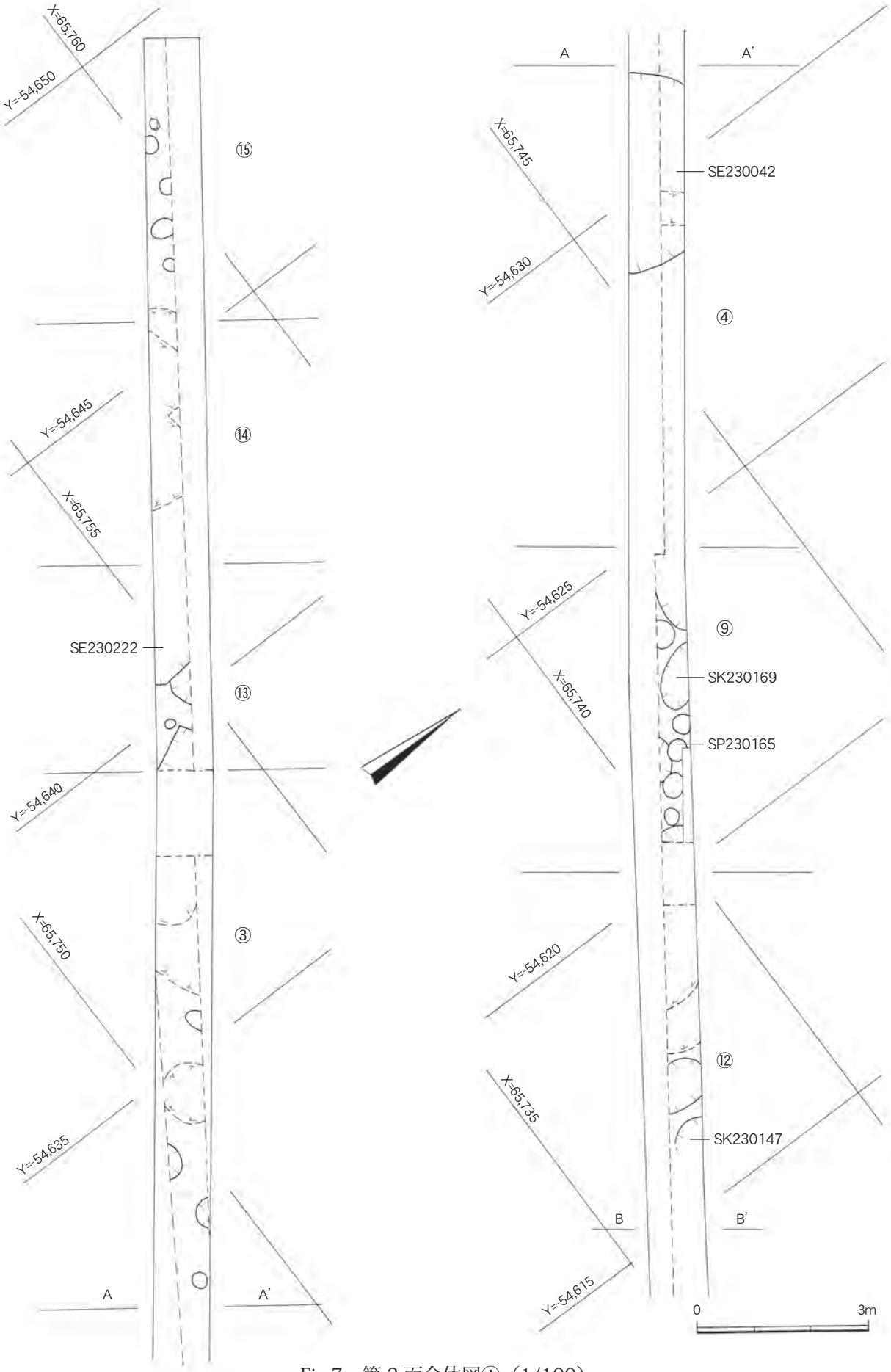


Fig.7　第 2 面全体図①（1/100）

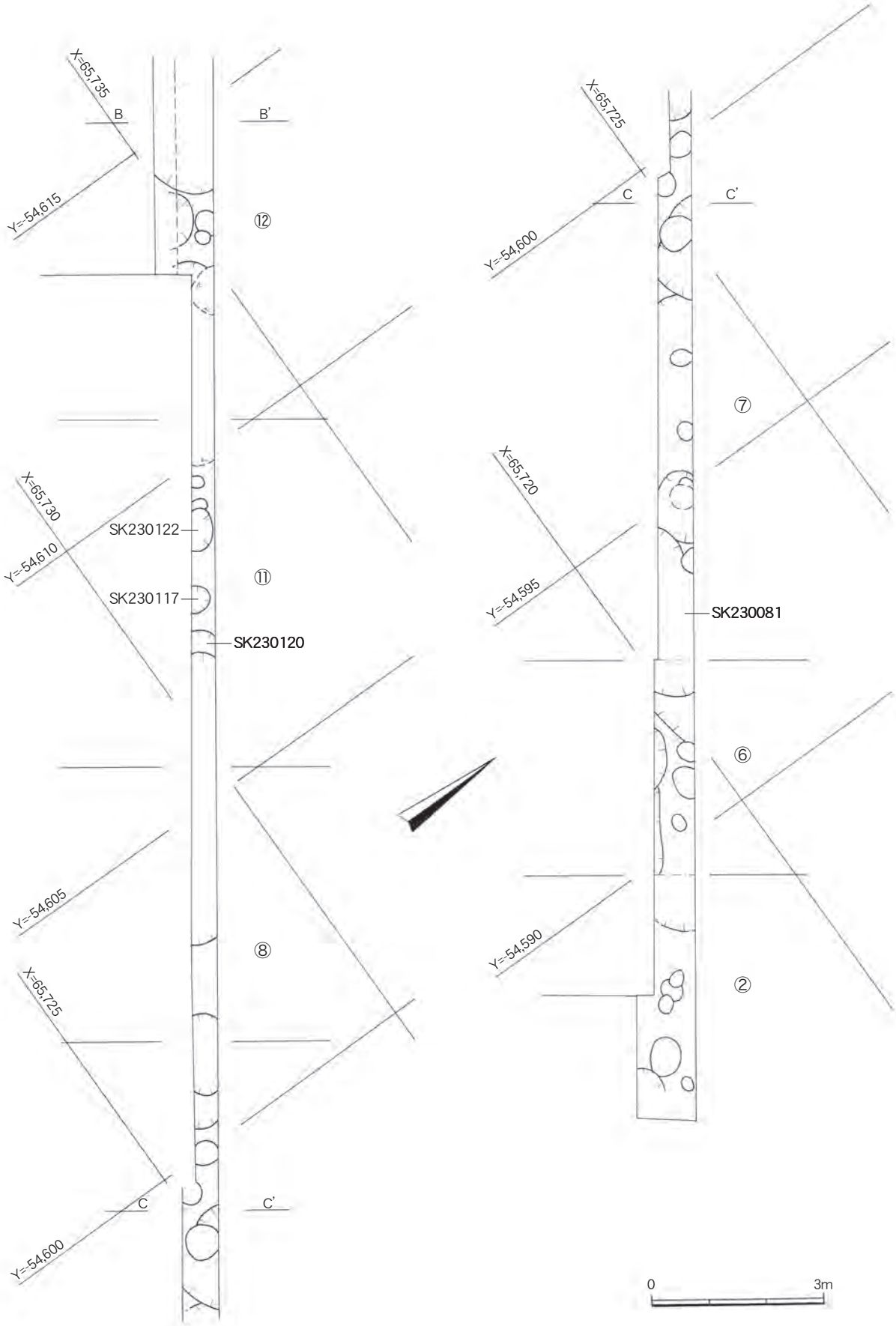


Fig.8　第 2 面全体図②（1/100）

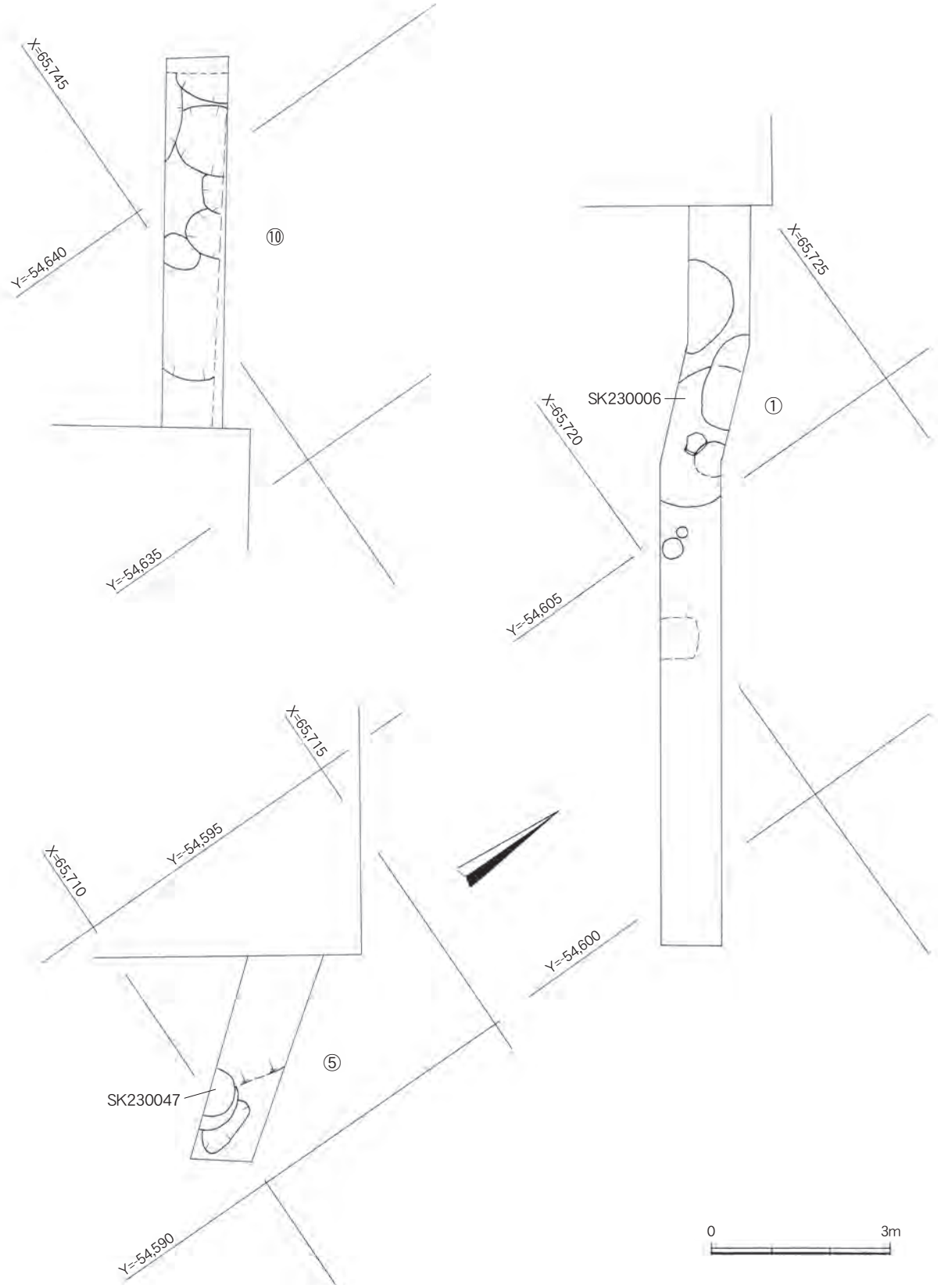


Fig.9　第 2 面全体図③（1/100）

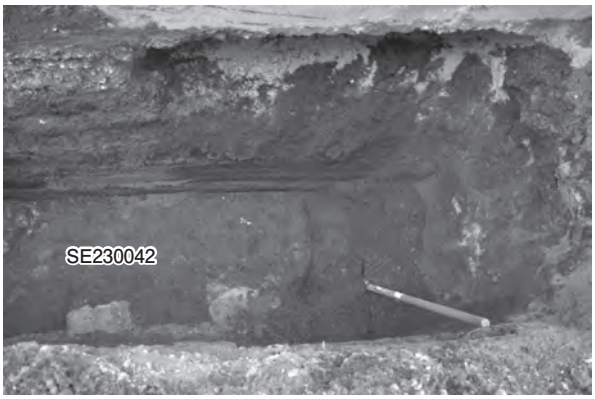
Ph.23　①西 -2 面（北から）

Ph.24　①中央 -2 面（東から）

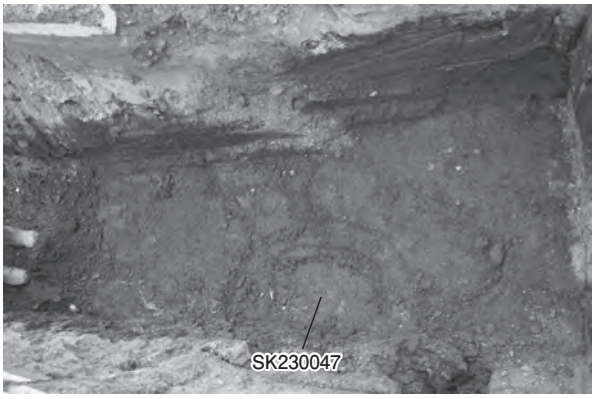
Ph.25　② -2 面（東から）

Ph.26　③西 -2 面（北から）

Ph.27　③東 -2 面（南西から）

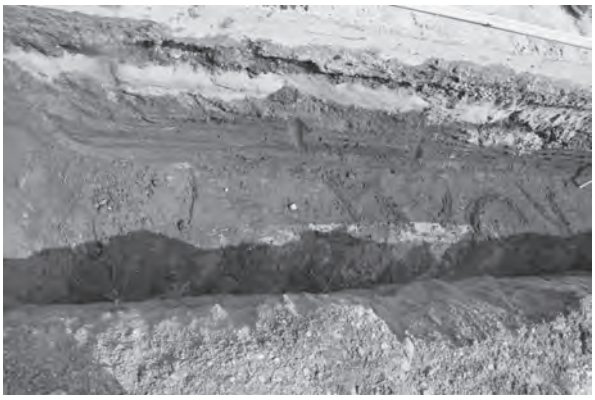


Ph.28　④西 -2 面（南から）



Ph.29　⑤ -2 面（東から）

Ph.30　⑥ -2 面（南から）



Ph.31　⑦西 -2 面（南から）

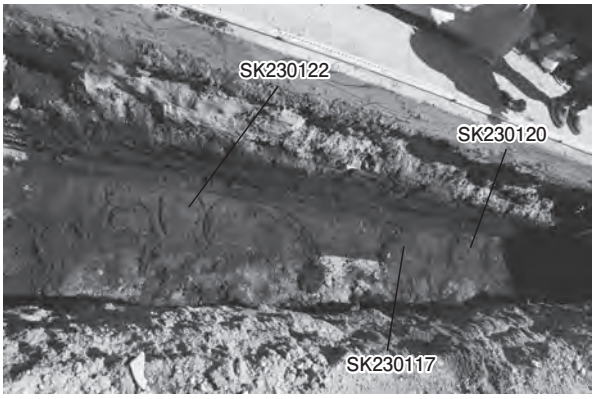
Ph.32　⑦西 -2 面（南から）

Ph.33　⑦東 -2 面（南から）

Ph.34　⑧ -2 面（南から）

Ph.35　⑨ -2 面（南から）

Ph.36　⑩西 -2 面（北から）



Ph.37　⑪ -2 面（南から）

Ph.38　⑫西 -2 面（南から）

Ph.39　⑫東 -2 面（南から）

Ph.40　⑬ -2 面（西から）

Ph.41　⑭ -2 面（西から）

Ph.42　⑮ -2 面（東から）

（2）土坑（SK）

SK230006（Fig.9）　南列①に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 2.5m、短形 1.0m 以上を測る。深さは 30cm 以上で、覆土は灰褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.10）　38 は回転糸切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。口径 10.0cm、器高 1.2cm を測る。39 は白磁皿Ⅵ -1b 類である。他に白磁碗Ⅳ類、白磁皿Ⅶ -2a 類、施釉陶器の鉢、ガラス坩堝（Ⅲ -34 Fig.26-579）、炉壁、珪石が出土する。土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

SK230047（Fig.9　Ph.29・51）　南列⑤に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは円形を呈し、直径 0.8m を測る。深さは 30cm で、覆土は灰褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.10　Ph.43）　40~44 は白磁である。40 は皿で、口縁部は外反し、見込みに段を有する。細かい貫入が入る。41 は碗Ⅳ類の底部片、42 は小碗で、内面に箆描き文を有する。43 は香炉の蓋で、口縁端部の釉は掻き取る。44 は小壺の底部片で、外面には箆押圧縦線が入る。底部付近までやや灰色を帯びた光沢をもつ白色釉がかかる。土坑からは他の遺構ではあまり見られない白磁の器種がまとまって出土する。他に土師器片、施釉陶器が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半頃と考えられる。

SK230117（Fig.8　Ph.37）　北列⑪に位置する。平面プランは直径 45.0cm の円形を呈し、深さは 20cm、覆土は黒色土を主体とする。

出土遺物（Fig.10）　45 は白磁碗Ⅴ -2b 類で、外面に縦箆の花弁文を施す。他に白磁碗Ⅳ類、施釉陶器が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

SK230122（Fig.8　Ph.37）　北列⑪に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 0.7m、短形 0.35m、深さは 0.25m を測る。覆土は炭化物を含む黒色土である。

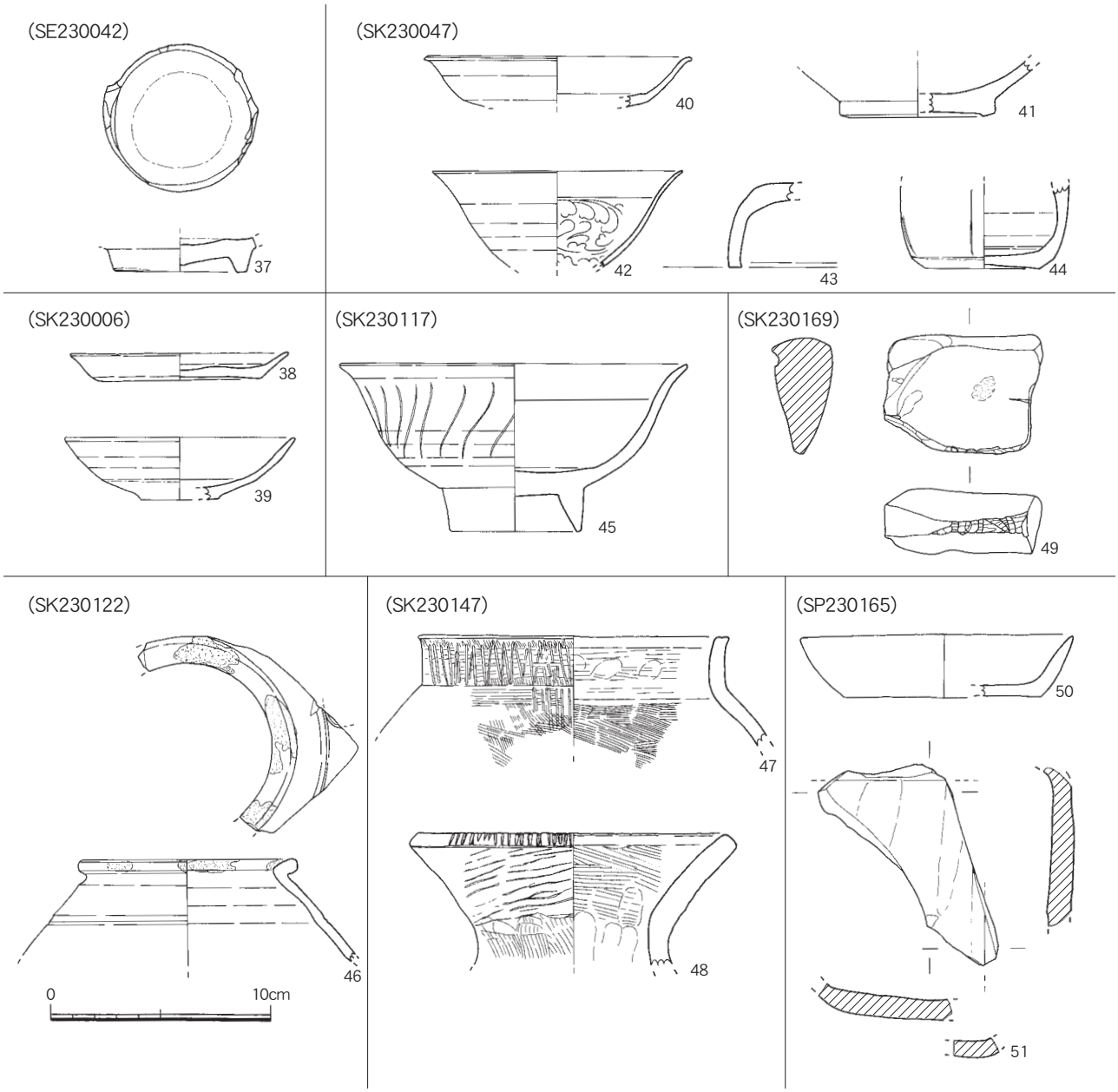
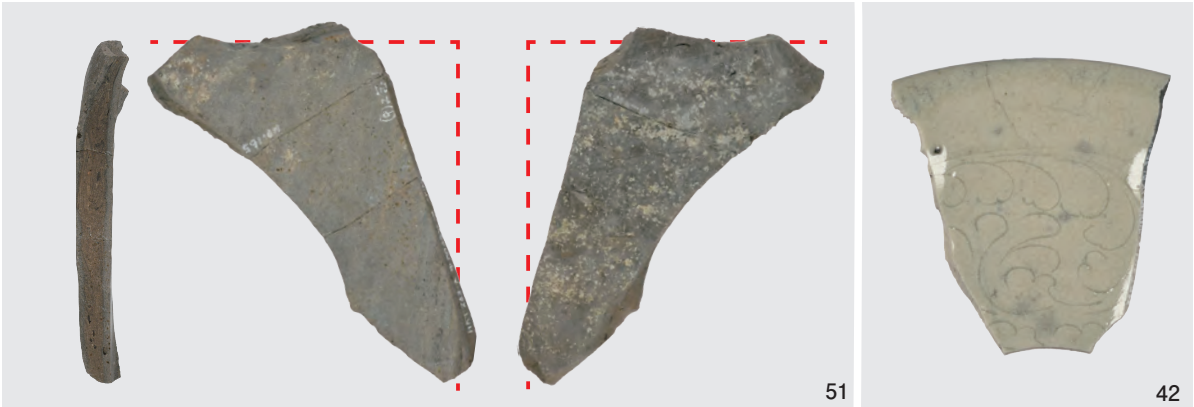


Fig.10　第 2 面遺構出土遺物実測図（1/3）



Ph.43　SK230047・SP230165 出土遺物

出土遺物（Fig.10）　46 は施釉陶器の壺の口縁部片で、口縁上面には幅広の胎土目が残る。黒色粒を含む、粘性のある灰色の胎土に灰緑色の釉がかかる。土坑の時期は出土遺物から 11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

SK230147（Fig.7　Ph.39）　北列⑫に位置し、南側は合流管布設により削平され、東側は廃土処理の関係で、掘削することができなかった。深さは 40cm を測り、覆土は灰黒色土を主体とする。

出土遺物（Fig.10）　47・48 は下層の弥生土器の混入である。47 は壺の口縁部片で、内外面刷毛目で調整した後、口縁部は横方向のナデを行い、外面には縦方向のジグザグ状の暗文を施す。48 は器台で、受部外面は叩きが残り、受部端部には刻目を施す。他に白磁碗Ⅴ類、回転糸切り底の土師器が出土し、土坑の時期は 12 世紀前半と考えられる。

SK230169（Fig.7　Ph.35）　北列⑨に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.0m 以上を測る。深さは 30cm で、覆土は灰黒色土に黄褐色土が混入する。

出土遺物（Fig.10）　49 は赤色の砂岩を用いた砥石である。砥面はよく使用され、滑らかである。部分的に敲石としても使用しており、敲打の痕跡が残る。現状で重さは 141.50g を量る。他に白磁碗Ⅳ類、施釉陶器が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半である。

（3）ピット（SP）

SP230165（Fig.7　Ph.35）　北列⑪に位置する。直径 40cm の円形を呈し、深さは 25cm を測る。覆土は灰褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.10　Ph.43）　50 は回転糸切り底の土師器の坏で復元口径 12.4cm、器高 2.8cm を測る。51 は須恵質の硯の陸部の小片で、縁等は残っていない。陸部はよく研磨され、縁にかすかに墨痕が残る。外底部は指オサエ、工具によるナデで調整される。他に白磁の細片が出土する。土坑の時期は 12 世紀前半頃と考えられる。

4）第 3 面の調査（Fig.11~13　Ph.44~63）

第 3 面は暗黄褐色土、茶褐色砂質土の上面で検出した。西側が道路面から 1.6m 下で、標高は 3.6m、中央部が約 1.4m 下で、標高は 4.3m、東側が約 1.4m 下で標高 3.9m である。第 2 面で確認した埋設管や後世の撹乱は第 3 面にも達しており、削平されていた。

検出した主な遺構は古代の土坑 3 基、11 世紀後半から 12 世紀前半の土坑 1 基、12 世紀中頃から後半の土坑 2 基、ピットである。

（1）土坑（SK）

SK230124（Fig.12　Ph.58）　北列⑪に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 0.9m、短径 0.5m 以上を測る。深さは 15cm で、覆土は黒褐色土である。

出土遺物（Fig.14）　52 は白磁碗Ⅳ類と思われるが、内面に箆による文様が施される。他に土師器小片が出土する。土坑の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

SK230203（Fig.13　Ph.57）　南列⑩に位置し、北側は 8 区で検出できず、東側は他の遺構に切られる。深さは 25cm を測り、覆土は灰黒色土で、炭化物、焼土を含む。

出土遺物（Fig.14）　53 は須恵器の皿で、復元口径 15.0cm、器高 2.3cm を測る。54 は壺の底部片で、外底部にヘラ記号を有する。内面は研磨されているのか、器面が滑らかである。墨痕等の付着はない。他に須恵器の大甕片が出土し、土坑の時期は 9 世紀頃と考えられる。

SK230205（Fig.13　Ph.57）　南列⑩に位置し、北側、西側は他の遺構に削平される。深さは 30.0cm、覆土は灰黒色を呈し、炭化物を少量含む。

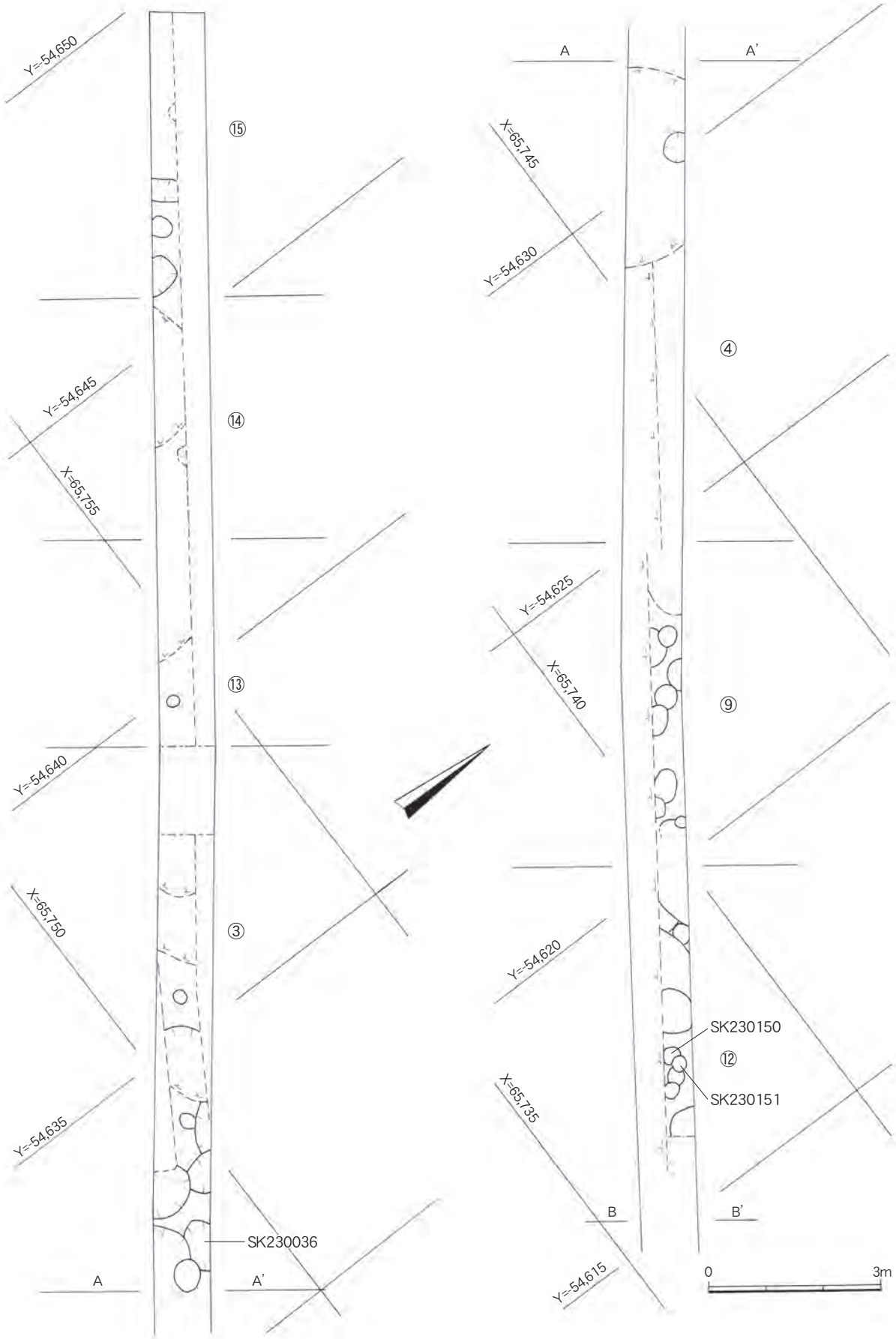


Fig.11　第 3 面全体図①（1/100）

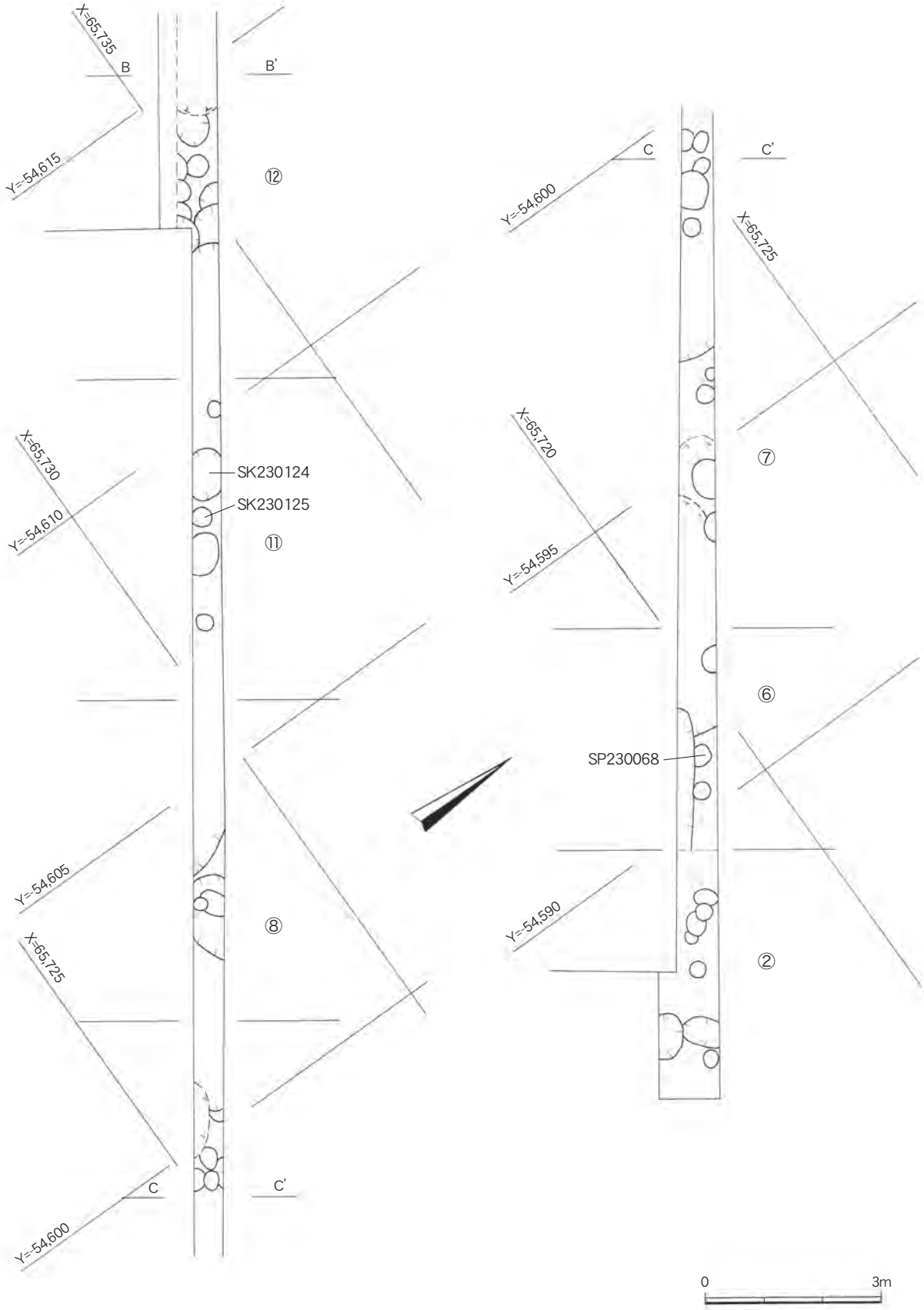


Fig.12　第３面全体図②（1/100）

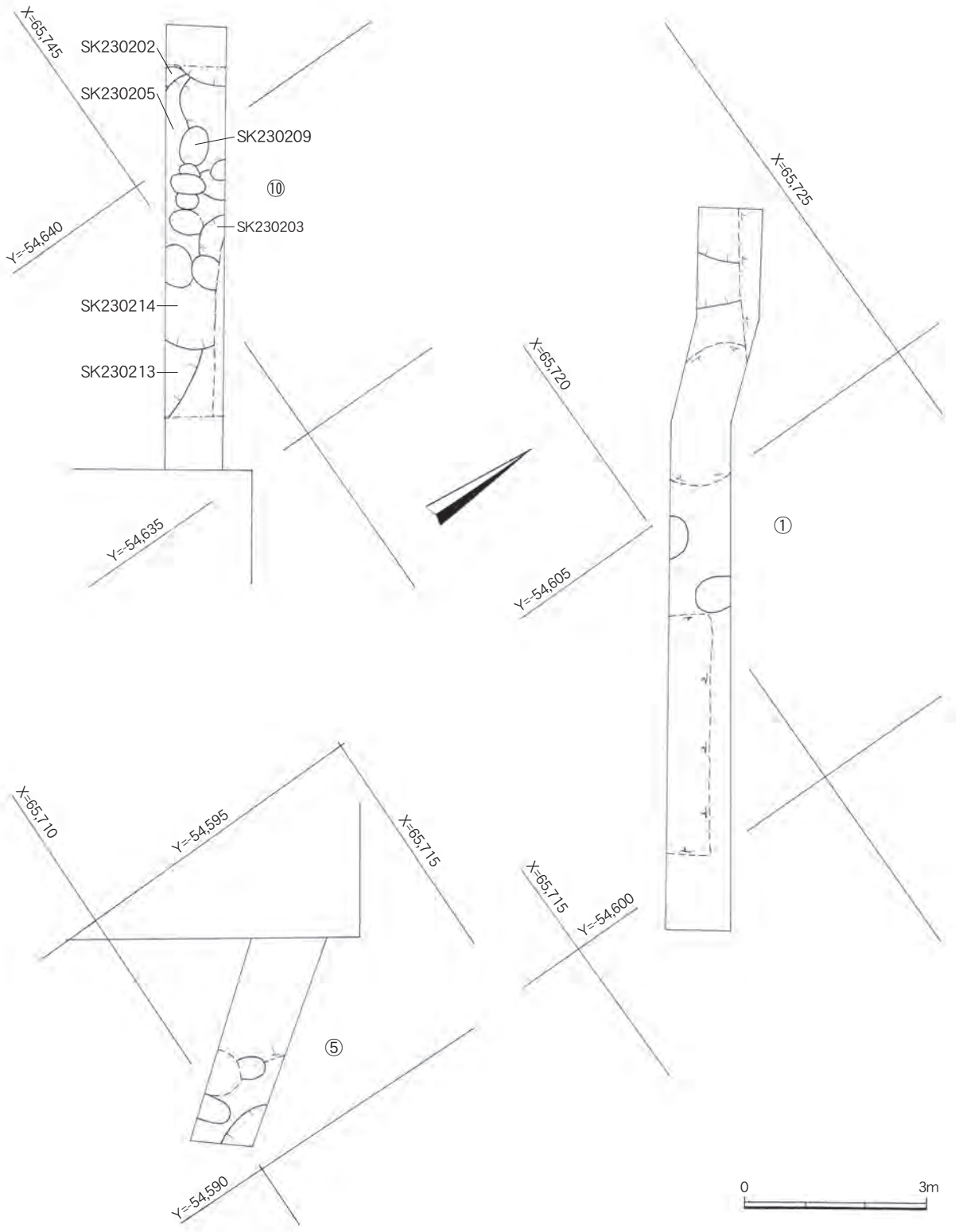
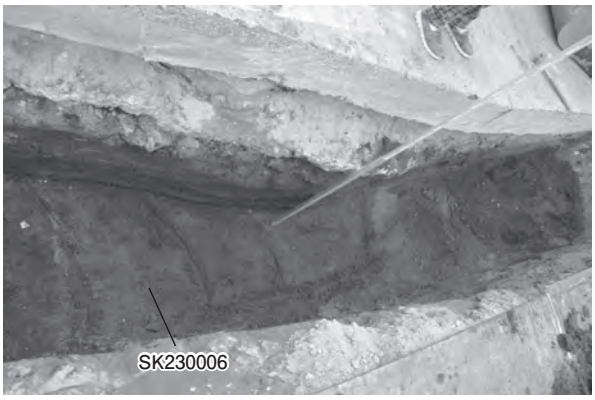
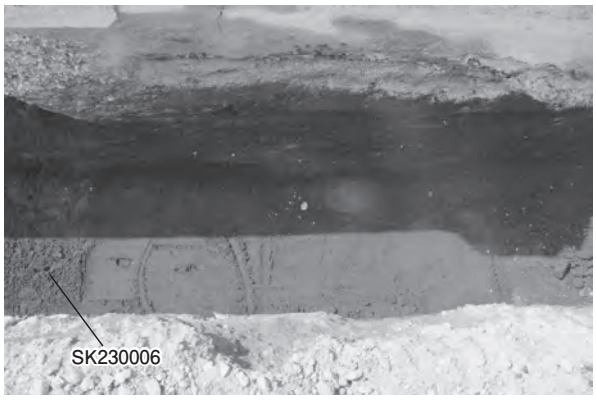


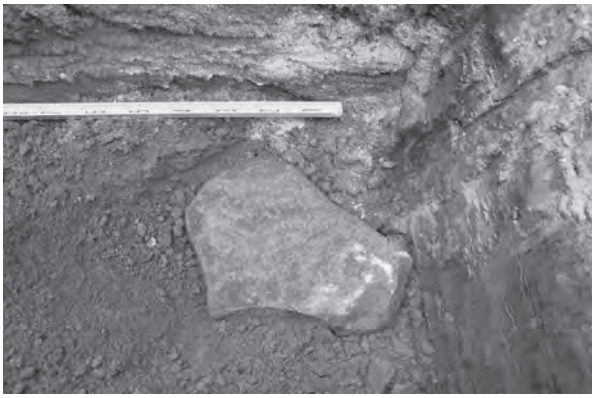
Fig.13　第 3 面全体図③（1/100）



Ph.44　①西 -3 面（北から）



Ph.45　①中央 -3 面（北から）



Ph.46　① SK230006 花崗岩検出状況（南から）

Ph.47　②西 -3 面（西から）

Ph.48　②東 -3 面 SK20（西から）

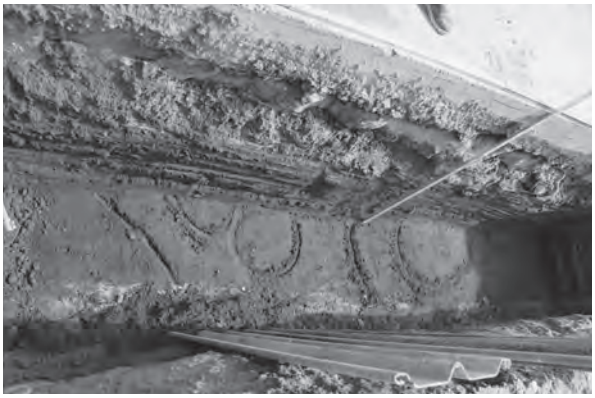
Ph.49　③西 -3 面（北から）

Ph.50　③東 -3 面（南西から）

Ph.51　⑤ -3 面（南から）

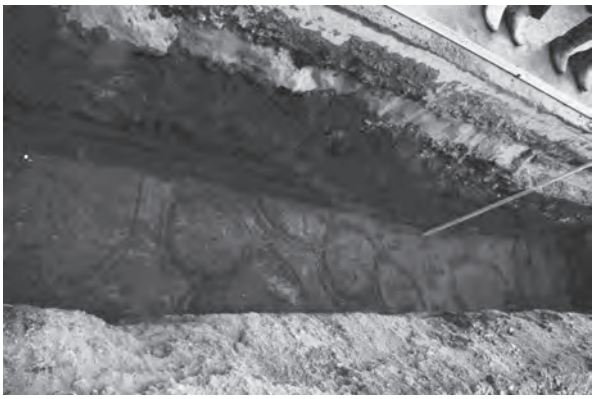
Ph.52　⑥ -3 面（南から）

Ph.53　⑦西 -3 面（南から）

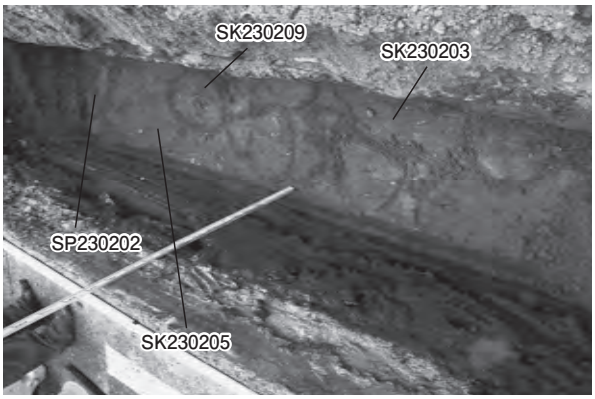


Ph.54　⑦東 -3 面（南から）

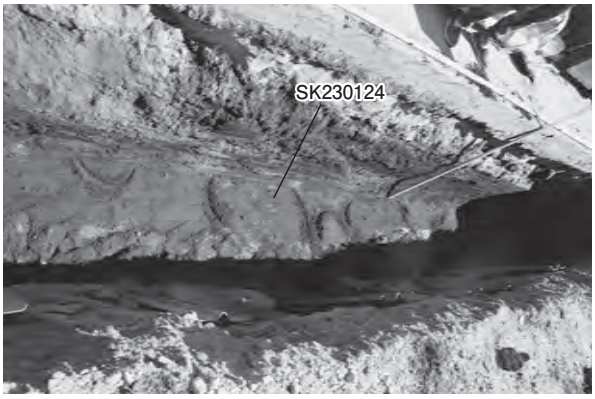
Ph.55　⑧ -3 面（南から）



Ph.56　⑨ -3 面（南から）



Ph.57　⑩西 -3 面（北から）



Ph.58　⑪ -3 面（西から）

Ph.59　⑫西 -3 面（南から）

Ph.60　⑫東 -3 面（南から）

Ph.61　⑬ -3 面（西から）

Ph.62　⑭ -3 面（西から）

Ph.63　⑮ -3 面（西から）

出土遺物（Fig.14）　55 は須恵器の坏蓋で、口縁端部を下方へ折り曲げる。天井部にはヘラ削りが残る。56 は焼塩壺である。外面は指オサエで調整し、内面は布目が残る。土坑の時期は 8 世紀前半から中頃と考えられる。

SK230209（Fig.13　Ph.57）　南列⑩に位置し、長径 0.65m、短径 0.45m を測る。深さは 20cm、覆土は黒色土で、多量の焼土を含む。

出土遺物（Fig.14）　57 は須恵器の坏蓋で、偏平な摘みを有し、口縁端部はわずかに下方へ摘み出す。口径 15.6cm、器高 2.5cm を測る。天井部はヘラ切りである。土坑の時期は 8 世紀末から 9 世紀前半と考えられる。

SK230213（Fig.13）　南列⑩に位置し、北側のプランだけを検出した。平面プランは円形を呈すると考えられ、深さは 30cm 以上である。覆土は灰褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.14）　58 は龍泉窯系用青磁碗 I 類の底部片で、内面見込みに花文を描く。他に施釉陶器、砂岩製の砥石片が出土する。土坑の時期は 12 世紀中頃から後半と考えられる。

SK230214（Fig.13）　南列⑩に位置し、西側は他の遺構に切られる。平面プランは、直径 1.1m 以上の円形を呈する。深さは 30cm 以上で、完掘できなかった。覆土は灰黒色土である。

出土遺物（Fig.14）　59 は龍泉窯系用青磁碗 I 類で、内面に片彫蓮花文を有する。60 は管状土錘で端部を欠損する。現状で、重さ 16.93g である。土坑の時期は 12 世紀中頃から後半と考えられる。

（2）ピット（SP）

SP230150（Fig.11　Ph.59）　北列⑫に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 30cm を測る。深さは 20cm、覆土は灰褐色土である。

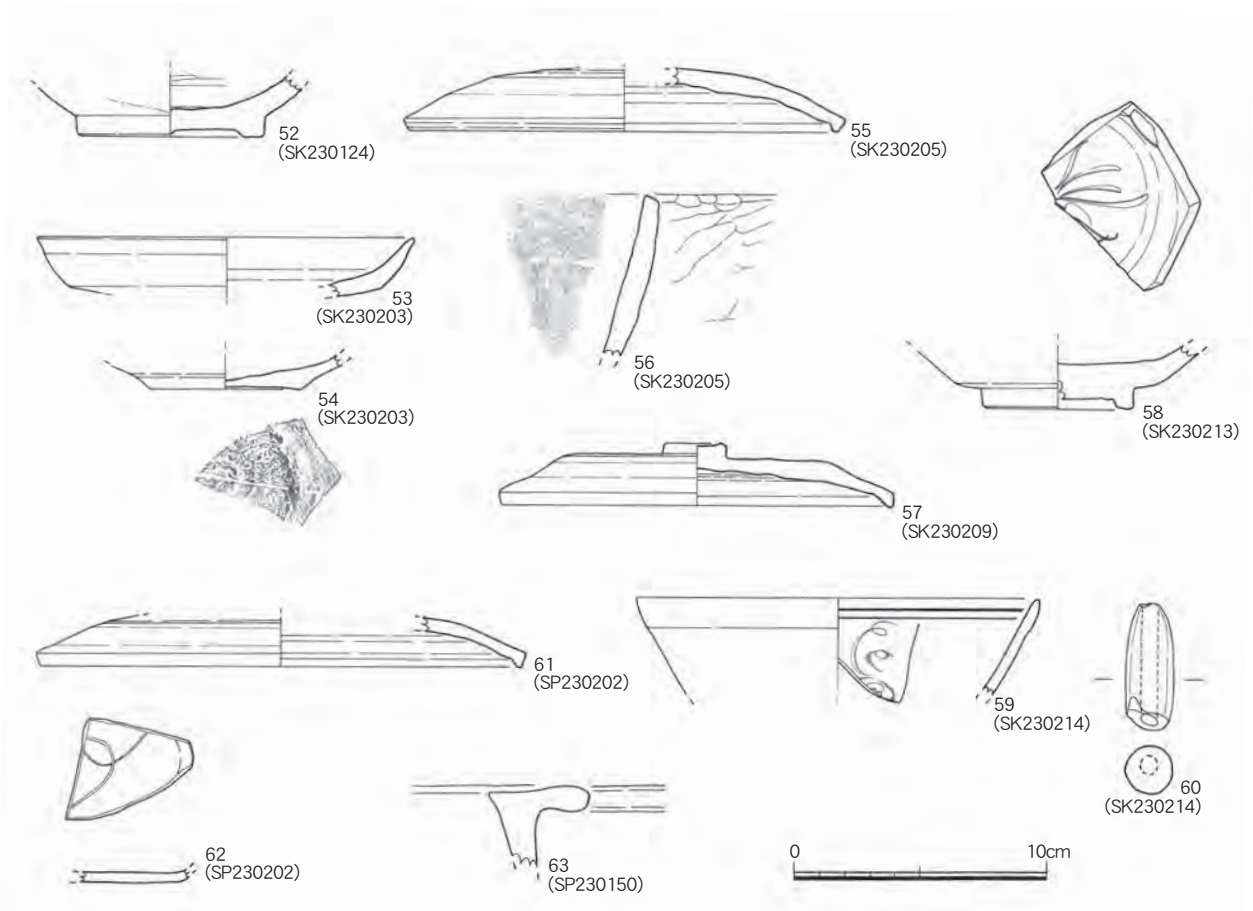
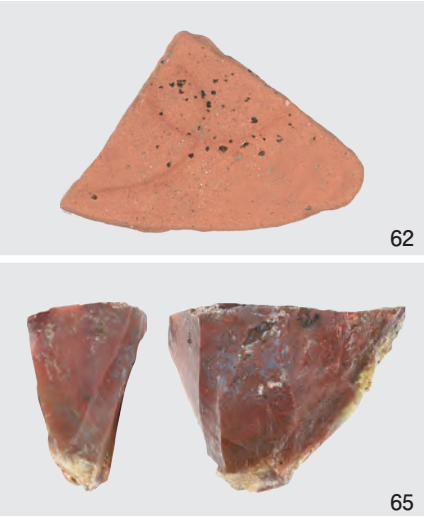


Fig.14　第 3 面遺構出土遺物実測図（1/3）



Ph.64　SP230202・包含層出土遺物

出土遺物（Fig.14）　63 は下層の遺物の混入で弥生土器の甕の口縁部である。他に白磁碗Ⅳ類が出土することから、土坑の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半頃である。

SP230202（Fig.13　Ph.57）　南列⑩に位置し、平面プランは直径 30cm の円形を呈する。深さは 15cm で、覆土は灰褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.14　Ph.64）　61 は須恵器の坏蓋で、口縁端部はわずかに下方へ引き出す。天井部はヘラ削りで調整する。62 は都城系の土師器の底部片で、ナデで調整した後、内面に文様を描く。外底部は指ナデ、指オサエが残る。土坑の時期は 8 世紀前半頃と考えられる。

5）第 4 面の調査（Fig.26　Ph.65~67）

第 4 面は南列の①と⑤のみ調査ができた。暗黄褐色砂質土の上面で、標高は道路面から約 1.5m 下、3.8m から 3.9m を測る。1 区の東側は後世の撹乱を受けていたが、それ以外の箇所は遺構の遺存状況は良好あった。検出した主な遺構は古代、11 世紀後半から 12 世紀前半の土坑、ピットである。

（1）土坑（SK）

SK230004（Fig.15　Ph.65）　南列①に位置し、北側のプランを確認したが、東側、西側ともに撹乱を受ける。覆土は灰色粘質土で、ブロック状の塊である。深さは 50cm 以上で、完掘できなかった。

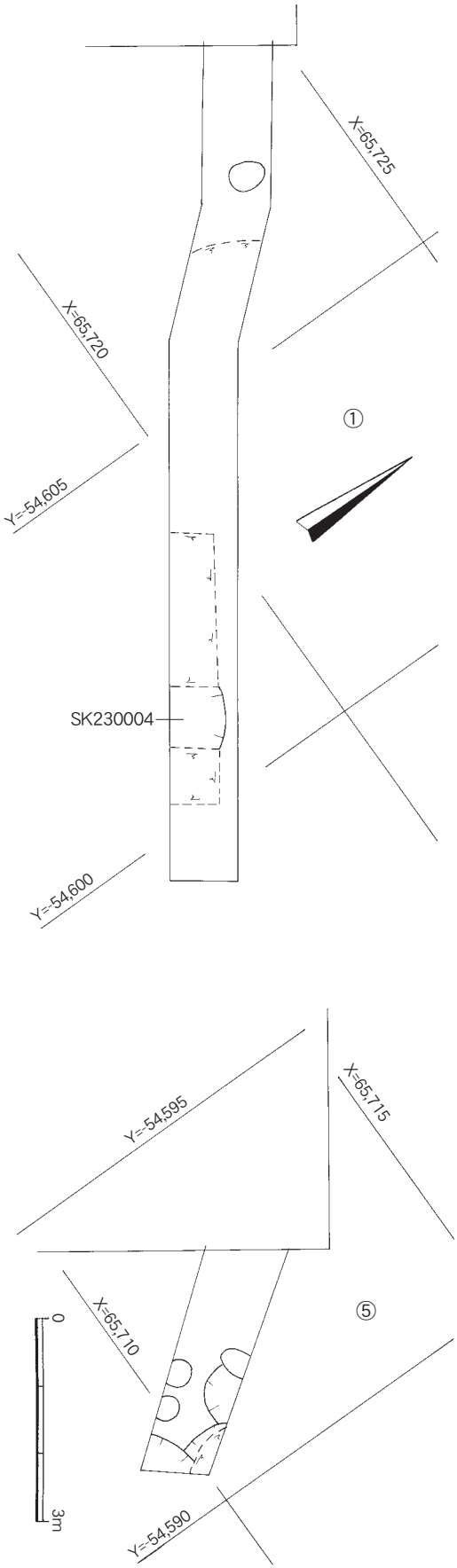


Fig.15　第 4 面全体図（1/100）

Ph.65　①西 -4 面（南から）

Ph.66　②東 -3 面下掘削状況（東から）

Ph.67　⑤ -4 面（南から）

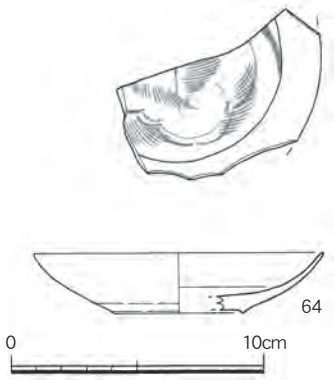


Fig.16　第 4 面遺構出土遺物実測図（1/3）

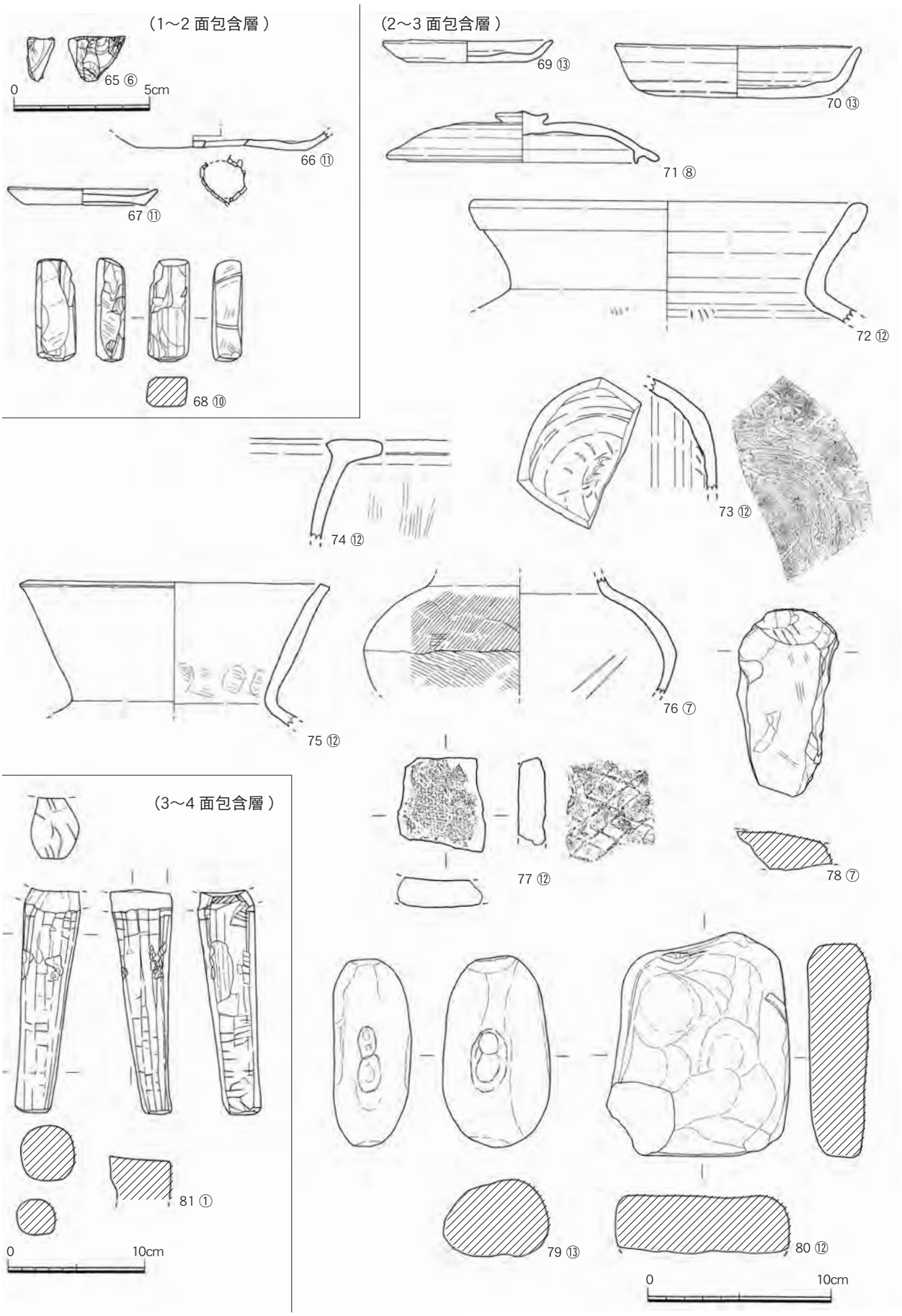


Fig.17　その他の出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

出土遺物（Fig.15）　64 は白磁皿Ⅵ-2b 類で内面見込みに箆と櫛で花文を描く。他に白磁碗Ⅳ、Ⅴ類が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

6）その他の出土遺物（Fig.17　Ph.64）

65~68 は 1~2 面の包含層出土遺物である。65 は瑪瑙の石核で、長さ 1.65cm、幅 2.1cm、厚さ 1.0cm、重さ 3.1g である。上方から剥片を剥いでいるが、打瘤痕はみられない。色調は暗褐色を呈し、右縁辺に沿って白色、黄色の不純物を含む。66・67 は回転糸切り底の土師器である。66 は坏で、底部中央に約 2.0cm の焼成後の穿孔を有する。67 はほぼ完形の小皿で、口径 8.5cm、器高 0.8cm を測る。68 は滑石製石鍋の二次加工品で、外面はノミ痕が残り、煤が付着する。破面はすべて研磨され、擦痕が多く残る。重さは 40.35g を量る。69~80 は 2~3 面の包含層出土遺物である。69・70 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿と坏で、69 は外底部に板状圧痕を有する。71~73 は須恵器である。71 は返りを有する坏蓋で、天井部はヘラ切り未調整である。72 は甕の小片で、体部外面は叩きで調整する。73 は平瓶の体部片で、内面に工具痕、外面にカキ目を残す。74・75 は弥生土器の壺の口縁部片である。74 は広口壺で、外面は縦方向の研磨を施す。75 の外面はナデ、内面は指オサエで調整する。76 は球状の体部で、外面は刷毛目、内面は工具によるナデを行う。77 は須恵質の平瓦である。厚さ 1.5m を測り、凸面は粗い格子目叩きを施し、凹面には細かい布目が残る。78 は粘板岩製の砥石で、砥面は 2 面残存し、わずかに擦痕が残る。79 は花崗岩の敲石で、上下端、側面が使用され、凹状に窪む。重さは 366g を量る。80 は厚さ約 3.0cm の扁平な粘板岩製の台石で、部分的に研磨される。81 は 3~4 面の包含層出土遺物で、滑石製石鍋の脚部片である。脚断面は、稜線を残すが、ほぼ円形に整形する。細かい研磨痕が多く残る。

7）小結

23 区は 203 次調査において、西工区に位置し、最も標高が高い箇所から西側へ緩やかに傾斜する緩斜面に立地する。概要で述べたとおり、現道路面から 1.5m の深さまでしか調査ができなかったため、周辺で検出している弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構は確認ができていない。周辺の調査では、主に第 4・5 面でこの時期の遺構を検出している。第 3 面では当該遺構は散見できる程度である。古代の遺構は土坑やピットが出土しており、主要な時期は、8 世紀から 9 世紀前半にかけてである。第 1 面から第 3 面においては、中心はやはり 11 世紀後半から 12 世紀前半のもので、土坑やピットからは土師器や陶磁器とともに、ガラス坩堝や炉壁等も出土する。11 世紀後半頃と考えられる SK230047 は、破片であるが、白磁の内面に箆描き文を描く小碗、小壺、香炉の蓋など、周辺では碗や皿ばかりが出土する遺構が大半であるなか、やや様相を異にするものであった。また、SP230165 からは須恵質の硯の小片が出土し、この地に文字を必要とした人々の存在が伺える。なお、包含層からの出土であり詳細な時期は不明であるが、瑪瑙の石核が出土している。23 区は周辺のあ調査とほぼ同様の成果を得ている。

博　多　170

〈第３分冊〉

―博多遺跡群 第203次調査報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1405集

2021年（令和3年）3月5日

発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
印　刷　株式会社トータルプルーフ
福岡市南区清水4丁目6－3